

白滝村史

白 滝 村 旗





現・村 長
国 松 一 敏



白滝村役場庁舎

歴代村長



二代村長
渡辺 要



初代村長
小出 月江

歴代村議会議長



三代議長
丹羽 実市



二代議長
中山 徳藏



初代議長
布田 富藏

歴代助役，収入役



二代助役
三代収入役
藤 秀 信



初代助役
三 木 克 己



初代収入役
石 渡 寛 蔵



三代助役
三代収入役
山 内 晴 雄

現・村議会議員



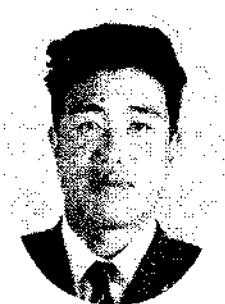
新 保 国 英



副 議 長
山 崎 政 治



議 長
古 関 初 夫



本 田 茂



古 関 一 男



小 山 田 昌 光



高橋行之



松浦健藏



森谷吉郎



布田勇



五十嵐巖



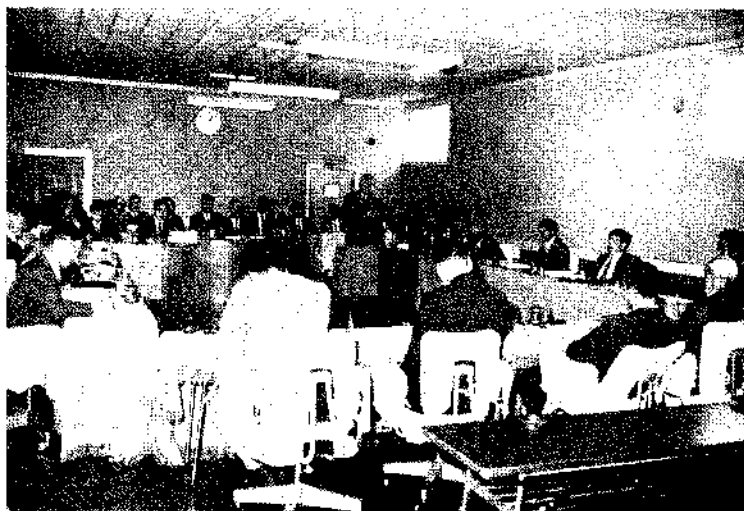
藤本輝彦



現・収入役
越 智 政 雄



現・助 役
谷 藤 吉 雄



昭和四十六年第五回定例村議会



エゾツガザクラ



チングルマ

村史の発刊によせて

北海道が拓けて二世紀に向っている今日、第三期総合開発の計画を樹てて実行期に進んでいる。わが網走支庁管内においてもそれぞれ時代的な要求により広域生活圈および広域行政圏を設定して地方自治の振展を共益的歩調の上に立っておし進める方向がたどられ、これが現今における地方自治の実相というべきものになっている。

さて、当白滝村の村基の歴史を想起しながら、その足跡をたずねつつ村史を編さんしようと意図したところ古老村民はじめ関係する方々の協力を得て、ここに一冊の白滝村史の誕生を見たのである。わが白滝村の行政区域としては紋別戸長役場よりはじまり、湧別町、上湧別町、遠軽町を経て昭和二十一年に隣町丸瀬布町と同時に分村したのである。前記各町歴史もまたわが村の歴史でもあり得

るのである。本村を圍繞する国有林は、その面積のおよそ八三セントに当る二八四平方フット強を占め、海拔三〇〇乃至七〇〇フットに所在し、かつては木材の街として数多くの製材工場が隆盛を極め、村勢の中心的役割を演じつつあった。しかし最近においては資源その他の理由により木材業が衰微をたどり、農業が産業の中心的存在に移行して今日を成している。

山村における地方自治体の存在は、国の経済基調に左右されて工業生産基地にその労働力は集注し、過疎につぐ過疎の今日この頃である。

本村が開拓されて約六十年、北辺の一寒村として村が形成され幾多の足跡を残しつつ今日につながってきたのであるが、分村以来小出・渡辺村長について三代目村長の私としては、時あたかも過疎の波おしよせし時代にその座にあること、まこと佗しきもの蔽い得ない。これも一つの時の流れであらう。

かつて、この地で開発に情熱を燃やし不毛の地であらゆる困苦と闘い、本村発展に挺身された人々の努力に敬慕の念をささげつつ、この小史が村発展の経過を正しく伝えて、今後における白滝の人々にとって限りなきふるさとへの愛着と敬祖の美風の源となるともに後世子孫の懐古の資となることを期待してここに村史発刊のことばとする。

昭和四十六年六月十日

白滝村長 国 松 一 敏

白滝村史 目次

序 文

白滝村長 岡 松 一 敏

一 白滝の古代

白滝古代の背景・白滝村の無土器文化研究の変遷・遺跡の分布・遺物の種類
白滝無土器文化層の年代・土器文化

二 自然と環境

村名「白滝」の由来

第一章 位置と面積

第二章 地形と地質

地形概況・河川・山岳・水準点・三角点・地質

第三章 気

象

春・夏・秋・冬・気温・降水量・降雪量・風向・風速・霜・不照日・日照・
天気予報

第四章 植

物

白滝の野草・白滝の樹木

四

四

三

六

五

五

一

三 行 政

第一章 北海道の歴史

第二章 明治時代

開拓使庁札幌に移る・行政区域の制定・村名の決定・開拓使の廃止・北海道庁の設置

第三章 湧別村時代

第四章 上湧別村時代

遠軽村の分村

第五章 遠軽村時代

第六章 白滝の夜明け

移住の経過・団体移住・部落の誕生・村づくりへの意欲・字名の変更・支湧別開発への第一歩・山火と離村・鉄道開通・部落規約の設置・白滝出張所の設置・分村の経過・白滝村の誕生・小出村長・丸瀬布、白滝両町村合併案らず・渡辺村長・国松村長・議員定数の減・監査委員・固定資産評価審査委員会・公平委員会

第七章 選挙

村長選挙・村議会議員選挙・議会議長と副議長・選挙管理委員会・明るく正しい選挙運動推進協議会・永久選挙人名簿制度

第八章 眼下の行政

三

五

三

六

七

六

六

二

三

四 財 政

四〇

五 産 業 ・ 経 済

四一

第一章 農 業

四二

第一節 農業の起り

四三

道庁の殖民政策・湧別原野の区画調整・白滝原野の解放・本村農耕の起り、
ハナウ・果樹・水稲・陸穂・馬鈴薯・除虫菊・養蚕・麦類

第二節 凶 作

四四

大正二年の大凶作・昭和六年の凶作・昭和七年の凶作・昭和三十九年の冷害
凶作・昭和四十一年の冷湿害・その他の凶作

第三節 昭和の団体移住

四五

支湧別川向い開拓移住民・天狗沢開拓移住民・支湧別五線沢開拓移住民

第四節 農業の機構

四六

農業協同組合・農地解放・農業共済組合・開拓農業協同組合・農業調整委員会・農業改良委員会・東紋西部地区農業改良普及所・農業委員会・石れき地
帯対策地区試験圃場・農免農道整備事業・山村振興法指定村・農業振興基金
運用委員会・てん菜増産推進協議会・農業推進会議・食糧事務所白滝出張所

第五節 農産加工業

四七

澱粉製造

第二章 林 業

四八

第一節 林業の起り……………一六

第二節 その歩み……………一七
材

保護区員駐在所・営林署・営林置苗圃・森林愛護組合・山火予防対策協議会・森林組合・村有林・村有林野営審議委員会・緑化推進委員会・鳥獸保護区

第三節 林産加工……………一八

白滝林産組合・林産加工場・木炭・林産物検査員駐在所

第三章 商工業……………一九

風呂屋・写真館・薬舗・理髪店・豆腐屋・旅館・遊戯場・料理屋・菓子製造雑貨店・美容業・土木建築・ミルクプラント・石炭の販売・印刷所・鉄工車輜

第一節 商工会……………二〇

第四章 畜産……………二一

第一節 馬産と酪農……………二二

馬・軍馬・馬産限定地・畜産試験場・牛・集乳所・東白滝地区村営牧野・東支湧別地区村営放牧場・酪農組合・乳牛経済検定組合・獸区・蹄鉄業

第二節 その他の家畜……………二三

豚・鶏・家兎・山羊・綿羊・羊毛加工研究所

第五章 地下資源……………二四

第一節 地下資源の開発……………二五

硫酸白土・金鉱山・清水商會鉱山部・金銀鉱山・黒耀石・パーライト

第二節 石産加工業

パーライト工場・黒耀石加工

第六章 金

融

国民貯蓄組合・遠輕信用金庫白滝支店

六 教 育

第一章 教育の概況

第一項 白滝小学校

第二項 支湧別小学校

第三項 旧白滝小学校

第四項 奥白滝小学校

第五項 東白滝小学校

第六項 白滝中学校

第七項 支湧別中学校

第八項 三和小中学校

第九項 支湧別私設教

授場

第十項 青年学校

第十一项 白滝技芸専門学校

第二章 教育委員会

教育委員会・学校給食

第三章 社会教育

青年教育・婦人会

七 社会文化

第一章 警

察

北見方面本部遠軽警察署白滝巡查長駐在所・交通安全宣習・交通安全指導員
少年輔導員・青少年問題協議会・遠軽地区防犯協会白滝支部・防犯水銀灯

第二章 消防

白滝消防組・消防後援会・火災予防組合・自警組合

第三章 災害

害

大正六年の白滝大出火・おもな災害・水害・十五号台風

第四章 保健衛生

生

衛生組合・伝染病・開業医・道立白滝診療所・伝染病隔離病舎・産婆・歯科診療所・開拓保健婦・母子健康相談所・国民健康保険事業・梨の行商と売薬
硫黄鉱泉・白滝温泉・白滝市街簡易水道・奥白滝高台水利組合・東白滝雑用水利組合・簡易水道となる・支湧別川向い高台簡易水道・し尿処理組合

第五章 社会福祉

社

民生委員制度・社会福祉協議会・共同募金・赤十字募金・日赤白滝奉仕団・公営住宅・国民年金・老人クラブ・敬老会・母子会・保育所・保護司・人権擁護委員・行政苦情相談委員・精神薄弱者相談員・身体障害者白滝分会・ひらやま会・ひまわり会・子供会と遊園地・母性輔導委員・生活改善推進員・交通災害共済組合・表彰審査委員会・各種調停委員

第六章 兵

事

徴兵令・徴兵検査・在郷軍人会・忠魂碑・遺族会・太平洋戦争・国民義勇隊
銃後奉公会・監視所・国民登録・配給切符・通帳制度

第七章 白衛

隊

白衛隊協力会

第八章 宗

教

四六

第九章 生活文化

四七

白滝神社・上白滝神社・上支湧別神社・御嶽神社・千蔵華爾神社・高台神社・天狗嶽神社・下白滝水神社・旧白滝神社・支湧別神社・昭栄神社・北支湧別神社・御嶽教豊受教会・石北トンネル山の神・真宗大谷派本宗寺・真宗本願寺・派本願寺・真宗出雲路派法海寺・曹洞宗白滝山祥巖寺・高野山大師教会白滝支部・天理教白滝分教会・創価学会遠軽支部白滝地区・馬頭観世音碑・遠軽キリスト教会・救世軍遠軽小隊教会と白滝日曜学校・白滝墓地・白滝児童場・上支湧別大葬場・葬祭場・囚人墓地・殉難慰霊の碑

家庭学校支湧別分校・支湧別農場の創設・母と子の家・白滝青年研修所・上支湧別青年研修所・旧白滝生活センター・開拓地婦人ホーム・上白滝会館・その他の会館・有線放送・広報白滝・ラジオ・テレビ・新聞・娯楽・文化センター団体・体育協会・体育指導員・白滝総合ダウンド・柔剣道場・郷土館・村営プール・公認白滝クレー射撃協会・猟友会・大東流合気武道・舞踊・劇場・ストリップ・でんぶん靴・上支湧別電気利用組合・旧白滝上白滝奥白滝方面の農村電化・村営白滝発電所

第十章 村章の制定

四八

八 交通・通信

四九

第一章 道路交通の今昔

五〇

中央道路・駅通・滝の上駅通・北見峠駅通・主要道道遠軽上川線・划分け道

第二章 鉄道交通の今昔

四二

路・支湧別道路・併用林道・停車場線・村道・道路改良期成会・道路愛護組
合開発建設部白滝道路工手詰所・白滝除雪センター・舗装道路・渡船

北海道における鉄道のはじめ・鉄道の国有・石北線敷設の請願・南風団体・
石北トンネル・白滝駅・開通記念碑・上白滝駅・奥白滝駅・下白滝駅・旧白
滝果降場・駅勢事情・保線・中湧別保線区白滝線路分区分区・上川保線区奥白滝
線路分区分区・石北トンネルのレール交換状況・遠軽機関区白滝機関車駐泊所・
給水・ダルマストーブ・鉄道の災害

第三章 その他の交通・運輸

四六

自動車・バス運行・北見バス・ハイヤー・バイク・自転車・客馬車・運送店
トラック営業

第四章 通 信

五五

郵便のはじめ・白滝郵便局・上支湧別簡易郵便局・逓送・郵便貯金・簡易保
険・子供郵便局・電報・電話・郵便ポストと切手類売捌所・農事放送電話・
有線放送電話施設運営委員会

第五章 飲 酒 と な や み

五三

九 育 ち ゆ く 郷 土

第一章 白 滝 の 素 顔

五五

第一節 景勝比麻良山

五五

第二節 天然記念物「流紋岩球類」

五二

第二章 炬 辺 談 話

五三

合気会・客車トイレ第一号・熊と狼・お産と迷信・北海道方言・明治初期の
犯罪と刑罰・タニ部屋残存物語・囚人労働・開基先駆者座談会・アイヌの伝
説・上支湧別十勝上十幌間踏破

年

表

五二

あ
と
が
き

中
村
友
禎

一 白滝の古代

白滝古代の背景

日本列島は新生代、鮮新世のころ海中からその姿を見せたといわれ、やがてそれがアジア大陸の一部となり、その東縁となつて太平洋にそつていたと考えられている。この東側は中期洪積世に至りだいに上昇をして、今の日本海は大内湖となつて存在し、その後、洪積世の後期になり朝鮮海峡が切れ、続いて津軽海峡が生じ、日本海は直接太平洋と東シナ海に通じたが、そのころになつてもまだ宗谷海峡と間宮海峡は開かず、北海道と樺太は大陸に続いていたのである。これが大陸から独立し、しだいに今の日本列島の形となつたのは沖積世に至つてからのことであらうといわれている。

この第四紀洪積世の時代になつて、はじめて地球上に人類の足跡が見られるが、さらに日本列島にその跡が見られるのは、いまのところ洪積世の後期第三氷期以後の時代（約十五万年前ごろ）からである。しかしこれも今後の調査研究によつては、さらに日本列島の人類の足跡は数十万年にまでさかのぼることが可能であらうと考えられている。

さて第四紀洪積世の気象環境といへば、氷河期の時代であり、ギュンツ（第一）、ミンテル（第二）、リス（第三）、ウルム（第四）の各氷河期が存在し、きわめて寒冷な気候と、その間の温暖の気候とのくりかえしが続いたのである。また最も古い時期のギュンツ氷期以前に前ギュンツ、またはドナウ期があつたとし、洪積世の開始

地 質 年 代 表			
新生代	第四紀	現世(沖積世)	—0.8~1 万年まえ
		更新世(洪積世)(完新世)	—60~100
	第三紀	鮮新世	—1500
		中新世	—3500
		漸新世	—5000
		始新世	—7000
中生代	白堊紀	(アルプス造山運動)	—1 億 2000
	ジュラ紀		—1 億 5000
	三疊紀	(ヴァリスカン造山運動)	—1 億 9000
	二疊紀		—2 億 2000
古生代	石炭紀	(カレドニア造山運動)	—2 億 8000
	デボン紀		—3 億 2000
	ゴットランド紀	(カレドニア造山運動)	—3 億 5000
	オルドビス紀		—4 億
	カンブリア紀		—5 億
原生代			—8 億 5000
始生代			—26 億以上

を六十万年前からさらに二百万年前までに想定する説もある。最も後のウルム第四氷期(約六万年前より)を四小氷期に分け、この氷期の終了後が現代の沖積世となっているのである(別表参照)。

前述したとおり、日本列島が大陸から孤立した主因は造陸運動であると考えられているが、氷期と関係のある海水面運動はまた、この時代における地理的現象として、重要な要素である。寒冷の時期には蒸発した海水は氷となり、そのため海水の量は減少し海面が低下することは氷河期の特徴であるが、洪積世においてはこの事象が数回にわたってくりかえされ、ある氷期においては二〇〇呎以上も海面が降下した時期もあるといひ、最後のウルム氷期においては一〇〇呎程度の海面降下があっただろうと考えられているのである。

この時期以後となって、無土器文化の遺跡は増してくるし、河岸や丘の斜面に生活の跡が存してくる。當時は当然寒冷な気候であつたろうが、小氷期のくりか

えしにより、小間氷期の温暖な時期があったことも事実である。こうしたなかで大陸から移動してきた動物は東洋象、ナウマン象、マンモス象、オオツノジカ、野牛などが生存していたことも、各地で発見されている化石などにより実証されているところである。

またこの時期に特徴づけられる自然現象に、火山の爆発と、これにともなう火山灰の降下がある。無土器文化の遺物の多くは、この火山灰層（ローム層）から出土し発見されて、その地質的層位からそれぞれの年代が考察されているのである。これらの降灰が終ったのは、おおよそ洪積世の終末だとされ、一万年以前と推定されているところから、約一万年から一万二千年以前を旧石器時代とし、それ以前のもので沖積世に属する石器時代を中石器時代、新石器時代と称している。

昭和二十四年六月、群馬県笠懸村岩宿で無名の一青年相沢忠洋（当時二十四歳）が、関東ローム層（洪積世に堆積した火山灰赤土層）の中から発見した一個の石器から、それまでに日本には石器時代の文化がないと考えられていた学説がくつがえされたのである。すなわち洪積世の地層より出土した石器によって、少なくとも日本列島にも一万年以前から人類が存在していたことが、層位学的に確認され、このことがきっかけとなって、群馬県をはじめ関東一帯のほか、長野県、北海道などで旧石器発掘が進められ、一躍無土器文化の研究が脚光をあび、その結果がつぎつぎ発表されるにいたがつて一層その位置づけが確立してきたのである。しかし、日本の無土器文化の変遷と今後の課題はまだ多く残されている。

発見された多くの石器の中からは、現在のシベリア大陸で発見されたものと類似の石器もあり、また本州方面で発見されている各種の石器と日本列島との生いたちの関係、アジア大陸の東辺に位置する日本列島の無土器文

氷 河	標準化石	文 化 階 程 区 分	先史年代区分 (ヨーロッパ)	道内火山	その他
		古墳時代 弥生時代	オホーツク樺 文文化 鉄器時代	摩周火山 大雪山 樽前火山 恵庭	アパシリ貝塚 モコロ
↑		縄文時代 晩期・中期 後期	青銅器時代 新石器時代		
トッタベツ Ⅲ		縄文時代前期	中石器時代		
飛騨Ⅱc ?		白滝下町文化層Ⅱ 船底石器ほか			
飛騨Ⅱb	↑ b	白滝上町文化層Ⅰ C14 15820±400 ブレッド ほか	旧石器時代 後 期	火 山 屈 斜 路 火 山	シベリヤ、カラフト、北海道陸続き
飛騨Ⅱa トッタベツ (千貫敷)Ⅱ					
↑ ?		権現山Ⅱ文化 権現山Ⅰ文化	旧石器時代 中 期		
トッタベツ Ⅰ					
↑					
飛騨Ⅰボロシリ (地盤の上昇開始)					
			旧石器時代 前 期		
	ホ マ ウ セ ン ス ジ ク ル ミ ・ ミ ウ ツ マ ン シ 来 ワ 洋 象				

地質年代 区分	絶 対 年 代 (ヨーロッパ年)	永 期 年 代 区 分	古 気 候 (現在に対比)	海水面変化 (ヨーロッパ)	
沖 積 世	0	サブアトランティック期	温	0 m	
	1,000— 2,000— 3,000— 4,000— 5,000— 6,000— 7,000— 8,000— 9,000— 10,000—	サブボレアル期	やや寒		
		アトランティック期	暖(+2°)	+10~15 m	
		ボレアル期			
		アレボレアル期	-6°より暖	-20~30 m	
	法 後 期 世	11,000— 12,000	新ドリ阿斯期 W ₄	-6°	
			アレレード期	温	
		18,000±	旧ドリ阿斯期 W ₃	-6°	-30 m
			温	-12 m	
20,000±			-8~-9°	-100~130 m	
		ブランデン ブルグ期	温	+1~3 m	
5~80,000±			-7~-8°	-100 m±	
		W ₁			
植 開 世	約 150,000	リス・ウルム(第3) 開 氷 期	暖(+2°)	+6~30 m	
	約 240,000	リ ス(第3) 氷 期	-8~-9°	-100 m±	
	約 380,000	ミンデル・リス(第2) 開 氷 期	凉	+30~40 m	
	世 前 期	約 450,000	ミンデル(第2) 氷 期	-6~-8°? 海水-5~-6°	-100 m±
約 550,000		ギェンツ・ミンデル(第1) 開 氷 期	暖	+30~60 m	
約280,000~1,000,000		ギェンツ(第1)氷期	-6°? 海水-4~-5°	-100 mより浅	
約600,000~2,000,000					

化が、アジア大陸各地の石器とどのように関連を持っているかなど等、まだ未解決のものが多数残っているのである。

白滝村の無土器文化研究の変遷

昭和の初期（二年ころからといわれている）、遠軽町の遠岡栄治は、白滝村奥白滝付近および旧白滝ホロカユウベツ一帯から発見された大型石器に注目し、これを発掘収集していた。付近住民もまた白滝村一帯で、開拓の進むにつれ多数発見される石器を収集し、学校などに考古資料として寄せられていたことは事実であった。しかし、当時はこれらの出土品の年代的考察や、無土器時代の位置づけなどには思いもつかず、きわめて近い時代の上器文化またはアイヌ文化の遺物として考えていた程度であった。

越えて昭和二十八年、当時明治大学の学生であった吉崎昌一（現北大助教授）は、北海道にも旧石器があるのではないかとの見通しにたつて道内各地を踏査し、白滝村の奥白滝、上白滝および支湧別付近から出土したブレードを中心とした各種の石器を発見し、その形態および層位から、これが旧石器時代のものであることの判定をしたのである。

その後昭和三十年夏、吉崎は明治大学芹沢長介、北海道学芸大学河野広道、北海道大学湊止雄などの援助のもとに、本村上白滝高台付近の一点（白滝第十三地点）をはじめて発掘し、産状や層位状況を本格的に調査したが、この時点で湊博士は日高のマンモス化石層準に対比されるだろうとの見解を明らかにした。翌昭和三十一年夏、北大児玉作左衛門と当時北大に交換留学中の米國ミシガン大学の S. P. Bank が中心となって、北大大場利夫博士、吉崎昌一などが参加し、前年吉崎が発掘した隣接地点を発掘、これには白滝中学校、三和中学校の生徒も発掘作業に参加した。この調査は前年の調査実績にもとづき、さらに考古学、地質学、人類学等の面から調査

されたものであったが、残念ながら細部の成果は発表されないままに終ってしまった。

その後さらに井尻正二、北大石井次郎、東北大若生達夫、地下資源調査所長谷川潔などの手により、吉崎の研究と併せて、河成段丘の形成史上、地質形成上などの調査研究が進められたが、以上の諸研究が起点となって、昭和三十四年夏、これらの問題を総合的に調査研究するため「白滝団体研究会」が結成され、白滝遺跡の研究は考古、地質、地形、古生物、土壌、人類学の多方面から学究を網羅して本格的な研究に入ったのである。

この研究会の構成員は百二十名からなり、道内大学の若手研究者をはじめ、遠くは京都大学、信州大学からもはせさんじ、また高校、中、小学校の教師などおよそ道内外の新進気鋭の学究者が中心となって構成されたほか、道内の高校生も延べ四十数名参加した。

この調査研究は昭和三十四年（第三十一地点第三十二地点）、同三十五年（第三十七地点、第三十八地点）、同三十六年（ホロカ沢）の三カ年、毎年夏白滝温泉ホテルを中心宿舎とし、日中は分担による現地の調査を実施し、夜はグループによる討議を重ねて研究が進められた。その結果、白滝遺跡群の地層、遺跡を含む広範囲の地質、地形などにつき、大きな成果をおさめ、昭和三十八年五月十日、白滝団体研究会の名のもとに『白滝遺跡の研究』報告書が発表された。

またこれと並行して昭和三十七年に明治大学杉原莊介博士を中心として、白滝服部台地の遺跡についても発掘調査が進められたが、報告は未刊である。

遺跡の分布　白滝遺跡は湧別川と支湧別川の流域一帯に分布し、この二つの川にはさまれた数段の河岸段丘を形成する三角地帯に多く分布している。

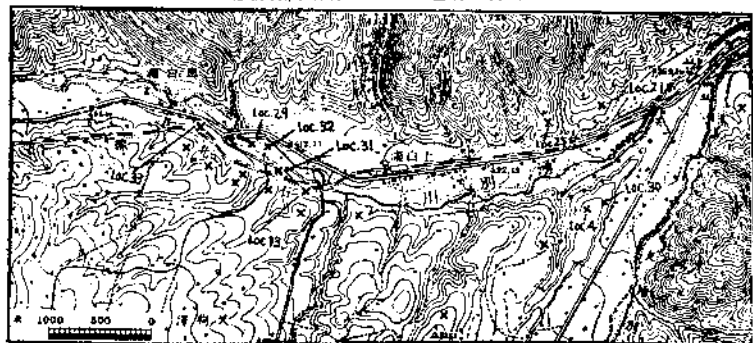
遺物の出土地点はこの一帯に七十カ所以上も存在するが、調査地点としては、白滝第十三地点（上白滝前田植林台）、支湧別の白滝第三十地点（鴻上台地）、第四地点、第十地点などのほか、上白滝から奥白滝の間、鉄道沿線にそって、第三十一、三十二、三十三地点などが分布している。また白滝付近では黒耀の沢をはさみ、渡辺台地第二十五地点、山本台地第二十七地点などがあり、また旧白滝ホロカユーベツ沢1遺跡などもある。そしてこの調査の結果を総合して、白滝石器の発掘されたそれぞれの段丘別位置づけおよび層位学的検討から白滝遺跡の文化層を新旧二つに分けることができるとし、上町文化層Ⅰ（第十三、第三十八地点など）、下町文化層Ⅱ（第三十、第三十三地点など）として分類することにした。

遺物の種類 白滝遺跡の遺物は、そのほとんどが黒耀石による石器であり、その種類は多く、道内各地で出土したほとんどのものが発見されている。そのおもなものをあげると以下のものである。

イ 石 刃 (blade)

縦長剣片のうちでも正面に二―三条の稜がとおって形のととのったもの。原義は木の葉、小刀の身といった意味で、白滝、置戸、西興部、樽

紋別郡白滝における遺跡の分布



白滝団体研究（1963）による。

岸などの諸遺跡から船底形石器をともなつて発見される。また当然にブレードコアも発掘される。

ロ 搔 器 (scraper)

ものを削ったり掻きとったりするための、断面がくちばし状に分厚い刃をそなえた石器、総じてスクレーパーと言っているが、その形態によって、エンド・スクレーパー、サイド・スクレーパー、コア・スクレーパーなどがある。

ハ 彫 刻 刀 (grater)

通常、彫刻刀は剥片の一端にそこをたち切るような打撃が加えられ、先端部をたち切ったような面ができ、これを彫刻刀面とよばれる狭い剥取りができています。

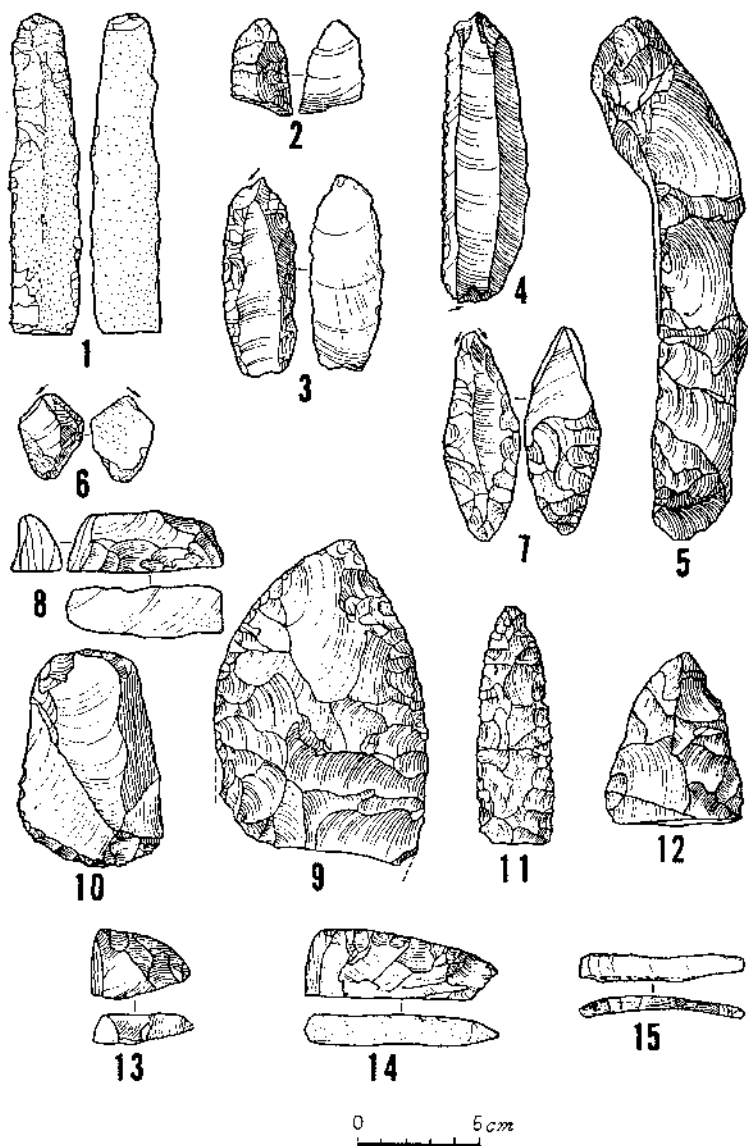
ニ 尖 頭 器 (point)

先端がとがっていて、主として物を突き刺すための石器をひろく尖頭器といっており、形態はさまざまなものがふくまれる。大形、中形の尖頭器が船底形石器、彫刻刀石器などと伴出することが多い。

ホ 船底形石器

厚い剥片石を平らな面を中心にして、長円形にその周囲に打撃を加え、船のような形に仕上げた石器をいう。

特に木村出土のこの種のものは、白滝型船底石器とよばれ、大形で両面加工がなされた厚手の槍状石を原料とし、甲板にあたる部分はカーブしているものが多く、数回の剝離によってこの際できる石削はスキー状をなしているものでこれをスキー状スポールと言っているが、これ自体、擦痕、磨滅などが見られた点から、石器として利用された場合があったと思われる。



1・4 刃器，2・9・11・12 矢頭器，3・6・7・彫器，5・8
 船底形石器，10 掻器，13・14 白滝型石器，15 スカー状刮片

へ 石 刻 (core)

石器を作る過程で、剥片をはぎ取った残りの石を石核という。これは石器の目的で作ったと思われるような石核もなかにはあるが、おおかたの場合は、はぎ取った剥片を石器として使用し、石核は残りを捨てられたものであろう。大部分は縦に幅の狭い剥離面が平行してならび、全体の形が柱状や円錐状を呈しているものが多い。特に石刀をはぎ取ったと思われる石核などは、ブレード・コアといっている。

ト 細 石 器 (microlith)

年代は新しくなり沖積世の初めないし洪積世の最末期となろうが、細石刃を主とする細石器が発掘される。いずれも無土器時代末期の所産と推定され、付近からは石刃鏃など沖積世初期のころの石器のほか、剥離加工の精密度が高い石器が伴出されている。

白滝無土器文化層の年代 白滝無土器文化の石器包含層は、前述のように新旧二つの層準に区分され、文化層Ⅰの地点から白滝団研において石器とともに出土した炭化木片の放射性炭素測定(C14)によって、その年代は 16820 ± 400 B. P. 年という値が出され、すなわち一万五千八百二十年前後四百年前との年代が推定されたのである。

同じく白滝団研から主要な地点における石器群の水和層の厚さは 4.16 ± 0.03 m ～ 5.79 ± 0.03 m の範囲に含まれるとの結果が出され、この年代がほぼ二万年から一万二千七百年 B. P. 年にあたるものと推定された。これらによると編年表でも明らかのように、白滝の文化層Ⅰは約一万五千年から約二万年にわたり、文化層Ⅱは約一万二千年から約一万五千年にわたると推定されることになった。これらはウルム氷期2 (文化層Ⅰ)、ウルム氷期3

(文化層Ⅱ)に相当すると推察されるのである。

放射性炭素測定Ⅱ炭素の同位元素測定から表わされ、炭素は普通C12で表わされるが、放射性炭素はC14である。このC14はどのような条件におかれても一定の速さで崩壊してC12に変わっていく。したがってC14とC12の割合を調べると二万年前からいまでの時間は相当正確に測定することができる。

水和層測定Ⅱ黒耀石の石器の表面は、同じ黒耀石であっても鈍い光沢をしめす。これは石器が長い間埋積されているうちに表層が水和してきたためである。この表層にできる水和層の厚さにより(古いものほど厚く、新しいものほど薄い)、年代を推定する方法である。

土器文化 白滝の土器文化遺跡についてはいまだ全く解明されていない。

近年、市街地東区石井政雄所有地から中学生が土器破片を発見した。村教育委員会はこれを網走郷土博物館米村哲英に見てもらい意見をうかがったところ、緒条休庄痕紋土器(約七千年前)のものと確認された。同教育委員会はこれらの資料を基礎として昭和四十六年度に、米村哲英を中心にして本格的な発掘を実施し、本村の土器文化の究明をはかることになっている。

二 自然と環境

村名「白滝」の由来

湯別川の上流、下白滝駅より南方五〇〇呎の地点に滝があり白滝と称していた。『上湧別村誌』には白滝という地名について次のように記されている。

「滝の下駅通所より約一里の西方（現在下白滝駅より凡そ五〇〇呎の地点を指す）湧別川の上流に在り兩岸高く聳ゆるの間、削れるが如き断崖となり相逼る処、恰も一瞰にして彼岸に及ぶの感あり。湧別川の奔端集まり其の間を穿ち辛じて流れ飛瀑となり白日尚流水濁り、深さ測るべからず、水勢迅風の狂ふに似、泡沫八方に飛散して雲霧を吐き濤声百雷と吼え、為めに双岸の老樹蒼鬱として默せるものの如し、夏期に入れば附近淡水魚多く、就中鱒魚の躍りて瀑を溯らんとして水に押され、水を離れて飛ぶ事頻なり、実に壮絶快絶、識らず盛夏の苦熱も忘れ仙臺に遊ぶの観あらしむ」とあるが、古老の言によれば、ここ



村名の由来となった下白滝の滝—大正7年秋の景
（大正11年8月の大洪水でこの滝も変容した）

二 自然と環境

を通る人々が飛沫する水しぶきのため、滝つばおよび岩肌が白くかすんで見えるので「白滝」「白滝」といって通っていたとのこと、それがいつとはなしにこの付近一帯の地名を「白滝」と称するようになり、昭和二十一年開村の際、村名と決したのである。

第一章 位置と面積

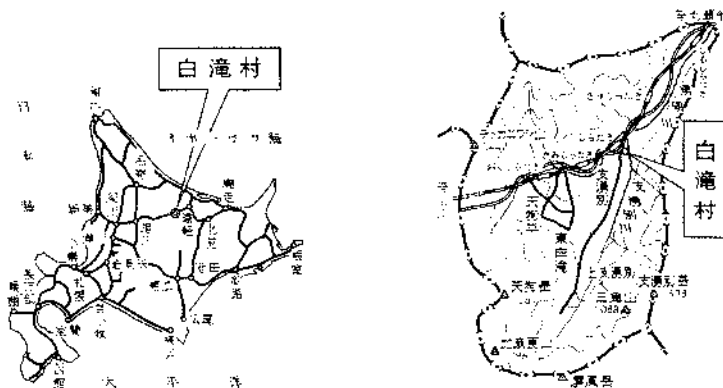
位置

白滝村は網走支庁管内の中西部に位し、北緯四十三度四十四分三十秒より四十三度五十七分三十秒、東経百四十三度四十秒より百四十三度十八分二十秒の間にあり、北は丸瀬布町および滝上町、東は丸瀬布町に、西南部一帯は石北国境を境として上川支庁管内上川町に接している。

面積

面積は三四一・四六平方キロメートルで、東西二〇キロメートル、南北二四・二キロメートルのやや楕円状である。

今こころみに網走管内および全道的な角度から本村の面積を観察するに、網走支庁二十三カ町村のほぼ中間に位する面積を有するが、管内全面積八、九六八・八六平方キロメートルのわずか三・八割にすぎない。しかし全道



所有別		地目別	
國有地	二八、四六九畝	畑	一、四一二畝
公有地	七二二畝	宅地	八三畝
民有地	四、九六五畝	原野	一、二五五畝
計	三四、一四六畝	村有牧場	八二畝
		山林	三〇、二六八畝
		その他	一、〇四六畝
		計	三四、一四六畝

三十二カ村中、猿払村、鶴居村、占冠村、島牧村に次いで五番目に大きい村となっている。

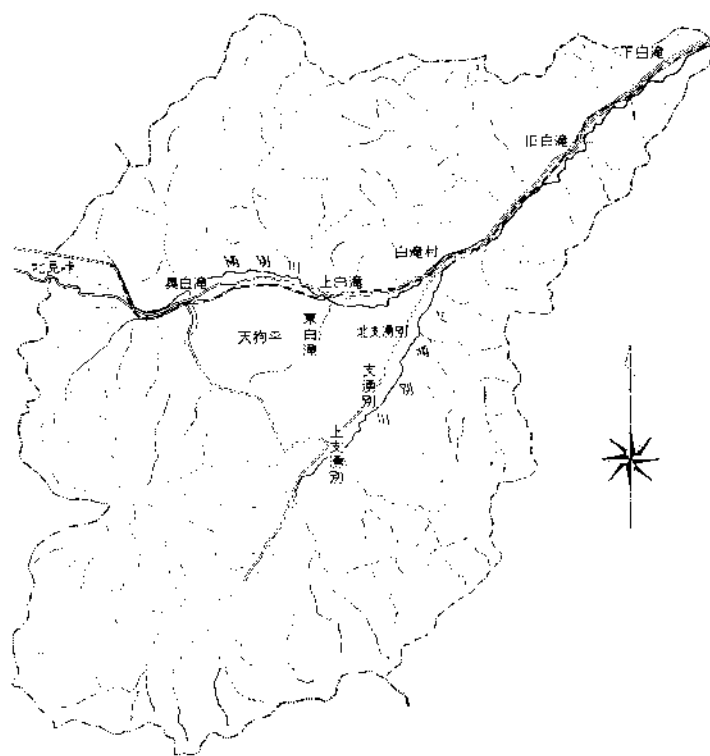
また四千万分の一の世界地図をひろげて見ると、日本全土は人間の親指ほどのもので、北海道はその爪の大きいくらいしかないが、その北海道より小さな国が世界中に三十六カ国もあり、さらに面白いことに白滝村よりも面積の小さい国が六カ国もある。すなわちパチカン市国の四四〇平方畝、モナコ大公国（一・六平方畝）、サンマリノ共和国（六〇・五七平方畝）、リヒテンシュタイン大公国（一五七平方畝）、モルジブ（二九八平方畝）、マルタ国（三二六平方畝）の各国であってみれば、本村もかなり大きな村といえよう。（計数はすべて昭和四十三年度北海道年鑑による）。

第二章 地形と地質

地形概況

白滝村域内の地形はやや楕円状をなし、四圍を山地にかこまれた盆地状の形態を示している。

天狗岳付近に源を発する湧別川と比麻良山付近に源を発する支湧別川の間に発達する台地状の三角地帯（西南方の天狗岳の山麓斜面に接し、西南から北東に緩い傾斜をもって発達している台地）を中心に概観すると、北側は湧別川左岸にただちに急峻な山地が迫り深くきざまれた谷が発達し、七〇〇呎ないし一、〇〇〇呎の高度で鋭い尾根がつらなっている。また三角地帯の西側から東南方向に向っては、天狗岳、武利岳さらにユニ石狩岳などのいわゆる裏大雪系統の山なが続いている。さらにこの山系に斜交して支湧別川



水系図

の東側には主として日高層群からなる七〇〇㊦ないし一、〇〇〇㊦前後の山系がつらなっている。この山地も深い谷が発達し急峻な山容を示している。

河川「湧別川」 石北国境付近より源を発した湧別川は、石狩国上川町領ニセイカウシユベ山の脈系比麻良山付近より源を発した支湧別川がおよそ二二・八㊦流れた地点、白滝市街東北部においてこれと合流、さらに旧白滝においてホロカユーベツ川（七・五㊦）をも合せのんで丸瀬布町域に入りマウレセブ川、ムリイ川と会し、やがて向きを東方に転じセタニウシニウトルコツ川（瀬戸瀬川）を容れ野上に至り、再び方向を北東に転じて常呂郡境よりくるイクタラ川を併せ、また奥社名瀬よりサナプチ川を併せてついにオホーソク海に注ぐ全長一三二・㊦で、白滝村、丸瀬布町、遠軽町、上湧別町、湧別町の一村四町を貫流する管内屈指の河川である。

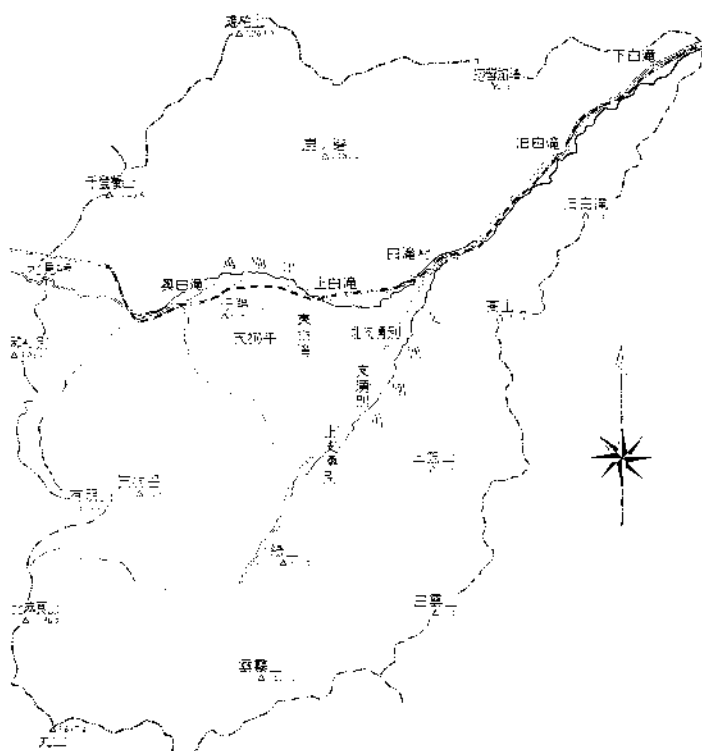
以上のごとく本村の幹流は湧別川のみであるが、第一次支流三十三、第二次支流二十六、第三次支流八、第四次第五次支流各一の計六十九支流で流路総延長二六九・八㊦となり、下白滝駅より小樽駅までの距離に匹敵する。各支流名は次のとおり。

（昭和四十四年八月一日現在）

河名	川					流路延長 km	流域面積 km ²
	幹流	第一次支流	第二次支流	第三次支流	第四次支流	第五次支流	
湧別川	水無沢川					一・五	一・二〇
	水呑沢川					一・五	一・〇〇
	十号沢川					二・〇	三・七三

[illegible]

湧別川		三 風 沢 川	
十勝石沢川	九 山 沢 川	五 〇	八・八三
十八号沢川		一・七	一・二五
葛地の沢川		八・二	七・六五
天狗沢川		二・〇	〇・八七
		二・三	〇・八七
		八・一	一・五五一
		二・〇	一・五七
		三・〇	二・七八
		二・七	二・七五
富樫の沢川		一一・〇	三・九四〇
八号沢川	北湯の沢川	二・五	三・七五
	流紋沢川	五・四	一・七九五
	八 高 沢 川	三・〇	三・五〇
三十九号沢川		二・〇	九・二〇
右陸の沢川		二・〇	一・五〇
三角点沢川		五・四	九・二〇
クワキ ウンベツ沢川		七・三	六・二八
園見沢川		三・五	二・〇七
熊の沢川		五・三	九・七四
	ス ゴヤンベツ川	三・〇	一・三三
	右 の沢川	三・一	三・五三



山 莊 園

24

水准点

水準点 測量法で定められている永久標識の一つに、花崗岩製の水準点標識があるが、この水準点は三角点とともに、あらゆる測量の基準ともなり、また宅地などの境界標の最もともなる重要なものである。主として水準点は国道などの主要道路路にそつて一^キ済ないし二^キ済ごとに一点の割合で設け、レベルを用いて直接水準測量を行なつて標高を求め、全国的に統一されたものである。一等水準点は明治時代に全国的な土地調査を行ない、日本水準原点を東京都千代田区水田町一丁目一番地内水準点標石の水晶板の零分画線の中点（^ノ済）（東京湾平均海面上二四、四一四〇（^ノ済））におき、全国通し番号によつて

所在地点を明らかにしている。

本村域内における水準点は別掲のとおり旧国道をいに一等水準点のみ十四点が降ろされているが、昭和三十年に標石の破損あるいは立地条件などの理由によって移転改埋が行なわれている。次表によってもわかるが、下白滝馬止め付近（七千四百三十三号）の水準点と、北見峠付近（七千四百四十六号）のそれとを比較してみても、実に三倍強の標高であると知れば驚きにあたいる。

白滝村域内一等水準点成果表

所在地	標石番号	所有者	地目	標高(m)	選定年月日	選定者	備考	付記
字下白滝	七四三三	北海道庁	道路敷地	二五九・六二	昭和30・6・18	建設技官 藤井陽一郎	移転改埋	（下白滝馬止め付近）
字下白滝	七四三四	同	同	二九三・九六	明治42・5・11	陸地測量所 山敷 岩蔵		（旧白滝11号付近）
字旧白滝	七四三五	同	同	二九一・二七	明治42・5・11	同		（旧白滝15号付近）
字旧白滝	七四三六	同	同	三〇九・二五	明治42・5・11	同		（旧白滝18号付近）
字旧白滝	七四三七	同	同	三二六・一一	明治42・5・11	同		（旧白滝18号付近）
字旧白滝	七四三八	同	同	三四五・五〇	明治42・5・11	同		（幽仙橋付近）
字白滝	七四三九	同	同	三六八・二〇	昭和30・6・21	建設技官 藤井陽一郎	移転改埋	（農協付近）
字上白滝	七四四〇	同	同	三九二・二一	明治42・5・11	陸地測量所 山敷 岩蔵		（上白滝30号付近）
字上白滝	七四四一	同	同	四一〇・二七	昭和30・6・21	建設技官 藤井陽一郎	移転改埋	（上白滝35号付近）
字奥白滝	七四四二	同	同	四四四・八三	昭和30・7・2	同		（奥白滝38号付近）
字奥白滝	七四四三	同	同	五〇七・九三	昭和30・7・11	同		（奥白滝駅付近）
字奥白滝	七四四四	同	同	五四五・七六	昭和30・7・11	同		（北見峠）
字奥白滝	七四四五	同	同	七三三・一三	昭和30・7・3	同		（北見峠）
字奥白滝	七四四六	同	同	八三二・一四	明治42・5・9	陸地測量所 山敷 岩蔵		（北見峠）

二 自然と環境

三角点

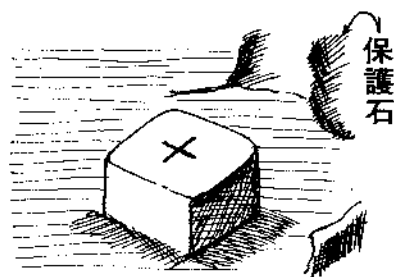
山頂や丘陵の頂付近で測量上比較の見通しのよいところに別図のような石をみることもあるが、これが測量法で定められている三角点で、材質は花崗岩と真鍮製の二種類がある。こうした三角点標石は隣接町村との境界線上にも設置されており、あるいは宅地などの境界標のもとともなっており、地図の作成や公共事業などに必要な測量の基準として、水準点とともにきわめて重要な役割をもっている。これは明治政府が全国的な土地調査を行ない設置されたもので、現在では建設省国土地理院の所管となっている。三角点は水準点と同じく全国的に統一された三角網によって測量がなされ、等級は一等三角点、一等三角補点、二等三角点、三等三角点、四等三角点の別があり、平地においては四等三角点の代りに二等多角点があり、これが比較的多く設置されている。

本村域内においては一等補点三角点が一点、二等三角点が十四点、四等三角点が二十三点、二等多角点が九点の合計四十八カ所に設定されている。

白滝町域内三角点並に多角点表

(建設省国土地理院の調査資料による)

等級別	三角点名	山名	標高(尺)	標石の別	標石番号	所在地	地目	土地所有者	調査年月日
一等補点	千登蟹山	チトカニウシ山	一四九八	標石	左第 七号	白滝村・上里町境界線上	山林	明治七六六	
三等点	有明山	有明山	一四九	標石	左第 五号	白滝村字支那別	北海道庁	大正五五	
ク	比麻良山	比麻良山	一五八	ク	第 四号	ク	ク	ク	



三角点標石

$$\frac{1}{2}$$

三等点	丸山	一六七四	標石	第一四七号	〃	白滝村字支連別無番地	〃	北見管林局	大正五年元
〃	緑山	一六五四	〃	第一四七号	〃	白滝村字支連別	〃	〃	〃
〃	雲霧山	一六五五	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
〃	三笠山	一六五七	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
二等点	高山	一六五九	〃	第一四七号	〃	白滝村無番地	〃	〃	〃
〃	支連別	一六六〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	伊藤ノ山	一六六一	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
三等点	三十七線北	一六六二	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
〃	鹿の谷	一六六三	〃	第一四七号	〃	白滝村字内滝	〃	〃	〃
〃	旧白滝	一六六四	〃	第一四七号	〃	白滝村無番地	〃	〃	〃
〃	辺留加條	一六六五	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝	〃	〃	〃
〃	熊の沢中雄	一六六六	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
四等点	境白滝	一六六七	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	下白滝	一六六八	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
〃	北白滝	一六六九	〃	第一四七号	〃	白滝村字北滝別	〃	〃	〃
〃	十一号	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	十二号	一六七〇	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
〃	十六号	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	林七号	一六七〇	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
〃	二十号	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	見晴台	一六七〇	〃	第一四七号	〃	〃	〃	〃	〃
〃	温泉上	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	上白滝学校	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	東白滝	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃
〃	天狗平	一六七〇	〃	第一四七号	〃	白滝村字白滝原野	〃	〃	〃

[illegible]

地質 本村の地質に異常な関心を寄せた地質・考古学者が昭和三十四年（一九五九）から三年間大規模な野外研究を行ない、一応の成果をあげ、克明にして高度な研究発表を行なった。いま、その『白滝遺跡の研究』（白滝団体研究会）から抜萃するに、

本村全域の底盤を構成するものは、先白堊紀に属する日高累層群と、これを不整合におおっている幌加別別層群と、白滝層などの湖成堆積物および幌加増結凝灰岩、白滝増結凝灰岩などである。

一 日 尚 果 園 層 林

この地層は上部日高層群にあたり、砂岩、粘板岩類で構成され広く分布している。またこの地層のなかには輝緑岩、花崗岩、石英粗面岩などの火成岩類が貫入している。なおこの日高層群を幌加層と湧別川層の二つの地層に区分することができる。

イ 幌加層

この地層は支湧別川上流地域および幌加湧別川流域に分布し、おもに頁岩質の粘板岩と砂岩の互層で砂と泥の部分で規則正しく重なり合っている。

ロ 湧別川層

この地層は幌加層にはさまれた地域に広く発達し、幌加層と似て頁岩質の粘板岩と砂岩の互層であるが、砂岩より粘板岩の部分が多く、しかも砂と泥の部分の境界が不明瞭なところが多い。

二 幌別湧別層

この地層は幌加湧別川、黒耀の沢、八号の沢の上流部に発達し、その分布はごく限られた範囲である。堆積物の下部層はいちじるしく発泡の悪い軽石片を主とした凝灰岩で無層理であるが、上部に行くにしたがい軽石片は少なくなり層理を示している。この層理は一五〇センチ以上もある。この幌加湧別層をおおって熔結凝灰岩がこの地域の東に広く分布しているが、これを幌加熔結凝灰岩という。岩質は石英粗面岩質で多量の黒耀石をとめない、あるいは厚くあるいは薄く熔結凝灰岩と互層状になっている。しかしこうした互層状になっているものとは別に、幌加熔結凝灰岩の上に五〇センチの厚さに発達している黒耀石岩体が二カ所に分布されている。一つは幌加湧別川と黒耀の沢にはさまれた八六〇センチ峰と、いま一つは幌加湧別川の上流の一、一五四センチ峰付近である。

三 白 滝 層

この地層は湖成堆積層で、湧別川と支湧別川にはさまれた三角地帯にも分布する。層厚は約二〇〇層で、岩質はおもに凝灰質砂岩からなっていて岩相の水平変化が激しく、上支湧別市街付近では礫層、天狗沢付近では黒雲母が多い凝灰質砂層、白滝市街付近に近づくとき砂層中にシルトおよび粘土が増加している。白滝層の凝灰質砂層中には一部に石英安山岩質の熔結凝灰岩がある。この熔結凝灰岩は支湧別川上流域で日高累層群を不整合におおい、上支湧別市街付近では白滝層の礫層の上位に載り砂層におおわれている。天狗沢付近では白滝層の凝灰質層にはさまれている。

第三章 気 象

白滝市街地において海拔三五〇層を越え、上支湧別あるいは奥白滝方面にゆくにしたがつて五〇〇層前後にもなり、わずかな農耕地を大小の山々幾重にも起伏して包含のていを示し、北見と石狩の国境を表玄関としている高原の地本村は水稻、陸稲の生産もかなわず、決して恵まれた気象条件とはいえないであろう。

いま四季別に概説してみると、

春 三月後半になると大陸の高気圧が衰えをみせ、季節風も弱まるが、四月初めにはまだ降雪をみることも多く、融雪も四月下旬と、この地方ではおそい方である。四月末から五月にかけては中国方面から移動性高気圧が東進して本道をおおい南西の強い風が多く、温暖で乾燥した空気となり火災の発生しやすい危険な時季と

なる。大正六年五月の忌まわしき大山火も、実はこうした気象条件下に発生したものである。春の代名詞桜の花は五月下旬にかけて満開となり急速に春がやってくるが、南西の風にたたかれて一夜にして花吹雪となることも珍しくない。

夏 北太平洋の高気圧が発達してしだいに本州方面に張り出し、オホーツク海の高気圧が衰え本州付近にすすむようになると本格的な夏の訪れである。しかしこの夏も七月上旬から八月半ばまでの短い期間で、例年三十度を越すことも一、二回あるが、あまり長つづきはしない。一方、年によりオホーツク海高気圧の勢力の強い夏季には、冷涼な北または北東風がオホーツク海方面より流れ込み頻繁に低温が現われ、陰曇な天候による日照不足と重なってついに冷害凶作となってしまう。

また北太平洋の高気圧とオホーツク海の高気圧の間に前線が形成され、本道付近で南北に振動しながら停滞する時には低気圧の影響とあいまって雨をもたすが、本村においても、ひと雨五〇バ以上の大雨になることもある。さらに山間部特有の驟雨に見舞われることもしばしばであるが、低気圧の移動速度が早いため降雨時間も短く、村内平均した降雨がないことが多い。

秋 八月も二十日をすぎるところとなると朝晩涼しさが加わり秋の訪れを感じさせる。このころになると移動性高気圧と低気圧が交互に通過し、低気圧および寒冷前線が通過するたびに冷涼な秋風が吹いてくる。台風シーズンとなるのもこの時期であるが、本道は比較的被害の少ない地方といえよう。しかし秋雨前線や台風の影響をうけるため、にわか雨の降ることが多いがまた晴天の日も多く、秋特有の変化の激しい季節となる。こうした変りやすい気候によって昼夜の温度差がいちじるしくなり、九月下旬には強い霜のおりることがある。

冬 冬季はシベリア大陸がいちじるしく冷え込むので優勢な高気圧ができやすく、本道はその影響を受け西高東低型の気圧配置によって西または北西の季節風が強まり冬型の気候となる。かくして十月下旬には初雪があり、十一月中旬をすぎると根雪となるのである。十二月より三月中旬にかけて天狗岳より吹きおろす通称天狗嵐は寒気を一層きびしくし、地下凍結もひどくところによっては一層に達するところもある。また低気圧の通過のあと、時として三日も四日も猛吹雪となることがあり、これがため交通杜絶し、郵便の配達も止り、小中学校は臨時休校となる。他市町村においては極寒の日に臨時休校あるいは授業開始時間の繰り下げ等の便法を講じているが、本村におけるそれはなく、代って猛吹雪または多積雪の日を臨時休校あるいは繰り下げ授業とすることもあるが、これは本村の特殊気象から起るものである。

また道東沿岸を発達した低気圧が北東へ進む時には湿った雪が多量に降ることが多く、俗に呼称している「しも嵐」の時で、昭和三十六年十二月三十一日に一一八センチ、翌年一月三十日に一二三センチと一日で一層をこえる豪雪となることもある。

一月半ばころになるとオホーツク海沿岸一帯は厚い流水によってとざされるが、この寒気が北または北西の風によって本村に入り、マイナス二十度以下の寒波が幾日も続くことがある。

霜 初霜終霜の遅速によって農作物に異常な影響を及ぼす霜は、春秋季に大陸特に沿海州北部から移動してくる高気圧に北海道がおおわれるような気圧配置になったとき、この高気圧は寒冷な気団であり、天気が良く、風が弱い気象条件の早朝など霜のおりる危険が大きいのである。また冷たい空気のたまりやすい凹地や盆地のような場所、あるいはこのような場所に向って冷たい空気が流動する道筋などは霜がおりやすく、反対に傾斜地や

本村における気象状況は次のとおりである。

⑦ 気 温 (注：5 か年平均とは昭和36年～昭和40年までのこと)

項目 月別	平 均 気 温	昭和43年	5 か年平均	昭和43年	最高気温の概値と起日	最低気温の概値と起日	5 か年平均	昭和43年	最高気温の概値と起日	最低気温の概値と起日
1 月	-10.2	-10.3	-3.8	-5.0	39.1.12 8.0	19.1 2.4	-16.5	-15.6	37.1.15 -30.0	39.1 -30.4
2 月	-10.7	-11.5	-3.9	-3.9	37.2.11 7.5	20.2 0.6	-17.4	-19.2	37.2.15 -32.0	4.3 -30.1
3 月	-4.6	-0.5	1.2	4.7	39.3.30 12.0	30.2 13.5	-10.3	-5.8	40.3.6 -40.0	5.3 -15.6
4 月	4.7	5.4	10.8	11.6	39.4.30 25.0	24.4 16.9	-1.6	-0.7	40.4.5 -16.0	8.3 -8.4
5 月	11.5	10.3	19.1	15.8	37.5.4 29.0	25.2 9.1	3.8	4.8	39.5.1 -4.5	16.7 -1.1
6 月	15.1	15.4	21.6	22.5	37.6.13 32.0	29.7 29.6	8.5	8.3	39.6.1 -1.0	7.6 3.5
7 月	18.8	18.6	24.5	24.3	38.7.27 32.5	37.1 32.8	13.0	12.7	37.7.8 3.0	1.4 2.3
8 月	19.3	18.4	24.0	23.5	39.8.31 32.1	31.0 31.0	14.6	13.2	37.8.3 6.0	23.4 8.7
9 月	14.7	13.7	20.5	19.0	39.9.1 29.5	31.4 24.7	8.7	8.4	39.9.28 -4.0	5.3 1.5
10 月	7.4	6.0	13.6	11.4	39.10.5 22.0	2.4 23.0	1.3	0.6	39.10.25 -9.5	8.1 5.0
11 月	0.9	2.8	5.8	7.2	38.11.2 16.5	16.7 6.4	-4.3	-1.7	37.11.8 -19.5	19.4 -11.8
12 月	-5.4	-3.0	-0.4	1.1	37.12.12 10.5	11.3 11.3	-10.4	-7.2	37.12.27 -28.5	39.1 -14.4
平 均	5.1	5.4	11.1	11.0	21.4	18.9	-0.9	-0.2	-13.8	-8.4

観測記録によるとこのところの最高気温は昭和33年8月11日に34.0度、また最低気温は昭和36年2月15日に-32.0度を記録されている。

(オホホーワ湖沿岸地域気象水文調査報告書・朝庭地方農業気象月報より)

㊤ 降水量・積雪量 (注：5カ年平均とは昭和36年～昭和40年までのこと)

年度 月別	月 降 水 量 (mm)	5カ年平均 昭和43年	降 水 日 数 (1mm以上)	5カ年平均 昭和43年	1日の積雪の 最大の量と 起 日	5カ年平均 昭和43年	積 雪 日 数 (10cm以上)	5カ年平均 昭和43年	平均積雪量 (cm)	降雪日数 (1cm以上)
1 月	54	78	12	21	37.1.30-31 123	28-29日 68	31	31	47	18
2 月	30	36	10	11	37.2.1 120	23日 66	28	29	67	14
3 月	24	34	10	10	38.3.2 127	1日 56	31	28	64	12
4 月	42	10	9	3	40.4.4 102	3日 4	17	—	22	3
5 月	57	82	9	9	—	—	—	—	—	2
6 月	85	29	11	4	—	—	—	—	—	—
7 月	82	132	13	12	—	—	—	—	—	—
8 月	171	175	15	13	—	—	—	—	—	—
9 月	101	130	14	11	—	—	—	—	—	—
10 月	49	68	11	9	39.10.25 3	12日 18	—	2	—	4
11 月	70	81	13	14	39.11.24 34	18日 18	5	2	—	11
12 月	41	66	14	17	36.12.31 118	27-30日 30	20	17	23	17
月平均	67	77	12	11	—	—	—	—	223	81

(オホーヅク海沿岸地域気象水文調査報告書・網走地方農業気象月報より)

降雪・根雪の初終日 (オホーツク海沿岸地域気象水文調査報告書より)

地点	項目 区 別	初 日		終 日	
		10カ年平均	観測開始 以来の最早	10カ年平均	観測開始 以来の最晩
白 滝	降 雪 根 雪	10月29日	10月5日	4月30日	6月7日
		11月22日	11月6日	4月17日	5月3日

(注) 10カ年平均とは昭和33年より同42年までのこと

㊦ 風向・風速・霜・日照時間・不照日 (昭和43年観測)

(網走地方農業気象月報より)

月 別	9 時 の 気 象		日 数	時 間	日 数
	最多風向	平均風速 (m)	霜	日 照 (月間)	不 照 日
1 月	南 西	2	0	90.6	4
2 月	南 西	3	0	158.0	4
3 月	南 西	3	0	213.9	0
4 月	北 東	3	4	220.7	0
5 月	北 東	2	0	169.0	1
6 月	北 東	2	0	218.4	1
7 月	北 東	2	0	227.7	1
8 月	北 東	2	0	163.2	0
9 月	南 西	2	0	165.1	3
10 月	南又は南西	2	11	150.4	1
11 月	南 西	2	3	92.2	4
12 月	南 西	2	0	69.0	9
計			18	1,938.2	28

風 速

昭和43年度における午前9時観測の風速のうち最も大なるものは、7 m (5月21日南西の風) が1度、また1日の平均風速でも7 m (9月21日南西の風) が1度しか記録されていない。

風 向

風向は8方位によるものであるが、昭和43年1カ年における午前9時観測の各方位の風向は下の図表のとおりである。

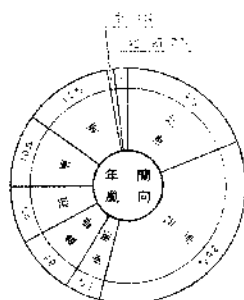
風向 年及 び比率	東	西	南	北	北東	北西	南東	南西	静穏 0.5m/s 未 満	計
年間(日)	40	29	43	4	69	6	17	128	30	366
比率(%)	10	8	12	1	19	2	5	35	8	100

霜の統計値

(オホーツク海沿岸地域気象水分調査報告書より)

項目 地点	初 霜		終 霜		無 霜 期 間	
	10カ年平均	観測開始以来の最早	10カ年平均	観測開始以来の最晩		
白 滝	9月30日	9月13日	5月22日	7月25日	130日	5.23～9.29
遠 軽	10. 4	9. 20	5. 21	6. 12	135	5.22～10. 3
北 見	10. 3	9. 15	5. 15	6. 27	140	5.16～10. 2
西興部	10. 2	9. 15	5. 24	6. 10	130	5.25～10. 1

(注) 10カ年度均とは昭和33年～昭和42年までの平均



不照日

日照が全然ない日を不照日というが、本村における不照日は別表によってもわかるとおり、一月、二月、十一月、十二月のいわゆる冬季に集中している。

日照

農作物にとって温度、雨量とともに大切な気象要素は日照である。別表によつて知られるとおり、一千九百時間をこえる日照時間は管内的にみて遜色なき日照である。昭和四十三年一年間において一日の日照時間が十二時間をこえた日は、四月八日の十二時間、六月八日の十二時間、六月十四日の十二時間、六月二十七日の十二・四時間、六月二十八日の十二・九時間、七月八日の十三時間七月二十七日の十二・二時間と合計七日間が記録されている。なお、同年度中網走管内における最長日照時間は、訓子府町において六月三日に十五・八時間の記録がある。

昭和43年1カ年の午前9時観測による白滝村の天気状態

項目 月別	快 晴 (日)	晴 (日)	曇 (日)	雨 (日)	雪 (日)	みぞれ (日)	欠 源 (日)	計
1 月	6	8	5		12			
2 月	1	9	8		10		1	
3 月	3	15	10		3			
4 月		15	13	1	1			
5 月		7	21	3				
6 月		21	7	2				
7 月	1	14	13	3				
8 月		12	16	3				
9 月		5	10	3			12	
10 月		14	14		3			
11 月	1	10	11	1	5		2	
12 月		7	14	1	8	1		
年計	12	137	142	17	42	1	15	366

(網走地方農業気象月報より)

天気予言

農・漁業を問わず、一日の気象の良否は直

接間接に人間生活の上にもろもろの影響を及ぼすもので、今日ののような気象観測の行なわれていない時代から農山漁村の人たちは自然現象に対する永い間の観測と体験から天気予言をすることが多かったが、アイヌたちの間でもやはり気象に対する予言はさかに行なわれていた。アイヌの口碑による天気予言のうち面白いものを拾ってみると、

- 一 蛇、蛇多く出づれば雨近きにあり
- 一 蛙夜鳴けば翌日快晴
- 一 雲東方に向って疾走するは風となる
- 一 虹現わるるは降雨少なし
- 一 蟻しきりに草より出づる時は雨近し
- 一 晩天天色紅なる時は大風、日暮天色紅なる時は翌日風起る然し必ず晴天なり
- 一 月暈グロウ(注・月のまわりに出来る環状のもや)あれば三日以内に降雨、しばしば月量ある年は翌年晴大多し

第四章 植 物

白滝の野草

本村は地勢、地質とも変化いちじるしく、山岳、丘陵地、原野、河岸などに自生する植物もその種類はかなり豊富である。都会では容易にみることでできない草花、あるいは本州地方では高山にしか生育しない植物も、道路沿いに簡単にしかも数多く見かけることができるのも、海拔平均五〇〇呎に近い高原地帯なるがためであらう。

昭和十二年小出月江は郷里長野県よりヘイケボタルを購入してきて、野草豊かに茂る境内地の一隅に放ち、戦時中ややもすれば螢りがちになる世相を、夕暮れとともにのどかな光を発するホタルによって、住民にひとしく心のやわらぎと光明を与えた。放螢後十年を経ずして無慮数千匹に繁殖し、戦後は小規模ながらホタル観光として一時は遠軽、上湧別方面からもホタルの光を求めて見物にくる者もあったが、相次ぐ無謀な捕獲と農薬公害等による雑草汚染で死滅し、今日かろうじて生きながらえる数は極少匹にすぎないが、可憐な昆虫ホタルは農薬その他の公害にもめげず、その生命力の偉大さはわれわれをして驚かしめる。

高山植物も、路傍に生息する各種の植物も、戦後のあらゆる公害等が素因となって枯死し、ついには全くその姿を消してしまった植物もあるであらうことは想像にかたくない。

本村域内植物の生息状態については、白滝小学校海津良知教諭が植物学に造詣深く、右のごとき資料を寄せてくれた。

春は、日当りの良い落葉樹の間に顔を出すフクジュソウ、道ばたや崖ぶちなどに群生するアキタブキの花茎に始まり、山菜の王といわれるニリンソウやアズマイチゲ、キクザキイチゲなどのイチゲ類、うす紫色のエゾエンゴサクやカタクリの美しい花が咲き乱れ山すそを彩る。また道路沿いの湿地には別名ヘビノマクラと呼ばれるミズバショウ、ヤチブキと呼ばれているエゾリヌウキンカが群をなして咲きそろうさまは、春ならではの佳景であろう。

スズランの葉に似たギョウジャニンニクは概して上白滝方面に多く、味噌あえなどにして食すると、独特の臭気が少々気になるが舌つづみを打つほどおいしいものである。

夏になると、背が高く大きなものが広い面積にわたって繁茂するが、二、三層にも伸びるオオイタドリをはじめ、ヨブスマソウ、エゾウバユリ、ハンゴンソウ、エゾヨモギ、アキタブキ、ウド、アマニユウ、ヤナギランなど本村では特に目につきやすい植物である。

六月に入るとタケノコの季節となる。地元営林署より入林許可があり、一般開放の二、三日間は村内をはじめ遠く紋別、網走、旭川方面からのタケノコ狩りで山は車の通行に渋滞をきたすほどにぎわう。一名ネマガリダケといわれているがチシマザサのことである。北見峠に密生する竹やぶの中に入ると、すだれの中を歩くがごとく身動きのできなくなることもあり、うっかりすると迷い子になることもある。

秋にはムギワラのような、かさかさの白い花をつけるヤマハハコ、あるいはあざやかな黄色であわ立つようにもり上って花をつけるアキノキリンソウ、その他ツリガネニンジン、ヒノジョオンのうす紫の花、アキノノゲシ、エノコログサなどが目につく。

また、丹頂鶴の舞を思わせるマイヅルソウ、日陰にひっそりと可憐な花をつけるヒトリシズカ、深山の木陰によくみるイチヤクソウ類、針葉樹林の下草の中のツバメオモトの白い花、白い実がボツンボツンとなるフッキソウ、北海道でも非常にまれにしかみられない紫紅色をしたサクラソウモドキなどあげることができる。なお、これらのほかにも本村域内に数多くの植物が判明されている。

一 双子葉植物

1 合弁花類

セイヨウタンポポ、エゾタンポポ、オオヤマボクシ、ニゾノキツネ、アザミ、ハンゴンソウ、ヨブスマソウ、ニゾヨモギ、オトコヨモギ、エゾノタウコギ、ノブキ、アキタフキ、ヤマハハコ、ヒメジョオン、セイタカアワダチソウ、アキノキリンソウ、ノコギリソウ、ツリガネニンジン、コウゾリナ、ハチジョウナ、チシマオドリ、ヤナキタンポポ、エゾアザミ、イヌホオズキ、オオバコ、イヌコマ、クルマバナ、シオガマギク、マルバキンレイカ、カキドオシ、ツルニンジン、ナミキソウ、アカネムグラ、ヤエムグラ、ミヤマムラサキ、オドリコソウ、ヨウバムグラ、タルマバナ、オニルリソウ、ヒルガオ、サクラソウモドキ、コバノイチヤクソウ、アキノノゲシ、オオレイジンソウ、ミゾホオズキ、ミミコウモリ、オトコエシ、ユガナ、ヤナギタンポポ、エゾムカシヨモギ

3 離弁花類

ゴゼンタチバナ、ミツバ、ヤブジラミ、ドクゼリ、セリ、オオダイコンソウ、エゾエンゴサク、スミレ、ツボスミレ、エゾノタチツボスミレ、コンロンソウ、ハマバ、ウシハコバ、オオツメタリ、オオヤマフスマ、ナズナ、ダンバイナズナ、スカシタゴボウ、ヘビイチゴ、エゾタサイチゴ、キジムシロ、ウルキジムシロ、ミツバツチケリ、エゾノミウモトソウ、クサフジ、クサノオウ、カタバミ、コミヤマカタバミ、キツネノボタン、ゲンノシウ、キンミズヒキ、エゾマツヨイダサ、ナギナタコウジュ、イヌタデ、オオイヌタデ、ミゾソバ、タニソバ、イシミカリ、ミチヤナギ、ヒメスイバ、ギンギン、イタドリ、アカ

ザ、シロツメクサ、アカツメクサ、フクジニソウ、アズマイチゲ、ニリンソウ、ヒトリシズカ、フタリシズカ、サラシナシエウマ、トリアシシエウマ、エゾトリカブト、トモエソウ、キツリフネ、ツリフネソウ、エゾクロタモソウ、エゾヤマハギ、フツキソウ、エゾイラクサ、ワサビ、ウド、エゾノリユウキンカ、オオバセンキユウ、エゾニユウ、ハナウド、エゾノシシウド、シロネ、エゾシロネ、ヒメシロネ、カラマツソウ、ヤナギラン、コキンバイ、エゾキケマン、ミヤマヘンシヨウヅル、ズタヤタシユ、ケフシグロ、スベリヒニ、アキノウナギカヅミ、エゾノコンギタ、オオバタネツケバナ、ミツバオウレン

二 单子葉植物

オオバナノエンレイソウ、エンレイソウ、マイヅルソウ、ツバメオモト、オオアマドコロ、ツエタサ、カタタリ、キバナノアマナ、タルマユリ、ウバユリ、ミズバショウ、ザゼンソウ、オオナムシクサ、サイハイラン、ヒメイズイ、ギョウジャニンニク、ガマ、オオアシガエリ、コウボウ、ユキザサ、スズメノカタビラ、ウシノケクサ、ネズミガヤ、アオスゲ、アゼスゲ、カモジクサ、ニリホコリ、アキメヒシバ

三 羊歯植物

コスギラン、トウゲシバ、ヒカゲノカズラ、スギカズラ、マンネンズギ、エゾノヒモカズラ、スギナ、トクサ、コウヤワラビ、ワラビ、エゾフニノハナワラビ、ナツノハナワラビ、ヒロハハナヤスリ、ゼンマイ、コケシノブ、ヒメウラジロ、タジヤクタ、シノブ、ヤマソテツ、イヌガンソウ、イリデンダ、ツルデンダ、オシダ、シラネウラボ、ミヤマワラビ、ヒメシダ、オオバシヨリマ、オクヤマワラビ、ウサギシダ、エゾメンダ、ヘビノネグサ、イワイヌワラビ、ヤマイヌワラビ、ミヤマシダ、シシガシラ、イチヨウシダ、コタニワタリ

以上これまであげた野草中から野山の味覚としての山菜をひろってみると意外に多いことがわかる。すなわちセリ、ミツバ、フキ、エゾウバユリ、タルマユリ、エゾエンゴサク、カタタリ、ニリンソウ、ユキザサ、アザミ、ヨブスマソウ、ウド、ハンゴンソウ、エゾイラクサ、タンポポ、キバナノアマナ、ヨモギ、ギョウジャニンニク、エゾリユウキンカ、ワサビ、チシマザサ、クサンテツ、ワラビ、ハコベ、ナズナ、オドリコソウ、スミレ、ヒルガオ

木の芽では、

ミチノキ、シナノキ、オオバボダイジュ、マユミ、ツリバナ、ハルニレ、キタコブシ、コナラ、エゾニシトコ、タラノキ
木の穴では、

コクワ、マタタビ、ミヤママタタビ、クワ、クルミ、コケモモ、クロマメ、クロウズボ、ヤイチヂ

白滝の樹木

本村は植物地理学上亜寒帯に属し、本州に見られない樹種もかなり繁茂している。

森林樹木は本州のスギ、アカマツ、クロマツなどの混合林に対し、エゾマツ、アカエゾマツ、トドマツの原始林、それにさまざまな種類の広葉樹が加わり、なかならず針葉樹林の中のシラカバの白い木肌、あるいはマタタビやミヤママタタビの白い葉は、緑との対比の中でもひととき美しいものである。

エゾマツ（アカエゾマツを含む）は、昭和四十一年、北海道の大自然を象徴する郷土の木として定められたほど、樹形の美しさは広く道民に親しまれており、北海道の伝統ある歴史を無言のうちに語り続けているようである。

トドマツは北海道でいちばんポピュラーな針葉樹であり、大正期以来さかに行なわれてきた造材の樹種のうち針葉樹の中で占める比率も大きく、庶民的な樹種といえよう。

秋の山の彩りは、樹種の多いことから千差万別で、濃い緑の針葉樹、紅葉するカエデ類をはじめ、サクラ、ヤマブドウ、ヤマウルシ、ナナカマド、黄葉するハンノキ、センノキ、カツラ、カラマツ、カバ類、茶褐色になるナラ、カシワ、ヤチダモなどとりどりの色調の競い合うさまはすばらしい景観を呈する。さらに樹葉の変化の美

しさばかりでなく、濃いピンク色の果実の中から赤い皮をかぶったタネをのぞかせたツリバナ、あるいはカラスが喜んで食べているエゾニワトコの赤い実、そして赤珊瑚のようなナナカマドも実に美しいものである。

樹木のうち比較的なじまれているものをあげてみると、

高木では

1 針葉樹

トドマツ、エゾマツ、アカエゾマツ、カラマツ、イチイ、ストロープマツ、トウヒ

2 広葉樹

ハルニレ、ヤチダモ、センノキ、シナノキ、ミズナラ、エゾイタヤ(クロビイタヤ)、カシワ、シラカンバ、ウダイカンバ、ダケカンバ、イスエンジュ、ハリエンジュ、ヤマグリ、ハンドイ、エゾヤマザクラ、カツラ、ホオノキ、キタコブシ、ナナカマド、ミズキ、ヤマナラシ、ケヤマハンノキ、ミヤマハンノキ、ハウチワカエデ、サワシバ、シニウリザクラ、オニグルミ、ヤチハンノキ、ニセアカシア、ボブラ、オヒョウ、ドロノキ、アカイタヤ、ネコヤナギ、エゾヤナギ、バツロヤナギ、エゾノキヌヤナギ、ナカバヤナギ、キハダ、アサダ、アカシデ

低木では

ナエリズ、ドクウツギ、エゾニワトコ、ノリウツギ、シモツケ類、エゾヤマハギ、マユミ、コマユミ、ツリバナ、ヒロハノツリバナ、エゾムラサキツツジ、ムラサキヤシオツツジ、ハタサンシヤクナゲ、ヤマツツジ、コケモモ、ミヤマビヤクシン、チシマザサ、ヤドリギ、カラスシギミ、ホザキナナカマド、ガマスミ、タマイチゴ、イスツゲ、タラノキ、ハイシギミ、エゾスグリ、ニシギキ

ツル性では

ツタウルシ、ツルアジサイ、イワガラミ、ツルウメモドキ、ヤマブドウ、マタタビ、コクワ、ミヤママタタビ、チロウセンゴ
ミシ、ゴトウヅル

などがある。

三行 政

第一章 北海道の歴史

北海道は新開地で年代が短いから歴史がない、歴史らしい歴史がないという人もあるが、これは大いなる誤りである。

今ここに北海道の歴史を略述してみると、北海道が渡島（わたりしま）の名をもって歴史上に跡づけられたのは今から約千三百余年の遠きにさかのぼる。日本書紀によれば、奈良朝斉明天皇の四年（西暦六五八）阿倍比羅夫が北陸から秋田、津軽のエゾや渡島と沿海州のミシハセの国（黒竜江に居住したツングース種族で、その子孫が今日のオロコ族であろうと言われている）を討ち、後方羊蹄に政所（この政所の所在地が北海道のどこに当るのかはわからない）として郡領を置いたとあるのが道史のはじまりである。そして北海道のことを、よく松前とか蝦夷地とかいわれていたが、厳密にいうと松前地と蝦夷地とは異なるのである。すなわち松前地とは現在の日本海岸の松山管内熊石町までとされ、太平洋岸では渡島管内亀田町をもって境とし、その他の地域はすべて蝦夷地といわれていたのである。さらに蝦夷地を熊石から宗谷、斜里までの北西部を西蝦夷地または上蝦夷といい、亀田以东内浦湾から襟裳岬を越え、根室、国後、択捉を加え、知床半島の突端までの東南部を東蝦夷地または下蝦夷と呼ばれていた。



松前・東西蝦夷分布図

れている。いま和人の移住がいかなる形にて起ったかを考えてみるに、おおよそ次のことがいわれる。

- 一 本州における戦乱の際の落ち武者
- 二 罪人が島流しとなった者
- 三 本州にて凶作時に逃げてきた者
- 四 漂流人
- 五 商人、漁夫など出稼ぎで留まったもの

これによると白滝の地は西蝦夷地に属していたことになる。

齊明天皇の七年には、朝鮮で新羅と百済とが反目、日本は百済を助けて戦い、阿倍比羅夫も將軍として出陣、その後は西辺の防備に國力が集中されたため本道遠征は途絶えて、その後五百年あまり和人の足跡を見ない離れ島（蝦夷が島）となっていたようであるが、いつまでもアイヌ民族のみの別天地ではなかった。和人の移住、それはアイヌ民族にとっての一大脅威であったとともに、やがて輝かしい北方文化を産み出すべき第一歩でもあった。それでは和人の本道移住の始めがいつであるか——については明言しがたいが、史実の中には文治五年（一一八九）奥羽の豪族藤原泰衡が源頼朝のために滅ぼされ、その残党の渡米をもって和人移住の始めであるといわ

しかし、こうした和人の居住地も、おおむね渡島半島の一部に限られていたようである。

建保四年（一二二六）に鎌倉幕府は強盗・海賊の類五十余人を蝦夷が島に流したとの記事は吾妻鏡にも明記されており、嘉禎元年（一二三五）夜討強盗の従犯者を蝦夷が島に流すべしと定めたことによっても明らかである。

一二〇〇年ころ、津軽の安東氏が鎌倉幕府（北条義時）の代官として前後二百年にわたって蝦夷島（北海道）を管領、その支配権をにぎったが、諸施設などほとんどみるべきものはなく、和人の本道移住は徐々に行なわれていたようであるが、その居住地はおおむね松前地方のごく一部に限られていたようであった。

嘉吉二年（一四四三）安東盛季は南北朝以来の宿敵であった南部義政に追われて一族郎党とともに北海道に逃がれた。こえて享徳三年（一四五四）田名部の蠣崎氏も八戸の工藤政経に敗れ渡道した。こうして安東、蠣崎の両氏は、これより早く移住していた和人とともに、いわゆる前述の松前地を主とした蝦夷地開発の辛苦を続けていた。その根拠地は渡島半島汐首岬から厚沢部川に至る海岸数十里に及び、その間諸所に安東氏配下の砦を築き付近の人民を治めていた。この砦を館と呼び、康正二年（一四五六）蝦夷乱（いわゆるコシヤマインの乱）発生の時には、箱館（函館）など左記のごとき十二カ所の館が出来ていた。

康正二年（一四五六）コシヤマインの乱発生の時における館の所在地と館主名

館名	所在地		館主
	旧地名	現地名	
志濃里館	亀田郡銭亀沢村字志濃	函館市志濃町	小林良景
箱館	箱館市箱館山の麓	函館市	河野政通

館の所在地略図

初めのうち船をつかつてアイヌと品物の交換等を行なっていた知行主（領地主のこと）も、その後しだいに商人に請負わせ、運上金（税金のようなもの）を取るいわゆる場所請負制度を現出するに至った。この委託をうけた商人を場所請負人という。こうした場所の開設は慶広の代からはじまり、慶長年間（一五九九—一六一四）には蝦夷地の大部分に及んだといわれる。さらに宝永三年（一七〇六）すなわち場所開設二十一年後、村山伝兵衛なる人が宗谷と留萌の二場所を請負った最初の人とされている。その後時折松前藩の直営にももってこの制度が廃止されるまで百六十五年という

島調査を行なわしめ元禄御国絵図とよぶ地図を作らせているが、これらいずれも現物はなく、わずかに元禄御国絵図の模写があるのみである。しかしこの元禄御国絵図にすでに「ゆうべち」(湧別)の地名が見られることは大いなる関心事である。

さて北海道もその昔、歴史に残る大乱がいくつあった。コシャマインの乱にしても、次に記す戦いにしても、こうした大乱によって蝦夷地がそのつど脱皮し、警備、産業、経済、開拓等に一步一步前進した施策がとられたことは確かであろう。

寛文九年(一六六九)六月、日高においてアイヌ同士の間争に端を発し一部和人の砂金掘りがこれに介入、松前藩の失政に不満をいだき、和人に対する常日ごろのうっ憤とあいまって、酋長シャクシャインは各地のアイヌを扇動し大反乱をひき起した。これが世に言うシャクシャインの乱である。当時全蝦夷島を震動させたこの暴動も、松前藩の鉄砲とアイヌの毒矢との武器の相違、それと松前藩の奸策によってわずか五ヵ月後の十月末、シャクシャインが殺されるに及んで戦いはおさまった。しかしこの反乱における松前藩の武力は『津軽一統志』によ



元禄御国絵図の写し

ると「侍三拾四人、是は兵庫殿一門家の由。此外四五拾人切米取（米で俸祿を受ける武士）の由」とあるようにわずか七、八十人ほどで、これに対しアイヌ勢力は約二万人といわれ、十九隻の和船が襲撃され、二百七十人余の和人が殺害され壮烈きわまる大乱であった。かくて松前藩の支配力はこの大乱を契機として、にわかに強化されたのであるが、いかにせん、こうした松前藩に対する不信の空気は容易におさまらず、その後寛政六年（一七九四）に起った国後、日梨の乱も一地方における争乱であったが、蝦夷地の不安な政情が暴露され、これら内外情勢の緊迫なさまを幕府も黙視できず、松前藩による蝦夷地統治を取上げ、寛政十一年（一七九九）一月、東蝦夷地を直轄し、良好な成績に自信を強めた幕府は文化四年（一八〇七）三月、西蝦夷地を直轄統治するようになった。この間、幕府はアイヌの懐柔に重点をおき、農林水産業の奨励、計量の適正化、アイヌ古来の風習の改善等、進んで救護の手をさしのべる策をとった。かくして幕府は松前に松前奉行所を置き、全島主要地に幕府の官吏を配属しこれが警備と統治にあたらせた。しかしこの幕府の施策は必ずしも適切であったといえないがアイヌとの交流も好転し、蝦夷地の経営にも光明が見えたので、文政四年（一八二一）十二月、幕府は松前藩（藩主・松前章広）に対し松前・蝦夷地の全島を返還したのである。この松前藩復領の経営は三十三年と三月にわたったが、北辺防衛が急務となって安政二年（一八五五）二月、幕府は松前藩に対し松前地方の一部を松前氏の所領として残し、その他は全島ごとく（樺太・千島もふくめて）松前藩より引上げ再直轄して、箱館奉行所に委任し、沿岸防備の強化と本道奥地の開拓に力を注ぎ、明治改元までの十三年間支配し、やがて明治の夜明けとなったのである。

すなわち幕府直轄の時の方針に似ているがさらに進んだもので、第一にアイヌをなづけることに意を注ぎ、不

正な事のないようにし、アイヌに天然痘流行時にはあまねく種痘を施し、第二に警備については安政二年（一八五五）南部、津軽、仙台、秋田、松前の五藩に、そして安政六年新たに会津、庄内の二藩を加えてそれぞれの持場を分割警備させた。第三に西蝦夷地海岸の難所および東西連絡道路の開削、海岸には帆船も配置し交通の便をはかった。第四に拓地殖民については、幕府旗本の有志や浪人等に手当を与え、処々に移住させ、農民を募り一般に移住を奨励し、これまで神地として禁じていた積丹半島神威岬の婦人の通行を許した。第五に産業の奨励に努め灌漑・排水両溝の開削には資金を貸付けし、馬鈴薯の買上げを行ない、牛馬羊豚飼育の奨励、漁獵の許可、釧路の開発等に意を注ぎ、農産業開拓の助けをなしたのである。

かくして北海道開拓の土台はすでにこのころより築きあげられていったといつてよからう。

第二章 明治時代

わが国の政權は慶応三年（一八六七）十月十五日、王政復古の命のもと、三百年にわたって政權を握っていた徳川幕府（將軍・徳川慶喜）も、ついに大政を奉還し、天皇を中心とする維新政府に移され、蝦夷地の行政もおのずから幕府の手を離れ明治新政府に帰属することとなった。翌四年四月、政府は北門の防衛、拓殖の重要性を認めて清水谷公考（しみずやこうこう）を蝦夷地の總督に任命、箱館奉行所は廃止となり行政官庁としての箱館裁判所が五月一日に開設され、同年七月十七日付告示をもって箱館府と改められ、總督も知事と改称された。

かくて慶応四年九月八日この日より「明治」と年号が改められた。

それから間もない十月、新政府のやり方に不満をもった旧幕臣の榎本武揚らの率いる幕府脱走軍のために箱館その他を占領されたが、翌明治二年五月、政府の鎮圧によって武揚らは降伏、反乱は全く治まった。政府はこの反乱によって中断されていた蝦夷地の開拓事業を強力に推進するため、同明治二年七月八日「開拓使」を設置、前佐賀藩主鍋島直正が初代長官に、箱館府知事であった清水谷公考は開拓次官にそれぞれ任命された。

この時十六歳の年若き明治天皇は「蝦夷開拓は皇威降替の関する所、一日も忽にすべからず」とのご下問があり、「他日皇威を北疆に宣る、汝が方寸の間にあるのみ」と激励された。

ところが鍋島長官は病身かつ高齢を理由に明治二年八月十六日辞任するが、これよりさき蝦夷地の地理に精通した松浦武四郎の提案により、蝦夷地の新名称に「日高見」「北加伊」「海北」「海島」「東北」「千島」の候補名が仮案として出され「北加伊」がとりあげられたが、結局武四郎の意見を採用して、北加伊が「北海道」と変容した。また同時に道内を渡島七郡、後志十七郡、石狩九郡、天塩六郡、北見八郡、胆振八郡、日高七郡、十勝七郡、釧路七郡、根室五郡、千島五郡の十一国八十六郡の国郡に分けその名称を確定した。——明治二年八月十五日のことである。

鍋島長官退任のあと若干日時の空白があったが、同二年八月二十六日二代目長官として東久世通輔（あきよしみちのり）が任命され、九月二十五日各幕僚を従えて箱館に赴任、その翌二十六日開拓使から「此の度蝦夷地一円を北海道と称する」旨の触れ書



開拓使仮庁舎（『北海道百年』より）

が公布され、ここに道名と国郡が誕生、本道開発の端緒が開かれようとしたのである。しかして北見國は宗谷、利尻、礼文、枝幸、紋別、常呂、網走、斜里の八郡で、当地方は紋別郡に属したことになる。

国郡が決定されたが、開拓・国防等具体的施策の定まっていなかった政府は全道を統治するのに困難を感じ、主要地を開拓使直轄としたほかは幕府時代にならって諸藩に分割付与となったが、いずれの藩も積極的関心を示さず、藩の財政が窮乏してきてまもなく返上を申し出る藩が続出するに至った。

紋別郡には和歌山藩にその支配を命じたが、開拓の手を染めず渡道せずして明治三年八月早くも返上とあいなり、名目だけの支配が終ったが、この間、開拓使函館使庁産物掛の所管に一時おかれ、ついで明治三年七月開拓使宗谷出張所の管轄に移った。

明治時代の藩領

北		見		国	
紋	常	網	斜		
別	呂	走	里		
和歌山藩	宏島藩		名古屋藩		
		奉命			
		明治二年九月			
				明治二年六月罷免	
				明治三年十月罷免	
				明治三年八月罷免	
				明治五年九月十四日 根室支庁管轄となる	

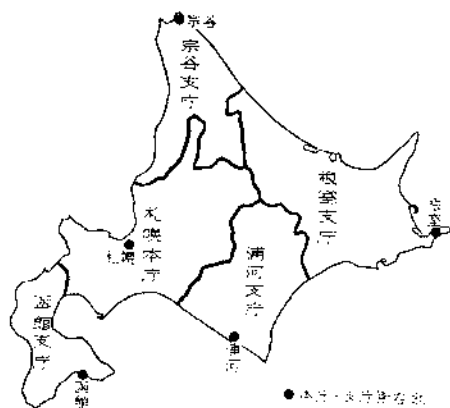
開拓使庁札幌に移る

東久世開拓使長官赴任の折「石狩に北海道本府ヲ建ツベキ経営ヲ為ス事」との所信にのっとり島義勇首席判官にその経営の主管をまかし、札幌に庁舎敷地を区画し明治二年十一月工事着工、途中岩村判官との交替もあったが明治四年四月開拓使仮庁舎が竣工、東久世長官は函館から札幌に移り、同四年五月開

拓使庁は正式に函館から札幌に移り、翌五年九月には「開拓使札幌本庁」と改称され本道行政の中心地として発足したのである。

さて、北海道の開拓行政の中心として石狩の地に目を向けたのは、あえて東久世長官のみならず、遠く文化四年（一八〇七）幕府の命令で蝦夷探検を行なった近藤重蔵がその復命書の中で「蝦夷第一等の枢要な地石狩」（『北海道百年』上巻より）と述べ、首府は石狩平野内であっている。さらに安政三年（一八五六）から三年間、蝦夷地を踏査した松浦武四郎らのごときは「札幌が函館にかわる首府の地として最も適當」（『北海道百年』上巻より）と函館奉行所に献言しているのをみても、開拓使本庁舎札幌建設は当然の理といえよう。

行政区域の制定 明治四年十二月、全道の行政区域を六部に区分される大改革が行なわれたが、これによって開拓使宗谷出張所に属していた紋別郡は、明治五年一月釧路国、千島国、根室国標津、目梨の両郡および、北見国斜里、網走、常呂、紋別の各郡とともに開拓使根室出張所に移され、同五年九月、六郡そのまま本・支庁の区域とされた。すなわち札幌開拓使庁を札幌本庁と改め、函館・浦河・根室・宗谷・樺太の五支庁が設置され、紋別郡はおのずから開拓使根室支庁の管轄下となった。その後、浦河支庁は明治七年五月、宗谷支庁はのち留萌支庁と改められたが明治八年三月それぞれ廃止



拓使行政区域図（明治5年9月現在）

され札幌本庁の所管に入り、同年十一月樺太支庁も廃止され、結局札幌本庁と函館・根室の二支庁となった。

村名の決定

開拓使根室支庁は明治五年三月に管下各部の村名を定めた。すなわち紋別郡管内における村名は、モンベツ村（紋別村）、モーベツ村（藻鑑村）、ルトチ村（増稼村）、シヨコツ村（渚滑村）、ヲコツベ村（興部村）、ホロナイ村（幌内村）、サワキ村（沢木村）、ラム村（雄武村）、サルル村（沙留村）、ユウベツ村（湧別村）（注・明治八年五月管下一斉に村名が漢字に改められた）の十カ村で、明治五年の『紋別郡旧十人戸籍簿』によると、戸口は十カ村で九十七戸三百八十二人となっており、いわゆる村という觀念とは相当へだたるものがあつたといえよう。

明治五年四月、はじめて根室支庁は管内に戸長をおいたが、これは戸籍法の制定にともなう全国的措置のもとに行なわれたもので、本州府県は別として、本道における戸長の人選は多く漁場持差配人に兼勤が命ぜられ、紋別郡の戸長には常呂郡も兼ねて盛田辰蔵が任命されたが、盛田は藤野伊兵衛漁場の差配人であり戸長でもあつたことになる。戸長の職務は戸籍調査、官令の伝達、生活困窮者の保護等行政諸般にわたるものであつた。しかし盛田は戸長の職務を利用し横暴な行動が多くなったため免職となり、明治八年七月ごろ竜田治三郎が新しく任命されることとなった。

明治九年九月、本州府県より約五年おくれて開拓使布達をもって、北海道も大小区制を採用、これによって全道を三十の大区に分け、大区の下に百六十六の小区を設けた。紋別郡十カ村は第二十七大区第四小区と呼ばれるようになった。こうした区画の統一によってこれまでより一層中央集権の強化を目途としたのであつたが、実際にはかえって行政諸般にわたって円滑を欠く結果となり、明治十一年七月「郡区町村編成法」が公布されるに及

び翌十二年七月従来の大小区制が廃止され、郡区制による郡役所が置かれ郡役所には郡長を、その下に新しい組織による戸長役場を設置することとなり、札幌・函館に区役所を、道内十八ヶ所に郡役所を設けた。根室支庁管内における郡役所は根室・厚岸・振別・網走の各所で、網走郡役所の管轄区域は網走・斜里・常呂・紋別の各郡で、網走・常呂の両郡には戸長をおかず網走郡長がこれを兼務し、斜里郡は斜里村に、紋別郡は紋別村にそれぞれ戸長役場をおいた。これら郡役所および戸長役場の開庁は明治十三年七月で、初代網走郡長に岸本門藏、紋別村外九ヶ村の初代戸長に滝田治三郎が官選によって任命されたのである。かくして戸長に与えられた職務権限は、これまでより大幅に拡大され、既述の戸籍調査、官令の伝達のほか、徴兵下調、幼童就学の事、酒税の徴収、印影法の作成等その他諸般にわたるものであった。

開拓使の廃止

明治二年七月に設置された開拓使は、北海道開拓のため年次計画によってその開発も、紆余曲折はありながらも積極的に促進せられたため、本州の府県制度にならって北海道も明治十五年二月開拓使を廃止し県制をしき、これまでの本・支庁管内をそのまま函館県・札幌県・根室県の三県とする布告が発せられた。紋別外九ヶ村はこれまでと同様、根室県の管轄下となった。また政府は一年後の明治十六年一月、旧開拓使の官営事業を統括する北海道事業管理局を設け、この制度が廃止される明治十九年一月までを俗に「三県一局時代」と呼んでいた。根室県令（知事）には湯地定基が赴任、紋別戸長滝田治三郎は改県後も引きつづき留任していたが、明治十五年十月半沢真吉が二代目紋別戸長として着任した。

新しい衣を着た北海道の県制は期待をもって施行されたが、しかし開拓行政にはさして進展がみられず、むしろ開拓事業が渋滞ぎみとなり、これがため時代に即応した道庁設置の気運がたかまったのである。

北海道庁の設置

明治十九年（一八八六）一月二十六日、北海道庁が設置され、開拓使判官であった岩村通俊が初代長官に任命され、同年三月より開庁、当初函館・根室の両支庁をも置いてみたが成果があらず、事務の簡素化に努めるため道庁の機構を改革し、まもなくこれを廃止して道庁と郡区長とを直結する一体化方式を取り、これがため郡区長に警察署長を兼任させ、各町村戸長役場内に警察分署を併置、戸長は分署長となり、行政と警察とが一体となった施策がとられた。

明治二十一年六月、屯田司令官水田武四郎が北海道長官を兼務してより、忠別太（現・旭川市）より石北国境を横断し北見・網走に至る道路の開削が、北海道奥地の開発にまこと重要かつ急を要する事業であることを説き、ただちに計画を立て明治二十二年実地測量完了、つづいて工事に着手、二十四年十一月全工程を竣工、殖民道路として北海道開発に大きな役割を果たした。世にこれを中央道路と名付けた。（注・中央道路については「道路交通の章」に詳述す）。

明治三十年北海道では、行政上これまでにない進歩的な大改革が行なわれた。すなわち北海道庁設置後道内の開拓は屯田兵の活発な導入とあいまってことのほか進み、これがため郡役所による地方行政は日に増し不便を感じ、同三十年五月勅令による北海道区制、北海道・二級町村制が公布され、同年十月郡役所を廃して、十八の支庁を置き、従来行なわれていた行警一如の機構も改め、行政と警察業務を全く分離してしまった。かくして明治三十二年十月札幌・小樽・函館に区制がしかれ、翌三十三年七月亀田郡大野村など十六ヵ町村が一級町村制、同三十五年四月には右符町など六十二町村に二級町村制を実施、また一、二級町村として適用されない町村については戸長制度が継続された。このようにして北海道の自治制度も少しずつ前進をみせはじめたのである。

第三章 湧別村時代

北海道庁の設置によって拓殖行政は、これまでにない積極性がみられ、行政の統一化にもとづく警察と行政の分離、教育制度の充実、土地処分方式の改善等、なканずく開拓移民の誘致に欠くことのできない殖民地選定事業と区画測量の実施は、全道各原野の奥地にまで施行されるに及んで、北海道開拓の基盤が固められたといえよう。こうして明治十九年の道庁設置後まもなく、開始された選定事業は、明治二十二年に至り湧別原野も殖民地に選定され、こえて同二十四年には区画測量が行なわれ、さらに翌二十五年には湧別原野基線道路も完成されて開拓移民の求住が日に増し多くなるようになった。なお、湧別原野は明治二十六年十二月殖民地として貸付告示がなされ、古来漁業によって開拓の端を発した湧別も翌二十七年から本格的な入植が始まったのである。すなわちこの年高知団体、広島団体、翌二十八年には札幌農学校農芸科伝習卒業生の団体、高知、徳島の両団体、さらに渡辺精司、横沢金次郎などが主軸となった五十余戸の移住等、海路陸路よりあいついで入植が行なわれたのである。かくするあいだに、すなわちこの年三月湧別兵村の設置が決定したのである。今日なお白滝にも湧別兵村出身の二世、三世が数多く居住し、白滝の地にもこれまで屯田兵のたくましい開拓魂がしみこんでいると思われるので少しく屯田兵について述べると、『屯田兵の開拓は主として西郷隆盛の企画主張であつて、明治四年に行なわれた廃藩置県によって生じた失業武士の授産策として起つたものである』（『新撰北海道史』）と当時の開拓使判官松本十郎が述べているように、このころより北海道警備開拓屯田兵の構想が練られていたと思われる。その

後明治六年十二月、開拓使次官黒田清隆が北海道防衛、人民保護、規律ある集団開拓等を訴えた「屯田兵創設建白書」を政府に提出、これが契機となって明治七年十月屯田兵例則が制定され、ここに北海道の屯田兵制度が発足したのである。すなわち屯田兵は兵事と農業とを兼ねる一種の兵制であつて、平時は農業その他に従い、事ある時は兵として働かせることを義務づけていた。かくして明治八年琴似村に入地した屯田兵二百八戸を最初として、毎年強力な募集によつて北海道各地に移住が行なわれたのである。今ここに屯田兵の移住状況を列記するに、

屯田兵の移住状況

移住地	兵村名	戸数	移住年
札幌郡琴似村	琴似	二四〇戸	明治八年、九年、二十年、二十一年
山鼻村	山鼻	二四〇戸	明治九年
琴似村新琴似	新琴似	二二〇戸	明治二十年、二十一年
篠路村	篠路	二二〇戸	明治二十二年
江別村野幌	野幌	二二五戸	明治十八年、十九年
江別村	江別	二二〇戸	明治十一年、十七年、十九年
室知郡沼貝村美唄	美唄	一六〇戸	明治二十四年、二十五年、二十六年、二十七年
沼貝村高志内	高志内	二二〇戸	明治二十四年、二十五年、二十六年、二十七年
沼貝村茶志内	茶志内	二二〇戸	明治二十四年、二十五年、二十六年、二十七年
滝川村	滝川	四四〇戸	明治二十一年、二十三年
沼貝村江部乙	江部乙	四〇〇戸	明治二十七年
雨竜郡深川村秩父別	秩父別	四〇〇戸	明治二十八年、二十九年
深川村一巳	一巳	四〇〇戸	明治二十八年、二十九年

南竜郡深川村納内	納内	二〇〇戸	明治二十八年、二十九年
上川郡永山村	永山	四〇〇戸	明治二十四年
当麻村	当麻	四〇〇戸	明治二十六年
旭川町東旭川	東旭川	四〇〇戸	明治二十五年
室蘭郡輪西村	輪西	二二〇戸	明治二十年、二十二年
厚岸郡太田村	太田	四四〇戸	明治二十三年
根室郡和田村	和田	四四〇戸	明治十九年、二十一年、二十二年
常呂郡野付牛村	野付牛	五九五戸	明治三十年、三十二年
紋別郡湧別村	湧別	三九九戸	明治三十年、三十二年
上川郡剣湧村	剣湧	三三七戸	明治三十二年
上川郡上別村	上別	九九戸	明治三十二年
合 計	二十四兵村	七三三七戸	

右表によってもわかるように、明治三十二年入地の上別、剣湧両兵村が最終兵村となったが、これまでに二十四兵村、七千三百三十七戸、家族を合すると三万九千九百十一人に及ぶ大規模なものであった。(注・昭和十二年農村厚生協会より発行の『北海道調査報告』に発表された「北海道の概況」より推測するに、明治三十二年における北海道の戸数は約十七万六千戸、人口約八十九万人とみられ、これによると屯田兵の比率は戸数において約1/24、人口においてはおよそ1/22と考えられ、当時としてはいかに屯田兵族の多かりしことがうかがわれる)。こうした兵村はすべて開拓使の手によって建設され、屯田兵とその家族には兵村地までの旅費と家屋が支給されたうえに、農具、夜具(大人にかけ、しき二枚、子供にかけ一枚)、家具、種子までも用意され、さらに三年間つづけ

て米、みそが無料配給、そのうえ土地を開墾すれば一〇坪について二円ずつの開墾料が支給されたなど手厚い保護が加えられていた。土地ははじめ一戸につき五千坪と定められていたが、農業の進捗に従いその後一万坪となり、さらに明治二十三年九月以降、兵、一万五千坪、下士、二万坪を給与せられることになっていった。

屯田兵たるものの資格は、当初すべて士族に限られていたが、明治二十三年八月屯田兵条例の改正によって、それ以後士族と平民の区別がなくなった。また年齢においてははじめ十八歳から三十五歳までとしたが、明治十八年には十七歳以上三十歳以下とし、さらに明治二十三年十一月以後においては十七歳以上二十五歳と改定した。また兵役義務年限は当初世襲制度であったものが、その後兵役義務の期間が採用されたが屯田兵例則の改正のつど義務年限等も変り、結局現役は五年間、後備役は十五年間となり、湧別兵村の屯田兵も明治三十六年三月現役解除となった。次に屯田兵の部隊編成についてのべてみると、五名を一伍、六伍（三十名）を一分隊、四分隊（百二十名）を一小隊、二小隊（二百四十名）を一中隊、二中隊（四百八十名）を一大隊、三大隊（千四百四十名）を一聯隊となっており、これに特校等が加わるため一大隊の総数は五百五十七名、一聯隊は千六百七十二名といわれていたが、後に若干部隊編成の変更があったもようである。なお、湧別兵村は第四中隊・第五中隊という名称がついた。これら屯田兵の指揮監督は、初めは開拓使の屯田兵事務局が行ない、ついで屯田兵司令部となったが、明治二十九年五月第七師団を創設せらるるに至って、同年十一月屯田兵司令部は全く第七師団に合併せられ、指揮監督権もおのずから師団司令部に移った。第七師団が出来たことによって、明治三十年ごろより屯田兵の募集を縮小し、明治三十三年をもって募集を中止、明治三十六年四月現役兵が皆無となるとともについに廃滅の運命にあい、この時をもって屯田兵制度は廃止となった。

さて湧別兵村設定がきまるや屯田兵村予定地も指定され、明治二十九年の春から樺音高く湧別兵村の建設工事が開始された。翌三十年春には屯田兵が入地することとなっていたので、それまで兵屋の建築、将校等の官舎、各中隊本部、それに付随する土木工事等きわめて膨大な諸工事を遂行することとなった。そのため大工をはじめとし各種労働者があいついで入村し、工事完遂の手助けとなった。『湧別兵村誌』には当時の状況を「爰ニ於テ工事関係ノ官民一時ニ去来シ又憲兵巡査ノ巡邏警戒スルアリテ森閑寂寥タリシ湧別原野ハ天地一変シテ人馬ノ往来繁ク忽チ喧囂雑沓ノ巷ト化シセリ」と述べており、工事人の多かったことをうかがい知ることができる。建設工事は昼夜を分たず突貫作業で行なわれたが、一部工事の未完成のまま明治三十年五月第一陣屯田兵とその家族二百戸の集団入地が行なわれた。つづいて翌明治三十一年九月第二陣百九十九戸が入地、合計三百九十九戸の兵村が誕生し、ただちに開拓に、そして治安の維持に、兵農一如の生活が始まったのである。

またこれよりさき明治三十年五月信田寿之らが中核となって創立された北海道同志教育会学田農場（現・遠軽）に三十戸ばかりの小作人が主として新潟県より集団移住し来たり、湧別原野は目を追うて人煙も増加し、これにともなうて紋別戸長役場の行政範囲もますます広域化し、地域住民のあいだより湧別分村を望む空氣がただよいはじめた。こうしたことから明治三十年六月の道庁告示で紋別村外九カ村戸長役場から湧別村の分離が決り、湧別村戸長役場を湧別浜に設け、同三十年七月十五日開庁、同日付をもって小池忠告が初代戸長として発令された。行政区域は現在の湧別および上湧別、遠軽、生田原、丸瀬布、白滝の六カ町村であった。

当時白滝にはまだ一人の入植者もなく、わずかに八号（上白滝）に駅逓取扱人が定住しているのみであった。また湧別兵村は車部に所属していた関係上、戸籍事務、地方費戸数割の徴収事務以外は戸長の権限外とされて

いた。

なお、紋別村外九カ村における湧別村以外の分村状況は、明治三十三年七月に雄武村、沢木村、幌内村、興部村が分離して雄武村外三カ村戸長役場が雄武村に誕生、同年十一月には落濤村が分村、明治四十二年五月興部村は併合のため紋別から分離された沙留村、増穂村を合併し興部外二カ村戸長役場として、雄武村戸長役場から分れて独立、時を同じくして藻鑑村が紋別村に編入され紋別村となり、五カ村となったのである。

湧別村の独立分村により戸長も就任、総代人制度に従いおのずから規定の総代人も「総代人選挙法」にもとづき選出され、ここにおいて村政の第一歩が住民よろこびのうち順調に始まったのである。また屯田兵は既述のごとく明治三十一年全道的に適用となった徴兵令と本道拓殖の意外に早い進展等が因となり、明治三十六年四月をもって屯田兵制度の解除となり、当然これまでの屯田兵も湧別村の村民となり村政下におかれたのである。

こうした歳月の流れる中であつて芋田農場に第二次、第三次の集団移住あり、小学校や各宗寺院の創立もあり、医院の開業、網走警察署湧別分署、芋田に三等郵便局等の設置、生田原、芭露、野上などにも入植者が目立ち、人口も七千人を優にこえる大村落となつていった。このため認められて明治三十九年四月一日戸長制度を廃止し、二級町村制が施行され、ここに湧別村が二級町村として衣がえしたのである。これにともなつて従来の戸長から村長と名称が変り、初代村長には雄武外三カ村戸長の佐藤信吉が同日付で就任、収入役制度もはじめて設けられることとなり、同年九月藤島倉蔵が初代の収入役として村会において選任された。また総代人も村会議員に改称され、「村会議員選挙法」にもとづいて議員の定数を十二名と定め、明治三十九年六月初の村会議員選挙が施行され、住民代表の議員が選ばれて議決機関の村会制度が誕生した。

明治三十九年湧別村二級町村施行第一日目の財政決算状況を『上湧別町史』より引用するに、歳入総額一万四千百二十八円十一銭となっており、歳出中特に目をひくものは、教育費の七千三百七十四円で歳入の約五六割にもなり、これはあいつぐ移住民の増加によって、学校、教授場の建設が支出を大ならしめたものと思われる。

二級町村としての第一回村議会は明治三十九年七月二十三日から二十九日までの一週間開かれていたことが記録によって知ることができるが、この初議会に予算の審議はもちろんのこと、村内の区域を二十部落に分割しおのおの部落に部長を置く部長規則が決議された。

当時の湧別村の総面積は現在の六カ村、およそ一、八四〇平方^{キロ}と推測されるまことに広大なもので、四国香川県に匹敵するほどの広域で、北見峠を通過して湧別浜市街まで至るのになんと途中四泊もしなければ目的地に着かない、と当時の旅人の語り草となっていた。このことは初議会において村内を二十の部落に分割したことによってもうかがい知ることができる。また芭露原野をはじめケロチ、イクタラ、サナフチ、フミ、白滝の各原野が殖民地として開放されるに及んで入植者が増加し、明治四十二年には、二千九十四戸、一万四十二人と湧別村は大きくふくれあがっていった。こうした奥地開拓のすむにつれて行政用務の支障は住民の不満のタネとなった。村議会においても住民の声がとりあげられ、意見書が提出されて分村問題が表面化したのである。

明治二年開拓使の設置により蝦夷地が「北海道」と命名され、郡名も決り紋別郡が誕生、爾来行政をあずかってきた関係戸長、村長らは次のとおりである。

監督庁名称	職名	行政区域	氏名	就退職年月日	備考
開拓使設置					明治二年七月紋別郡誕生

開拓使	使	紋別	和歌山藩	自明治二年九月至明治三年八月	和歌山藩支配
開拓使函館使庁	紋別郡	等	函館使庁産物掛	明治二年十月	同上産物掛の管理下となる
開拓使根室支庁	右	根室	支庁	明治四年十二月	根室支庁の管轄下となる
開拓使根室出張開拓使庁	日長兼漁場支配人	常呂	盛田辰藏	自明治五年四月至明治八年七月	
開拓使根室支庁	副総代	右	竜田治三郎	明治八年八月	
右	同	斜里・網走・常呂・紋別の四郡	川畑又三郎	自明治十一年十一月至明治十三年六月	
開拓使網走郡役所	初代戸長	紋別村外九ヶ村	竜田治三郎	自明治十三年七月	明治十五年二月根室稟管轄下となる
根室稟網走郡役所	二代戸長	右	同	自明治十五年十月至明治十八年四月	
右	同	三代戸長	同	自明治十八年七月	前斜里郡各戸長
北海道庁網走郡役所	四代戸長	同	野崎政長	不詳	美幌外五ヶ村戸長に転任
右	同	五代戸長	同	自明治二十年	
右	同	六代戸長	同	自明治二十五年九月	退官
右	同	七代戸長	同	自明治二十七年六月	
右	同	八代戸長	同	自明治二十八年五月	
北海道庁網走支庁	初代戸長	同	高橋重郎	自明治二十九年十二月	右
右	同	同	同	自明治三十年七月	同
北海道庁網走支庁	初代戸長	同	小池忠告	自明治三十二年三月	紋別戸長役場より
右	同	同	同	自明治三十三年六月	

右	同 三代戸長 右	同 岩橋 佐吉	自明治三十三年六月 至明治三十六年七月
右	同 四代戸長 右	同 石川 正之助	自明治三十六年七月 至明治三十九年三月
右	同 初代村長 右	同 佐藤 信吉	自明治三十九年四月 至明治四十年四月
右	同 二代村長 右	同 兼重 浦次郎	自明治四十年五月 至明治四十三年五月
		斜里村戸長より	

第四章 上湧別村時代

屯田兵制度の解除によつて兵村民の村政に対する発言権が認められ、総代人制度が村会制度になつて、最初の村會議員選挙に定員の半数以上が兵村選出の議員によつて占められるや、役場位置變更等に端を発する既述の分村問題が胎動しはじめた。明治四十年三月三十日の村議會において兵村選出議員を主体とする七人の人々によつて「湧別村役場位置變更新築ノ件」という意見書が提出された。この意見書は議題のごとく村民の利便にかんがみ、老朽庁舎の新築とあわせて適當の地に移転をこいねがう主旨で、同日満場一致をもつて可決されたが、理事者の政治的配慮等により実現されず一年余の歳月が流れた。この間に佐藤村長と更迭した兼重村長は、明治四十一年五月の村議會で役場移転の位置とその財源などについて議員に諮問を行なつた。その骨子は、

- 一 現在ノ位置ニ於テ改築（議事堂ト設備）スルトセバ其経費財源如何。若シ経費ヲ寄付スル者アリトセバ其金員概額寄付者ノ氏名

- 二 移転新築スルトセバ之ガ適當ノ位置如何。若シ敷地ヲ寄付スルモノアリトセバ其線番号反別寄付者ノ氏名

三 移転新築スルトセバ其経費ノ財源如何。若シ位置ハ何レトナルモ移転新築費ヲ寄付スルモノアリトセバ其金員ノ概額寄付者ノ氏名

四 現在ノ位置ニ於テ改築若シクハ他ニ移転新築ヲ為ス費用ヲ村民ノ負担ニ待ツトセバ事業経費年度及負担ノ難易。

五 現在ノ位置ト移転新築希望地トノ距離人民便否海運陸運及通信機關関係等具體的ニ詳述ノコト。

以上五項目にわたるものであった。この諸問の結果、役場位置の選定について議論百出したが、こうしたなかにも移転を希望する議員が圧倒的で、現在地建設を固執する少数議員と対立し、はては「分村ヲナシ適當ノ位置ヲ得ルモ考慮ノ余地アラン」と強硬な意見も飛び出し、答申の出来ぬまま内在していたが、まもなく再燃しはじめ、移転問題から分村問題にと飛躍し多勢の声が反映されて、翌四十二年三月の村議会において分村の議決がなされ、ただちに必要な諸手続がなされ、明治四十三年四月一日をもって湧別原野基線六号線を境として、それ以南を上湧別村とし、母村を下湧別村と称し、両村ともに二級町村制がしかれ、ここに新しい「上湧別村」が誕生したのである。北海道庁告示に次のとおり発表された。

北海道庁告示第二百二十八号

北見國紋別郡湧別村ヲ分割シテ上湧別村ヲ置キ明治四十三年四月一日ヨリ施行ス。其湧別村ト上湧別村トノ境界左ノ如シ但シ、区域図ハ両村関係役場ニ備置ク。

明治四十三年三月二十八日

記

北海道庁長官

「バロー」川水源嶺ヨリ北方「バロー」川ト「イクタラ」川及湧別川本流トノ分水嶺ヲ下リ湧別区西東五線十号ニ出テ、河線ヲ下リ六号ヨリ左折シテ直線西八線ニ至リ、更ニ右折シテ九号ヨリ「シニブノツト」ニ注入ノ無名川ト「フミ」川間ノ山脈ヲ登リ「シニブノツナイ」ノ水源嶺ニ至ル。



上湧別村初代村長
兼重浦次郎

かくのごとく境界が決り、行政区域は現在の上湧別、遠軽、生田原、丸瀬布、白滝の五カ村、一、五二六平方キロメートルに及ぶ相変らずの広域であった。告示とともに初代村長として兼重浦次郎が下湧別村長兼務で発令、明治四十三年五月二十五日付で上湧別村の専任村長となり、役場庁舎も屯田市街に新設、新機構のもと村民よろこびのうちに村政がつづけられた。分村によって当然のことながら村会議員選挙も行なわれ、議員定数十二名の分村初の村会議員が明治四十三年六月二日の選挙で公選された。すなわち、鈴木峰次、早川国次郎、清水藤次郎、新国覚次郎、中川孫四郎、相羽静太、樺沢金八、福田甚吉、菊地勤、野口芳太郎、奥原義徳、菊地明十郎。

議員の任期は二年であるが、この任期中、早川、新国、菊地勤の三議員退職により、福田仙次、沢口作一、野田清次郎の三名が補欠選挙によって選ばれた。こうした初代村議の顔ぶれを見るに、当時入植稀薄な白滝、丸瀬布部落よりの選出者はいなかったが、やがて白滝二代目の郵便局長となった鈴木峰次と、紀州団体長植芝盛平の顔がみられるようになった。

第二回村議会選挙は明治四十五年六月に施行され、この中にのち初代の在郷軍人白滝分会長（正式名称は遠軽村在郷軍人西分会）永山千嘉治の姿もみられる。こえて第五回村議会選挙が大正七年六月に行なわれたが、この時の選挙に白滝の植芝盛平が当選、白滝選出初の議員となった。

選挙権は現今のそれとは全く異なり、二十五歳以上の男子でしかも戸主にかぎられ、かつ直接国税五十銭以上

の納税者、耕地一町歩あるいは宅地百坪（三・二町）以上の所有者であることが条件となっていたため、有権者の数は全住民の一部にすぎなかった。だが選挙運動は古老の話によると、まことに開放的で、買収・供応の運動は至るところで始まり、自分の投票を他人に委任することも許されたので、その委任状集めでおおよその当落が決した。また有権者自身も往復に歩いて一日も二日もかかるほど遠い投票所へ選挙に行くより、応分の金品をもらって行かぬほうが得策であるとして委任する者もかなりあったと語ってくれた。

なお、これよりさき兼重村長は明治四十三年五月五日付にて上湧別村告示六号を出し、上湧別村村長規則を設定し、全村を左の十四部に分ち、各部に部長一名を置いて行政施行の円滑をはかった。

名称	区	域	部長名	備考
第一部	上湧別村字兵村元五中隊三区八号線以北		前田良助	
第二部	字兵村元五中隊二区八号線以南		芥川須三郎	
第三部	字兵村元五中隊一区		早川国次郎	
第四部	屯田市街地及旧本部		樺沢金八	
第五部	字兵村元四中隊三区及五富美		野田清次郎	
第六部	字兵村元四中隊二区		高橋五三郎	
第七部	字兵村元四中隊一区及三開盛橋マデ		穴田助太郎	
第八部	上湧別村字字田湧別川以北		奥泉義徳	(遠軽市街、字用)
第九部	字字田湧別川以东及ビドイタラ		高嶋権作	(向遠軽)
第十部	字社名淵		河部保栄	
第十一部	字向野上		相田高藏	
第十二部	中央道路角橋ヨリ以西国境ニ至ル		中沢勝	(野上から白滝まで)

第十三部 上湧別村中央道路角橋ヨリイタタ原野境ニ至ル 村 上 源太郎（生 野）

第十四部 ク 字イタタ原野一円 野 田 芳 松

如上の区域を定めて第一步を踏み出したものの、上湧別全村広域にわたって日に月に移住者の増加が目立ち、遠軽分村の大正八年までに毎年一部ないし数部の分割増部を行ない三十一部の部制を置くに至った。その改定結果を列記すると、

第一部 北兵村三区、第二部 北兵村二区、第三部 北兵村一区、第四部 屯田市街、第五部 南兵村三区、第六部 南兵村二区、第七部 南兵村一区、第八部 遠軽市街、第九部 向遠軽、第十部 上社名測、第十一部 向野上、第十二部 瀬戸瀬、第十三部 生野、第十四部 上生田原、第十五部 富美、第十六部 学田、第十七部 白滝（大正二年二月部落独立、初代部長植芝盛平）、第十八部 開盛、第十九部 奥生田原、第二十部 丸瀬布（大正三年二月部落独立、第二十一部 野上、第二十二部 支湧別（大正四年三月部落独立、初代部長三石音次郎）、第二十三部 下社名測、第二十四部 武利、第二十五部 上白滝（大正四年三月部落独立、初代部長倉橋伝三郎）、第二十六部 下生田原、第二十七部 奥白滝（大正五年三月部落独立、初代部長岸利七）、第二十八部 西生田原、第二十九部 上瀬戸瀬、第三十部 上支湧別（大正六年三月部落独立、初代部長三石音次郎）、第三十一部 旧白滝（大正七年二月部落独立、初代部長新保国平）である。このことにより、往昔の白滝は丸瀬布より早く開拓移住者の入地を見、部落構成がなされたことをうかがい知ることができる。

遠軽村の分村 かくして歳とともに各原野の開発が進み道路も開削あるいは改良されるや、入植者も急速に伸び、奥地開発のための造材事業が活発をきわめ、遠軽、生田原、白滝方面の人口が急増しはじめた。当然のこ

とく住民のなかより分村を望む声がちあがり、大正二年六月の村議会において左記のごとく意見書が提出された。

分村に関する意見書

時運ノ進歩ハ駁々平トシテ停止スル所ヲ知ラズ、町村行政ノ事タルモ亦世運ノ発展ニ伴ヒ共ニ駢進セザル可カラザルナリ。尙、本村ノ現況ヲ顧ルニ区域広闊、地味肥沃、氣候亦温良ニシテ克ク農耕ニ適スルヲ以テ近時、移民ハ日ニ月ニ著シキ趨勢ヲ以テ増殖シ、今ヤ二〇〇〇有餘ノ戸數ヲ有スルニ至ル。寔ニ長足ノ發展ト謂フベシ、殊ニ本村字字田以南ノ開発ハオドロクニ堪ヘタリ。然ルニ該方面ニ於ケル行政事務ハ、交通機關ノ不備ト地形ノ關係上、勤モスンバ遅クトシテ不振ノ嘆ヲ免カレザルモノアルハ、頗ル遺憾ニ堪ヘザル所ナリ。

若シ夫レ村行政ノ振興改善ヲ望マンニハ須ク本村ヲ分割シ、適切ナル施設ヲ為スニ如カザルベキヲ信ズ。然ラズンバ到底現在並ニ將來ニ於ケル発達ニ伴フ自治ノ刷新ヲ期スル能ハザルベシ。

本村基線十二号以南ハ、今ヤ基礎漸ク定マリ、村ノ維持經營ニ敢テ困難ヲ感ズルコトナカルベク、住民ハ皆シク分立ヲ渴望シテ止マザルノ状況ナルヲ以テ、急速前記十二号以南ヲ分割シ、新ニ一村ヲ創立シ、二級町村制ヲ施行セラン事ヲ北海道庁長官ニ意見稟申セントス。

大正二年六月一日

この意見書は村議会において満場一致可決されたが道庁認可とならず実現するに至らなかったが、各原野にわたって団体、個人の人権が日に進み、翌四年三月次のごとき三村分割の意見書を村議会に提出、可決をみた。

本村分割ノ件ニ関シテハ、大正二年六月一日村会ノ議決ヲ以テ意見書提出スル所アリタンドモ未ダ之ガ実現ヲ見ザルハ遺憾ノ次第ナリトス。

今ヤ移民ハ、日ニ月ニ増殖シ殖民部落ハ拡大サレシタガツテ村各種ノ行政事務ハ、勤モスレバ洪濤セントシ憂慮ニ堪ヘザルモノアルヲ以テ、速カニ本村ヲ分割シ、各々其ノ適切ナル制度ノ下ニ置キ、適切ノ施設ヲ為シ以テ不利不便不幸ヲ嘆ジシツア

ル多数村民ノ福利ヲ増進セシムルハ焦眉ノ急ナルヲ信ズ、而シテ之レガ分割区域ニ関シテハ、茲キニ湧別原野基線三十三号ヲ以テ境界トシニカ村ト爲シ、其ニ二級町村制ヲ施行セラレンコトノ意見書ヲ提出シタリ。爾來年ヲ閱スル僅カニ二カ年ヲ出デズト雖モ、而カモ本村推進ノ状況ヲ鑑ミルニ、二カ村ニ分割スルモ尚カツ区域及戸口等六ニ失スルノミナラス、地理交通ノ關係或ハ人情風俗ヲ異ニスルモノアルアリテ將來自治行政ノ円満ナル發達ヲ期スル能ハザルベキニ因リ、更ニ左ノ通り分割シ下記ノ制度ヲ施行セラレンコトヲ望ム。

区

城

分割後ノ村名

分割後ノ施行制度

湧別原野基線三十三号線以北下湧別村界マデ

上湧別村

一級町村制

湧別原野基線三十三号線以南東方常呂郡界、西方金山橋マデ

東湧別村

二級町村制

金山橋以西石狩國境マデ

西湧別村

戸長制度

以上ノ如ク分割スルト雖モ各区城ノ民度実力ハ一村ノ維持經營上數テ困難ヲ感ゼザルベク、猶リ西湧別村タルベキ地ハ、最近ノ開發ニシテ資力充實セザルノ感アルヲ以テ茲數年間戸長制度ニ置カルベキモノト信ズ。

右ハ村民ノ等シク渴望シテ止マザルモノナルヲ以テ、急遽前記ノ通り分割セラレンコトヲ北海道庁長官ニ意見案中セントス。

大正四年三月十五日

再度にわたる稟申にもかかわらず分村認可にならなかった。しかしいかんとしても分村実現の念やみがたき関係村民は、翌年四月修正をなされた第三回目の意見書を提出したのである。

大正四年二月十五日付ヲ以テ本村ヲ上湧別村、東湧別村、西湧別村三カ村ニ分割ノ件、意見書提出候過、其後、調査スルニ西湧別村ニ属スルハ区域内ハ未ダ移住日浅キモノ多数ニシテ到底独立ノ資格無之モノト被存候間、西湧別村ハ相当独立ノ資格ヲマツテ分村スルコトトシ差当リ左ノ通り分割シ、下記ノ制度ヲ施行センコトヲ望ム。

区

城

分割後ノ村名

分割後ノ制度

湧別原野サナフチ用ヲ測リ西ハ基線三十三号線以北、下湧別村界マデ、東ハサナフチ川口ヨリ三十九号線以北、下湧別村界マデ

上湧別村

一級町村制

湧別原野サナフチ川ヲ溯リ、基線三十二号線以南、東ハサナフチ川口ヨリ
二十九号線以南

東 湧 別 村 二級町村制

右北海道庁長官ニ意見案中セントス

大正五年四月四日

こうした波狀的活発な運動が功を奏し、道庁を動かし大正七年度から分村実施の内諾があつたが、時たまたま大正六年の白滝大火によりこれが復興に時間がかり大正八年に延期され、ようやく住民の念願がここになつたのである。この間、意見書中分割後の村名「東湧別村」とあるを遠軽村と改訂が行なわれた。

道庁告示によると

北海道庁告示第百六十号

紋別郡上湧別村ヲ分割シテ遠軽村ヲ置キ大正八年四月一日ヨリ施行ス。其境界左ノ如シ、但シ区域図ハ関係村役場ニ備置ク。

大正八年三月二十九日

北 海 道 庁 長 官

左

記

「サナフチ」川ノ支流ト湧別川ノ支流「フミ」川ノ分水嶺ヲ下リ、湧別原野三十三号線ニ至リ、同線ヨリ「サナフチ」川ヲ下リ湧別川ト「サナフチ」川トノ交又点ニ至リ、湧別川ノ支流無名川ノ分水嶺ヲ上リ、下湧別村境ニ至ル。

こうして多年にわたる請願運動がここに実を結び、告示に示されたごとく大正八年四月一日を期して母村上湧別村を離れて、二級町村としての遠軽村が誕生したのである。

遠軽村分村に至るまでの上湧別村歴代村長は、

職 名	行政区域	氏 名	就退職年月日	備 考
-----	------	-----	--------	-----

初代村長	上湧別村 兼 重 浦次郎	自明治四十三年四月一日 至大正七年七月	病 歿
------	--------------	------------------------	-----

二代 村長 上湧別村 本多 国彦 自大正七年八月
至大正八年十月

この間遠軽分村となり、退職後、遠軽二代目の村長となる。

第五章 遠軽村時代

上湧別村より分離した遠軽村に、当然のことながら生田原、丸瀬布、白滝の三カ村がその区域内に入った。行政区域はおよそ一、三三二平方キロで、生田原、丸瀬布、白滝の中心地にはかなりの市街が形成されはじめ、奥地の開発も本州各府県よりの団体入植によって各地とも順調に伸び進み、人口一万五千余を数える遠軽村が期待とよろこびのうちに実現したのである。

四月一日付にて宮城昌章が初代村長として就任、役場吏員の採用、仮庁舎の選定等がなされ、ただちに村政の執行に万支障なきを期したのである。現在地に役場新庁舎が落成した十一月、二代目村長本多国彦に村政が引継がれ、以下左記のとおり理事者の変遷をみた。

職 名	行政区域	氏 名	就退職年月日	備 考
初代 村長	遠軽村	宮城 昌章	自大正八年四月一日 至大正八年一〇月	
二代 村長	々	本多 国彦	自大正八年一月 至大正一一年三月	
村長職務代理	々	酒井 佐一		上 席 書 記
三代 村長	々	関根 源三郎	自大正一一年四月 至大正一四年六月	大正一四年一月一日生田原分村さる
村長職務代理	々	中山 勝雄		上 席 書 記

四代村長遠	蛸村斎	齊一	自大正一四年九月 至昭和五年三月	
五代村長	國七	國太郎	自昭和五年四月 至昭和九年三月	
町長職務管掌	遠	蛸町上清治	自昭和九年四月一日 至昭和九年四月二十二日	道守 属
町長職務管掌	水野	貞三郎	自昭和九年四月二十二日 至昭和九年八月十五日	道守 属
初代町長	宮城	昌章	自昭和九年八月 至昭和十三年八月	
町長職務代理	須子	寛爾郎		助 役
二代町長	三橋	寛五郎	自昭和十三年九月一日 至昭和二十一年八月	丸瀬布、白滝分村さる

大正六年五月、生田原において一開拓者の開墾作業中に発見された金塊より端を発し、鉱床が見いだされ、各鉱業会社の手によって本格的な金銀採掘を始めたのが大正十二年の末であった。こうしたなかにおいて大正九年ごろより生田原の分村問題が議会において取沙汰され、分村に関する請願書も提出されていたが実らずして月日が流れたが、各鉱業所の操業と森林資源の積極的開発により人口が急増、重なる請願運動とあいまってついに分村が認められ、大正十四年一月一日、生田原水越四十四号線を村界となし遠軽村より分村、生田原村民多年の宿望ようやくここに達成したのである。かくして遠軽村は現在の丸瀬布、白滝を含みおよそ一、〇六〇平方キロとせばまり、人口も生田原の分村によって一万二千五百余人と減少したが、石北線敷設の明るい見通しとともに人口は増加の一途をたどった。関係住民のたび重なる石北線敷設の強力な請願運動が功を奏し、ついに昭和七年十月一日石北線全線が開通するに至って、上川・旭川方面との交通まことに利便となり殖産振興上きわめて至大な役割を果たし、人口の増加に一役かった。

分村独立以来十五年を経過した遠軽村は、昭和九年四月一日をもって町制を施行、一級町村制のもと町政が遂行された。この記念すべき町制施行のみぎり、丸瀬布、白滝の両住民一丸となって分村を希望し、遠軽村議会においてこのことが取沙汰されたが、分村によって生ずる財政的負担増は地域住民を窮地に追いこむことになりかねないとの慎重論から、分村問題は全く白紙に戻った一幕もあった。

さて、今ここに一・二級町村制の制度についてふれてみるならば、元来北海道は開拓日浅い土地ゆえ、その自治能力も本州府県と異なりきわめて乏しく、戸長制度によって行政をつかさどっていた。明治三十年五月勅令によって北海道区制とともに北海道一・二級町村制が公布され、一・二級町村制に該当しない町村は戸長制度をづけていたが、戸長制度は大正十二年に廃止となった。一・二級町村制は制定後一部若干の改定があつたが、おもな内容を記すると左のとおりである。

一 級 町 村

町 村 長	町村会で選挙し、北海道長官が認可す、任期四
助 役	年、給与町村負担
収入役	町村会で選任、給与町村負担
書 記	町村長の任免、給与町村負担
書記補	町村長の任免、給与町村負担
議 員	定数八名乃至二十四名、任期六年（三年で半数改選）無給
議 長	町村長

二 級 町 村

町 村 長	北海道長官の任免、給与北海道地方費より支給
助 役	助役は置かず上席書記が代行、給与町村負担
収入役	支庁長の任免、給与町村負担
書 記	支庁長の任免、給与北海道地方費より支給
書記補	町村長の任免、給与町村負担
議 員	定数四名乃至十二名、任期二年、無給
議 長	町村長

一級町制の施行によって町会議員の選挙が行なわれ、昭和九年六月三十日二十四名の新議員が誕生、初代町長

として宮城昌章が町会において選ばれた。

昭和十七年一月遠軽町役場丸瀬布出張所を開設、さらに翌十八年一月十日同白滝出張所も設置され、地域住民は大いに喜んだ。初代白滝出張所長には小沢喜誠が就任、ただちに事務が開始された。

第六章 白滝の夜明け

移住の経過

数多の囚徒を役役し、幾多の犠牲者を出しつつ開削された旭川・網走間中央道路が明治二十五年九月ついに開通、翌二十六年四月には本村滝ノ上に八号駅通（奥白滝・滝の上橋西寄り）も設置され、中沢沢治が駅通取扱人として着任、定住することとなったのであるが、中央道路を利用して往来する旅人はあったけれども、白滝の地に定住するものはこの中沢取扱人をもって第一号と呼称できよう。こえて明治三十三年石北峠休止所（石北峠駅通所の前身）の取扱人として、遠軽の野上駅通所に稼働中の石上藤蔵が、角谷取扱人の信任を得て来住したが、気象条件のあまりにも悪い所ゆえ、野菜の栽培にも事欠く状態であったがため将来の希望が持てず、同三十五年春峠休止所をあとにして旧白滝十七号に入地し、大いに開拓の鎌を振ったのである。この時まだ白滝原野は解放以前のことで、石上の親代り的存在であった野上駅通取扱人の角谷政衛の尽力で網走支庁に願し許可を得て旧白滝に入地したのである。これ本村開拓農家の始祖といえよう。

石上藤蔵の入地後翌々年の明治三十七年旧白滝、下白滝一带が解放され、明治四十二年山本治作が第二号開拓者として旧白滝に入ってきたが、開拓には最高の立地条件を自ら選んで入地したとはいえず、山本が入地するまで



明治38年3月発行の区画図には人家と畑の記号がみられる。17号線130番地内の黒点が人家。128番地内に畑の記号がある。

のおよそ七年間、全く孤独に近い生活を営んできた石上の開拓根性にはいまさらながら頭の下る思いがする。のちにあいっいで入地したこれら開拓移住者の不断の努力と幾多の辛酸を嘗めつつ堪え抜いたことが白滝の礎となり、今日みられるたくましくも雄大な村に発展してきたのである。

明治四十二年十一月宮城県人太田熊吉、吾妻祝吉が、翌四十四年四月宮城県人青山右近、内田三蔵が、さらに同年秋、宮城県人菊地長治、岩手県人小笠原伊勢松らあいっいで旧白滝原野に単独移住、ここにわずかな集落が形成されたのである。

団体の移住 団体移住は本来は団結移住と呼称されるものであって、郷里を同じうする者が団結して移住し、互いに相扶け相励まし合って一致協力し開拓にいそしむことを本願として団結移住といわれていた。団結移住者の開拓成績は単独移住者に比べるとはるかに団結力が強く良好であったので道庁においても団結移住を奨励していた。またこうした団結移住の長にあたるべき者を団体長と呼んでいるが、実は総代人と呼ぶのが正式呼び名とされている。さて、団結移住の人員構成にも幾度か変更があったが、明治二十五年十二月団結移住の戸数は三十戸以上をもって団結移住と認めて貸付地予定存置の特典を与えた

が、明治三十年四月北海道庁令第二十四号によって三十戸以上とあるを二十戸以上に緩和し団結移住を容易ならしめ、しかも団結移住者の資格を自作農に限定せず小作の団結においても団結移住と認めた。こゝで明治四十一年六月北海道庁令第六十四号によって、これまでの二十戸以上を十戸以上にとその基準を下げてさらに団結移住を容易ならしめ、貸付予定存置を特定地に限ったゆゑその構成内容は自作農に限られ、その面積も十町歩以内との制限も加えられた。

本村に移住した一連の団体移住はいずれも明治四十一年に改正されたいわゆる十戸以上の団体結合の規程によつて移住したものである。

明治四十五年白滝原野増画地としてさきに解放された旧白滝、下白滝以外の本村域内解放によつて、単独移住もさることながら、同年三月和歌山県よりの団結移住（総代人（団体長）植芝盛平）五十四戸が大挙して本村に移住、白滝ホロカ沢入口付近より上白滝に至る中央道路沿いに入植したのである。

のち、この和歌山団体の入地をもつて本村における開基と定めたのである。

各団結移住の入植状況は次のとおり。

入植年月	団結移住名	入地先（總代人（副總代人））	団 体 員
明治四十五年三月 (五十四戸)	紀州 団体	白滝・上白滝 植芝 盛平 倉橋 伝三郎	山本清三郎、武田由松、中本久吉、谷口芳造、長井久造、谷口幸蔵、北沢鉄弥、中田ハナ、久保貞吉、寺畑吉平、堀田、久須本、田野、寺畑、栗田、岩崎、長井、育本、磯

大正二年三月	秋田館合団体 (十四戸)	支 湧 別	佐々木三之助	佐々木平吉	谷、柿本、柿本、広木、永井、竹中福松、 以下不詳
大正二年四月	秋田福庭団体 (十一戸)	支 湧 別	佐藤平一郎	舟越長八、大関吉蔵、小野寺三蔵、阿部忠蔵、阿部石五郎、東海林浩三、東海林久治郎、高橋政吉、瀬川勇助、伊藤つね子	
大正二年五月	宮城団体 (十戸)	奥 白 滝	菅原久蔵	工藤亀太郎	阿部長五郎、三浦長内、土井滝三郎、伊藤栄五郎、菅原政治、沼倉弥栄治、千葉六太夫、佐々木
大正二年五月	福島団体 (十八戸)	奥 白 滝	大庭重次	本間栄次郎	本田重蔵、本田栄五郎、鈴木康吉、渡辺正吉、笠間儀蔵、笠間栄蔵、大本栄次郎 以下不詳
大正二年十月	奈良団体 (十一戸)	支 湧 別	井村謙二		北島松之助、小野上寅三、和田宗三郎、岡豊蔵、南政太郎、和田雄三、安川年数、井村昭三、安田、小原寿一

大正三年二月	山形団体 (十五)	奥白滝	五十嵐長五郎 丹野佐三郎	須藤多三郎、須藤又三郎、古岡銀藏、及川新太郎、菊地富藏、黒田重太郎、竹田仙之助、五十嵐久三門、高橋倫二郎、真鍋清作、片桐、鈴木、朝山
大正三年三月	福島団体 (十五)	奥白滝 古岡六兵衛	佐藤 國治	菅野増吉、菅野豊、村形由松、田中政治、橋本正一、以下不詳
大正三年三月	長野団体 (十五)	上支湧別 辻 喜一郎 三石 晋次郎	大沢敏夫、宗方六右三門、後沢五郎、宮下、沼田、以下不詳	
計	九団体	百五十八戸		

団体あるいは個人の入植によつて未開の白滝原野はこれまでの静寂を破り、伐木のための木挽きの音、わずかの空地を求めて開墾の鍬を振う力強い音が、鬱蒼たる林内に響き渡り、たくましくも雄々しい白滝の夜明けがはじまつたのである。

部落の誕生 紀伊団体が入植した翌大正二年二月、上湧別村第十七部として白滝部落が誕生、植芝盛平が現冠三十歳の若さで白滝原野の総部長に任ぜられ、拓けゆく白滝の開発に貢献した。

木村各部落の独立経過は次のとおり。

白滝原野 大正二年二月(上湧別村第十七部として誕生、総部長植芝盛平。大正四年三月白滝原野が白滝二股、支湧別、上白滝の三部落に分れ、白滝二股部長東海林専太郎となる)

支湧別 大正四年三月（上湧別村第二十二部として誕生、初代部長三石音次郎）

滝ノ上 大正四年三月（上湧別村第二十五部として誕生、初代部長倉橋伝三郎）同年十二月上白滝と改称す。

奥白滝 大正五年三月（上湧別村第二十七部として誕生、初代部長岸利七）

上支湧別 大正六年三月（上湧別村第三十部として誕生、初代部長三石音次郎）

旧白滝 大正七年二月（上湧別村第三十一部として誕生、初代部長新保国平）

『郷土の生いたち』（支湧別小学校編・昭和三十一年）の最初に「開拓のはじめ」と題して支湧別初の移住者たちの様子が次のように記され、開拓者の入地時の姿がこまやかに浮きぼりされている。

「……最初の移住者たち——今から四十二年前、明治の時代が終りをづけ、大正となつたばかりの大正二年の暮、未だ斧一つ入つたこともない千古の原始林を支湧別川の川沿いに上つてくる一団の人達があつた。

支湧別の原野にはいくかかえもある大木がすき間もなく立ち並び、昇陽陽が届かない、うっそうたる原始林であつたが、川沿いには踏み分け道といわれる狹路や、魚釣りの人が歩いた跡がかすかに続いていた。女子や子供を交えた数十名の人達は、背にそれぞれ重そうな荷を背負い、汗にまみれていたが、その眼はいきいきと同じように輝いていた。

この一団の人達こそ支湧別原野開拓の希望に燃えて移住して来た秋田県稲庭町の人達である。やがてこの人達は支湧別（七線附近）にたどりつき、そこに先に立てられたあつた着手小屋に入った。この小屋は太い丸太で組まれ、オヒョウの木皮を屋根に、土間には笹が敷かれ、窓一つなく、入口には荒むしろが一枚ぶら下つていているという、そまつなものであつた。

人が歩くたびに土間に敷かれた笹はガサガサと音を立て、笹の切り口が頭を上げているというものであつたが、数十人の人達が雨路をしのぐには充分であつた。やがて人々は夜の更けるのも忘れ、明日から始まろうとする開拓生活の希望を語り合ひのであつた。

いずれの地における開拓もそうであるように、本州府県の故郷をあとにしてあえて未開の地に入り、そこを第

二の故郷として生き抜く精神力は尊くも強靱なものであった。しかし、こうした各団結移住者の中には、現地に入つてみて想像をはるかに越える開拓の辛苦に耐えられず、すぐごと本州あるいは他所へ引揚げる移住者もかなりあったようだ。

左表にかかげる大正元年より同七年までの部落別戸数動態表から本村発展の経過を知ることができる。

原野別	年	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年
白 濁 滝			二二〇	七九	九九	一一六	一四二	一九四
支 濁 別				一八	三二	四九	八二	二四
上 白 滝				四七	四八	五五	七〇	一〇二
奥 白 滝			二二〇	一四四	六二	二七五	二七一	五三二

(「支濁別村落」より)

村づくりへの意欲

開拓者が入り商店が出来、生活の見通しを立てるとますます子弟の教育に心が走つた。大正二年四月、石上藤蔵、太田熊吉、菊地長治ら旧白滝住民の総力によつて私立旧白滝教授場(翌三年七月公立となる)が、大正二年六月植芝盛平所有の小屋を補修して白滝二股に白滝特別教授場が、大正四年一月岸利七らの尽力により奥白滝に滝ノ上教授場(大正七年六月奥白滝尋常小学校と名称変る)が、大正五年五月井村謙二ら支濁別部落民の手で五線に私立支濁別教授場が、大正四年七月三石晋次郎、大沢敏雄らの骨折りで九線に上支濁別教授場が、大正七年十月東白滝教授場が、それぞれ設備に不足はあったものの子弟を抱える親の執念が各

教授場の開所にもちこんだといえよう。

これより先、大正四年には増大せる造林事業に就労する数多くの造林夫に端を發する犯罪行為の防止上、白滝に巡査駐在所が設置され、翌五年には国有林盜伐監視の任務をもって森林保護區員駐在所も白滝に設置するなど、村としての形態が徐々にではあるが築き上げられていきはじめた。

字名の變更 また、これまで八号駅通所のあるところ一帯を一滝ノ上と呼んでいたが、紋別郡滝の上村と混同し、行政上お互いの不利益を防ぐ上から、時の上湧別村において、この地の字名變更の手續を取っていたところ、大正四年十二月二十四日北海道庁指令第八五六二号をもって「滝ノ上」を「上白滝」と改正許可があり、以来白滝滝ノ上と滝の上村との錯誤がしだいにうすれていった。

旧白滝に入地した菊地長治も「滝ノ上」のこのまぎらわしい地名に間違つて入植した一人である。長治の息子誠の語るところによると、「宮城県より北海道大夕張に来て、北見方面にての土地松下げの願書提出したところ滝の上村の入植許可が来た。さっそく夕張より旭川、上川を経由して北見峠を越してくるとまもなく「滝ノ上」と呼ばれていたところがあったので自分の土地を探したが見当らない。そのうち「滝の上」違いであることがわかったが、ここから滝の上村に行くのもめんどくさいということで旧白滝の売地を買って入り住みついた」ということである。

支湧別開発への第一歩

中央道路沿いに入植した下白滝、旧白滝、白滝、上白滝、奥白滝の開拓者は恵路とはいえ既設の道路があり往來上特別の支障はなかったが、支湧別方面の入植者は全くの踏み分け道で、ある者は支湧別川べりを伝い歩き、生活物資の買入れ、農産物の出荷には人知れぬ苦勞が続いていた。こうした道路開削

の議をかねてより時の上湧別村役場に要請はしていたものの、広域な行政をあずかる村役場としても村域内各地に目を追うて急増する開拓入植者に開発の手がまわらず、支湧別道路開削も、遅々として進行しなかった。しかし往來の不便をこれ以上耐え抜くことの許されなくなった支湧別、上支湧別部落住民の立ち上りによって全部落民の総力をあげての出役作業により大正五年十一月めでたく支湧別道路が開削され、唯一の交通路がここに不備ながら開けた。

山火と離村

大正六年五月、開拓の意気に燃ゆる入植者のわずかの不注意から火入れ作業の火が突風にあおられ、古今未曾有の大山火をもたらしたことは別項詳述のとおりであるが、入植間もない貧困の開拓者にとって家屋はもとより畑も焼け、生活の財源でもあった豊かな森林資源も瞬時にして失った打撃はあまりにも大きな痛手となり、これまで盛んに行なわれていた造材事業もにわかに事業を縮小、ついには白滝を去る開拓者も出はじめた。大正八、九年にかけて行なわれた樺太移民の募集が本村域内にも手がのび、集団ではなかったが相前後して二、三十戸にも及ぶ開拓者が再び森林資源を求め、あるいは異郷の新開地を求めて樺太に転住してしまった。ことに山火被害の大きかった天狗平、東白滝方面の開拓者に渡樺者が多かったと古老は語っている。

鉄道開通

かねてよりの懸案であった分村問題は、大正八年四月一日を期して遠軽分村が決り、生田原、丸瀬布、白滝は遠軽村の管轄となったが、丸瀬布、白滝方面への鉄道敷設の問題が年を追うて活発となり、たび重なる鉄道省への請願にも具体的な態度を示さないことに業をにやした沿線住民は、南瓜団体と称する代表者を東京に送り込み一大請願運動を展開した。このことが関係各大臣の心を動かし、鉄道敷設の決定が下り、昭和二年十月には遠軽・丸瀬布間が、昭和四年八月には丸瀬布・白滝間が、そして昭和七年十月石北全線の開通に至ったので

ある。

部落規約の設定

昭和九年四月遠軽村を遠軽町と改称された折、丸瀬布、白滝一丸となつての分村問題が初めてもち上り大いに論議を交した一幕もあったが、こうした経緯が刺激となつたわけでもあるまいが、白滝原野各部落の「部落規約」をつくり親睦を深めつつ一致協力態勢をとつたのである。

白滝部落規約

第一条 本規約へ部内住民一般ノ親睦ヲ厚クシ、致協力、公益ヲ謀リ、福利ヲ増進シ、美風良習慣ノ涵養ヲ期スルヲ以テ目的トス

第二条 部落区域ハ白滝原野二十号線以西、二十八号線以东ト定ム

第三条 本規約実行上便宜ノ為、部落ヲ九組ニ分チ組別区域ハ議事録ニ掲載ス

第四条 本部落ニ左ノ役員ヲ置ク

一 区長一名 一 副区長会計兼任一名 一 評議員九名 一 組長九名 一 書記一名

第五条 区長、副区長、書記ハ總會ニ於テ選挙シ、多数得点ヲ以テ定ム、同点ナル時ハ年長者ヲ以テ定ム、評議員、組長ハ各

組ニ於テ互選ス、任期ハ各一カ年トス、但シ再選ヲ妨ゲズ

第六条 總會ニ於テ選挙シ当選シタル役員ハ絶対ニ拒絶スル事ヲ得ズ

第七条 役員ノ権限ハ左ノ如シ

一 区長ハ部内ヲ代表シ、部落一切ノ事務ヲ掌ル

一 副区長ハ区長ヲ補佐シ区長事故アル時ハ其ノ職務ヲ代理ス

一 評議員ハ区長及ビ組長ヲ補佐スルモノトス

一 組長ハ其ノ部内ヲ代表シ区長ノ命ニ依リ組内ニオケル事務ヲ処理ス

一 会計ハ部落一切ノ会計事務ヲ処理スルモノトス

第八条 役員報酬ハ左ノ如シ

第六章 白滝の夜明け

- 一 區長報酬年額百五十円也
- 一 副區長報酬年額六十円也
- 一 書記報酬年額三十五円也

一 評議員ハ名譽職トシ組長又同ジ

第九條

本部落ニ一カ月以上居住スル住民ハ部落費ヲ負担スル義務ヲ有ス、會計年度ハ毎年一月ヨリ十二月迄ト定メ、潮賦方
法ハ等級ニ準ジ年度當初ニ於テ役員コレヲ定メ、年一回ニ組長之ヲ徵收シ會計係ニ納入スルモノトス
但シ新規居住者ハ組長ニ於テ認定徵收スルモノトス

第十條

一 通常總會ハ毎年一回一月七日之ヲ開キ、予算ノ決議及ビ前年度會計報告及ビ役員ノ選舉ソノ他重要ナル事項ヲ議
決ス

一 臨時總會ハ區長ニ於テ必要ト認メタル時又ハ部落民三分ノ一以上ノ請求アリタルトキ之ヲ開キ決議ス
一 役員會ハ區長、副區長、評議員、組長ヲ以テ協議ス

一 各議會ノ議事ハ議事録ニ記載シ、出席者ヨリ二名署名捺印スルモノトス、署名者ハ議長之ヲ指名ス

第十一條

會議ハ總テ區長三日以前、部内一般ニ通知シ之ヲ招集シ且ツ其ノ議長トナル、會議方法ハ普通議事録ニ依ル、但シ
非常ノ場合ハ此ノ限リニ非ズ

總會ハ部落員五分ノ一以上、役員會ハ其ノ半数以上出席スルニ非ラザレバ開會スル事ヲ得ズ

但シ同一事項ニ付再會ノ場合ハ出席人員ヲ以テ議決ス

第十二條

諸般集會ニハ必ず時間ヲ勵行シ若シ事故アル場合ハ役員迄ニ届出デ、無断欠席ノ場合ハ過怠金トシテ金五十錢也ヲ
直チニ徵收スルモノトス、但シ過怠金ハ其ノ都度令狀ヲ發付徵收シ該金ノ処分ハ出席者ニ於テ処理ス

第十三條

本規約ノ各条ニ違背シタル者ハ、役員之ヲ注意シ、注意再度ニ涉リタルモ尚ホ履行セザル場合ハ年度ノ等級査定ニ
於テ無條件二等上進決定スルモノトシ、尚各集會ニ於テ発言權ヲ失スルモノトス

第十四條

本規約ハ總會ノ決議ヲ經ルニ非ラザレバ改訂スル事ヲ得ズ

右決定候也

昭和九年七月二十五日

区 長 佐 藤 庄 藏

白滝出張所の設置

大東亜戦争の熾烈化につれて兵事業務も急増かつ敏速を要求され、はたまた諸手続などの利便上、役場出張所設置の氣運たかまり、昭和十八年一月十日白滝原野千七百十六番地の二、野沢正市所有の一家屋を借り受けて「遠軽町役場白滝出張所」が開設された。初代白滝出張所長は小沢喜誠が着任、他に一名の職員が採用されて事務開始となった（同十八年秋、白滝原野三千七十五番地Ⅱ現・青年研修所建設地Ⅱに木造三十坪の新所に移転す）。激しい戦争の期間を応急の措置として開設されていた役場出張所では、あらゆる分野にわたって不自由を感じつつ過していたが、昭和二十年八月の戦争終結によって、再び丸瀬布、白滝の分村問題が同時に具体化はじめ、ついに分村へと発展したのである。

分村の経過

昭和九年四月一日 遠軽村の一級町制施行に際し、一般町民の負担増加を予想して、丸瀬布以南白滝方面の住民一丸となって分村を希望したが、一級町制実施の結果、案に相違して住民の負担額が軽減を来したため、分村問題は自然消滅となった。

昭和十四年一月 丸瀬布地区住民は資力の充実にともない再び分村問題を議したが、白滝地区住民は受益状況、財政状況よりして強硬に反対す。

昭和十四年三月十五日 遠軽町議会は右のことに對し、時期尚早の議決をなす。

昭和十六年九月 分村問題再び起りたるも、役場位置問題を巡って丸瀬布、白滝の両地区住民の意見一致せず。

すなわち、丸瀬布市街地に役場庁舎の設置をなしたる時は、白滝地区住民は分村前と大差なき現況よりして反対を唱え、かつ戦時特例による分村実施困難なるため終戦後再び協議することとなった。

昭和二十年十月

分村問題再度起り、両地区住民代表は相互に協議の結果、丸瀬布、白滝両地区を二分割することに住民の意見一致を見た。

昭和二十年十一月三十日

丸瀬布、白滝両地区代表は網走支庁に対し分村実現方の陳情をなした。

昭和二十一年一月十三日

白滝地区住民大会を開き、分村の議決をなす。また分村にともない租税の増加を見ても十分これに堪ゆる決意を表明す。

二月五日

丸瀬布地区住民大会を開催、同月二十六日丸瀬布地区青年団大会を開催、いずれも分村の決議をなす。なお、両地区住民大会は万一両地区を一村として分村せられる時は、おのこの分村を辞退すべき決意を表明す。

二月二十六日

遠軽町議会において丸瀬布、白滝両地区町会議員より「分村要望に関する件」提案あり、満場一致可決す。

四月二十六日

丸瀬布、白滝両地区住民代表は北海道庁に対し分村実現方の陳情をなす。

五月

七日より十二日まで網走支庁係官来町し、財政状況調査をなす。

六月

三日より五日まで網走支庁長一行来町し、母町分村の実地調査および民意聴取をなす。

七月二十六日

北海道庁告示第五百二十三号で丸瀬布村、白滝村の分村告示さる。

八月一日 白滝村設置。

「北海道庁告示第五百二十三号」

紋別郡遠軽町を分割して丸瀬布村及び白滝村を置き、昭和二十一年八月一日より之を施行する。その境界は左の通り、但し区域図は関係町村役場に備えて置く

昭和二十一年七月二十六日

北海道庁長官 増田 甲子七

一 遠軽町と丸瀬布村との境界（略）

一 丸瀬布村と白滝村との境界

紋別郡滝の上村との境界三角点千二百六十七メートルの東北方約七百五十メートルに位する無名山を起点として、分水嶺を東方に通り、標高千五百五十四メートル、同九百八十二メートル及び三角点九百六十五・三メートルを経て標高六百二十三メートルに達し、同地点より東に分水嶺を東方に通り、殖民区南白滝原野二号道路と四号道路との中間を経て地方營道旭川・根室線に達し、同所より東南方標高五百十八メートルの無名山に直進して分水嶺を西南に通り標高六百八十七メートル、三角点七百三十六・七メートル、同八百九十五・九メートル、標高千六メートル、同千三百二十八メートル、同千三百六十九メートル、同千七百七十二メートル及び支湧別岳を経て上川郡愛別村との村界標高千七百五十八メートルに達す。

白滝村の誕生

白滝村告示第一号

分村に関する件

昭和二十一年七月二十六日北海道庁告示第五百二十三号を以って、紋別郡遠軽町を分割して丸瀬布村及び白滝村を置き昭和二十一年八月一日より之を施行せられた。

昭和二十一年八月一日

紋別郡白滝村長職務管掌

地方事務官 上野 謙三郎

かくして全住民久しく待ちわびていた分村ここに達成、独立独歩の本村行政が足音も高らかに踏み出されたわけである。

そして永年数多くの人々より愛称されていた「白滝」を地理的歴史的意義を有するものとして村名として採用、開村のみぎり「白滝村」と決定したのである。

分村当時における本村の現況は、戸数六百七十五戸、人口三千八百四十三人、うち中心市街地連帯戸数二百三十一戸、千二百三十一人を擁し、商工業九十二戸、農業三百二十三戸、その他二百六十戸となっていた。

八月一日白滝村開村の記念すべき歴史的第一頁が開かれたわけであるが、村長職務管掌上野謙三郎が発令となり、総数十四名の職員によって開庁された。

村長職務管掌

上野謙三郎

助役臨時代理者

三木克己

収入役故隙代理者

石渡寛藏

書記・長谷部俊雄、馬場榮一、田中富夫、枝手一宮龍馬

書記補・前本正二、野村茂子、堀・鈴木哲、齋藤省典、田尾博巳

臨時雇・豊岡義明、給仕・川崎芳子

小出村長

昭和二十二年四月五日分村初の村長選挙が執行され、最初の村長の椅子に僧職の身にあった小出月江が当選、引きつづき四月三十日には第一回村議会議員選挙も執行され、ここに全く本村の機構がととのったのである。

同年五月三十日には分村初の第一回村議会が開催され、助役には三木克己が、収入役には石渡寛藏がそれぞれ

選出されたのである。

昭和二十五年七月開催の臨時村議会において、左のごとき「行政区域設定案」が可決され、村政の末端浸透にのり出した。

「白滝村行政区域設定案」

一、目的 戦時中の町内会、部落会の制度が、ボンダム政令によって廃止せられた後の村行政機構は、連絡員制度、世話人制度等の変遷を見て、定期出張制度の今日に至ったが、何れも断片的な方式であつて、民意の暢達は勿論、村政の滲透に満足な制度とはいひ得られなかった。

村民の互論の下、民主的な行政を円滑に遂行するためには、これ等の制度を再検討すると共に、より合理的な制度を設ける必要があると思うので、茲に腹案を提出して討議を望むものである。

二、要綱

① 地方制度の発展伸張と共に戦争以前まで行なわれて来た行政区域制度「区」の設置と区長配置を用いる。

② 全村を人口の分布、地利、交通等から、これを数区域に分割、区の名称を附する

③ 区に区長をおく

④ 区長は関係区域住民の直接選挙により選出し、村長が之を任命又は委嘱する

⑤ 区長は関係区域内住民の意思を村政に暢達すると共に、調査、連絡等村政事務の執行を補助する

⑥ 区長に事故あるときは、区長の指名する住民が代理する

三 区長には村費を以つて年報酬又は年手当を支給する

⑦ 区長の任期は選挙の日から一カ年とする。但し再任を妨げない

二 区長の任期が終るときは、現任者が選挙を管理して後任者を選挙し村長に報告する

三 区長の任期が満了しても後任者決定に至るまでは、その職務を行なうものとする

行政区域

下白滝、川白滝、上白滝、東白滝、天狗平、奥白滝、北支湧別、南支湧別、上支湧別第一、第二、東区、中央区、西区、鉄

道区の十四区とする

こうした設定案にもとづいて、同二十五年八月三十日次のごとき条例設定の可決が臨時村議会においてなされ、歴然とした行政区のもとに円滑な村政の浸透をみることができた。

「行政区設置条例設定」

（区の設定）

第一条 本村行政事務処理のため区を設置する。

（区の名稱）

第二条 区の名稱及びその区域は左のとおりとする

下白滝区	九瀬布村との境界より白滝原野九号線間の区域
旧白滝区	白滝原野九号線と白滝原野十九号線との間の区域
東区	白滝原野十九号線より支湧別川東岸に至る区域
中央区	支湧別川西岸より白滝原野二十五号線に至る区域
南区	白滝原野二十五号線より二十六号線に及ぶ区域
西区	白滝原野二十六号線より上白滝二十九号線、支湧別二十七、二十八号線の中央に及ぶ区域
鉄道区	白滝鉄道官舎区域
上白滝区	湧別川を境に北西部一帯の在来の上白滝部落区域
東白滝区	湧別川を境に南西部一帯、在来の共栄、東白滝の全区域
天狗平区	天狗平開拓地一帯の区域
奥白滝区	在来の奥白滝部落より天狗沢開拓地を除いた区域
北支湧別区	在来の支湧別部落を二分して四線を境に東北部一帯の区域
支湧別区	在来の支湧別部落を二分し、四線を境に南西部一帯の区域

上支湧別第一区 在来の上支湧別部落を二分して、元家庭学校前道路を境にして東北部一帯の区域
上支湧別第二区 在来の上支湧別部落を二分して、元家庭学校前道路を境にして南西部一帯の区域

(区 長)

第三条 1 区に区長一名を置く

2 区長は関係区域内に住民の推せんあるものに対し村長が任命又は委嘱するものとし、その任期は一年とする。
但し任期満了後に於ても後任者の発令あるまではその職を行なうものとする。

(区長の給与)

第四条 1 区長には手当を支給する

2 区長は職務を行なうために要する費用の弁償を受けることができる

3 手当及び費用弁償の額及びその支給方法を別に定める

(区長の代理者)

第五条 1 区長欠けたとき又は事故あるときは区長の代理者を置くことができる

2 区長の代理者は職務を行なうために要する費用弁償の支給を受けることができる

附 則 この条例は、昭和二十五年九月一日から施行する。

なお、昭和三十八年四月より行政区城設置条例の一部改正により「上支湧別第一、第二」が合併され「上支湧別区」となる。
——昭和四十三年三月をもって「行政区設置条例」は廃止となった。

さて、従来市街地に白滝発電所があったほかは、地区ごとに小規模な自家用小水力発電がなされてはいたものの一貫したものでなく、さらにこれら電気之恩恵に浴さない無燈火戸が全村の三割強にも達しており、全村電化が村民の夢でもあり、小出村長公約の一つでもあった。こうしたことから住民の声を反映しつつ、綿密な立案にもとづいてついに昭和二十七年九月すべての工事が終り一斉配電を開始した。当時としては全国的にも稀有とい

われた全村電化であった。

丸瀬布、白滝両町村合併実らず

昭和二十九年五月二十五日第五回臨時村議会の協議会において「町村合併促進法による丸瀬布、白滝両町村の併合問題」についての協議がなされたが、分村後比較的年浅いことでもあり、ひるがえって昭和二十一年一月十三日白滝分村の議決をなした白滝地区住民大会開催の折「若し丸瀬布、白滝両地区を一村として分村するときとは之を固辭する」との議決をも併せて行なっている関係上、いまさら合併は民意をきずつけるものでもあり、本村においても村政が軌道にのり発展途上の将来性豊かな希望もあるので、併合問題については協議見送りとされた。

ところが昭和二十九年八月二十三日付、二十九地第一〇四四号北海道知事田中敏文より「北海道町村合併計画策定に関する意見について」と題して意見書が本村に提出され、同年九月六日の村議会においてこれが議会の意見を求めた。

町村合併計画に対する意見について

諸君第一号をもって提案された標記について左記のとおり本議会において議決したので答申する。

「町村合併計画に対する意見答申書」

本村と丸瀬布町とを合併せしめるべく策定した北海道知事の計画案に対する本議会の意見は左のとおりである。

記

- 一 類管の如き交通路によって隣接し、他は重疊たる山丘に閉鎖され所謂陸の孤島的な自然環境であるため、地理的にも或は交通的にも判然と隔絶し各々の行政圏が独立しているところ。
- 二 本村の総面積は三百二十五平方キロを有し、鉄路延長二十キロの沿線と支那別原野全長十六キロに及ぶこの全地域に亘って聚落点在するため、此の上更に行政区域を拡大することは行政力の末端滲透が期し得られないばかりか却って行政に対す

る民心が遊離することとなり自治の本旨に反すること。

三 住民の生活活動は、そのほとんどが村内の消流を中心とし、外部的な依存度は中間地域を排して、遠く旭川市及び遠軽町に直結しており、九瀬布町との交流は皆無と云つてもよく、住民生活の環境と、その経済活動圏は全く異なり、いさゝかの関連性をも持たないこと。

四 高率の自主財源を有し、年々健全財政を堅持していること。

本村の現状に立つて考察する以上の理由は、昭和二十一年八月九瀬布町と同時に、去々遠軽町より二分村しなければならなかった当時の事情とは何等の変化も来して居らず、従つて独立九九年の体験を経た今日において尚、当時の二分村の理由が解消されないのみならず、むしろ積極的にその効果を確認する現在においては、北海道知事の策定した本村と九瀬布町との合併計画には同意し難い。

更に本村今後の推移を予測するに、

イ 電源開発に伴い諸加工業が勃興し、産業の振興は著しいものがある。

ロ 大きな埋蔵量を有する地下資源の開発が道路開削の実施に伴いその企業化が日論まれるに至ること。

ハ 白滝原野を跨る一帯の地点に湧出量数千石に及ぶ大雪山系の温泉が専門技術者によって確認され、この急速な企業化が進められていること。

ニ 本村内二万八千町歩に及ぶ森林行政運営のために本夏白滝営林署が設置され飛躍的な森林振興が期し得られること。

ホ 前各項の如く諸般の産業勃興するに伴い必然、人口の飛躍的な増加が期待され、本村独立経営の基盤となるべき人口は、ここ数年にして確保されること。

ヘ 以上各項の推移進展に伴い財政の基盤は更に強化され、村有財産の合理的経営管理と相俟つて行財政の運行にいささかのおそれもないこと。

従つて本計画に対しては反対であることを答申するものである。

なお、この意見書についての採決の結果は

研究を要する議員

二名

反対議員

九名

であった。

こえて翌昭和三十年一月二十八日の第一回臨時村議会協議会に提出された「町村合併問題研究組織設置について」の議案は、「合併反対の態度は明確であるので本組織設置の必要は認めない」と満場一致決定された。

かくして議会の物議をかもした両町村合併問題は冷静な判断のもとに処理され、村民に動搖を与えずして立消えとなった。

渡辺村長

昭和三十三年三月の定例村議会において小出初代村長の退職申出が同意され、同年四月三十日渡辺要が第二代村長として当選した。

昭和二十二年六月一日付にて選任された三木克己助役は昭和三十四年三月三十一日付をもってその職を解かれ、爾来丸一カ年間助役空席のまま村政がつづけられたが、昭和三十五年四月一日これまで収入役であった斎藤秀信が助役に就任、翌三十六年八月七日斎藤助役に代って、収入役の山内晴雄が助役に選任された。

昭和三十六年八月一日をもって開村満十五周年を迎えた本村は、青年研修所落成をかねて、この年九月九日白滝中学校体育館において、道議会議員、網走支庁長、網走管内町村会会長ら来賓と村民約二百人が集まって「開村十五周年ならび



開村満 15 周年記念式典

に青年研修所落成記念式典が盛大に挙行され、渡辺村長、丹羽村議会議長ほか来賓の祝辞などあり、次のことき各種功労者の表彰が行なわれた。

△区長 原田安五郎 △消防団員 布田 勇、広田寛次、中島末士、斎藤久蔵、高橋次男、前本栄一、阿部英雄、谷 昭吾、岩城義男、金枝一夫 △統計調査員 中川 広 △開拓功労者 山崎乙吉、小島寛一郎、岩城近蔵、井村謙二、武田由松、及川新太郎、湯川作次郎、高橋新三郎、加賀谷文之助、菅原政治、阿部長五郎、原田安五郎、吉田竹次郎、植村辰五郎、辻源一、福田彦蔵、堀部春吉、島利右衛門、谷口能吉 △特別功労者 中山徳蔵、鈴木重吉 △納税功労者 丹羽実市、松井清兵衛、井村謙二、永井健次郎、近藤吉男、上村繁政、有本慶太郎、原田天象、真鍋和義、岩城近蔵、太田 清、古関 仁、松川国平、古関勘六、青野良助、服部 巖、高橋仙太郎、池田諒文、藤田円一、斎藤孝二、高橋フジメ、荻野貞司、佐伯長吉、小倉 清、村井喜兵衛 △村職員永年勤続者(略)

翌三十七年は本村の開基と定めた紀州団体五十四戸の本村入植年度明治四十五年より起算して満五十年に当り、同年八月一日白滝小学校校体育館を式場として、
 『開基満五十年記念式典』が白滝小学校創立五十周年ならびに石北線鉄道全通満三十周年記念式を兼ねて、内外の来賓二百五十余人余が参列して挙行され、前年の記念式典同様左記のごとき各種功労者の表彰が行なわれた。

△自治功労者(村常勤職員につき略) △納税功労者 伊藤道雄 △消防功労者 吉田一夫、出立貞雄、堀部一由、吉田 勇、山形慶蔵、見上 登、堀田美津雄、石井仁太郎、相馬 清 △開拓功労者 藤田円一、菊地作右衛門、太田 清、丹野清三郎、大庭千代吉、阿部卯衛門、菊地長右衛門、空戸滝之助、相馬勝五郎、横田金之丞、古関勘六、大庭喜代治、故金枝兵重



開基満 50 周年記念式典

分村独立以來すでに滿十五年も経過し、豊かな郷土づくりに意欲をもやす渡辺村政は、昭和三十八年大腸菌やその他の雑菌混入によって飲料不適の水になやまされている地域住民のために、二千六百万円余の巨費を投じて市街全域にわたる簡易水道敷設工事を完成させ、郷土白滝の発展に寄与するところ大であった。

国松村長

昭和四十年秋、上湧別町長選挙に渡辺要白滝村長をかつぎ出そうとした上湧別の渡辺要の後援会員の強い出馬要請により、ついに同四十年九月三十日をもって白滝村長を辞し、同年十月二十五日遠軽町助役の職にあった国松一敏が本村第三代村長として当選した。

翌四十一年八月一日本村開基五十五年、開村二十周年および白滝中学校創立二十周年記念式典が白滝中学校体育館において挙行され、次のごとき各功労者が併せ表彰された。

△自治功労者 山崎政治、後藤貞治、石山久三郎

△消防功労者 野村春信、岡崎永治、児玉一郎、岡田 茂 △納税

功労者 小出光雄、鈴木睦夫、石井国丸、上白滝第二納税貯蓄組合、東白滝第一納税貯蓄組合、白滝村農業協同組合 △開

拓功労者 斎藤喜代太郎、児玉作平、井上糸吉、山本善七、岡崎儀蔵、伊藤寅雄、飛沢長作、佐藤文護、稲垣仙次郎、遠藤栄

治郎、今野信夫 △健民功労者 前田参二

△特別功労者 笠間誠一、遠藤幸治、大沢ヘルノ、広田寛治

なお、本村の発展に大きく貢献された開拓物故者の霊を慰めるため「八月一日正午」サイレン吹鳴と花火を合図に村民こそって、一分間の黙禱を捧げた。

明治末期以来粒々辛苦して豊かな平和郷を築き続けられた本村にも、昭和四十年ころより全国的にみられはじめた過疎化現象の波を受け、年とともに転出する戸口がめだちはじめた。

こうした折、「山村における経済力の培養と住民福祉の向上を図り、あわせて地域格差の是正と国民経済の発

人口と戸数

年次	世帯数	人口	世帯当人口	年次	世帯数	人口	世帯当人口
昭和二十一年	六七五	三、八四三	五・六	昭和三十八年	一、〇三七	四、六五四	四・一
〳二十四年	八〇一	四、四四六	五・五	〳四十年	九九二	四、二八七	四・三
〳二十八年	七九一	四、六五一	五・九	〳四十一年	九四九	三、八二三	四・〇
〳三十年	八五一	四、六四四	五・五	〳四十三年	八八五	三、四三四	三・九
〳三十三年	八五四	四、九五五	五・八	〳四十四年	八五〇	三、二四一	三・八
〳三十五年	九二一	四、七五三	五・〇	〳四十五年	八一九	三、〇四八	三・七
〳三十七年	九一二	四、八一六	五・三				

展に寄与する」ことを目的とする山村振興法が公布され、待望久しきこの法律の公布は後進地に喘ぐ地域の住民にとつては救いの神に等しかった。大雪連峰の東北につらなる文字どおりの高原型山村である本村は、国松村長を中心として全村挙げてこれが指定をうけるべく「白滝村振興企画協議会」を設置して推進体制をしき、綿密な事業計画を立案した結果、ついに念願叶つて昭和四十一年十二月二十四日山村振興法指定町村として指定を受けるに至った。

この日、国松村長は次のごとき談話を発表し、村民とともに喜び合い、よりよき白滝村の建設に、決意のほどを示したのである。

国松村長談話

「多年村民のみなさんと運動をつづけてまいりました山村振興法による指定町村として指定をうけることと

なり、今後の白滝村開発進展のための恒久的施策に、きわめて明るい見通しを得ることができましたことは、まことに喜びとするところであります。これが事業の遂行には村民各位の絶大なるご理解とご協力を切望いたします。

山村振興法の指定をうけた本村は、ただちに山村振興計画にもとづいて施策がなされたが、その重点的施策は次のとおりであった。

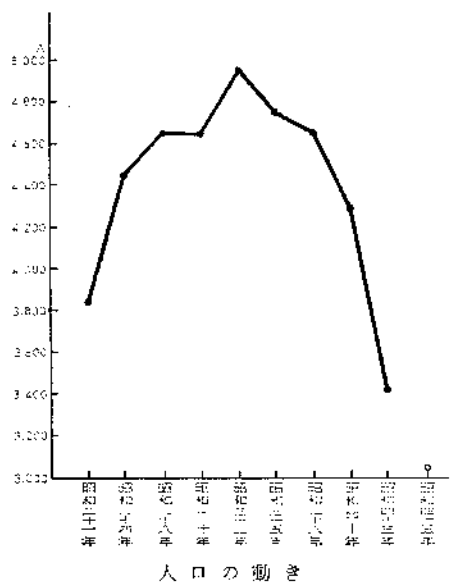
一 交通通信網の整備

二 土地生産性向上のための土地改良事業および機械化などの推進による畑作の振興ならびに経営規模拡大のための農用地造成と経営近代化施設整備などによる酪農の振興

三 低生産性天然林の人工林化を図るための造林事業の推進ならびに林産工業の振興

四 文教施設の整備ならびに社会生活環境諸施設の整備促進
かくして、北見峠改修、支湧別明渠大排水工事、農事放送電話施設事業、諸施設の建設等が年次計画によって着工されたのである。

昭和四十二年十月山内助役は小清水町助役として求められたため本村の助役を辞任、以来助役空席のまま国松



村長一人二役の激務が続き、精力的にして常に前向き姿勢をもって村政が執行されていたが、昭和四十六年三月の定例村議会において、助役設置の意向が打ち明けられ、同年四月一日付をもって谷藤吉雄総務課長が助役に昇格内定をみた。

理事者をはじめ歴代三役は次のとおり。

○歴代出張所及び理事者

項目	歴代	職名	氏名	就任年	月	日	在職期間(年)	備考
時代	初代	遠軽町役場白滝出張所長	小沢喜誠	自昭和十八年十一月十日			〇・二一	
出張所	二代	〃	馬場栄一	自昭和二十年三月			一・四	
出張所	三代	〃	石渡寛蔵	自昭和二十年四月			一・四	
村		村長職務管掌	上野謙三郎	自昭和二十一年八月一日			〇・六	
滝		村長代理助役臨時代理者	三木克己	自昭和二十二年二月十五日			〇・二	
白		村長職務代理者	小出月江	自昭和二十二年四月八日			一・〇	退職
	初代	村長職務代理者	三木克己	自昭和二十三年三月三十一日			〇・一	(助役)
	二代	村長	渡辺要	自昭和三十三年四月三十日			七・五	上湧別町長となる

白滝村	村長職務代理者	山内晴雄	自昭和四十年九月三十日 至昭和四十年十月二十五日	〇・一（助役）
三代村	長	国松一敏	自昭和四十年十月二十五日 現在	

○歴代助役

歴	代	職	名	氏	名	就任 年	月	在職期間(年)
初	代助	助役臨時代理者	三木克己	三木克己	自昭和三十一年八月一日 至昭和三十三年五月三十日			〇・一〇
二	代助	役	三木克己	三木克己	自昭和三十三年五月三十一日 至昭和三十四年三月十二日			一一・一〇
三	代助	役	斎藤秀信	斎藤秀信	自昭和三十五年四月一日 至昭和三十六年八月四日			一・四
四	代助	役	山内晴雄	山内晴雄	自昭和三十六年八月六日 至昭和四十二年十月二日			六・二
	代助	役	谷藤吉雄	谷藤吉雄	自昭和四十六年四月一日 現在			

○歴代収入役

歳	代	職	名	氏	名	就任 年	月	在職期間(年)
初	代収入	役	石渡寛藏	石渡寛藏	自昭和二十二年六月一日 至昭和二十四年三月十二日			一一・九
二	代収入	役	斎藤秀信	斎藤秀信	自昭和二十四年四月一日 至昭和三十一年三月三十一日			一・〇

三	代 入	役 山内晴雄	自昭和三十一年十月一日 至昭和三十一年八月六日	〇・二〇
	取入役職務代理者	越智政雄	自昭和三十一年八月七日 至昭和三十一年三月三十一日	〇・八
四	代 入	役 越智政雄	自昭和三十一年四月一日 現在	
	取入役	越智政雄		

白滝村議會議員定数減 本村議會議員の定員を減ずることは、かねてより議会内において論ぜられており、すなわち、昭和三十年三月の定例村議会、同年四月の臨時村議会、昭和三十四年三月の定例村議会においてそれぞれ議員定数を四人減じて十二名とすることの動議が提出されたが、いずれも否決された。しかし年とともに進む過疎化現象と、定数減に対する村民の世論がたかまり、昭和四十四年三月の定例村議会においてついに「白滝村議會議員の定数を減少する条例」を制定、次の一般選挙（現議員が任期満了となって改選するとき）のときから、定数十六名を十二名とすることとなった。かくして議員定数減の動議が村議会に出されて以来十五年日にしてようやく実を結んだのである。

監査委員 監査委員設置以前の出納検査は村長が臨時出納検査立会人を立会させて執行することになっていた。これがため昭和二十二年五月分村初の村議会において、中山徳蔵、木村忠男を臨時出納検査立会人に指名、爾來任期（当初二年、昭和二十六年より四年となる）によって交替もあった。

昭和三十八年地方自治法の一部改正によって従来任意設置であった監査委員制度が義務設置となったが、本村においてはこれよりさき、昭和三十六年六月の定例村議会において、地方自治における公正と効率を確保するた

め監査委員設置条例を制定、定員を二名となし、地方自治法の定むるところにより知識経験を有する者から一名（任期は三年）を選出した。委員の職務は主として例月出納検査、臨時および定期監査のほか決算審査が行なわれている。

本村の歴代監査委員は次のとおりである。

学 識 経 験 者

議 会 選 出

吉 関 初 夫（昭三六・七就任）
井 村 光 夫（昭三七・七就任—現在）

渡 辺 俊 勝（昭三六・七就任）
布 田 勇（昭三八・五就任—現在）

固定資産評価審査委員会

シャウブ勸告（昭和二十五年七月）によつて税制の改革がなされ、なかでも固定

資産税の評価額決定について、公平にして適正であることは理の当然であるが、課税についての異議の申し立てを受けこれを慎重審査する機関として、固定資産評価審査委員会が設置された。本村においては昭和二十六年村役場事務吏員山内晴雄が固定資産評価員として選任され、同年七月十三日の村議会において、近藤吉男、吉田美代治、女屋三郎の三名が審査委員として選任され、現在評価員には谷藤吉雄総務課長が選任されている。

なお、歴代審査委員は次のとおり。

氏 名

選任年月

辞任年月

近 藤 吉 男	昭和二十六年七月	昭和三十二年八月
吉 田 美代治	昭和二十六年七月	昭和二十六年十月
女 屋 三 郎	昭和二十六年七月	昭和二十九年十二月
中 村 弥 太 郎	昭和二十六年十一月	昭和三十三年十一月

阿部 右衛門	昭和二十九年十二月	現 在
高橋 利作	昭和二十二年八月	昭和三十五年九月
古閑 仁	昭和二十二年十一月	現 在
伊藤 仁郎	昭和二十五年十月	昭和三十八年三月
玉川 慶次郎	昭和三十八年三月	昭和四十四年三月
笠間 誠一	昭和四十四年四月	現 在

公平委員会

昭和二十五年十二月地方公務員法が公布され、その第七条三項に「人口十五万人未満の市、町、

特別区及び地方公共団体の組合は、条例で公平委員会を置くものとする」と規定され、公平委員会は職員の間、勤務時間その他の勤務条件に関する措置の要求を審査し、判定しおよび必要な措置をとったり、あるいは職員に対する不利益な処分についての不服申し立てに対する裁決または決定することとなった。これがため本村においても昭和二十六年三月の定例村議会において「白滝村公平委員会設置条例」を設定、同年七月十三日三名の委員が選任された。任期は当初条例の定むるところにより、二年委員、三年委員、四年委員としていたが、まもなく四年任期に訂正、逐次更迭され、昭和四十二年三月より網走支庁管内各町村共同の委員会が設置されるに及んで町村独自の委員会はなくなった。

歴代委員は次のとおりであった。

氏 名	就・退 任 年 月	在任期間 (年)	氏 名	就・退 任 年 月	在任期間 (年)
井村 謙二	自昭和二六・七 至四二・三	一六・九	後藤 貞治	自昭和二六・七 至三〇・四	三・一〇
近藤 吉男	自昭和二六・七 至三四・四	七・一〇	的場 正夫	自昭和三〇・五 至三一・一	一・七

藤原 清	自昭和三一・一二至三四・八	二・九	杉谷 義憲	自昭和三四・九至三七・八	三・〇
山本 善七	自昭和三四・五至四二・三	七・一一	田中 霞	自昭和三七・九至四二・三	四・七

第七章 選挙

世界の大国を向うにまわしての太平洋戦争が二発の原爆投下によって全く戦意を喪失、昭和二十年八月十五日敗戦という悲運に泣いたのであるが、終戦以来占領軍の占領政策によってあらゆる面において軍国主義的な匂いのする政策についての一大変革がなされ、敗戦間もないこととて、なすがままの占領政策指令には従順でなければならなかった。

選挙関係においても昭和二十年十二月選挙法の改正が行なわれ、初めて婦人の参政権が認められ満二十歳以上の男女はすべて選挙権を有することとなり、翌二十一年四月十日執行の戦後初の衆議院議員選挙から改正選挙法が適用されたが、同二十一年十一月三日、日本国憲法が公布されこれにもなつて選挙法の一部修正がなされ、翌二十二年四月二十日、選挙区を全国区と地方区に分けられた参議院議員選挙が、また同年四月二十五日には衆議院議員選挙が執行された。この日より衆議院議員選挙は前回の本道を二つの選挙区に分けていたいわゆる大選挙区制が五つの区に分ける中選挙区制と変り、かつ連記制が単記制にと投票方法も改正された。

今日施行されている各種選挙における投票心得なるものは一般的な常識を逸脱しない限りさしてことあらため

て記すべきものもないが、時代的差こそあれ往昔のそれはなかなかにして謹厳そのものであったようだ。いま手許にある明治四十五年五月十五日執行の衆議院議員選挙投票者心得を左に記して廿日の場景をしのびたい。

選挙人心得

- 一 投票所は午前七時に開き午後六時に閉づ。
- 二 選挙人は、自ら投票をなすべきものとする。
- 三 選挙人は、投票簿に捺印を要するにより、必ず印章を携帯すべし。
- 四 選挙人は、投票所に入らんとするときは、入口階下に設けある下足番に、下足札引換に履物、傘、外套等を渡したる上、樓上受付に至り、到着番号札を受取り、選挙人控所に入り、到着番号順により、係員の呼入るを待つべし。
- 五 選挙人は、投票管理者及び投票立会人の面前に於て、其住所氏名を自称し、選挙人名簿の対照を経、投票簿に捺印の上、到着番号札と引換に投票用紙を受取るべし。
- 六 投票用紙を受取りたるときは、投票記載所に至り、投票用紙面、指定の箇所へ、被選挙人一人の氏名のみを記載し、折封の上、自身投票函に投入すべし。
- 七 投票記載所へは選挙人一人の外、入る可からず。
- 八 投票用紙を受取りたる選挙人を投票上、事故ありて、退出せんとするものは、先きに交付を受けたる投票用紙を係員に返戻したる上、退出すべし。
- 九 投票用紙を汚損し、再交付を請はんとするものは、先きに交付を受けたる用紙と引換に受取るべし。
- 十 投票所内にありては、すべて係員の指示にしたがい謹肅を旨とし、喧騒の行爲あるべからず。
- 十一 投票を終りたるものは、投票所出口より退出すべし。

昭和八年五月一日執行の二級町村制最後の遠軽村議会議員選挙に先立ち、遠軽村において初めて遠軽村議会議員選挙に関する制限および協定等を定め、選挙費用の軽減、清潔を旨とする選挙を行なうべく同八年四月六日左

のごとき「おふれ」を出した。現今のあらゆる選挙においても表向きは、選挙体においてもそれぞれ規制が加えられているものの内幕は膨大な選挙費用が動くといわれているが、今も昔も明るく正しい選挙の執行に監督官庁において心を痛めていることがうかがい知ることができる

（遠軽村会議員選挙に関する制限及び協定事項（昭和八年四月六日可決））

種 目		制限及び協定事項	
事項に関する制限	辨当料	一食に付金五十銭以内	
	宿泊料	泊に付金二円以内 (茶代、祝儀を含む)	
	中馬賃	実費支給	
	実費前渡の制限並に選挙人に旅費宿泊料、飲食料等立替禁止	禁止す	
	事務所数の制限	一候補に付一カ所	
事務所に係る制限	事務所設置場所の制限	宿屋、料理屋、飲食店等に設置せざることを	
	事務所届出	事務所設置したときは即時候補者より届出のこと	
選挙事務に関する制限	事務所所属員届出	事務員選任したときは即時候補者より届出のこと	
	補考・届出は最寄巡査駐在所にて支障なし		
種 目		制限及び協定事項	
事項に関する制限	運動者数の制限	一候補に付十人以上	
	運動者の資格制限	遠軽村有権者たること	
	運動者の住所氏名届出	選任と同時に候補者より届出のこと	
	運動者運動区域の届出	村内一円	
	費用額の制限	一候補に付金二百円以内	
費用に関する制限	費用計算方法	第三者の費用も加算す	
	費用に関する帳簿備付	備付のこと	
選挙事務に関する制限	費用の届出	選挙終了後五日以内に届出のこと	
	立看板の簡数制限	一候補に付五枚以内	
その他	立看板告示のために用いる張札枚数の制限	一候補に付三十枚以内	
	候補者の届出	立候補せる場合即時届出のこと	

村長選挙

従来町村長の選任方法は別章において既述のとおりであるが、北海道一級町村制がしかれている町村においては、町村会で選挙し北海道長官が認可することとなっており、二級町村制がしかれている町村においては、北海道長官の任免となっていたが、選挙法の改正によってこれが公選となり、選挙権を有する住民の手によって町村長を選び出せることとなった。

本村においては戦後の独立分村であったため、旧町村制の適用はうけておらず、首長選挙は初代の折から改正選挙法によって施行されたのである。かくて昭和二十二年四月五日住民の直接選挙による分村最初の村長選挙が執行されることとなったが、結果は対立候補が出ず同日小出月江の無競争当選となったのである。

昭和二十六年四月二十三日第二回村長選挙が執行されたが、前小山村長と井村謙二、中山親孝らの推す渡辺要との激しい選挙戦が展開、結局一千票を上回る大差をつけて小出月江が再び首長の座を守り抜いた。

村長公選の結果

歴代	回数	公選	執行年月日	当選者	得票数	党派別	備考
初代	第一回	昭和二二・四・五	小出月江	(無投票)	無所属		渡辺要対立候補(得票数五二二票)が出て激戦となる。投票率九九・一%
	第二回	二六・四・二三	小出月江	五三六票			
	第三回	二〇・四・三〇	小出月江	(無投票)			
二代	第四回	三三・四・三〇	渡辺要	(無投票)	無所属		対立候補・田島寿忠(一五・一一票)、加藤与市(〇票)。投票率八八・三三%
	第五回	三七・四・二二	渡辺要	一九九二・八九票			
三代	第六回	四〇・一〇・二五	国松一敏	(無投票)	無所属		
	第七回	四四・一〇・一九	国松一敏	(無投票)			



遠軽村第1回村会議員

(前列右から2人目、岸利七、後列左から2人目、佐藤勇次郎)

項目	選挙日	当選者	当選者	備考
同第1回 議選	大正8年5月1日	佐藤勇次郎(白滝) 三沢恒助 岸利七(奥白滝) 山郷泰之助	菅井専助 後藤憲徳 小橋弥右衛門 相田高藏	佐藤貞信 山本宇作 清水藤次郎 佐藤貞信

村議会議員選挙

大正七年六月二日執行の上湧別村第五回村議会議員選挙において、なみいる多選の候補者に伍して白滝在住の紀州団体長であった植芝盛平は新人として立候補、定員十二名のなか見事に金の射とめて当選、白滝初の議会議員として大正八年四月遠軽分村に至る間、若き手腕をふるった。

大正八年四月上湧別村より決を分って独立した遠軽村は、もちろん丸瀬布、白滝をその管轄としたのは当然であるが、遠軽分村後最初の村議会議員選挙が大正八年五月一日執行され、十二名の新議員が誕生した。この第一回選挙以来白滝分村に至るまでの間、毎回の選挙で白滝選出者の当選がみられた。遠軽町史より各回ごとの当選者を羅列し本村選出の古老の面々をたどってみた。

昭和九年四月、はじめて白滝の分村意見が出て以来幾星霜を送り

回 普 通 選 挙	回 第 五 村 議 選 挙	回 第 四 村 議 選 挙	回 第 三 村 議 選 挙	回 第 二 村 議 選 挙
昭和4年5月1日	昭和2年5月1日	大正14年5月1日	大正12年5月1日	大正10年5月1日
横山立男 飯村六衛 因末次郎	後藤憲徳 阿部敏二 菊地勤 相吉鍾平	中川満斎 市原多賀吉 菊地勤 山口助蔵	大庭重次 井村謙二 阿部定吉 伯谷弥平	山本弥吉郎 安藤幸七 佐藤平一郎 中野造酒蔵
			(奥白滝) (白滝)	(支湧別)
佐藤幸吉 伯谷弥平 沖山茂吉	山口助蔵 佐藤主蔵 宮城昌章 横山正平	菊地明十郎 羽根坂仙石 篠原音松 後藤憲徳	秋葉長十郎 後藤憲徳 佐竹宗五郎 佐田万次郎	三沢恒助 佐藤金吾 菅井専助 佐藤寅信
志鎌金助 友田英策 小山田清吉	小山田清吉 佐竹宗五郎 佐藤幸吉 友田英策	福田彦造 大柴喜治 古川貞七 佐田唯二	仙頭伊之助 倉本筆吉 佐藤寅信 菊地明十郎	須見勝三郎 渡辺政五郎 清水藤次郎 佐竹宗五郎
	(支湧別)	(東白滝)		
定員24名 となり任期4年となる				

第 一 回 普 通 選 挙	第 二 回 普 通 選 挙	第 一 回 普 通 選 挙
昭和9年6月30日	昭和8年5月1日	昭和4年5月1日
市原郡 篠原 音喜平 篠原 明十郎 横山 立男 奥原 金作 横山 正平 中沢 山五郎 黒川 馬太郎	上原 哲平 阿部 定吉 篠原 音松 横山 立男 米山 六太郎 羽根坂仙右衛門 後藤 憲徳 石川 要吉郎	阿部 喜平 篠原 音松 岸 利七 小山田 利七 小林 染吉 (奥白滝)
仲屋 勇次郎 中山 徳蔵 因山 末次郎 清水 藤次郎 鈴木 富治 上原 哲平 後藤 憲徳 牛丸 勝次郎	清水 藤次郎 宮城 片章 秋元 佐之吉 菊地 勤 佐竹 宗五郎 志鎌 金助 小原 徳司郎 松田 流治	徳正 高之助 羽根坂仙右衛門 田村 寅蔵 中山 徳蔵 中川 満彦 (支湧別)
岡田 重吉 井村 謙二 徳正 高之助 小山田 利七 志鎌 金助 吉川 文蔵 桜井 鉄次郎 鈴木 良吉	服部 留五郎 鈴木 富治 飯村 六衛 横山 正平 中山 徳蔵 牛丸 勝次郎 原田 安五郎 田村 寅蔵	後藤 憲徳 佐竹 宗五郎 横山 正平 相吉 徳平 宮城 昌章 (奥白滝)
昭和9年4月1日遠軽町となる		定員24名となり、任期4年となる。

回 選 議 第 町	三 選 議	回 選 議 第 町	二 選 議
昭和17年 6 月30日		昭和13年 6 月30日	
上原哲平	篠原音松	中沢山五郎	因山三之助
飯村新平	鹿内竜雄	飯村六衛	黒川馬太郎
市原郡治	清水藤次郎	石原須市	大庭重次 (奥白滝)
鈴木富治 (奥白滝)	安彦久元	因山末次郎	仲屋勇次郎
横山正平 (旧白滝)	丹羽実市	松田流治	北川庄助
吉野広政	辻源一 (支湧別)	角谷栄政	高木岩吉
市原郡治	渡辺政敏	鈴木富治 (奥白滝)	中山徳蔵 (支湧別)
上原哲平	南正義 (白滝)	布田富蔵	奥原金作
中沢山五郎	牛丸勝次郎	林由一	菅野源七
市原郡治	鈴木富治 (奥白滝)	中山末次郎	飯村六衛
横山正平 (旧白滝)	横山重吉	阿田重吉	菊地明十郎
中山徳蔵 (支湧別)	横山正平	横山重吉	黒川馬太郎
別名、翼賛選挙ともいわれた			

幾多の審議を了していたが、昭和二十年十月太平洋戦争終結をまちかまえていたかのごとく分村問題が再燃し、活発な動きが見えはじめ、住民大会を開いて分村議決をするなどしてついに昭和二十一年八月一日白滝村誕生となったのであるが、ただちに村長職務管掌がおかれ、翌二十二年四月五日の村長選挙につづいて同年四月三十日

分村初の村議會議員選挙が執行された。

項目	選挙日	当選者	備考
第一回 選挙	昭和二年 四月三〇日	木村忠男 中山徳藏 野沢正市 前田勘治	箭内(二年九月死亡) 的場・木村(二四年三月辞職)
補欠選挙	昭和二年 四月三〇日	西尾博文 佐藤甫 近藤吉男	三名欠員が生じたため
第二回 選挙	昭和二年 四月三〇日	丹羽実市 布田富藏 中山徳藏 原田天象	布田(二八年二月辞職) 石井(二七年四月死亡)につき、中山親孝繰上り選となる
第三回 選挙	昭和三年 四月三〇日	松山勇 渡瀬正司 山本善七 奥山吉弥	田坂(三〇年七月公職選挙法違反、公民権停止)により、中山親孝繰上り選となる
第四回 選挙	昭和四年 四月三〇日	味戸兼一 菊地善吾 南政雄 小山田昌光	藤原・川端(二七年五月辞職) 岸(三七年六月死亡)

補欠選挙	昭和三七 年七月二日	古関初夫	中山親孝	高橋行之	三名欠員が生じたため
第五回 選挙	昭和三八 年四月三〇日	松浦健藏	井上市藏	小山田昌光	早川武夫
		森谷吉郎	竹山才太郎	大庭千代吉	山崎政治
		柴田房藏	古関初夫	南政雄	高橋行之
		布田勇	松本初	西尾博文	丹羽実市
補欠選挙	昭和四〇 年一〇月二四日	野沢正市			一名欠員（竹山）による補選
第六回 選挙	昭和四二 年四月二八日	松浦健藏	菊地善吾	植村貞吉	西尾昭男
		小山田昌光	野沢正市	大庭千代吉	森谷吉郎
		高橋行之	布田勇	大泉澄男	山崎政治
		柴田房藏	南政雄	古関初夫	丹羽実市
補欠選挙	昭和四四 年一〇月一九日	五十嵐巖			一名欠員（西尾）による補選
第七回 選挙	昭和四六 年四月二五日	新保国英	小山田昌光	古関一男	本田茂
		森谷吉郎	松浦健藏	高橋行之	藤本鍾彦
		五十嵐巖	布田勇	山崎政治	古関初夫

議会議長と副議長

分村後第一回の村議会議員選挙が昭和二十二年四月三十日執行され、その第一回日の村議会が五月三十日に開催され議長に布田富藏が、副議長に井村謙二が選出された。以来歴代の議長、副議長は次のとおりである。

(議長)

代	氏	名	就・退 任年月日	在 任
初代	布田	富藏	自昭和二年五月三〇日 至昭和二年一月二四日	五・八年
二代	中山	徳藏	自昭和二年四月三〇日 至昭和二年一月一八日	一・四年
三代	丹羽	実市	自昭和二年四月二八日 至昭和二年五月二五日	一六・〇年
四代	古関	初夫	自昭和二年五月二一日 至昭和二年五月二一日	

(副議長)

代	氏	名	就・退 任年月日	在 任
初代	井村	謙二	自昭和二年五月二〇日 至昭和二年四月二二日	四・〇年
二代	中山	徳藏	自昭和二年五月一八日 至昭和二年一月一八日	二・九年
三代	中山	親孝	自昭和二年四月三〇日 至昭和二年四月三〇日	一・四年
四代	岸浦	吉吉	自昭和二年四月三〇日 至昭和二年五月一八日	四・〇年
五代	西尾	博文	自昭和二年四月二八日 至昭和二年五月一八日	八・〇年
六代	古関	初夫	自昭和二年五月二一日 至昭和二年五月二一日	四・〇年
七代	山崎	政治	自昭和二年五月二一日 至昭和二年五月二一日	

選挙管理委員会

昭和二十一年十月地方制度の改正法律が公布されて、これまで市町村の行なっていた選挙事務を市町村議会議員選挙管理委員会において管理することになった。

昭和二十二年四月地方自治法の制定によって白滝村選挙管理委員会を設置、各種の公職選挙事務一切を管理することになった。

歴代選挙管理委員ならびに補充員は次表のとおりである。

就任年月日	委員長	委員	補充員	備考
昭和二三・五・三〇	吉田 美代治	高橋喜久雄 佐藤 甫 三木 克己	渡辺 進 小島 一郎 新保 国英 鈴木 英男	
昭和二五・六・一	吉田 美代治	高橋 利作 渡辺 進 斎藤 秀信	小関 初夫 丹野 清七 藤川 勝治 鈴木 英男	
昭和二八・八・七	鈴木 長作	前田 忠治 安西 光義	岡 竹松 内田源三郎 熊谷 貞雄 熊谷 貞雄	昭和二三年五月より委員の定員四名となる
昭和三一・七・三	鈴木 長作	前田 忠治 岡 竹松 前田 きち	内田源三郎 熊谷 貞雄 奥原 一雄	
昭和三四・〇・一	野村 津義男	近藤 敏雄 中山 安徳 谷藤 テル	谷 亀吉 菅原 政雄 佐久間只雄 菊地 政夫	任期四年となる
昭和三七・一〇・一	山内 晴雄	近藤 敏雄 中山 安徳 谷藤 テル	中村 友禰 菅原 政雄 佐久間只雄 菊地 政夫	
昭和四一・一〇・一	近藤 敏雄	中山 安徳 岩城 義男 小沢与之助	菅原 政夫 渡瀬 慎雄 菅原 政雄 中村 友禰	
昭和四五・一〇・一	近藤 敏雄	中山 安徳 岩城 義男 小沢与之助	菅原 政雄 中村 友禰 渡瀬 慎雄	

従来行なわれてきた各種の選挙において、選挙管理委員会における常日ごろの地道な啓蒙活動が深く浸透し、本村民の選挙に対する意識が高く、次表にみられるごとく投票率は常に高率を示し、網走管内においても毎回上位を占めている。

選挙年	選挙月	執行日	選挙区分	有権者 (人)	投票率 (%)	備考
昭22.	4.	5	官戦	1,797	56.2	村長選無投票
22.	4.	16	官決	1,797	84.3	
22.	4.	20	参議院議員	1,885	75.7	
22.	4.	25	衆議院議員	1,884	70.1	
22.	4.	30	道議会・村議会議員	1,826	90.2	投票率表彰 (道選管, 知事)
23.	10.	5	道教育委員	1,814	74.0	
24.	1.	23	衆議院議員	1,948	90.8	投票率表彰 (道選管, 知事)
24.	4.	30	村議会議員補欠	1,962	93.0	
25.	6.	4	参議院議員	2,044	95.4	投票率表彰 (全国選管)
25.	11.	10	道教育委員	1,991	92.9	
26.	4.	23	村長・村議会議員	2,093	99.1	投票率表彰 (全国選管)
26.	4.	30	知事・道議会議員	2,081	96.3	投票率表彰 (道選管, 知事)
27.	10.	1	衆議院議員	2,146	63.5	
27.	10.	5	道教育委員	2,111	85.2	
28.	4.	19	衆議院議員	2,138	94.2	
28.	4.	24	参議院議員	2,138	92.7	
30.	2.	27	衆議院議員	2,277	91.0	
30.	4.	23	知事・道議会議員	2,282	91.9	
30.	4.	30	村議会議員	2,253	96.7	村長選無投票
31.	7.	8	参議院議員	2,290	88.4	
33.	5.	22	衆議院議員	2,334	87.0	
33.	9.	14	道議会議員補欠	2,216	58.1	
34.	4.	23	知事・道議会議員	2,269	91.2	
34.	6.	2	参議院議員	2,371	90.5	投票率表彰 (自治省)
35.	11.	20	衆議院議員	2,426	83.1	
37.	7.	1	参議院議員	2,463	91.5	
37.	4.	22	村長	2,296	88.3	
38.	4.	17	知事・道議会議員	2,364	93.3	
38.	4.	30	村議会議員	2,365	97.6	
38.	11.	21	衆議院議員	2,466	86.6	
40.	7.	4	参議院議員	2,316	88.0	投票率表彰 (網走支庁長)
40.	10.	24	村議会議員補欠	2,120	82.2	村長選無投票
42.	1.	29	衆議院議員	2,229	88.7	投票率表彰 (網走支庁長)
42.	4.	15	知事・道議会議員	2,139	91.9	
42.	4.	28	参議院議員	2,097	96.2	
43.	7.	7	衆議院議員	2,149	87.8	投票率表彰 (自治大臣)
44.	12.	27	衆議院議員	1,984	92.8	
46.	4.	11	知事・道議会議員	1,839	93.8	
46.	4.	25	村議会議員	1,791	97.3	

明るく正しい選挙運動推進協議会

選挙を通じて政治を良くする運動をより効果的に促進させるため、昭和三十九年四月本村にも推進協議会が設置された。この協議会は選挙管理委員会委員と村から委嘱された推進員によって組織され、協議会を通じて話し合い活動やポスター、標語の作品募集など明るく正しい選挙実現のための諸行事が計画されてきたが、近年協議会自体にマンネリズム化の傾向がみえはじめ、推進活動は全く有名無実の様相を呈している。

永久選挙人名簿制度

選挙人名簿は従来まで毎年九月十五日現在で職権により調製される「基本選挙人名簿」と、選挙のつど選挙人の申し出にもとづいて調整される「補充選挙人名簿」の二様であったものが、人口移動の激化、社会生活の複雑化のために選挙人の資格を調査することが困難になり、そのために生じる選挙人名簿の脱漏、誤載、二重登録等を防止し、さらに毎度名簿を作成する事務の合理化をはかるため、異動のあった者だけを申告にもとづいて調査のうえ選挙人名簿に登録する「永久選挙人名簿」制度が昭和四十一年九月より採用された。

●明るく正しい選挙の歌

この一票に

一 窓をひらけば、風に散る

ただひとひらの、この紙の

とる手になんて、重いこと

この一票に、この一票に

われわれの、あすの暮しが

かかっている、かかっている

二 空はすみまで、晴れわたる

ただひとひらの、コバルトが

こころにしみる、美しさ

この一票に、この一票に

われわれは、同じ気持を

こめている、こめている

三 とじたまぶたに、浮かぶのは

ただひとすじに、輝やいて

希望の朝に、つづく道

この一票に、この一票に

われわれの、もえる願いが

あふれてる、あふれてる

第八章 眼下の行政

本村第三代目の村長として全村民の期待をになつて昭和四十年十月二十五日当選した国松一敏は、多年にわたつて遠軽町助役として、信太遠軽町長の片腕となつて遠軽発展のため貢献した手腕はきわめて高く評価され、本村に就任以来前渡辺要村長のあとをついで意欲的に、かつ常に前向きな姿勢をもつて村政を担当、山内晴雄助役（昭和四十二年十月小清水町助役として離村）を女房役として、丹羽実市村議会議長、西尾博文同副議長（昭和四十二年四月より古閑初夫副議長となる）ならびにその他十四人の議員諸公ともども“和”の精神をもつて本村発展のため常に研鑽を積み重ねてきた。



国松村長

近年全国的傾向の僻地の過疎化により、産業に乏しい本村は過疎現象をまともに受け、昨日は一戸明日は一人と道内の都市へ、あるいは本州の工業地帯へと住みなれた白滝をあとにして転出し去り、昭和四十年と四十五年の国勢調査結果によると、わずか五カ年間に世帯数が百七十七戸、人口で一千百六十七人の多きにのぼる減少（二八・四％）となった。こうした過疎化による振興対策として全村民一九となつての請願運動が突り、昭和四十一年十二月“山村振興法指定町村”として指定を受けるところとなり、これが振興に遠大な事業計画を樹て、理想郷建設に歩み一つ前進しつつあることは全村民等しく重大関心を抱

き注目するものであるとともに期待もまた大であらう。

村政担当すでに六年目を迎えた国松村長は、激務に堪え抜きながらもますます円熟した手腕を発揮し、必ずしも豊かでない財政を最大源に活用、健全財政を堅持し、住民の声を肌で感じ、住民が真に求める豊かな村づくりに進んでいる。昭和四十五年三月開催された第二回定例村議会は年度当初予算を決定する議会でもあり、十二日から四日間にわたって審議されたが、当時の記録をたどって、村長の村政執行方針ならびに一般質問の様々を列記してみると

村政執行方針

「地方行政においては立遅れの著しい行政施設の整備を積極的に進めるとともに、過疎対策、広域市町村圏の振興、総合農政の展開、人間尊重に起因する公害および交通災害対策など幾多の必要な諸施策が山積し、新たな財政需要の増高する要因を数多くかかえながら、昭和四十五年度予算編成を迎えた。特に本村においては人口の過疎化、自主財源の減少等が顕著となりつつあり、これらを背景にしながらも一層の住民福祉の向上と産業の開発、商工業の進展など、これが実施には多くの困難があるが、住民ともども努力を傾けて一つ一つを克服し、住民の生活水準の向上につとめ行政の高度化をはかることが本村の大きな課題である。昭和四十五年度の予算編成にあたっては先ず、健全な財政を確立しながら、極力経常的な諸経費の節減をはかって、投資的政策事業費の増大と効率的な配分を考慮して重点施策を策定した。

一 村民税、固定資産税等住民基本税の減税

二 国民健康保険税の軽減

三 道路交通の確保（中央道路継続改良、橋梁の永久橋化、バス交通の確保、既存道路の維持整備）

四 社会児童衛生福祉の向上（児童遊園地の整備、保育所施設の充実、公営住宅の増設、高齢者年金制度の新設、隔離病舎の広域化、国保事業助産費葬祭費補助）

五 地域諸産業の発展施策（農業振興資金の新設、商工振興資金の貸付緩和、酪農の振興）

六 教育施策の充実、郷土館、プールの建設、教育費父兄負担の軽減）

以上これが予算は、一般会計一億九千八百八十四万円、簡易水道事業特別会計四百六十万円、国民健康保険事業特別会計一千四百三十六万円、しめて合計二億一千八十万円の策定をなし可決をみたわけである。

各項月別に施策の概要を眺めてみると、総務関係においては、財産造成の中心である公有林整備事業については、第三次施設計画第二次事業として造林新植一八畝ほか、補植、保育事業の実施、職員住宅等の管理については計画的に老朽住宅を新築し、白滝中学校校長住宅の新築を行ない、現交通事情上、交通安全対策に力を入れて交通指導員の増員をなし指導態勢の強化をはかる。

民生関係においては、住民の生活を向上させ住みよい環境づくりをして豊かな村で健康な日々を送り、すこやかな青少年を育成してゆくことを目的とし、敬老年金制度を新設し、高齢者に年金を支給する。また子供遊園地施設への助成を行ない地域子供会育成に手を差しのべ、僻地保育所の内容充実をはかるほか、遠軽町ほか三カ町村伝染病隔離病舎組合に加入し伝染病発生における対策とし、さらに環境整備については一層の環境美化に努めるとともに成人病対策の強化、乳幼児の一斉検診の充実等住民の健康管理のための施策を充実してゆく。

農林業関係については、山村振興事業を中心にして基幹作物の生産増強に重点を置き、支作採種は事業、石礫

運搬補助事業、てん菜移植栽培床土運賃助成等農業振興励事業等の計上、農地基盤傾斜地整備継続事業、優良ひん牛導入資金利子補給、牧野の整備などの実施、さらに農業振興基金制度の新制定、麦類生産施策としての機械の導入。

林業の振興については国有林、公有林、民有林を通じ林力の増強に力を入れる。

商工関係については商工業振興のために商工会を通じて振興補助金の交付、中小企業振興資金の利子補給、中小企業資金貸付枠の拡大と貸付期限の延長。

観光面においては散策道路の造成、ひらやま登山口の整備等積極的な発展策を講じる。

土木関係については、山村振興道路、橋梁整備計画にもとづき、中央道路改良工事の継続事業をはじめ村道の維持補修、架橋事業の施工など。また道営特別低家賃住宅の新築を道に強力に要請し住宅難の緩和をはかる。

教育関係については、父兄の教育費負担軽減、教育の用に供する諸経費の増額はもちろん、簡易プールの新設、郷土館の建設、北見バス株式会社に委託の方式によるスクールバスの運行等、さらに青年、成人、婦人の社会学級充実をはかる。

その他特別会計である国民健康保険事業、簡易水道事業など、いずれも健全な運営をはかり、住民福祉の向上に意を注ぐ。

以上本村発展のため多額の予算を策定し、これが村政の執行かつ円成には、国松村長をはじめ古閑初夫村議会議長職務代理者を中心として議會議員、役場吏員、さらには住民一体となって「おらが村」の繁栄に前進を続けているのである。

なお、例年三月に開催される次年度の予算審議を主目的とした定例村議会は、愛村心の発露から特に活発な質問が理事者に対して浴びせられるが、昭和四十五年第二回定例村議会（三月開催）一般質問の中からその一部を拾って、行政の「あゆみ」を知る材料としたい。

○質問

日常生活の不便の解消をはかる上から集落移転の考えはないか。

△回答

奥地でも住めるように交通等の確保により第一段階は解消したい。また、集落再編成事業等は国の施策ともなっているが共同でなければならない。個々の生活改善のため移転することであれば相談にのりたい

○質問

今後の北見バスの村内の運行はどうなるのか

△回答

村が北見バスに運行を委託することになった。運行回数も一往復増便して一日三往復となる

○質問

最近学校火災が多発している。教職員の宿日直廃止後どのように対処しているか

△回答

校長には常に伝達をしているし、また不備な箇所は整備をしている。なお日中については校長および教頭が、夜間については公務補がこれに当って万全を期している

○質問

石礫除去は投資が大きいため経済がともなわないので、これに代って道営開拓パイロット事業で置土をする計画のようであるが、これに必要な土取場の確保はできたか

△回答

土取場は六カ所調査し、訓子府農業試験場に依頼し成分の分析をした結果、不合格の土取場があり村内には適当な土取場がないので、肥料によってこれを補うことにして利用することにした。なお、石礫除去については本年度、村、受益者および採石業者が各三分の一負担して施行する計画で村費六十万円の予算を計上している

○質問

回営町晴明きよ工事は、昭和四十五年度五六〇疋施行というところであるが、計画年度までに完成しないのでないか。また予算減少によって計画が縮小されるのではないか。

△回答

第二年度日の要求は四千万円であったが、米の生産調整の関係で復活できず三千万円の枠付けとなった。予算が減少された場合は延長はそのままであるが、工法を変更されることも考えられるので計画年度までには完成するように今後努力する。

○質問

白滝中学校に黒曜石の加工設備をしたが、現在までの利用状況は如何

△回答

承知していないが、買い置きの原石があるので、これに要する費用は予算に計上していない

○質問

生活保護法による生活扶助の基準が低いようであるが、この内容はどうなっているのか

△回答

国で定めた基準であるので村のみでは善処できないが、地域担当の民生委員とよく協議して、社会福祉協議会で対処する場合も考えられる。なお国において昭和四十五年度には前年度より一五割位引上げられる予定である

○質問

過疎対策については国および道において積極的に推進しているが、本村においてもこれに対処すべく長期総合計画を樹立する必要があるのではないか

△回答

今国会に提案を予定している過疎対策振興法が通過されればこの法律と並行して十カ年の長期総合計画を樹立する考えである。

○質問

観光推進、また過疎対策上からも温泉ボーリングによる温泉開発を考えたことはないか

△回答

過去の電探により高温の地帯もあるように聞いている。開発に対処してゆきたい

○質問

民間放送テレビの難視聴地帯を解消せられたい

△回答

民間放送テレビ中継所の建設はNHKとちがい村の負担が非常に多くなる。今後隣町とも協議しながら内容を検討し期待にそうよう努力する

○質問

昭和四十五年度中の離農戸数と転出先を知りたい

△回答

離農決定九戸ある。そのほかに離農予定者二、三戸ある。転出先は村外が二戸で、あとは白滝市街に転居する予定である

○質問

国鉄財政再建十カ年計画によれば、小駅は廃止されることになっているが、本村の場合、下白滝、上白滝、奥白滝の各駅が廃止される予定である。今からこれに対処すべきではないか

△回答

管内ブロッツ町村で協議している。時期を失わないよう対処する考えである

○質問

離農者の負債対策はどうなっているか

△回答

離農跡地の引受け者が負債を肩替る等、農協と政府資金の借入で措置している

○質問

天狗岳スキー場は国設であり、国で管理するものと思うが、その内容如何

△回答

昭和四十三年から国の指定するスキー場となっている。管理段階ではA・B・Cがあり、天狗岳スキー場はC級指定である。C級は指導標および案内標は国で設置し、その他は村等で行なう事業に対して国が協力することになっている

○質問

水道会計には毎年度一般会計より繰出しているため、水道料の値上げを考えているようだが、値上げすれば利用者の負担増となるので、未加入者の解消によって増収をはかるべきでないか

△回答

現在のところ鉄道の加入が一番大きいのであるが、それ以外についてはあまり期待できない。今後水道事業の長期計画をたて水道料についても検討する

○質問

白流中学校火災発生の場合は水利が不使である。付近に大型の貯水槽設置を考えるべきでないか

△回答

現在は消火栓二基と側溝の水を使用する以外に水利がない。今後直轄明きよが通るので今より水利は良くなる

と思うが、白滝中学校新築のことでもあるので併せて研究したい。
白滝村役場の人事配置は左表のとおり。

敏 一 松 国 長 村												
雄 吉 藤 谷 役 助												
課 名		課 務 総		課 業 産		課 生 民						
課		事務取扱 助役 谷 藤 吉 雄		主 事 佐々木 長兵衛		主 事 井田 光 一						
長		主事 雄 主事 輝 佐子 補 金 課長										
係		庶務係 主事 吉田 敏 充		農政・商工係 主事 富 塚 清		拓殖係 主事 古 関 修		畜産係 主事 井上 健 治		林務係 主事 伊 藤 清		
長		財務係(兼) 主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		
係		主事 吉田 敏 充		主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		主事 金子 輝 雄		
員		主事補 馬場 敏之 事務補 荻野あや子		主事補 山崎 初男 事務補 中山久美子		主事補 上家 道也 主事補 丹野 博		主事補 小沢 恵子		主事補 岩船 定男 (兼)事務補 中山久美子		
		主事補 浅水 邦昭 主事補 武田 順子		主事補 飛沢 美好 主事補 大泉 幸子		主事補 山岸 繁		(兼)主事補 武田 順子				
		主事補 山岸 繁										

収 入 役	村 長 国 松 一 敏					
	助 役 谷 藤 吉 雄					
越 智 政 男	議 会	教育委員会		保 育 所 長	施 設 課	
	主 事 務 局 長 主 事 齋 藤 省 典	教 育 長 太 田 実		主 事 渡 辺 清	技 師 後 藤 義 春	
	主 事 補 山 崎 公 男	主 事 社 会 教 育 係 主 事 野 沢 弘 一	主 事 総 務・学 校 教 育 係 主 事 梶 田 孝 一	(兼) 交 通 安 全 対 策 室 長	主 事 水 道 係 (兼) 主 事 高 橋 惇	主 事 土 木 係 主 事 高 橋 惇
			主 事 補 岡 嶋 栄 子		主 事 補 布 谷 泰 男	技 師 補 高 橋 義 男 技 師 補 石 田 秀 次 技 師 補 平 野 次 男 技 師 補 福 田 信 定

昭和46年4月現在

最後に、振興山村の指定をうけてすでに第四年次を迎えた昭和四十五年度における本村の政策的・投資的事業の遂行概況を眺め、眼下の行政の着実にしてたくましくも力強い前進の一端を察知することとしよう。

事業のおもなものを拾ってみると

土木工事関係で

中央道路新設改良事業（延長二、五四〇畧） 二千六百六十七万七千円

上支湧別地区簡易水道布設工事（延長五、一一五畧余） 七百二十万円

平和橋新設改良事業（延長二畧） 二百四十万三千円

側溝新設工事（鉄道区内） 百四十八万五千円

村道補修工事 六十三万五千円

その他の 八百二十九万円

建築工事関係で

郷土館建設工事 五百八十万円

職員住宅新築工事（木造平家二戸） 百二十一万円

公営住宅補修工事 五十三万三千円

その他の 五百二十万二千円

その他の事業費で

公有林整備事業（新植一八・三畧、他に補植、保育） 三百八十三万一千円

酪農振興事業（基礎牝牛導入一、〇頭） 三百八十一万円

簡易プール建設工事（縦二五、横一〇畧） 三百四十七万四千円

三 行 政

122

自給飼料生産対策事業（トラクターほか導入、飼料四五袋造成） 二百八十三万五千円

グレーダー購入（V型除雪装置付） 五百六十万円

三和小簡易プール新設工事（縦二二、横五畝） 四十万円

青年研修所暖房移設工事（雑音防止等取付） 二十八万五千円

国土調査事業（測定面積二・六二平方^キ畝） 十九万九千円

牧野改良事業（掘削五五〇畝、牧槽七〇〇^キ畝） 十六万二千円

その他 九百六十九万七千円

合 計 一億六百二十九万四千円

如上のごとく、これが実施に当っては周到な計画と準備のもとに施行されたことは、本村の発展上よろこばしいことである。

四 財 政

明治三十六年一開拓者が無人の旧白滝に定住、血と汗と涙の開墾作業が雄々しくもはじめられ、以来幾多各様の入地者によって驚くべき開発がなされ、昭和二十一年八月ついに記念すべき分村独立となったわけで、財政面においても本村はこれまで上湧別町あるいは遠軽町のあたにかいふところに包まれて成長してきたが、独立独歩となるに及んで健全財政を維持することこそ本村発展の最大条件でもあった。

分村以前の本村関係分の財政状況については資料がなく記し難いが、分村時における諸税、財産の内訳は次のようであった。

白滝村関係直接国税(五二、五三三円)内訳

税 目	金 額 (円)	税 目	金 額 (円)
地 租	三二九	所 得 税	三九、〇八〇
家 屋 税	三七七	臨時利得税	四、九〇〇
営 業 税	二、四七八		
鉱 区 税	五、三六九	合 計	五二、五三三

白滝村関係北海道地方税(四、六七三円)内訳

税 目	金 額 (円)	税 目	金 額 (円)
地租附加税	三二九	自動車税	—
家屋税附加税	三七七	電 柱 税	三三三
営業税附加税	二、四七八	不動産取得税	五二三
鉱区税附加税	五三六	狩猟者税	四八
段 別 税	四九	合 計	四、六七三

白滝村関係町村税(三九、九二一円)内訳

税 目	金 額(円)	税 目	金 額(円)	税 目	金 額(円)	税 目	金 額(円)
地租附加税	一、九七四	段別税附加税	二九四	狩猟者税附加税	四八	金 庫 税	六六
家屋税附加税	二、二六三	自動車税附加税	一	町 民 税	三、八四八	大 税	五四
営業税附加税	一四、八七〇	電柱税附加税	三九九	自 転 車 税	五二〇	林産物移出税	一三、八九七
鉱区税附加税	五三六	不動産取得税	五三二	荷 車 税	六二〇	合 計	三九、九一一

財 産

行政財産

項 目	額 金 (円)	以上ノ外ノ基本財産運用未戻入額(円)	項 目	上 地 (反)	物 建 (坪)
基 本 財 産	三三四〇〇	三、四七六・二〇	役場出張所	一四七・〇〇五	四二・〇〇
学校基本財産	二六六・二九	五、三〇六・六〇	国民学校	一六・五三三	八八七・四五
備荒基本財産	二、二五五・八九		その他	一六三・五二七	九二九・四五
合 計			合 計		

公用財産分簿明細表

一 土地の部

所 在	土地台帳 目録	反 別 (反)	単 価	価 額	摘 要
字白滝原野二、三一、番地ノ三	畑	一〇・〇〇七	一〇〇	一、〇〇〇	白滝校
ク 一、九六五番地ノ二	ク	九・五〇〇	八〇	七六〇	ク
ク 二、〇五七番地	学校敷地	八・四一六	八〇	六七二	旧白滝校

一 墓地火葬場

所 在	土地台帳 墓 地	反 別 (反)	單 価	備 価	額	摘 要
字白滝原野三三五番地		五・〇〇〇	六〇		三〇〇	大正八年一〇月二日 無償附与
〃 三三九番地	〃	六・六〇〇	六〇		三九六	〃
〃 三四〇番地	〃	四・九三二	六〇		二九四	〃
計		一六・五三二			九九〇	

字白滝原野一、三七七番地	原 宅 地	二〇・〇〇〇	五〇		一、〇〇〇	支湧別校
〃 七二一番地ノ一九	〃	九・〇〇〇	一五〇		一三、五〇〇	〃
〃 四四五番地ノ三	〃	八・五〇四	八〇		六八〇	奥白滝校
〃 四四五番地ノ四二	〃	二〇〇	八〇		一六	〃
〃 二八六番地	〃	三・三一〇	五〇		一六五	〃
〃 二八七番地	〃	一・六二〇	五〇		八〇	〃
〃 一〇八五番地ノ二	〃	一〇・一二六	五〇		五〇五	東白滝校
〃 一三七六番地	〃	一・二〇〇	三〇		三六〇	元支湧別校敷地
〃 一、九七二番地ノ二	〃	三・一一三	五〇		一五五	支湧別校
〃 一、九七三番地ノ二	〃	八・二〇三	五〇		四一〇	〃
〃 三七四番地ノ五	〃	二・五〇〇	一五〇		三、七五〇	〃
〃 一、三一一番地ノ六	〃	九・九二一	一〇〇		九九〇	白滝校
〃 二、〇五八番地	〃	一六・五〇六	六〇		九九〇	旧白滝校
計		四七・〇〇五			二五、〇三三	

三 建物の部

所	在	種 類	坪 数 (坪)	価 額	摘 要
宇白滝原野一、三二一番地		木造柱井平家	四一・七〇	四一、一七〇	白滝校校舎
〃		〃	一五・七五	九二〇	白滝校教員住宅
二、〇五七番地		木造並鉛葺平家	六六・五〇	六、六五〇	旧白滝校校舎
一、三七六番地		木造柱井平家	一七三・五〇	一七、三五〇	支湧別校校舎
〃		〃	二二・五〇	一、一二五	支湧別校教員住宅
一、四四五番地		〃	一〇九・〇〇	一、〇〇〇	奥白滝校校舎
〃		〃	二二・五〇	二、二五〇	奥白滝校教員住宅
一、〇八五番地		〃	六六・〇〇	六、六〇〇	東白滝校校舎
一、八七〇番地		〃	三〇・〇〇	七、八〇〇	白滝出張所
〃		〃	一二・〇〇	七〇〇	白滝出張所物置
計			九二九・四五	九五、五六五	

なお、白滝村設置にともなう財産の処分方法は左記の要綱によって定められた。

「財産処分方法」

戊地第七〇八号達

紋別郡遠軽町分割に伴ふ財産処分方法左の通り定める。

紋別郡遠軽町
紋別郡丸瀬布村
紋別郡白滝村

昭和二十一年八月一日

北海道庁長官 増田 中 子 七

一 公用財産は其の所在町村の帰属とする。

二 学校基本財産である土地は其の所在町村の帰属とする。

三 学校基本財産である預金及び現金は、昭和二十年度町税調定額中配付税を除き地租、家屋税、營業税、段別税各本税の百分の二百の額及び其の他の町税額を各所屬別に計算した合計額、昭和二十一年四月一日現在、國民学校児童数及び昭和二十一年四月二十六日現在人口に比準して分割する。

四 普通基本財産及び備荒基本財産である預金及び現金は昭和二十年度町税調定額中配付税を除き地租、家屋税、營業税、段別税各本税の百分の二百の額及び其の他の町税額を各所屬別に計算した合計額、昭和二十一年四月二十六日現在人口に比準して分割する。

五 町債は母町の帰属とし之が償還は左の方法に依るものとする。

イ 一般会計負担に属する歳入欠陥補填、道路側溝費、災害復旧上木費、土木費、火葬場建築費充当の負債は四の例に依り毎年度償還額を分割し分村は該町債償還年度間分担額を母町に給付するものとする。

ロ 一般会計負担に属する國民学校營繕費充当の負債は、三の例に依り毎年度償還額を分割し分村は該町債償還年度間分担額を母町に給付するものとする。

ハ 負債整理事業資金転貸債及び自作農創設事業資金転貸債は母町の帰属とする。

六 普通基本財産支消補填金は四の例に依り分割する。

七 学校基本財産支消補填金は三の例に依り分割する。

八 退隠料及び遺族扶助料は母町の帰属とし現在支給しているものに付ては四の例に依り毎年度支給額を分割し、分村は支給事由消滅するまで其の分担額を母町へ給付するものとする。

現に支給停止中のものに付ては、支給事由発生したとき分村当時に於ける支給額を算出し之を四の例に依り毎年度支給額を分割し分村は支給事由消滅するに至るまで其の分担額を母町へ給付するものとする。

終戦の混乱期に分村した本村は、財政規模も拡大の一途をたどりつつある時にあたり、財政的に決して楽観を許されないものがあつたが、わが国における戦後の復興めざましく、平和産業の勃興によって経済の成長もしだいにたかまりつつあつた。

昭和二十四年五月シャウプ税制使節団の来日によって地方財政の窮状を認め、自治権確立のために地方税制の自主性を大いに強化する必要を指摘、いわゆるシャウプ勧告によって次のような税制改正が翌二十五年七月公布されたのである。

一 地方税全般にわたり、その負担の合理化と均衡化を徹底するため、所得および財産に対する課税を重くし、流通に対する課税を整理するとともに、消費に対する課税、事業に対する課税を軽減する。

二 地方税制の自主性を強化するため課税標準、税率等についての地方団体の権限を拡充する。また、税務行政の責任の帰属を明確にするため、道府県税と市町村税を完全に分離する。

三 住民の市町村行政に対する関心の増大を求め、もつて地方自治の基盤を培うため、有力な直接税を市町村税として与え、その収入を強化する。

四 地域間における地方税負担の衡平化を期するため、税率を全税目にあつて明確に規定する。

現在、わが国で課税されている税には、国が徴収している国税と、地方公共団体の徴している地方税があるが、その内容は次ぎのとおりである。

一 国 税

所得税、法人税、相続税、贈与税、酒税、物品税、入場税、娯楽消費税、揮発油税、地方道路税、石油ガス税、トラ
ンク類税、通行税、取引所得税、有価証券取引税、印紙税、登録税、関税、とん税、特別とん税

二 地方税

1 道府県税

道府県民税、事業税、不動産取得税、道府県たばこ消費税、娯楽施設利用税、料理飲食等消費税、自動車税、鉱区税、狩猟免許税、道府県法定外普通税、軽油引取税、水利地益税、人猟税、道府県の固定資産税

2 市町村税

市町村民税、固定資産税、軽自動車税、市町村たばこ消費税、電気ガス税、鉱産税、木材引取税、市町村法定外普通税、入湯税、都市計画税、水利地益税、共同施設税、国民健康保険税

昭和二十六年地方税法の一部改正があり、市町村民税は法人税割が設けられるとともに、給与所得者に対する特別徴収制度が設けられ、また、市町村税として国民健康保険税が設けられた。

翌二十七年広告税および接客人税が廃止され、入場税、遊興飲食税の税率が引下げられた。

さらに昭和二十九年に改正が加えられ、道府県民税の創設、附加価値税の廃止、事業税については基礎控除を引上げ、税率を引下げた。また、不動産取得税、道府県たばこ消費税および市町村たばこ消費税、揮発油譲与税等の創設、入場税が国税に移され、その税収入の九〇割を道府県に譲与税として人口により配分することとし、自転車税および荷車税を統合して自転車荷車税とされた。

昭和三十一年軽油引取税が創設され、国有資産所在市町村交付金および納付金の制度が創設された。翌三十二年入湯税が目的税にかえられ、三十三年には自転車荷車税が廃止されて軽自動車税が設けられた。こえて昭和三十六年遊興飲食税が料理飲食等消費税に改められ、翌三十七年入場譲与税が廃止となり、さらに翌三十八年狩猟者税を廃止して狩猟免許税と人猟税が設けられた。

別表は昭和三十三年度和昭和四十四年度の歳入歳出の決算状況で、一般会計歳入決算総額についてはこの十一年間におよそ五・五倍にふくれ上っているが、地方交付金はおよそ八・九倍（昭和三十三年度の比率は約二・八割、昭和四十四年度の比率は約四五割）にもなっており、地方交付金の村財政に与えている比重がいかに高いかをうかがい知ることができる。

昭和33年度歳入決算状況 (単位:円)

款 別	予 算 額	収 入 済 額
村 税	19,180,000	19,480,503
地 方 交 付 金	11,452,000	11,452,000
公営企業及び財産収入	3,177,000	3,162,449
使用料及び手数料	675,000	661,916
国 庫 支 出 金	2,032,000	2,060,143
道 支 出 金	1,178,000	1,212,732
寄 附 金	121,000	100,000
繰 越 金	1,384,000	1,383,578
雑 収 入	647,000	419,102
村 債 借	1,500,000	1,500,000
繰 入 金	150,000	
合 計	41,496,000	41,432,423

昭和33年度歳出目的別決算状況

款 別	予 算 現 額	支 出 済 額
議 会 費	776,000	754,575
役 場 費	9,341,247	9,329,627
消 防 費	820,000	767,837
土 木 費	2,164,000	2,080,758
教 育 費	12,189,000	12,040,476
社会及び労働施設費	319,000	298,914
保 険 衛 生 費	990,000	928,584
産 業 経 済 費	4,350,000	4,165,315
財 産 管 理 費	2,030,670	1,968,468
統 計 調 査 費	55,000	47,215
運 送 費	466,000	415,103
公 債 費	1,504,000	1,499,799
諸 支 出 金	6,457,000	6,074,428
予 備 費	34,083	
合 計	41,496,000	40,371,096

昭和44年度各会計決算状況

四
財
政

一般会計

(歳入)

(単位 円)

種 別	予 算 現 額	決 算 額
村 税	32,549,000	35,117,085
自動車取得税交付金	2,349,000	3,087,000
地方交付金	101,706,000	102,115,000
使用料及び手数料	3,718,000	3,696,923
国庫支出金	17,961,000	18,106,355
道 支 出 金	14,124,000	14,332,277
財産 取 入	4,199,000	4,469,899
寄 附 金	10,000	—
繰 入 金	5,136,000	5,136,000
繰 越 金	12,579,000	12,579,642
諸 収 入	5,479,000	5,908,890
村 債 計	22,650,000	22,700,000
合 計	222,460,000	227,249,071

(歳出)

種 別	予 算 現 額	決 算 額
議 会 費	6,930,000	6,833,196
総 務 費	45,275,000	42,338,798
民 生 費	13,142,000	12,854,302
衛 生 費	5,929,000	5,260,097
勞 働 費	140,000	135,000
農 林 水 産 業 費	26,061,000	24,592,724
商 工 費	3,688,000	3,575,399
土 木 費	50,837,000	49,816,265
消 防 費	2,513,000	2,259,899
教 育 費	55,999,000	54,442,284
災 害 復 旧 費	10,000	0
公 債 費	9,940,000	9,937,225
諸 支 出 金	1,663,000	1,636,500
子 備 費	333,000	0
合 計	222,460,000	213,681,689

財 産 国民健康保険事業特別会計
(収 入)

収 入 科 目	歳 入 決 算 額
国 保 税	5,295,888
使用料及び手数料	6,720
国庫支出金	8,939,917
財産収入	78,326
繰越収入	2,122,321
繰越収入	16,450
合 計	16,459,622

(支 出)

支 出 科 目	歳 出 決 算 額
総 務 費	2,326,185
保 險 給 付 費	11,582,762
基金積立金	78,326
諸支出金	2,000
予備費	0
合 計	13,989,273

簡易水道事業特別会計
(収 入)

収 入 科 目	歳 入 決 算 額
使用料及び手数料	2,468,265
繰越金	258,431
繰越収入	1,498,900
財産収入	3,000
合 計	4,228,596

(歳 出)

歳 出 科 目	歳 出 決 算 額
総 務 費	773,692
水道管理費	2,320,949
公債償還費	1,058,988
予備費	0
合 計	4,153,629

(昭和四十六年三月現在)

種 別	物 件	預 金 (円)
行政財産	土地(砂)	1,000,000
普通財産	建物(砂)	1,000,000
財政調整積立金		1,000,000
土木機械整備基金		1,000,000
文教施設整備基金		1,000,000
国民健康保険事業	乗 用 車	1,000,000
財政調整積立金	消防ポンプ車	1,000,000
	ダンプトラック	1,000,000
	ドーザーシヨバル	1,000,000
	一 人 乗 車	1,000,000
	二 人 乗 車	1,000,000
	三 人 乗 車	1,000,000
	四 人 乗 車	1,000,000
	五 人 乗 車	1,000,000
	六 人 乗 車	1,000,000
	七 人 乗 車	1,000,000
	八 人 乗 車	1,000,000
	九 人 乗 車	1,000,000
	十 人 乗 車	1,000,000
	十一人乗車	1,000,000
	十二人乗車	1,000,000
	十三人乗車	1,000,000
	十四人乗車	1,000,000
	十五人乗車	1,000,000
	十六人乗車	1,000,000
	十七人乗車	1,000,000
	十八人乗車	1,000,000
	十九人乗車	1,000,000
	二十人乗車	1,000,000

一般会計年次別予算と決算の動向

年 度	予 算 額 (円)	歳 入 (円)	歳 出 (円)	指 数
昭和二年 自八月 至三月	五三〇、七四〇	四四一、三九五	四三三、六七五	一一二
昭和二年 度	四、一三〇、〇三二	三、〇一四、七九二	二、三五五、五四八	一〇〇
昭和三年 度	一三、一二八、四二九	九、三〇七、三八一	九、三〇五、七六八	一一七
昭和四年 度	一四、一七九、九〇〇	一一、二七四、六八八	一一、二二八、八六七	三三九
昭和五年 度	一九、二二一、一六〇	一七、二二三、一六一	一七、一二四、七八六	四六五
昭和六年 度	二四、〇〇〇、二七五	一九、九九一、〇三九	一八、二〇二、七六八	五八一
昭和七年 度	二六、四三三、六四〇	二三、〇〇九、四一八	二二、八四九、一八五	六三七
昭和八年 度	三三、〇八五、六九〇	三一、四六四、九二一	二六、一〇七、三五七	八〇一
昭和九年 度	四六、五五、〇〇〇	四四、二六六、一九二	四二、八三二、九一三	一一七
昭和十年 度	三二、六〇二、〇〇〇	二六、三九二、九五七	二五、四九八、七〇一	七八九
昭和十一年 度	三二、九二四、〇〇〇	三二、五六九、七五五	三一、六八一、一二八	七九七
昭和十二年 度	四三、五九七、〇〇〇	四三、四一一、八六二	四二、〇二八、二八四	一、〇五五
昭和十三年 度	四一、四九六、〇〇〇	四一、四三三、四二三	四〇、三七一、〇九六	一、〇〇四
昭和十四年 度	四一、七〇八、〇〇〇	四二、〇六四、二七三	四〇、四五二、二三四	一、〇〇九
昭和十五年 度	四八、七三五、〇〇〇	四九、五三七、一四六	四七、七三八、六七一	一一〇
昭和十六年 度	六五、五〇五、〇〇〇	六六、三四七、一四四	六三、九八三、六四一	一、五八六
昭和十七年 度	八一、七二三、〇〇〇	八〇、九二八、八九三	七九、七〇五、二八〇	一、九七八
昭和十八年 度	八一、〇二九、〇〇〇	八二、五五七、〇六九	七九、五三七、三九六	一、九六一

(指数は昭和二十二年度予算額を二〇〇とする)

五 産 業 ・ 経 済

第一章 農 業

第一節 農業の起り

明治維新前における北海道の産業は、主として漁業によるものが多く、農業部門はそのいずれもが技術的に未熟で、かなり以前から栽培したと伝えられる馬鈴薯にしてもその耕作はまことに幼稚なものであったようだ。また雑草の栽培、牛、馬、豚、綿羊の試育も行なわれるなど北海道の開拓に意欲的であったことはゆがめない事実であらう。北海道の開拓振興に大いに力をいたした明治政府が農業技術の導入にと、アメリカより、牛、綿羊の輸入とともに招いた技術者エドウィン・ダンが明治八年五月北海道に出張のみぎり、滞在中欧米なみの近代農業を指導し、やがて北海道農業の父と謳われたが、その実、開拓の土台は明治維新以前に粒々辛苦、微弱ながらも敷かれていたのである。かるがゆえに開拓使の事業も産業も比較的順調に進むことができたといえよう。

湧別地方における農耕の起りは、網走郡役所に勤務していた半沢真吉が明治十五年春、職を辞して湧別浜五番地に移住、土人を使って五、六畝の土地を開墾、馬鈴薯、大麦のほか大根などの野菜を栽培したのが和人による

農耕の始めであるといわれている。

明治十四年春、北海道拓殖状況を聞き感激した高知県人徳弘正輝は、一時網走郡役所海産税吏として奉職したが、同年十月辞職して湧別に移住、翌十五年大阪人と田崎吉と共同して付近を開墾、馬鈴薯の栽培を行なったという。根室県勸業雜報（明治十六年十二月）に当時の様子を次のように記されている。

「農業、紋別郡湧別村ヲ最トス、和田崎吉ト云フ者、半沢真吉ニツギ着手セリ、半沢ノ報告ニヨレバ馬鈴薯ノ如キハ、顆大體二百六、七十匁、小モ三、四十匁ヲ下ラズト云フ」。

徳弘はその後明治二十年十月放牧地を求めて湧別海岸より草木の成長に可良な清水湧く、今の中湧別の地に移り、農業のほか畜牛の飼育に専念するなど湧別開発に大きく貢献した。

道庁の殖民政策 明治十九年（一八八六）一月北海道庁が設置されるや、北海道の未開地開拓推進について従来行なわれていた移民に対する各種の直接保護政策を改め、開拓の基礎となるべき条件をととのえ、本州の資本家誘致による開拓へと方策を樹てた。

明治五年十月太政官布告によって発せられた「北海道土地売買規則」にもとづき国有地の処分を行なわれてきたが、地価格差、土地の処分方法等について欠陥があったので、明治十九年六月「北海道土地払下規則」を制定し、従来弊害を除こうとはかった。北海道土地払下規則の特徴は、

一、地所の種類すなわち宅地、耕地、海産干場、牧場、山林の別によっておのおのの処分法を明らかにした。

二、一人十万坪（三三〇）を限度とする土地払下面積の制限はこれまでどおりであったが、例外規定を設けて大地積処分の途を開いた。

三、土地の即売制度を廃止し、開墾希望者が土地を選定し、かつ無償貸付け期間を定め、期間内に開墾利用の事業を完成させた者につきこれをお払い所有権を与えることにした。

四、土地代価を従来の三等級を改め一律に一千坪（三三〇）につき一円とした。

五、売払った土地はその翌年から十カ年間（明治二十二年には二十カ年に延長さる）地租および地方税免除とした。

ここにおいて全道的に殖民地選定事業が道庁の手によって開始されたのである。同十九年八月まず石狩・胆振方面から着手し、明治二十二年に一応の完成をみた。主として大原野のみであったが、実に約九五万畧の選定を了したと公報されている。

殖民地選定事業について行なわれた土地区画の設定にはカナダ方式を採用、直角法を用い間口百間（一八二畧）奥行百五十間（二七三畧）の五町歩（五畧）を一区画とし、まず基線を設定し、これに平行して三百間（五四五畧）ごとに区画道路を設け「線」となし、基線に直角の道路を「号」とし、三百間ごとに道路を設けるようにした。かくして五町歩一区画一戸分を小区画、小区画六戸分（三十町歩）を中区画、中区画九個分（二百七十町歩）を大区画とし、通常小区画と称する一戸分、つまり五町歩に農家一戸を入植させる方策をとったのである。また、この区画設定の時には道路・排水溝の敷地、防風・風致・水源涵養などの保安林、官衙・学校・病院・社寺等の敷地、墓地、公園、市街予定地など等の用地が設けられた。

かくして北海道への移民は個人、団結の別なく全国各県より陸續として入り来たり、開拓入植が進むにつれて道路、橋梁等の土木事業がこれに追いつけず異常な遅れを來たし、労働力の不足に頭をかかえた道庁はついにそ

の労働力の補充に囚人を使役して突貫作業による道路の開削を断行したのである。

湧別原野の区画測設

道内主広域原野の殖民地選定事業は湧別原野も対象とされるところとなり、明治二十年、左記のごとき上湧別、下湧別両原野の選定が行なわれた。

上湧別原野

面積・一千四百二十万八千二百二十五坪（約四、七三六〇〇畝）

内訳・五百四十万八千五百坪（約一、八〇二〇〇畝）……湿地（耕耘適地）

二百五十五万八千四百二十五坪（約八五三〇〇畝）……平野樹林地（耕耘適地）

六百二十四万一千五百五十坪（約二〇八一〇〇畝）……高原樹林地（放牧適地）

下湧別原野

面積・一千八百五十七万六六百坪（約六、一九〇〇〇畝）

内訳・六百八十一万七千二百五十坪（約二、二七二〇〇畝）……平野樹林地（耕耘適地）

百六十二万二千八百坪（約五三八〇〇畝）……平野草原地（耕耘適地）

二百五十万一千五百坪（約八三四〇〇畝）……平野湿地（耕耘不適地）

百五十万坪（約五〇〇〇畝）……平野泥炭湿地（耕耘不適地）

六百十三万九千五百坪（約二、〇四六〇〇畝）……高原地（放牧適地）

殖民地の選定事業は明治二十二年で中止されたわけではなく、明治二十三年以降も引きつづき道内津々浦々にわたって散在する原野の選定がつづけられた。

選定について明治二十四年区画測設を了した湧別原野は同二十六年十二月に至って湧別浜殖民地の貸付告示がなされ、以来高知、広島団体など賑を切ったかのごとく各県の団体が入地し、さらには屯田兵が上湧別に、北

海道同志教育会農場が今の芋田地区に移住するなど、年とともに人煙増加していった。

白滝原野の解放

湧別原野の区画測設以来十二年を経た明治三十六年白滝殖民地地区画測設が行なわれ、翌三十七年二月貸付告示がなされたのである。

白滝原野の様子を『湧別村誌』には次のように記されている。

『白滝原野は明治三十七年二月解放せられたる殖民地にして、湧別浜市街を距る（二股市街まで）十五里余、石狩比布駅を距る十八里、仮定県道なる中央道路に沿ひ車馬通行に差し支へなく、地味又良好なるのみならず、水質佳良にして飲料に適せり、同原野は村内最も高燥の箇所たり、且つ西南端に位せる山間なるに拘らず降霜遅くして被害甚だ少く、穀穀登熟し農耕に最も適合せり、他は石狩北見の連絡鉄道なる旭達線の敷設せられる曉に入らば急速の発展を来すは疑を容れざる処にて四囲未だ処女地頗る多く、加ふるに林、鉦両産に富み管内宝庫の称を擅にす。

とある。

この時解放せられた殖民地とは旧白滝、下白滝の両地区にして、本村における最初の解放区である。

明治四十四年に至るもお道内各地において区画測設があり、北見国内においても二十四カ所にわたって測設が行なわれた。すなわち、

○イソオベツ区画地（遠音別に属す） ○チャシコツ区画地（遠音別に属す） ○アツカンベツ区画地Ⅱ旧画延長（斜里郡朱田村に属す） ○マウレセブ区画地Ⅱ旧画延長（その一）（その二） ○パロー区画地Ⅱ旧画延長 ○ファミ区画地Ⅱ旧画延長 ○タツウシ区画地Ⅱ旧画延長（渚滑村に属す）（その一）（その二）（その三） ○サクルー区画地Ⅱ旧画延長（その一）（その二） ○上モオウコッベ区画地（興部村に属す） ○オムサロ区画地（サロル渚滑村にまたがる） ○上雄武区画地 ○上声間区画地 ○上サロベツ区画地 ○メナシベツ区画地（沙流村



図 画 区

に属す) ○ドエベコロベツ区画地(大塩郡沙流村に属す)
○オヌブナイ区画地(大塩村に属す) ○白滝区画地(旧画
延長)で、殖民公報には白滝区画地の状況を次のとおり記録
している。

白滝区画地

面 積

一、八三〇町歩 中画二 小画二五〇

地 理

紋別郡上湧別町に属し、旧区画地を延長したるものにして東方
の一部旧区画地に接し、北西南の三面官林に囲まれる。湧別川西
方より北部を貫流し東方に至り旧区画地に入る。其支流シニーベ
ツ川南端を流れて区画地に入り本流と合す。

地勢南方に漸昂し大波状をなすと雖も概して平坦なり。

気 候

初霜十月上旬、終霜六月中旬、

初雪十一月初旬、融雪四月中旬、積雪三、四尺内外なり

土 性

湧別川沿岸地は上層三寸乃至六寸の腐植質壤土、次層黄褐色壤
質壤土より成り、丘地は上層三、四寸の黒色腐植質壤土、次層黄
褐色壤質壤土より成る。又沿岸地及び傾斜地に石礫の多き所あり。

植 物

沿岸地はヤチタモ、アカグモ、ハンノキ、ヤナギ、エンジュ等の樹下雜草生じ、丘陵はエゾマツ、トドマツ、アカタモ、カシ等の下領、イラクサ、ナナツバ、フキ、ボウナ等生ず。

水 質

清良にして飲用に適す。

交 通

石狩国より北見国に通ずる中央道路本町の北端を通じ、東方十一里内外にして遠軽に達し、西方十六里にして石狩国比布停車場に達す。

農 況

附近農家は主としてハッカを栽培し、その他自家用として稲黍、裸麦、玉ネギ、馬鈴薯等を栽培す。

右の記録に示されるがごとく農作物の栽培に好適な腐植土が多いため、石礫地帯多しといえども解放以来いづいでの入植者があつたといえよう。『上湧別村誌』によると次表のごとく原野耕地に等級が付され、白滝原野が二等地と査定されていることもうなずけることである。

原野耕地等級

等 級	原 野 名 称
一 等 地	南兵村一円、北兵村一区
二 等 地	学田一部、北兵二区、三区、サナフチ、イクタラ、白滝、セトセ、マルセツブ、ムロイ
三 等 地	学田大部、北兵二区、三区の高台、富美

本村農耕の起り

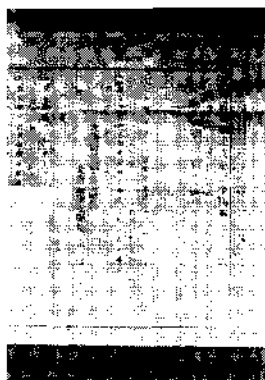
明治二十五年中央道路（現・主要道道遠軽上川線道路）の完成によって翌二十六年滝の上

(八号) 駅通が設置され、駅通取扱人として札幌在住の中沢兼三郎が任命されたが養子の中沢沢治が代って着任、業務のかたわら敷地内わずかばかりの土地を開いて野菜、馬鈴薯などを栽培した。これ本村農耕の初めといえよう。

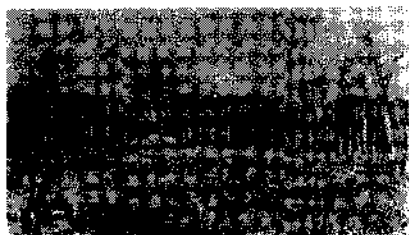
明治三十三年石北峠休泊所(のち石北峠駅通所となる)の取扱人として峠入りした石上藤藏もやはり野菜畑をおこし大根などの野菜を作ったが、標高八〇〇呎に及ぶ高地なるがため気候極度に悪く将来性に欠けるをさとして明治三十五年春、未だ区画測量も終らぬ旧白滝十七号中央道路筋に許可入地、開拓の鍬を振った。作付および作況についてはつまびらかではないが、野菜はもとより、しだいに馬鈴薯、ハッカの耕作もなし、明治三十七年解放とともにこの地(白滝原野百二十八番地と百三十番地Ⅱ殖民区画割番地による)およそ二万一千坪(約七〇)の貸付けを受けた。また明治三十七年解放されて以来初めて印刷された白滝殖民地区画図(明治三十八年三月二十七日印刷)を見ると、すでに一千坪を上回る畑地のあることが認められる。これ本村における本格的な農業従事者の初めといえよう。

その後明治四十二年山本治作、同年十一月太田熊吉、吾妻祝吉、翌四十三年四月青山右近、内田三藏、同年秋菊地長治、小笠原伊勢松らあいついで旧白滝に個人入植をなし開墾に精を出した。

旧白滝よりおくれて解放となった白滝原野には、明治四十五年貸付告示されるや同年三月榎芝盛平、倉橋伝三郎を正副団長とする紀州和歌山團結(団体のこと)五十四戸が白滝・上白滝間中央道路沿いに入植、ここにおいて白滝開拓の基礎が固まったのである。以来大正二、三年にかけて秋田、宮城、福島、山形、奈良、長野の各県団体あるいは個人入植等新開地を求めて入り来るもの本村全域に及び、それぞれ着手小屋を建て樹林生い茂る未



入植指令書（古関六兵衛）



當時着手開墾野原別湧友

開の地に開拓の汗を流しつつけた。

ハッカ

ハッカの医薬価値を知ったのは意外に古く、一六三五年ごろ山城（京都）大和（奈良）両地方に野生のものを漢方医が清涼剤として使用したことに始まるといわれている。しかしその栽培についてはかなりおくれ、一八二〇年ごろ備中（岡山）の秋山熊太郎なる人が江戸（東京）より持ち帰りたる若干の「種根」を試作したのが最初で、爾来岡山県下に、さらに長野、山形県等にも波及されたと通説として残っている。

本道におけるハッカ栽培は明治十八年山形県より種根を移入し胆振地方において試作したのが最初とされているが、明治二十五年上川郡永山村の屯田兵石山伝太郎が郷里山形県東村山郡より種根を取り寄せ栽培に成功、蒸溜も行なうなど本道ハッカ栽培の先駆者といえよう。

明治二十四年湧別村に移住した渡部精司は、その後湖辺に野生のハッカを発見して以来、栽培を思い立ち、やがて上川郡永山村にハッカ栽培者のあることを聞き、さっそく永山村に出向いて一貫匁二十銭の割で六貫匁の種根をゆずり受け、中央道路を駄送り湧別村西一線七番地の畑約一畝歩に植え付けたのは明治二十九年五月下旬という。この年の秋、乾燥葉十貫匁余を収穫、これを簡易なる蒸溜器にて製油し九十三匁の収穫

を得ることに成功、氣候地質に適することを知り、ハッカ栽培がしだいに北見の各地に分布されていった。北見管内におけるハッカ栽培の適地は殖産壤土の多い下湧別、上湧別、紋別、滝の上方面よりもむしろ砂質壤土の北見、留邊蘂、佐呂岡方面が好適地とされ、したがって湧別原野においてあがったハッカ栽培の火の手は北見方面へと拡がり、今日ハノカといえは北見といわれるごとくハノカの代名詞的存在となっている。

栽培面積の推移も明治三十四年の作付反別十町歩はすべて湧別を含む北見圏の栽培面積で、永山地方の栽培状況は非常なおくれをとっていたものといえる。その後明治四十年には石狩圏二百十四町歩、十勝圏百三十一町歩、北見圏一千六百九十一町歩と道内ハッカ耕作面積の実に八一・四割を占める伸び率を示した。さらに大正期に入り飛躍的增加を示し、大正五年には道内における耕作面積はついに一万一千町歩、一千八百三十四万余貫を突破、全国のおよそ九割を占めるハッカ黄金時代を現出した。その後大正十一年不況の波によって一時反別も五千町歩に激減したが、昭和元年再び価格騰貴により好景氣を生み、作付反別も一万町歩余に急増、農家経済をうるおした。本村におけるハッカ耕作の初めは正確な記録があるわけではないが、野上駅通取扱人であった角谷政衛の長息榮政の語るところによれば、「明治三十五年旧白滝に転住した石上藤藏は翌二十六年私のところ（角谷家のところ）よりハッカ種根を取り寄せ意欲的に栽培をなし、はじめから二、三反くらいの耕作をしていた」。また明治四十年旧白滝に入地した内田ゆきよは「私たちが旧白滝に入ってきたころ石上は主としてハッカを作っていた。私たちのはじめ、間もなく白滝に入植した紀州団体の人たちもハッカを作る人はほとんど石上のところからハッカの種根をゆずり受け耕作したものだ」。さらに紀州団体長であった植芝盛平も「北海道に入植する理由の一つにハッカ栽培によって一旗あげようという団員も少なくなかった。白滝に入ってすでに経験のある石上を尋ね

て栽培技術を習い種根をもゆずり受け団体員に栽培の奨励をした」と語ってくれたが、石上こそ本村ハッカ栽培の元祖といえよう。

大正初期にかけてあいついで入植した各県団体員や個人入植の開拓者も、湧別原野方面において非常な発展をみせているハッカ耕作に刺激され、本村においても驚くべき耕作をみている。大正五年十二月八日付の北海タイムスに、上湧別、下湧別両村における大正五年のハッカ収穫高が出ているが、上湧別、下湧別合計一千四百八十八畝（三万六千七百三十六貫）にのぼり、このうち上湧別村各地域ごとの収穫高は、

字兵村	六十八畝	字フミ原野	七十二畝	字遠軽	二百十二畝	合計	七百五十八畝
字セトセ	百三十畝	字上生田原	六十二畝	字下生田原	六十五畝		
字野上	二十八畝	字社名湖	九畝	字白滝	百十二畝		

一畝は百組で三十二貫であるから、白滝においては三千五百八十四貫の収穫となり、耕作面積については不明であるが、反収三組半と仮定しても実に三百二十町余に及ぶ作付がなされていたことになる。

昭和に入ってもハッカ耕作は増加の傾向にあったが、日華事変、太平洋戦争と、戦争の拡大につれて食糧増産に拍車がかけられ、ついにはハッカ耕作に監視の目が光るほど栽培地はほとんど見られない状態となった。戦後往年の好景気の夢さめやらぬ人々によって再び栽培がなされたが種根の不足で思うように作付が伸びず、昭和二十六、七、八年の作付面積は五、六町にすぎなかった。昭和三十三年になってようやく百三町歩にまで伸び、ハッカ耕作組合なども出来たが、外国からの輸入による国内価格の低迷によって換金作物としての価値がうすらぎしだいに作付が減少、今日村内においてのハッカ耕作は全く姿を消してしまった。

果樹

高冷地帯に位する本村はその氣候風土からみて果樹の栽培は必ずしも適合してはいなかったが、果樹の中でも特にリンゴは上湧別において早くからさかんに栽植されていた関係上、地味豊かな土地での栽培は可能であろうと、支湧別に入植した佐藤平一郎および白滝原野（今の西区中学校付近）の金枝兵重は大正七年以上湧



金枝リンゴ園

別より二、三十本のリンゴ苗木倭錦（別名阿部七号）を取り寄せ、活着良好なるをみて翌年同品種二百本ばかりを札幌から購入、佐藤はおよそ一町三反歩、金枝はおよそ一町五反歩にわたって栽植をなし、大正十三、四年ごろから結実しはじめ、佐藤は藪菌園と名付けて出荷した。このころ村内においても自家用程度の栽植をなすもの数多くみられたが、腐爛病あるいはブランコ毛虫の害にあい枯れていった。佐藤藪菌園、金枝果樹園においても昭和九年ごろより腐爛病の蔓延にあいしだいに枯死し、リンゴ栽培は中止してしまった。また金枝はこれよりさき大正十一年、白滝小学校敷地として一部寄贈のためリンゴ栽植面積もこの時若干減ったが、佐藤と同じく病滅の形となった。

その他、スモモ、ナシ、ブドウ、イチゴ、アンズ、グスベリ、カリンス等はそれぞれ入植後まもなく大方の開拓者の子供たちの間食用にと屋敷まわりに植えられていたが、商品として出荷されたものはほとんど見当らなかった。

水稲

稲作の北限地帯といわれていた網走地方において、明治二十九年水稲耕作に成功して以来、北見、網走をはじめ各地において試作がなされ、明治も三十年代になるや、遠軽、上湧別においても、やがて水稲を固

定作物となすべく懸命な努力を重ねつつ水稻試作が続けられていた。

天狗岳から吹きおろす冷たい西風を真向からうける本村は初霜、晩霜に悩まされる高冷地帯であるが、米食の郷愁さめやらず、西風を遮る恰好の地を選んで水稻試作をなすものがあつた。大正五年支湧別十一線に居住する沼田外太郎は三畝（三ア）の造田をなし、この年一俵半（六斗）の収穫をみたといひ、以来凶作つづきで数年足らずで中止してしまつたが、本村における最初的水稻耕作といえよう。その後支湧別の佐藤平一郎、植村辰五郎、中山徳蔵、菊地善吉らが大正期に耕作を試みたが、いずれも五分作程度の収穫に永続きはしなかつた。昭和に入つて旧白滝の丹羽実市が水稻耕作をはじめ、昭和四年から同二十六年まで三反歩から一町歩の間で増減をなしつつ播種を行ない、反収四俵前後の収穫をあげていた。上白滝の近藤吉男は昭和二十五年造田を行ない、丹羽と同じく反収四俵前後の収穫をつづけていたが昭和四十四年ついに廃田とし、ここにおいて村内の水稻耕作は全くその姿を消すに至つた。

昭和二十九年の『村勢要覧』に水稻作付反別が記載されているが、いずれも試作の域を脱しないものである。

年次	作付面積（反）	農産物總作付面積（反）	比率（%）
昭和二十四年	五	一一、八四五	〇・〇四二
昭和二十五年	三	一一、八七七	〇・〇二五
昭和二十六年	六	一二、四九四	〇・〇四八
昭和二十七年	八	一二、五六三	〇・〇六三
昭和二十八年	一四	一三、〇〇三	〇・一〇七

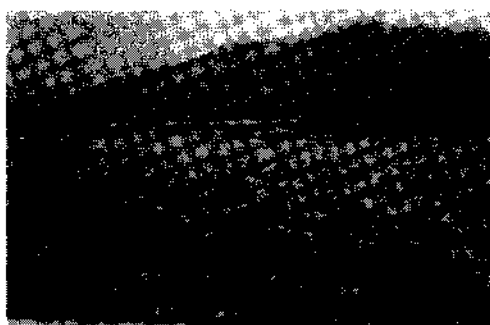
陸穂（陸稲） 昭和二十四年支那別の島海貞治、菊地善吉、奥白滝の石井国九らがそれぞれ二反歩前後の陸穂栽培を試み反収三俵程度の収穫をあげていたが、昭和二十八年の冷害にあい収穫皆無で継続耕作の夢も破れ中止してしまった。

馬鈴薯 本邦特有のものと思われていた馬鈴薯も実は原産地が南アメリカで、慶長三年（一五九八）オランダ人がジャワから九州は長崎へ持ち来たり栽培されたのがわが国へ入った最初といわれている。その後「ジャガタライも」とか「ジャガイも」などといわれてしだいに普及されたものである。

本道に入ってきた年代については判然としないが、寛政十年（一七九八）最上徳内が蝦夷地出張の際、種薯を持参して虻田場所にて耕作させたのが初めといわれているが異説がありさだかではない。ともあれ初めは牛馬の飼料と主食の代用品として栽培されていたが、一個の種薯から五升以上の収穫があったことから別名一五升いも一とも称されていた。

また明治に入って川田竜吉男爵は病害に強い本道に適した馬鈴薯の改良種を生み出し、極早生種で二毛作も可能というところから「二度いも」ともいわれ、この新種を「男爵いも」ともいわれるようになった。

歴史の古い馬鈴薯のことであるから、本道に入植したほとんどの開拓者は、自給食糧としての馬鈴薯は麦類とともに最初に植付けたものである。大正初期に入植した開拓者たちは異口同音に「入植当時はなんといっても食糧の確



馬 鈴 薯 畑

保が先決で、それには馬鈴薯が最適であった。開墾能率があがらぬ時は筋状に耕して植えただけでも反収四、五十俵ぐらいはとれ、全耕の場合は八十俵ぐらいにもなった」と語っている。しかし開拓者の食糧作物として重宝がられた馬鈴薯も、価格の低廉から結局自家用栽培にとどまり、耕作面積は伸びなかった。大正七年秋、共同経営による(國)澱粉工場、藤田、丹羽らの澱粉工場創業によって馬鈴薯耕作者の販売ルートの道が拓け、作付はしだいに伸びていった。

太平洋戦争に突入するや、目を追うて悪化する食糧事情に節米の励行が叫ばれ、馬鈴薯は米に代って主食の座にのし上るほど貴重な代用食品となり、大いに増反策が打ち出された。終戦をみてのち昭和二十四年九月馬鈴薯の統制が解かれ、甚に平和産業の隆盛が目立ちはじめるところ、澱粉の需要増にもなってこれに刺激され馬鈴薯耕作も増大していった。わけでも本村は寒冷地帯で米作には全く縁がなく、寒冷作物として安全性の高い馬鈴薯に依存するところ大である。

分村後における馬鈴薯の作付状況は次のとおり。

昭和二十四年	昭和三十一年	昭和四十年	二〇〇町六反
二二九町一反	二二九町八反	二二九町八反	二二九町八反
二二六町一	二二六町一	二二六町一	二二六町一
二二八町一	二二八町一	二二八町一	二二八町一

価格の安値に堪えながら、安全作物なるがゆえに本村の場合、畑作農家にとっては絶対耕作的な馬鈴薯も、昭和四十五年大阪にて開催された万国博覧会における需要増のあおりをうけて春先以来馬鈴薯価格が異常に暴騰し、村内においても一俵(六〇キ)当り最高五千五百円にて取引きされるなど開闢以来の高値を呼び、畑作農家

に夢をさそう一幕もあった。

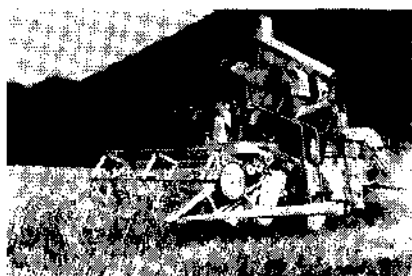
除虫菊

明治二十年ごろ本道において試作された除虫菊は、大正二年ごろより上川、和寒方面において栽培盛んとなったが、大正六年上川郡当麻村からの通い作をやめて支湧別に移住した菊地善吾は、当麻の人柴田貞三より白滝に住みついたら必ず植えるようにと、銭別代りに渡された五合ほどの除虫菊種子を半信半疑で一反歩近くの畑に植えてみた。当時上湧別、遠軽方面にも除虫菊栽培の話は聞かず、開花にまで成長した翌七年に刈り取りもせず、さらに二年月も放置してしまつたが、このころより換金作物として栽培が奨励されはじめ、村内においても耕作者は漸増しはじめたようである。大正末期ごろより全道的に除虫菊生産量が伸びはじめ、これまで施行されていなかった出荷時の検査を昭和二年七月よりこれを実施し、他の主要農産物同様、等級を付すようになった。

昭和初期、輸出景気のおおりをうけて成金まで現出したほどの除虫菊も、太平洋戦争以来食糧増産のため転作を余儀なくされ、しだいにその姿を消していった。戦後再び栽培を試みるものもあったが価格の低落に永續きはしなかつた。

養蚕

野生桑の多く繁茂していた本道において養蚕を試みる開拓者があり、交通不便な開拓期のことゆえ自給自足上、各地において蚕を飼育するものがしだいに増加していった。本村においても至るところ野生の桑木があつたところから、本州方面において養蚕の経験のあつた入植者が札幌農園より蚕種を購入、養蚕をなすもの数多くみられたが、いずれも自家用としての域を脱せず、飼育方法も幼稚なものであつた。さらに施設設備の關係で良質繭が思うように生産されず、加えてハッカ、除虫菊などの商品価値の高い農作物の普及によって自然と



コンバインによる麦の刈取

全く姿を消してしまった。

近時離農家の現出によって定着農家が次第に大型化しきたり所謂、百姓百種耕作の概念を脱却し寒冷地作物に適した安全作物を集中耕作する方向へと変ってきたが、これによって小麦の耕作面積も大幅に伸び、性能のすぐれた機械力の導入によってこれが生産向上を期すべく昭和四十一年十二月山村振興法指定町村に指定を受けたるを幸いに山村振興事業に「共同利用農業機械導入事業」をおこし、昭和四十二年度において、大型麦類刈取のコンバインを導入、同時に麦作乾燥調整施設を西区共同澱粉工場横に建設し（処理能力は乾燥日産百五十石、調整毎時百五十石）、農業の経営近代化に大いなる意欲を

消滅してしまった。

麦 類

水稲耕作に恵まれない本村にとって裸麦、小麦、燕麦等の麦類耕作は主要な食糧作物として或は換金作物として重要な基幹作物であった。入植当初においては主食のほとんどが麦食・イナキビ食更には薯食（馬鈴薯）であり、米食は盆と正月位に食する程度のもので、水稲不適の本村のこととて米混合一割乃至二割程度のまこと粗食に甘んじつゝ長い生活がつづけられていた。戦後食糧事情の好転と生活水準の高度成長によって次第に代用食を常食とする家庭が減りはじめ、わけても健康食といわれる「ムギメシ」すら敬遠される傾向がみえはじめ、これがため裸麦の耕作も近年

麦類(燕麦, 裸麦, 小麦)耕作面積の移り
(単位ヘクタール)

種別	年度	昭和24	昭和35	昭和45
燕 裸 小	麦	177	208	64
	麦	139	94	0
	麦	80	81	199

もやしている。

第二節 凶 作

大正二年の大凶作 この年全道的に春以来低温が続ぎ、八月には暴風雨に襲われ、加えて九月上旬の早霜にあい、こうしたたび重なる災害によってついに未曾有の大凶作となった。全道の被害状況は水稲が半年作の十分の一、畑作は極度に不作で皆無にも等しい状態で、移住後日浅き者はわずかに茅屋に雨をしのぎ、糧食欠乏するといえども糠穀はもちろん衣服、家畜等売却すべき物もなく、やむなく山野に草木を求めあるいは藁の束を拾い集めて食するという悲惨な状態であった。このためこの年十一月道庁においては臨時道議会を開き、北海道凶作救済会を設け被害民の救済に当った。本村においては入植二年目の紀州団体員およびこの年入植してきた秋田、宮城、福島、山形、三重の各団体員さらに旧白滝に入地していた開拓者等およそ百六十戸の開拓者が全滅に等しい畑作被害を出し、着手小屋にて雨露をしのぐものは移住後日浅きため糧食まもなく底をつき、売却すべき品を持たない人々は路傍の山ゴボウをあさり、あるものはフキの根までも掘って食したという、聞く者をして想像せしめがたい窮状であった。

昭和六年の凶作 昭和六年の凶作について、本村独自の災害記録はないが、『北海道荒災害誌』に遠軽村域における被害状況を次のように記している。

本村は戸数二、七二七戸を有し、農業を主業とする戸数二、四一六戸、その本年度耕作反別、田六三四町二反半、畑五、三九六町二反半にして、農業は本村生産額の五割余を占めている。しかるに本春以来天候極めて不順にして各農作物は異状の不作

を示した。その被害、収穫皆無に帰せるもの五〇七町四反歩、七割以上の減収を見たものは、二六町八反歩にして、一反歩当たり収量僅かに九升六合にすぎなかった。水田耕作者三四二戸はほとんど収穫皆無の状況におちいり、又畑作物においても被害すくなくならず、平年作に比してその収穫五分五厘で、田畑を通じて本村の作柄は五分作にすぎなかった。……略……遂に救済を要すべき者を出すに至ったのである。救済を要する者の中、食料給与を要する戸数九五戸、就業資金給与を要するもの一三戸、就業資金貸付を要する戸数四五戸、肥料資金貸付を要する戸数二二五戸、土木事業に従事せしめて救済を要する戸数二三四戸（計七三〇戸）を算したのである。

昭和七年の凶作 この年は全道的に冷害に見舞われ、加えて八月下旬には道内各地に水害をもたらし、前年に引きつづいて凶作を決定づけた。本村域における被害記録はないが、当時の遠軽村長より各部落区長に発した次のごとき公文書（昭和八年一月発信）よりその程度をうかがい知ることができる。

凶作罹災者救済ニ関スル件

一 食料給与ヲ受クベキ資格

イ 作況三分作未満ヨリ皆無ノモノ

二 ……略……

三 交付スベキ数量、人員別紙ノ通り（注・別紙不詳）

貴区（白滝部落ノコト）ニ送付スベキ総数量米十三俵

四 鹽俵、糶減等ハ認メザルニ付、交付ニ際シ相互ニ於テ異議ナキ様取扱ハレ度

五 ……略……

六 公費ヲ以テ救済スルハ令回限リトス

七 副食物代ハ支給セズ

八 御下賜拝受者八百二十名（遠軽全村デ）、今回ノ食料給与戸数五百六十戸（遠軽全村デ）ニ付キ彼レ比シ混同セザル様御

注意相成度

また昭和七年十月北海道長官に対し、全村民記名捺印をした左のごとき陳情書を提出している。

陳 情 書

本村ノ凶作水害ハ開村以來未曾有ノ大惨害ニテ田畑生産損害約七十三万九千余円ニシテ今ヤ本村農民ハ死活ノ岐路ニ立チ、餓死線上ヲ彷徨シツアル惨状ニ有之候、茲ニ救済事業ヲ急速實施セシメ生活不安ヲ除カルル様御高配ヲ相仰ギ度此段連署陳情申上候

一般作況ニ就テミルニ、七月以來晴天ナク気温亦漸時低下シ作物ノ成育結果ヲ阻害シ加ヘテ降雨ノタメ圃場ニ発芽腐敗スルヲ傍觀スルノ外ナキ状態ニテ水稲ハ一粒モ收穫ヲ見ル事能ハズ、畑作僅カニ二分五厘作ノ悲境ニオチイリ昨年・凶作ニ次グニマタマタ本年ハ未曾有ノ大凶作ニ遭遇シ農家ノ疲弊窮状ハ極度ニ達シ九月中ノ再度ノ出水ハ河岸ノ欠潰、農耕地ノ浸水等甚大ニシテ益々窮状ヲ増大ナラシメ時給モ向寒期ヲ控ヘ衣食ニ窮シ飢餓線上ニ呻吟スルノ惨状ヲ呈スルノ状態ニ付実御精査ノ上コシガ救済ニ関シ適切ナル対策ヲ講セラシメ特ニ緊急御施行仰ギ度事項左ニ開陳シ特急實現セラルル様要望仕候
緊急必須事項……略

白滝市街区における罹災者救済物資の受給者は十一名となっているが、白滝全城の受給者数はこの数倍に当るであらうことは想像に難くない。

昭和三十九年の冷害凶作

この年は春先より低温つづきで農作物の成育が非常におくれ農民を不安におとし、いれていたが、八月中旬よりの長雨によって麦類、豆類等の主作物に決定的打撃を被ってしまった。すなわち、

種 類	作付面積	被害面積	被害率	種 類	作付面積	被害面積	被害程度
麦 類	一五三畝	七二・四畝	四七・三%	て ん 菜	一一二畝	一六畝	一一・三%
豆 類	二四五畝	一一・五畝	五五・一%	馬 鈴 薯	二七六畝	七七・三畝	二八%
雑 穀	一九六畝	九〇・二畝	四六%				

被害農家二百四十四戸、被害総額四千八百万円にのぼり、全道的統計からみても戦後三度目の凶作となった。本村においてもこれが被害農家の救農対策として、土木救農事業をおこすことを決め、砂利採取、石礫除去、砂利敷等の事業をこの年十一月から十二月にかけて行なった。事業費の内容は、国および道の委託事業、直轄工事ならびに村単独工事事業の合計三百八十万円の実質労賃事業であった。

昭和四十一年の冷湿害 春先以来の早魃が七月から長雨、低温にかわり極端な異常天候に見舞われ、昭和三十九年につづいてまたもや農民は凶作に打ちのめされた。

村役場の発表による被害状況は、

種 類	作付面積	被害面積	被害程度	種 類	作付面積	被害面積	被害程度
麦 類	八四畝	八四畝	七分作	甜 菜	一三〇畝	一三〇畝	八分作
豆 類	九五畝	一九五畝	三分作	馬 鈴 薯	三・三畝	三・三畝	七分作

となり、村内二百五十五戸の全農家に被害を被り、その被害総額も四千六百三十万円と記録された。本村においては十月緊急村議会を開き「白滝村冷湿害対策推進本部」を村役場に設け、これが応急対策、恒久対策ならびに救農事業にのり出したのである。救農事業は前回の時と同様、砂利採取、石礫除去、砂利敷等総額三百六十万円の救農土木事業を施工した。

さらに十月二十六日には町村北海道知事代理長友副知事ら一行が本村の冷湿害被害状況を視察に来村、特に町村知事から「冷害にめげず一日も早く立直って農業経営の基盤確立に努力してください」との見舞の言葉があっ

た。

また、本村の冷湿害農家に対し救世軍北海道連隊より衣料品の救援物資が届けられた。

その他の凶作

海抜三〇〇㊦ないし五〇〇㊦に位する本村農作物はことのほか冷湿害に弱く、昭和十年、十六年、二十年、二十八、九年とそのいずれも低温多湿による被害で大凶作をもたらし、農民にとっては息つく暇もない窮状であった。ことに昭和二十年は強制供出によって農家の穀倉は嵐も餓死するほど完全に底をついた状態に異常低温と早霜に見舞われ大凶作となり、加えて終戦の動揺とあいまって生産者、消費者ともども欠食家庭が続出していた。

また太平洋戦争開戦以来代用食の勵行が叫ばれ、ことに凶作の年などは粥食、黍食のほか従来家畜飼料とされていた澱粉カスも食用に供される食糧難であった。

また、昭和二十八年度の冷害凶作により、石礫除去工事、農道砂利敷工事の救農工事を起し、村直営工事として百万円を投入した。

第三節 昭和の団体移住

支湧別川向い開拓移住民

支湧別五線から九線にかけての支湧別川向いの高台に移住民を入れて開拓を計画した網走支庁は、移民の募集を白滝部落に一任した。ここにおいて白滝の住民は本州各府県に居住する親戚知己におのおの連絡をして移民希望の是否を取り寄せ、あるいは川上角太郎、牛丸勝次らのごとく本州の郷里まで出かけて親類縁者を集め、かくするうち募集予定の二十四戸に達し、昭和九年三月ある者は個人で、ある者は複数

人で、未だ残雪の浅からぬ支笏別川向いの地に入ったのである。当時の移民状況を移住民の一人佐久間只雄は次のように語ってくれた。

「北海道の白滝において移民の募集をしている、開拓地内には一面に立派な樹木が生い茂り、その樹木は素材にしてあるいは立木のままでも換金することができ、豊かな生活をしながら土地を拓くことができる、との甘い言葉にのせられて入地した人が多かったようだ。しかし樹木の名前も、木材相場もわからない移住民は仲介人に思いのままもうけられ、あてがはずれたと泣き出す移住民もいた。こうしたことからまもなく煙のごとく、己が土地をすていずれかへ逃げ出す者もあった」。

支笏別川向いに入った移住民は、とりあえず親戚・知人宅に一時身を寄せそれぞれ建築補助金にていち早く各自の家を建設し、開拓指導の本田弥三郎・拓殖係員指導のもと割当てられた一口当り十町歩の開墾が始まった。開墾もせずして樹木のみ売却することを防ぐため、八割開墾なさずして他に転出する者は売却木代金は支庁に返済することの条件がつけられていた。

移住民氏名(二十四戸)

佐久間保二、佐久間只雄、牧野年一、牧野清之助、三杉金蔵、石川健次郎、梅田順吉、八ヶ崎定吉、居ヶ内恒太、八ヶ崎勘造、鈴木正喜、前田武雄、斎藤孝二、浦川秋治郎、高根亀五郎、高根与太郎、斎藤桂助、松橋玉治、川上川右衛門、伊達勝美、高橋、ほか二戸

天狗沢開拓移住民

昭和十一年三月天狗沢奥と天狗平地区一帯三百三十町歩の地を解放、ここに三十三戸の開拓移民を入れることとし、置戸実習場出身者八名、十勝実習場出身者五名、その他本州より的一般移住者二十名の計三十三戸が入植、移住地近くに建てられた四周に七間、二十八坪の共同居住小屋二棟に、自己の家屋新築に至るまで住んで、それぞれ十町歩の開拓に汗を流したのである。開拓営農指導員には支笏別五線沢とともに早川

中之助が任命され、五カ年間に農耕適地の八割開拓によって無償付与とされていたが、地形不良にして樹木の繁殖茂いものも多く、結局は五割程度の開拓で成功検査の合格となったところが多い。この地に生ずる樹木の伐採は支湧別川向い移住者にみられた経験を生かして、網走支庁の斡旋によって処分したものが大半であった。

移住民氏名（三十三戸）

辻源雄、那須敏、原野不積、横倉信忠、木下貴、植村勘藏、小木曾幾三、古越六郎（以上置戸実習場出身者）、斎藤一郎、堀内
翼義好、増田六郎、母治伊勢吉、佐久間松太郎（以上十勝実習場出身者）、橋詰強、仁井田芳人、奥寺利之助、梁川武雄、小笠
原伊一、星不二雄、条野弘衛、菅谷茂太郎、管沢治太郎、工藤多吉、山田金助、星庄十郎、伊東直勝、五代儀喜六、佐々木定
治、及川定雄、老久保万吾太郎、森武雄、七尾友司、植村

いずれの時においてもそうであったが、移住民の受入れについて道路の開削が入植後において工事着手という
まことにおそまつな受入れ態勢で、移住民は造材道路を利用するありさまであった。更に実習場出身者はじめ入
植した多くの人が徴兵適齢者が多く入植後まもなく応召者が続出、いつ帰還するあてもない夫を待って、女手一
人で荒山開墾は非常な苦勞であり、ついには身心ともにつかれ果て、他に生活の途を求めて転出する者が出はじ
めたのである。

支湧別五線沢開拓移住民

昭和九年の支湧別川向い移民、昭和十一年の天狗沢移民につづいて支湧別五線沢
と九線沢に開拓移民を入れることとした網走支庁では、募集の対象を北見置戸開拓実習場出身者（入植戸数三戸）、
十勝実習場出身者（入植戸数二戸）、釧路実習場出身者（入植戸数一戸）からの希望入植および移民募集を伝え
聞いた者とし、入植期日を昭和十二年三月三十一日と定めて総数二十戸（一戸当り十町歩）を入植せしめた。こ
の時の移民状況は前年同様、四割に十割（四十坪）の開拓者合宿所を五線沢中ほど（元・七尾富雄の前方）にあ

らかじめ網走支庁において建設し、全開拓者を自己の家が出来るまでこの合宿所に収容し、お互いの親交を深めさせる措置でもあった。開拓営農指導員早川申之助の指導を仰ぎながら五年間に六割開墾を了した者に対して無償付与されることとなっていたが、この開拓地内にもかなりの樹木があつて、この処分については支湧別川向いの苦い経験を生かして悪徳業者をしめ出し、網走支庁が仲介となり一括して木材業者に入札をなし、売却代金は材積に応じて個人に支払われ、巨額の立木代金を手にする者もあつた。しかし開拓の苦勞に挫折し開墾成功検査をうけずして土地を離れた開拓者のいたことは、いずれの開拓期においても同じであつた。

移住民氏名

稲庭熊治、細川多喜男、清水好雄、味戸兼一、有我正吉、七尾富雄、名取徳高、溝淵竹一、成田保雄、飛鳥義雄、小野山太郎、飯塚文太郎、萩野貞司、溝淵留一、伊藤末雄（以上五線沢）、南条庄三郎、白戸米吉、花岡市松、小林一男、山崎（以上九線沢）

第四節 農業の機構

農業協同組合

大正五年家庭学校北海道分校白滝第二農場が支湧別九線の地三百町歩余の国有林払い下げを受けて創設され、分家といわれる小作者によつて意氣盛んに開拓が進められたが、白滝はもとより支湧別部落ににおいても各種商品の購入には高い品を買わされ、逆に農産物の販売は遠距離にしてかつ交通の不便を理由として安値取引がなされるなど入植者の苦勞は大変なものであつた。ここにおいて大正十年に支湧別農場主任として遠軽家庭学校から赴任してきた鈴木良吉はこうした現状に心を痛め、「農家の人々の不利をなくしお互いの利をはかる」ことを主眼として大正十二年「支湧別信用販売購買利用組合を」組織し、鈴木良吉を組合長に、岸野喜三

郎を専務理事として、広く支那別一帯の農家の人を組合員に勧誘し、農産物の集荷、貯金の奨励、乳牛飼育奨励にもなる集乳所の建設など大いに事業をおこし、やがてはこの組織を白滝全部落におしひろめ産業組合を設立して農業の振興をはかろうとした。のち、これが今日みられる農業協同組合設立の礎石となったのはいうまでもない。

かくて白滝一門を区域とした産業組合の組織をつくることの機が熟し、昭和四年支那別信用販売購買利用組合を白滝へ移して、白滝信用販売購買利用組合として発足、鈴木良吉が再び組合長としてその手腕をふるった。昭和六年四月組合員五十六名、払込出資金一千八百四十七円、準備金百円、貯金額一千八百九十七円の成績（『遠軽町史』による）を示している。昭和九年四月遠軽町制施行とあわせてこれまでの信用販売購買利用組合を飛躍さ

せることから「白滝産業組合」と改称認可をとり、中山徳蔵が初代産業組合長に就任、農家経済の拡大強化に献身した。

昭和十六年四月、政府の一町村一組合の方策によって白滝産業組合は遠軽に吸収され、遠軽産業組合白滝事務所と改称された。

昭和十八年に出された農業団体統合法によって翌十九年産業組合を解散し新たに農業会が設立され、遠軽町農業会白滝支所として衣替えされたが、終戦によって従来の法的な諸団体はすべて占領軍の命令によって強制解散となり、農民の動搖はおおいかくせなかった。昭和二十二年協同組合法が制定され、戦時中の農業会にかわる新しい組織の農民のための農業協同組合設立が認められ、本村におい



農 協

ても昭和二十三年四月二十四日、白滝村農業協同組合が農業共済組合とともに設立認可をみ、中山徳蔵が初代組合長理事に推されたのである。

初代組合長理事	中山徳蔵	自昭和二十三年四月二十四日—至昭和二十四年五月二二日
二代	阿部仲蔵	自昭和二十四年五月二二日—至昭和二十六年五月二二日
三代	小出月江	自昭和二十六年五月二二日—至昭和三十三年五月二二日
四代	古閑初夫	自昭和三十三年五月二二日—現在

昭和二十三年四月設立當時の組合員数		正・準組合員共
昭和四十六年三月現在の組合員数	正組合員	一六六名
	準組合員	一四〇名
	計	六〇名
出資金		二〇〇名
口数	一万七千二百八十九口	
総額	一千七百二十八万九千円	
払込額	一千七百二十八万九千円	
総貯金額(昭和四十六年二月末現在)	二億二千九百万円	

昭和45年度農産概況

		作付面積 (ha)	生産額 (千円)
麦	類	215.0	22,691
エ	ン	64.1	3,815
菜	豆	179.5	26,801
小	豆	3.3	331
馬	鈴	209.5	104,244
ビ	ト	142.7	32,046
飼	料	336.4	—
そ	の	28.2	—
	計	1,178.7	189,928

白滝農協は昭和四十一年十月近代的な建築をなし、この事務所に購買部店舗を設備し、スーパー式方法による店舗経営は組合員はもとより一般住民の利用度も大きい。

農地解放 昭和十三年四月法律第六十七号をもって公布された農地調整法によって農地委員会制度ができ自作農創設をふまえた農地制度の改革を推進されたが、任意設置の農地委員会でもあったため活発な動きがみられず、太平洋戦争勃発によって地主的所有制度改革の構想は一時おあずけの形となった。

戦後再びこの問題が国会で取上げられ、うちつづく社会不安と食糧危機の増大から生ずる封建的な地主意識の打破を目ざし、小作地の徹底的な自作地化すなわち農地改革の事業がここに展開されたのである。こうして昭和二十年十二月法律第六十四号で改正農地調整法が公布され翌二十一年二月から施行されることとなったが、占領軍総司令部の意に沿わぬところもあって、同二十一年六月総司令部は日本政府に対して農地改革の徹底的断行について一警告一がなされ、政府は再び農地制度改革に手をつけはじめた。こうした経過によって昭和二十一年十月法律第四十二号による「農地調整法」、法律第四十三号による「自作農創設特別措置法」を公布、土地制度の束縛から解放されることとなり農業の基盤が確立されることとなった。

こうしてこの年十二月、本村役場内にも農地委員会事務局を設置、翌二十二年一月左の農地委員が選挙によって選ばれ、会長に布田富蔵が推された。

農地法による買収、売渡状況

項目	農地 (反)	牧野 (反)	宅地 (反)	未墾地 (反)	計 (反)
買収された積 面積	4,156	362	465	2,944	7,463
売渡をうけた積 面積	4,133	362	465	2,944	7,440

住所		氏名		住所		氏名	
白	澁	布田	富藏	上支	澁別	山崎	政治
支	澁別	小山田	清吉	支	澁別	吉田	三太郎
白	澁	山本	善七	〃	〃	佐藤	創四郎
土	澁	森谷	吉郎	〃	〃	原田	重吉
奥	澁	大庭	千代吉	田	澁	平岡	久雄

農業共済組合

昭和二十二年農業補償法の公布によりこれにもとづいて本村においても翌二十三年四月十九日農業共済組合が設立された。設立当時の組合員数は百六十六名で組合長には時の農業協同組合長が兼任、農作物共済、家畜共済の業務が開始された。

事業の概況（昭和四十六年三月現在）は次のとおりとなっている。

共済加入面積

麦類 一万八、〇〇〇畝

畜牛 五百五十頭

家馬 七十五頭

計 六百二十五頭

共済金（支払）

麦類 三十三万 七、五三五円

百六十一万四千百九十五円

家畜（牛馬共）死亡 十二頭

共済掛金（組合員負担分）

麦類 五十二万八千五百四十一円（七十四円）

家畜 二百三十四万五百九円（七十五円）

疾病 七百六十八頭（延べ頭数）

二百四十三万二千二百五十九円

共済組合員数 百三名

開拓農業協同組合

戦後この地を第二の故郷と定めて入植した開拓者たちは、経済的にも苦しい生活とたたないが汗にまみれて開墾に精を出していたが、営農資金の貸付獲得は個人対象ではラチがあかず組合を組織することが肝要と、昭和二十三年十一月一日白滝村開拓農業協同組合（組合長理事佐藤正雄、組合員五十二名）が設立認可され、営農資金の優先貸付、開墾補助金の交付申請など開拓者相互の福祉を増進し開拓者に対する営農保護がそのおもな事業であった。

食糧調整委員会

昭和二十一年食糧管理法の一部改正によって戦前の農地委員会が食糧調整委員会と改称され、戦後の窮迫した食糧事情に対処し供出制度の円滑化を強力に推進するため一般農民の選挙による委員が本村においても昭和二十二年九月選出され（無競争当選）、道知事の嘱託をうけた。

住所	氏名	住所	氏名	住所	氏名
支湧別	佐藤友一	奥白滝	大庭三代次	上支湧別	葛原嘉市
夕	有我正吉	奥白滝	内良金	東白滝	伊藤仁郎
白滝	吉田美代治	田白滝	丹羽実市	上支湧別	辻源一
上支湧別	中山徳藏	支湧別	有木文吉	上白滝	服部清
白滝	岩城近藏	上支湧別	山崎政治	白滝	井上市藏
支湧別	榎村貞吉	奥白滝	菅原政治		

農業調整委員会

昭和二十三年七月食糧確保臨時措置の制定によって、この年十一月食糧調整委員会が解散され、代つて農業調整委員会が新しく発足することになった。この委員会の目的は食糧の生産および供出の割当てを計画的に行ないもつて窮迫せる食糧事情の安定をはかることにあった。

本村において選ばれた農業調整委員（会長阿部仲藏）は次のとおりであった。

住所氏名	住所氏名	住所氏名	住所氏名	住所氏名
旧白滝 丹羽 岩城 古関	阿部仲藏 実山 近蔵 一	上白滝 東白滝 奥白滝 支湧別	服部清 松原力雄 五十嵐長藏 遠藤秀治	支湧別 味戸兼一 有本文吉 辻源一
白滝 古関	奥白滝 支湧別	五十嵐長藏 遠藤秀治	上支湧別 山崎政治	支湧別 渡部宏助

農業改良委員会

昭和二十三年八月一日より農業改良助長法が公布施行となり、農業改良相談所が本村にも設置され、左記の委員が道知事より任命され農業生産の増長につとめた。

住所氏名	住所氏名	住所氏名
旧白滝 上白滝 東白滝	丹羽実市 藤吉男 藤仁郎	支湧別 上支湧別
渡瀬秀雄 菊地善吾		

東紋西部地区農業改良普及所

農業改良普及所の広域活動体制をはかるため普及所の統合強化が打ち出され

ていたが、最終的に全道六十地区（網走管内八地区）に再編成され昭和四十四年九月新機構によって再発足したのである。この結果、東紋西部地区農業改良普及所は従来の遠軽地区、生田原地区、丸瀬布地区、白滝地区を統合し、遠軽地区を中心普及所とし、生田原、丸瀬布、白滝の各地区におのゝ名の駐在員を配置し広域活動を推進することとした。中心普及所の遠軽には専門担当普及員を常駐し、広域普及所管轄全域を対象として高度な技術の普及指導にあたっている。普及指導には農協、農業委員会等各機関との連絡強調により生産技術指導、自立経営育成指導等、地域農業の振興につとめ近代的農業の確立に積極的指導を行ない、あらゆる普及活動を行なっている。

白滝地域担当改良普及員は下佐美智雄が駐在している。

農業委員会 農地改革の好成果と食糧事情の好転したことによって、農地委員会、農業調整委員会、農業改良委員会が発展的に解消され、昭和二十六年三月法律第八十八号をもって公布された農業委員会法によってこの年四月農業委員会が義務設置となった。

歴代農業委員

項目	選挙区	当選者	備考
第二回	昭和二年七月一日	渡辺 俊勝 大庭 喜代治 古閑 仁 岩城 義雄 服部 清 佐久間 只雄 小山田 清吉 山崎 政治 源 一 堀田 彦治 菊地 善吉 阿部 仲藏（会長） 遠藤 秀治	第一回、第三回は記録なし

第四回	昭和三年 七月一日	早川 武夫 古関 一男 山崎 政治 原田 天象	服部 清 片山 四男也 出立 寅雄 熊谷 貞雄	渡辺 俊勝(議会推せん) 佐久間 只雄(農協推せん) 古関 初夫(共済組合推せん)	会長 山崎 政治
第五回	昭和三年 七月一日	早川 武夫 新保 国英 片山 四男也	服部 清 原田 天象 熊谷 貞雄 小野 由太郎 山崎 政治	古関 一男 出立 寅雄 佐久間 只雄(農協推せん) 古関 初夫(共済組合推せん)	会長 山崎 政治
第六回	昭和四年 七月一日	早川 武夫 相馬 清 山崎 政治 小野 由太郎	原田 天象 古関 一男 服部 清 片山 四男也 本田 弥徳	新保 国英 早川 武夫 佐久間 只雄(農協推せん) 古関 初夫(共済組合推せん)	会長 山崎 政治
第七回	昭和四年 七月一日	早川 武夫 服部 清 山崎 政治	原田 天象 笠間 誠一 新保 国英 片山 四男也 小野 由太郎	古関 一男 菊地 芳三 佐久間 只雄(農協推せん) 古関 初夫(共済組合推せん)	会長 山崎 政治

委員の第一回選挙は昭和二十六年七月二十日執行され十五名の委員が誕生したが、この委員の選挙権および被選挙権は市町村に住所を有する満二十歳以上で三反歩以上耕作の業務を営むものおよび同族の親族またはその配偶者で年間およそ六十日以上営農をなすものとなっている。

石れき地帯対策地区試験圃場

本村内農耕地のうち八〇割余が多量の石礫を含んでおり、営農振興上きわめて大きな障害となっている。このため村においては昭和四十一年試験圃場を設置して、耕地内の石礫を除去して客土併用および単独無処理区による作物生育状況ならびに収量試験を行なった。この試験圃場は支湧別伊藤末雄所有地六〇坪を選定、この年十一月圃場の造成事業を実施、試験の結果詳細な資料を作成し、道に対して土地改良法による石礫除去事業の指定促進を強力に要請するものである。

農漁業揮発油税財源身替農道事業（農免農道整備事業）

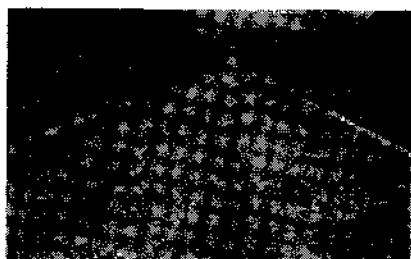
農業用道路を整備して農業の機械化と生産物の輸

送の合理化をはかるとともに農村地域の改善を進める目的で昭和四十年に農免農道整備事業が始められた。これは農林漁業用機械に使用する揮発油税が課税されており、これを免税にすることが検討されたが、免

税の場合その方法がむずかしいため、免税にかわる方法として課税相当分を農村に還元し、この還元金を活用して農道の整備を実施しようとの方策である。事業の対象は農業用の基幹道路となっており、事業費のほとんどが国庫、道費補助によってまかなわれる。

農 免 農 道

本村においては昭和四十三年度においてこれが補助の枠付けがなされ、初めてこの農免道路整備事業が実施された。すなわち天狗平地区に全事業二カ年継続で総事業費約四千四百六十万円を投入、全長三、九六八メートルの農免農道新設改良工事が起工され、初年度において、一、七五〇メートル（車道幅員四メートル）を実施、次年度の昭和四十四年度において二、二一八メートルを実施、竣工したのである。



山村振興法指定村

昭和四十年五月、国内町村のうち、林野面積の占める比率が七五割以上もあり人口密度一・一六人未満で交通条件および経済的・文化的諸条件に恵まれず、産業の開発の程度が低く、かつ住民の生活水準が劣っている山間地の経済力の培養と住民の福祉の向上ならびに地域格差の是正をはかるため山村振興法を公布制定し、その地域に適合した振興策がとられることになった。山村振興法第一条に「山村における経済力の培養と住民福祉の向上を図り、あわせて地域格差の是正と国民経済の発展に寄与することを目的とする」とあり、山村の振興は山村における産業基盤および生活環境の整備等を図ることを旨とし、左の目標に従ってその地域にあった振興計画が策定され推進されるのである。

山村振興の目標

- 一 道路その他の交通施設、通信施設等の整備をはかることにより山村とその他の地域および山村内の交通通信連絡を発達させること。
- 二 農道、林道、牧道等の整備、農用地の造成、電力施設の整備等をはかることにより土地、森林、水等の未利用資源を開発すること。
- 三 農業経営および林業経営の近代化、観光の開発、農林産物の加工業等の導入、特産物の生産の育成等をはかることにより産業を振興しあわせて安定的な雇用を増大すること。
- 四 砂防設備、保安林、地すべり防止施設その他の国土保全施設の整備等をはかることにより、水害、風害、雪害等の災害を防止すること。
- 五 学校、診療所、公民館等の教育、厚生および文化に関する施設の整備、生活改善、労働条件の改善等をはかることにより住民の福祉を向上させること。

本村においてもこれが振興山村の指定を受け、もって産業の開発に資せんものと昭和四十一年九月、白滝村振

興企画協議会^カを組織し住民の意志を充分反映しながら具体的な山村振興計画の策定を急いだ。協議会の構成は村長を会長に、村議会議員、町内部落会の長、農業委員、教育委員、小中学校長および農業協同組合、酪農組合、商光会等の役員、婦人会、農村青年会の代表、地区労働組合協議会の代表のほか、営林署長および農業改良普及所長等、国、道出先機関の長など五十名の委員をもつてし、協議会の中に財政部会、農林部会、建設通信部会、商工観光部会、文化厚生部会の五部会を設け、それぞれの部会で本村に合った振興対策を研究討議し、農家の経営拡大、農産および酪農振興のための基盤整備と道路整備、土地改良その他福祉向上のための環境整備、文化、観光開発等、全体長期計画の概算事業費総額およそ十五億九千万円とし、これを昭和四十二年度から昭和四十五年度までを第一期として五億四千万円、昭和四十六年度から昭和五十一年度までを第二期として五億二千万円、昭和五十二年以降を第三期として五億三千万円を配し、このうち第一期計画分を昭和四十一年十一月末に振興計画として道に提出のはこびとなった。同年十二月二十日総理府告示第五十四号、指定番号第七十八号によって本村は山村振興法による振興山村の指定を受けたのである。網走管内においては丸瀬布町（昭和四十年指定）に次いで二番目であった。

かくして第一期概算計画事業費のおよそ八七割にあたる四億七千万円にのぼる事業量が承認されたのである。

これら第一期、第二期ないし第三期の計画達成後の本村勢は大きく飛躍し、農地面積は現在の約二倍二・五〇〇畝に伸び、農家一戸当り平均二五畝となつて機械の共同化が実現するほか、乳牛においては現在の三百頭から一躍一千頭になり、農家粗収入はおおむね四百六十万円となつて経済の安定を期することになる。また林業においても造林の拡大化によって面積も公有林、民有林をあわせて現有三四八畝が一、二二〇畝に伸びて将来の冷害

施策区分	山村振興事業名	概算		備考
		事業量	事業費	
交通施策	村道白滝原野中央線	道路 L 四、〇〇〇 架	五〇、〇〇〇	建設省関係 S 四三 S 四五年継続事業
	村道天狗沢共栄橋	架換 L 三 三〇 架	一〇、〇〇〇	
	村道湧別川沿道路二〇号線	架換 L 一五・四〇 架	三、〇〇〇	
	村道二八号道路湯の沢橋	架換 L 四〇 架	一一、〇〇〇	
	村道テレビ道路	道路 L 一、七三〇 架	四、五〇〇	
小計			七八、五〇〇	

次表のとおりである。

山村振興事業状況 第一期分(単位 千円)



ブルドーザーを導入し土地基盤整備をはかる(山村振興特別開発事業)



改良工事の完了した中央道路
(山村振興土木事業)

備林的な役割を果たすわけである。さらに小、中学校の施設も一段と充実し、豊かな教育が期待されるわけである。そして実のある村づくり、部落づくりに邁進し、山村に住む者たちにとつてもその地域が真に住民の幸せにつながった愛すべき土地であり郷土であるものにつくりあげるべく、将来の白滝村に住民こそつて協力するとともに大きな期待をかけている。

すでに振興事業第一期も最終年度になり、当初の計画にもとづき着々事業の遂行に努めている。第一期分事業の状況は

文化施策	学校給食センター新築 スクールバス整備 小計	一六二平方呎 一台	八、〇〇〇 三、五〇〇 一五、二五〇	S四三年度完成。丸瀬布町と共同設置による 白滝村負担分 S四四年度完成。北見バスと運行契約により 維持費村費負担
社会教育 施策	柔剣道場 小計	四五〇平方呎	一五、二〇〇 五、二〇〇	S四四年度完成
社会生活 環境施策	公営住宅建設事業 関こん建設付帯事業 小計	村道 管二種一〇戸 管二種二二戸 本道三、三六二呎	二七、九四七 三、〇〇〇 三〇、九四七	長期継続事業 S四五年度完成
国土保全 施策	湧別川水系砂防事業 小計	北見二基	五〇、〇〇〇 五〇、〇〇〇	未施行
合 計			四七〇、九九八	

白滝村農業振興基金運用委員会

本村農業振興基金の円滑な運用を推進することを目的として昭和四十五年四月白滝村農業振興基金運用委員会が発足し、事務局を白滝村農業協同組合内に置き、昭和四十五年度から五年の間、村が一千万円を積立て、これと同額を白滝村農協が積立て、合計三千万円をもって運用資金に充てることになっている。これによって本村農業経営構造の改善と農家経済の安定をはかれるよう期待している。

委員長は丹羽良男である。

てん菜増産推進協議会

本村における寒冷地畑作農業の安定的な確立を一層推進するため、営農者の深い理解を求めつつ、てん菜の生産振興を強力に推し進めることを目的として昭和四十四年一月「てん菜増産推進協議会」が生まれ

一 土地基盤の整備

二 紙筒移植栽培の積極的普及

三 直播栽培における早播きと欠株防止

を推進目標としており、増反、増収者に対して報償制度も実施している。協議会会長には国松村長があたっている。

農業推進会議

寒冷地畑作地帯という必ずしも好ましいとはいえない本村の農業は、きびしい気象条件とたにかい、しかも農業経営経済の起伏多難な情勢のもとにありながらも意欲的な営農により着々として農畜産物の伸長がみられているが、さらに生産基盤の確立を日途とし、寒冷地農業を確立しもって農家経済の安定を一段とをはかるを目的として、毎年三、四月ころ農業経営者ならびに農政関係者を招集し特に「農業推進会議」を開催、経営規模の拡大と生産性向上を目ざして真剣な施策が論じられている。

昭和四十五年度における農業施策の概要は次のとおりとなっている。

一 畑作の振興

1 てん菜の振興

2 馬鈴薯の振興

3 麦作の振興

4 主要農作物試験研究推進

二 営農改善推進

- 1 営農改善計画樹立推進
- 2 近代的農業経営者の育成
- 3 農業機械化対策の推進
- 4 農地流動化促進
- 5 農作物防疫対策の推進
- 6 農業金融の活用ならびに充実促進
- 三 農村環境の整備と生活改善の推進
- 四 農業基盤整備の推進
- 1 耕地改良事業の推進
- 五 土地改良事業の推進
- 1 国営土地改良事業（二年次）
- 2 道営開拓パイロット事業の推進
- 3 団体営開拓パイロット事業の推進
- 4 団体営土地改良事業の推進
- 5 石れき除去対策の推進
- 六 開拓営農の振興

北海道食糧事務所北見支所白滝出張所

開拓の進展にともない農産物の出荷量が年とともに増してきたため、大正四年遠軽においても嘱託検査員の手によって雑穀の検査が行なわれるようになったが、大正七年北海道雑穀商同業連合組合が札幌に結成されるに及んで将来大いに発展性に富む遠軽市街にこれが駐在所の設置を望み、関係業者の連署をもって請願運動が展開され、ついに大正七年六月雑穀検査駐在所が設置された。

- 1 開拓農家負債対策の推進
- 2 開拓者離農助成対策事業
- 七 畜産の振興
- 1 酪農の振興
- 2 優良牝牛導入による利子補給
- 3 乳牛経済検定事業の推進
- 4 中小家畜の振興
- 5 家畜衛生事業の推進
- 6 牧野整備の推進
- 7 牧野衛生対策の推進
- 八 林業の振興
- 1 林業振興事業の促進
- 2 山火予防対策の推進
- 3 村外優良造林地視察
- 4 林業クループ育成事業
- 5 熊獣駆除対策の推進

昭和六年九月二十三日、白滝住民の要請によって北海道農産物検査所白滝派出所が設置され、地元においては雑穀検査は農家にとってたまことに便利となった。

昭和二十二年五月従米の検査業務に対する機構改革がなされ、名称も農林省北海道食糧事務所北見支所白滝村出張所と改められ現出張所長は逢沼繁である。

第五節 農産加工業

澱粉製造

自給食糧としての馬鈴薯は開拓者には好感のもてる作物であったが、交通不便な開拓期のことゆえ地方出荷も思うにまかせず換金作物としての人気はなかった。こんなところから村内において馬鈴薯澱粉の製造が早くから始められた。まず岡崎儀蔵、岡本辰八、山本善七、宮本幸八の共同経営による鳳澱粉工場が大正七年九月に（今の西区、通称澱粉沢入口）、同年十月藤田門一が支別別六線で、丹羽実市が上白滝でそれぞれ水車により創業を開始することによって馬鈴薯生産者に対しても光明を与えたわけである。以来馬鈴薯生産量の増大に従って澱粉工場もしだいにその数を増していった。

戦後食糧事情の逼迫がつづき澱粉の需要が伸び、昭和二十五年には実に村内十八工場（生産量七千八百袋）にふくれ上った。しかし経済の好転にともないしだいに澱粉の需要が減り、加えてコスト高から小規模工場は整理され、現在山本善七、斎藤久治、岩城義男、渡瀬秀雄の共同経営による合理化澱粉工場と丹羽澱粉工場の二工場となっている。

澱粉工場の操業については、数年を経ずして中止したもの、あるいは人手に渡したものと、長期にわたって操

業をつづけたもの、さらに今日もなお続いているもの等千差万別であるが、確とした資料に乏しいため、左記のごとく操業年代別に記してみた。

大正期に操業を開始したもの

◎澱粉工場、藤田田一、丹羽実市、福本光矣、浜野、高橋共同工場（高橋利作、高橋仙太郎）、大庭喜代治、木山重蔵、山本善七、田坂唯光、岩城近蔵、水谷正吉

昭和期に入って操業を開始したもの

前田勘治、菊地善吉、稲垣仙次郎、古閑勘六、斎藤久治、加藤常作、平岡久雄、山崎之吉、横山一郎、服部清、笠間誠一、岡竹松、岸浦吉、遠藤栄次郎、稲田信一、西尾博文、松原力雄、北畑一郎

第二章 林 業

第一節 林業の起り

原始時代における蝦夷地は昼なお暗いほど鬱蒼と生い茂る原生林幾重にもつらなり、想像を絶する密林島で、今日みられる広大な平野、過伐による禿山を見て千古の容姿を想いおこすことは全く不可能であらうほどにその変貌ぶりは驚かされよう。

密林地帯の本道にも移民の増殖によって年とともに樹木の需要が増大し、貴重化した森林資源の維持育成策が

打ち出された。

根室支庁は明治十年十二月「山林取締仮規則」を制定し、山火・乱伐の防止に力を入れ山林の保護につとめ、初めて一貫した林政方針が示された。しかし開墾を急いだ入植者のほとんどは、耕地可能な地に生ずる樹木はむしろ開墾上全くの障害物であり、わずかに当時はマッチ軸木として脚光をあびていた白楊（ドロノキ）材を売却するほかは、伐倒木を処々に集積して焼却されていた。今にして思えばまことにもったいない話であるが、開拓途上のころでは開墾に追われしかも素材販路の狭い地方においてはむべなるかなであろう。

しかし、開拓日の浅い当時は農作物による収入まことに微々たるもので、これが買ひ手のついた素材の売却代金をふところにした入植者は思わず開墾の苦勞を忘れてほほ笑むのであった。あまりにも見事な林相に造材業者が先をきそうて入り込み、釧路三昧に立派な素材を集め、ある業者は現地に工場を建て加工し、ある業者は素材のまま瀬戸瀬、遠軽、湧別方面に搬出するなど、林業のいぶきがここに始まったのである。既述のごとく密林におおわれた未開の本村が意外に早く拓けた理由の一つに、こうした造材事業の台頭があげられよう。

造材 白滝原野増画地解放後、紀州団体をはじめとして、大正期になってからも各団体陸續として未開の原野に入植し来たり、鬱蒼と生い茂る原始林にたえずみ、苦勞の覚悟はしてきたものの、あまりの密生林にいかにしてこれを伐採し開拓してゆくか、伐採に未経験なものの中には途方にくれる者もあった。不慣れな手つきで木を伐る姿はあまりにも痛々しいありさまであった。しかし、こうした心配もほどなくして消え去った。造材業者の立木買入れが始まったのである。地場において加工するもの、素材のまま流送をして遠軽方面にて陸揚げをなすもの、あるいは陸送をなすもの等、木材景気はつのるばかりであった。



大正期の集材風景を語る偉容

造材事業の先端をきって入ってきたものは、瀬戸瀬に大工場を構えていた清水喜太郎経営による清水木材部（白滝出張所主任佐藤勇次郎）が最初で、大正六年五月の大火火によって白滝における造材を中止するまで三十万石を上回る業績を残し、白滝原野の開発はこの清水木材部によって拓けたと豪語するものもいるほどである。

白滝原野いずれの地に足を入れても、鬱蒼たる森林であったがため、ひとり清水造材のみならず事業量の差こそあれ至るところで造材事業が繰りひろげられていた。造材事業の興隆はまた開拓農家の恰好の出かせぎ場となり、立木の売却とともに農家経済をうるおし、自然、開墾の鍼にも力が入ったというものである。

当時の白滝における林業を、大正六年の『北見新聞』は次のように報じている。

「この地の林業は農業について最優秀な位置を占め、前途尚無尽蔵にして年産十萬石を伐採するを得べく、その他の林産牧畜にいとまあらず、故に現在における同村の農民は冬期半年斯業によりて生活する者多く、上賃その他を合算すればこれ又年産額二十萬円を下らざるべし」とあるから想像以上のものであったようである。

隆盛をきわめた造材事業も大正六年の忌まわしい大火火によって一面焼け野原と化し、にわかに素材産出量が激減、造材もやがて縮小せざるを得なかった。

大正期におけるおもな造材施行業者

清水喜太郎、桜井木材、清水藤次郎、岡田品助、筒井新平、加藤修一郎、牛山金蔵、片野治郎吉、仲屋勇次郎、吉田末吉、松

本幸次郎、中山徳藏、布田富藏、井村謙二、佐々木三之助、原野秋蔵、倉島水一郎、渡瀬長之助、松田四平、松谷多次郎、昭和期に始めたおもな造林施行業者

森本哲、大庭千代吉、牛丸勝次、出口俊平、的場正夫、中安文治郎、岸浦吉、藤本輝彦、神原利平、藤森道雄、中山親孝、野沢正市、中村弥太郎、渡瀬正司、名和稔、棚橋重利、大庭裕二、藤原清、白滝林産組合

第二節 その歩み

網走営林区署白滝保護区員駐在所

明治十九年一月北海道庁開設にともない山林事務はこれまでの農商務省所管から道庁内山林係担当になり、統一された山林行政の第一歩が踏み出されたわけで、以来幾度となく担当先に移動がみられたが、明治三十五年全道三十カ所の林務課員派出所の下に九十八カ所の森林保護区員駐在所を配置し、主として森林の状況、火災の原因、予防、鳥獣害の有無、侵襲者の有無、森林産物の盗取およびその予防その他森林保護に関する取締りの強化がはかられた。さらに明治四十一年六月「営林区署制度」を設けることによって従来の派出所制を改め、保護区員駐在所をふやし国有林の保護監視と経営管理に当った。このとき網走営林区署およびその下に紋別営林区分署が設置され、本村の林野はその所管となった。しかし大正二年紋別営林区分署は緊縮財政にあつて廃止され保護区員駐在所となった。このころ本村には年ごとに団体移住があいつぎ、未開の林地に開拓のための斧鋸を振り巨木を伐倒、火入れ作業が行なわれていた。こうした開拓の進展による国有林保護・無災の見地から大正五年四月一日「網走営林区署白滝保護区員駐在所」（担当区の前身）が白滝に設置され小西森林主事が着任、監視の目を光らせた。しかるに翌大正六年五月未曾有の大火火に見舞われたことはあま

りにも皮肉な惨事といえよう。この事件によって保護区員は竹中勝重主事に代った。

大正八年四月網走営林区署の下に野付牛（北見）、遠軽の各営林区分署が新設され、本村の駐在所は遠軽営林区分署の管轄下となった。昭和三年六月営林区分署制度の廃止によって遠軽営林区分署も営林区署に昇格、網走営林区署の配下から離れたのである。こえて昭和十一年四月保護区員駐在所が担当区員駐在所と改称された。昭和十六年六月遠軽営林区署の官行斫伐事業が本村においても行なわれることとなりその事業所が設置され、戦時下急増する木材の需要に対処したのである。

現在村内は左のごとき四担当区に分類されている。

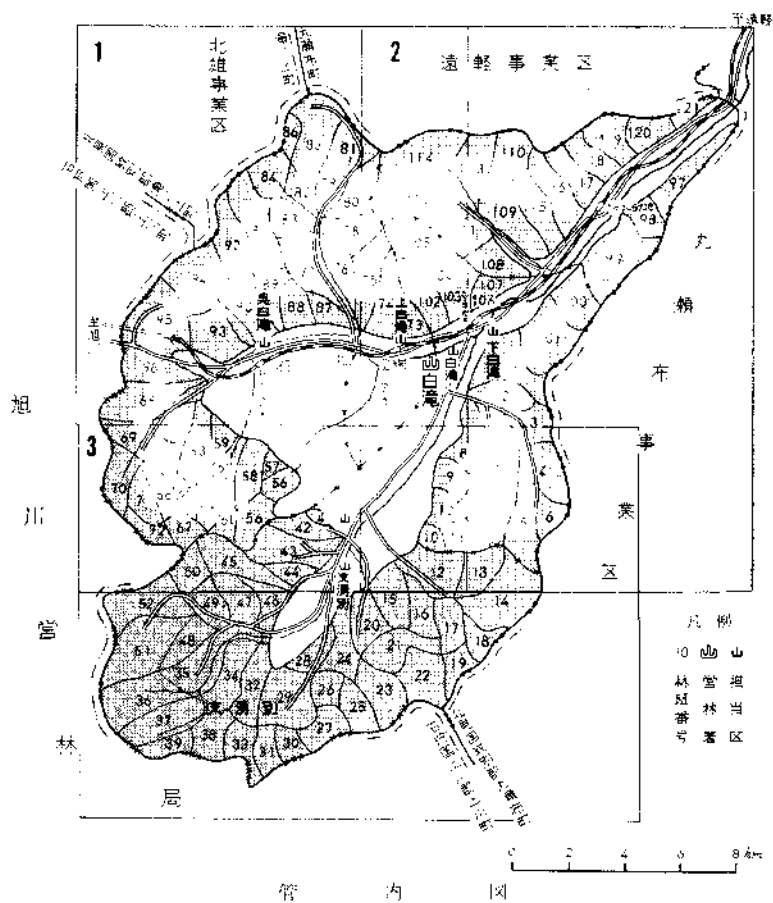
名	称	所	在	設 立 年 月 日	備	考
白滝営林区署白滝担当区事務所		白滝市街		大正五・四・一	前身は白滝保護区員駐在所	
〃 奥白滝担当区事務所		奥白滝		昭和一二・七・一	前身は奥白滝保護区員駐在所	
〃 下白滝担当区事務所		白滝市街		昭和一二・一〇・一		
〃 上支湧別担当区事務所		支湧別		昭和一九・七・五		

白滝営林区署 昭和二十一年八月本村および丸瀬布はそれぞれ缺をわかし遠軽町より分村したのであるが、国

有林野行政は従来どおり施行されていたものの、敗戦によって領土を失いこれに付随した森林資源の損失もまたあまりにも大きかった。これがためわが国は国土資源の集約的利用の必要性から林政の統一策がとられ、昭和二十二年五月勅令をもって国有林は農林省所管となり道内五営林局（旭川、北見、帯広、札幌、函館）を新設、おのの管理区域を規定して傘下の営林区署（このとき営林区署が営林署となる）を統括した。機を同じくして丸瀬



白 滝 营 林 署



名 称	所 在 地	管 理 面 積 ha
白滝営林署	白滝村西区	28,466
区		
白滝担当区	白滝村西区	4,115
下白滝担当区	中央区	4,700
上白滝担当区	上白滝	3,645
奥白滝担当区	奥白滝	5,749
支湧別担当区	上支湧別	10,257
白滝苗畑事業所	西区	—
支湧別製品事業所	上支湧別	—
白滝貯木場	南区	—
分		

布独立署設置の要請が当局に具中され昭和二十二年十月丸瀬布営林署が誕生、本村はその区域下になった。その後木材の統制撤廃によっていよいよ復興建築の槌音も高く、木材の需要は日に月に伸びたることを幸いに白滝営林署設置の猛運動が展開された。

昭和二十七年二月に開かれた第一回定例村議会において協議案の第一号として「丸瀬布営林署管内に属する奥湧別事業区及び北湧別事業区を分割して本村に白滝営林署の設置方を促進するについての運動方法及びその対策について意見を諮う」との協議が真剣になされ強力な運動態勢をとったのである。ここにおいてついに昭和二十九年七月五日農林省告示第四百七十六号をもって丸瀬布営林署より分割して本村一円を管轄する白滝営林署が市街地東区村立技芸学校内に設置翌五年西区現在地に移転され、ただちに業務が執行されたのである。

白滝営林署の管理状況は次のとおりである。

歴代署長

氏 名	就任年月日	退任年月日
初代 渡辺 正男	昭和二九・七・五	昭和二三・四・一
二 佐々木 承夫	昭和二三・四・一	昭和三四・七・一
三 渡辺 義雄	昭和三四・七・一	昭和三六・五・一六
四 池山 栄一	昭和三六・五・一六	昭和三八・六・一
五 山崎 敏夫	昭和三八・六・一	昭和四〇・八・一六

六	小 亀	安	〃	四〇・八・二六	〃	四一・二・二一
七	恩 田	智 雄	〃	四一・二・一	〃	四五・七・二六
八	高 菜	元 彦	〃	四五・七・二六		

白滝営林署苗畑

本村全面積のおよそ八三割が国有林で占められており、これが緑化推進に営林署においては毎年二五〇から二八〇畝に及ぶ造林事業を行なっている。

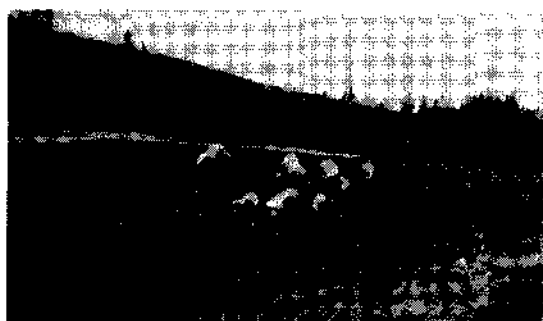
村内西區はずれにある営林署の苗畑は、立派な造林地をつくるための条件として、(一)よい苗 (二)よい土地 (三)よい植えつけ、をスコージガンに大切な苗木をわが子のようにかわいがり育苗している。

森林愛護組合 大正六年五月の大山火後、森林防火組合設置規則に従って本村域内各部落ごとに防火組合を設立、山火防止に献身した。

昭和二十一年本村の分村によって翌二十二年四月、これまでの各防火組合を森林愛護組合と改称、同時に連合会（初代連合会長野沢正市）を組織して各単位組合との連絡協調をはかり毎年一回總會を開き、山火絶滅、森林の保護および育成に協力援助を行なっている。現在組合数は七組織で、連合会長は藤本輝彦である。

山火予防対策協議会

本村はその総面積のおよそ八五割が国有林野と民有林、公有林で占められており、豊富な森林資源と恵まれた自然環境の保



苗 畑

護は山火の絶無を目標に予防態勢を整えることによるものであり、これが対策に森林愛護組合連合会においても繰々協議がなされていたが、趣旨の徹底と大正六年発生の恐るべき大山火を再び繰りかえさぬよう無事故の万全を期するため、白滝営林署の提唱により昭和二十七年四月白滝村山火予防対策協議会を発足させ、例年四月に開催される森林愛護組合総会の席上この協議会がもたれることになっている。会長には村長が就任、対策本部を営林署内に設置していたが、昭和四十年よりこの本部は白滝林産協同組合内に移された。

山火予防対策重点要綱は次のとおり定められている。

一 山火警防期間の制定

毎年五月一日より六月二十日までを山火予防期間として地区別に警防連絡員などを設け無断入林等にそなふ厳重な警戒を行なう。

二 無煙期間の設定

毎年五月一日より五月三十一日まで暗雨にかかわらず野外の火入れ、焚火の禁止。

三 巡視人、監視人の配置

予防期間中巡視人および監視人を委嘱発令し事故の撲滅をはかる。

その他小中学生徒児童を対象に山火予防ポスター、標語などの募集ならびに山火予防パレードを行ない啓蒙普及に努めている。

また昭和四十一年四月従来 of 村民あげての警防態勢が認められ、本村は網走支庁管内における山火予防対策モデル地区に指定された。

森林組合

分村以来森林組合設立の準備を進めていたが、昭和二十二年四月森林組合設立委員会（委員長・

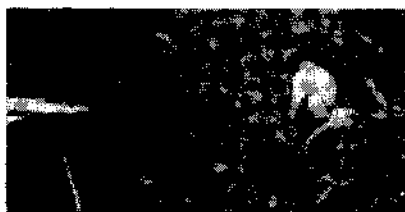
村長代理助役臨時代理者三本克己（同年四月八日小出月江となる）を設け草案を作成し、同年十月二十二日白滝村森林組合（組合長・小出村長）として設立をみた。遺憾ながら設立当時の資料がなく細部にわたって記し難いが、昭和四十五年三月現在、組合員百二十一名、出資金四十六万二千四百円で、民有林の現況は次のごとくであるが、造林成績が意外に振わず全体のおよそ一三割弱にすぎない。

民有林の現況

天然林	一、三四一畝
人工林	二二六畝
無立木地	一八八畝
計	七、七五五畝

なお、昭和四十五年度における民有林の人工植栽状況は左記のとおりである。

カラマツ	二七・四七畝	ストローク	〇・二一畝
トドマツ	三二・〇三畝	エゾマツ	〇・〇八畝
トウヒ	〇・八六畝		
シラカバ	〇・四一畝	計	六一・〇六畝



公有林整備事業



公有林整備事業



村有林

村有林所有概況

所在	面積 ha	備考	所有年月
字奥白滝	5.05	自作農創設特別措置法により北海道知事より買受	昭和26年2月
字天狗平	84.65	同 上	同 上
字東白滝	31.78	同 上	同 上
字上白滝	94.59	同 上	昭和27年3月
字上支湧別	7.84	同 上	昭和27年2月
字奥白滝	20.35	同 上	昭和28年7月
字支湧別	87.77	国有林野整備臨時措置法により農林省より買受	同 上
字上支湧別	169.99	同 上	昭和29年4月
字奥白滝	20.39	同 上	昭和31年3月
合 計	522.41		

○ 村有林林種別面積 (昭和45年12月現在)

天然林	232.08ha
人工林	187.04
無立木地	73.82
計	492.94

村有人工林植栽状況

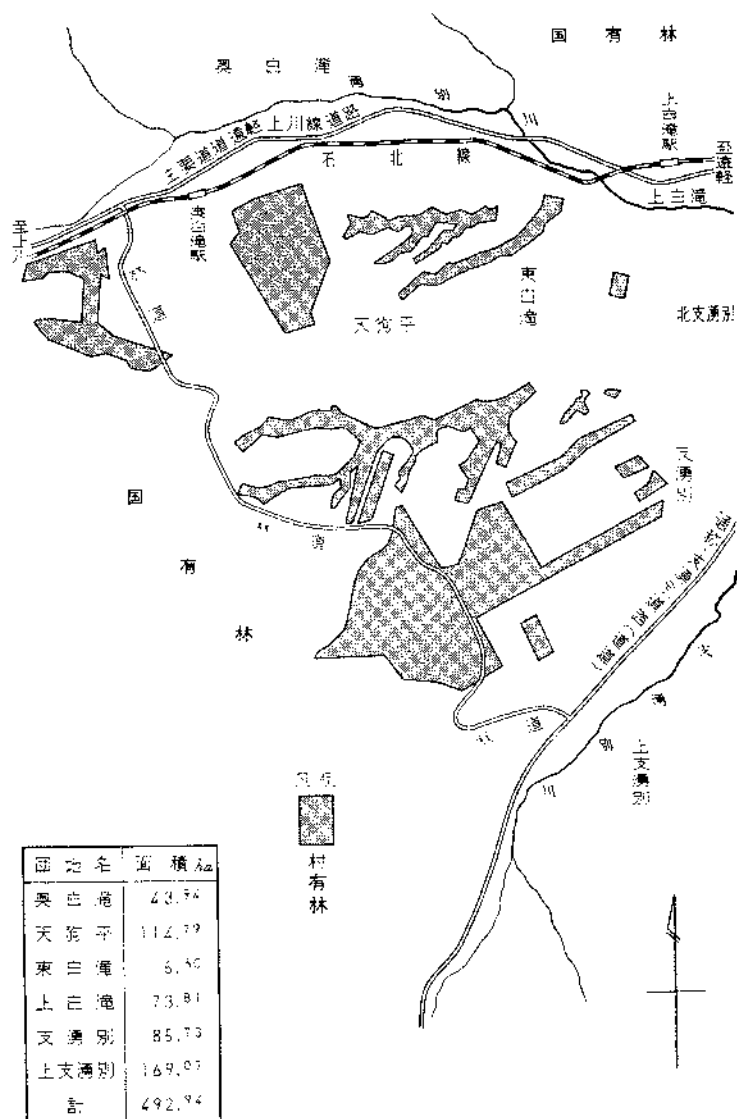
年度	昭和26年～ 昭和40年	41年	42年	43年	44年	45年	計
面積 ha	86.12	25.01	20.00	20.09	17.50	18.32	100.92

村有林 昭和二十六年自作

農創設特別措置法の適用によって北海道知事より、さらに昭和二十八年国有林整備臨時措置法により農林省よりそれぞれ林野を買受け、以来昭和三十一年までの間に総計五二三畧余に及ぶ林野を村有林となし、村の貴重な財産として年次計画を樹て育成をはかっている。

村有林所有概況については上表に示すとおりであるが、昭和三十八年村営牧場の開設によって一部牧野に地目替えを行ない、現在総面積は四九二・九四畧余となっている。

村有林は別図に示されている



白滝村有林位置図

ごとく大別すると六団地に分けられ、地況は役場所在地より西におよそ一〇キリ、南におよそ八キリの位置に在し団地別林野面積を示すならば右図のとおりである。

村有林野経営審議委員会

村有林野の買受けも大詰めとなり林野面積も五〇〇畝に達した昭和三十年、これが経営計画を従来よりさらに綿密に策定し、もって公共の福祉に資せんものと、諮問機関としての村有林野経営審議委員会を同三十年六月設置した。

歴代審議委員は次のとおりである。

昭和三十年六月	丹羽実市、古関初夫、山崎政治、中山徳蔵、高橋利作
昭和三十一年七月	丹羽実市、古関初夫、山崎政治、中山徳蔵、高橋利作
昭和三十四年六月	丹羽実市、山崎政治、高橋利作、中山徳蔵、大庭千代吉
昭和三十七年七月	丹羽実市、大庭千代吉、山崎政治、小山田昌光、菊地善吾、中山親孝、中山徳蔵、前田勘治
昭和三十八年五月	丹羽実市、大庭千代吉、山崎政治、小山田昌光、布田勇、森谷吉郎、早川武夫
昭和三十九年九月	中山徳蔵、前田勘治
昭和四十年三月	丹羽実市、西尾博文、井上正蔵、古関初夫、南政夫、高橋行之、松浦健蔵
昭和四十二年五月	丹羽実市、大庭千代吉、山崎政治、小山田昌光、森谷吉郎、菊地善吾、西尾昭男
昭和四十二年九月	阿部英雄、児玉作治
昭和四十四年五月	丹羽実市、小山田昌光、大庭千代吉、森谷吉郎、榎村貞吉、山崎政治、五十嵐蔵
昭和四十五年九月	阿部英雄、児玉作治

白滝村緑化推進委員会

自然を保護し進んで森林資源の造成をはかるとともに生活環境を緑化し、もって住みよい郷土の建設をはかるを目的として昭和四十三年四月緑化推進委員会を設立、岡松一敏推進委員長のもと、

郷土の緑化になお一層の拍車をかけている。

鳥獣保護区 自然保護の観点から道庁は、昭和四十年十月村内のひらやま地域を「ひらやま鳥獣保護区」に

指定、区域内での鳥獣類の狩猟をいっさい禁止した。

区域 白滝村所在、国有林白滝事業区三十六林班の区域一門

面積 七三・二二畝

期間 昭和四十年十月一日から昭和六十年九月三十日まで

第三節 林産加工

株式会社白滝林産組合

戦時中の無策な乱伐により、そして戦後復興建築のすさまじいばかりのブームにの

ってわが国の豊かな森林資源は目をおおるばかりの荒廃の様相を呈してきた。本村域内における森林資源もこうした渦中において他聞に洩れず極度に減少し、森林資源に原料を依存する製材工場あるいは薪木工場等の企業体は年とともに押し迫る原木の不足に工場経営も窮地に追い込まれる情勢となってきた。このように従来の略奪林業から脱却して森林資源の現状をはっきりと見きわめた上での新しい方向へいかにして対処していくか、いかにして地域社会住民からも納得のいくような林業に切替えていくべきかを真剣に考慮し、藤本輝彦をはじめ大庭裕二、野沢正市、布田勇、前田勘治、中安文治郎、藤原清らが発起人となって大所高所の見地に立つて村内各林産加工場の企業大合同、資本の合同により林産組合を設立し略奪林業から集約林業へと転換をはかった。まず育苗造林に主力をおき、冬期間の人力の余暇をもって造林事業を営み、造林のための地拵から副次的に生産される根株、



本木枝条を、チップ、オガタン、束薪等に活用し、その他あらゆる木材資源を社会的に活用し、育成林業への道を伐り開き推進していくこと、つまり組合員の合同団結によつて企業規模の拡大、製品の多様化、生産販売方法の変化、地域住民に対する福利向上等の方向へと順応していくことを目的とした。かくて昭和三十四年六月十五日資本金二千五百五十万円をもつて「株式会社白滝林産組合」を設立、取締役会長に旭川國策木材株式会社常務の井上準が取締役社長に藤本林業株式会社社長の藤本輝彦が就任、本店事務所を白滝村字白滝一千三百十二番地におき、第一、第二工場を製材工場に、第三工場を製函工場に、第四工場をチップ工場として帯鋸の音も高らかに練業されたのである。企業合同せる工場は白滝木材工業株式会社、布田木材株式会社、前田木工場、岸木工場、渡瀬木工場、神原木工場、協和産業株式会社、大庭木材株式会社、藤森木工場の各工場である。

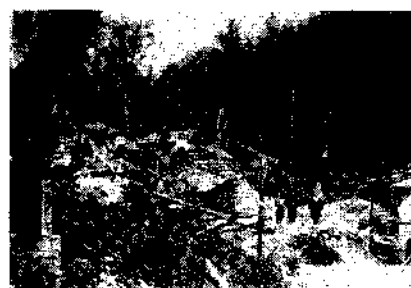
近年消費地場の関係で交通便利な都市に出張所設置の意見が役員総会で決議され、昭和四十二年江別市に大規模な分工場をも建設、林産組合江別工場として大きく飛躍しつつある。

林産加工場 白滝における最初の林産加工場は大正四年奥白滝に建設された板井曲輪工場（工場主任・古田末吉）で、事務所を白滝市街において、あり余るほどの見事な素材を贅沢なまでに選別し大いなる発展を示していた。大正六年の北見新聞に当時の様子を次

のように艱道している。

すなわち「大正四年事務所を白滝市街地におき、工場を奥白滝に建設した桜井曲輪工場は経験豊かな古田末吉工場主任のもと職工五十余名を役使し、年間原木二万五千余石を消費し、製品は遠く南洋、米国までも輸出せり」。

道路開発のおくれていた当時のこととて製品のほとんどが別掲写真のごとく駄鞍による駄送であった。こうした盛業をきわめた曲輪工場も



大正六年白滝一門を襲った大火火に工場は焼失、立木も焼失し素材生産も不可能となったため曲輪生産は中止してしまつたが、もとより未開の原野ゆえ、林業によつて開発が進んできたことは言をまたない。

大正期に創業をなした林産加工場

大正 四年

桜井曲輪工場（主任・古田末吉、加藤孫木工場（加藤修一郎、仲屋経木工場（仲屋勇次郎）、井村経木工場（井村謙二）

大正 五年

牛田下駄工場（牛田金蔵、下駄材五分仕上）

大正 六年

片野経木工場（片野治郎吉、古田合名会社木工場（古田末吉、製材）、岡田木工場（岡田品助、製材）、下駄材五分仕上）、原野木工場（原野秋蔵）、松谷下駄工場（松谷多次郎、下駄材五分仕上）

大正 七年

倉島木工場（倉島水一郎、製材）

大正 九年

布田木工場（布田富崎、製材）、中山木工場（中山徳蔵、下駄材五分仕上）

大正十二年

前田木工場（前田勘治、製材）、渡瀬木工場（渡瀬長之助）

昭和期に入ってから林産加工場

森木工場（製材、銃床材）、大庭木工場（大庭千代吉、製材）、中村経木工場（中村弥太郎）、牛丸木工場（牛丸勝次、製材）、野沢経木工場（野沢正市）、岸木工場（岸浦吉、製材、製紐）、神原製箱工場（神原利平）、藤森製箱工場（藤森道雄）、名和製紐工場（名和稔）、石川製紐工場（石川重一）、渡瀬木工場（渡瀬正司、製材、製箱）、熊谷柄物工場（ブラオ、ビーム）、見陣セールド工場、中山柄物工場（中山親孝、ブラオ、ビーム）、大庭木工場（大庭裕三、製材、チップ）

終戦後木材業界は、痛めつけられた住宅および各種工場の復興、さらに平和産業の台頭によって木材の需要がうなぎ昇りに増し、需要に供給が追いつかず、製品は片時たりとも工場内に野積みされることがない状態であった。林産資源に富んだ本村においては次々と創業をはじめ業者が現われ、昭和二十八年村内において実に十三を数える林産加工場が操業するに至っていた。

しかし、科学文明の発達に従いあらゆる分野にわたって化学製品が台頭し来たり、木材界にも波及し、打ちつづいた乱伐によって資源が極減したのとあいまって、木材業界に不況の嵐が押し寄せてきはじめた。こうしたことから本村内各工場の企業合同が不況を乗り越切る打開策として打ち出され、別項のごとく林産協同組合の誕生となり、工場は大方合同されたのである。

現在操業中の工場は左のとおり

白滝地区林産協同組合（社長・藤本輝彦）、藤本木工場（社長・藤本輝彦）、古田経木工場（社長・古田一枝）、棚橋モールド工場（社長・棚橋重利）、鈴木経木工場（社長・鈴木秀雄）

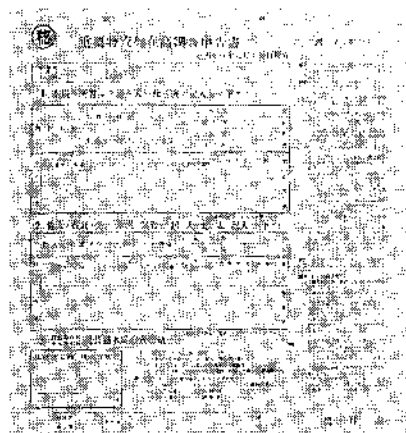
木炭 森林資源に恵まれていた本村は、入植移住者にとって立木は開墾に支障があったものの、得難き副収入の財源でもあったわけである。入植当時無我夢中で開拓の鐮を振っていたが、二、三年を過ぎるころから冬季の農閑期を利用しての製炭が小規模であるが副業としてはじめられた。

本村に初めて製炭がこころみられたのは大正七年ごろ内田三藏、太田熊吉、吉妻祝吉、佐京らが旧白滝の自宅付近に築窯し、それぞれ産出六、七俵程度のものであったと古老は述懐してくれた。しかし木炭の出荷に不可欠な鉄道が敷設されていなかったため陸路輸送費に莫大な経費がかさみ採算が合わなかったことと、技術的に未熟であったことも原因して専業者は生れなかった。

大正十三年、遠軽家庭学校支別農場内公園地造成にもとづく園地内立木の払い下げを受けた山崎政治、菊地善吉、阿部卯衛門の三人は共同にて五十俵窯二基の築窯をなし、地場消費を目的として副業生産をはじめたが、同じく技術の未熟さから永続きはしなかった。

日華事変勃発以後外国からのガソリン輸入が途絶し、ガソリン燃料に代って木炭ガス燃料に切替えられたため木炭の製造を大いに優遇奨励し、自家用木炭は配給制へと変った。昭和十四年十月には「ガソリン代用木炭製炭講習会」を網走市呼人の伊藤製炭所において道庁技師の指導で開催、大いに増産普及をはかった。当時民間の自動車はすべて木炭燃料に変わり、エントツのついた燃焼炉を積み込み、煙を出しながら走るそのすがたは時代の風物詩であった。

このころすでに棚橋重利が五十俵窯五店を備え盛んに窯煙をあげていたが、太平洋戦争突入間近よりますます需要増加し、ついには一般家庭を除くすべてのところに別掲の「とき機」をもって「重要物資現在高調査申告書」を



の普及により木炭は全く斜陽化され、これまで自家用備林を伐採し木炭製産をつづけていた高橋利作も昭和四十年ついに廃業、ここにおいて村内における木炭の製産は皆無となった。

網走支庁白滝林産物検査員駐在所 昭和十年四月林産物検査の目的をもって設置された同駐在所は以来数多くの林検を了してきたが、近年林産物の出荷が管内的に減少し来たり、機構改革によって昭和四十二年三月本村の駐在所はついに閉鎖となった。

昭和十五年九月十五日現在で提出を求め、農林省は現有数量を把握し増産計画を樹立した。また築窯奨励金を出したり焼子に對し軍手、ゴム靴類の特別配給をするなど生産目標をたて増産へと急いだ。昭和十七年中山親孝も五十俵窯五基を備えるなど一時は村内大小二十基に近い窯数になり、昭和二十年には年産一万五千俵にも達した。

終戦後は新炭材の不足と、木炭の軍需物資としての使命も終え需要も低下したため木炭の製産は急速に減少し、昭和二十五年には窯数わずかに一基となった。近時薪炭材の異常な値上りと石油、ガス

第三章 商工業

明治四十五年紀州団体が入村する以前は、わずかに旧白滝において数戸の農家が散在していたが、もちろん軒の店とてなく、生活必需品の購入には月に一度か二度、隣近所の必要品をまとめて交替で遠く遠軽の街に、あるいは上川、愛別に買出しに出かけたものであった。紀州団体が入るや陸統として各県の団体が入ってきたが、遠き道程の買出しに不便を感じ、団体員の不自由を救おうと紀州団体の副団体長倉橋伝三郎が掘立小屋に等しいわが家の玄関先を利用して食料品荒物雜貨の店を出し、かつあらゆる品の注文にも応じ便利屋も兼ねた営業に入植者より非常に重宝がられた。

大正三年支湧別あるいは奥白滝方面に入った各造材業者は、この仕事に従事する人夫の数は五百人とも六百人ともいわれるほど盛況をきわめ、にわかに白滝全体が活況を呈し商店や飲食店などが出来はじめた。

太平洋戦争の熾烈化するに従いほとんどの商品にわたって統制がしかれ、あるものは配給制に、あるものは切符制にまたは通帳制となり、しかも商品はしだいに店先から姿を消していった。こうした統制経済の強化が進むにつれて自由営業は不可能になったため、店舗の縮小や閉店あるいは休業を余儀なくされたのである。すなわち昭和十三年六月、早くも綿製品非常管理が施行され綿の少しでも入っている綿製品とその混用品は売買を禁止され、綿製品に代ってスフが出たが、現在の化学繊維とちがいきわめて粗悪品であった。昭和十五年七月奢侈品の製造販売が禁止され、指輪、首飾り、ネクタイピン、ペンダント、家具、什器、喫煙具、装身具などが指定され、

この年十一月木炭が統制となり、また米の供出制度がはじめられた。翌十六年には、米、塩、味噌、醤油など通帳制による割当配給となり、石油、ガスの消費規制も行なわれた。そして太平洋戦争のはじまった翌十七年二月には、物資統制令にもとづく「繊維製品配給消費統制規則」が公布されて、衣料の購入は点数式綜合切符制となり、お金があっても衣料品は無制限に買えなくなった。この点数は都市では一人年間百点、地方では八十点と定められた。各衣料の点数の一例をあげると。

背広、モーニング……各五十点、國民服、学生服上下組……各三十二点、婦人ワンピース……二十五点、あわせ、長じゅばん、綿入れ、丹前……各五十点、作業服、防空服、しきぶとん……各二十四点、男学生童服上下組……十七点、毛布……十八点、ワイシャツ……十二点、モンペ……十點、パンツ……四點、手ぬぐい……三點、くつ下……二點、糸……一點

しかしながら切符はあっても品物がなかったことが多かった。

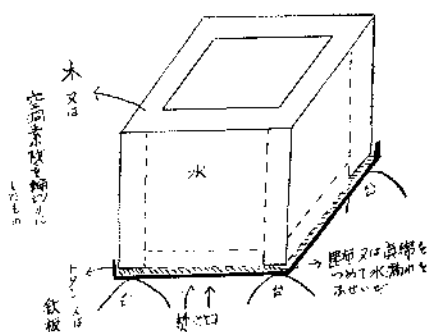
終戦を迎えた当時、国内産業、経済の総力を大戦に傾注していた痛手からなかなかにして復興しきれず、國民は戦後しばらくは物資の不足に堪え抜いていたが、昭和二十一年ごろから物資統制令のかげにかくれていわゆるヤミ物資が横行しはじめ、物資不足にあえぐ國民は商品の良否よりも水に飢えた魚のごとく手当りしだいに買い求める傾向がはじめ、いかなる粗悪品もヤミからヤミへと引く手あまたの人々に買われていった。こうして一時は金より「物」の時代を現出、ヤミ成金が統出する一方、需要に供給が追いつかず異常なインフレーションをまき起した。かくて戦後の日本の経済はヤミ物資によって復活の幕があげられたといつてよからう。しかし年とともに軍需工場が平和産業にと切替えられ、しだいしだいに経済事情の安定してくるに従い商業界も落着いて営業をつづけられるようになった。近時科学文明の発達はやがては国内産業に旋風をもまき起し、衣食住あらゆる

る分野にわたってその余波をうけ、一時は黒ダイヤとまでいわれた石炭産業、戦後の復興材として乱伐に乱伐を加えて需要に堪えていた木材産業等のごとくすっかり斜陽化した産業も少なくない。

本村においても昭和二十八年度において実に十三の林産加工場がいずれも盛業をきわめていたが、今日原料木の不足もさることながら、経営不振を理由に企業の合同あるいは他に職を求めて転廃するなど、現在四工場を残すのみとなっている。

風呂屋

開拓期における家庭風呂は別図のごとく簡単なものであったが、入植間もない開拓者にとってはなかなか家計上手が届かず、近くの風呂のある家へ、もらい風呂をする家が多かった。かくするうち団体、個人



開拓初期の風呂

の別なく入地するものあいついだので各種の商業者も入ってきて、大正四年落合万右衛門が二股市街に本村最初の風呂屋を新築、一時は結構盛業であったが、大正六年五月の白滝大火で焼失したので廃業した。大正七年石川が永代橋近く（中央区）で小規模な施設による風呂屋を開業したが、大火後の復興建築に各戸とも家庭風呂を内造したため入浴客が途絶え、一兩年を経ずして廃業、爾来白滝温泉を除く開業者はみられない。

写真館

大正八年一月、二股市街で獣医業をしていた菊地清次は、部屋の一室を改造し菊地写真館として開館したが、数年を経ずしてやめてしまった。終戦後佐藤守が中央区において佐藤写真館をはじ

めだが昭和四十三年店を閉め、現在河部政次郎が営業をつづけている。

薬舗

旭川竹村病院の外科医であった小島寛一郎は大正四年本村二股市街に入り、需めに応じて診療のかたわら、大正五年より本村最初の薬屋として営業をはじめた。その後大正七年には二股市街で堀田愛生堂薬舗が開店、書籍雑誌の販売とあわせ山林調査、造材、流送請負と幅広い事業を行なった。現在の薬店は中央区に河合薬局、南区に前田薬店の二店である。

理髪店

大正四年上白滝八号駅通向いに高木散髪店が開業したが、大正六年五月の大火で類焼し、いずれかへ転出してしまった。大正七年遠藤常松が二股市街において開業、その後中央区に広田理容、上支湧別に田中理容などが開業したが、現在営業中のものは古寺、遠藤、こまぐさの各理容院である。

豆腐屋

豆腐製造は開拓初期においては自家製造するものが多かったが、鮮魚類の入荷の少ない当時にとって油揚げ、豆腐は毎日の食卓にのびり、その消費量も多かった。

本村にはじめて豆腐製造業が出来たのは大正六年菊地清治が初めて、つづいて涌井、落合万右衛門、岩佐栄松、祐成赤市、太田清らが市街で、奥白滝では大火の直前沢向岩松が製造をはじめたが大火に遭って上支湧別に居を移し製造をつづけた。大火後奥白滝では狩野が一時豆腐製造をはじめた。上支湧別においては石黒米蔵も製造をしていたが、現在は市街南区に岡田茂が営業をつづけている。

旅館

大正初期の各団体入植によってこれらの原野に密生する樹木の伐採に各造材業者が入り込み活況を呈していたが、こうしたことから意外に早く旅館業が誕生している。大正四年佐藤小三郎の経営する會旅館と、②佐藤旅館が白滝市街に出来たのをはじめとして、樺沢金八経営の秋田屋旅館、③山本旅館が、昭和期に入って

福本光久経営の福本旅館、高橋喜久雄経営の④旅館、長谷川旅館が白滝市街で、奥白滝駅前には大庭千代吉経営の福島屋旅館、岸利七経営の山形屋旅館（昭和二十八年八月白滝市街に進出、屋号も美好館と改め岸浦吉経営となる。昭和三十二年二月火災焼失す）と変遷をみながら、現在は昭和三十九年より営業の出口俊平経営の清鈴旅館が白滝駅前にあるのみとなっている。

山形屋旅館の事務兼番頭もしたことのある岸邦夫は、盛業をきわめた創業当時昭和九年ごろの様子を「泊り客の予約もあつたし、番頭は上り、下りの列車が奥白滝駅に到着するたびに屋号の入った印半天を着込み、これも屋号入りの提灯を持って泊り客の勧誘に出たものだ。奥白滝にはもう一軒福島屋旅館があつたのでお互い競争意識からやったものであろうが、今思えば本当になつかしく思い出され、それにもまして奥白滝の過疎には全く驚く」と語ってくれた。

遊戯場 戦前にもみられたパチンコに機械の構造、遊戯方法も一新して復興しはじめたパチンコは非常な勢いで流行していった。本村においても昭和二十四年越智忠利、佐々木富雄が営業、さらに出口俊平、佐藤甫、南政雄らが営業をはじめたが、いずれも長つづきはしなかった。

料理屋 造材業者の入村によっていわゆる労働者が数多く雇用され、一日の疲れをいやす酒は労働者にとつては何ものにも替えがたいものの一つであつた。こうした木材景氣をあてこみ料理屋が出来たことはいうまでもない。大正三年二股市街に下村正一郎経営の⑤志茂むら家、貴司国松経営の旭亭が女給の三、四人もおいで営業をはじめた。翌四年には現中央区永代橋付近に笠原経営の⑥常盤亭が、上白滝八号駅通近くに坂口三蔵経営のムト料理屋が、上支湧別九線にはタルキ屋と称する（今でいうマーケット）一棟三、四戸の飲食店が出来、ネオ

ンならぬ赤いカンテラをともして客を待ちうけた。以来昭和期に入ってから料飲店は、市街において、

割烹福助（自昭和四年―至昭和十二年）、割烹淨世亭（自昭和五年―至昭和七年）、奥原飲食店（自昭和五年―至昭和七年）、割烹扇屋（自昭和十年―至昭和十二年、店主出口俊平）、割烹かつみ（自昭和十年―至昭和十八年、店主高橋かつみ）、長谷川飲食店（自昭和十二年―至不詳）、割烹辰巳（自昭和十二年―至昭和十四年、店主横田）、カフェーキンバ（自昭和十五年―至昭和二十二年、店主、出口俊平）、割烹高砂（自昭和十四年―至昭和三十年、店主高橋タマ）、割烹しらゆき（自昭和三十二年―至昭和三十三年、店主小川とみ）

また石北トンネル工事中、奥白滝駅前において小南飲食店（自昭和六年―至昭和七年）が営業をした。

なお現在営業中のものは

割烹つたや（店主佐藤重）、割烹みゆき（店主石井みや子）、割烹福の家（店主太田タマ）、バーリンド（店主大沢守）、バーサセット（店主坂内キミコ）、バーズプラン（店主石川キミコ）、バーむらさき（店主佐藤市）、バー温泉ホール（店主大泉タマ子）、清鈴食堂（店主出口俊平）、佐々木食堂（店主佐々木富雄）、佐藤食堂（店主佐藤松治）

菓子製造 大正三年前本米蔵は二股市街において主としてマンジュウ、センペイを製造、菓子職人三人を置いて幅広い営業をつづけていた。昭和四年菓子屋を廃業したあと、職人であった山崎与三吉が独立して菓子製造をつづけている。昭和三年小野精市、伊上等の同業者もあつたがいくばくもせずして中止、また昭和六年石北トンネル工事はじまるや奥白滝駅前に山田菓子工場が出来たが、トンネル工事終了とともに店もやめてしまった。

雑貨店 古来商売は「あきない」といい、飽くことなく続けることをいうのであるが、大正の初期から今日までおよそ六十年の間に社会的、経済的かつ家庭的理由から幅・廃業し、数多くの移動が生じている。

大正初期より終戦前までの雑穀、鮮魚、呉服、雑貨、菓子の各店は、

白滝市街

① 河忠 商……米穀、呉服、雜貨、酒

② 伊藤 洵……米穀、荒物雜貨、酒

③ 安藤出張店……米穀、荒物雜貨

④ 中野造酒蔵……米穀、荒物

⑤ 加藤支店……金物

三宅松平……雜貨

久保寅吉……雜貨、タバコ

浅川龜吉……呉服、小間物

佐藤庄藏……雜貨、菓子

久保田商店……米穀、雜貨

大柴彦六……雜貨

遠藤金之助……代書、新聞取次

下白滝

新保同平……酒、タバコ、菓子

旧白滝

西村米次郎……雜貨、菓子

上白滝

倉橋伝三郎……荒物、雜貨、米穀

夏野喜作……米穀、荒物、雜貨

樺沢金八……雜貨

山内商店……鮮魚、海産、雜貨

中屋商店……荒物雜貨

阿曾寅次郎……鮮魚、雜貨

棚橋重利……鮮魚、菓子

中村商店……金物

戸川商店……鮮魚、雜貨

小林長吉……馬具商

滝本屋……靴製造

寺畑喜平……呉服

渡辺末吉……金物、板金

児玉作治……酒、雜貨

佐藤商店……荒物、雜貨

野木吉松……米穀、荒物、雜貨

東白滝

前田 國夫……酒、雜貨

奥白滝

香月 春五郎……菓子、雜貨
小南 善藏……菓子、雜貨

支湧別

渡瀬 良五郎……米穀、雜貨、呉服
佐藤 義一……荒物雜貨
後沢 五郎……荒物雜貨
宗方 六衛門……米穀雜貨、酒、タバコ
片山 仙吉……雜貨、タバコ
小原 寿一……雜貨、菓子
植村 辰五郎……雜穀、菓子

現在營業中の商店

松浦 健藏……鮮魚、食料品雜貨
和田 テル子……洋品
小島 一郎……タバコ、菓子
谷野 光男……板金
前本 栄一……酒、タバコ、米穀、呉服、燃料
豊島 京造……鮮魚、食料品

川本 商店……鮮魚

大庭 千代吉……菓子、雜貨
橋本 仁三郎……雜貨、

山下 岩吉……鮮魚、雜貨
西村 栄次郎……雜貨
佐野 商店……雜貨
赤石 商店……雜貨、菓子
坂田 商店……雜貨、菓子
伊藤 鶴三……雜貨、菓子

井村 昭二……酒、タバコ、洋品、書籍
遠藤 恵子……電気商
河合 一千……クスリ
大沢 幾二……鮮魚、食料品雜貨
富田 ヨネ……衣料
渡瀬 正一……菓子

佐藤 光 仁……電気商
 山崎 与三吉……菓子
 広田 亮一……時計、電化製品
 住出 良次……呉服
 西尾 博文……米穀
 十亀 政喜……金物、板金
 岡崎 英治……金物、履物
 佐藤 松治……菓子、玩具

的場 正夫……精肉
 前田 秀之……タスリ
 小沢 与之助……フトン、製綿
 前 政男……酒、タバコ、菓子
 植村 重治……タバコ、菓子
 前田忠治(上山滝)……米穀、酒、タバコ、食料品
 中山徳蔵(支湯別)……米穀、酒、タバコ、食料品
 柴田房蔵(支湯別)……鮮魚、菓子、金物、雜貨

美容業

開拓期における婦人の頭髮化粧は間髪作業にのみ没頭し、さらには経済的にも余裕もなく、土にまごれ、ほこりにまみれての毎日であつて、髪結いをなす婦人は数少なかったが、昭和十三年に至り本村市街に大沼金次郎の細君が髪結いをはじめ、有閑マダム連には大いにうけた。

戦後パーマネントの復活とあいまってヘアスタイルも時代の流れにそつていろいろと変化し、衣服の流行とともに女性にとっては美しい身だしなみの一つとして年々利用客も増加し、昭和四十五年春転居した、ばら美容院の他に現在井内美容院、古寺美容院が営業を続けている。

土木建築

白滝における斯業のおこりは大正六年松本幸次郎、多田代吉が二股市街において始めたのが最初で、市街地の家屋建築をはじめとして、松本は昭和期に入つて石北隧道工事の係請負いなどもしたが、規模の大きい土木工事などはおもに遠軽、旭川、札幌方面の業者が入つてきて施行した。現在の業者は、大同産業株式会社(社長・大庭裕二)、藤本林業株式会社(社長・藤本輝彦)、有限会社大友商事(社長・十亀政喜)、八木組(代

表・八木照)、平野左官株式会社(社長・平野良男)などがある。

白滝ミルクプラント

酪農の振興にともない乳量の生産も順調に伸び、上白滝に設置された集乳所に集まる生乳はクリーム状に加工され全部が遠軽に輸出されていたが、地元において生産される生乳のほとんどが地元において飲まれることなく村外に流出することを憂い、一部住民の希望するところもあつて昭和三十年七月渡辺誠は市街地南区に「白滝ミルクプラント」工場を建設、関係機関の認可を受けて営業をはじめた。市乳の配達是他市町においては耳新しいことではないが、本村内においては画期的なことでもあり、操業当時は一日の配達量百本余にすぎなかったがしだいに消費量も増し、加えて学校給食用生ミルクの生産も行なつており、現在一日の生産量一千本余に達している。

石炭の販売

石炭販売の最初は白滝中央区で的場正夫が北炭の販売を取扱ったのが昭和九年のことである。当時は森林資源にめぐまれており軒なみに良質の薪をうす高く積んでいたところとて、石炭は一般家庭にさほど普及されておらず、わずかに学校や蹄鉄業、鉄工場関係などで使用しているにすぎなかった。昭和十一年出口俊平は的場のあとを引継いで販売店を行なったが、近年になってようやく薪不足のなやみから石炭に切替える家庭も多くなつてきた。取扱石炭は住友、北炭、三井、三菱など道内全会社の石炭を扱っている。

小出印刷所

曹洞宗祥巖寺住職の小出月江(昭和二十二年初代村長となる)は文筆に秀でていたため、主として道内各寺院を購読対象とした宗教新聞の発刊を思ひたち、昭和十二年十一月北海洞土社を設立、庫裡の一室を改造し印刷機を据えつけて『洞上新聞』を発刊し、かたわら寺院関係の各種札類の印刷、経木塔婆の製造印刷を行ない全国各地からの需要に応じていた。昭和二十六年新聞名を『教学時報』と改め、広く各宗派に通じたものと

して購読範囲を広げたのである。さらにこの年市街地に工場を新築し設備を拡大して一般印刷もはじめたのである。昭和三十三年三月村長退職によって白滝温泉を経営するに及び『教学時報』は廃刊となった。

昭和三十四年六月工場の経営権等いっさいを甥の小出光男が買受け、その名も小出印刷所として一般印刷をはじめ寺院向け各種札類ならびに経木塔婆の製造印刷を行なっている。

鉄工車輛 大正四年上白滝八号駅通付近で浅川利一が蹄鉄業とともに創業したのが鍛冶屋の最初で、石礫地帯のため農具の破損甚だしく、あるいは造材用具等の製造修理など昼夜兼行の鉄工作業も珍しくなかった。その後時代を経て湯川作次郎、安西光義、久保田、野村津義男らの創業もあったが、現在は白滝鉄工車輛工場（代表・湯川芳一）、山崎鉄工場（代表・山崎茂）、遠藤モータース（代表・遠藤忠子）が営業をつづけている。

第一節 商 工 会

昭和三十五年五月二十日商工会法が公布され、商工会の組織等に関する法律が同年六月十日施行され、従来申し合せの商工会を発展的に解消し法人の商工会を設立しなければならなくなった。これがため本村においても地区内における商工業の総合的な改善発達をはかり、もって国民経済の健全な発展に寄与することを目的として、井村謙三、西尾博文ら商工業者の有志多数による『白滝村商工会設立発起人会』を結成し、昭和三十六年三月一日役場会議室において六十六名の出席者を得て創立総会を開き、商工会法の精神を理解し全村の商工業者が大同団結し、情勢に対処しさらに健全な成長を期するため白滝村商工会を設立することに満場一致をもってその趣意に賛同があり、ただちに関係書類をととのえ翌三月二日設立認可申請書を北海道知事に提出、同年三月三十日



白 滝 市 街

（三六商第五九九号）をもって認可があり、ここにおいて「白滝村商工会」が誕生したのである。本商工会はその目的達成のために定款にそうて、左記の事業を計画実施している。

一 商工業振興と経営指導対策

- イ 経営改善普及員による相談ならびに指導の実践
- ロ 商工業に関する情報および資料の収集および提供
- ハ 商工業振興に関する講習会および講演会の開催
- ニ 物産の陳列、斡旋と展示会、共進会等の開催
- ホ 商工会としての意見を公表し、これを行政庁等に反映し、行政庁の諮問に応じて答申する
- ヘ 白滝村経済圏の拡張と調査
- ト 消費者懇談会と消費動向の調査
- チ 商店街、協同事業の推進
- リ 街路灯の整備促進
- ヌ 大売出しの実施

二 税務対策

- ロ 納税貯蓄組合の加入促進
- ハ 経理、経営、税務に関する講習および懇談会の開催

三 金融対策

- イ 青色申告会の維持育成と強化
- ロ 中小企業振興資金の融資斡旋
- ハ 工場設置近代化資金の融資斡旋
- ニ 金融機関との連絡協調

四 福利厚生対策

- イ 従業員永年勤続者の表彰
- ロ 従業員および家族の慰安会開催
- ハ 火災共済事業の普及促進
- ニ 生命共済事業の普及促進
- ホ 退職金共済制度の普及促進
- ヘ 定休日の完全実施促進

昭和三十六年発足当時九十三名の商工会員を擁していたが、しだいに現出しはじめた過疎化は商工業者の中に

まで浸透、昭和四十六年三月現在五十一名に減少している。また歴代会長は初代が西尾博文、二代井村謙二、三代前本栄一となっている。

白滝村商工会加入会員現況

(昭和四十六年三月現在)

業種	会員数	従業員数 (含家族従業員)	業種	会員数	従業員数 (含家族従業員)	業種	会員数	従業員数 (含家族従業員)
林業	三	五六	金融業	一	五	印刷業	二	三
工業	三	一六	食料品	四	三七	薬舗	二	二
鉱業	一	四	衣料品	二	三	時計修理	一	一
土建業	一	九	サービス業	五	一〇	打綿業	二	二
左官業	二	五	理美容業	一	六	装飾業	一	一
運輸業	三	一一	金物業	二	二四	雑穀業	一	一
鉄工車輻業	三	一七	製造業	三	七	合計	五	二二〇

第四章 畜産

第一節 馬産と酪農

馬 道路の開発がおくれていた時代において馬は交通上、拓殖上必要かつ貴重なものであったが、本道においてはかなり早くから馬の飼育がなされていたことが『津軽一統誌』に「元禄四年（一六九一）に馬飼育あり」の

記録により知ることができる。当時の飼育方法は全く幼稚なものであったらしく、今日見られる厩舎などあろうはずがなく、四季放牧の野放しで、ために馬体は自然に退化、あるものは斃死、あるものは熊、狼、蝦夷犬に襲われるなどの被害が続出した。こうしたことがあつてのも天保三年（一八三二）蝦夷地勤番心得書に愛馬保護の儀を定め馬の増殖に心を注いだ、かくて漸次繁殖の傾向がみられた。

湧別地方にみられた最初の馬は明治十七年湧別駅通が開設され官馬二十五頭を貸与され飼育したことにはじまるが、民有馬の飼育も『上湧別村誌』には「明治十七年十勝国大津の人岩谷善十郎と呼ぶもの十六頭の土産馬を率いて湧別村に來り、附近に棲息せる土人並に漁労者の運搬用として売却せる……」とあるところから官馬、民有馬ともこの年に飼育されたものと思われる。

本村域内においては、明治二十六年白滝駅通（八号駅通）開設と同時に官馬十頭の貸付を受け飼育したのが最初で、民有馬としては明治四十五年夏、倉橋伝三郎は愛別に所用の折、土産子馬二頭を購入して歸り、一頭は植芝盛平より依頼されたものであったという。翌大正二年四月島利衛門が馬を曳き連れて入地し、つづいて武田由松、寺畑喜平、前田権三郎、伊藤恂、井村謙二らが飼育しはじめた。しかしこれらは農耕よりも部落民の荷物の運搬用として駆使していたものである。団体、個人の入植者がしだいにその数を増し、支湧別方面において造材が盛んになった大正三年には原本搬出用の馬が普及された。

これより先、明治三十四年には馬匹去勢法が公布され、大正五年十一月からは登録された種牡馬以外あらゆる牡馬の去勢を強制的に実施されるようになった。

また大正十年四月には馬籍法が制定され、馬の出生、死亡、移動はすべて役場への届出が必要となつたのである。

昭和二十一年八月に分村した本村は、こえて昭和二十四年十月十三日条例第十六号をもって白滝村牛馬籍条例を公布施行したが、昭和四十三年牛馬籍法の廃止によって本村も翌四十四年四月一日付をもってこれが条例を廃止する条例を設定した。

戦後一時的に各地より引揚開拓者の入地等によって馬の飼育数も増加、昭和二十九年飼育戸数二百七十九戸、四百十七頭を最高に、以後離農家、酪農に切替えるもの、造材事業の機動力化、さては近年めざましい農耕機械力の発達によって馬力に頼る作業が激減、これがため馬の飼育も目に見えて減っていった。

軍馬 明治三十三年に釧路国川上郡標茶村に道内唯一の陸軍省の軍馬補充部が設置されて以来、全道各地において軍馬の買上げが行なわれていたが、昭和十二年勃発の日華事変が拡大長期化するにつれて軍馬の需要も増大し購買数も多くなった。馬には通常、挽馬と乗馬と駄馬とがあつて、主として乗馬は騎兵隊、挽馬は野砲隊、駄馬は輜重隊に購買された。

昭和十三年遠軽町に「軍用保護馬鍛練指導員」なる制度が出来、軍用保護馬として合格が決まれば、一カ月二回以上の合同鍛練を実施し、各馬の異常性格、悪癖の早期治療に意を注ぎ、しかるのち軍馬として出征せしむるもので、昭和十三年六月遠軽、丸瀬布、白滝の各地区に指導員を委嘱、鍛練場を遠軽極馬所と定めて馬の鍛練指導に従事せしめた。本村からは服部巖が指導員として委嘱され、その指導技術は釧路軍馬補充部管内第一人者であつた。その後原田秋五郎、服部実らが委嘱をうけ保護馬の鍛練に力を注いだが、こうした制度も太平洋戦争終

白滝における馬の飼育状況

	総頭数 (頭)	飼育家 (戸)
昭和25年	395	277
〃 29	417	279
〃 32	364	—
〃 36	217	175
〃 40	281	218
〃 41	212	184
〃 43	185	146
〃 45	102	99

結とともに消滅してしまった。出征軍馬の数については終戦とともに軍事関係の書類は強制焼却されたので知るべくもないが、前記服部巖は、本村からはおそらく百頭以上の軍用馬が出ていると思う、と言っている。さらに言葉をつづけて「軍用馬としてとられることが当時の農家にとって害であり、食糧の不足な時代であってもイナキビの赤飯を炊いて馬を送り出したものだ。しかし腹の底では永年手塩にかけて育てた愛馬を軍馬として手放す時は涙も出したい想いであつたが軍国主義の世にあつては涙をこらえて送り出したものであつた。世間には父親も応召、息子も召集、残る婦女子が一頭の馬を頼りに細々と営農に励んでいたがその馬も出征となり、泣いて愛馬と別れる婦人の姿が見られたものだが、それが本心であつたらう」と、しみじみ述懐してくれた。

馬産限定地 終戦後開拓者の入植によって、機械力の未発達な時代のこととて馬による農業、あるいは農家経済の要めを占める馬による冬山造材への出稼ぎ等馬の飼育数が農家経済をうかがい知るバロメーターでもあつた。こうした観点に立つて昭和二十二年、村および馬産振興に心を注ぐ者たちによって村内に馬産限定地を求め、ここを一大放牧場となし馬の飼育をより盛んにしようと計画が練られた。まず候補地を北支那別の支那別川向い国有林地およそ二百五十町歩と定め、この地の無償払い下げを受けようとするもので、北海道庁に陳情を重ね、現地調査も施行されたが、このころより村議会内において馬産限定地よりも村営農場を開設することが先決との賛否両論の空気がみなぎり、活発な論議が交わされ、結局裁決の結果、反対多数で馬産限定地の設定は中止され、これに代つて村営農場が開設される運びとなつた。

この馬産限定地設置に当初から意欲的であり、議会において限定地設置に賛成の挙手をした一人である中山親孝は当時のもようを一馬産限定地としての認可は時間の問題であつた。当時の営林署の図面も実は色が変わつてい

たとのことである。村営農場も大切であったが、より広大な馬産限定地を村有財産となし得ることがどんなに得策であったか、巨大な魚を逃がしたようなもので本村にとってきわめて大きなマイナスであった」と語っている。

村立農業畜産試験場 馬産限定地（候補地北支湧別川向い）設定をどたんばに至って中止した本村は、懸案の畜産試験場設置に本腰を入れ、昭和二十三年一月の村議会において左のごとき内容のもとに設置方可決をみ、同年二月十一日運用開始した。

一 設置理由

本村における農業はその立地条件に鑑み、必然、科学的集約式経営によって将来を期待せらる。而して早期且つ高度にその成果を挙げるための方策の一つとして茲に村営による農業畜産試験場を設置し、農業家畜の合理的増殖を中心施策として試験研究を進めると共に地力の培養、生産の増強等、本村農業経営の将来を確立すべき指導機関としての適切な運営の下に本村の総合開発に資せん。

二 経営の原則

独立採算による自給経営

三 位置

白滝村天狗平開拓地区内

四 経営規模

宅地一町歩、畑地十五町歩、採草地二町歩、放牧地五町歩、山林四十七町歩、合計七十町歩

五 施設

事務所一棟（二十坪）、住宅二棟（十五坪）、厩舎一棟（四十坪）、小家畜舎一棟（三十坪）、倉庫一棟（二十坪）、吹拔倉庫（二十坪）

なお、この試験場に馬三頭、牛一頭、豚一頭、緬羊八頭、山羊五頭、その他鶏、兎等を飼育すべく導入した。場長には的場正夫が委嘱発令され、技術員一名、定夫二名ともども所期の目的に沿って運営がはじめられた。

的場場長はじめ作業員一丸となって精根を傾けて主畜農法の確立に努力し若干の成果をあげつつあったが、時代の進展と諸般の事情により昭和二十八年三月をもって同試験場は廃止された。

牛 交通全く不便な大正期の本村にあって、乳牛の飼育は、湧別、遠軽地方よりはるかにおくれて行なわれた。

昭和五年春支湧別の本田弥三郎、山崎宗次郎がそれぞれ乳牛一頭を試養したのが本村初の飼育で、ついで同年秋遠軽社名淵家庭学校から支湧別家庭学校農場に乳牛一頭が移送され、岸野喜三郎が飼育管理に当った。また岸野の奨めによって菊地善吾、女屋三郎、佐藤嘉市、坂本冬治、奥山森之助らがあいついで飼育しはじめた。以後支湧別においては中止するもの、飼育しはじめのもの等の変遷はあつたが、量出する牛乳を無償に近い安価にしても地元においては消費しきれず、商品として出荷する方策が必要となつてきた。打開策に乗り出した白滝信用販売購買利用組合は昭和六年、乳牛飼育者を遠軽信用販売利用組合（昭和二年設立）に加入せしめる一方、岸野喜三郎を製酪販売組合連合会遠軽分工場に派遣、クリーム製造方法を修得させ、同六年秋支湧別九線に集乳所を新築、分離機を設備して事業を開始し、クリーム状に分離したのち乳牛飼育者が交替で白滝駅まで搬出、鉄道便にて遠軽分工場に発送したのである。ここにおいて牛乳の商品としての販路も開け、家庭経済をうるおすに足るものとして乳牛の飼育は副業ながら増加の一途をたどりはじめた。

昭和六年秋、東白滝において乳牛を飼いはじめた菅野利美の雜記帳には「牛五十頭を超す（昭和十年）」とあり、乳牛頭数の増加が察知できる。

昭和八年支湧別五線に、翌九年上白滝に第二、第三の集乳所が落成、大いに活用されていたが、肝心の乳価が上昇せず下落がつづき、さらに産乳組合員間において発生した若干のトラブルなどにより牛を手放す者が現われ、昭和十一年上白滝、翌十二年支湧別の両集乳所は乳量を生産不足により閉鎖してしまった。

戦後の昭和二十四年春、酪農振興奨励として開拓農協貸付牛三頭が本村に入り、渡辺俊勝、佐々木喜三、玉川乳牛多頭飼育者

（昭和四十六年一月現在・二十五頭以上）

本田 弥徳	三六頭
菊地 豊次郎	二八頭
早川 武夫	二七頭
伊藤 政雄	二五頭
金枝 美治	二五頭
菊地 芳三	二五頭
本川 昭造	二五頭
笠間 誠一	二五頭

慶一郎の開拓入植者が貸付けを受け飼育をした。

さらに同年秋、北海道庁貸付牛十頭が本村に入り、早川武夫、伊藤仁郎、箭内金記、伊藤寅蔵、石川正一、加藤長治、松原力雄、植村勘蔵、加藤照至、佐々木定治ら東白滝一帯に貸付けされ酪農振興の布石となった。この貸付牛の返済方法は貸付牛より産した牝牛一頭を返還することで親牛は自分のものとなったのである。

農産物による収益の比較的低い本村にあって乳牛の飼育は農家経済を安定させ、かつ向上させるにふさわしいものであり、副業として飼育されるもののほか、近年に至って酪農専業として自立するものもあり、採草地を勘案しつつ多頭飼育者が続出、乳牛頭数も待望の五百頭ラインを突破した。

乳牛飼育頭数の動き

年 度	頭 数
昭和5年	8
〃 10	50
〃 20	0
〃 24	15
〃 29	43
〃 32	108
〃 36	217
〃 40	320
〃 41	343
〃 43	309
〃 45	573



式所開設集乳所白滝村上

集乳所・①九線集乳所

牛乳出荷を円滑にし乳価還元をなすべく、昭和六年白滝信用販売購買利用組合の斡旋により支湧別九線に集乳所を建設し、岸野喜三郎の指導によりクリーム状に分離し、牛飼人の輪番制で白滝市街日本通運営業所まで運搬、鉄道便にて遠軽に出荷した。

◎五線集乳所

昭和八年支湧別五、六線の飼育者佐藤平一郎、岡竹松、女屋三郎、植村辰五郎、小原寿之らが九線集乳所までの牛乳搬出に難色を示し、支湧別五線に共同出資をもって集乳所を設立、毎日共同作業によるクリーム分離を行ない日通まで運搬していたが、乳価の下落から飼育者がしだいに減り、昭和十二年ついに同集乳所を閉鎖、わずかに残った飼育者は再び九線集乳所を利用したのである。

◎上白滝集乳所

上支湧別において乳牛飼育をはじめたことを伝え聞いた東白滝の管野利美は、飼育経験のあるところから、昭和六年秋乳牛二頭を導入、管野の奨めによって加藤常太郎、鈴木富治、筋内良金、小野寺亀吉、谷野助松、松沢沢一らもあいついで牛を飼育、昭和八年より生乳の産出をみ、山越しをなして上支湧別の集乳所に出荷がつづけられていたが、しだいに増量する生乳に地元において集乳所建設の声あがり、ついに昭和九年、上白滝駅にほど近き適地を求めて集乳所を建設、同九年十一月より管野利美の管理によって生乳の受入れがはじまり、分離加工をして上白滝駅から遠軽に発送したのである。しかし乳価市況の暴落と白滝産業組合内部の不信問題とから牛を手放す者が続出、昭和十一年三月、この集乳所は開設以来わずか一年五カ月にして廃止された。

上白滝集乳所牛乳計算書から当時のクリーム価格の変動と生乳生産状況を見るとつぎのとおり

下記価格表によってもわかるように、当時の脂肪乳価は毎月猪の目のように変り乳牛飼育者の飼育計画が立たなかったなやみのほどをうかがい知ることができる。

昭和二十四年春、酪農振興奨励として導入された乳牛は主として東白滝方面の開拓

農家に貸付され、酪農郷としてしだいに飼育頭数も増していった。これがため再び集乳所設置の必要性に迫られ、昭和二十八年三月村立の集乳所が以前の付近地に施設され、牛乳の出荷がはじまった。

昭和三十三年牛乳集荷トラックが遠軽森永乳業より差向けられることになり、五月より十一月の期間は全村戸口集荷がなされ、冬期間のみ従来どおり鉄道輸送がつづけられたが、これがため上白滝集乳所は冬期間の運用にとどまった。しかし年とともに増頭する乳牛も冬期間の完全除雪が施行されるに及んで通年戸口集荷が昭和四十年より実施され、集乳所の使命も果し終えた形となり、昭和四十年集乳所は全く廃止となった。

東白滝地区村営牧野

酪農の振興にともない広域牧野の造成が望まれていたが、東白滝にその適地を定め、村営牧野の造成を昭和三十八年度より着手、東白滝、天狗平の酪農家および牛馬飼育農家十八戸が翌三十九年度

脂肪乳(クリーム)価格変動状況

年	月	100 匁 当り 価	格	差
昭和九年	11	59銭5厘9毛		
	12	61. 9. 8	↑ 2銭3厘9毛	
昭和十一年	1	59. 1. 7	↓ 2. 8. 1	
	2	66. 4. 8	↑ 7. 3. 1	
	3	67. 5. 0	↑ 1. 0. 2	
	4	53. 0. 0	↓ 14. 5. 0	
	5	45. 4. 8	↓ 7. 5. 2	
	6	56. 6. 4	↑ 11. 1. 6	
	7	40. 7. 8	↓ 15. 8. 6	
	8	44. 1. 1	↑ 3. 3. 3	
	9	45. 5. 9	↑ 1. 4. 8	
	10	47. 3. 7	↑ 1. 7. 8	
	11	45. 1. 0	↓ 2. 2. 7	
	12	46. 5. 0	↑ 1. 4. 0	
昭和十一年	1	49. 4. 2	↑ 2. 9. 2	
	2	44. 9. 0	↓ 4. 5. 2	
	3	42. 8. 5	↓ 2. 0. 5	

上白滝集乳所受入状況

月	氏名	脂肪率 (%)	総乳量 (貫)	脂肪量 (貫)	金額 (円)	控除額 (円)	種付料 (円)	差引支払 金額(円)
昭和11 年9月分	鈴木 富治	3.10	9.800	0.304	1.81	0.38	—	1.43
	管野 利美	3.00	106.590	3.198	19.05	4.03	3.75	11.27
	加藤 常太郎	3.15	37.540	1.183	7.05	1.45	—	5.60
	谷野 助松	3.00	30.810	0.924	5.51	1.17	1.25	3.09
	乳量計		184.740					
昭和12 年9月分	鈴木 富治	3.00	46.700	1.401	8.68	1.78	8.00	— 1.10
	管野 利美	2.90	128.780	3.677	22.79	4.80	3.75	14.24
	加藤 常太郎	2.90	56.510	1.639	10.16	2.13	8.00	0.03
	谷野 助松	2.60	23.750	0.618	3.83	0.88	0.50	2.45
	小野寺 亀吉	3.00	36.970	1.109	6.88	1.42	1.25	4.21
	乳量計		290.710					
昭和3 年10月分	管野 利美	2.35	58.450	1.370	9.26			7.14
	加藤 常太郎	2.60	29.350	0.763	5.13			4.03
	小野寺 亀吉	2.55	24.890	0.635	4.29		1.25	2.11
	乳量計		112.690					
昭和8 年10月分	管野 利美	3.65	142.170	5.189	22.74	5.23	—	17.51
	谷野 助松	2.50	106.310	2.658	11.72	3.35	—	8.37
	小野寺 亀吉	2.55	52.410	1.336	5.89	1.72	—	4.17
	松沢 沢市	2.80	255.070	7.142	31.63	8.55	—	23.13
	佐藤 庄蔵	3.10	86.670	2.687	11.85	2.99	1.25	7.61
	村形 由五郎	2.75	59.870	1.646	7.26	2.00	—	5.26
	乳量計		702.500					
昭和12 年10月分	管野 利美	3.80	39.570	1.507	7.00	1.49	—	5.51
	谷野 助松	2.70	36.830	0.994	4.62	1.24	1.60	1.78
	小野寺 亀吉	3.60	17.220	0.620	2.88	0.63	—	2.25
	松沢 沢市	3.30	99.240	3.225	15.00	3.53	3.20	8.27
	乳量計		192.860					
昭和3 年11月分	管野 利美	3.20	115.540	3.697	15.84	3.99	—	11.85
	舘内 良金	3.20	65.990	2.112	9.05	2.28	—	6.77
	谷野 助松	2.60	1.470	0.038	0.16	0.03	—	0.13
	乳量計		183.000					



東支湧別地区村営放牧場

より、毎年五月より十月まで有料放牧を行なうことができた。村営牧場の面積は三一・七八畝、そのうち造成採草地一二畝、自然牧野一九・七八畝であったが、昭和四十一年度さらに一四畝の増取得を行ない総面積四五・七八畝となった。牧野開設当時牛二十八頭、馬十頭が放牧されたが、面積の拡大によって利用頭数五、六十頭まで可能となった。

今日東白滝、天狗平地区のいちじるしい過疎化によって農家戸数が減少したため、遠く下白滝、旧白滝地区の牛馬の放牧も許可している。

東支湧別地区村営放牧場

年ごとに増加の傾向にある本村の乳牛多頭化飼育に

対し、村内二番目の放牧場として東支湧別高台三二畝の民地を買得し、ここに草地造成を行ない村営放牧場として昭和四十三年春から開場、主として支湧別一帯の牛馬を放牧している。毎年融雪期から十月の終牧期までのおよそ半年間、常時四、五十頭の牛馬が、豊かな青草を食みつつスモッグのない澄みきった空気を存分に吸って悠々自適である。

酪農組合

乳牛飼育の奨励によって支湧別および天狗沢、さらに旧白滝、下白滝方面と全村にわたって乳牛

が入りはじめ、こうしたなかにおいて牛の購入資金貸出制度も実現され、貸付牛とあわせてますます飼育熱がたかまってきた。こうしたことから昭和二十四年酪農組合を組織し、酪農の振興に大いにつとめようとしたのである。初代組合長には箭内金記が選ばれ、ついで早川武夫、菊地富雄、菊地豊次郎、平岡久雄がこの任に当たっている組合員は四十戸である。

白滝村乳牛經濟檢定組合

本村内の乳牛飼育頭数の増加につれて、乳牛飼養管理の技術向上、乳牛資質の改良など酪農経営の改善に役割を果たす乳牛事業をはじめることになり、昭和四十三年一月三十日白滝村乳牛經濟檢定組合（乳牛組合）を設立、乳牛飼育家のうち十五戸が組合に加入、組合長には菊地豊次郎が選任された。これは乳牛群の經濟能力を向上させる酪農の基礎事業であり、今後ますます酪農事業の發展が望まれている。

獸 医

大正七年二股市街（東区）に菊地清治が獸医業を開業したが客足が思わしくなく、翌八年には写真館

をも付設したがいずれも数年足らずで廃業してしまつた。その後遠軽、上川、愛別などから獸医を呼んで治療にあたつてもらつていたが、鉄道敷設の行なわれていないころのこととて往診には莫大な経費がともなつた。

支湧別に家庭学校白滝農場が創設されていたが、昭和五年同農場で乳牛を飼育しはじめたころ研究生の一人であつた斎藤金三郎が資格のあるところから牛馬の診療に求めに応じて昭和十二年ごろまで村域内を往診してゐた。そのころ遠軽にて開業してゐた北川正二獸医も時折往診に姿をみせていた。その後、武田、寺島、野田博など他町村から出張し來たり家畜の診療を行なつてゐたが、昭和二十一年三月川上正志が西区において川上家畜診療所として個人開業、昭和三十一年五月農業共済組合囑託獸医となり、以來現在まで家畜診療に、疫病予防に、飼育管理指導に従事している。

蹄鉄業

大正六年秋、二股市街に菊地清治が、上白滝八号駅近くで浅川利一が營業したのが最初で、こえ

て大正九年春、二股市街ではじめた大島仁左衛門がこれにつづいている。昭和期に入つて本間、丹野、佐藤甫、中山親孝、畠山勇壮らが開業したこともあるが、隆盛をきわめた造材事業も、近時事業量の減少と機械化による事業の施行、さらに農業機械力のいちじるしい普及によって馬の飼育が減り、一時はわが世の春を謳歌していた

養豚業も全く斜陽化してしまった。現在高橋次男が営業をつづけている。

第二節 その他の家畜

豚 本村に豚の飼育がみられたのは比較のおそく、新開地作業に追われていた農家は豚の飼育には手が回らなかったであろう。しかし大正に入って以来豊作の喜びに没ることのない農民は、豚の飼養によって、せめて正月の肉だけは存分に食しようと、大火後の大正七年ごろより遠軽あるいは上川方面より購入し来たり飼育するものもあいついだ。しかし養豚技術の未熟なことから専業とするものはなかったが農家の副業としては結構採算のとれるものであった。

近時食肉需要の増加により、近代的にして衛生的な設備を施し専業としてあるいは副業としても多頭化飼養をなす傾向がでてきた。

本村における多頭養豚家ベスト五をあげた左のとおり。(昭和四十五年十二月末現在)

年 度	頭数(頭)	戸数(戸)
昭和25年	193	160
〃 29	81	50
〃 32	95	—
〃 36	147	87
〃 40	332	82
〃 43	255	39
〃 45	376	21

横山 養豚(横山 一郎)	百五十頭
新保 養豚(新保 国英)	百二十頭
佐久間 養豚(佐久間 只雄)	七十頭
山崎 養豚(山崎 松雄)	四十頭
石川 養豚(石川 多吉)	四十頭

鶏 自給自足を余儀なくされていた開拓期において、養鶏は日毎の産卵と慶市時の食肉用にまこと便利であった。このようなことから石上藤蔵、山本治

鶏飼育状況

年 度	羽 数 (羽)	数 (戸)
昭和 25 年	1,539	220
〃 29	2,175	—
〃 32	5,178	—
〃 36	4,865	225
〃 40	11,765	241
〃 43	5,157	103
〃 45	5,200	53

ど、数羽ないし数十羽の鶏が飼われていたものである。

古来、鶏の飼料は種々の野菜に魚類を混入、これを煮てフスマや麦ヌカなどをまぶして与えていたものであるが、戦後鶏のみならずあらゆる家畜に対してもそうであるが、配合飼料なるものが考案され多頭飼育の養鶏家にとっては喜ばれたものである。

現在本村にみられるおもな養鶏家は次のとおりである。(昭和四十五年十二月現在)

本 山 養 鶏 (本田 茂) 二千羽
 原 田 養 鶏 (原田秋五郎) 一千六百羽
 菊 地 養 鶏 (菊地 政雄) 六百羽

家 兎 日華事変の勃発後、防寒毛皮用として軍需上貴重な存在となった家兎は、さかんに飼育奨励をする一

方、一羽の飼育たりとも申告が強要された。古い資料がなく飼育羽数の確証はないが、古老の話を引用すれば「太平洋戦争の始まった昭和十六年ころは本村にはおそらく五百羽以上はいたであろう。市街でも飼育する人が

作、太田熊吉、菊地長治、青山右近ら旧白流に入植した開拓者は明治四十四年、戸毎に四、五羽程度の鶏を飼いはじめたのが本村初の養鶏といわれている。

大正に入つて農家戸数がしだいにふえるころ、馬の飼育家も増してきつたが、これにともなつて馬の売買が盛んに行なわれるようになった。こうした売買が成立すると必ずといってよいほど手打ちの酒盛がはじまり、酒肴として鶏肉が多く使われた。これがため馬の飼育農家にはほとんどといってよいほ

あつたが農家ではほとんど全戸といつてもよいほど飼育されていた。そのころ兎の毛皮一枚も戦地に送り出せないものは非国民で農民の恥だ、とさえ思つていたほどである」と語ってくれた。

昭和十四年八月「家兎屠殺制限規則」が施行され、毎年五月より十月までの間は自由に屠殺することが禁ぜられ、屠殺には左記様式により北海道長官の許可を受け、屠殺後は十日以内に再び長官に届出をするなどの施策がとられたが、この制度は終戦までつづいた。

家兎屠殺許可願

屠殺の目的	屠殺頭数	屠殺期間	屠殺場所	備考
牝 何頭 牝 何頭	牝 何頭 牝 何頭	自 月 日 至 月 日		

右家兎屠殺制限規則ヲ遵守シ屠殺致度候条許可相成度此段及申請候也

年 月 日

住所

氏名

北海道庁長官

家兎屠殺施行調書

駁

屠殺頭数	屠殺シタル家兎ノ処分	屠殺シタル月日	屠殺場所	屠殺目的	備考
牝 何頭 牝 何頭					

何月何日附指令許可杜成候処右ノ通り施行致候条此段及報告候也

年 月 日

住 所

氏 名

・北海道庁長官

殿

戦後あらゆる物資が出回るにつれて家兔の需要が激減、昭和二十五年の四十二羽、昭和二十九年の十五羽と全く家兔数は減ってしまった。

山羊・緬羊

山羊の牡は排尿しながらおのれの尿を呑み込む変った習性があるが、これがため牡の体臭は悪臭をつくもので、肉も異様な臭みがあり美味とはいえない。このような悪臭は熊の防禦にもなるということ、未開時代の開拓者は好んで飼育したものもあるようだ。本村に大正四年春移住した原田安五郎も前住地北見より山羊を連れてきたが、すでに村域内には幾頭かの山羊の姿が見えたとのことである。

緬羊は寒冷地の本村にあって防寒用羊毛使用の目的をもつて大正十四、五年ごろより飼育する家が見えはじめた。初めのうちは夏季に毛を刈り取り冬になるとズボンや上衣の裏側に毛を縫いつけ防寒用となし、夏になるとこの毛をはずして使用していたが、昭和初期になって羊毛加工の方法が普及され緬羊飼育頭数もしだいに増加していった。深々と雪の降る静かな冬の一夜、ストーブを背にしてカラカラと音を立てて回る糸繰器から毛糸を取る農婦の姿はのどかにして平和な家庭のひとつこまでもあった。

戦時中物資の不足から家畜毛皮ともども軍需物資として供出を命ぜられ、自家用としての加工は人目をはばかったが、終戦直後も粗悪な衣料品の出回りが再び羊毛加工が盛んになり細羊飼育熱も一向にその衰えをみせなかった。本村においても住民の世論にこたえ昭和二十四年八月羊毛加工場を開設、委託加工にのり出したりした。

近時社会情勢が好転してくるに従って自家加工品を身に着ける素朴な気持が影をひそめ、飼育熱も昭和三十一年の五百二十八頭を最高に、昭和四十三年には四十一頭と激減している。

村立白滝羊毛加工研究所

細羊飼育数の増加により原毛の生産が年毎に増量、原毛の加工は地元で行ないたいとの観点に立つて羊毛加工場設置計画がもたれ、昭和二十三年一月の村議会においてこれが設置の可決がなされ、同年七月一日羊毛加工研究所が設立、同研究所に付設された文化女塾は市街地東区においてただちに開講された。一方同じく付設された羊毛加工場は施設等に日時を費やし、昭和二十四年八月一日より事業が開始された。

羊毛加工場設置の理由は、白滝村農業経営指導の一環としての細羊の飛躍的増殖に備え、生産原毛の現地完全加工を目途とし村営による羊毛加工場を設置して合理的な運営によって農村工業の振興と自給自足生活の具体化に所期の成果を挙げようとしたものである。初代羊毛加工研究所長（文化女塾長・羊毛加工場長兼務）には小出月江村長が就任、昭和二十四年四月三木克己助役に交替された。

羊毛加工場内の設備は

一	二四インチサンブルカード	一台
一	高田式精紡機	一台
一	高田式捻糸機	一台
一	藤瀬式織機	一台

一 連座式紡毛機 一台
 二 足踏紡毛機 五台

従業員二十名余の織姫が甲斐甲斐しく立ち働くさまは本村の発展を約束されたも同然であったが、採業わずか二年足らずして管理運営に支障を来たし、昭和二十六年三月綿羊飼育家に惜しまれつつ加工場は閉鎖された。

昭和二十四年度委託加工原毛数量

洗毛	一千八百五十一貫	計	七万七百四貫
カード掛	一万四千七十貫		
紡毛	五万四千七百八十三貫		

第五章 地下資源

第一節 地下資源の開発

本村を含む北見地方一帯は大雪山系の一脈中に位し、ために地質はおおむね火成岩から成るところ多く、したがって各種の鉱脈が連続的に、あるいは断続的に走り、道内有数の鉱区といわれてもいたが、道路開削の比較的おくられたがため鉱山開発もまた遅々として進まなかった

硅酸白土

探鉱マニアの目下忠は昭和七年本村山岳地帯を探り歩き、旧白滝ホロカニーベン川上流に推定埋蔵量五〇〇万ト以上ののぼるといわれる硅酸白土あるを知り、これを工業化しようと昭和八年東邦合資会社名に

て採掘出願をなし、翌九年これが許可となり昭和十年採掘を始め、白滝市街に工場を建設して翌十一年「ミガキ粉」「ツキ粉（精米機械用）」として月産およそ八斗程度で製品を道内に出荷していたが品質あまり優秀ならず、しだいに需要が減り、昭和十四年中止してしまつた。

金鉱山 大正七年樺沢金八、佐々木三之助、下村正一郎、伊藤恂ら深鉱マニアは奥白滝滝ノ上橋の西北、通称八号沢人口近くで、金鉱鉱らしきものを発見、前記四人のほか、出資金を募り私設株式の形をとり、人夫をかけて試掘してみたが、含有量全く微々たるものにして企業化するに至らず、あえなく一獲千金の夢はついえ去つた。

清水商会鉱山部 瀬戸瀬に事務所を置き手広く事業を続けていた清水喜太郎商会は大正三年木材部と鉱山部を白滝にも注入、木材部の事業量の莫大なことは既述のとおりであるが、かたわら大正四年春探鉱に経験の豊かな鉱山師をおいて幽仙橋付近白滝原野二十一号湧別川川向い国有林地内および白滝原野二十二号湧別川川向い国有林地内山すそに直径一・五呎、奥行およそ七呎の試験横坑導を三カ所にわたって試掘し、白滝鉱山と称して開発を急いだが、不幸にして金・銀・銅の含有量全く乏しく、さらに鉱脈を深り求めつづけたが、大正六年五月の大山火の折、鉱山部事務所ならびに作業員宿舍を全焼、ついに企業化するに至らずして閉鎖となつた。

金銀鉱山 前記硫酸白土の生産に力を尽していた目下忠は、その後もなお探鉱をつづけ、旧白滝ホロカ二間橋の沢に金鉱脈を発見、昭和十四年国産鉱山会社の名のもとに試掘を行なつたが、金一両、銀一〇〇両、銅一ないし二割（いずれも一斗につき）の低い含有率にどうしても企業化するに至らず、この事業は立消えとなつてしまつた。

黒耀石

旧白滝ホロカニューベツ川上流および上白滝八号沢奥に黒耀石の大露頭があり、埋蔵量およそ二億ト

以上とも称せられる無盡蔵に近い黒耀石があるが、この中にいわゆる黒色の黒耀石、紅混入の黒耀石、茶褐色の黒耀石と、通称蜂の巣石といわれる蜂の巣状の黒耀石、縞模様に入った黒耀石等その種類が多く、いずれも研磨することによって美しい光沢が生じる。近時石ブームの波にのって観賞用にあるいは指輪、カフスボタン、ネクタイピン、ネックレスなどのほか、各種装身具用に、さらに門標、置物細工等に加工作れ需要の幅が広い。

パールライト（真珠岩） 旧白滝神社裏手の国有林地（白滝事業区第九十九林班）内に埋蔵する真珠岩の工業化を考えていた日下忠は、昭和三十二年以来試掘許可をとり、工業技術院、資源技術試験所において焼成試験の結果、土地改良用、さらに建築材として優れた品位のあることがわかり、昭和三十三年川上貿易株式会社系列の日本パールライト工業株式会社を設立しパールライト企業に第一步を踏み出した。昭和三十五年社名を北見パールライト株式会社と改称、地道な生産をつづけていたが、昭和四十年三月北見パールライト株式会社を発展的に解消し、北見パールライト白滝工業所として全権を日下忠が握り、しだいに普及しつつあるパールライトの生産に意欲をもやしている。

製品名は「スポンジライト」「スラックコート」の二種があり、スポンジライトは土壤改良、園芸、盆栽用として広く活用されるほか建材用にも適し、さらに近時濾過剤として本州産をはるかにしのぐ高品位として注目され、急速な発展が期待されている。またスラックコートは製鉄工業所における保温除滓剤として使用されている。

第二節 石産加工業

パールライト工場

真珠岩を原石としてスポンジライトおよびスラックコートを生産している北見パールライト



パーライト製造



黒耀石加工(原石裁断)

生産をつづけている。

パーライト製品は真珠岩を粉碎して急速に加熱（一千度ないし一千二百度）膨張させたもので、内部に気密性の小気泡を多数有する軽い白色、灰褐色、茶褐色の粒状ないし砂状のものである。

黒耀石加工

経済の高度成長によって生活に相当のうるおいが生じ、観賞石に目をむけられるようになり、やがて驚くべき石ブームが到来、本村国有林地内より産出の黒耀石（黒色および紅混入等多種あり）も一躍脚光を浴び、紅混入のものを紅十勝石と名付けて観賞用にそして装飾品用として加工され、道内外に販路を広げている。なお原石は林野弘済会が採掘をなし各加工業者が払い下げを受けている。本村における石加工の初めは昭和三十一年四月日下忠が最初で、以後年ごとに小規模ながら創業するものがふえ、現在村内において次のごとき十

白滝工業所（代表・日下忠）は、生産能力月産一千袋で地場消費をはじめ主として東京、大阪、名古屋方面に移出している。

パーライト工場は旧白滝に存し、昭和三十六年七月工場一棟（六十坪）、倉庫三棟（計八十坪）を建設し、ロータリーキルン（回転式焼成釜）一基、クラッシュ一基、トロンメル（粒度振分機）一基、エアコンブレッサー一基、削岩機三基、ベルトコンベヤー六基等を設備し、しだいに増加しつつある需要に、ゆるぎない

三を数える業者が加工生産をつづけている。

山下忠、西尾博文、広田寛治、野村津義男、北海石産加工（布田勇）、川口義一、菊地増一、中山親孝、野沢正市、出立寅雄、丹治金市、吉田亀蔵、渡瀬正司

第六章 金 融

大正六年五月発生の大火火は別項に掲げているとおりであるが、この山火延焼によって衣食住のすべてが灰に帰したもののも少なくなく、開拓日浅いこととて預貯金などなんの貯えもなく全くの裸一貫となって路頭に迷う罹災者もかなりあった。時を移さず村役場（上湧別村）をはじめ全道各地から義捐の金品が、そして皇室からの見舞金なども続々として到着し、暖かい救いの手が差しのべられた（大正六年六月八日の上湧別村議会において、白滝原野山火罹災者救助費として五百円の追加更正予算を可決した）が、これにともなうて払い戻しあるいは預金業務がにわかに激増しはじめたため大正六年十二月白滝郵便局が設置され、爾来本村域内唯一の金融機関として大いに利用されたのである。

大正十三年九月経済不況に対処するために貯金の奨励を大いにすすめたが、次にかかげるのは時の貯金十訓である。

一 反古売っては
二 敷島こらへて

十銭
十五銭

六 瓦斯本綿で
七 昨年の中子で

二円
五円

五 産業・経済

三 時々晩酌やめては	二十銭	八 電車をやめて	三円
四 奥さん内職で	三十銭	九 無駄な交際を廃して	二円
五 足袋をつくろつて	五十銭	十 月々台所から産み出す	三円

大正十一年一月糸屋銀行遠軽出張所が開店し、土地金融および農産物を担保として、金利を低下して融資を行ない豊山村の開発促進に貢献していたが、金融恐慌にあつて大正十五年五月二十四日突然閉鎖してしまつた。その後預金者大会などの業務整理が行なわれ、大正十五年十二月二十三日拓殖銀行に吸収合併がなされ、昭和二年三月拓殖銀行遠軽支店として業務開始されたが、拓殖銀行は協定条件として預金者に対し四割七分七厘四毛を支払ふこととし、昭和二年三月十日から同行の全道各支店、出張所、派出所で一斉に払い戻しを開始した。この時払い戻すべき金額はしめて約三百七十万円であつたという。本村域内においても若干の預金者があり、預金者の一人、前田勘治は「鉄道の開通していない遠軽までの四〇^キの遠路を預金者大会などのため幾度となく歩いてこの大会に参加した」といつていた。

日華事変につづく太平洋戦争と、打ちつづく大戦にわが国の経済は極度に逼迫し、あらゆる手段をとつて貯蓄の奨励に全力をあげた。昭和十七年、これまでの毎月八日の興亜奉公日を大詔奉戴日と改め、そしてこの大詔奉戴日を国民貯蓄組合大拡充の日とすることに、この年九月より施行したのである。つまり貯蓄源をひねり出す方策として、

- 一 戦時生活貯蓄（生活を合理化して貯蓄にまわす）
- 二 つもり貯蓄
- 三 生産貯蓄（農作物売却代金を一定貯金にまわし、増産による収入分を貯金する）

四 贈答貯蓄（贈答にはつとめて国債、貯蓄債等を利用する）

五 応召者感謝貯蓄

六 一にぎり節米貯蓄

七 廃品貯蓄（廃品等の売却代を貯金する）

八 採取貯蓄（薬草、落穂拾いなどによる収入を貯金する）

九 勤労貯蓄（会社、工場等で毎月八日の収入を貯金する）

十 残業手当貯蓄

などであった。これらの趣旨徹底は各隣組を通じて行なわれ、本村においては郵便局あるいは産業組合が貯蓄機関となり「勝つまでは」の精神にのっとり、戦時不況のなか貯蓄に迫いまわされていたのである。

昭和二十年八月終戦を迎えた日本は、一時あらゆる分野にわたって動搖を来たし、ヤミ物資の横行などによって経済界は急激なインフレーションをまきおこした。これがためこのインフレを抑制するため昭和二十一年二月政府は新円の切替えを断行、預金を封鎖して旧円と新円の切替えを行ない、引出し額を一人一カ月五百円に制限する措置をとったが、半歳も経ずして同年八月ころには再びインフレの様相を呈しはじめた。

本村に郵便局が設置されて以来すでに半世紀以上を経て、比較対象するのもおろかなことであろうが、貨幣価値の動向をみるのもまた粹であろう。

白滝郵便局貯金成績

	大正七年度	昭和四十四年度	倍 率
預 入 金 額	一万八千四十六円余	一億九百九十四万九千円余	約六千百十倍
払 戻 金 額	一万四千五百九十円余	七千六百四十二万六千円余	約五千四百五十倍

国民貯蓄組合

日華事變の勃発以来、日本は大国相手の戦争ゆえ初めから長期戦の覚悟をきめ、あらゆる分野にわたって引締め政策を打ち出していった。国民皆貯蓄の奨励もその一つで、国民精神総動員の一翼として国民貯蓄奨励の一大国民運動を全国的に起し、貯蓄組合の結成方を指令した。

本村においても昭和十四年一月国民貯蓄組合を結成、非常時財政経済政策に協力し貯蓄報国の実行を期したのである。本組合は農村部落にあつては農事実行組合、市街地にあつては各業態別あるいは団体別単位に結成され、貯蓄予定額は年間一戸当たり平均六十円以上と一応の目標が定められていた。

遠軽信用金庫白滝支店

中小商工業者の相互金融のために昭和二十五年七月遠軽に遠軽信用組合が誕生、その後昭和二十七年六月一日信用金庫法によって遠軽信用金庫とその名も変り、この年九月遠軽信用金庫白滝出張所が本村中央区に設置され、こえて昭和三十三年五月白滝支店に昇格、順調な業務成績が認められ、昭和三十九年十二月白滝駅前近代的な店舗が新築された。現支店長は河内悟である。

六 教 育

第一章 教育の概況

本道における学校教育の起源は遠く松前時代に学問の奨励をなした記録があるが、平民と呼ばれていた一般子弟は生活にゆとりがなく、学問より開拓労務に追われていたのである。

本道における最初の学校は、明治四年設立の函館元町学校と札幌創成学校の二校で、いずれも官吏の子弟のための教育機関であった。これ官立学校の初めといえよう。

明治五年七月太政官布告によって全国民に対し義務教育の制度がとられ、全道西一の教育方針を規定したのである。

明治十年渡辺熊四郎は貧民の子弟のために、函館に私立の鶴岡学校を設立し、大いに教鞭をふるったが、これ純然たる私学校の最初である。

明治十二年教育令が公布されたが、就学率が低下するなどの弊害が生じたので翌十三年これを改正、明治十九年五月小学校課程および学科が定められ、尋常科、高等科の修業年限はそれぞれ四年間とし尋常科を義務教育と

なし、学科も修身、読方、算術、習字、作文、体操と規定された。

明治二十三年十月三十日発布の「教育に関する勅語」によって教育の基本方針が定められた。明治四十年小学校令の改正によって尋常科を六カ年の義務教育とし、高等科は二年ないし三年となった。こえて昭和十六年小学校は国民学校と改称され軍国主義一辺倒の教育へと変貌していった。木村内白滝、旧白滝、東白滝、支湧別の各学校もすべて国民学校と改称されたのはもちろんである。

激戦をきわめた大東亜戦争もついに敗戦によって終結をみたが、これによって幾多の悲惨な世相が現出したことは言をまつまい。学校教育においても根本的な改革がほどこされる羽目となり、終戦の翌年すなわち昭和二十一年「教育に関する勅語」が廃止され、全国津々浦々の学校に安置されていた御真影は奉還となった。日本国新憲法が制定された翌二十二年三月には「教育基本法」が公布され、同時に「学校教育法」も定められ、国民学校は小学校となり、新たに新制中学（三年制）を設けて義務教育とした。昭和二十二年五月新制中学校が白滝にも創設されることとなり、義務教育の態勢をととのえた。

また、従来の中学校は高等学校として発足、軍事教練にのみ没頭していた青年学校は廃止され、六・三・三制の新制度がここに確立したのである。

第一項 村立白滝小学校

創立・大正二年六月十九日

位置・白滝原野基線二千二百一十番地（白滝村西区）

創立経過 明治四十五年に入植した紀州団休員は、開拓に精根を傾けると同時に子弟の教育に意を注ぎ、植芝盛



平、倉橋伝三郎らが中心となって教育の場の設置を真剣に考えた。相談を受けた矢崎次郎吉は、教育に熱心なる知識人で、率先二股番外地（現・東区丹治文子宅地付近）の私有地を臨時提供、関係父兄らの奉仕作業によって仮校舎を建て白滝特別教授場とし、上湧別村遠軽尋常小学校所屬のもとで念願の授業が開始された。大正二年六月十九日のことである。

当時のことを回顧して植芝盛平は次のように語ってくれた。

「われわれ団体員の中には子供連れもいたし、団体員以外の開拓者の中にも子供がいた。こうしたかわい子子供の教育を放っておくわけにはゆかず学校の設置を願って運動を続けた。そのころ役場は上湧別であったので上湧別まで何回となく通い、兼重村長に陳情した。汽車も車もなく歩いて行ったが、そのうち話がまとまりそうになったので急いで土地を選び掘立小屋のような仮校舎を建てたのである」。

なお、この間の事情を物語るものとして白滝小学校沿革誌には、

「矢崎次郎吉所有の馬小屋を、関係父兄出働して応急策を講じ授業を開始

白滝小学校校歌

作詩 上原 尚一
作曲 佐藤 明吉

- 一 学びのまどに 呼びかけて
西に秀する ありあけの
高ねは夏も 雪清し
ああ仰ぎみて われらまた
氣高き徳を 身につまん
- 二 学びの門を 洗い行く
水上遠き 湧別川の
流れはとわに たゆみなし
ああいそしみて われらまた
まことの泉 日にくまん
- 三 学びの庭の しるしなる
あらしをしのご かしわ木の
不動の姿 習うべし
ああきたえては われらまた
強く正しく 生いたたん

せり、当時経費としては教員俸給のみ村費より支出し、その他は父兄負担とす一とある。

また村井兼太郎は仮校舎の様子を「教室が八畳一間、すぐとなり職員室兼用の教員住宅として八畳一間、そのほか玄関、便所だけの計十坪（三三平方尺）の仮校舎であつた」と述べている。

その後上湧別村瀬戸瀬尋常小学校に所屬変更となり、大正五年六月寺端五郎吉より学校敷地として一町歩（一畝）永久貸与の話があり、同敷地内二十三号線百八十一番地（現・東区）に転地、三十五坪の校舎を建設した。のち地主の変更があり園田勝太郎が土地の寄贈を行なつた。時に在校生男子十五名、女子十三名の計二十八名であつた。

大正六年五月白滝一門を火の海と化したる大山火のため全焼、関係重要諸帳簿等一物も余さず焼失してしまつた。時を移さず校舎再建の議が決定されたが、市街地開発の關係上校舎の移転を考慮中、たまたま金枝兵重より字白滝千参百十一番地畑の内（現在地）一町歩（一畝）を学校敷地として向う五ヶ年間の貸与契約がなされたので、校舎の転地を決定、同年十月現在位置に百三十六坪五合（四五〇平方尺）の校舎が新築された（大正十一年二月十八日前記同敷地金枝兵重より寄付となる）。

大正七年八月二十八日白滝尋常小学校に昇格、これによつて従来瀬戸瀬尋常小学校の所屬であつた旧白滝特別教授場は白滝尋常小学校の所屬となつた。大正十三年四月より待望の高等科（修業年限二カ年）が併置され、これまで遠軽尋常高等小学校まで行かなければならなかつた高等科への道が大いに開かれたのである。



白滝小学校第1回卒業記念

沿革をまとめて列記すると

大正二年六月十九日

白滝特別教授場仮校舎において単級編成によって授業開始す（校舎面積十坪）。上湧別村遠軽尋常小学校の所屬となる。

大正四年九月六日

上湧別村瀬戸瀬尋常小学校の所屬に変更さる。

大正五年六月

校舎を二十三号線百八十一番地に転地新築す。

大正六年五月二十三日

白滝大山大火のため校舎全焼す。

大正六年六月

新校舎竣工まで無償の支湧別私設教授場を使用。

大正六年十月

基線二百二番地である現在地に百三十六坪五合（四五〇平方尺）の校舎新築す。

大正七年四月

通学区域を次のとおり規定す。東北、ホロカ湧別川辺。西、上白滝八号三十四線

まで。南、支湧別三線まで。

大正七年八月二十八日

白滝尋常小学校に昇格し独立すると同時に旧白滝特別教授場を所屬す。

大正八年四月一日

白滝尋常小学校補習科を新設す。修業年限二カ年。

大正十三年四月一日

白滝尋常高等小学校と称し、修業年限二カ年の高等科併置す（通学区域白滝原野

一円）。これにより補習科廃止となる。

大正十五年七月一日

白滝青年訓練所を併置す。

昭和三年十月

一教室、廊下、児童昇降口の増築。

昭和七年十月二十三日

校舎の新改増築落成、総建坪二百二十八坪二合五勺（七五三・二平方尺）。

昭和十年八月一日

青年訓練所は組織変更せられ白滝青年学校と改称す。

昭和十一年四月二十一日

旧白滝特別教授場は尋常小学校として独立のため所屬よりはなれる。

昭和十二年四月一日

校章および校旗の制定。

昭和十六年四月一日

白滝国民学校と改称す。

昭和二十二年四月一日

白滝村立白滝小学校と改称す。

昭和二十二年五月一日

六・三制の施行により中学校を併置す。翌年中学校独立す。

昭和二十五年四月一日

白滝村立三和小中学校設置にともない上白滝通学区三和小中学校の通学区域となる。

昭和三十六年九月

屋内運動場落成。

昭和三十九年四月一日

旧白滝小学校廃校となり白滝小学校に統合する。

白滝小学校卒業児童数および学級数

年 度	学 級	卒業児童数		備 考	年 度	学 級	卒業児童数		備 考
		尋 常	高 等				尋 常	高 等	
大正 二	二	一七			大正 一三	三	一三	八	高等科併置
〳 六	三	一九			〳 一五	三	一九	二二	
〳 七	二	二〇			昭和 四	四	一七	二五	
〳 八	四	二〇			〳 八	五	三六	六四	
〳 一〇	三	一九			九	六	三〇	六六	
				補修新設のため財界不況のため転出者多し					

歴代	氏名	就任年月日	歴代	氏名	就任年月日
初代	鈴木良吉	大正二・六・一七	九代	竹本計	昭和一・六・三
二代	柳橋末吉	二・八・一一	十代	岡村正盛	一・八・〇
三代	逢坂守男	四・九・七	十一代	田所朋司	二・一・四
四代	八木喜一郎	七・八・二八	十二代	徳江保	二・六・五
五代	佐山茂平	一〇・四・一	十三代	野村秀明	三・三・四
六代	真田義光	一二・一〇・二三	十四代	後藤藤栄	三・九・四
七代	木野弥	昭和一〇・一〇・三〇	現代	橋本芳栄	四・四・一
八代	工藤大然	一三・四・三〇			

歷代校長

昭和									
三〇	二六	二五	二四	二二	二一	一六	一五	一三	一二
一〇	八	八	七	六	八	八	八	八	七
五一	三二	四七	三八	六一	四五	四七	四三	四〇	三一
					三一	三八	五五	三五	二八
五一	三二	四七	三八	六一	七六	八五	九八	七五	五九
				新制 中学 独立	六・三 制に よ り 高等 科 廃止	国民 学校 と改 称さ る			
昭和									
四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三七	三三	三二	三一
八	八	九	九	一一	一二	一二	一二	一一	一一
三五	四二	五〇	五五	六一	七八	七七	五六	五二	五二
三五	四二	五〇	五五	六一	七八	七七	五六	五二	五二

歴代教職員

氏 名	就任年月日	在職年月
佐藤 熊藏	大正二・六・一七	〇・二
佐藤 トメ	二・六・一九	二・三
福永 佐七	五・六・三〇	四・一
福永 ヨシ	五・六・三〇	一・七
阿部 運次郎	七・四・九	一・一
八木 カウ	七・八・三	二・〇
大塚 飽	七・一〇・九	二・四
大塚 サダ	七・一〇・九	四・五
三益 子	八・五・一〇	一・七
三益 繁樹	八・七・一八	一・七
水落 富藏	九・六・二二	二・三
後山 五郎	九・六・二二	一・〇
佐山 マス	一〇・二・二二	一・〇
上原 尚一	一〇・六・一四	一・一
山本 惣太郎	一一・一・一五	一・二
水落 幾代	一一・一・一五	一・一
金森 雄藏	一二・二・二四	一・八
金森 雄藏	一二・二・二四	一・六
氏 名	就任年月日	在職年月
鈴木 木	大正二・三・二九	〇・七
真田 龍	二・三・二九	八・五
大島 健太郎	三・一・一〇	四・五
大島 をのぶ	三・一・一〇	四・三
高橋 スミツ	三・五・三	一・三
高橋 スミツ	三・七・一〇	八・一
藤田 泰清	四・三・二三	五・〇
藤田 清一	四・四・二三	一・〇
長沢 顯慧	四・四・二三	一・〇
河杉 豊弘	五・一〇・二四	不詳
河杉 ノブ	六・一・一九	不詳
中村 清次郎	七・三・三一	七・〇
工藤 覚五郎	八・三・三一	三・〇
阿部 竹二	九・三・三一	〇・三
中居 定一	九・三・三一	六・〇
西森 清一	九・四・一〇	五・五
岩浅 吉郎	九・四・一〇	〇・六
千坂 紀一郎	九・五・二三	〇・三

宮城	柏葉	木野	佐々木	真鍋	山田	佐藤	工藤	上原	清水	伊藤	越智	富永	梶谷	建出	中村	小島	鮎頭	谷本	鈴木	高瀬
正次	堅太郎	綾子	三男	実	繁次	義章	ハル子	フミ	実雄	広雄	美知雄	光男	武雄	人成	富美子	富貴子	朝来	濟美	ミツ	隆資
昭和九・一〇・二五	一一・三・三一	一一・五・二六	一一・一・八	一一・三・三一	一一・三・三一	一一・三・〇	一一・三・二五	一一・三・一〇	一一・三・三一	一一・四・一三	一一・三・三一	一一・四・二九	一一・四・二九	一一・四・一三	一一・四・一三	一一・四・一〇	一一・三・三一	一一・四・三〇	一一・三・三一	一一・三・三一
三・一〇	一・〇〇	二・〇〇	一・二	五・四	〇・一	一・〇	三・二	二・七	三・七	〇・八	〇・一	二・一	〇・七	〇・五	〇・六	二・五	一・五	三・五	二・〇	四・六
東中	棚川	竹本	口木	野橋	棚橋	竹田	阿本	谷曾	岡藤	小島	沢田	野沢	井村	湊村	山本	弦卷	浅野	丸山	十肥	トシエ
登茂栄	恵美子	音一	香代	文雄	テ子	礼子	きち	理作	吉雄	セシ	三雄	龍英	静枝	露子	久夫	武夫	大進	清子	敏子	トシエ
昭和一六・一八・三一	一七・三・三一	一七・三・三一	一七・九・三〇	一七・一〇・三一	一八・三・三一	一八・三・三一	一八・一〇・三一	一八・一〇・三一	一八・一〇・三一	一八・一〇・三一	一八・一〇・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一	一九・一・三一
一・六	六・一	一・一	一・一	二・五	一・六	二・〇	二・一	〇・五	一・一	二・二	三・五	〇・七	〇・一	〇・〇	〇・〇	〇・〇	一・一	一・八	二・九	四・九
不詳	六・一	一・一	一・一	一・五	一・〇	一・〇	一・一	一・五	一・一	二・二	三・五	〇・七	〇・一	〇・〇	〇・〇	〇・〇	一・一	一・八	二・九	四・九

絶江	藤川	亀出	久米	飯田	藤原	齋藤	木村	田中	由利	三浦	南島	見山	小田	藤本	田所	中村	大住	竹本	堀口	葛保
寿子	英実	よしみ	芳明	幸雄	三郎	ミナ子	優仁	植子	初男	恵子	ワカ子	泰子	和子	行子	薫子	幸雄	久子			
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	昭和二一
二六・七・一〇	二六・四・一	二六・四・一	二六・四・一	二六・四・一	二六・四・一	二六・七・一	二五・四・六	二四・一・五	二四・五・五	二四・四・五	二三・一・五	二三・六・一〇	二三・五・一〇	二三・五・一四	二三・四・一	二一・一・三〇	二一・九・三〇	二一・七・一五	二一・三・三〇	
不詳	不詳	不詳	不詳	一〇	一〇	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	〇
大和	佐藤	小池	宮野	佐藤	湯川	渡辺	井上	菅野	大根	赤根	畑山	横川	佐藤	藤森	山崎	豊野	鈴木	佐々木	佐藤	池田
勝文	功子	綾子	善吉	春治	光男	綾子	常夫	敏夫	武昭	昭子	美代子	隆子	隆子	隆子	隆子	隆子	隆子	隆子	隆子	隆子
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	昭和二六
三五・四・一	三四・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一	三三・四・一
七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇	七〇
不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳

代	役職名	会長名	就任年度
初代	後援会	十河 忠衛	昭和一一・一五
二代	〃	野村 津義男	〃 一六・一七
初代	保護者会	小山田 清吉	〃 一八
二代	〃	布田 富藏	〃 一九・二二
代	役職名	会長名	就任年度
三代	保護者会	中村 信雄	昭和二三
初代	PTA会	南 政雄	〃 二四・二七
二代	〃	藤本 輝彦	〃 二八
三代	〃	西尾 博文	〃 二九

歴代PTA会長

秋田 典子	昭和三五・四・一
山宮 喬也	〃 三六・四・一
齋藤 久子	〃 三六・四・一
小納谷 松雄	〃 三七・四・一
佐久間 豊雄	〃 三八・四・一
鳴海 一雄	〃 三八・四・一
高橋 登雄	〃 三八・四・一
山崎 ミツ子	〃 三八・四・一
古川 潤一	〃 三九・四・一
熊田 敏子	〃 三九・四・一
林 幸子	〃 四〇・四・一
井沢 文映	〃 四〇・四・一
山崎 良三	〃 四一・四・一
昭和三五・四・一	現在
真如 昌臣	昭和四二・四・一
吉田 義征	〃 四二・八・一
松井 昭雄	〃 四三・四・一
海老名 惣二郎	〃 四三・四・一
海津 良知	〃 四三・四・一
字部 義行	〃 四三・四・一
菊地 嘉明	〃 四四・四・一
新保 伶子	〃 四四・四・一
伊藤 昭子	〃 四五・一〇・一九
後藤 悦子	〃 四六・四・一
清水 浩子	〃 四六・四・一
石井 遙子	〃 四六・四・一
昭和四二・四・一	現在

四代	PTA会	西 方 憲 誠	昭和三〇	九代	PTA会	山 内 晴 雄	昭和三六・三七
五代	〃	小 島 一 郎	〃 三一	一〇代	〃	古 岡 初 夫	〃 三八・三九
六代	〃	森 谷 新 太 郎	〃 三二	一代	〃	松 浦 健 藏	〃 四〇・四二
七代	〃	古 寺 頼 平	〃 三三・三五	二代	〃	曾 根 等	〃 四二
八代	〃	西 尾 博 文	〃 三六	三代	〃	賀 真 田 昭 一	〃 四四・四五

第二項 村立支湧別小学校



創立・大正四年七月十九日

位置・白滝村字上支湧別八線二百八番地

大正二年より支湧別方面は団体および個人の入植者が盛んになったが、入植日浅いことゆえ、学齢期の子供たちはおよそ八ヶ戸隔てた白滝特別教授場に通学していた。当時の支湧別道路は今日見られるような整備された道路とは全く異なり、馬車の通行もできない道なき道の困難な通学であった。こうした現況に心を痛めていた部落民は、寄付金を募って九線公共用地二百五番地に仮校舎を設立、三石音次郎、後沢五郎、大沢敏雄の三人が仮教師となって交代で寺子屋式の教育を行なった。大正四年四月に至り一年有余の学校設置請願が実り開校認可がおりたので、仮校舎の改増築を行ない二十八坪（九二平方呎）の校舎となし、遠軽尋常小学校所属支湧別特別教授場として同年七月十九日開校し、大沢敏雄が代用教員として発令された。翌六年五月大山火の延焼に遭い校舎全焼、火難をまぬがれた近くの家庭学校事務所あるいは支湧別五線の教授場を借用、仮校舎

として授業を継続した。同年ただちに校舍再建の要望が叫ばれ、所轄の上湧別村においてもこれが要望を容れ、山火による白滝一円の延焼校舎の再建に乗り出した。支湧別教授場の再建にあたり建築場所の設定について九線を主張するものと、七線を主張するものと部落内に異論が続出、二カ月にわたる論議を重ねた結果、ついに両者の中間点である八線二百八番地に落着、同年八月工事着工、十二月十五日八十六坪（二八四平方呎）の新校舍落成式が行なわれた。この時における工事契約書は次のようであった。

契 約 書

支湧別教授場新築工事

右工事請負ノ件、紋別郡上湧別村三石宮次郎ト請負人福田彦蔵トノ間ニ於テ契約締結スルコト左ノ如シ

第一条 本契約ノ要領左ノ如シ

- 1 工事仕様別紙仕様設計図面ノ通り
- 2 請負金額 壹千七百円
- 3 着手ハ大正六年八月一日
- 4 契約保証金 百三十六円
- 5 竣工期限ハ大正六年九月二十日

第二条 工事中請負人又ハ代理人ハ常ニ現場ニ臨在シテ監督ヲナスモノトス、請渡前ニ於テ生ジタル損害及ビ工事管理上ノ過失懈怠等ニヨリ

支湧別小学校校歌

作詩 大塚 薫
作曲 千葉日出城

一 山のは 山のは 朝の雲
われらも匂う 若い雲
あびる光に はつらつと
高いのぞみが 今燃える
勉めよ小学 支湧別

二 せせらぎ せせらぎ 谷の川
われらもひびく 清い水
流れ集めて 新しく
広い力を 今結ぶ
合せよ小学 支湧別

三 残雪 残雪 山の花
われらもきこい 開く花
強く正しく 伸びながら
己つとして 今進む
造れよ小学 支湧別

他人ニ与ヘタル損害ハ總テ請負人ノ負担トス

第三條 工事仕様書、材料調書ニ依リ施行スルハ勿論、工事監督員ノ監視ヲ受ケ、ソノ指揮ニ従フベシ

第四條 工事ノ材料ハ凡テ上湧別村吏又ハ工事監督員ノ検査ヲ受クベシ、モン検査不良ノ材料ヲ使用シタルトキハ構壇解

脱ノ上、コレガ適否ヲ検査スルコトアルベシ、解脱並ニ復旧費ハ請負人ノ負担トス

第五條 工事ハ請負人自ラ担当シ、売買譲与ヲナスコトヲ得ズ

第六條 左ニ掲グル事項ノ一ニ当ルトキハ契約ヲ解除スル事アルベシ、但シ契約保証金ハ三石音次郎ノ所得トス

一 契約ノ範圍内ニ於テ係員ノ要求ニ応ゼザルトキ

二 契約ノ日限内ニ着手セズ、又ハ工事ヲ廃停シタルトキ

三 竣功期限内ニ工事ヲ竣功セザルトキ

四 請負人ヨリ解除ヲ請フトキ

五 第五條ニ違背シタルトキ

第七條 前條ニヨリ契約ヲ解除シタルトキハ既成工事ハ部長三石音次郎ノ所得トス

第八條 契約保証金ノ代用トシテ国債証書ソノ他ノ債權及ビ土地ヲ領置セントキハ、部長ハ之ヲ売却シ契約保証金ニ相当

スル金額ヲ部長ノ所得トス、且ツ売却費用ヲ控除シ殘金ハ一揮付シメハ、不足ノトキハ請負人ヨリ追徴スルモノトス

第九條 工事仕様書及び材料調書圖面ニ洩レスル点ハ工事監督員ノ指揮ヲ受ケ請負人ニ於テ加工スルモノトス、此ノ場合

加工ノタメ要シタル費用ハ一切請負人ノ負担トス

第十條 保証人ハ此ノ契約上請負人ノ義務ニ属スルズベテノ事項ニ付其ノ責ニ任ズルモノトス

右契約ヲ証スルタメ本書ニ通ヲ作り契約者双方各一通ヲ領有スルモノトス

大正六年八月二十日

契約担当者 紋別郡上湧別村支湧別 三石音次郎

請負人 福田 彦 藏

保証人 加藤 為 藏

右契約書中、竣工期限九月二十日とあるが、実際には十一月いっぱいかかって竣工したものである。

新校舎が出来た翌七年七月支湧別尋常小学校に昇格、初代校長に瀬戸瀬尋常小学校の高橋種次が就任し、先生も校長をいれて三人となった。時に在校生男子五十一名、女子三十八名に増加していた。爾来児童生徒の増加にともない高等科の設置を強く望んでいたところ、昭和十二年四月一日認可があり支湧別尋常高等小学校と改称された。

年度別に列記すると

大正三年九月

仮校舎を設立し非公認ながら授業開始す。生徒数七、八名なり。

大正四年七月十九日

上湧別村遠軽尋常小学校所属支湧別特別教授場として開校。

大正四年九月六日

上湧別村瀬戸瀬尋常小学校の所属となる。

大正六年五月二十三日

大山火の延焼に遭い校舎全焼す。

大正六年十二月十五日

現在地に新校舎完成、落成式挙行。

大正七年七月十一日

支湧別尋常小学校に昇格す。

昭和十二年四月一日

支湧別尋常高等小学校と改称す。

昭和十六年四月一日

支湧別国民学校と改称す。

昭和二十二年四月一日

白滝村立支湧別小学校と改称す。

昭和二十二年五月一日

六・三制の施行により白滝中学校分校として支湧別小学校に併置す。

昭和二十六年四月一日

支湧別中学校独立す。

六 教 育

(三)

昭和三十五年九月一日

校歌および校章の制定。

昭和三十五年十一月五日

屋内運動場百一坪の落成。

昭和四十三年七月二十三日

簡易プール新設。

支湧別小学校在籍・卒業児童数および学級数

年 度	在籍児童数		卒業児童数		備 考
	学級	児童数	学級	児童数	
大正 四 単	1	1	1	1	
〃 五 単	1	1	1	1	
〃 七 二 分	1	1	1	1	
〃 〇 二 分	1	1	1	1	
〃 一 三 分	1	1	1	1	
〃 一 五 分	1	1	1	1	
昭和 三 二 分	1	1	1	1	
〃 六 二 分	1	1	1	1	
〃 九 三 分	1	1	1	1	
〃 一 二 四 分	1	1	1	1	一教室増築
〃 一 四 四 分	1	1	1	1	高等科併置
〃 一 六 五 分	1	1	1	1	一教室増築
〃 一 八 五 分	1	1	1	1	国民学校と改称さる
〃 一 九 六 分	1	1	1	1	一教室増築
昭和 一 〇 七 分	1	1	1	1	
〃 二 一 七 分	1	1	1	1	
〃 二 二 六 分	1	1	1	1	
〃 二 六 六 分	1	1	1	1	
〃 三 〇 六 分	1	1	1	1	
〃 三 二 六 分	1	1	1	1	
〃 三 五 六 分	1	1	1	1	
〃 三 九 五 分	1	1	1	1	
〃 四 〇 四 分	1	1	1	1	
〃 四 一 四 分	1	1	1	1	
〃 四 二 三 分	1	1	1	1	
〃 四 三 三 分	1	1	1	1	
〃 四 四 三 分	1	1	1	1	
〃 四 五 三 分	1	1	1	1	
昭和 一 〇 七 分	1	1	1	1	在籍児童数最高となる
〃 二 一 七 分	1	1	1	1	六・三制施行により高
〃 二 二 六 分	1	1	1	1	等科廃止、白滝中学校
〃 二 六 六 分	1	1	1	1	分校を併置す
〃 三 〇 六 分	1	1	1	1	支湧別中学校独立す
〃 三 二 六 分	1	1	1	1	
〃 三 五 六 分	1	1	1	1	一教室増築
〃 三 九 五 分	1	1	1	1	屋内運動場、特別教室
〃 四 〇 四 分	1	1	1	1	新築
〃 四 一 四 分	1	1	1	1	
〃 四 二 三 分	1	1	1	1	
〃 四 三 三 分	1	1	1	1	
〃 四 四 三 分	1	1	1	1	
〃 四 五 三 分	1	1	1	1	

歴代校長

歴代	氏名	就任	在職年	歴代	氏名	就任	在職年
初代	高橋種次	大正七・八・八	一・二	七代	横山亮三	昭和二・四・三〇	五・〇
二代	米島卓英	〃九・一・一五	一・八	八代	大沼桂太郎	〃二七・五・一	三・二
三代	阿部豊藏	〃〇・九・一五	五・〇	九代	山崎正治	〃三一・四・一	五・〇
四代	竹本主計	〃五・九・一八	一〇・六	一〇代	北島源次郎	〃三六・四・一六	四・〇
五代	中川次郎	昭和一・三・三一	四・八	十一代	佐藤義雄	〃四〇・四・一	三・〇
六代	丸山春治	〃五・一・三〇	六・五	十二代	長谷川勝雄	〃四三・四・一	現在

歴代教職員

氏名	就任年月日	在職年月	氏名	就任年月日	在職年月
高野マツノ	大正三・九・二三	一・〇	水落幾代	大正一〇・一・二	〇・一〇
大沢敏雄	〃四・九・八	三・〇	粕倉円治	〃一二・五・二	二・一〇
鈴木ケイ	〃七・六・二九	一・六	竹本きち	〃一五・一・〇	一〇・五
水落富藏	〃七・八・三	二・〇	岡本博	昭和九・四・〇	一・一
来島すゑの	〃九・五・二七	一・五	塚友男	〃一一・三・三一	五・〇
野口又三郎	〃九・一二・一〇	〇・五	中川秋子	〃一一・五・一一	四・七
高橋栄次郎	〃一〇・六・二九	〇・五	荒木茂成	〃一二・三・三一	一・〇
本間仁作	〃一〇・一〇・二二	一・五	中山安徳	〃一三・一〇・二五	二・四

野田	篠山	丸山	宮口	清川	竹林	安川	河原	坂上	藤田	鈴木	山田	鈴木	河原	片石	内藤	吉川	菅原	横山	山本	嘉村
とし子	敏雄	やゑの	正子	永吉		昭保	やすよ	やゑ子	豊之助	政子	英子	喜代美	徳雄	秋敏	富子	妙子	玉男	長吉	ミサヲ	
昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
一九・三・三一	一八・〇・三二	一八・三・三一	一八・三・三一	一八・三・三一	一七・三・三一	一七・三・三一	一七・三・三一	一七・三・三一	一七・三・三一	一六・三・三一	一六・三・三一	一六・三・三一	一六・三・三一	一五・二・一〇	一五・二・一〇	一五・二・一〇	一五・二・一〇	一五・三・三一	一四・三・〇〇	一四・三・〇〇
四・一・六	一・一・六	二・一・九	一・一・〇	六・一・〇	二・一・〇	一・一・〇	〇・一・〇	〇・一・〇	五・一・六	〇・一・八	〇・一・八	〇・一・六	一・一・四	〇・一・〇	〇・一・〇	〇・一・九	三・一・〇	二・一・二	〇・一・七	〇・一・七
大西	今藤	竹本	中本	竹本	竹本	木村	菊地	池田	片山	大西	丸山	中山	本村	岡田	加藤	橋野	佐藤	西尾	河合	近藤
勘之助		礼子	健子	主計	蓉子	千代子	慶一郎	昭登		美子	やゑ子	正子	久蔵	圭子	幸太郎	海雄	昭一	昭二	トモ	
昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
二四・九・六	二四・六・〇	二四・四・三	二四・四・一	二三・二・一	二三・八・三	二三・四・三	二三・四・三	二三・四・三	二三・四・三	二三・三・一	二三・六・三	二三・五・三	二二・四・一	二二・四・一	二二・一・〇	二二・九・三	二二・三・三	二二・三・三	二二・三・三	一九・三・三
一・三・三	〇・〇・四	〇・〇・四	〇・〇・四	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一	〇・〇・一
三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七	三・四・七

初代	二代	三代	四代
後援会	〃	〃	〃
佐藤 平一郎	菊地 善吾	植村 辰五郎	佐藤 創司郎
就任年度			
初代	二代	三代	四代
P T A 会	〃	〃	〃
田坂 唯光	伊藤 熊治	田坂 唯光	味戸 兼一
就任年度	昭和二三	二六	二七
	二五	三〇	三三

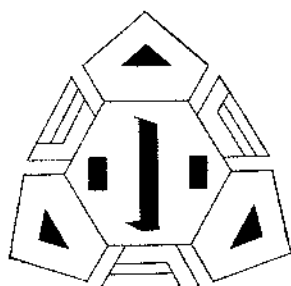
歴代 P T A 会長

久保	岩岡	亀谷	三浦	村井	今井	嶋海	松井	斎藤	長田	中井	鈴木	野田
則武	康富	貴一	樹雄	弘良	政人	惠美子	政子	とし子				
三・八・四	三・八・四	三・七・四	三・五・四	三・二・四	三・〇・四	二・九・五	二・八・四	二・八・四	二・六・六	二・五・一	二・五・四	昭和二四・一・二〇
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三・〇	五・〇	三・九	二・五	七・〇	八・〇	九・〇	一・六	一・九	二・四	三・一	九・五	二・五
河田 宜子	佐田 睦郎	谷田 泰広	森夏子	小川 勲一	前川 規夫	高山 与作	杉本 幸男	隈田 江子	谷 雅子	前田 公子	佐藤 翼	
四・六・四	四・六・四	四・六・四	四・三・四	四・三・四	四・三・四	四・二・四	四・〇・四	三・九・四	三・八・四	三・八・四	昭和三八・四・一	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
現	現	現	三	三	現	四	二	四	一	一	四	〇
在	在	在	〇	〇	在	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

五代	PTA会	昭和三三	〇代	PTA会	昭和四一
岡 竹松	〃	三四	中山 徳藏	〃	四二
味 坂 唯光	〃	三五、三六	渡 瀬 秀雄	〃	四三、四四
植 戸 兼一	〃	三七、三八	前 田 武雄	〃	四五、四六
佐 藤 奨之助	〃	三九、四〇	本 田 弥 徳	〃	
八 代	〃				
七 代	〃				
六 代	〃				
五 代	〃				

第三項 村立旧白滝小学校

創立・大正三年七月十七日
位置・白滝小学校に統合



白滝において最も早く拓けはじめた旧白滝部落は入植戸数わずかとはいえ、学齡期の子供をかかえた住民は学校の設置を望んでいた。この時に当り二股市街（現・白滝市街）においても学校設置の声があり、旧白滝の児童・生徒は二股の学校に通学してくるようにと二股側から要請があった。しかし足るお暗い溝齋と生い茂る草木を踏み分け出ずる悪路に加え、熊鹿狐狼の出没甚だしく危険なため、二股市街までの通学を断り、太田熊吉、菊地長治らが中心となり部落有志と相謀り学校の設置に奔走しはじめた。かくして寄付を募り旧白滝公共用地に二十坪（六六平方尺）の校舎建築に着手したのが大正元年十一月のことである。翌二年三月に竣工、同年四月一日私立旧白滝教授場として授業を開始した。同校第一回卒業生菊地誠は当時のもようを次のように語っている。

「学校の設置には非常に苦勞したようだ。部落の有志が毎日のように上湧別村役場に行つて陳情し、ようやく特

別教授場としての認可をもらった。しかし初めは私立であつたので校舎の建築はもちろん、先生の給料などすべて旧白滝の部落民の負担であつた。また学校の設備が完全でないため先生も生徒も冬はみんな外套を着たままの勉強であつた。

大正三年七月十七日に至り遠軽尋常高等小学校所屬公立旧白滝特別教授場となる。翌四年九月六日瀬戸瀬尋常小学校の所屬に転じ、大正七年十月七日白滝尋常小学校の所屬に変更せらる。昭和十年十月二十四日校舎増改築の落成を見、建坪六十五坪（二一・六平方呎）の校舎に生れ変つた。翌十一年四月二十一日には特別規程による尋常小学校認可となり、ここにおいて旧白滝小学校が独立したのである。初代校長河杉豊広が就任した。

以下年代的推移は

昭和二十二年四月一日

白滝村立旧白滝小学校と改称、六月二十一日付をもって単級校研究指定校となる。

昭和三十五年二月

僻地一級校に指定さる。

昭和三十六年九月一日

校章・校歌の制定。

昭和三十一年一月六日

部落総会を開き、学校総合問題について論議、五十三年の伝統に終止符を打つことを決議す。

旧白滝小学校校歌

作詩 佐京 俊夫
作曲 所 茂雄

一 洪水絶えなく 岩を縫い
怒とうに燃る 白滝の
あゝ清流の 姿こそ
吾れ等 母校の心なれ
おゝ旧白校 吾れ等の青春

二 拓けし肥沃の 野は綻き
真白き 馬鈴薯の花香る
あゝ麗わしき 姿こそ
吾れ等 母校の心なれ
おゝ旧白校 吾れ等の青春

三 天狗連山 あかねに染めて
遠きみ空を 雁渡る
あゝ悠遠の 姿こそ
吾れ等 母校の心なれ
おゝ旧白校 吾れ等の青春

学校総合

社会が急速に進歩するにともない学校教育の内容もその進歩に即応したものが要求され、これによって小規模学校の統合整理が叫ばれ、教育の向上、人材の育成に重点がおかれた。こうしたことから白滝村教育委員会においても旧白滝小学校を白滝小学校に統合しようとする意見が昭和三十六年三月の臨時委員会において初めて出されたのである。かくして学校統合資料を作成、同年九月旧白滝小学校校下父兄との統合懇談会が開かれ、教育委員会の統合方針が父兄の前に打ち出されたのである。古い伝統をもつ小学校の閉校は部落民にとって断ちがたいものがあり、これが説得に長い歳月が流れた。この間部落有志との話し合い、あるいは他町村の統合学校の視察等行ない地道に統合趣旨の普及に努めた。こうした努力が実を結び部落民の認識とあいまって、昭和三十八年一月六日の教育委員会と部落民との話し合いでついに条件付き統合賛成の決定をみたわけである。すなわち、

- 1 バスの停留所の問題（バス時間の変更もあわせて）
- 2 停留所に待合室を設けること
- 3 通学費二分の一村費助成
- 4 中学生も同額助成
- 5 国鉄臨時乗降場の存置
- 6 閉校学校の社会教育的施設を村で存置すること

以上大要六項目の要求が出され、このうち若干の修正がなされたがおおむね要求を通し、同年二月四日の教育委員会において昭和三十九年三月三十一日をもって旧白滝小学校を廃止するの議決を行ない、三月十六日旧白滝

小学校卒業式終了後、五十三年の永い伝統をもつ同校の開校式が厳肅に挙行され、学校長式辞、PTA会長ならびに児童の「お別れの言葉」に会場をうずめた来賓ひとしく鳴咽のうちに閉校式が終了した。

旧白滝小学校在籍・卒業児童数

年 度	在籍数	卒業数	備 考	年 度	在籍数	卒業数	備 考
大正二	一八		私立教授場	〃 一六	二〇	五	国民学校と改称
〃 三	二二		遠軽尋常小学校所属	〃 二二	二六	八	村立旧白滝小学校と改称
〃 四	二九		瀬戸瀬尋常小学校所属	〃 二三	二四	九	北海道庁主催単級教育研究会当校に於て開催
〃 五	三七	四		〃 二五	二五	五	
〃 七	三三	六	白滝尋常小学校所属	〃 三〇	二八	五	
〃 九	三〇	一		〃 三四	三七	四	当校の器楽演奏NHKよりロカル放送さる
昭和元年	四一	一〇		〃 三五	三八	八	僻地一級校に指定
〃 五	四三	四	在籍児童数最高となる	〃 三六	三五	三	当校の器楽演奏NHK第二より全国むけ放送さる
〃 九	六〇	一〇	校舎改築す	〃 三七	三四	六	校章、校歌制定
〃 一〇	五八	一一		〃 三八	三一	〇	
〃 一一	五五	一〇	旧白滝尋常小学校として独立	昭和三十九年四月二日より白滝小学校に統合			
〃 一五	二八	一二	卒業児童数最高となる	卒業数計 二七七			

歴 代 校 長

歴 代	氏 名	就 任	在職年	備 考
初 代	柳 橋 末 吉	大正三・七・一七	〇・一〇	遠軽尋常高等小学校長

氏 名	就任年月日	在職年月	氏 名	就任年月日	在職年月
二代 逢坂 守男	大正四・六・一	三・四	瀬戸瀬尋常小学校長		
三代 喜郎	七・一〇・七	二・六	白滝尋常小学校長		
四代 佐木 茂平	〇・四・一	一・四	石岡		
五代 真田 義光	一・一〇・三	一・〇	白滝尋常高等小学校長		
六代 本野 作弥	昭和一・一〇・二〇	一・六	右同		
七代 河杉 豊宏	一・五・二	八・一	独立初代校長		
八代 清水 実雄	二・一・二	一・八	独立二代校長		
九代 島山 金一	二・四・一	二・三	独立三代校長		
〇代 竹本 茂雄	二・四・五	九・一	独立四代校長		
一代 所	三・四・一	四・一	独立五代校長のため廃校	昭和三年三月統合	

氏 名	就任年月日	在職年月	氏 名	就任年月日	在職年月
港井 梅雪	大正二・四・一	〇・四	田出 清一	昭和四・四・七	〇・五
島貫 幸吉	二・九・一	〇・〇	額 慧	四・一〇・三	一・一
南川 定三郎	三・〇・一五	五・五	ノブヨ	六・一・九	三・七
吉川 直一郎	四・一・一	一・五	タミ	二・四・三	一・九
横山 勉	四・一・二五	二・三	ネ	二・三・一五	二・一
大塚 鑑藏	七・一・二五	一・五	ミ	二・四・七	二・五
金森 健太郎	二・三・二	一・八	子	二・五・一〇	一・六
大島 健太郎	三・一・二	四・四	富	三・四・一	〇・四

宮下	修	〳	三三・四・一	三・〇	城岡	紀子	〳	三六・四・一	三・〇
所	二葉子	〳	三四・六・一	四・一〇					

歴代PTA会長

歴代	会長	名	就任年度	歴代	会長	名	就任年度
初代	丹羽	実市	昭和一二一四	六代	森谷	正明	昭和二八二九
二代	佐藤	軍次郎	〳一五	七代	内山	源三郎	〳三〇三三
三代	斎藤	久治郎	〳六一三三	八代	斎藤	弘	〳三四三七
四代	大泉	澄男	〳二四二五	九代	斎藤	久治	〳三八
五代	平岡	久雄	〳二六二七				

第四項 村立奥白滝小学校

創立・大正四年一月十一日
位置・三和小中学校に統合

大正の初期未開の地であった奥白滝および高台方面に宮城、福島、山形の各団体、さらには個人で開拓の鎌をふるう人植者が年とともに増加し、大正三年には七十余戸を数えるに至ったが、子弟の教育には茨の道を八ヶ岳余をへだてた白滝教授場に通学するのほかに、熊、狐の危険におののきながらの通学は開拓者の悩みの種でもあった。かくて部落有志協議を重ねた結果、教授場開設の議がまとまり、位置を基線三十六号二百十八番地内に選定、関係方面に認可申請手続をする一方、岸利七所有の物置一棟の寄贈をうけ、同三年十月これを改造し十八

坪（五九・四平方竪）の仮校舎となした。この時すでに教授場開設認可も
 おりていたが教員獲得に難航、十二月に至つてようやく決定し同月十六日
 中村勇訓導就任、翌四年一月十一日遠軽尋常小学校所属滝ノ上教授場とし
 て開校式を挙行した。時に男十四名、女八名計二十二名の児童数であつた。
 以下その推移をながめれば、

大正四年九月六日

瀬戸瀬尋常小学校の所屬となる。

大正五年十月

旧八号駅跡に移転、八十三・五坪の校舎
 新築し、滝ノ上教授場を上白滝教授場と呼
 称変更。

大正六年五月二十三日

大山火のため校舎灰燼と化す。

大正六年秋

学校敷地を三十八号線に変更、四十一・五坪の仮校舎建築す。

大正七年三月十五日

校舎新築、建坪五十四・五坪。

大正七年六月二十日

奥白滝尋常小学校と資格変更。

大正七年十一月

五十六坪の増築工事を行なう。

昭和八年十一月五日

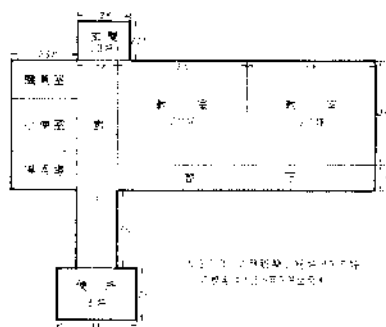
校舎老朽により百九坪の校舎新築。

昭和十六年四月一日

奥白滝国民学校と改称。

昭和二十二年四月一日

白滝村立奥白滝小学校と改称。



上白滝教授場平面図

村議会において当校廃止が可決さる。

学校統合のため東白滝小学校とともに閉校す。

奥白滝小学校入学・在籍・卒業児童数および学級数

大正										昭和	
年度	學級	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
四	一	四	八	一二	六	九	一五	六	七	一三	
五	一	八	二	一〇	七	一	八	一	一	二	
六	一	二	一	三	一	一	二	一	一	二	
七	一	三	一	四	一	一	二	一	一	二	
八	一	四	一	五	一	一	二	一	一	二	
九	一	五	一	六	一	一	二	一	一	二	
一〇	一	六	一	七	一	一	二	一	一	二	
一一	一	七	一	八	一	一	二	一	一	二	
一二	一	八	一	九	一	一	二	一	一	二	
一三	一	九	一	一〇	一	一	二	一	一	二	
一四	一	一〇	一	一一	一	一	二	一	一	二	
一五	一	一一	一	一二	一	一	二	一	一	二	
一六	一	一二	一	一三	一	一	二	一	一	二	
一七	一	一三	一	一四	一	一	二	一	一	二	
一八	一	一四	一	一五	一	一	二	一	一	二	
一九	一	一五	一	一六	一	一	二	一	一	二	
二〇	一	一六	一	一七	一	一	二	一	一	二	
二一	一	一七	一	一八	一	一	二	一	一	二	
二二	一	一八	一	一九	一	一	二	一	一	二	
二三	一	一九	一	二〇	一	一	二	一	一	二	
二四	一	二〇	一	二一	一	一	二	一	一	二	
二五	一	二一	一	二二	一	一	二	一	一	二	
二六	一	二二	一	二三	一	一	二	一	一	二	
二七	一	二三	一	二四	一	一	二	一	一	二	
二八	一	二四	一	二五	一	一	二	一	一	二	
二九	一	二五	一	二六	一	一	二	一	一	二	
三〇	一	二六	一	二七	一	一	二	一	一	二	
三一	一	二七	一	二八	一	一	二	一	一	二	
三二	一	二八	一	二九	一	一	二	一	一	二	
三三	一	二九	一	三〇	一	一	二	一	一	二	
三四	一	三〇	一	三一	一	一	二	一	一	二	
三五	一	三一	一	三二	一	一	二	一	一	二	
三六	一	三二	一	三三	一	一	二	一	一	二	
三七	一	三三	一	三四	一	一	二	一	一	二	
三八	一	三四	一	三五	一	一	二	一	一	二	
三九	一	三五	一	三六	一	一	二	一	一	二	
四〇	一	三六	一	三七	一	一	二	一	一	二	
四一	一	三七	一	三八	一	一	二	一	一	二	
四二	一	三八	一	三九	一	一	二	一	一	二	
四三	一	三九	一	四〇	一	一	二	一	一	二	
四四	一	四〇	一	四一	一	一	二	一	一	二	
四五	一	四一	一	四二	一	一	二	一	一	二	
四六	一	四二	一	四三	一	一	二	一	一	二	
四七	一	四三	一	四四	一	一	二	一	一	二	
四八	一	四四	一	四五	一	一	二	一	一	二	
四九	一	四五	一	四六	一	一	二	一	一	二	
五〇	一	四六	一	四七	一	一	二	一	一	二	
五一	一	四七	一	四八	一	一	二	一	一	二	
五二	一	四八	一	四九	一	一	二	一	一	二	
五三	一	四九	一	五〇	一	一	二	一	一	二	
五四	一	五〇	一	五一	一	一	二	一	一	二	
五五	一	五一	一	五二	一	一	二	一	一	二	
五六	一	五二	一	五三	一	一	二	一	一	二	
五七	一	五三	一	五四	一	一	二	一	一	二	
五八	一	五四	一	五五	一	一	二	一	一	二	
五九	一	五五	一	五六	一	一	二	一	一	二	
六〇	一	五六	一	五七	一	一	二	一	一	二	
六一	一	五七	一	五八	一	一	二	一	一	二	
六二	一	五八	一	五九	一	一	二	一	一	二	
六三	一	五九	一	六〇	一	一	二	一	一	二	
六四	一	六〇	一	六一	一	一	二	一	一	二	
六五	一	六一	一	六二	一	一	二	一	一	二	
六六	一	六二	一	六三	一	一	二	一	一	二	
六七	一	六三	一	六四	一	一	二	一	一	二	
六八	一	六四	一	六五	一	一	二	一	一	二	
六九	一	六五	一	六六	一	一	二	一	一	二	
七〇	一	六六	一	六七	一	一	二	一	一	二	
七一	一	六七	一	六八	一	一	二	一	一	二	
七二	一	六八	一	六九	一	一	二	一	一	二	
七三	一	六九	一	七〇	一	一	二	一	一	二	
七四	一	七〇	一	七一	一	一	二	一	一	二	
七五	一	七一	一	七二	一	一	二	一	一	二	
七六	一	七二	一	七三	一	一	二	一	一	二	
七七	一	七三	一	七四	一	一	二	一	一	二	
七八	一	七四	一	七五	一	一	二	一	一	二	
七九	一	七五	一	七六	一	一	二	一	一	二	
八〇	一	七六	一	七七	一	一	二	一	一	二	
八一	一	七七	一	七八	一	一	二	一	一	二	
八二	一	七八	一	七九	一	一	二	一	一	二	
八三	一	七九	一	八〇	一	一	二	一	一	二	
八四	一	八〇	一	八一	一	一	二	一	一	二	
八五	一	八一	一	八二	一	一	二	一	一	二	
八六	一	八二	一	八三	一	一	二	一	一	二	
八七	一	八三	一	八四	一	一	二	一	一	二	
八八	一	八四	一	八五	一	一	二	一	一	二	
八九	一	八五	一	八六	一	一	二	一	一	二	
九〇	一	八六	一	八七	一	一	二	一	一	二	
九一	一	八七	一	八八	一	一	二	一	一	二	
九二	一	八八	一	八九	一	一	二	一	一	二	
九三	一	八九	一	九〇	一	一	二	一	一	二	
九四	一	九〇	一	九一	一	一	二	一	一	二	
九五	一	九一	一	九二	一	一	二	一	一	二	
九六	一	九二	一	九三	一	一	二	一	一	二	
九七	一	九三	一	九四	一	一	二	一	一	二	
九八	一	九四	一	九五	一	一	二	一	一	二	
九九	一	九五	一	九六	一	一	二	一	一	二	
一〇〇	一	九六	一	九七	一	一	二	一	一	二	
一〇一	一	九七	一	九八	一	一	二	一	一	二	
一〇二	一	九八	一	九九	一	一	二	一	一	二	
一〇三	一	九九	一	一〇〇	一	一	二	一	一	二	
一〇四	一	一〇〇	一	一〇一	一	一	二	一	一	二	
一〇五	一	一〇一	一	一〇二	一	一	二	一	一	二	
一〇六	一	一〇二	一	一〇三	一	一	二	一	一	二	
一〇七	一	一〇三	一	一〇四	一	一	二	一	一	二	
一〇八	一	一〇四	一	一〇五	一	一	二	一	一	二	
一〇九	一	一〇五	一	一〇六	一	一	二	一	一	二	
一一〇	一	一〇六	一	一〇七	一	一	二	一	一	二	
一一一	一	一〇七	一	一〇八	一	一	二	一	一	二	
一一二	一	一〇八	一	一〇九	一	一	二	一	一	二	
一一三	一	一〇九	一	一一〇	一	一	二	一	一	二	
一一四	一	一〇	一	一一一	一	一	二	一	一	二	
一一五	一	一一	一	一一二	一	一	二	一	一	二	
一一六	一	一二	一	一一三	一	一	二	一	一	二	
一一七	一	一三	一	一一四	一	一	二	一	一	二	
一一八	一	一四	一	一一五	一	一	二	一	一	二	
一一九	一	一五	一	一一六	一	一	二	一	一	二	
一二〇	一	一六	一	一一七	一	一	二	一	一	二	
一二一	一	一七	一	一一八	一	一	二	一	一	二	
一二二	一	一八	一	一二〇	一	一	二	一	一	二	
一二三	一	一九	一	一二一	一	一	二	一	一	二	
一二四	一	二〇	一	一二二	一	一	二	一	一	二	
一二五	一	二一	一	一二三	一	一	二	一	一	二	
一二六	一	二二	一	一二四	一	一	二	一	一	二	
一二七	一	二三	一	一二五	一	一	二	一	一	二	
一二八	一	二四	一	一二六	一	一	二	一	一	二	
一二九	一	二五	一	一二七	一	一	二	一	一	二	
一三〇	一	二六	一	一二八	一	一	二	一	一	二	
一三一	一	二七	一	一二九	一	一	二	一	一	二	
一三二	一	二八	一	一三〇	一	一	二	一	一	二	
一三三	一	二九	一	一三一	一	一	二	一	一	二	
一三四	一	三〇	一	一三二	一	一	二	一	一	二	
一三五	一	三一	一	一三三	一	一	二	一	一	二	
一三六	一	三二	一	一三四	一	一	二	一	一	二	
一三七	一	三三	一	一三五	一	一	二	一	一	二	
一三八	一	三四	一	一三六	一	一	二	一	一	二	
一三九	一	三五	一	一三七	一	一	二	一	一	二	
一四〇	一	三六	一	一三八	一	一	二	一	一	二	
一四一	一	三七	一	一三九	一	一	二	一	一	二	
一四二	一	三八	一	一四〇	一	一	二	一	一	二	
一四三	一	三九	一	一四一	一	一	二	一	一	二	
一四四	一	四〇	一	一四二	一	一	二	一	一	二	
一四五	一	四一	一	一四三	一	一	二	一	一	二	
一四六	一	四二	一	一四四	一	一	二	一	一	二	
一四七	一	四三	一	一四五	一	一	二	一	一	二	
一四八	一	四四	一	一四六	一	一	二	一	一	二	
一四九	一	四五	一	一四七	一	一	二	一	一	二	
一五〇	一	四六	一	一四八	一	一	二	一	一	二	
一五一	一	四七	一	一四九	一	一	二	一	一	二	
一五二	一	四八	一	一五〇	一	一	二	一	一	二	
一五三	一	四九	一	一五一	一	一	二	一	一	二	
一五四	一	五〇	一	一五二	一	一	二	一	一	二	
一五五	一	五一	一	一五三	一	一	二	一	一	二	
一五六	一	五二	一	一五四	一	一	二	一	一	二	
一五七	一	五三	一	一五五	一	一	二	一	一	二	
一五八	一	五四	一	一五六	一	一	二	一	一	二	
一五九	一	五五	一	一五七	一	一	二	一	一	二	
一六〇	一	五六	一	一五八	一	一	二	一	一	二	
一六一	一	五七	一	一五九	一	一	二	一	一	二	
一六二	一	五八	一	一六〇	一	一	二	一	一	二	
一六三	一	五九	一	一六一	一	一	二	一	一	二	
一六四	一	六〇	一	一六二	一	一	二	一	一	二	
一六五	一	六一	一	一六三	一	一	二	一	一	二	
一六六	一	六二	一	一六四	一	一	二	一	一	二	
一六七	一	六三	一	一六五	一	一	二	一	一	二	
一六八	一	六四	一	一六六	一	一	二	一	一	二	
一六九	一	六五	一	一六七	一	一	二	一	一	二	
一七〇	一	六六	一	一六八	一	一	二	一	一	二	
一七一	一	六七	一								

[illegible]

歷代校長

代	氏名	就任	在職年	代	氏名	就任	在職年
初代	大沢敏雄	大正七・七・一三	二・八五	五代	水沢利馬	昭和四・三・三二	七・二
二代	笠原郡治	夕一〇・四・一	四・五六	六代	成中永勝	夕二・五・一八	三・一〇
三代	田中源次郎	夕一四・八・三一	一・七七	七代	宮崎国雄	夕二五・三・三一	〇・七
四代	鈴木長吉	昭和二・三・三二	二・〇				

歷代教職員

氏 名	就任年月日	在職年月	氏 名	就任年月日	在職年月	氏 名	就任年月日	在職年月
中村 勇	大正二・三・六	三・二	杉本 九市	大正二・六・四	四・四	島 富雄	昭和二・九・三	八・九
大沢 重雄	五・四・三	一・八	笠原 シノブ	二・八・三	三・三	島 ソノ	三・九・三	八・九
永山 千嘉治	七・三・九	九・九	岡 政保	三・七・六	三・三	越 智 美知雄	八・三・元	五・八
菊地 次郎	八・一・三	一・五	杉本 トク	三・九・六	三・一	鈴 木 ひる	三・四・三	一・一〇
徳江 保	八・四・六	三・二	清水 実雄	四・四・四	一・三	三 郎	四・一・三	一・一〇
藤田 利重	九・五・七	四・四	中 ヨツ	四・三・三	二・六	沢 コト	四・四・三	三・一〇
滝田 滝子	九・一・一	一・二	星 幸男	五・三・六	六・二	塚 龍英	四・六・八	一・一〇

和 田 碩 夫	昭和四・七・三	〇・四	豊 村 真	昭和五・四・三	〇・三	大 塚 雅 文	昭和五・九・一
大 橋 光 一	五・一・五	〇・二	斎 藤 省 典	五・二・三	〇・七	佐 藤 文 夫	五・三・三
小 田 島 勉	五・一・三	三・四	小 田 島 強	五・一〇・三	一		

第五項 村立東白滝小学校

創立・大正七年十月十一日
位置・三和小中学校に統合

通称大狗沢と呼んでいたこの部落の就学児童は当初四ヶ箇内外へだてた奥白滝教授場に通学していたが、一定の道路とてなく、坂あり沢ありという起伏のはげしい土地に加え、湧別川によって上白滝、奥白滝とさえぎられ、川には巨樹を倒伐して丸木橋となしていたため低学年の通学には危険のともなうこと少なからぬものがあつた。こうした折、奥白滝教授場の位置変更があつて通学路程が延び、通学の困難はつるばかりであつた。かくて部落一同協議を重ねた結果、教授場設立の意を固め、わずか二十余戸の全部落一丸となつて寄付をつのり上白滝三十四号線に五十二坪（七・七一平方畝）の校舎を新築、大正七年十月十一日奥白滝尋常小学校所屬東白滝特別教授場として開校式を挙行したのである。時に児童総数男女合せて計三十二名であつた。その後部落の中心地と目される地点に校舎移転の話が持ち上り、結局大正十一年十月上白滝三十六号線に移転完了、千二十坪（三・三六六平方畝）の学校敷地も決定した。昭和十一年五月二十日東白滝尋常小学校に昇格、同年十二月およそ六十二坪の校舎が再新築された。昭和十六年四月東白滝国民学校、同二十二年四月白滝村立東白滝小学校とそれぞれ改称された。同二十五年六月の定例村議会において東白滝小学校の廃止決定を見、同年十一月教育効果の実をあげるを

[illegible]

位置・白滝原野基線千二百十一番地（白滝村西区）

六



期大学は二年制）となり、青年学校は廃止され、いわゆる六・三・三・四の学制がしかれ義務教育は小学校六カ年、中学校三カ年の九年制という新学制がこの年四月一日から実施されたのである。

本村においてもこうした規定にもとづき昭和二十二年五月一日白滝小学校に併置せる白

滝中学校を設置、同時に支湧別に分校を設置した。以下順次おもなものを列記すると、

昭和二十二年九月一日

支湧別中学校独立のため白滝中学校の分校を解く。

昭和二十二年九月二十五日

授業料徴収条例設定、生徒一人につき月十円とし、昭和二十三年度より月二十円とす。

昭和二十三年七月十日

敷地を選定し百十四・五坪の新校舎落成す。

昭和二十四年三月二十四日

昭和二十三年度限りで授業料徴収条例を廃止す。

昭和二十六年四月一日

三和中学校設置にともない通学区域を変更

白滝中学校歌

作詩 人塚 盈
作曲 千葉 日出城

一 峯に輝く 残雪や

行きて清らかな 涙の水

あゝ清新の 意気こゝに

白滝中学 われらが抱負

高き文化を 創らなん

二 木々のみどりに 雲映えて

風に明るき 岩の花

あゝ真実の 愛こゝに

白滝中学 われらが郷土

永き平和を 築かなん

昭和二十七年四月十一日

校庭を拡張し公設グラウンドを設定す。

昭和三十一年

校章制定。

昭和三十四年八月一日

體育館（付属建物を含め百九十三坪）新築落成す。校歌制定。

昭和三十六年八月十九日

校舎老朽のため全面補修す。

昭和二十七年十一月一日

理科教室、家庭教室六十坪增築。

昭和四十年十一月

技術科教室六十坪新築。

昭和四十一年十月二十六日

音樂科教室約四十坪新築。

昭和四十三年九月十三日

宿直室を保健室に改造。

昭和四十四年四月七日

給食開始。

昭和四十六年四月一日

三和中学校が統合される。

[illegible]

年度	子數		計	男	女	平	業	數
	男	女						
昭和二三	二	五三	五四一〇七	九	六	一五		
〃二三	四	八二	八二一六五	一〇	九	一九		
〃二四	六	一〇九	一〇九二一八	二五	三六	六一		
〃二五	六	一〇五	九四一九九	四〇	三三	七二		

年度	學級數		計	男	女	平	業	數
	男	女						
昭和二六	五	九一	八四一七五	二〇	二一	四一		
〃二七	四	五七	五九一六	一六	八	二四		
〃二八	三	七七	六〇二二七	二五	二五	五〇		
〃二九	三	六三	六七二二〇	二三	二五	三八		

昭和三八	四	八四	七一	五五	二五	二三	四八	昭和三八	六	一四〇	一〇〇	二四〇	四四	三三
〃	三一	四	六九	六五	二九	一八	四七	〃	三九	六	一四三	一〇五	四八	三八
〃	三二	五	七八	七四	二四	二八	五二	〃	四〇	六	一四一	一〇七	五一	二九
〃	三三	六	七七	七三	三五	二二	五七	〃	四一	六	一三一	一〇七	四三	三六
〃	三四	九	八五	七九	三一	三〇	六一	〃	四二	六	九六	一〇二	二二	三五
〃	三五	一〇	九七	二〇	二八	二八	五六	〃	四三	六	一一四	九九	四六	三四
〃	三六	一七	一六	二三	二九	二六	五五	〃	四四	六	一	一	一	一
〃	三七	二六	二二	二七	四一	四〇	八一	〃	四五	一	一	一	一	一

初代	田所朋司	昭和二三・五・一	
二代	二見勝治	〃二五・八・三	
三代	工藤留義	〃二三・四・一	
			在職年 四・〇
四代	尾形真男	昭和三七・五・	
	石崎煥一	〃四二・四・	
	高島温厚	〃四六・四・	
			在職年 四・〇

歴代PTA会長

代	氏名	期
初代	布田 富藏	昭和二三・四一三・三
二代	中山 親孝	二三・四一四・三
三代	南 政雄	二四・四一八・三
四代	藤本 輝彦	二八・四一九・三
代	氏名	期
五代	西尾 博文	昭和二九・四一三一・三
六代	西方 憲誠	三一・四一三二・三
七代	後藤 貞治	三二・四一三三・三
八代	伊藤 喜助	三三・四一三五・二

九代	越智忠利	昭和三五・三〇三六・三	一三代	岡本保俊	昭和四〇・四〇四二・一
一〇代	大庭裕二	〇・三六・四〇三七・三	一四代	大泉澄男	〇・四二・二〇四五・三
十一代	山内晴雄	〇・三七・四〇三八・三	一五代	越智政男	〇・四五・四〇現在
十二代	大庭裕二	〇・三八・四〇四〇・三			

歴代教職員

氏名	就任	在職	氏名	就任	在職	氏名	就任	在職
浅野清三	昭和三・五・三	〇・〇	中安	昭和五・一・七	一・〇	喜多町忠男	昭和三・四・一	八・〇
大住薫	〇・三・五・三	〇・元	戸田正	三・二・七	一・三	嘉多山篤	〇・五・三	一・元
田所芳子	〇・三・五・三	〇・元	山崎岩雄	三・二・七	〇・三	長岡茂雄	〇・九・一	八・〇
小島富貴子	〇・三・七・五	一・元	中村孝夫	三・四・一	三・三	大沢崇憲	〇・一・一	七・四
中村行	〇・三・七・五	〇・三	中村昭三	三・四・一	一・三	森川佳英	〇・四・一	四・〇
河本二天	〇・三・七・五	一・元	黒川昭三	三・四・一	一・三	眞正司	〇・四・一	五・〇
鈴木英一	〇・三・七・五	一・元	戸梶優一	三・四・一	一・三	上田総	〇・四・一	六・〇
横田勇吉	〇・三・七・五	一・元	佐藤登実	三・四・一	一・三	畔原一夫	〇・四・一	六・〇
吉田光春	〇・三・七・五	一・元	藤川實藏	三・四・一	一・三	和仁健太郎	〇・四・一	七・〇
堀口幸雄	〇・三・七・五	一・元	対島留蔵	三・四・一	一・三	三浦和広	〇・四・一	現在
中村弥作	〇・三・七・五	一・元	堀川武勝	三・四・一	一・三	久嶋一彦	〇・四・一	現在
藤本泰子	〇・三・七・五	一・元	木村勝	三・四・一	一・三	渡辺重和	〇・四・一	現在
小島薫	〇・三・七・五	一・元	佐野稔	三・四・一	一・三	中村二郎	〇・四・一	現在
吉田光春	〇・三・七・五	一・元	高橋志次雄	三・四・一	一・三	岩間寅彦	〇・四・一	現在

小林孝夫	昭和四・四・一	現在	伊藤真一	昭和四・四・一	現在	佐藤徳	昭和四・四・一	現在
山本英樹	四・四・一	川口昌信	四・四・一	鳴海貞	四・四・一			
大井ゆう子	四・四・一	津村裕	四・四・一	中村武	四・四・一			
中安時衛	四・四・一	大西悦子	四・四・一	愛洲紀久子	四・四・一			
金森節子	四・四・一	名苗修治	四・四・一					
	現在							

第七項 支湧別中学校

創立・昭和二十二年五月一日
位置・白滝中学校に統合



昭和二十二年五月白滝中学校支湧別分校として発足した。村の方針としては諸般の事情にかんがみ、いずれは一村一校が理想であるとしていたが支湧別住氏の猛反対にあい支湧別中学校設置運動が展開され、同年五月三十日の村議会において、今後数年間は独立校舎の建築はできかねる、などの条件付きにてこの要望が容れられ議決されたのである。かくして上支湧別青年会館を仮校舎とし二学級編成の分校が誕生、同年九月一日をもって白滝中学校より離れ支湧別小学校併置中学となった。この間昭和二十二年九月の村議会において生徒一人につき一カ月十円の授業料徴収条例を設定、翌二十三年度から一カ月二十円と改正したが、同年度限りでこの条例は廃止決定をみている。昭和二十六年四月独立せる中学校校舎建設の方針にそって、小学校の併置をはなれ五月には専任校長の就任をみた。引きつづき新校舎建設候補地の

選定がはじめられ、紆余曲折はあったが結局上支湧別九線（白滝原野千三百七十七番地）の地に決定（敷地三・六畝余のうち二・二畝は公共用地、四畝は辻源一の寄付による）、同年九月百四十四坪五合（四七七平方呎）の新校舎建設に着工、翌二十七年一月十日落成式が挙行され、かくて支湧別住民待望の独立校舎が誕生したのである。

中学校統合への道

昭和二十二年白滝中学校の分校として在籍生徒数五十六名で出発した支湧別中学校は、戦後の開拓者移住によって校下戸数も増し在校生百名前後の状況が十数年間続いた。しかししだいにおしよせる木材産業の不振と零細農業の転換などあって流出戸数が目立ち、在校生も昭和三十八年度の百四名をピークとして漸次減少の一途をたどり分校時の数を下回る見通しとなった。このため教育委員会においても真剣な検討が加えられ、昭和四十一年五月の教育委員会臨時会において協議事項としてではあるが初めて中学校統合についての協議がなされた。当初支湧別中学校と三和中学校とを白滝中学校へ同時に統合する意向をもって縷々計画が進められ、村政懇談会、部落地区別懇談会など開催し父兄の理解を求むるPRが続けられたが、さらにこうした学校統合を円滑に成就せんがため「中学校統合に関する協

支湧別中学校校歌

作詩 大塚 豊
作曲 穴戸 馨

一
山の秀は 空にそそりて
残雪の 陽を呼ぶところ
保て いざ 已きびしく

支湧別中学 われら
われら われら ここに究めん

二

清流は 谷にひびきて
新緑の 風立つところ
和せよ いざ 心明るく

支湧別中学 われら
われら われら ここに擽げん

三

夕映は 雲にそまりて
勤勞の 愛湧くところ
拓け いざ 思い正しく

支湧別中学 われら
われら われら ここに造らん

議会」を設け地区別に委員を選出し慎重審議を重ね続けた結果、支湧別中学校と三和中学校の同時統合の線がくずれ、段階的統合ということで、支湧別中学校は昭和四十三年度より複式編成となるので統合は四十三年四月一日より、三和中学校は四十六年まで単式編成可能なので複式編成となる四十七年四月一日よりそれぞれ白濱中学校に統合することが望ましいとの結論に達したのである。かくて学校統合による通学バス運行の確保および通学費補助、統合校舎の整備拡充等幾多案件の解決を努力しつつ、昭和四十三年二月の教育委員会定例会において「昭和四十三年三月三十一日をもって支湧別中学校を廃校す」と決議され、同年三月十四日、いろいろな想い出を胸に厳肅な閉校式が挙行され、開校以来二十一年の歴史に終止符が打たれたのである。ちなみにこれまで送り出された卒業生は五百八十四名となっている。

文湧別中學校年度別狀況

年度	男	女	生徒数	学級数	学級編成組合せ	男	女	卒業生	備考
昭和二二	三〇	二六	五六	二	二・二・二 三年併式	四	二	六	白濱中学校の分校として発足するも九月に創立す
二三	四三	三四	七七	二	二	二	八	一〇	
二四	四三	四四	八七	二	二	一	五	二六	
二五	四九	四九	九四	二	二	九	三	三三	
二六	四六	四八	九四	二	二	二	一六	二八	
二七	五一	五〇	一〇一	二	二	七	五	三三	
二八	五三	四二	九五	二	二	三	五	二八	校章制定 新校舎落成
二九	五五	四一	九六	二	二	〇	六	二六	

代	氏名	就任	在職年	備考
初代	田所朋司	昭和二・五・一	〇・四	白滝中学校支湧別分校
二代	横山亮三	二・二・九・一	三・八	支湧別小学校併置
三代	山崎	二・六・五・一	四・一一	支湧別中学校として独立
四代	後山良英	三・一・四・一	三・一	
五代	吉田芳雄	三・四・五・一	二・七	
昭和三〇	三・一	二・二・三・一	二・二・三・一	三年単式となる
昭和三一	四・八	二・一・三・一	一・五・九	二・七
昭和三二	五・三	二・〇	一・七	二・八
昭和三三	五・三	二・〇	一・七	二・七
昭和三四	五・三	二・〇	一・七	二・七
昭和三五	五・三	二・〇	一・七	二・七
昭和三六	五・三	二・〇	一・七	二・七
昭和三七	五・七	二・〇	一・四	二・八
昭和三八	五・二	二・〇	一・三	二・四
昭和三九	五・〇	二・〇	一・二	二・八
昭和四〇	四・五	二・〇	一・二	二・八
昭和四一	四・六	二・〇	一・八	二・八
昭和四二	三・七	二・〇	一・一	二・三
昭和四三	三・六	二・〇	一・一	二・三
昭和四四	三・一	二・〇	一・六	三・〇
昭和四五	五・九	二・〇	一・六	三・〇
昭和四六	九・六	二・〇	一・八	三・〇
昭和四七	七・三	二・〇	一・八	三・〇
昭和四八	九・一	二・〇	一・五	三・〇
昭和四九	九・一	二・〇	一・五	三・〇
昭和五〇	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五一	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五二	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五三	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五四	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五五	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五六	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五七	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五八	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和五九	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六〇	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六一	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六二	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六三	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六四	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六五	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六六	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六七	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六八	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和六九	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七〇	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七一	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七二	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七三	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七四	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七五	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七六	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七七	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七八	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和七九	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八〇	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八一	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八二	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八三	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八四	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八五	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八六	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八七	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八八	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和八九	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九〇	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九一	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九二	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九三	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九四	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九五	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九六	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九七	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九八	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和九九	九・三	二・〇	一・五	三・〇
昭和一〇〇	九・三	二・〇	一・五	三・〇

六教 育

六代	佐藤 勇 喜	昭和三六・一二・	四・四
七代	村上 庄 七	〃四一・四・	二・〇
昭和四三年三月統合			

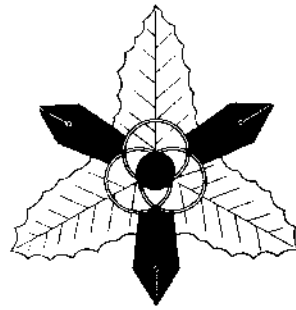
歴代教職員

氏 名	就任年月日	在職年	氏 名	就任年月日	在職年	氏 名	就任年月日	在職年
奥山 嘉太郎	昭和三・二・五	六・五	横関 秀夫	昭和三・四・一	一・一	前田 幸一	昭和六・四・一	一・一
橋野 幸雄	〃三・二・五	〇・五	石川 富五郎	〃四・一・一	一・一	武田 寛昌	〃五・四・一	一・一
浦川 永吉	〃三・二・五	〇・四	中山 恵美子	〃四・一・一	一・一	佐藤 公子	〃七・四・一	一・一
野田 とし子	〃三・二・五	〇・六	野田 とし子	〃四・一・一	一・一	佐々木 正徳	〃六・四・一	一・一
上川 博国	〃三・二・五	〇・六	大沼 ひろ子	〃四・一・一	一・一	菊地 弘子	〃六・四・一	一・一
磯崎 靖明	〃三・九・五	一・五	藤田 肇	〃六・六・一	一・一	長谷 倉治	〃九・四・一	一・一
奥田 きの	〃三・二・五	一・六	大沼 つね	〃六・九・一	一・一	有田 徹子	〃九・四・一	一・一
建田 一英	〃三・四・一	一・一	竹中 典子	〃六・四・一	一・一	下村 誠	〃四・一・一	一・一
見上 哲朗	〃三・三・一	〇・三	大江 寛一	〃六・四・一	一・一	陣野 八郎	〃四・一・一	一・一
藤原 吉雄	〃三・三・一	一・中	村 枝	〃六・四・一	一・一	武藏 美尚	〃四・一・一	一・一

歴代PTA会長

代 氏 名	就任年度	代 氏 名	就任年度	代 氏 名	就任年度
初代 田原 唯光	昭和二三・二五	五代 岡 竹松	昭和二三・三四	九代 佐藤 契之助	昭和三九・四〇
二代 伊藤 熊治	〃二六	六代 田原 唯光	〃三四	一〇代 中山 徳藏	〃四一
三代 田坂 唯光	〃二七・三〇	七代 味田 兼一	〃三五・三六	一代 渡瀬 秀雄	〃四二
四代 味田 兼一	〃三一・三二	八代 植村 貞吉	〃三七・三八		

第八項 三和小中学校



政府は終戦後逼迫した食糧難の打開策として未開地および荒廢地の開拓を大いに奨励したが、白滝においてもこうした開拓可能地に道内外よりの入植者が年とともに増加していった。開拓營農に意欲をもやしていた天狗平地区住民は子弟の教育をいかにするかの問題に苦慮しはじめた。このことが村議会においても苦慮しはじめた。その解決策として二つの案が打ち出された。

① 開拓地天狗平に校舎を新築すること

② 奥白滝小学校、東白滝小学校を閉校し上白滝、奥白滝、東白滝、天狗平を通学区とする学校を上白滝に新築すること

しかし①案の天狗平に学校を新築しても、また奥白滝、東白滝両校にしてもいずれも在籍数および在籍予定数少なく、分村以来日の浅い村として

創立・昭和二十五年十一月一日
位設・白滝村字白滝千四百五十四番地

三和小中学校校歌

作詩 大塚 盈
作曲 渡部 一郎

一 明星光る曉の

頂 高し 空の上

すがしくあれよ 三和校

究めよ真 明らかに

二 水上ここを行く水の

流韻はひびく 深き木々

気高くあれよ 三和校

磨けよ心 美しく

三 岩吹く風に堪えながら

命を強く 開く花

雄々しくあれよ 三和校

做せよ己 ゆるぎなく

は各学校の施設拡充をはかるに経済的期待がもてないこと、さらに最大のなやみは単級学校の教育効果の面であり、こうした観点に立つならば②案の上白滝に、いわゆる統合校舎を新築し教育の実をあげることという案に種々論議がかわされ、昭和二十五年六月ついに村民大会を開いて村民の声を聞いた結果、結局第二案支持が大勢を占め統合校舎建設の議が確定した。これにより現在地（上白滝Ⅱ白滝原野千四百五十四番地）一町歩の民地を村で買受け学校敷地とし、昭和二十五年十一月一日村立三和小学校として発足した。時に男子七十五名、女子八十三名計百五十八名、三学級編成であった。校名の起源は、閉校となった奥白滝、東白滝の二校と、新築の構想あったが実現なかった天狗平校の校下住民の和合、團結、発展を祈願して村長はじめ知識人によって「三和」と名付けられた。

昭和二十六年四月一日小学校との併置校ながら村立三和中学校として独立、これまで白滝中学校に通学していた上白滝、奥白滝、東白滝、天狗平方面の生徒はこの日をもって転入学となったのである。この年男子四十三名、女子四十一名計八十四名、二学級編成で授業が開始された。

支湧別中学校が白滝中学校に統合が決定した時点において三和中学校は複式編成となる昭和四十七年度より統合を可とする結論が出ていたが、急速に減少しつつある生徒数によって統合の機運もたかまり、昭和四十五年十月三日の第十一回教育委員会定例会において、三和中学校を廃校し、白滝中学校に統合することに決定され、かくして昭和四十六年三月三十一日をもって三和中学校が廃校され、四月一日より白滝中学校に統合、白滝中学校の新校舎落成まで授業は引きつづき三和小学校において続けられることになった。

三和小中学校在籍，卒業児童生徒数

[illegible]

歷代校長

代	氏	名	就	任	在職年	備	考
初代	水	沢利馬	昭和二五・一	五・〇	小学校		
二代	川村	国雄	二六・五	八・〇	小・中学校		
三代	安村	榮	三四・五	五・一	〃		
四代	佐野	末吉	四〇・四	三・〇	〃		
現代	岩井	周辰	四三・四		〃		

歴代教職員

中 小 別	氏 名	就任年月日	在職年月	中 小 別	氏 名	就任年月日	在職年月
小	水沢 龍子	昭和二五・一二・三一	〇・三	中	南部 良	昭和三〇・四・一	七・〇
小	島田 和夫	二六・二・一	三・一	中	佐藤 修一	二〇・四・一	六・〇
小	藤田 文夫	二五・一・一	九・五	中	大野 知之	三一・四・一	七・〇
中	湯川 善吉	二六・四・一六	四・一〇	中	木村 寛人	三二・四・一	三・〇
小	山利 尚子	二六・四・一六	八・二	小	今村 良治	三三・四・一	七・〇
小	川村 美恵子	二六・五・一六	一一・三	中	斎藤 洋子	三四・四・一	二・〇
中	戸田 正子	二六・六・一	〇・一〇	小	鈴木 真彌	三五・四・一	四・〇
中	田中 宏美	二七・五・一	〇・一〇	中	石出 勝弘	三五・八・一六	五・六
中	川村 郁子	二七・五・一六	〇・八	中	折本 哲子	三六・四・一	三・〇
中	藤原 テル子	二八・四・一	一・〇	中	佐藤 誠子	三六・四・一	六・〇
中	米山 守義	二八・四・一	二・〇	小	四宮 千代子	三七・九・一六	一・一
中	春山 希義	二八・四・一	二・〇	中	宮崎 俊美	三八・四・一	四・〇
小	備前 正明	二八・四・一六	二・〇	小	秋田 陽子	三八・四・一	七・〇
小	野村 秀夫	二八・六・一	二・五	小	庄内 保司	三八・二・一	四・四
中	岸村 隆一	二九・四・一	〇・一〇	中	成田 和子	三九・四・一	四・六
中	川村 隆一	二九・四・一	〇・九	小	木幡 みよ子	三九・四・一	一・〇
小	富塚 康	二九・五・一	六・二	小	新保 伶子	三九・五・一	一・四
中	菊地 仁博	三〇・四・一	一・一〇	小	土井 勝男	三九・一・一	五・七

歴代PTA会長

小大橋	熱	昭和四〇・四・一	中	石垣隆夫	昭和四一・八・一	四・七
中名苗修	治	四〇・四・一	中	庄谷内玲子	四二・四・一	四・〇
中佐藤	徳	四〇・四・一	中	武村裕	四三・三・三一	二・〇
中八代	岑	四一・四・一	小	石川裕	四二・一・一	現在
中川島	幹	四一・四・一	小	五十嵐淳	四四・一〇・一	現在
中愛洲	紀久子	四一・四・一	小	菊	四五・四・一	現在
小石神義春	春	四一・四・一	三・〇			

代	氏	名	期	間
初代	前田	勘治	昭和二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一	
二代	大庭	千代吉	三三、三三、三四、三五	
現代	森谷	吉郎	三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五	

第九項 支湧別私設教授場

いわゆる寺子屋式学校にも等しい教育を行っていた上支湧別私設教授場が、入植者の増加にともなう児童数の増によって大正四年夏支湧別教授場として正式認可がおりたことは既述のとおりであるが、これによって支湧別五線、六線の児童は通字区域の關係で九線教授場まで通うことになった。しかし九線までの道は刈分け道で昼なお薄暗く、子供たちにとって通学は非常に苦勞でもありまた危険性もあった。当時たまたま上支湧別部落より支湧別部落の方が人口も多かった關係もあって、大正五年井村謙二、佐藤平一郎、佐々木三之助らが中心となり

部落一丸となつて支湧別五線にも学校を設置しようとの運動が展開された。かくして学校建設用地を六線の公共用地と決め、同年五月部落民の労力奉仕によつて三十余坪の校舎が完成した。喜びに満ちた部落民はさっそく開校の準備をすすめ、元教員の履歴を持つた行商人久保田を引きとめて先生として迎え入れ、教授場の認可申請のかたわら勉強が始まつた。校名も東白滝教授場とすべく手はずもとのつたが、すでに九線の支湧別教授場が認可になつたあとでもあり、あらゆる手を尽しての運動の甲斐もなくついに公認に至らず廃校となつた。しかし大正六年五月の大山火には各教授場とも灰燼と化した、ひとり五線私設教授場のみ無焼で残りたるはまことに皮肉なものであつた。このため白滝および支湧別教授場の児童は時間帯を定め、校舎再興までの間五線私設教授場を使用した。その後この私設教授場は五線部落公館として改築し、青年指導の場として活用された。

支湧別四線に奈良岡団長として団員を引き連れ入地、支湧別開拓につとめながら五線私設教授場設立に献身努力した井村謙二について、当時（大正六年一月）の北見新聞は次のように紹介している。

「前文略……今や支湧別学校問題のため寝食を忘れ、あくまでその目的を達すべく自ら陣頭に立ち、部落の寄附により完全なる新校舎を新築し、教員を招へいし、命令一下開校を待ちつつあるも位置問題のため未だ完成せず、井村謙二はために認可なければ私立学校を決心しつつあり、又以て意志の人なるかな」。

第十項 青年 学 校

青年学校発足の基は大正十五年四月勅令によつて「青年訓練所令」が公布され、これによつて青年の軍事的教育がなされるようになったが、その対象は十六歳から二十歳までの男子と定められ、この訓練期間四年間で年間二百時間を上回る学科、教練を行なつた。昭和十年四月、時局の進展にともない青年訓練所の機構改革を行ない

これを青年学校と改称、男女青年を対象としてこれまでの青年訓練所以上の厳格な訓練指導が行なわれた。北海道もこれに従って同十年八月青年訓練所千五百十二校、この生徒数およそ五万人、実業補習学校六百六十一校、この生徒数男女合計約三万三千人が解消されて青年学校として衣がえされた。このような経過をたどり昭和十四年四月ついに青年学校への入学が義務制となり、戦時体制の一翼をになうようになった。

白滝青年学校 本村における経緯は大正十五年六月二十一日遠軽、丸瀬布などともに白滝尋常小学校内に白滝を一門とした白滝青年訓練所を併置し、その目的に沿って訓練がはじめられたが、前述の訓練所改革によって当訓練所も昭和十年八月一日をもって白滝青年学校と改称、義務就学制によって設けられた女子部は土地の状況により通年制をしくことは不可能とみて毎年十二月より翌年三月までの冬期間集中的に講義が続行された。

昭和十四年に至り奥白滝方面通学距離遠隔のため奥白滝小学校に女子部支所を設置、さらに翌十五年一月生徒の自然増と遠距離を理由に支湧別青年学校の設置認可があり支湧別尋常小学校に併設された。

昭和十八年四月青年学校は一町村一校の制度と変り、これがため同十八年五月一日支湧別青年学校を統合し、同日付にて支湧別女子部分教場、奥白滝女子部分教場、旧白滝女子部分教場の三女子部分教場を設けたが、昭和二十年一月青年学校規則の一部改正により、女子部も通年制となり、同年五月各分教場は閉校となり白滝青年学校に吸収された。この間数多くの修業生、卒業生を送り出した青年学校も昭和二十二年三月教育基本法の公布によって廃止されたのである。

青年学校の各部の課程および教科等は学則によって左のとおり規定づけられていた。すなわち
男子部……普通科二年、本科五年、研究科一年

女子部……普通科二年、本科三年、研究科一年

科日……修身公民科、普通学科(数学、国語、歴史、地理、音楽)、職業科(農業)、体操科、家事および裁縫

料、教練科

第十一項 白滝技芸専門学校



遠軽町から分村独立した本村は、あらゆる

分野にわたって村発展のため、さらに住民福

祉のため意欲をもやし、和裁洋裁の需要増に

女対処し村内婦女子の生活文化の向上をはかる

を目的として「女塾」の設置を計画、昭和二

十三年七月一日村立白滝文化女塾として市街

地東区に施設を完備して開講、和・洋裁の実

技指導に当った。こえて昭和二十七年五月十

五日「村立白滝文化女塾各種学校」として正

式認可があつて、翌二十八年十二月一日「村立白滝技芸専門学校」と改称、

内容さらに充実せる「まなびや」として躍進したのである。

同校の設立目的および修業年限は次のとおりである。

校 歌

一 天地の 恵をうけて 高原の

あゝ 清らかな 朝ぼらけ

野山の 幸くむ 産業の

愛しの 郷に 女われ

香る心を 捧げなむ

二 遙かなる 雲路の遠方に 雪白く

あゝ 湖北の 山の脈

美徳の 珠玉を 磨きつゝ

仰ぎ いそしむ 学舎に

理想の 光り たゆみなし

三 濃緑の 影もさやかに 湧別の

あゝ 悠久の そのながれ

文化の かがり火 かざしつゝ

希望に 燃えて 朝な夕

われら 氣高き 道ゆかむ

(位 置) 白滝村市街地東区

(設立目的) 和裁洋裁その他婦女子に必要な学芸技能を授け、農村における生活文化の向上をはかるとともに日本女性としての品格を陶冶する。

修業年限

科 別	定 員	修業年限	期 間	摘 要
本科	六十名以内	一年六ヵ月	自 毎年二月一日 至 翌年 四月二〇日	昼 間
専修科	四十名以内	六 ヵ 月	自 毎年 五月 一日 至 同年一〇月二〇日	夜 間
研 究 科	若 下 名	六 ヵ 月	自 毎年 五月 一日 至 翌年 四月二〇日	

また、これまで主として助役が女塾長として兼務していたものが、名称替えを機に教育委員会の所管となり教育長が技芸学校長を兼務することとなった。

夜間同校に通う交通の便全く悪い上支湧別地区の婦女子は、市街地に下宿するか徒歩にて通学しなければならなかった。こうした悩みを解消すべく地域住民の要望をいれ分校の設置を決め、昭和三十年十一月より上支湧別元家庭学校済美館を借り受け「白滝技芸専門学校上支湧別分校」として冬期間、夜間部の設置をみたのである。しかしながら村内唯一のいわゆる花嫁修業学校として将来を期待されていた技芸学校も、

一、生徒数の減少と中学卒業生の進学、就職の高率化
 二、経済成長による衣服生活の高度な移り変り
 三、技芸専門学校にかかわる諸経費の過重化
 等が要因となり、一時は本校、分校合せて在籍数八十名を越えた技芸学校も昭和三十二年をピークとして入学者が激減し、昭和三十五年九月の定例村議会においてこれが廃校を可決、文化女塾として充足以来わずか十二年にして技芸専門学校は同年十一月廃校となったのである。

校長校長	氏 名	就任年月日	身 分	備 考
熟 長	小 出 月 江	昭和二年 七月 一日	村 長	
校 長	三 木 克 己	昭和四年 四月 一日	助 役	
校 長	三 木 克 己	昭和八年 二月 一日	教 育 長	昭和三〇年設置の支湯別分校長兼務
校 長	谷 藤 吉 雄	昭和十一年 一月 一日	教 育 長	分校長兼務、昭和三十五年十一月廃校

第二章 教育委員会

敗戦によって国内のあらゆる制度は根本的な改革が行なわれ、学校教育においても昭和二十二年三月公布の教育基本法および学校教育法の制定によって従来の殻を破り、いわゆる六・三制の学制が昭和二十四年四月から実施されたのであるが、これよりさき昭和二十三年七月十五日教育委員会法が制定され、これまでの一般行政より

独立した自治組織をもち、公正な民意により地方の実情に即した民主主義的な教育行政を行なうものとされた。かくして同二十三年十月十五日に第一回の教育委員会委員の選挙が行なわれ、十一月一日から初の教育委員会が発足したのであるが、この時発足した教育委員会は義務設置の都道府県、五大市のほか全国で二十市十六町九村にすぎなかった。市町村においては二十五年十一月までに設置することとされていたが、法律の改正によってこれが昭和二十七年十一月までと延期された。しかしながら教育委員会の設置単位、委員の選任方法、委員会と教育長との関係、さらには行政、財政面から生じる諸問題等根本的な検討を加えるべきであるという意見が全国的に広がり、文部省においてもこれが修正に本腰を入れ国会に提案されたが、たまたま昭和二十七年八月の第十四回国会は突如解散されたため修正を見ずして義務設置となった。これにより同二十七年十月五日全国一斉に教育委員の選挙が行なわれ、十一月一日より教育委員会の発足となった。

白滝村においてもこの選挙によって奥山吉弥、石山久三郎、小島一郎、本田農の四名が当選し、議会議員のなかから丹羽実市が選任され定数五名の新委員が誕生、委員の互選によって奥山吉弥が教育委員長に、委員長職務代理者には石山久三郎が選ばれ、さらに十一月一日付をもって三木克己助役が教育長兼務で就任したのである。

かくて昭和二十七年、都道府県はもちろんのこと、全国の全市町村に教育委員会が設置されたわけであるが、教育委員会制度に対する改正意見の声さめやらず、こうした世論により第二十四国会において「地方教育行政の組織及び運営に関する法律案」が政府から提出されて衆参両院を通過、昭和三十一年六月三十日法律第百六十二号として公布され、教育委員の公選制が廃止され、法律で規定された条項にもとづき村長が選んで議会の同意を得て村長が任命するという任命制に変わり、昭和三十一年十月一日から現行の教育委員会が発足したのである。任

命制初の委員は中山徳蔵（四年委員）、四方憲誠（三年委員）、熊谷貞雄（二年委員）、的場正夫（一年委員）、谷藤吉雄（四年委員）の五名で、委員長に四方憲誠が、また新法は教育委員の中から教育長を選ぶことになったので、谷藤吉雄が教育長に互選された。

歴代教育長

氏 名	就任年月日	在職年	備 考	氏 名	就任年月日	在職年	備 考
三 木 克 己	昭和三年二月一日	〇・五	助役兼任教育長	谷 藤 吉 雄	昭和三年二月一日	七・七	教育委員
谷 藤 吉 雄	〇・五	教育長事務取扱	井 田 光 一	〇・五	〇・五	〇・五	〇・五
三 木 克 己	〇・五	助役兼任教育長	太 田 実	〇・五	〇・五	〇・五	〇・五

歴代委員

氏 名	区 分	期 間	在職年	備 考
奥 山 吉 弥	公 選	自昭和二年九月一 至昭和二年九月二	一・一〇（委員長）	
石 山 久 三 郎	〃	自昭和二年九月一 至昭和二年九月二	三・一一（委員長）	
小 島 一 郎	〃	自昭和二年九月一 至昭和二年九月二	自二九・一一 至三一・一九（委員長）	
本 田 晨	〃	自昭和二年九月一 至昭和二年九月二	二・五（委員長）	
丹 羽 実 市	議会選出	自昭和二年九月一 至昭和二年九月二	一・八	

近藤古男	前田 きち	田 坂 唯 光	女 屋 三 郎	小 川 保	後 藤 貞 治	熊 谷 貞 雄	的 場 正 夫	中 山 總 藏	西 方 憲 誠	後 藤 貞 治	藤 原 清	布 田 勇	味 戸 兼 一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	任 命	〃	公 選	議 會 選 出	公 選
至自 〃〃 西二 〇六	至自 〃〃 三三 五九	至自 〃〃 三三 五八	至自 〃〃 三三 五四	至自 〃〃 三三 五六	至自 〃〃 三三 三八	至自 〃〃 三三 三一	至自 〃〃 三三 五一	至自 〃〃 三三 四一	至自 〃〃 三三 二一	至自 〃〃 三三 一〇	至自 〃〃 三三 一〇	至自 〃〃 三三 一〇	至自 昭 和 三二 一九
九八 三〇	九〇 三〇	九一 一〇	二〇 一〇	二〇 二四	四五 二二	九〇 三〇	九〇 三〇	九〇 三〇	四〇 五一	九五 三〇	九五 三〇	九五 三〇	九〇 三〇
四・ 二	四・ 〇	三・ 八	〇・ 三	二・ 五	六・ 〇	二・ 〇	四・ 〇	三・ 〇	〇・ 六	一・ 五	一・ 五	一・ 五	二・ 〇
自三八・ 五五	自三八・ 五五	自三五・ 一〇			自三二・ 一一	自三四・ 一一	自三一・ 〇〇	自三二・ 六	(委員長)	(副委員長)			
至三九・ 四	至三九・ 四	至三八・ 九			至三三・ 一四	至三五・ 九	至三二・ 一一	至三四・ 九					
四(委員長職務代理)		九(委員長職務代理)			四(委員長職務代理)		(委員長職務代理)						

小川正春	前田忠治	阿部英雄	井村昭治	後藤貞治	中村友禎	珠戸兼一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	任 命
現自 〃 四五・六・一	現自 〃 四三・一〇・一	現自 〃 四二・一〇・一	現自 〃 四一・一〇・一	至自 〃 四三・九・三〇	至自 〃 三八・五・三〇	至自 〃 三八・二・九〇
				四・〇	七・一	四・〇
自四五・六・一	自四三・五・一	自四三・五・一	自四三・五・一	自四二・一〇・五	自三八・二・五	自四〇・五
至 現	至 現	至 現	至 現	至四三・四(委員長職務代理)	至四〇・四(委員長職務代理)	至四二・九(委員長職務代理)
在(委員長職務代理)	在(委員長職務代理)	在(委員長職務代理)	在(委員長職務代理)	在(委員長職務代理)	在(委員長職務代理)	在(委員長職務代理)

学校給食

児童・生徒の心身の健全な発達に資し、かつ食生活の改善をはかる意味合いからみても学校給食を実施することが文部省の指導方針でもあり、また全国的な流れの中から当村においてもこれが実施も当然思慮中であつたが、財政その他諸般の事情で遅延していたところ、支那別中学校の統合を機に、さらには隣町丸瀬布町との共同経営の基本的な話し合いが成立したので、昭和四十四年度より給食実施の計画に沿って「学校給食についての懇談会」を全村地区別ごとに行ない、積極的な啓蒙をなしつつ住民の理解協力を求めた結果、ついに大方の賛成を得、昭和四十三年十二月二十一日付北海道教育委員会より給食組合設立認可もあり、翌四十四年四月九日より村内全小中学校の完全給食が実現したのである。

施設については丸瀬布町総合豪雪センター内に学校給食センターを付設、「丸瀬布町白滝村学校給食組合」を



学 校 給 食

設立、組合事務所を丸瀬布町に置き、議決機関としての組合議会を設置し給食組合の運営に当たっている。越前丸瀬布町長および国松白滝村長を理事者とし両町村から議員を選出、本村よりの互選組合議員は古関初夫、山崎政治、小山田昌光、森谷吉郎の四名で、給食組合長には丸瀬布町長越前修吉、副組合長には白滝村議会議長の古関初夫がそれぞれその任に当たっている。

また、給食組合議会の下に「学校給食センター運営委員会」を設け、学校給食を適正かつ円滑に行なうことを目的とし、この運営委員会は丸瀬布、白滝両町村の各学校長、連合PTA会長ならびに単位PTA、学校医、学識経験者より選出された者をもって組織され、白滝、丸瀬布両町村合せて三十名以内の定数とされ、給食費の決定、収入支出予算および決算の認定のほか給食の運営に関する事項の審査ならびに調査研究を行なうことを任務とされている。

学校給食の型はパン、ミルク（生乳）、副食（おかず）の三本立てを原則とする完全給食で週五日制を採り、年間二百日供給を基本としている。なお給食費は年額小学生九千四百円、中学生一万八千四百円としてスタートした。学校教育の一環として行なう給食は、

- 一、日常生活における食事について、正しい理解と望ましい習慣を養うこと。
- 二、食生活の合理化、栄養の改善および健康の増進をはかること。
- 三、食糧の生産、配分および消費について正しい理解をはかること。

という三つの目標をもって実施している。給食の配送には専用自動車二台をもって行ない、一台は丸瀬布町を、他の一台は白滝村内を担当し、保温ならびに衛生管理に十分意を注ぎながら行なっている。

丸瀬布町総合豪雪センター内に施設された給食センターは鉄筋コンクリート建、七十坪の面積をもち建設費に約一千四百四十万円を要したが、これはすべて丸瀬布町の負担となっており、設備費については丸瀬布、白滝両町村の対象生徒・児童数に応じて一般会計からの繰出し負担とした。

昭和四十三年度負担額

丸瀬布町 四百十六万二千円

白滝村 二百九十六万八千円

昭和四十四年度負担額

丸瀬布町 五百四十九万円

白滝村 三百二十一万円

ちなみに、本道における学校給食（完全給食、補食、ミルク給食を含む）実施状況は、昭和四十四年度の統計によると、小、中学校総数三千二百三十九校のうち、二千五百九十六校で実施率八三・二％、児童・生徒数では七十九万七千二百二十二人のうち、七十万八千三百五十一人が給食を受けており実施率八八・九％（※数はいずれも『北海道年鑑』による）の多きに及んでおり、いかに学校給食が普及しているかをうかがい知ることができる。

第三章 社会教育

昭和二十年八月敗戦による戦争終結によって戦時中の各種団体はすべて解散を命ぜられ、社会環境もしだいに黒ずんではじめた。本道においてもこうした社会に対処するため昭和二十一年十月社会教育委員を市町村の有識者に委嘱発令を行ない社教活動を展開したが、道庁の社教方針が末端に浸透せず、結局市町村ごとに社会教育委員の設置を義務づけることに改正を行ない、この制度は一期二カ年で消滅してしまった。

本村における道庁よりの社会教育委員委嘱名は小出月江、布田富藏、田坂唯光の三名であった。

昭和二十五年十一月白滝村社会教育委員設置条例を設定し、委員の定数を八名として任期二年と定め、翌二十六年五月徳江保、二見勝治、山崎巖、川村国雄、南政雄、牧野好潤、小島一郎、的場正夫らに委嘱を行ない、社会教育の推進に努めつつ今日に至っている。近年社会教育の実践活動も活発化し、成人学級、婦人学級、成人教室なども開き、明るく楽しい生活をおくるため特に毎年、年度初めに重点目標を樹て事業の遂行に努めている。

昭和四十四年度社会教育重点目標

一、健全な青少年を育てる

イ 愛のよびかけ運動を高める

ロ 青少年をめぐる社会環境浄化運動を高める

二、村をきれいにするため進んで奉仕しよう

イ 明るく美しい環境づくりを進める

ロ 社会に対する奉仕心を高める

三、時間を守ろう

イ 時間の励行をはかる

ロ 合理的な生活習慣を養う

四、ラジオ体操に参加しよう

イ ラジオ体操の普及をはかる

昭和四十六年四月現在、高嶋温厚、橋本芳栄、前田秀之、田中金藏、斎藤好範、野村代志子、丹羽昌子、下佐美智雄らが社会教育委員として委嘱されている。

青年教育

白滝開拓の夜明けは明治四十五年から大正初期にかけて本州方面からの団体による入植によるものが大きい比重を示すが、もちろん団体入植者の陰にかくれてはいるが未開地を求めて単独入植した幾十組かの移住者の労苦も忘却するわけにはゆかない。こうして入植し来たった団体、個人の別なく血気みなぎる若人の姿も数多く見られたが、故郷を遠く離れて原始林におおわれた未開の土地に入り雨の日も風の日も開墾に汗を流し、何一つとして心を慰めるものとなさく、苦勞を承知の入植とはいえ若者たちにとって味気ない灰色の青春でもあった。一日の過激な作業が終えイロリを囲んで食する夕食も、最早贅沢を許されない開拓者にとって「一家団らん」の場とはいえない物淋しさがあった。このような環境にあった青年たちはいつとはなしに友を求め合い、そして語り合うことによって唯一の心の慰めとするようになった。うす暗いランプの下で郷土の将来を語り合い、

イロリの火の消えるのも忘れて真剣なまなざしで語る時こそ明日への、未来へのエネルギーの蓄積ともなったのである。青年会の誕生、実はこうした経緯によって生れたものである。支湧別小学校編『支湧別の生いたち』に当時の支湧別青年会発起人の一人である菊地次郎の寄稿文を次のように載せている。

「前文略……大正四年入植した私は、單身しかも学校出たばかりの十八歳の小僧なので近所の人々からずい分面倒を見てもらった。しかしなんといつても千古のままの原始林のどまん中、夜にもなれば湖の底のような静けさには耐えられない孤独感がおそってきた。こんな時に近所の友だちが来て、共に懐かしい故郷の自慢話等をして淋しさを慰めあったものだ。一人身で誰も気がねのない私の小屋はこんなきつかけから何時とはなしに、七、八人の常連が集まって来て毎夜開拓後の夢をたのしみ合っているうちに、こんどは古本を読みあつたり数学や珠算などをやるものもあり、それが間もなく各自石油箱を持ちよつて机とし、昔の寺子屋式の勉強の形をとるようになった。これには誰が先生とか生徒とかいう意識を持たないごく自然の力の話し合いであった。また、夏ともなれば月夜を利用して私の小景の前で剣道や相撲もやった。……後文略」

このようなことから青年会の誕生がみられたわけであるが、ひとり支湧別のみならず本村各部落においても同じような素因によって青年会が誕生したのである。

本村における青年会の発足は大正四年八月上白滝青年会（会長末松次郎）の結成がはじめとされ、事務所を奥白滝教授場に置き上白滝、奥白滝、奥白滝高台部落一四の十五歳から三十歳までの青年三十余名をもって組織し、青年の修養を目的として補習教育や講話会の開催、銃剣術の修習をしていた。また奥白滝高台（今の天狗平）に居住する青年たちは小学校尋常科卒業後高等小学校は遠軽まで行かなければならず、入植日浅い開拓者にとって距離的に経済的にみて通学や下宿についての学習は不可能に近かったため、天狗平神社拝殿を利用し、奥白滝教授場笠原郡治校長に理解を求め大正十年秋より夜学を開講、夏期は週一晩ないし二晩、冬期は土曜日曜を除く毎

晩、野良仕事を終えたころより高台の青年十二、三名の真剣な勉強が続けられていたが、大正十三年四月白滝尋常小学校に高等科併置となるに及んで、この夜学も中止となった。

上白滝青年団よりわずかにおくれて組織された支湧別青年会は、支湧別教授場開所によって良き指導者を得て大正四年九月に発足（会長菊地次郎）、十五歳以上二十七歳までの青年三十余名が入会、修養の場として補修教育ならびに武術の錬磨につとめつづけた。大正九年、これまで支湧別部落一門を区域としていたものが地域的に広範囲なため、上支湧別青年会と支湧別青年会の二つに分れ、それぞれ目的に沿って発展していった。

かくするうちに今の白滝市街一門とした白滝青年会（大正七年発足、会長三七長一郎）、下白滝、旧白滝部落を包括した旧白滝青年会（大正六年五月）が誕生、いずれも上湧別村連合青年会に所属していたが、大正八年四月遠軽分村によつて遠軽村連合青年団に所屬替えとなった。

いずれの単位青年会においても自発的に創設されたものだけにその発展ぶりはすさまじく、上支湧別青年会においては、大正十三年六月、青年の熱望が部落民の心をも動かし、当時としては北見地方において一、二を争う立派な青年会館の建設をなし遂げ、遠軽村青年団においても称讃的であったといわれる。

上支湧別青年会の会館建設が刺激となつて単位青年会が決議して部落共有の会館が支湧別、上白滝、奥白滝等に大正年間中あいついで建設され、誰に遠慮することもなく夜を徹して青年の語らいが続くこともあった。

青年会活動の中には、学習をはじめとして銃剣術の修得、講演会、弁論会の開催、記念植樹、共同耕作、援農奉仕作業、施設見学旅行、スポーツ大会等行事計画によつて励行されていた。しかし各自開拓営農のかたわらこうした盛りだくさんの行事遂行には、自己を磨き、若きエネルギーによつて豊かな郷土建設を夢みていたからに

ほかならない。

青年会活動の中で、その記念事業の一つとして施行された「カジカの繁殖」は郷土愛の発露として今日われわれの胸をうつものがある。

大正十三年十月上支湧別青年会創立十周年記念事業の一つとして白滝の大障害のため支湧別川上流に繁殖せざる「カジカ」の繁殖をはかることとした。『郷土の生いたち』（昭和三十一年支湧別小学校編）からその一文を引用してみると、

「この計画の中で「カジカ」を殖やそうという計画は大変意義あることでした。現在では支湧別のどの川を見ても「カジカ」（ドンコと呼ばれている）が下白滝の滝から上には一匹もいなかった。十一月五日朝早く集まった青年は、手に手にあみやバケツを下げて下白滝まで歩いて行った。そして滝の下の方で「カジカ」をとったが仲々上手にいかず、裸になって川にとびこんでとる者など大変な騒ぎであった。夕方近くまでかかり百匹あまりの「カジカ」をすくったが、すでに寒い季節なので皆ぶるぶるとふるえ乍ら帰途につく。途中旧白滝十七号附近、幽仙橋の下、布田木工場の止め、通学橋の下、支湧別七線の小川の五カ所に二十匹位ずつ放した。このことはそれまで支湧別川に多くいたイワナ、ヤマベが次第に取りつくされたので、このままでは魚が一匹もいなくなると考え「カジカ」をふやそうではないかということになったのである。またその頃乏しかった食生活を少しでも補おうということであった。これによって支湧別川に「カジカ」が住みはじめたが、しばらくの間は学校に頼んで子供にとらせないようにするとか、毎年川を見て歩き増加してゆく様子を調べるなど、いろいろ苦労をした」。

昭和十二年勃発の日華事変が拡大して長期戦となり、日に増し国内は戦時体制化され、これが青年会の組織の中にも波及、武道の鍛練、戦時訓練等が盛んに行なわれるようになった。このころ本村域内各青年会は青年団と呼ばれるようになり、同時に女子青年団も生まれた。また連合青年による一夜修養会などもこのころから年中行事として執行されるようになった。

昭和十六年一月文部省の方針によって大日本青少年団が発足、各地の青年団はすべて大日本青少年団の所屬となり、すべてこれから出される命令によって行動、運営しなければならなくなり、同十六年四月上支湧別、支湧別青年団を合併した遠軽青年団支湧別分団、上白滝、奥白滝、同高台青年団を合併した遠軽青年団上白滝分団、白滝、旧白滝青年団を一つにした遠軽青年団白滝中央分団の三青年団となし従来の青年団は事実上解散の形となった。こうしていずれも遠軽青年団の組織のもと、戦時訓練に没頭するようになり、いつしか青年団も戦争にまきこまれていった。

昭和二十年八月の終戦によって青少年団は即刻解散を命ぜられて解体したが、戦後の社会的混乱の中から、いかにしてより早く平和な民主国家を再建せしむるか、戦に敗れたりとはいえ祖国を愛する、郷土を愛する素朴な心は失われておらず、こうした心の触れ合いから再び面目を一新した青年団の組織がみられ民主的な運営がなされた。

戦後における青年団の結成状況

団 体 名	創 立 年 月 日	構 成 員 数		代 表 者 名
		男	女	
上白滝青年団	昭和二〇・九・一〇	二二	一四	近藤 敏雄
奥白滝青年団	〃 二一・一・一	二二	一四	五十嵐 巖
共栄青年団	〃 二二・一・一	二二	三	伊藤 鉄男
北支湧別青年団	〃 二二・五・一〇	一一	三	飛沢 克己
		計		
		二四		

上支湧別青年団	昭和二・一〇・一	四四	一五	六九	出立寅雄
旧白滝青年団	〳二・一〇	一七	二一	三八	太黒大吉
支湧別青年団	〳二・四・五	二三	一四	三六	佐久間良一
東望青年団	〳二・七・六	一五	一一	二六	佐藤正一郎
郷愛青年団	〳二・七・二〇	一七	一〇	二七	小野政夫
白滝中央青年団	〳二・四・一	二〇	一二	三二	渡辺清
白滝村連合青年団	〳二・八・一	二〇〇	一三七	三三七	古関初男

昭和二十五年四月網走支庁管内青年団協議会の地方下部組織として斜網、北見、紋別、遠軽の四地区連合会が発足、遠軽地区青年団連合会には遠軽、生田原、湧別、上湧別、若佐、佐呂間、丸瀬布、白滝の八カ町村の青年団がふくまれた。その後昭和二十六年には連合会が協議会と名称が変り、本村の連合青年団も白滝村青年団体協議会と改称し、運営がなされてきたが、昭和二十九年ごろから農村青少年クラブ、あるいは4日クラブなどの結成がみえはじめ、これがため青年団を脱退する者までも統出、核分裂をおこしてしまった。のち昭和三十四年四月一日再び大同団結し、白滝村青少年クラブ連絡協議会として発足した。現在会員二十八名、協議会長森谷正敏が会を統括し、①夏期研修会、②スポーツ大会、③一夜研修会（プロジェクト発表）、④収穫祭、⑤新春研修会、⑥冬期農業講座の各事業計画にのっとり少教精鋭主義で活発な運営が進められている。

婦人会 そもそも婦人団体の組織過程については、宗教団体の中から生れたもの、修養を目的として生れたものと、明治三十七年全国的組織として生れた愛国婦人会などがあった。国を愛し統後の守りを婦人に託す目的

の愛国婦人会であつたが強制加入でもなく、また他の婦人会との複數加入もあえて差支えなかつた。大正八年愛国婦人会遠輕委員部が遠輕村に組織され、白滝は当然その所屬となつたが、開拓と大正六年の大山火の痛手あまりにも大きく、わずか数人の入会にすぎなかつた。昭和七年愛国婦人会とは別に全国組織の大日本国防婦人会が発足、全国に支部を結成させ入会の啓蒙運動を展開していたが、遠輕において昭和十一年二月大日本国防婦人会遠輕分会が組織され、本村も遠輕分会の組織下におかれ、白滝分区、旧白滝分区、上白滝分区、支湧別分区の四分區、合計二百五十名をこえる会員の入会をみた。白カッポウ着、白地に黒字で「大日本国防婦人会」と染めぬかれたタスキを斜めにつけ、日の丸の旗を手に出征兵士を送る姿などはまことに清楚で、その活動ぶりもよく統制がとられていた。

昭和十六年十二月太平洋戦争勃発によつて婦人団体の統合の氣運たかまり、翌十七年春従来の愛国婦人会、国防婦人会、大日本連合婦人会などを解散、これらを合併した大日本婦人会が結成された。これがため全国二千万人を擁したといわれる婦人はすべて政府の監督指揮下におかれ、本土決戦にそなへ竹槍訓練により銃後の守りに従事せしめた。戦雲ただならぬ様相を呈しはじめた昭和二十年六月、国民義勇兵役法公布によつて大日本婦人会は解散、全員が国民義勇隊に統合され、青壮年男子とともに防空頭巾をかぶり軍隊式訓練が徹底して行なわれるようになった。終戦とともにこれらの組織は解散を命ぜられたが、永年銃後奉公を柱に親睦團結を旨とし親しんできた婦人会組織に未練がのこり、戦時中とは全く趣きを異にした婦人会を結成し、教養ならびに知識の向上をはかり、明るい街づくりに一翼をになおうとした。

本村においても昭和二十二年十月会員五百五十名による白滝村婦人会（会長・前本ミツ）の結成を見た。昭和

二十五年ごろより各部落ごとに単位婦人会が生れ、昭和二十八年傘下単位婦人会十団体を統合した白滝村連合婦人会を結成（連合婦人会長・徳江サダ、会員総数三百十名）、網走支庁管内婦人協議会にも加盟していたが、任意団体であるため組織系統に不完全なところがあり、会の活動はやや低調であった。

昭和三十五年網走支庁管内婦人団体連絡協議会と改称されるに及んで、同三十五年四月これまでの連合婦人会を解消して白滝村婦人団体連絡協議会を創立、初代協議会長に谷藤テルが就任、会員九十名で組織活動を強化した。

七 社会文化

第一章 警察

明治二年七月開拓使の設置以來、道路の開削、鉄道の敷設、炭坑の開発、農漁業の發展等により当然のことながら人口が急増したが、こうした反面各種の犯罪が発生し本道の治安はきわめて不安な状態におかれる羽目となった。そのため警察制度を確立して治安維持に万全を期すこととなった。開拓判官杉浦誠の邏卒設置の建議により明治五年六月函館出張開拓使庁内に邏卒掛をおき函館市中の巡邏に当たったが、これ本道におけるいわゆる警察の始まりといえよう。

函館よりややおくれて明治九年九月札幌邏卒屯所の設置を見、以下福山、江差、根室と設置されていった。また開拓使は明治八年十二月他府県より若干おくれて邏卒を巡查と改称、一般に警察官と呼ばれるようになった。こえて明治十年三月札幌、函館、同年七月根室の各屯所が警察署と改称、道内の主要地にはそれぞれ警察分署が設置されたのである。今日われわれが耳にしたり口にしたりする「交番」とは「当番を交代する勤務の拠点」と解され、本来は「交番所」といわれていたが、明治十四年八月開拓使達によって「巡查交番所」が「巡查派出所」となり、さらに明治二十三年四月「巡查駐在所」制度を採用、また明治三十四年六月に至り「巡查部長派出所」

制度が実施された。

明治十九年十二月、時の北海道庁長官岩村通俊は郡区事務と警察事務の一体化など開拓地行政の刷新を断行、郡区長に警察署長を、警部・警部補にも郡区書記を兼任させ、巡査にも一般行政事務を補助させ、戸長役場の中に警察分署が設けられ、かつ警部または警部補が戸長となり警察分署長を兼ねた。こうした行警一体の方針は本道拓殖のいもじるしい進展に迫いつけず、しだいに渋滞する兆候がみられた。このため明治三十年四月道庁官制を改正し郡区長、戸長の署長兼任制を廃止して警察署あるいは分署にはすべて専任の警察官を置くこととし警察官と行政官との分離を行ない、その面目を一新したのである。

北海道北見方面本部遠軽警察署白滝巡查長駐在所

明治十六年二月根室警察署網走分署が新設され、これが網走管内初の警察機関であった。この時紋別郡一門を管轄区域とする巡査派出所が紋別に設置された。同二十年一月網走分署が警察署に、紋別派出所が分署に昇格された。こえて同二十五年湧別巡查駐在所が設置され湧別村一門の治安維持にあたった。湧別巡查駐在所は明治三十四年八月網走警察署湧別分署として昇格をみている。

明治四十年九月遠軽開盛以南を管轄区域とする遠軽巡查駐在所が遠軽市街地に新設され、当然のことながら本村もその管轄下に入ったのである。このころより湧別分署所管内に逐次駐在所が新設されていった。

本村においては明治四十五年以來開拓団体移住が年毎に入り、加えて支湧別方面には造林事業にとまなう人夫等労働者が数多く入ったことなどから治安維持上巡査駐在所設置の声たかまり、遠軽以西最初の巡査駐在所が隣町丸瀬布に先がけて大正四年四月一日白滝二股（現・白滝東区）に設置された。名称は網走警察所湧別分署白滝巡查駐在所と称し、初代駐在所官に宮下周吉巡査が着任、警務、衛生、保安とその任務は幅広であった。駐在所位

代	着任年月日	氏名	備	考
初代駐在所官	大正四・四・一	宮下周吉	巡査駐在所設置	



白滝巡査長駐在所

滝巡査駐在所が巡査部長派出所に昇格されたが、昭和四十三年四月機構改革によって部長派出所が警察官駐在所と名称変更となった。

本村駐在所、派出所等において駐在に当った歴代駐在所官および部長は次のとおりである。

置は設置当初二股市街（今の東区丹治金市付近）宮下の自宅を使用していたが、大正六年五月現中央区永代橋西寄りの地点（今の太田清付近）に新築中白滝大火に見舞われて全焼、位置を現東区永代橋東寄りの地点（今の山崎松雄隣）に移し新築したが、昭和七年十月北線全通なるに及んで南区の現在地に移し二十六坪の駐在所が新設された。

昭和二十九年巡査部長派出所に昇格されたのを機に旧駐在所を取りこわし、同年十二月村費をもって三十・五坪の庁舎兼部長住宅を新築、昭和三十一年十二月道警に移管したのである。

当初網走警察署湧別分署下におかれていた白滝は、大正七年十月紋別分署が警察署に昇格されたためその管轄内になり、さらに大正十五年六月遠軽巡査部長派出所が警察署に昇格しその配下となった。既述のとおり昭和二十九年七月一日白

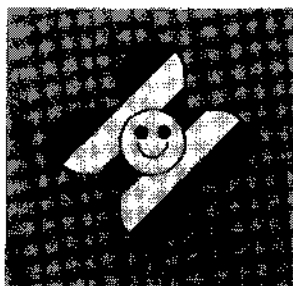
昭和二十二年十二月十七日法律第九十六号をもって警察法が公布制定され、翌二十三年三月から施行されることとなり、国家地方警察と市町村自治体警察がおかれることとなって、明治以来の警察制度が大きく変ったのである。しかしこうした制度は国警と自治警との連絡の不徹底、あるいは弱体町村の財政を圧迫し所期の目的は達せられなかった。そこで昭和二十六年六月警察法の一部を改正、自治体警察存廃は住民投票を行ない、その結果によって決せられたが、住民投票を施行しない町村についても、昭和二十九年六月の警察法再度の改正によって、この年六月三十日限りをもって全面的に廃止されたのである。かくして翌三十年七月一日より道内を一本にまとめた今日の北海道警察が発足したのである。

本村における自治体警察は、人口規定数五千人に満たぬため存置することはなかった。

交通安全宣言 昭和三十七年十月市街地一、〇〇〇戸の舗装が網走開発建設部の手によって施行され、交通上、環境衛生上、益するところ大であった。しかし村内保有の車輛および村外より入り来る車輛の増加にともない、必然的に交通安全の声がしだいに強まってきた。こうした村民の声は村議会においても取りあげられ、昭和四十年九月の定例村議会の席上「交通安全宣言に因する決議」が議決され、同年九月二十日「交通安全宣言の村」と号したのである。

交通安全宣言に関する決議

近時、道路交通の発展伸長にともない、交通事故は年々激増の一途をたどり、いまや国民は日夜事故の恐怖にさらされ、まことに憂慮すべき事態に立ち至っている。



交通安全のシンボルマーク

このときにあたり、われわれ白滝村民は認識を新たにし、交通道徳の高揚と交通事故の絶滅を決意し、明るく平和な郷土白滝村の実現を期することを宣言する。

右決議する。

昭和四十年九月二十日

白滝村議会

昭和四十二年十一月北見方面公安委員会においては交通の安全を確保するため、東区洋厳禅寺入口・西区会館間、白滝市街三叉路（農協前）・白滝橋（白滝温泉入口）間を四〇キスピード制限区間に指定、過疎地帯といえども年毎に増加の傾向にある交通事故の撲滅をはかった。

また、小学校の児童を対象とした野外交通安全指導が白滝小学校校庭において地元警察官指導のもとに昭和四十一年より毎年一回行なわれ、自転車による正しい運転の仕方あるいは正しい歩行の仕方などの指導を行ない、児童の無事故対策をはかっている。

交通安全指導員 昭和四十四年六月の定例村議会において「白滝村交通安全指導員設置条例」を設け、住民の交通安全を保持しもって住民の福祉増進をはかるを目的としている。この条例にもとづいて翌七月一日付をもつて次の五名が交通指導員として任命された。

小沢与之助、古関辰雄、小出光雄、広田亮一、瀬戸勝

昭和四十五年六月交通指導員の部長制をしき、小沢与之助が部長となり、太田克重が新指導員として追加任命された。

少年補導員

太平洋戦争終結以来、いわゆる戦後の混乱と社会情勢の不安定な時代において、国内で発生す

る刑法犯は年毎に発生件数が増していったが、なかでも少年の犯罪が比較的多く、近時各種遊興場の乱立、悪書
の氾濫、女性の軽装化等による社会悪も手伝って少年の犯罪もしいに凶悪化する傾向が出てきた。こうした青
少年犯罪の撲滅をはかり、健全育成を強化し不良化防止を目的として遠軽警察署において少年補導員制度を設け、
管内七カ町村にそれぞれ補導員を委嘱し少年の補導を強化した。本村においても昭和四十一年四月、井村昭二、
中村友禎、谷藤テールらが初めて遠軽警察署長より少年補導員の委嘱をうけ、地元警察官と一体になって巡回補導
を行なっている。

青少年問題協議会

近時青少年の犯罪がますます増加の傾向にあり社会的な問題としてその対策に頭をなや
ましているが、こうした青少年の愚の芽ばえは家庭環境と生活環境にも左右されるものもあり、明るく温かい
社会環境を作り、真に愛情のこもった青少年の保護育成を行ない、健全な社会人を育てることが必要とされてい
る。そこで本村においても昭和三十七年五月青少年問題協議会を結成し、条例を制定して青少年の善導育成を強
力に推進することとした。

昭和四十一年七月同協議会において全十章からなる『白滝村青少年生活信条』を制定し広く周知せしめた。

白滝村青少年生活信条

私は常に気高く、美しいヒヤマと共に白滝村の次の世代になり青少年であることにほこりとよろこびをもち、次の十章
を実行し、強いからだとししい心をもって、明るい未来を築くことに努力します。

- 一 私は、父母を中心に兄弟協力して楽しい家庭をつくります。
- 二 私は、友だちの立場を考え、すすんでよい友だちになります。
- 三 私は、社会や集団生活のきまりをよく守り、奉仕に心がけます。

- 四 私は、常にはほえみをたたえ、明るい気持で人に接します。
- 五 私には、健康なからだと美しい心の持ちぬしになります。
- 六 私は、つつしみを失わず、礼儀を正し、行動に責任を持ちます。
- 七 私は、物をむだにせず、時間を守り、公共物を大切にします。
- 八 私は、計画性のあるくらしをし、反省しながら向上につとめます。
- 九 私は、勤労を尊び、学習に励み、すすんで最善の努力をつくします。
- 十 私は、どんなことにもくじけない強い意志をもって生活します。

昭和四十四年度において広く地域住民の意識の高揚と実践活動の推進にあたるよう村民運動の盛りあがりを促進するため、次のとき具体的運動方針を打ち出した。

一 青少年をめぐる社会環境浄化運動

一 愛のよびかけ運動

その他青少年顕彰、青少年問題講演会、青少年向優良映画の普及など協議会としての体制をととのえた。

昭和四十四年四月任命された協議会委員は次のとおりである。

条例第三案第二項第一号委員 松浦健蔵

条例第三案第二項第二号委員 太田実、田中吉秋

条例第三案第二項第三号委員 橋本芳栄、前田忠治、石崎英一、中村友輔、井内忠男、鈴木猛夫、前田秀之、星久子

遠軽地区防犯協会白滝支部

建設することを目的として昭和三十六年六月村内の区長会議において白滝支部の設立を決定、支部長に村長、副支部長には議会議長が選ばれた。支部の事業は青少年の街頭補導の実施、防犯連絡所の設置等で、その他必要に

応じ活発な防犯体制をとるものとしている。

支部事業の一つである防犯連絡所は昭和三十一年七月に左の各戸を指定し、標示板も取りつけ、交通事故の発生、喧嘩、押売りその他事件発生の連絡所となっている。現在の防犯連絡所は次の十七カ所である。

下白滝・新保國英宅 旧白滝・山崎政治宅 東区・中村友禎宅 東区・松浦健蔵宅
 中央区・小出光男宅 中央区・広田亮一宅 中央区・大沢幾二宅 南区・笹森利雄宅
 南区・小沢与之助宅 西区・植村直治宅 西区・大庭裕二宅 東白滝・今村北勝宅
 奥白滝・大庭千代吉宅 上白滝・前田忠治宅 北支湧別・岩岡平次郎宅 支湧別・渡瀬秀雄宅
 上支湧別・上支湧別郵便局

また、遠軽地区防犯協会の調査による遠軽警察署管内における全刑法犯発生検挙件数は、昭和四十三年九月より翌年八月までの一カ年において実に五百五十件にも及んでいる。このうち本村においてはわずか七件にしかす

区 別	名	遠 軽 警 察 署 管 内	
		白 滝 村	件 数
人 道 火 災	殺 強 放 強	—	1
	凶 悪 犯	—	4
	盗 犯	—	—
	窃 犯	—	1
害 行 迫 喝	盗 犯	2	351
	傷 暴 脅 恐	—	20
	租 暴 犯	—	21
	知 能 犯	—	1
欺 領	詐 横	—	—
	知 能 犯	—	44
	詐 横	—	3
	知 能 犯	—	—
藏 画 火 災 入 揚	物 寄 凶 害	—	1
	物 寄 凶 害	—	2
	物 寄 凶 害	—	14
	物 寄 凶 害	—	6
入 揚	物 寄 凶 害	—	1
	物 寄 凶 害	—	3
	物 寄 凶 害	—	4
	物 寄 凶 害	—	1
(交通事故)	過 失 致 死 (傷)	—	—
	過 失 致 死 (傷)	—	3
	過 失 致 死 (傷)	—	45
	過 失 致 死 (傷)	—	1
其 他	過 失 致 死 (傷)	—	—
	過 失 致 死 (傷)	—	1
	過 失 致 死 (傷)	—	1
	過 失 致 死 (傷)	—	26
計		7	550

(昭和44年8月末現在・前1カ年の計数)

ぎない。

検査状況は前表のごとくである。

防犯水銀灯

昭和三十七年十一月、待望久しい村内初の舗装道路が市街一き路余にわたって完成、この工事に併せて白滝村商工会が中心になって村費助成金、受益者の寄付金等によって市街中央区の道路沿いに「防犯水銀灯」が設置され、明るく環境のよい街ができあがった。

こえて昭和四十年七月東区、南区、西区の全域に前同と同形態のもとに五十五灯の「防犯水銀灯」が架設され、防犯上有効な役割を果たすこととなった。

第二章 消防

消防といえただちに想いおこすものに纏よこがある。纏は「まとめる」すなわち団結を意味するもので、「いろは」四十八組にわかれた組名入りの印半纏しるはんけんを着込み、火災現場において纏を立てる纏持ちはまさに消防の花形であった。江戸の草の代名詞でいわれていた江戸の火事も、火災現場に群がるヤジ馬衆の多勢、あるいは火事につきものであったナワ張り争いもさることながら、勇猛果敢に纏を立てるさまがあまりにも見事であったのでこれを江戸の華と称したものであろう。今日優秀な機動力の進歩によって消火作業が行なわれるに及んで纏の存在は全く姿を消してしまつたが、纏の使命は十分果たされたわけである。

白滝消防組

いずれの開拓地も火入れが多かったように、本村の開拓人植者も融雪を待つて、一斉に開拓地の



白滝消防本部（昭和26年）

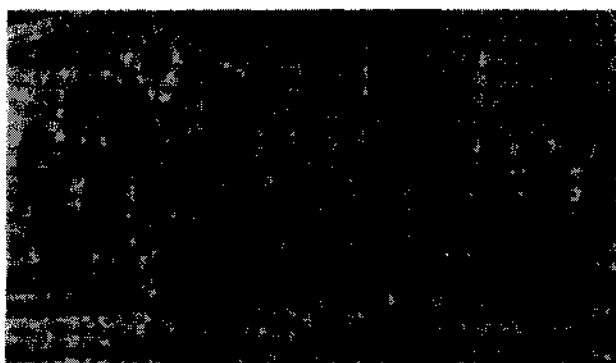
街に置き、下村正一郎を組頭に推薦し御下賜金にて購入した腕用ポンプ一台を配備し、同時に腕用班、火先班、警護班、救護班に編成を行なった。

大正七年九月十五日発行の『北見時報』に白滝消防組発会式の様子が次のように載っている。

「大正七年八月二十六日白滝消防組発会式を挙行す、湧別分署長、遠軽駐在巡查部長、村長代理、宮下白滝駐在巡查及各有志の臨席あり、消防組員

火入れ作業が行なわれた。網走支庁においてはこれら開拓者に対しては火入れ注意事項を厳守させる指導はしていたものの、開拓に意気旺盛な開拓者は多少の風をものともせず火入れを続行していたが、ついに大正六年五月に至り未曾有の大火となつてしまった。も

とより消防組があつたわけではなく消火態勢も不慣れなため強風とあいまって白滝一町火の海と化してしまった。こうした恐ろしい体験と大火による御下賜金のあつたことなどから消防組織の必要性を痛感、大正七年五月上湧別村白滝公立消防組を設置、本部を二股市



白滝消防組（大正7年）

検閲後、下村組頭指揮の許に各個教練あり、終つて堀田小頭の号令の許にポンプ操練あり、小憩、仮装演習あり終つて昼食後発会式場に参集す。山口署長の訓示演説、村長代理、松本巡查部長、宮下巡査の演説あり、終つて植芝上湧別村議會議員、佐藤白滝部落部長、久保消防後援会長の祝詞朗読あり最後に下村組頭の挨拶ありて閉会す。当時の白滝消防組の消防区域は丸瀬布が未組織であつたため丸瀬布金山橋以南石北峠までのきわめて広大なものであつた。

白滝消防組設置当時の上湧別全村の消防組の状況は次のとき記録が残っている。

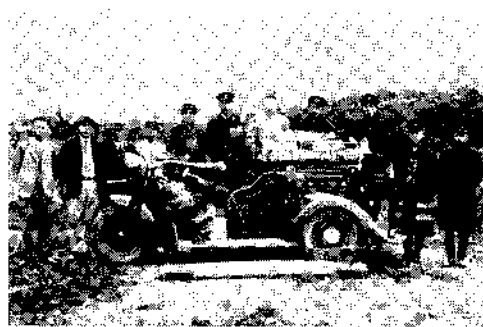
組名	部名	編成区域	組頭	部長	小頭	消防手	創立年月
上湧別消防組	第一部	南兵村三区一門	—	—	三	三〇	明治四一・一
	第二部	北兵村一区一門		—	三	三〇	大正三
	第三部	竜川市街地一門		—	三	二六	大正六・五
	第四部	北兵村二区一門		—	三	三〇	大正七・五
	第五部	南兵村二区一門		—	三	二七	大正七・五
	第六部	南兵村一区一門		—	三	二七	大正七・五
遠軽消防組		社名濁川以南	—	—	三	三三	大正六・五
上生川原消防組		下生川原以南	—	—	三	三三	大正六・五
白滝消防組		丸瀬布金山橋以南	—	—	三	三〇	大正七・五

大正七年岩城組頭の代になって二股市街に警鐘台（火の見やぐら）を建立、有事の場合には警鐘を乱打して火災を周知せしめた。

石北線の一部開通によって白滝駅舎を中心にして市街地の構成が変動したため、昭和五年本部を市街中央部に移転、同時に腕用ポンプ一台を購入して第二腕用ポンプ班を編成、昭和八年四月に至り警鐘台も移転新築を行ない、この年より初めて出初式にハシゴ登りが始められた。

昭和十一年遠軽町費の助成を仰ぎ白滝住民よりの寄付金とあわせて、グフォードV8三輪自動車（ホース十五本付き）を三千六百円にて購入、消火に威力を発揮することとなった。

昭和十二年勃発の日華事変によって国内の機構が戦時体制へと移行、軍の指揮による防護団が組織され、さらに昭和十四年一月二十四日（勅令第二十号）「警防団令」の公布によって各消防組は防護団と合体して警防団として発足したわけである。この年四月遠軽、瀬戸瀬、丸瀬布、白滝の各消防組を合併して遠軽町警防団を創設、遠軽を第一分団、瀬戸瀬を第二分団、丸瀬布を第三分団、白滝を第四分団と呼称、第四分団長に布田富蔵が就任した。警防団の任務は消防活動はもとより警報、防衛、救護の各分野にわたっていた。警防団の発足と同時に防空監視網の充実策がとられ、同十四年奥白滝駅前に遠軽町立奥白滝監視所が建てられ（土地は大庭千代吉の貸与による）、大庭千代吉、石山久三郎ら数人の監視員が無報酬で遠軽警防団の指示によって交替制で監視台に登り敵機来襲の監視をつづけていたが、昭和十六



白滝初の三輪消防自動車

年より終戦に至るまでの間は奥白滝駅員によって監視がつづけられていた。

大東亜戦争の終結によって従来の国内のあらゆる制度に大改変をみたわけであるが、消防制度においてもこれが改革がなされ、終戦後もつづいていた警防団組織も昭和二十二年四月消防法の制定によって全国一斉に消防団と改称された。消防制度の特色は、消防を警察から完全に分離独立させ地方自治の体制をとったことである。

昭和二十一年八月遠軽町より分村した白滝は独自に白滝村警防団を編成したが、消防法の公布によって翌二十二年七月白滝村消防委員会を設け、団の構成、維持運用についての協議がなされ、委員には村議会議員の中から井村謙二、本田晨、前田勘治の三名、学識経験者の中から吉田美代治、植村貞吉、石山久三郎の三名計六名で構成されていた。翌二十三年八月従来の警防団が白滝消防団と改称されたが、これと同時に消防委員会は廃止された。消防団長には野沢正市を選び本部を白滝におき、さらに分団を設け第一分団白滝、第二分団支湧別、第三分団奥白滝と編成し、四輪自動車ポンプを購入しこれを第一分団に、三輪自動車ポンプを第二分団に、腕用ポンプを第三分団にそれぞれ配備し、弱体ながら住民の不安を少しでも安定するようつとめた。

昭和二十六年消防本部建築用地として役場庁舎前の民有地を買得、この地に本部の新築がなされた。

昭和三十七年四月白滝村火災予防条例を制定、事故撲滅に万全を期するよう細部にわたって規定したが、おもなる点は次のようなものである。

- 一 公衆の出入する場所を指定した。
- 一 火を使用する設備の位置、構造、管理の基準を定めた。
- 一 法で定める数量未満の危険物などの貯蔵と取扱いの基準を定めた。
- 一 消防用設備（消火器具、消火栓、避難器具など）を施設する基準を定めた。

一 火災に関する警報発令中の火の使用制限を定めた。

昭和三十九年四月第一分団第二部（上白滝）と第三分団との統合にともない結団式が行なわれ、第三分団の主体をこれまでの奥白滝から上白滝に移した。

昭和三十九年六月の定例村議会において、消防団員の退職報奨金等の支給制度が可決され、四月一日からさかのぼって次表のごとき支給額によって運用されることとなった。

消防団員退職報奨金支給額

附 級	勤 務 年 限		
	二十五年以上	二十五年未満	二十五年以上
団 長	五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇	七〇、〇〇〇
副 団 長	四〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	六〇、〇〇〇
分団長、部長および班長	三五、〇〇〇	四五、〇〇〇	五五、〇〇〇
団 員	三〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇

昭和三十九年七月消防本部横に待望の望楼を新設、望楼は鉄骨製で高さ一五層、上部四層見張台が備えられ、滑中付きホース掛と三馬力のサイレンも付設され、市街地にひときわ高くその威容をほこっている。

昭和四十年十月遠軽信用金庫より森田式TF型消防ポンプ自動車一輛の寄贈があり、これを「信金号」と命名し第一分団に配備、ますます消火作業に威力が発揮されることとなった。



第6回遠軽地方支部管内連合消防演習

昭和四十三年八月、山間、沼地に強い百二十馬力ニッサンパトロール、四十三年型F G 60型一台を購入、第一分団に配属し消防力の充実をはかった。

各分団における配車状況は次のとおりとなっている。

分 団	車 種	購 入 年 度
第一分団	ニッサンパトロール・四十三年型F G 六〇型自動車ポンプ 信金号・トヨタ森田式T F 型自動車ポンプ 可搬式消防ポンプ・ラビット 可搬式消防ポンプ・トールハツ	昭和四十三年八月 昭和四十年十月（寄贈） 昭和三十九年七月 昭和三十六年八月
第二分団	2 F Q 型十年式六二型自動車ポンプ 可搬式消防ポンプ	昭和三十六年九月 昭和三十七年十一月
第三分団	ニッサンウニボンキャリヤ五六型自動車ポンプ 可搬式消防ポンプ・トールハツ 可搬式消防ポンプ・芝浦（奥白滝配飾）	昭和四十一年十月 昭和三十六年十一月 昭和四十年五月

本村の消防団員の定員は八十五名としているが、あいつぐ過疎化によって相当の欠員が生じている。消防団の現有メンバーは次のとおりとなっている。

なお、消防組時代より現在に至る歴代組頭、警防団長、消防団長をかかげると次のとおり。

合 計	小計	白 滝 消 防 団 本 部										
	四名	消防団長 布 田 勇 副 団 長 前 本 栄 一 本 部 長 井 村 昭 治 本 部 付 匠 長										
	三名	第三分団		第二分団		第 一 分 団			区分			
		近藤 敏雄		中山 安徳		高松 次男			分団長名			
	一名					小沢亨之助			副分団長名			
	五名	消 防		消 防		消 火 栓		警 護		消 防		部 長 名
		阿部 克己		阿部 英雄		金枝 一夫		岩城 義雄		谷 昭吾		
	一〇名	機 械 班 長		機 械 班 長		警 護 班 長		小型ポンプ車班長		信金号ポンプ車班長		班 長
		小型機械班長		機 械 班 長		機 械 班 長		バトロール班長		消 火 栓 班 長		
	(定員八五名 欠員二名)		五〇名		一〇名		一四名		二六名		団 員 数	

(昭和 45 年 10 月現在)

歴代	役職名	氏名	就任年月日	在職期間	備考
一	消防組頭	下村正一郎	大正七・五		
二	〃	十河忠衛	昭和七・六・六	二〇年	
三	〃	岩城近蔵	九・五・一〇	三五年	昭和十四年一月遠軽消防団白滝第四分団となる
四	〃	加藤角三郎	一一・九	二八年	
五	警防分団長	有田富蔵	一一・九	二八年	
六	〃	前本米蔵	一五・四	二二年	
七	〃	瀬川孝造	一七・二	〇六年	
八	警防団長	佐藤正市	一七・八	四〇年	昭和二十二年八月消防団と改称さる
九	警防団長	野沢正市	一一・八	二四年	
一〇	消防団長	佐藤正市	一一・二・二〇	一二年	
一一	〃	佐藤正市	一一・二・二〇	一五年	
一二	〃	中山親孝	二五・二・三	一五年	
一三	〃	岸浦吉勇	二六・七・一	五九年	
一四	〃	布田勇	三二・四・一		現在に至る

消防後援会

大正七年五月白滝消防組設置後まもなく消防施設への援助、災害出動時における消防組員に對

する慰勞接待等消防組織の發展を願つて後援会が白滝部落有志の出でまとめられ、後援会長に久保精太郎が推され、ついで金清助、松本幸次郎、伊藤恂、十河忠衛と代つたが、さしたる活動もないまま時が過ぎた。

消防組の本部が市街中央部に移転新築された昭和五年、腕用ポンプも二台になり、消防組織の發展を願つてこの年白滝消防組後援会が市街地有志によつて結成され、会長に井村謙二が選ばれ爾來幾人かの更迭があつたが、

昭和二十三年八月白滝村消防団としての独立一周年を記念して従来の後援会を発展的に解消、全住民が会員に加ふる全村的な消防後援会として組織変えがなされ、分団ごとに後援会ができ、さらに連合後援会も結成された。第一分団後援会長および連合会長に西尾博文、第二分団後援会長に渡瀬春一、第三分団後援会長に大庭千代吉がそれぞれ選ばれ、会員ともども陰の力となって消防事業に尽力している。

現在連合会長兼第一分団後援会長に南政男、第二分団後援会長に平野嘉次、第三分団前田忠治がその任に当たっている。

火災予防組合 昭和二年遠軽・丸瀬布間鉄道開通し、引きつづき白滝に向って鉄道敷設工事が進められているころ、しだいに増加する市街戸数の火災予防体制を整えるため、この年「白滝火災予防組合」が誕生、初代組合長に松本幸次郎が選ばれた。火災のシーズンには消防組と協力し各戸の火防検査を厳重に行ない火災予防の万全をはかってきた。昭和二十二年四月これまでの火災予防組合を発展的に解消し「火防衛生組合」として再発足、火防検査は消防団に一任し、主として火災期には各区ごとに夜警番をおいて午後十時から区域内の巡回を行ってきたが、昭和三十六年防犯協会の新発足によって「火災」の事業は防犯協会にゆだねる形となった。こうしたことから昭和四十一年四月火防衛生組合から「衛生組合」が独立し、火防の仕事は消防後援会に包括したのである。

白滝自警組合 終戦直後さまざまな社会悪が環境をみだし、青少年の犯罪もこうした環境の中で悪果をつくり、不良、チンピラの横行は社会を不安におとしめるものでもあった。

本村においては市街地に街路灯を建設し、街の美化と犯罪防止を合せ兼ねた意見が市街有志のあいだから持ち

上り、昭和二十三年七月市街中央区および東区、南区の一部に地域住民の寄付により木柱の街路灯が建設された。同時に街路灯にかかわる電気料徴収に苦慮しはじめたが、自警組合を結成し街灯費の徴収と防犯に対する協力を行なった。初代組合長にこの組合の発案者中山親孝が選ばれ、のち古田美代治にと代ったが、昭和二十六年火防衛生組合に吸収され自警組合は解散となった。

第三章 災 害

大正六年の『白滝大火』 木村の開拓に心血を注いだ人たちにとって永久に忘れ去ることのできないものの一つに大正六年の大火がある。今を去る五十有余年前の遠い昔となつてはいるが、その脳裡には歴然として焼きつき、往時を想い起こすだけに慄然たるものがある。

白滝神社の宝物として残っている神社記録を綴った巻軸の中に、左のごとき「白滝ノ大火ノ称」が記されている。

『白滝ノ大火ノ称』

「大正六年五月二十三日国境附近ヨリ山火起リ午前九時頃ヨリ西南ノ風強ク土砂ヲ飛シ、風ト共ニ火ノ海トナリ、四・五丁モ先ニ飛移ル火勢ハ実ニ慘憺タリ、其シガ爲、上白滝市街除ク外、白滝原野家屋草木全ク焼失シ悉ク焦土ニ帰セリ、本道及ビ内地各県ヨリ義捐金ヲ贈ラルル、村ノ補助及ビ陛下賜金等アリテ、貧民漸ク飢エ凌グ、是レヲ白滝ノ大火ト称ス」

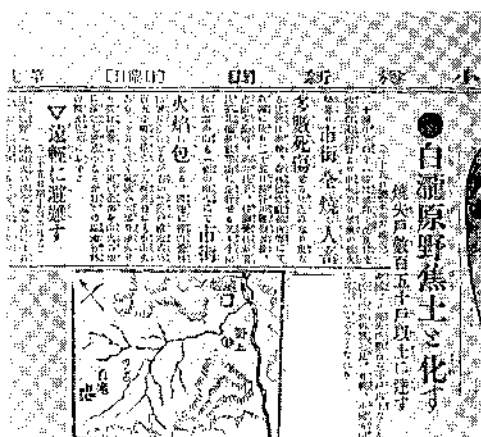
明治末期より道内あるいは本州各県から未開の地白滝に移住し来たれるもの年とともに増加し、白滝中央は市街地としての形成もようやくとのいつつあり、一方上白滝、支那別方面に散在入植した開拓者も密生する立木

を倒しわずかの空地を求めては鎌をふるい、土着の心意気にもえ、火入れを行なつては開墾に励み、徐々に拓けゆく己が畑を見つめては明日への励みとして生きていた。

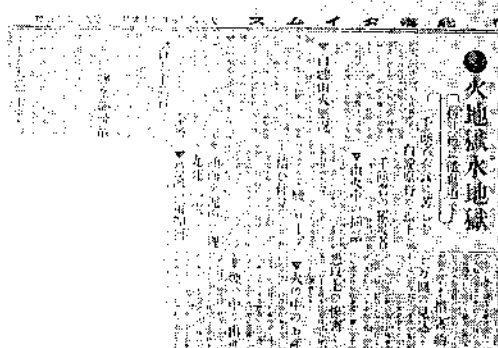
この年、すなわち大正六年、氷い冬の限りからさめた高原の地白滝原野一帯にも春が訪れ、開拓者たちは戸毎に例年のごとく開墾火入れをはじめた。末木（うすき）と称する伐木の技梢を焼き、笹（さ）を焼き払い、延焼に最善の注意をほらいつつ火入れ作業が続けられた。

大火となる……大正六年五月二十三日の朝は無気味なほど真つ赤な朝焼からはじまった。連日の好天続きで開拓者たちは新たに火入れを行なうもの、昨日行なつた火入れのつづきを行なうもの、火入れ跡地にさっそく鎌を入れるもの等それぞれに仕事をはじめたが、午前八時ごろになって東の空が曇りはじめ、火入れ中の開拓者は過去の経験から風来るを察知し急ぎ消火にかかった。まもなく西北の強い風が吹きはじめ、時をまたず風速三五、六層もあろうかと思われる烈風となつてしまった。山々はうなりを發し、畑の土を空に巻き上げ、細石を吹き飛ばし、外にいても家にいてもまことに危険きわまりない状態で、人々はただ家の中にあつて恐れおののくばかりであつた。異常乾燥のなか、こうした風によつて不完全消火の残り火が「ふいご」にかけられたごとく再燃しはじめ、上支湧別および奥白滝方面より火の手が上がり、各所の残り火と合し西北の猛風にのつてたちまちに上支湧別、奥白滝は火の海と化し、瞬時にして支湧別、上白滝、そして白滝市街をも嘗め尽し、さらに火は旧白滝山間部に入り南丸瀬布にて下火となつた。

開拓の鎌がおろされていまだ数年足らず、まだまだ白滝原野の山々は千古の原始林におおわれていたが、なかでも松の太木の燃えるさまはこのほか物凄く、うなりを立てて火柱となり、もうもうたる黒煙は天をおおい、



当時の小樽新聞



当時の北海タイムス

林もやぶも、家も、畑も、そして上までをも焼きつくす火勢に、家財道具を持ち運び逃げるとまとてなく、煙にむせびながら子供を抱え火のない方へ逃げる人、水を求めて川に飛び込む人、逃げおくれで濡れムシロをかぶる人等悲鳴をあげつつ右往左往する姿は、この世のものとは思われない生き地獄であった。

大正六年五月三十日付『北海タイムス』には当時のもようを「……消防の手段なく猛火の延焼にまかせしかば火焰炎々天に沖し、紅蓮地を馳せ山野は全く火の海と化し、火の粉四散して衣類に燃え移り黒煙もうもう咫尺を弁ぜず、避難するにも方向判らず、中には一家族腰にロープを結びつけ火煙の中を手探ぐりに逃げ行くうち、一つの湿地に這ひ込み全身に泥水をすくひかけ避難中火勢は漸次身辺に迫り、衣類は忽ち乾燥して所々に燃えつき、子女は父母に苦痛を訴へるも父母すでに全身火煙に包まれ泥水中にノタ打ち狂ひ、他をかへりみるの余地なく、互に顔面を

泥中に埋めしに猛火は此の一家の頭上をなめ頭髮皆黒こげとなり、背部臀部に火傷し、實際に焦熱地獄の苦しみをなし漸く一命を取り止めしもあり亦、一方には母親一人にて九人の子供の手を曳き火煙中に助けを叫ぶあり、中には背負ひし子供が煙にむせび窒息死亡せるあり、実に慘状目もあてられざるもの多々ある……」と報じている。

こうして地獄絵きながらの様相を呈した大山火によって旧白滝方面を除く白滝全城総戸数の八割強にも及ぶ二百五十余戸を烏有に帰し、焼死者三、重軽傷者二十五名余を含め、一千百余名の罹災者を出し、播種せし耕地は上土三畝余を吹き飛ばし、かつ土をも焼いたため種子ごとく全滅、被害面積三百四十五町歩に及んだ。また多少の余裕あつて衣類米麦その他を土中に埋めたものはほとんど蒸し焼きとなり、全村全滅に等しい名状すべからざる慘状であつた。

被害状況………焼失物件の主たるものは、白滝、支湧別、上白滝の各特別教授場、巡査駐在所、森林監守駐在所、神社（祭神所）五、寺院（説教所）三、上場七、旅館二、料理店五、商店八、浴場一、その他原木およそ二

万石および中央道路（現・主要道道遠軽・上川線）沿いの電柱約四十本ほどが灰となつた。

大正六年五月三十一日の小樽新聞に部落別焼失戸数を上表のように報じている。

この大火当時奥白滝に入植していた大庭千

部落別	焼失戸数	日	焼失時間
白滝市街	八六戸	五月二十三日	自午前十一時～至午後四時
支湧別	四二戸	〃	自午前十時～至午後三時
上白滝	三一戸	〃	自午前十一時～至午後二時
奥白滝	六六戸	〃	自午前九時～至午後二時
計	二五五戸		

代古は当時のもようを

「五月二十三日朝九時ごろ突然突風のような強い風が出てきたため火入れ中の消火作業も間に合わず、方々で火が舞い上った。風は言語に絶するほど物凄く、小石が飛び、手に砂を握って顔をめがけて、いきなり投げつけられる時のような物凄さであった。あつというまに火は家屋、原野、山林をなめつくし、午後二時ごろには何事もなかったように風は静まった。家屋などの焼け跡は強風のためホウキできれいに掃かれたごとくになっていた。私の家ではストーブで鍋にてごはんを焚いていた時、延焼のため家が焼け、風のため屋根は火の主となって飛び散り、ストーブの上のごはん鍋までも吹き飛ばされ遙か遠くころがっていた。全く生きた心地はしませんでした。」

と述懐してくれた。

鎮火……開拓いまだ口の浅い片田舎の大半を灰燼に帰し、損害およそ三十万円余にも及んだ大火も、五月二十三日夕刻には旧白滝の開墾地が防火線となり、一部は下白滝、丸瀬布、武利方面の林野に若干延焼したもの、火勢全く衰え、翌二十四日夕刻の降雨によって完全に鎮火した。

焼け出された罹災民は避難所より戻ってみると、そこには一物もなく、広々と燃え果てた原野に立ちすくみ、ただ茫然とするばかりであった。

当時の『北海タイムス』には「尅千余名饑渴に迫り吹飛ばされし種いもを拾い争うて食う有様にて、殊に頭足なき小供達が餓に泣き、夜間の冷風に叫ぶさまは何人と雖も同情一掬の涙なき者なく遠軽市街よりは救護事務所を設け、白滝市街の焼け跡にて盛んに炊き出しをなし、一時の急を救ひをるも何分尅千余名の多数の事とて充分に行き届かず饑寒は口を追うて切迫す……」とあり、農具・種子、小屋掛けの救助を要するもの五十二戸、農具・種子の救助を要するもの二十八戸、小屋掛け料の救助を要するもの二戸、農具のみ救助を要するもの一戸、計八

白滝・山火予防の歌

作詩 上原 尚 一

一 過ぐる 大正六年に

桜ほころぶ 五月頃

白滝襲う 大火事に

平和の里の 夢破る

二 猛火 頭上のその中を

親は子供の 手を取りて

子はおののきて すがりつき

行く手も知らず 逃げまどう

三 あの恐ろしき 山火事は

わずか煙草の 吸いながらや

焚き火の跡や 悪さより

起るぞ知れや 人々よ

十三戸が困窮家庭となり、それぞれ応分の救済方法が講じられた。

白滝大火に対し皇室より金一封の救恤御下賜金があり、このことが契機となって消防組が組織され、御下賜金の一部にて消防用腕用ポンプ一台を購入配備したのである。

また、皮肉なことに天をも焦がす大火によって未開の原野がそして山林が焼き尽され、見渡す限りの焼け野原となったがために白滝の開拓が意外に早く進捗したといえよう。

この惘然たる大山大火がいかに住民をして恐怖の谷間に陥らしめたか、この大火がおさまっていいいよ復興の槌音が高らかに白滝中に響き渡りはじめたころ、別記のような『山火予防の歌』が作られ、山火予防に役かつたのである。

山火追い打ち……白滝大火の鎮火後人々の心もまだ当時の恐怖からさめやらぬ六月八日朝、前回の火災に難を免れた奥白滝四十三号線付近より火入れ中の火が強風によっておおられ、東方に向って延焼、およそ五〇㍎ほどの山林、原野および民家一戸を焼失、前回の焼失地帯が防火線となり同日夕

刻鎮火した。この兩二回にわたる山火によって旧白滝ホロカ沢人口より以西の白滝原野はほとんど余さず被災したこととなった。

主な災害

本村域内における災害のおもなものをあげると、

・昭和五年九月二十三日午後九時ごろ、白滝市街地（南区）白滝劇場映写室付近から出火、ただちに消火につとめ「ボヤ」程度で消し止めることができたが、この事故で観客が先を争うて出口に殺到したため、観客の一人武田スエ（四十一歳）が踏み倒され、心臓麻痺を併発し死亡した。

・昭和八年八月十二日午後十一時ごろ、市街地（南区）浮世亭支店朝日屋と奥原飲食店の間付近から出火、家屋の密集と手押しポンプ二台の幼稚な消防力に手の施しようもなく隣接家屋の浮世亭、奥原飲食店、棚橋重利、日通、広田寛治と木炭店、中村金物店、西出、藤門、石井、日雇者独身寮の十棟十一戸を全焼。出火原因が不審火であり査として不明のまま迷宮入りが伝えられたが、昭和十年十一月九日前回の放火で保険金を詐取し、これに味をしめた犯人は再び自宅近くの十河忠衛商店物置の外板に放火中を白滝駅員に発見され、放火未遂事件として現場において犯人（中村金物店主）は逮捕されたが、取調べ中昭和八年八月の不審火は放火であることを自供した。

・昭和十三年五月十五日、天狗平開拓地の火入れの火がもれて山火事となり、西北の風にあおられ火はたちまち支湧別五線沢一带およそ二百五十町歩をなめつくれた。この山火事で古越六郎、伊東直勝、五線沢開拓合宿所、北山勘兵衛、清水好雄、飛島義雄、溝淵留一の七戸が全焼した。

・昭和二十七年九月五日、上支湧別渡瀬木工場機関室から出火全焼し、まもなく再建したが、昭和三十九年三月

三十日再び全焼してしまった。

・昭和三十年四月四日、白滝市街中央遠藤幸治方茶の間付近から出火、発火時から強風のため付近一帯を焼失してしまった。焼失家屋はマーケット一棟を含む次の七棟十戸に及んだ。岡崎儀蔵、西尾博文、河合一千、小林長吉、大友武、遠藤幸治、マーケット（松浦健蔵、金野義雄、柳田政男、永井）。

・昭和三十二年二月、白滝駅前、美好旅館（岸浦吉経営）から出火、二階建総建坪百坪余（三三〇平方呎）を全焼したが幸い人命の被害は全くなかった。

・昭和三十四年六月十二日未明、白滝市街南区、岸浦吉経営の木工場機械室付近から出火、工場八十坪（二六四平方呎）、ほかに製材置場三千坪余（一〇〇平方呎余）を全焼した。出火原因はモーターの過熱と断定された。

・昭和三十九年十一月十六日、市街東区池田長七方仏間付近から失火、木造家屋一棟を瞬時にして焼失、この火災で長七の弟池田昭七の長女章子（一歳）が不幸にも焼死した。

・昭和四十三年六月三日正午ごろ、白滝西区旭台にある白滝神社社務所から出火、高台地のため通報がおくれ木造平屋の本殿、社務所などおよそ一〇〇平方呎を全焼した。

水 害

大正十一年の大水害……大正十一年八月二十二日より降り続いた雨は小やみなく降り続き二十五日迄つてようやく小降りとなったが、道内全域にわたって非常な災害をもたらした。被災町村は百三十四町村に及び、家屋の浸水、流失二万二千三百余戸、田畑の冠水、流失九三、四〇〇畝、その他道路、橋梁の被害等総額実に二千七百十五万円余に達し、百三十五名という多数の死傷者を出すなど悲惨なものであったと当時の記録が物語っている。

る。

本村においても湧別川、支湧別川が一部氾濫し、収穫期に入っていた小麦、青豌豆は全滅に等しい被害を被った。幸い死傷者は出なかったが幽仙橋が一部決壊、その他木造の小規模橋はいたるところで流失した。

『瀬戸瀬郷土誌』（昭和四年刊）は当時の様子を次のように綴っている。

「……八月二十四日のその夜の雨は、全く咫尺を介せざる程の暗闇をついて、小止みもなく降ってゐた。猛雨と云ふか、激雨と云ふか、正に盆を覆したやうな雨であつた。そして不安な一夜が刻々と深まって行つた。翌二十五日夜来の激雨は幾分小降りになってゐいたが、未明既に湧別川は未曾有の大氾濫を来してゐた。十分間に一尺の割合で増水したという激流は、異端の大うねりを打って、兩岸の堤防林を掃倒してゐた。見る眼の前を根こそぎになった大木が、立ったまま流れ、しばらくにして水煙りを上げて倒れた。

橋材が流れて来た。真新しい柳行李が、そしてタタミが流れて来た。戸障子や炭俵や箆や桶やその他の家具類が流れて来た。それ等は上流各部落の悲惨な被害を物語るものでなくこんなであらう……」

当時のことを回顧してくれた丹野清七は「雨の降りははじめたころ、私のところに召集令状がきて、九月一日仙台入隊と決められていたので八月二十五日豪雨の中、わが家を出発、遠軽から名寄回りの汽車に乗ろうと、幾カ所となく流された橋を言語に絶する悪路に足をとられながら歩きつづけやつの思いで遠軽に着いてみれば汽車は不通、詮方なく雨の中を引き返し、休む暇もなく北見峠を越え上川、愛別を抜け比布駅までの泥路強行軍も、再び比布・永山間列車不通を知り、永山まで足をのぼして乗車、入隊が二日も遅れるというおまけまでつき、まことにひどい雨であつた」と身を凍めて語ってくれた。

昭和三十七年の水害……昭和三十七年台風九号のもたらした雨は全道を襲い、八月三日から三日間にわたつ

て降り続け、本村においても近年まれに見る被害を被った。すなわち橋梁の流失四カ所、道路の決潰七路線、さらに畑の流失、埋没、冠水、浸水など合計三五〇畝におよび、これら被害総額およそ四千万円余と記録された。

十五号台風による災害

昭和二十九年九月二十六日から二十七日未明にかけて北海道を襲った台風十五号は、瞬間最大風速五〇呎（室蘭、寿都など）を越す記録を示し、常時風速三〇呎という暴風によって全道的に想像を絶する被害をもたらし、いわゆる「北海道風害」と称せられ、災害史上まれにみる驚くべき被害の爪痕を残した。青函連絡船洞爺丸の転覆をはじめ、数千ト級の青函貨物船四隻の沈没など一千五百余名の尊い人命を奪い、わが国海難史上最大といわれる大惨事を起し、また岩内町では大火を併発し全町の八割にあたる三千余戸の家屋を焼失する憂き目に遭った。そしてこの暴風はついに豊かに育った森林をも襲い、一夜にして総量約八千方石を越える山林史上未曾有の記録的被害をもたらしたのである。十五号台風の特徴は風速がきわめて強かった反面、降水量が少なく、したがって雨による被害は意外に少なかったといわれている。

本村においては幸い他の地方より被害が少なかったが、国有林の被害面積五百町歩余、被害石数五万九千石（計数は『北見宮林局史』による）に及ぶ風倒木を出した。

第四章 保健衛生

衛生組合 明治三十一年十一月、道庁は衛生組合設置規程を設けて、伝染病の予防を中心とし、種痘その他の衛生事務を取扱うための衛生組合の設置を奨励した。組合の業務は伝染病の予防、種痘および各種予防注射の

督励、春秋における清潔検査の強制的な励行であつた。

本村の衛生組合の創始については、古い資料に乏しくさだかではないが、大正二年六月白滝教授場開所以来児童の保健衛生面、あるいは年毎に増加しつつある入植者の衛生管理に上湧別村役場よりの組合設置指導もあつて、大正二年秋上湧別村衛生組合白滝衛生組が誕生、初代組長に榎盛平が選ばれた。大正八年上湧別より遠軽村が分村するに及んで遠軽村衛生組合のもとにおかれたが、本村においてはこれまでの衛生組を衛生組合となし、その下に白滝、旧白滝、上白滝、奥白滝、支湧別、上支湧別の各部落にそれぞれ衛生班を設けた。大正十四年生田原村



毎月1日、15日の2回じん井処理車に
よるゴミの収集処理を行なっている

が遠軽村より分村したのを機に翌十五年遠軽村衛生組合連合会となし、各部落ごとの衛生班を衛生組合と組織がえを行ない、当然本村各部落の衛生班も衛生組合振興会と改組し、衛生思想の普及、防疫対策に努めた。昭和十六年第二次世界大戦勃発によってこれら外郭団体は整備され解散した。

昭和二十二年四月白滝村火防衛生組合として、火防と衛生の抱き合せ組合が誕生、火防、防犯のほか薬品の配布、春秋二回にわたる清掃指導（戦時中は清潔検査といつていた）と幅広い活動をつづけてきた。

昭和三十六年六月白滝村清掃条例を制定、清潔、美観を保持し生活環境を衛生的かつ健康的にすることを目的とした。このことがあつて翌三十七年一月市街地全域が「特別清掃地域」として道の指定を受けた。

昭和四十一年四月火防衛生組合を発展的に解消し、白滝村衛生組合と

して再発足した。現衛生組合長は佐藤甫である。

昭和四十二年五月「白滝村環境衛生指導員」制度を設け「明るく住みよい美しい街づくり」をスローガンとして、冬季を除く毎月定期的に指導員による巡回指導を積極的に行なっている。環境衛生指導員には現在、田中文三、佐藤庫、植村直治、中村友晴、古寺頼平らが委嘱をうけている。

伝染病

伝染病は隔離収容を要する法定伝染病（赤痢、コレラ、ペスト、痘瘡、猩紅熱、腸チフス、バラチフス、ジフテリア、発疹チフス、流行性脳脊髓膜炎、日本脳炎の十一種）と、届出を必要とする届出伝染病（小児麻疹、結核、癩、梅毒など二十四種）およびその他の伝染病（丹毒、流行性耳下腺炎など）等に区別される。

本道における伝染病予防対策は明治三十一年衛生組合の設置奨励以来、予防接種、清潔検査等によって態勢をととのえてきた。

今次大戦終結当時、敗戦による動揺で衛生意識も乱れ、加えて内外各地よりの復員軍人および引揚者は明日からの生活に窮々として路頭に迷う者さえあった。戦災孤児、浮浪児の急増したのもこのころであって、こうした悪環境のなかから一時猛威をふるったのがシラミによって伝染する発疹チフスであった。またこのころチフス菌が食物などとともに口から侵入して発病する腸チフスが全道的に大流行し防疫が追いつけず、ついに汽車の乗車制限をしたり、列車内に乗り込んでの予防注射の接種などは、終戦直後の不潔な社会世相でもあった。

本村においては上湧別村管轄時代の大正二年ごろより衛生班の協力によって日ごろの予防に万全を期し、伝染病発生時には徹底した予防策が講ぜられた。昭和二十一年、二年の発疹チフス、腸チフスの大流行時にも、本村ではわずか数名の患者が発生したにすぎなかった。

あらゆる角度から発病をもたらす伝染病は、その種別が四十種を越えることから、数年に、二人の割合で患者発生しきたることは否めない事実である。昭和二十三年予防接種法が公布されて以来急速に伝染病の発生も減少しているが、これは予防医学の進歩と環境衛生の浄化によるものであらう。

昭和二十六年白滝全村にわたって蔓延した赤痢は真性、疑似合せて六十名の患者を出し、開村以来の大量発生に全村民を震動させた。

昭和三十九年十月白滝季節保育所保育児より発生した赤痢は思わざる赤痢大火に見舞われ、真性、疑似合せて百十五名の集団発生となり、同保育所と白滝青年研究所を仮の隔離病舎となし保菌者を収容した。

開業医 大正初期、開拓の意気にもえていた本村は将来に豊かな街として発展の可能性を秘めていたため、早くから個人開業医が入ってきた。すなわち大正三年二股市街（東区）に赤坂医院が開院したが、大正六年の大山火に遭遇して転出、同年秋おそく増子粕太郎が入村、二股市街で開院をなし、大正十二年増子退村のあと金清助が昭和十年一月まで中央区において開業していた。

これよりさき昭和九年には拓殖医としての指定をうけることもできた。

金医院転居のあと代って仲村長四郎が同所で開業したが、昭和二十五年六月転出するに至り、その後の個人開業医はいなくなった。

道立白滝診療所 大正初期から変遷ありながらも続いていた開業医が、いずれも人口の不足から診療成績があがらず苦しい経営に堪えていたが、仲村医院の閉鎖によって、昭和十三年紋別、常呂両郡三町十カ村十二産業組合の共同出資により設立された遠軽厚生病院はあるものの距離的に遠く、かつ無医村となることを憂えた住民

は道立の診療所誘致を計画、全村あげてこれが誘致運動を展開した。ここにおいて昭和二十五年四月道立白滝診療所として診療を開始するに至り、住民ひとしく安堵の胸をなでおろしたのである。初代診療所長は高垣愛彦（昭和二十五年五月～昭和三十年十月）、第二代島田広重（昭和三十年十一月～昭和三十一年九月）、第三代前田参二（昭和三十一年十月～昭和四十五年四月）、現所長は名取忠雄である。

伝染病隔離病舎 昭和二十四年十二月道立診療所開設内示があるや診療所建築に着手したが、これと並行して診療所に隣接して村立伝染病隔離病舎（建坪四十六坪、ベッド数八）をも新築し、翌二十五年四月の診療所業務開始と同時に隔離病舎の運用をも始めた。

伝染病の発生は環境衛生上の欠陥から生ずるものが比較的多く、これが撲滅に村および診療所が主体となって万全策を講じており、年々伝染病の発生は減少しているが、隔離病舎は年とともに老朽化していくものの廃止することもできず、これが維持に真剣になって考慮する時が至り、近隣町村においても同じような悩みを抱えているところから、隔離病舎組合を設立する議がまとまり、昭和四十五年一月「遠軽町ほか三カ町村伝染病隔離病舎組合」（遠軽町、上湧別町、生田原町、白滝村の四カ町村）を発足、本村は同年四月一日より加入し、これにともなうて白滝村伝染病隔離病舎は同年三月三十一日をもって廃止した。隔離病舎組合の本村選出組合議員は四月一日付をもって野沢正市、高橋行之が互選された。



道立白滝診療所

産婆 大正四年奥白滝高台（天狗平）に入植した佐藤ハツは産婆免許のあるところから、夫の生計を扶け、さらに衆人の懇願されることとなり、二股市街（東区）に居をかまえて助産を行なった。

昭和三年拓殖助産婦として高橋スミエが中央区に着任、昭和十六年限りてその職を退くこととなり、次の公認産婆の着任までの暫定期間愛別村から堀トヨ産婆が昭和十七年一月より時折本村に駐在してその職を全うしていた。

昭和十七年七月現金子ミツが公認産婆として来任、助産の任に当たっている。

歯科診療所

本村には歯科医院がなく、出張診療所の開設によって歯痛の急場をしのご程度のものであったが、週に一、二度の出張診療が患者にとってはまことにありがたいものであった。戦時中から戦後にかけて木村に出張し來たつた歯科医がいたけれども古い記録がなく判然としないが、昭和二十五年から二十九年までの間、土川町久米延保歯科医が本村市街広田時計店二階を借り受け出張診療をしていた。その後昭和三十一年から四十四年二月まで九瀬布町竹林歯科医が中央区に出張診療所を、さらに昭和三十二年より九瀬布町斎藤歯科医が白滝駅前に出張診療所を開設、週二回の出張診療を行なっている。

開拓保健婦

開拓行政の重要な一環である環境衛生面の改善に益する開拓保健婦（後藤節子）が昭和三十六年四月設置され、役場内に事務所を置き村内全開拓区を随時巡回している。

母子健康相談所

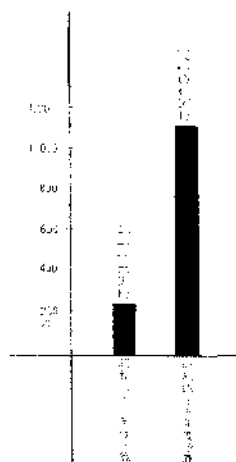
母と子の健康維持をはかるため、昭和四十二年九月無料母子健康相談所を開設、白滝青年研究所和室を利用し、毎月第二水曜日午前十時から午後二時までの間、遠軽保健所の医師が相談員となっている。相談内容は、妊産婦、乳幼児、成人病、一般の健康相談である。

国民健康保険事業

昭和十三年四月国民健康保険法が公布され、五年後の昭和十八年三月遠軽町国民健康保険組合が設立され、遠軽町の行政区域であった本村もこの組合の傘下に入ったが、昭和二十一年八月、分村によって村内の健康保険事業は一時休止のやむなきに至った。

昭和二十三年六月国民健康保険法の改正によって公営化が認められ、本村においてもこれが村営事業として行なうべくこの年九月の村議会において白滝村国民健康保険条例を定め、国保事業の運営に万全を期するため国民健康保険運営協議会を設け、被保険者を代表するもの二人（斎藤久次郎、近藤吉男）、医師または歯科医師を代表するもの一人（仲村長四郎）、公益を代表するもの二人（井村謙二、中山徳蔵）の総数五名からなる委員構成による組合組織によって国保事業を行なったが、保険料の納入あるいは衛生材料や薬剤等の不足によって給付事業もきわめて不円滑となり、昭和二十六年三月、やむを得ず一時休止の措置をとった。

昭和三十三年二月国民健康保険法の再改正によって国民皆保険の大原則にのっとり、これまで国保事業の実施、未実施は市町村の自由意志によっていたものが、この改正によって強制化されたわけである。かくして本村においても住民の積極的な支持もあって、昭和三十五年四月一日より国民健康保険事業が被保険者五割給付の形をとって再開されたのである。昭和三十八年十月世帯主の全疾病七割の給付に引上げ、世帯員については従来通りとしていたが、昭和四十一年一月より世帯員についても七割給付に改め、被保険者の医療費負担の軽減をはかった。



白滝村国民健康保険事業保険給付費比較表

薬の行商と売薬

われわれになじみの深い富山の薬は、北海道が蝦夷地と呼ばれていたころ、すでに反魂丹（注・今の仁丹の類）なる薬をもって行商に入ってきた。国境出入の厳重な当時であっても、富山の売薬行商人はむしろ歓迎されて出入国できたようである。

開拓期における住民の最大のなやみは、貧乏と悪路とのたたかひもさることながら、医療機関の乏しいことで、年一回各家庭を訪れる薬の行商は急場しのぎの常備薬としてまことにありがたい存在でもあった。湧別地方においては明治三十三年富山の売薬行商人が入ってきた（湧別町史）ようであるが、開拓のおくれた本村においては、大正二年入植した奈良団体の団团长井村謙二の手引きにより同年秋おそく奈良団体の後を追うようにして、大和（奈良県）「ダルマ印」「タイ印」の商標をもつ行商人が入り置き薬をしたのが初めとされている。若干おくれて富山の越中印、その他の業者が入り、業者の変動はあれど医療機関の発達した今日なお住民生活と結びついて置き薬のあきないが続いている。

薬種商としては小島寛一郎が二股（東区）においてわずかの薬を店先に置いたのが大正五年のことで本村最初の薬屋で、これと相前後して現中央区に土屋安夫が東旭川から移住して薬種商を営んで一軒となった。

現在営業中の薬店は、川合一平、前田秀之の二店で、新薬の統出せる今日、店内の薬種も膨大な数といえよう。

硫黄鉱泉

探鉱に心血をそそいだ佐々木三之助、下村正一郎、小島寛一郎らは大正六年、たまたま奥白滝滝の上橋西側元八号駅通近くにおいて、冬でも融雪している小さな湧水を発見、手を入れてみるとほのかな温かみを感じる水温に、温泉たることを知り大さわざとなった。以来幾度となく現地におもむき観察するも様子が変らず、融雪期をまって温泉許可申請をするかたわら、仮小屋を建て湯治客の宣伝につとめた。大正七年六月ついに

待望の鉱泉としての認可が北海道庁から届いた。

免 許 証

一 場所 北見国紋別郡上湧別村字白滝原野基線三十二号地

一 申請人 北海道紋別郡湧別村字白滝原野基線百八十四 小島寛一郎

一 鉱泉名 硫黄鉱泉

右、浴用鉱泉タルコトヲ免許ス

大正七年六月十二日

北海道庁

かくしてこの鉱泉は不思議にウルシカブレ等の皮膚病の治療に効果があり、管理人をおいた簡易宿舎に夜具自炊道具持ち込みで湯治する者、あるいはビンなどの容器を持参して鉱泉を買い求め自宅治療をする者など一時はなかなかの盛況であった。しかし冷泉なうえ地理的に交通不便なため軌道にのせることができず、野ざらしの状態となつてしまつた。

白滝温泉

裏大雪山系統の山なみが続いている本村は、さらにその脈系が全村にわたつて拡大しているであろうことは想像にかたくないのであるが、村内北支湧別池田詮文所有地内湿地帯の一部において冬期水結もせず、降雪があつても雪の積らない箇所があり、早くから話題になつてゐた。戦後十年も経過すると社会情勢もやや安定し、国民は余暇をもてあまし観光地を目ざしてレジャーを楽しむ姿が目立ちはじめた。かくしてレジャー産業の開発は年とともに活発な動きを見せ、しかもそのいずれもが活況を呈する進展ぶりであつた。

こうした世情にあつて、本村内においても温泉によるレジャー産業をおこそうと前記湿地帯がクロースアップ

白滝小唄

作詞 佐々木 喜代治
作曲 小島 三雄

一
チトカニウシに 降る雪よりも
白い温泉 雲がなびくのに
ほんにつつじは 薄なさけ
ササ 薄なさけ

二
駒の想か 万年雪は
いつになつたら とけるやら
夢のヒラ山 霧が降る
ササ 霧が降る

三
恋のスロープ 二人で行けば
天狗嵐も 粹に咲き
招くヒュッテの 灯がゆれる
ササ 灯がゆれる

された。まずこの地にボーリングを行ない温泉掘削をこころみるべく、昭和三十年三月出願者白滝村として道に対し温泉掘削の許可申請を行ない、村は施工者野沢正市との間に一連の誓約書を交わし、掘削の場所を池田所有地内白滝原野一千二百四十九番地と定めて、野沢の私費によりおよそ二五〇万円に及ぶボーリングがはじまった。しかし莫大な費用を投入して行なわれたボーリングも残念ながら温度三十二度どまりのものしか湧出せず、ついに温泉掘削は失敗に終わった。

また、これとは別に斎藤久蔵は、白滝原野一千四百二十三番地内（小野政夫所有地）に温泉湧出を夢みて昭和三十年四



白滝温泉ホテル

白滝音頭

作詞 奥山 いおり
作曲 小島 三雄

一 さあさ踊ろよ 白滝音頭

毛場の丸太は 主さんまかせ
どんと積み出す そのすがた
サー ヨイヨイ ヨイトセ

二 さあさ踊ろよ 白滝音頭

今年豊年 嫁こさもろて
可愛い牛にも 子ができた
サー ヨイヨイ ヨイトセ

三 さあさ踊ろよ 白滝音頭

踊りつかれて いで湯につかりや
あずも晴れるか 窓の月
サー ヨイヨイ ヨイトセ

月温泉掘削の許可申請を行ないボーリングを試みたが、これも一時三十六度の温水が湧出したがその後二十度に降り、以来高温の温泉が湧出せず中止してしまった。

こうした一連の温泉掘削がその双方とも高温ではないが冷泉として認可されるものであり、鉱脈によっては期待以上の温泉が湧出する可能性があるとみて掘削の場所を変え、村費をもってボーリングを行なうことを決め、昭和三十一年十二月の村議会において議会の承認を得、温泉掘削の場所を白滝原野一千八百九十七番地の八（古閑一所有地）と決めて温泉掘削の許可を道に出願した。翌年一月から三月にかけて七、八〇呎のボーリングを行なったが期待をうらざり、二十五度の冷泉であった。この冷泉に胆を冷やした村は、掘削の場所を白滝原野一千九百九十番地の一（支湧別五線岡竹松所有地）に移し、試験を企だてたが、地主との話し合いがつかずこの地のボーリングを断念、前記古閑所有地のボーリングを続行、一五〇呎の掘削にも温度上昇せず、その時点で掘削を打ち切り、温泉としての認可申請を遠軽保健所に提出、温泉認可

基準最低線にて認可がおりた。

これよりさき同三十一年三月温泉開発審議委員会（委員・丹羽実郎、中山親孝、野沢正市、布田勇、岸浦吉、古関初大）を設け、温泉の開発、温泉旅館の建設ならびに運営等につき協議がなされた。同年七月温泉開発審議委員会を温泉審議委員会と改め、委員会の審議によって温泉旅館設計画の概要が打ち出され、建築委員長に中山親孝があたり、木造二階建本家、ブロック建浴場等二百三十四坪余、その他付属施設費および内部調度費など合計一千二百五十万円に及ぶ大事業が遠軽箱崎組の請負によって着工、突貫工事によってこの年十一月二十日一応の竣工をみたが、内部施設の変更、環境の整備（敷地五反歩は古関一の寄贈、三反歩は購入す）、物置の新設等最終事業費は実に一千八百万円の巨費を投入した。

村民の希望と不安が複雑に交錯するなかで、内外の有志多数を招いて盛大な落成式と「白滝温泉ホテル」の命名式が小雪ちらつく十二月挙行された。また三日間にわたり全村民に温泉を無料解放し、さらに村内全世帯主を招待し酒肴のもてなしをするなど、華やかな「温泉ホテル丸」の出航ではあった。

昭和三十三年十二月より村営によって温泉事業を開始した温泉ホテルは、建築工事中の八月十四日村議会において村営事業とすることに可決をみていたが、翌三十三年三月末をもって村営を廃止し、民営とすることを決め、譲渡価格一千二百万円にて小出月江との間に温泉ホテル譲渡契約が結ばれ、この年四月より民営となった。しかし加熱式温泉という悲しさゆえ光熱費その他の維持費に経費がかさみ、ついに昭和三十五年六月十日温泉ホテル譲渡に関する契約を解除、再び村営とすることを村議会において決議し、前田勘治をして諸施設いっさい現状のままをもって使用料を徴収して委託経営に当らしむることとし、同月十八日委託経営の契約締結となったが、翌

三十六年八月契約者藤本武一となり、苦しい経営が続いていた。この間施設の一部をユースホステルに改造、夏の登山客、冬のスキー客の誘致に盛んなPRをつづけた。

昭和四十一年九月札幌市学校法人月寒学院が温泉ホテルに着眼、学院内の海外移住研究生研修の場として最適であるとの観点から施設および敷地を買収し、この地を月寒学院第二農場と名付けた。同年九月三十日の村議会において温泉ホテル施設譲渡の審議がなされ、五百万円にてこれが財産の売却処分可決が行なわれた。時を同じうして温泉開発に力をそいだ温泉審議委員会も解散となった。

思えば昭和三十二年十一月営業開始以来、村民の厚生施設としてその発展を大きく期待されていた温泉ホテル施設も、諸般の情勢からついに月寒学院に身売りされたわけである。

白滝市街簡易水道

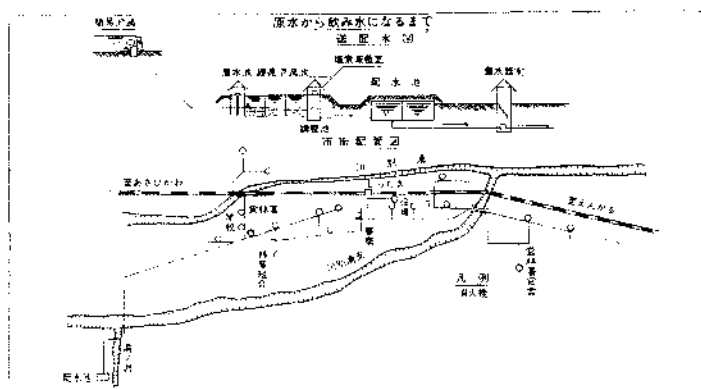
本村市街地の飲料水は遠軽保健所の水質検査の結果、その約七割近くが大腸菌やその他の雑菌が混入している飲料不適水であった。こうしたまことに不衛生な飲料水、そして時として起る水飢饉の解消、これに合せて消防態勢の万全を期するための消火栓の完備等大局的見地から市街地全域に簡易水道布設の機運が熟し、水源予定地や水量の調査、事業費にかかわる財源の見通しもついたので、昭和三十八年三月の定例村議会において簡易水道布設事業についての議決をみた。このためこの事業を円滑に促進する目的で同年四月「白滝市簡易水道布設促進期成会」(会長・藤本輝彦)を結成、水道利用者の確保、負担金納入に、あるいは工事面に対する協力をはかった。

水源地は国有林内白滝事業区七林班よ小班、通称支湧別湯の沢にその適地を借り受け、同三十八年七月工事費約二千六百二十万円の大事業が着工された。工事請負は札幌市華北建設興業株式会社であった。

給水法は下図にもあるごとく、支湧別川と湯の沢の合流点より湯の沢の上流約一、五〇〇呎の地点で取水し、これを導水管により営林署苗畑の高台に濾過池、配水池を設け、塩素滅菌した水を自然流下により各戸に給水するものとした。給水区域は中央区、南区の全域と東区祥嚴寺までと西区は公営住宅、変電所付近までと限定した。

かくて工事中に降雪をみるなどの難事業も同三十八年十二月末全工事が完了、翌三十九年一月一日より給水を開始した。ここにおいて水道利用者は衛生的で便利な水道に安心した生活ができるようになった。当初三百十六栓の中し込みにより施行した水道工事その後利用者が年ごとに増し、昭和四十五年九月現在四百四十栓が布設され、一日の給水量は四七八立方呎（ドラム缶でおよそ二千三百九十本分）に及んでいる。

奥白滝高台水利組合 今の東白滝、大狗平方面は大正初期以来団体、個人の別なく入植するものがありついで米たり、穀倉と生い茂る立木を整理しながら開墾に精を出していたが、不幸なことに飲料水に恵まれず、細々と流れる小川の水を頼りに不自由な生活が続いていた。大正六年白滝大山火後急激にこの方面から離脱者が出たのも、大火の



簡易水道配管図

痛手と水の不足がその原因であった。こうした入植者の悩みを解消するべく水路施設の請願を藻郷村役場に行なっていたが、財政その他諸般の事由により永年水路施設工事が見送られていた。昭和八年五月施行の村会議員選挙において地元奥白滝から鈴木富次が選出されるや、部落一丸となつての歎願が実を結び、ついに全額国費によつて高台地区の水路施設工事着工の運びとなつた。水源地は隣接の国有地内白滝事業区六十林班内を選び、奥白滝高台水利組合（組合長・鈴木富次）を結成し、岸利七に施工を依頼、昭和九年春着工同年秋完成し、ここにおいて高台無水農家およそ三十戸が水路の恩恵に浴するようになった。

東白滝雑用水利組合　昭和十一年春天狗沢地区に三十三戸の入植移住者が入つたが、一部高台地区に区画割りされたものは無水のため余分な苦勞を背負わされた。そこで三十三戸の入植者がよりより協議のうえ、水路組合をつくり無水農家の解消に乗り出した。まず高台水利組合利用の水源地より受給することの内諾を得て、東白滝雑用水利組合を結成（組合長・五代儀喜六）、水路直接受益者、同間接受益者に分ちそれぞれ寄付金を募り、昭和十二年春工事着工、同年秋明渠式の水路が完成、無水のなやみが解消された。

簡易水道となる　いわゆる川水を飲料としていた移住者は、農薬散布その他の汚物等によつて生ずる川水の汚染を知りつつ、不衛生きわまる水の使用に耐えていたが、ついに簡易水道の恩恵に浴するようになった。すなわち天狗平、東白滝一帯にわたり昭和三十一年、三十三年の両年にまたがり延長一万四千余の簡易水道布設工事（工費約一千三百万円）を全額国費にて、さらに付帯工事として全長およそ三、三〇〇戸余の工事（工費約二百十万円余）を補助事業として施行、ここにおいて両地区の飲料水のなやみが一挙に解決したのである。当初の給水戸数は三十五戸と記録に残っている。

支湧別川向い高台簡易水道

昭和九年支湧別川向い高台に入植した二十四戸の開拓者はいずれも飲料水に不自由し、数十尺の深井戸の掘削を試み、ある程度の水脈をつかみ飲用に供するところもあったが、崖の中腹にわずかに湧き出る水を求めて運搬し苦勞の連続であった。わけても支湧別七線の川向い高台地帯は、近間に湧き出る水とてなく山すその湧き水を使用する状態で、この水の運搬に幾時間も浪費するむたと苦勞があった。こうした実情を村に訴えつづけていたところ、とりあえずこの地帯の無水農家五戸に略式簡易水道を布設することを決め、昭和二十六年八月、山腹の湧水を一度貯溜し、そこから鉄管によって各戸の裏玄関先まで土中を配管し、蛇口のない常時出水の状態で使用することができた。これといった施設もなく、水圧も乏しかったため各戸の勝手元まで給水管を施設することができなかったのである。しかし無消遣とはいえ、これまでの水運搬の勞がはぶけ農家のよろこびひとしおであった。まことに幼稚な施設とはいえ、本村最初の水道工事といえよう。しかし耐久度の低い鉄管はやがて破損が目立ちはじめ故障が続出する状態となった。

昭和三十五年支湧別六線、七線の川向いの無水農家の悩みを解消するべく、新農村建設総合対策特別助成事業第一年度の実施計画にこの地帯の共同給水施設を取り入れ、農林省よりの認可もあり、この年七月早々工事着手、十月竣工となった。水道配管総延長四、七〇五、四八余、総工事費約百二十万円を要し、水道路線の掘起し埋戻しはいっさい受益者負担であったがため、支湧別川向い高台給水利用組合（組合長・石川健次郎）を組織して工事遂行に尽力した。

配管は硬質ビニールを使用し、給水取入口には貯水槽と濾過装置を兼ねた取水堰を設け、主要幹線には水圧を調整するために減圧水槽を施設し、配管は各家庭の勝手元まで行ない、給水栓も不凍式を使用し、受益者十一戸

は安心した生活を送れるようになった。

し尿処理組合

環境衛生のうち最も頭痛の種となっているものに、し尿の処理方法があり、これをいかに処理すべきかが各町村とも懸案とされていたが、遠軽地区の各町村が共同出資の方策で、一定地に大がかりな処理場を建設し、もって関係町村住民のなやみを解消しようと昭和四十年遠軽地区七カ町村し尿処理組合を設立、遠軽町開盛に共同し尿処理場の建設にとりかかり、消化活性汚泥方式によるし尿消化槽をすえつけ一口四五ギ砂の処理能力を有する施設を完成、昭和四十二年四月より運用開始となったのである。この組合には遠軽町をはじめとして、上湧別、湧別、佐呂間、生田原、丸瀬布、白滝の七カ町村が加入、組合議員に本村からは松浦健蔵、南政雄が選任された。

昭和四十四年度におけるし尿の汲取収集実績は、総収集量一万三、六二四ギ砂で、このうち白滝村における収集量は五八〇ギ砂であった。

第五章 社会福祉

民生委員制度

わが国における扶助制度のはじまりは、明治七年恤救規則が制定され窮民救恤をなしたのに始まるが、その政策はやや消極的であったといわれる。

昭和四年、第一次世界大戦後の極度の不況による社会的貧困を積極的に救済する必要が生じ「救護法」が公布され、統一的な救護対策を講じたのである。

昭和十二年には軍事扶助法、医療保護法、母子保護法が制定されるとともに方面委員制度が設けられ、組織的に困窮者の救護につとめた。

戦後新憲法の制定によって国民の生活保障制度が基本的権利として確立され、戦前の救護関係の諸制度は統合整理され、昭和二十一年十月新たに生活保護法が制定され、従来の方面委員会は民生委員会に改められた。翌二十二年には児童福祉法が、さらに二十三年には民生委員法が、ついで同二十四年には身体障害者福祉法がそれぞれ公布されて社会福祉の実をあげていった。

昭和二十五年生活保護法の全面改正と翌二十六年十月から福祉事務所の義務設置制度によって、ここに福祉三法（生活保護法、児童福祉法、身体障害者福祉法）が確立され、社会福祉活動が大きく飛躍したのである。

昭和二十一年遠軽より分村した本村は、この年十月一日白滝村民生委員協議会を設置、同年十二月左の十八名が民生委員として厚生大臣から委嘱をうけた。

三木克己、布田富藏、丹羽実市、内田源三郎、近藤吉男、金子ミツ、三上熊吉、前本ミツ、佐藤ツネ、鈴木亀吉、川口法尊、高橋利作、笠間誠一、譜内良金、藤川勝治、安西光義、占関一、坂本冬治

民生委員は生活保護法にもづく生活扶助、教育扶助、住宅扶助、医療扶助、出産扶助、生業扶助、葬祭扶助等、要保護者の適用に努め、社会奉仕の精神をもって保護指導にあたっている。委員の任期は三年で幾度となく交替されているが、現在（昭和四十三年選任）次のとおりである。

前田忠治（上白滝） 斎藤フサ（印白滝） 布田昭子（東区） 広田亮一（中央区） 棚橋重利（南区） 古関仁（西区）
渡瀬秀雄（支湧別） 星久子（上支湧別） 菅原政雄（奥白滝）

なお、昭和二十六年より同四十四年まで民生委員ならびに社会福祉協議会役員を勤めた大庭千代吉は、昭和四十三年十月全国社会福祉協議会より永年勤続の表彰をうけ、恩賜の特別基金による記念品を贈られ、さらに同年十二月厚生大臣よりの表彰をもうけた。

社会福祉協議会 昭和二十六年三月社会福祉法が公布され、任意性ながら各市町村に社会福祉協議会が設置されることとなった。

本村ではこの年の九月部落区長会議の席上、白滝村社会福祉協議会を結成、会長には歴代村長が選任されることとした。かくして役員には村内各界の代表が参加し、歳末たすけあい運動および引揚者ならびにその他恵まれない家庭に温かい手を差しのべるなど社会福祉活動を大いにおしすすめた。しかしながら社会情勢の落着きとともに協議会の活動も活発さがうすれていったことは否めない事実である。

海外引揚者状況

人口	海外別		人口	計
	樺太	千島		
人口	二〇四	二	三	四六
			朝鮮	満州
				支那
				那
				その他
				計
				二八四

引揚者施設収容状況

名称	種目	設置年度	所在地	棟数	延面積	収容定員
樺太引揚無縁故者収容住宅		昭和二十四年	白滝東区	四	三九六	八三

昭和四十一年五月白滝青年研修所において、村内各種機関の代表をもって組織する白滝村社会福祉協議会が再

発足をみた。会長には国松一敏村長が当たり、地域住民の福祉増進のため、これまでのうつろな協議会とは異なり、一転して活発な運営が推進されることとなった。

決 議 文

白滝村社会福祉協議会推進強化に関する決議。

本月、ここに白滝村社会福祉協議会が再発足するにあたり、自主性を基調とする地域住民の福祉増進のために、本会は今後さらに弾力性のある運動をして、積極的な前進が期せられなければならない。

この際、われわれは本運動の意義を再確認するとともに、時代の要請に即応し、謙虚な反省と新たな決意をもって強力な推進をはかり、広く郷土発展のために資せんとするものである。
右決議する。

昭和四十一年五月二十一日

白滝村社会福祉協議会

さらに協議会憲章を定め、住民のおしあなぬ協力を求めたのである。また事業計画としては、

- 一 生活改善の推進
- 二 献血、預血運動の推進
- 三 緊急援護世帯更生資金の貸付
- 四 特別災（害）難世帯の見舞金支給
- 五 青少年健全育成
- 六 各種募金運動の協力推進
- 七 褒賞制度の採用

等の柱をかかげ、それぞれ細目をもうけ、平和な理想郷を求めて推進されている。

白滝村社会福祉協議会憲章

- 1 白滝村の住民は、互いに健康で幸福な家庭を営めるよう努力しましょう。
- 2 白滝村の住民は、美しく明るい郷土建設のためにまい進しましょう。
- 3 白滝村の住民は、時代を築く青少年児童の指導育成のためにより良い環境を与えるようにしましょう。
- 4 白滝村の住民は、教養を高め道徳心の高揚につとめましょう。
- 5 白滝村の住民は、相互扶助の精神を旨として社会福祉増進のために協力しあうようにしましょう。

共同募金

戦争によって痛めつけられ不幸な日送りをしている人々に対し愛の手を差しよべるため、昭和十一年政府のテコ入れで共同募金委員会が発足し、全国的に「國民たすけあい運動」を展開し、寄せられた募金を児童福祉、生活保護、身体障害福祉、更生保護、老人福祉等各種の福祉事業に使途したのである。今日すでになじみ深くなっている「赤い羽根」がそれである。つまり、この運動は生活に困っている人や、身寄りのない老人、ちえおくれの子供たちなど多くの恵まれない人たちのために、みんなでたすけあい、世の中の不幸を少しでもなくして明るい住みよい郷土にしていこうとする運動なのである。

本村においても昭和二十三年十一月白滝村共同募金委員会が組織され委員長を村長に、各部落区長を委員として、北海道共同募金委員会網走支庁支部から提示される募金目標額の目標達成に住民の理解を求めつつ募金を行なっている。また、この委員会が主

年 度	目標額	募金額	比率
	円	円	%
昭和 40	64,100	78,260	122
41	65,600	81,120	124
42	84,200	59,920	71
43	62,570	57,805	92
44	61,372	72,406	118

体となつて行なわれている「歳末たすけあい募金」は、今では年中行事として例年十二月に募金活動がなされている。

過去五年間における赤い羽根共同募金の実績状況は別表のとおりである。

赤十字募金

博愛、人道、平和の精神にもとづき明るく住みよい社会を建設することを目的として社会福祉事業をはじめた日本赤十字社は、多年にわたる地道な福祉活動から、ついに昭和二十七年に至り特殊法人として募金活動が認められ、共同募金方式をとった全国的な運動としてのいわゆる「白い羽根募金」がくりひろげられることになった。

本村にはすでに昭和二十二年三月より日本赤十字社白滝分区の設置がなされていたので、日赤募金活動も比較的スムーズに行なえた。村長を分区長に、各部落には協賛委員を置いて、毎年五月の募金月間には「たすけあい赤十字募金」運動を展開し目標額の達成につとめている。

(目標額)

(募金額)

(比率)

昭和四十五年度日赤募金

三五、八〇〇円

五四、九八〇円

一五二%

日本赤十字白滝村奉仕団

明るく住みよい社会をささぐりあげるため、陰の力となつて奉仕に従事する赤十字奉仕団が、日本赤十字社のすすめで昭和三十九年八月本村にも設立された。現在の団員は百一名で、谷藤テルが委員長を勤めている。

公営住宅

住宅難を解消するために国の施策として閉地の造成あるいは公営住宅の建設が進められているが、本村においてもこれが枠づけをとり、別表のごとき公営住宅を建設している。

公営住宅建設状況

種別 年度	1種	2種	低家賃	計	設置 建位
昭和31	10	—	—	10	西 区
37	—	—	8	8	中央区
39	—	14	—	14	中央区
41	—	—	8	8	中央区
42	10	6	—	16	中央区
44	—	—	8	8	東 区
45	—	—	8	8	南 区
計	20	20	32	72	

昭和三十一年十月公営住宅入居者選考委員会を設置し、これが入居者の選考にあたって緩急度を考慮し公正を期している。現在（昭和四十四年五月選任）の委員（任期二年）は次のとおり。

布田昭子、広田亮一、高橋行之、大庭裕二、南政雄、鈴木長作

国民年金

国民健康保険とともに国民が安心のできる生活をきずくことができ、もつて福祉国家の建設を目標にして昭和三十四年「国民年金法」が制定され、七十歳以上の老人に年額一万二千円の老齢年金を支給、あわせて重傷の身体障害者に障害年金、母子家庭に母子年金を支給し、わずかながらも光明を与えることとした。国民年金法は昭和三十六年四月、他の年金受給権者以外二十歳以上のすべての人々が保険料を月々納めてゆく歳出制年金制を加え強制加入に改められた。つまり会社とか官公庁等に勤める人々は厚生年金や恩給とか共済組合などを行なう将来自分の年金を受けられるようにするものである。

国民年金には前記の強制加入と任意加入とがあり、任意加入は

一 恩給や厚生年金などに加入している人の妻

二 遺族年金をうけているもの

三 昭和三十六年四月一日で五十歳をこえ五十五歳までのもの

四 昼間の高校生や大学生
などが対象となる。

年金には老齢年金のほか障害年金、母子年金、遺児年金、寡婦年金があり、保険料は二十歳から三十四歳まで一カ月百円、三十五歳から五十九歳まで一カ月百五十円であったものが、昭和四十一年六月国民年金法一部改正法によって翌四十二年一月より年金額の引上げ、支給要件の緩和などが行なわれ、同時に保険料もそれぞれ百円アップされ、二百円と二百五十円になった。

本村においても昭和三十五年十月一日から年金加入の受付け、資格取得の届出事務を開始した。昭和四十三年度における国民年金の加入人員は九百十三名で、年金の受給状況は

老齢福祉年金 九〇件

母子福祉年金 三件

障害福祉年金 一〇件

となっている。

老人クラブ とかく老人は家にこもって沈みがちになるものであり、年みちたとはいえなおかつ、かたしやく 嚙嚙として活動してもらわなければならないし、余生を少しでも明るく、ほがらかに、そして健康で過していくことを目的として昭和三十八年白滝老人クラブが設立され、ついで上支湧別、上白滝にもクラブの結成が行なわれた。

毎月一回定例集會日を設け、それぞれの会場において日ごろの鬱憤を晴らし、面白おかしく一日を楽しく過していたが、年一回全地区のクラブ員が集り昔の思い出などを語り合おうと、昭和四十三年四月老人クラブ連合会

名	称	会 長 名	設 立 年 月	会 員 数	会 場
白滝老人	クラブ	田 中 文 三	昭和三八・九	四一	白滝青年研修所
上支湧別老人	クラブ	中 山 徳 蔵	三九	二〇	上支湧別青年研修所
上白滝老人	クラブ	大 庭 千代吉	四〇	二八	上白滝会館

が結成された。連合会長には大庭千代吉、副会長には中山徳蔵、田中文三がなっている。

敬老会 敬老の精神は古来わが国の美徳であったが、終戦当時人心の動揺によって敬老意識はうすらいだ感があった。しかしその後社会福祉事業法、さらに老人福祉法の公布によって再び敬老意識が昂揚はじめ、九月十五日が「としよりの日」と定められてより、各地において敬老会が開催されるようになった。

本村において白滝村婦人団体連絡協議会が中心となって村費助成をうけて敬老会が行なわれてきたが、昭和四十五年より金額村費をもって敬老会が開催されることとなった。また「としよりの日」は昭和四十一年「敬老の日」と名称かわり、国の祝祭日として、九月十五日には全国津々浦々において敬老会が開催されることとなった。

また、病弱、就床、身障老人に対する家庭訪問奉仕制度が出来て以来、本村においてもさっそくこの制度を採りいれ、昭和四十四年九月老人家庭奉仕



敬老会でよろこぶ人達

員に南登美子を委嘱、週二回程度対象家庭を訪問、老人の身のまわりおよび食事の介護等を世話している。現在の対象老人は六名となっている。

また老人福祉相談員には大庭千代吉が北海道知事より委嘱をうけて対象家庭を訪問し、もろもろの相談に応じている。

昭和四十五年三月の第二回定例村議会において敬老年金給付条例を可決、白滝村に居住する八十歳以上の高齢者に対し敬老と長寿を祝福するため年額五千円（昭和四十六年より七十五歳以上を対象とし七十五歳以上八十歳までを年額三千円とする）を毎年九月十五日の敬老の日に支給することとした。昭和四十五年九月十五日に支給された高齢者は二十六名となっている。

母子会 網走支庁管内の各市町村においては早くから母子会の結成がなされていたが、本村においてはようやく昭和四十四年十一月母子会を結成、「すみれ会」と名付け、会長に鈴木マサ子、副会長に遠藤恵子、佐々木美恵子が推され、二十名の会員一丸となって、親睦を深めつつ励まし合い、強く明るく生きぬくことをスローガンに発足したのである。

保育所 人並みな生活、あるいはさらに高度な家庭生活を営むために夫婦共稼ぎが当然のことのように行なわれるようになった反面、夫婦の留守中における幼児の保育が頭痛の種となった。いわゆる「カギツ」^{カギツ}と称される子供が本村においても目立ちはじめた。こうしたことから保育所開設の声が持ちあがり、昭和三十三年九月の定例村議会において保育所設置条例を設定し、幸い村立技芸専門学校が五月から十月まで休校するのでこの間



風景運動所保育施白

を利用し、同校を季節保育所としてこの年九月一日から保母三名を配置し、定員六十名として開所したのである。入所資格は満三歳以上学齢前の幼児とし、入所条件は保護者の労働に従事のため、または疾病等の事由により幼児の保育に欠ける場合とした。昭和三十五年十一月技芸専門学校廃止となるに及んで保育所の移転を考慮、翌三十六年五月一日からの開所は、南区法海寺を借用し、これまでと同じく十月までの六カ月、季節的に保育を行なったのである。昭和三十九年十月同保育所より集団赤痢が発生、市街地全域にわたり蔓延し、百十五名の患者が隔離されたが、このことが契機となり、あわせて日ごろ通年制保育を切望する声が強かったため、村においては「母と子の家」を建設しここに保育所を移し、間借り生活をやめ本格的な通年制の保育を行なうこととした。

昭和四十一年四月「母と子の家」を白滝へき地保育所として定員も八十名にふやし、保母四人を配し保育指導に当たっている。

また、白滝保育所に通うのに地域的に遠い支湧別地区幼児のために、昭和四十年五月より旧家庭学校（済美館）を借用して支湧別地区季節保育所として開所した。昭和四十三年支湧別中学校が廃校されるに及んで保育所を同校内に移した。現在保育幼児は二十名である。

歴代保育所長は次のとおりとなっている。

保 育 所 別	歴代	所 長 名	就 任 年 月 日	備 考
白滝へき地保育所	一	谷 藤 吉 雄	昭和二三・九・五	教育長
	二	山 内 晴 雄	昭和三九・五・一	助 役
	三	井 田 光 一	昭和四一・五・一	教育長
	四	渡 辺 清	昭和四二・一〇・一	
支湧別地区季節保育所	一	佐 藤 義 雄	昭和四〇・五・一	支湧別小学校長
	二	井 田 光 一	昭和四二・五・一	教育長
	三	渡 辺 清	昭和四三・一〇・一	

保護司

保護司は社会奉仕の精神をもって罪を犯した者の改善および更生を助けるとともに、犯罪の予防のため世論の啓発に努め、もって地域社会の浄化をはかり、個人および公共の福祉に寄与する（保護司法第一条より）ことを目的として保護司制度が生れた。昭和十四年司法保護委員会制度ができ、遠軽に遠軽警察署管轄区域を単位とした遠軽司法保護区が設定されたが、昭和二十五年五月保護司法の公布によって翌二十六年、従来の機構を発展的に解消、新機構によって釧路保護観察所遠軽地区保護司会が設立され、遠軽町、上湧別町、湧別町、佐呂間町、生田原町、丸瀬布町と白滝村がこの地区会に含まれ、各町村にはそれぞれ分区がおかれ、毎年定期的に地区合同研修、複数分区の研修、分区単位の研修等更生保護に対し研鑽をつんでいる。

現遠軽地区保護司会長は一戸利文（遠軽町）で、白滝分区長は井内忠男である。

本村における歴代保護司は次にみられるとおりである。

保護司名	委嘱年月日	退職年月日	備考	保護司名	委嘱年月日	退職年月日	備考
小出月江	昭和二四・三・一一	昭和三五・八・七		井内忠男	昭和四二・三・一一	現	在 分區長
田坂唯光	昭和二七・五・二五	昭和三一・五・二四		高橋法男	昭和四二・三・一一	現	在
布田 勇	昭和三〇・六・三〇	昭和四二・二・二八		大友 武	昭和四三・一・七	昭和四三・六・二七	在
後藤貞治	昭和三八・三・一一	昭和四二・二・二八		中村友禎	昭和四三・一・四	現	在

人権擁護委員

昭和二十三年法務府（現・法務省）に人権擁護局が設置され、国民の基本的な人権を擁護するを目的として人権擁護委員制度が設けられた。委員は法務大臣から委嘱をうけ、

一 自由人権思想に関する啓蒙および宣伝

二 民間における人権擁護運動の助長

三 人権侵犯事件につきその救済のため調査および情報の収集をなし、法務大臣への報告、関係機関その勧告等適切な処置を講ずる

四 貧困者に対し訴訟援助その他その人権擁護のため適切な救済方法を講ずる

五 その他他人権の擁護に努める（以上・人権擁護委員法第十一條）

等の職務を遂行し、家事、民事、刑事、行政、税務、労働その他あらゆる相談を受けることになっている。

本村においては井村謙二にかわって現在中村友禎が委員の委嘱をうけている。

行政苦情相談委員

行政管理庁では行政苦情相談協力委員制度を設けて、国の行政の円滑かつ効率的運営をはかるを目的としていて、この委員は行政の民主化をさらに前向きに推進するために行政機関の業務運営に対す

る住民の苦情、あるいは要望などについて相談に応じている。

本村における行政苦情相談委員は昭和三十七年五月丹羽夷市が、昭和四十六年四月から、丹羽にかわって近藤敏雄が行政管理庁長官より委嘱をうけて相談に当たっている。

精神薄弱者相談員 本村の精神薄弱者相談員として大庭千代吉が北海道知事より委嘱され業務に当たっている。

身体障害者白滝分会 村内に居住する身体障害者の福祉をはかるため白滝分会を結成、現分会長古関道雄がこの任に当たっている。

また、古関道雄は身体障害者相談員として知事より委嘱をうけ、身障者のよろず相談相手となっている。

ひらやま会 本村内に所在する諸官庁、諸団体の相互間の連絡協調をはかり、もって村の発展に寄与するとともに併せて親睦をはかることを目的として、村内の諸官庁、諸団体の長のある者をもって昭和四十一年五月「ひらやま会」を結成、会長に困松一敏村長が推され、目的達成のために地道な行動をつづけている。

ひまわり会 重度心身障害児をかかえている母親たちの総意で、昭和四十一年四月「ひまわり会」を結成、不幸な子供の将来に少しでも光明を与えようとの目的にそって莫大の運営がなされている。現会長は鈴木多津子で、主として小児マヒ募金である「ピンクの羽根募金」を行ない小児マヒ財団へ寄贈している。

子供会と遊園地 子供の不良化を防ぎかつ健全育成をこいねがって子供会が誕生、さらに交通事故から身を守り安心して遊べる場としての遊園地が車輛の激増にともなってその必要が高まってきた。昭和四十二年六月市街東区に「東区子供を守る会」が結成され、区内に適地を求め地域住民の好意により、東区遊園地が施設された。

のをはじめとして、同四十四年南区、同四十五年鉄道区および中央区中央団地にそれぞれ子供会と付属遊園地が出来た。遊園地内における諸施設については、会費および区内特志寄付ならびに村費助成を仰ぎ年次計画にもとづいて行なわれている現状である。

母性補導委員 国民精神総動員令下、出征兵上の留守家族および遺家族婦人の慰問指導ならびに乳幼児を対象とした保健指導に当たる母性補導委員制度が設けられ、本村においても昭和十五年六月仲村ミサ、成沢マサエの二人を推薦委嘱したが、この制度は記すべき事業をしないまま終戦直前に立消えとなった。

生活改善推進員 昭和三十二年四月佐藤恵を委嘱、生活改善の普及に努めていたが、昭和四十二年九月立貞子に代り現在に至っている。

交通災害共済組合 経済の高度成長にともなう官公庁、会社、商店、私有の別なく車輛の増加が年毎に目立ち、それにともない交通事故も年々その記録を更新し、まさしく交通戦争の様相を呈して憂慮すべき状態となっている。不幸にしてこれら交通により災害を被った人に対し自動車損害賠償保障法による保障とは別に見舞金をおくって、生活の安定に若干ながらも寄与しようとする目的で網走支庁管内の町村共同で交通災害共済組合を結成、一日一円であなたを守るをスローガンに昭和四十四年一月一日から発足したのである。

共済見舞金基準額表

等級	災害の程度	共済見舞金基準額
1等級	死亡したとき	500,000
2等級	6カ月以上の治療を要する傷害	100,000
3等級	3カ月以上6カ月未満の治療を要する傷害	50,000
4等級	2カ月以上3カ月未満の治療を要する傷害	30,000
5等級	1カ月以上2カ月未満の治療を要する傷害	20,000
6等級	1カ月未満の治療を要する傷害	5,000

会費は一人年間三百六十円で、見舞金は五十万円（死亡の場合）を最高に、傷害の程度により別表のごとく六段階にわけられそれぞれ支給されることになっている。

対象となる災害は、自動車（普通自動車、小型自動車、軽自動車、特殊自動車）、原動機付自転車、軽車輛（自転車、荷車、けん引車など）、トロリ：バスの道路交通法にいう道路上の交通による災害の人身死傷事故である。

本村における加入の状況は、組合発足当時六百九十四名であったが、昭和四十四年度中には千二百二十二名となり人口の三八割にあたる加入をみ、このうち一等級一名、四等級二名、五等級三名、六等級一名の計七名が災害にあい見舞金を受け、見舞金の総額は五十二万五千円となっている。

表彰審査委員会

村内に居住する住民に対しその功績をたたえるため昭和三十七年四月褒賞条例を設定、同時に表彰審査委員会を設け、自治功勞、教育功勞、教育功勞、消防功勞、社会功勞、健民功勞、産業功勞、開拓功勞、特別功勞の八部門に分け、当該被表彰者を審査し例年十一月三日の文化の日にちなんで表彰を行なっている。表彰審査委員の任期は三年とし、現在（昭和四十四年六月選任）の委員は次のとおり。

丹羽実市、古閑初男、前本栄一、佐久間只雄、前田忠治、中山安德、中村友禎

なお、白滝村褒賞条例にもとづく各種功勞者の表彰状況は次のとおりである（教育功勞者および村の常勤職員についての自治功勞者名は略記す）。

昭和三十八年度

自治功勞者 井村謙一、広田寛次

消防功勞者 古閑辰雄、藤森健哉、近藤敏雄、中山安德、遠藤英、上井武夫、原野寅雄、五十嵐肇、鈴木信夫、大庭茂

納税功勞者 山中霞、後藤貞治、菊地増一、広田寛治、鈴木虎蔵、吉田美代治、高橋次男

昭和三十九年度

自治功勞者 西尾博文

消防功勞者 大串伊助

納税功勞者 鈴木龜吉、鈴木猛夫、南俊夫、太田実、金子耀雄、山崎茂、熊谷国平、武藤耕治、大内民五郎、鈴木信夫

昭和四十年度

自治功勞者 古関初夫、阿部卯衛門

消防功勞者 南俊夫、阿部克己、奥原一雄

納税功勞者 今野正男、奥田光忠、鈴木長作、菊地佐平、白滝中央納税貯蓄組合、白滝商工納税貯蓄組合、上白滝第一納

税貯蓄組合、奥白滝納税貯蓄組合

昭和四十二年度

自治功勞者 中山徳蔵

消防功勞者 小沢与之助、上村政吉

國民功勞者 出口俊平、金子ミシ

産業功勞者 前田勘治

昭和四十三年度

自治功勞者 佐久間只雄、古関一男

消防功勞者 山崎三男、山下正一、笠岡栄一

昭和四十四年度

消防功勞者 井村昭治、池田昭七、山崎茂、川上多加志、福田重光、平野一男、菊地行夫、福田信治

特別功勞者 大庭千代吉

昭和四十五年度

自治功勞者 小山田昌光、布山男、柴田房藏、南政雄、近藤敏雄、中山安徳
教育功勞者 小川正春

各種調停委員 釧路地方裁判所より委嘱をうけた各種調停委員は左記のとおりであるが、いずれも和陸の取
持ち役としてその任に当たっている。

司 法 委 員 井田光一

農事調停委員 山崎政治、近藤吉男

民事一般調停委員 井田光一

宅地建物調停委員 井田光一

商事調停委員 井田光一

家事調停委員 井田光一、布田昭子

参 与 員 井田光一

第六章 兵 事

徴兵令 明治六年徴兵令の発布によつてわが国初の徴兵制度が確立されたが、北海道においては開拓途上で
あつたのと、明治八年より屯田兵制度を採り入れたため、徴兵制度は当初は適用されず、明治三十一年一月に至
つて本道全域にわたつて徴兵令が施行された。

徴兵令規則は次のようなものであつた。

第一章 総 則

第一条 日本国民ニシテ満十七歳ヨリ満四十歳マデノ男子ハ総テ兵役ノ義務アルモノトス

第二条 兵役ハ、分チテ常備兵役、補充兵役及ビ國民兵役トス

第三条 常備兵役ヲ分チテ現役及ビ予備兵役トス、現役ハ陸軍ハ三カ年、海軍ハ四カ年ニシテ満二十歳ニ至リタル者之ニ服シ、予備役ハ陸軍ハ四カ年、海軍ハ三カ年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス

第四条 後備兵役ハ陸軍ハ十カ年、海軍ハ五カ年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス

第五条 補充兵役ハ陸軍ニアリテハ十二カ年、海軍ニアリテハ一カ年ニシテソノ年、所要ノ現役兵員ニ超過スル者ノ中、所要ノ人員之ニ服ス

第六条 國民兵役ハ、分チテ第一國民兵役、第二國民兵役トス

第一國民兵役ハ陸軍ニアリテハ後備兵役、又ハ召集セラレタル補充兵ニシテソノ役ヲ終リタル者、海軍ニアリテハ後備兵役ヲ終リタル者之ニ服シ、第二國民兵役ハ常備兵役、補充兵役及ビ第一國民兵役ニアラザル者之ニ服ス

第七条 各兵役ノ期限既ニ満ソルト雖モ戰時或ハ事變ニ際スル時、若シタハ航海中或ハ駐劄中ハソノ期間ヲ延スコトアルベシ

第八条 重罪ノ刑ニ処セラレタル者ハ兵役ニ服スルコトヲ許サズ

第三章 服役 以下略

徴兵検査

徴兵検査は徴兵令規則第一条に定められたすべての男子が受検しなければならなかった。男子と生れて兵役の義務に服する関門ともいえる徴兵検査に合格することは男子の本懐であり誇りでもあった。検査にあたっては綿密なる身体検査および学科試験もあり合格、不合格を決した。体格の等位を甲種、乙種、丙種、戊種の五種に分ち、甲種、乙種、丙種を合格とし、丁種、戊種を不合格とし、甲種および乙種は現役に徴すべき者とし、丙種は國民兵役に入るべきものとしていたが、終戦とともにこれら徴兵制度は廃止された。

在郷軍人会

明治四十三年十一月三日帝國在郷軍人会がはじめて設立されたが、これより以前において各市

町村が自主的に在郷軍人団を結成しており、帝国在郷軍人会の発足によってすべて吸収統一されたものである。この会の本旨は「良兵は良民なり」の提唱のもと、徴兵で入隊したものがやがて帰還して郷里に戻ってから在郷軍人会に籍をおき、互いに統制を保ち軍人精神の鍛錬に努めさせるためであった。

明治四十三年帝国在郷軍人会に加盟した上湧別分会はその傘下区域に白滝も包括していたが、当時旧白滝にわずかの入植者がいるのみで在郷軍人も皆無に等しかった。大正期に入り個人、団体の別なく開拓者が増加するに至って在郷軍人もわずかながら増してきた。大正三年十一月三日在郷軍人に対し次のごとき勅語の御下賜があった。

朕惟ニ国防ノ完備ハ汝在郷軍人ニ待ツモノ洵ニ多シ、汝等、戮力協心陸海ニ致シテ益々軍人精神ヲ鍛錬シ軍人能力ヲ増進シ、郷ニ在リテハ忠良ナル臣民トナリ軍ニ從ヒテハ國家ノ下城トナリ、以テソノ本分ヲ尽サンコトヲ期セヨ

このことがあって以来在郷軍人会はいよいよ強固なものになり、大正四年春帝国在郷軍人会上湧別分会遠軽支部白滝班が発足、初代白滝班長に岩城近蔵が推され、大正六年横田吉太郎に班長がかわったが、大正八年四月上湧別村より遠軽村が分村し同年六月在郷軍人会遠軽分会が創立され白滝も同時に遠軽分会に編入替えとなり、帝国在郷軍人会遠軽村白滝西分会と名称も変わり、初代西分会長に永山千嘉治（少尉）が就任した。白滝西分会を白滝市街地区（下白滝、旧白滝を含む）、上白滝地区（奥白滝、天狗沢を含む）、支湧別地区（上支湧別を含む）の三班に分け、おのおのの班に班長を配し活発な予備訓練が行なわれていた。

大正十三年永山西分会長の転出によって、友田栄策（少尉）が第二代西分会長となり、ついで第三代横田吉太郎（上等兵）、第四代斎藤久治郎（上等兵）、第五代加賀谷栄治（上等兵）、第六代工藤寛五郎（伍長）、第七代宮

城正次（伍長）、第八代野村津義雄（上等兵）、第九代清水実雄（伍長）、第十代井村光夫（伍長）、第十一代柴田松之助（車曹）であった。この間昭和十一年野村分会長の時代に、これまでの西分会の名称を遠軽町白滝分会としたのである。

昭和二十年八月、神国日本も世界を向うにまわしての大戦には歯が立たず、ついに敗戦の憂き目にあい、在郷軍人会も敗戦と同時に解散消滅してしまった。

忠魂碑 白滝開基二十年を迎えた昭和六年、在郷軍人会白滝西分会の者たちが中心となって、戦病死者の霊を慰めるべく「忠魂碑」の造立を思いたち、とりあえず白滝小学校グラウンド端に木製の忠魂碑を建て、八月の盂蘭盆に関係者参集して慰霊祭を行なっていたが、昭和十二年七月日華事変勃発を記念し、石造の碑建立の議がまとまり、白滝小学校近くの通学路筋に石製の「忠魂碑」を建立、碑文は陸軍大將井上幾太郎の揮毫によるもので、登校、下校の小学生は必ず忠魂碑の前で停止し、脱帽最敬礼をして通ったものである。

昭和三十四年七月白滝神社が西区旭台に新築移転されるに及んで忠魂碑も同時に神社横に移設された。昭和十一年白滝分村以来毎年八月一日に神式仏式合同による慰霊祭が行なわれていたが、昭和四十五年より札幌の北海道神宮大祭にあわせ祭典を六月十五日に変更、白滝村戦歿者慰霊祭執行委員会（委員長・白滝村長）の手によって厳粛裡に慰霊祭がつづけられている。

本村慰霊戦病死者の数は遺族の移動により一定していないが、昭和四十五年度慰霊者数は次のとおりである。

戦没者氏名	身	分	戦没年月日	死	亡	地	遺族住所氏名
越智 幸太郎	陸軍上等兵	昭和二〇・八・一二	満州				東 区 越智 政男

石井喜代美	海軍上等整備兵	昭和二八・	七・二八	長崎清佐世保海軍病院	東区	石井ウシ
鈴木真吾	陸軍兵長	二〇・	五・四	沖繩本島	〃	鈴木亀吉
松井敏雄	陸軍準尉	一四・	八・二九	ノモンハン	〃	松井清兵衛
齋藤金次郎	陸軍歩兵上等兵	一五・	一・一四	中支那	〃	齋藤順
川上進	海軍兵曹長	一九・	一・二五	比島方面	〃	鈴木猛夫
米沢良雄	陸軍上等兵	一六・	六・五	大阪陸軍病院	〃	米沢長作
鈴木木夫	陸軍伍長	二三・	一・一五	ハバロフスク	中央区	鈴木長作
大沢金作	陸軍上等兵	二〇・	一・一六	北支那	〃	大沢ハルノ
市島幸次郎	海軍上等水兵	二三・	三・一七	硫黄島	〃	菅原サト
高橋辰助	陸軍上等兵	二〇・	三・一〇	マニラ、マリキリ山	〃	高橋カツミ
的場貞夫	陸軍伍長	一六・	三・五	北支那	南区	的場みよし
岡田実	陸軍歩兵上等兵	一九・	七・二九	金沢市陸軍病院	〃	岡田ヨシ
永井正美	陸軍上等兵	二〇・	二・一一	比島ルソン島、サンタマル	〃	永井サガノ
永井玄	陸軍軍曹	二一・	一・一九	シベリア	〃	永井サガノ
高橋三郎	鉄道派遣軍属	一四・	二・一八	北支那	〃	高橋タツミ
兼野壮太	陸軍伍長	二〇・	五・二九	マニラ島	〃	南リン
加藤政具	陸軍兵長	一九・	七・一八	南方方面	〃	加藤平司
原野良雄	陸軍兵長	九・	七・一八	マリアナ島	〃	原野しも
古閑次男	陸軍伍長	二〇・	六・二〇	沖繩新垣	西区	古閑勘六
田中善治	陸軍七等兵	九・	七・一八	サイパン	〃	長谷部シゲ
井上吉兵衛	陸軍上等兵	九・	一〇・二六	仙台市陸軍病院	〃	井上亀治
石川鉄藏	軍属	一九・	五・二七	ニューギニア島	〃	石川匡

石井 国久	陸軍 伍長	昭和二一・二・一六	ニコライエフスク収容所	西 区	石井 国九
中川 東	陸軍 一等兵	二〇・六・三〇	台湾台中州第七十一師団第	〃	中川 文助
佐々木 寿男	陸軍 伍長	八・三・九	一野戦病院	〃	佐々木 英安
佐々木 亀吉	陸軍 一等卒	明治二八・九・九	満州熱河省喜峯口	〃	佐々木 英実
佐藤 岩太郎	海軍 水兵長	昭和二〇・一一・一九	日清戦役	〃	佐藤 ソノ
菊地 良夫	陸軍 伍長	二〇・四・一九	稚内沖	〃	菊地 作右門
児玉 良作	陸軍 上等兵	六・一〇・一五	満州鉄嶺通塗	下白滝	児玉 作治
岩岡 隆雄	陸軍 伍長	二〇・五・四	沖繩那覇市	日白滝	岩岡 マル
相馬 愛蔵	陸軍 一等兵	一八・四・一三	遠軽町箱崎病院	支湧別	相馬 康晴
牧野 善兵衛	陸軍 伍長	二〇・一・二〇	フイリピン	〃	佐藤 ニキ
遠藤 長三郎	陸軍 兵長	二〇・五・四	沖繩本島	上支湧別	遠藤 栄
遠藤 長五郎	海軍 兵曹	二〇・八・七	朝鮮沖	〃	遠藤 栄
原 昌一	陸軍 一等兵	一九・一〇・九	遠軽町付上病院	〃	原 ユキ
小倉 正雄	陸軍 曹長	二〇・五・二〇	沖繩本島	〃	小倉 ニタカ
伊達 隆	陸軍 兵長	二〇・二・二六	比島ルソン島リザール州ア	〃	伊達 トミノ
葛原 庸一	陸軍 伍長	二〇・五・一〇	沖繩那覇市	〃	葛原 サヨ
大倉 政彦	陸軍 伍長	一九・六・七	インド、インパール作戦中	〃	大倉 衛
辻 留雄	陸軍 上等兵	二四・四・二〇	北支那	〃	辻 みん
佐藤 晃昇	陸軍 上等兵	二〇・六・五	沖繩本島	〃	佐藤 北開
中田 敏雄	海軍上等機関兵	二〇・二・二五	比島コレヒドール島	上白滝	中田 清一
早川 好道	陸軍 上等兵	一九・一一・七	中国広西省桂林県	〃	早川 みつえ

上村 久治	陸軍上等兵	昭和一九・八・二〇	ニューギニア島パラム、ウ イック	上白滝 上村 繁政
大庭 真一	陸軍一等兵	一八・九・二四	上湧別町厚生病院	奥白滝 大庭 茂
伊藤 菊治	陸軍兵長	二〇・六・一八	沖縄本島	東白滝 伊藤 エツ
竹田 栄	海軍一等機関士	二二・一〇・三	東京陸軍病院	天狗平 竹田 実

遺族会

戦後結成された遺族会は遺家族の相互扶助を目的とし地道な援護をつづけている。遺族会長は鈴木長作で、年一回総会がもたれ、北海道護国神社例大祭の六月五日には毎年数多くの遺族が参列し、感激をあらたにしている。

太平洋戦争

昭和十六年十二月八日午前七時のラジオ臨時ニュースは「大本営陸海軍部発表十二月八日午前六時、帝國陸海軍は今八日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入れり」と報道、米英両国に対して宣戦が布告され、第二次大戦へと発展してしまった。真珠湾の奇襲攻撃をはじめとして、マレー半島、シンガポール、グアム、ウェーキ島、ニューギニア、フィリピン、ジャワ、スマトラと着々攻撃し、太平洋に散在する島々もわが陸海軍によって開戦来一年余にしてその大部分を征服してしまった。しかし昭和十七年八月米軍のガダルカナル島反攻以来、米軍の戦力立直り、わが軍力の低下するのと反対にますます増強され、制海、制空権をも握った米軍の思いのままの攻撃に急転し、昭和十八年五月アッツ島の日本軍玉碎もあって、もはや戦局全く敗色濃いものがあった。さらに有力なる米機動艦隊は昭和二十年三月硫黄島に、つづいて四月沖縄に上陸し、日本軍守備隊の壮烈なる玉碎によって戦争の様相はいよいよ終末に近づいた。沖縄の次は日本本土に対する米軍の進攻であった。米国は昭和二十年十一月一日九州上陸決行を期していたというが、これよりさき八月六日、テニアン島基地

を発進したB29爆撃機「エノラ・ゲイ号」が運んだ重量五トンの原子爆弾を広島上空で投下、TNT火薬二万トンの破壊力と華氏二万度に達する強熱によって、瞬時にして広島全市を灰燼に帰し、焦熱地獄と化し、およそ十三万人が死傷した。ついで三日後の八月九日、長崎に二発目の原爆が投下され、ついに八月十五日、日本は無条件でポツダム宣言を受諾したのち終戦の詔勅によりいっさいの軍事行動に終止符が打たれた。やがてアメリカ軍が日本本土に進駐、昭和二十年十月には本道の首都札幌にも進駐しはじめ、北海道司令部を設置、歴然として占領下に入つたのである。

国民義勇隊

昭和二十年三月米軍が硫黄島に上陸しわが軍を玉砕に追いこむころ、日本は国民皆兵となつて本土防衛に當ることを目的として国民義勇隊を組織することが閣議で決定、各地においてその編成が急がれた。

遠軽町時代であつた白滝にも同二十年六月「日本義勇隊遠軽大隊白滝中隊」が編成され、中山親孝中隊長以下各部落ごとに小隊を編成、隊員は男子六十五歳以下、女子四十五歳以下とされていたが、この義勇隊は実質的にはほとんど活動しないまま終戦となり解散となつた。

銃後奉公会

昭和十二年七月日華事變勃発とともに目を追うて出征軍人の故郷を離れる姿が多くなつていった。しかし働き手をとられた留守家族は、陰に陽に苦境に立たされ、ひいては出征兵士をして後顧の憂いを抱かしめることにもなるとして、銃後の結束せる後援によつて銃後の守りを一層かため「国民奉公ノ誠ヲ效ス」を旗標に、同十二年十月遠軽町銃後後援会が誕生した。同後援会が行なうおもな事業は次のようなものであつた。

一 軍事援助

二 軍事扶助相談所ノ開設

七 社会文化

- 三 出征兵遺家族ニ対スル労力援助
- 四 応召軍人主婦ノ情操觀念ノ涵養
- 五 帰郷軍人ノ速報周知
- 六 帰還兵ノ歡迎
- 七 銃後援護託児所ノ設置

しかしその後一、二年を経てからさらに内容の充実強化をはかつて、銃後奉公会とその名も改められた。当時遠軽町であった本村は「遠軽町銃後奉公会」の白滝支部となり、昭和十四年四月一日の結成式で、会長に遠軽町長の三橋寛五郎が、白滝支部長には工藤大然が選出されている。

銃後奉公会の会則の第三条にその目的が次のようにうたわれている。

遠軽町銃後奉公会会則第三条

本会ハ國民皆兵ノ主義ト隣保相扶ノ精神トニ基ツキ、掌郷一致兵役義務履行ノ準備ヲ整フルト共ニ軍事援護ノ完備ヲハカリ益々義勇奉公ノ精神ヲ振作シ、國民精神總動員運動ノ実践ヲ期スルヲ以テ目的トス

また第四条には次のごとき事業計画が記されている。

- 一 兵役義務心ノ昂揚
- 二 兵役義務履行ノ準備
- 三 隣保相扶ノ道義心ノ振作
- 四 軍事援護思想ノ普及徹底
- 五 現役並ニ応召軍人ノ遺族、家族ノ援護
- 六 傷病軍人並ニソノ遺族、家族ノ援護
- 七 現役並ニ応召軍人及ビ傷病軍人ノ遺族、家族ノ慰問、慰籍、慰慰又ハ労力奉仕、ソノ他家族ノ援助

八 戦傷病死軍人ニ対スル慰霊弔祭

九 現役並ニ応召軍人及ビ傷痍軍人ノ遺族、家族ノ身上及ビ家事相談

一〇 軍事援護事業ノ連絡統制

一一 國民精神総動員運動ノ計画樹立並ニソノ実践

等々、遠軽町に居住する全世帯主をもつて組織された奉公会は各部落区長、在郷軍人会、国防、愛国両婦人会等との連繫を保ちつつ事業の遂行にあたつた。

思えばこれら愛国、国防両婦人会の働きによつて一業主義、一戸一品献納運動が進められたり、また街頭にあるいは戸別に千人針を哀願する婦人の姿が目立ちはじめた。これは千人の女性が一枚の布に一针ずつ赤糸で結び目をつくり、あるいはこの布に死線（四銭）を越えるというので五銭玉を、苦戦（九銭）を免れるようにと十銭玉を、そつと縫いつけてくれる人もあつたが、これを兵隊が身につけていれば安全だということで、迷信とは知りつつも銃後の守りをつとめる人々にとっては真剣なおもちであつた。戦争の激化によつて出征兵士の数もふえ千人針の量もおのずから急増し、一人一针では間に合わなくなり、トラ年、タツ年生れの女性は自分の年齢だけ結び目を縫うなど、その方法も変つていった。

また慰問袋の調達も婦人会の重要な仕事であり、本村においても毎月のように心をこめた慰問の品々を袋に納め、異境の地に苦しむ兵士たちに送り届けられていた。

監視所

昭和六年の満州事変につづいて翌七年上海事変が始まるや国際情勢に暗雲たなびき、翌八年三月日本は国際連盟の脱退によつて広義国防が唱えられるようになった。爾来府県単位で防空演習がはじめられたが、

昭和十年七月北海道一円とした防空演習が初めて施行され、同十二年防空法が公布され、こえて同十四年一月警防団令が公布施行されるや、従来の消防組と防空体制を一本化したものとし統一ある活動を求め、これによって警報の伝達、燈火管制の徹底をはかったり、さらに防空監視網の充実を企画した。

昭和十四年本村内唯一カ所奥白滝駅前に監視所が設置され、警防団の指示にもとづいて終戦に至るまで地元警防団員あるいは駅職員によって防空監視の目を光らせていた。

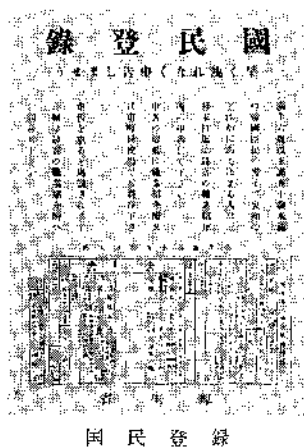
国民登録

昭和十四年二月勅令第五号をもって国民職業能力申告令にもとづき、満十六歳以上満五十歳未満の日本国民男子で、技術系現職者および前歴経験者ならびに理工科系卒者の登録を義務づけ、部門別登録者のリストを作成、時局の非常事態にそなえ対処したのである。

配給切符・通帳制度

日華事変も長期決戦の様相を呈しはじめ、甚には軍需工場動員法が発動され一部工場が管理され、綿製品が国家管理となるなど物資の不足がしだいに深刻化していった。昭和十四年十二月白米が禁止されたのははじめとして、翌十五年六月東京、大阪などの六大都市において砂糖、マッチの配給に切符制を採用、この月北海道では他府県にさきがけて米の配給通帳制がとられ、節米運動も実施された。

こうして「国民総動員」をスローガンに、昭和十六年四月に発せられた「戦時生活必需物資統制令」のもと、あらゆる物資の切符制、通帳制が次から次と実施された。



全国的な米の配給制はもちろんのこと、酒、菓子、味噌、醤油、食用油、食塩などのほか、昭和十七年二月衣料品に点数切符制が採用され、毎日の生活はついに切符なしでは何物も購入できない深刻な状態であった。

第七章 自衛隊

昭和二十五年七月、占領軍総司令官マッカーサー元帥は、国内治安維持を理由に警察予備隊新設の勧告を行なった。かねて政府は国家地方警察および自治体警察の警察力を補強する意図もあつたので、同年八月十日政令第二百六十号をもって警察予備隊令を公布、ただちに警察予備隊が発足した。かくて国内の主要地に駐屯して、アメリカンスタイルの隊員が街を闊歩する姿がここかしこに見られるようになった。道内においては昭和二十六年より駐屯地の設定をみたのである。

昭和二十七年八月保安庁の発足によって警察予備隊を解散して保安隊と改称、さらに昭和二十九年七月法律第百六十五号自衛隊法によって保安隊は自衛隊に変つたのである。自衛隊は陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊の三種に分れており、国土の自衛はもとより、災害時における救援、公共土木工事の実施などその他あらゆる分野にわたって公共的な要請には活発な支援活動を展開している。こうした自衛隊の善意に対し、各市町村がそれぞれ一丸となった協力会結成の動向がみえはじた。

白滝村自衛隊協力会 各地において自衛隊協力会の設立がみられたころ、本村においてもこれが設立に意を注ぎ、昭和四十年六月十二日開催の区長総会において議決、ここに白滝村自衛隊協力会が発足したのである。

白滝村自衛隊協力会会則

(名称)

第一条 本会は白滝村自衛隊協力会という

(事務所)

第二条 事務所は白滝村役場に置く

(目的)

第三条 本会は、自衛隊協力会連轄地区連合会と連けいを密にし、第二十五普通科連隊管内の各市町村自衛隊協力会の連けい協調を図り、自衛隊の諸活動に協力し、わが国の防衛に貢献することを目的とする

(事業)

第四条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行なう

- (一) 防衛思想の普及高揚に関すること
- (二) 第二十五普通科連隊の活動に対する各種支援協力に関すること
- (三) 自衛隊員の慰問、激励に関すること
- (四) 会員の親睦に関すること
- (五) その他前条の目的達成にふさわしい事業

(会員)

第五条 会員は木村居住者で、本会の趣旨に賛同した者とする

(役員)

第六条 本会に次の役員を置く、

- (一) 会長、副会長、理事若干名、評議員一四名、監事二名
- (二) 評議員は木村区長をもってあて、会長、副会長、理事及び監事は評議員会で選出する

(職務)

第七條 会長は本会を代表し、会務を総括する

二 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは、その職務を代行する

三 理事は理事会において本会の事業の遂行をはかる

四 評議員は評議員会において本会の方針、会則、事業及び役員等を決定する

五 監事は本会の会計を監査する

(任期)

第八條 役員の任期は一年とし再選は妨げない

二 補欠により選出された役員の任期は前任者の残任期間とする

(事務局)

第九條 本会の事務を処理するため事務局を置き、事務局長は会長が指名する

二 事務局に関する規定は会長が別に定める

(会議)

第十條 本会の会議は、評議員会及び理事会とし、会長が必要と認めたとき開催するものとする

(議事)

第十一條 評議員会及び理事会の議長は会長とする

二 議事は出席者の過半数で決し、可決同数のときは議長がこれを決する

(事業年度)

第十二條 本会の事業年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る

(収入)

第十三條 本会の経費は補助金、寄付金、その他の収入をもってあてる

附則

この会則は昭和四十年六月十二日から施行する

本村出身の自衛隊員数は、陸上自衛隊遠軽駐屯地広報班の調査によると下のとおりとなっている。

本村内における自衛隊相談所は左記のところが委嘱を受けている。

白滝地区 高橋次男宅（中央区）
 上・奥白滝地区 前田忠治宅（上白滝）
 上支湧別地区 青野寅一宅（上支湧別）

第八章 宗 教

未開の地北海道に渡り開拓の鉾をおろした往時の開拓民は、藁薙と生い茂る密林に入地し、粗食にあまんじて木々を倒し耕地づくりに血の出るような苦勞の連続であったある日、ふっと思ひ出したのは国の安泰、わが家の興隆安全を願う神社の建立であり、先祖の霊をまつり、おのれが心のよりどころとしての寺院の建築であった。開拓初期においては生活上欠くべからざるものの一つであったのである。こうして出来た神社を中心として春秋二回の祭祀日を定め、部落こそって一日ゆっくり勞をいやしたのである。

本村内に点在する神社、寺院等は次のごとくなっている。

白滝神社 大正二年十二月二股市街の有志中心となり神社建立の計画を樹て、まず白滝原野一千八百六十八

白滝村出身自衛隊員数

区分	陸	海	空	計
入隊年度				
昭和 26	1	—	—	1
〃 29	2	—	—	2
〃 33	1	—	—	1
〃 35	1	—	—	1
〃 37	1	—	—	1
〃 38	1	—	—	1
〃 39	4	—	—	4
〃 40	1	—	—	1
〃 41	—	—	1	1
〃 43	1	—	—	1
〃 44	4	—	—	4
〃 45	1	—	—	1
計	18	—	1	19

注 空白年度は入隊者なきことを示す。



旭台一西區神社の焼失前

番地内（現・中央区公営住宅団地下角付近）を敷地と定め、とりあえず天照皇大神と書いた神籙を建て信仰の基を定めたが大正六年五月の大火により焼失、大火後敷地を二股市街の東北、白滝原野一千六百五番地の三に変更、敷地を園出勝太郎より借用、市街地住民の特志寄付により三・五坪の叢祠を建立した。これまで二股神社といっていたものを白滝神社と呼称変えた。時代の流れとともに白滝市街の趨勢西区に向って栄えるに及んで神社位置移転の話有志の間に持ち上り、藤本輝彦らが發起人となって移転反対派を説得、市街地旭台の及川新太郎私有地を借りうけ市街氏子の寄付によって三十坪の神拝殿を造営、昭和三十四年七月三十日及川神官の手によって遷宮式が行なわれた。

昭和四十三年六月三日午後零時四十分棟続きの社務所より出火、日中であつたが水利の便悪く全焼してしまつた。原因は及川新太郎神官の火の不始末とわかつた。神社の全焼によって市街は社のない街となりどころなく空虚な念にかられていたが、昭和四十四年春にわかに神社再建の声たかまり、藤本輝彦ら氏子總代の奔走により特志、一般寄付によつて同年九月十九・五坪、総工費およそ五百万円を要した神社が建てられた。この機に奥白滝神社の統合も成立した。例祭日は大正六年の大火以来五月二十三日を鎮火祭とし、秋祭りは当初九月一日と定めていたが、大正七年八月に開かれた白滝部落總會において祭典日変更の動議が出され、結局この年より九月十五、十六日の両日に変更された。その後昭和に入つてこの祭典日にも幾度となく変動があつたが、新神社再興を機会に再び九月十五日に、春祭りは六月十五日

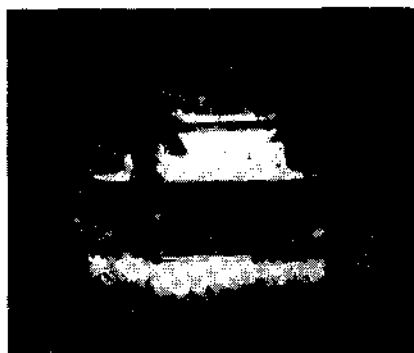
にと氏子總會において決定された。

上白滝神社

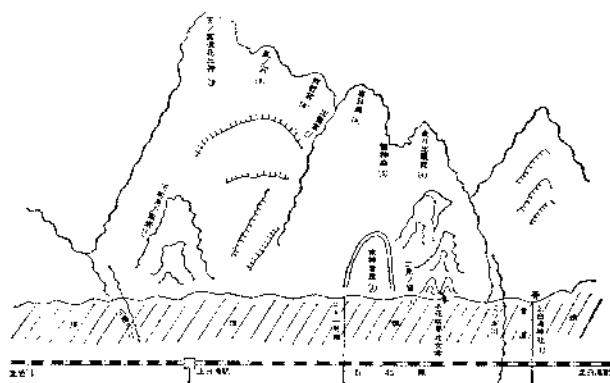
明治二十六年滝ノ上八号駅通所設置により駅通取扱人として中沢沢治入所するやまもなく、来住民および往来人の安寧を願つて隣接の滝ノ上橋付近に天照大神を勧請して神齋を建てたのが初めてである。明治四十五年紀州団体入地するや植芝盛平团长持参の守護神、軸物の建速須佐之男命を合祀、大正四年六月のある日、時の神官川村照喜雲夢ありてさっそく白滝山中に靈所を設け祭神し、同年十一月御大典記念として祀を建て衆人の希望もあつて倉稲魂命をも合祀し以上の三神を祭祀した。大正五年九月靈所内に神社の移転を氏子にはかり現在地に仮拝殿を建て、滝ノ上より遷宮す。大正八年五月十二坪の拝殿を新築した。

上白滝神社靈所設定の理由を神社記録より見ると、

「(前記略) 大正四年六月十五日ノ晩ニ靈夢アリ曰ク神社現在地ニ白雲霧中ニ数多白犬



上白滝神社



上白滝神社靈所 12 社略図

ノ神人集合シテ鎮座セル処ヘ照喜通り係リケル時ニ老人ノ神人高ラカニ照喜ヲ呼ビ汝ノ来ルヲ待チテ居ル処ナリ近ク来レト云フ照喜我ハ素服不礼ナレバ出直シテ参ラント云フヲ神人、イヤ氣仕ヒナシ早ク近ウ近ウト云ウ照喜恐縮ナガラ末座ニ平伏スルト神人曰ク我々ハ当原野ノ守護神ト成ルモ他ニ鎮座適当ノ地ナシ即チ此地ハ清浄ナル故ニ鎮座適当ノ地ナレバ此処ヲ鎮座ノ地ト定ムルナリ然ルニ汝ニ見セル処アリ此処ヘ来レト云ヒナガラ上座ノ神人立テ照喜ノ手ヲヒキ白幕ノ中ニ誘ハレ見レハ殿飾ナル神前アリ謹而参拜スルト其次ニ又白幕アリテ誘ハレテ其内ニ入ルト又前ノ如キ神前アリ何様ニシテ何回トナク神前ヲ参拜シテ最終ニ高キ奥ノ院ト思シキ処ニテ我ハ此内ナリトテ其筑内陣ニ入り賜フ、照喜茫然トシテ居ル中夢正ニ醒メタリ照喜露夢ナリト感ジテ翌早朝当地ニ至リ其処ヲ探検スルニ草木繁茂シ昼高暗クシテ咫尺ヲ弁ゼサル程ナレバ善惡分ラズ尚又衆人ノ賛成モナケレバ時機ノ至ルヲマツ内其年九月下旬或日一天晴レテ四方雲ナキ時ニ現在神社ノ裏沢ヨリ柴雲一叢立登リテ白滝山ヲ覆フ照喜足レヲ見テ再度踏査シテ遂ニ大正四年十一月御大典記念トシテ白滝山天ノ宮及十五末社ヲ勧請セリ……後略」とある。

上支湧別神社 大正二年より上支湧別に団体移住がはじまり、部落の氏神としての祭神が、三石音次郎、近喜一郎、福田彦藏らによつて白滝原野一千三百七十六番地の学校用地内一角に天照皇大神と書いた神籬が建てられた、大正三年六月十七日と記録が残っている。大正六年の大火後家庭学校用地公園内に移転したが、この折、福田彦藏伊勢神宮参宮のみぎり大麻を受け、持ち帰り御神体とした。昭和十五年現在地に移転、社殿を造営した。例祭日は六月十五日と定められている。氏子総代は山崎政治で歴代祭主は川村照喜、永山千賀治、上村字久太、原田天象（現在）である。

御嶽神社

大正四年四月十日の創立で原田安五郎の開基にして、開拓農家



上支湧別神社



チトカニ神社

の守護神として原田の屋敷内に祭ったのはじまる。祭神は御嶽大神、豊受稻荷大神、天照皇大神で、現祭主原田天象である。

千蔵華爾神社

大正三年大庭重次、岸利七らによって奥白滝の現在地大庭の所有地内に明治天皇を祭祀、近くのチトカニウツ山をもじってチトカニ神社と号した。昭和十五年秋、時の氏子総代大庭千代吉、岸浦吉、丹野清七らが発起人となり寄付を仰ぎ神社本殿の新築を完了、この折古案大神を合祀した。例祭日は五月二十三日と九月十五日に決めていたが、近年部落人口とみに減少し神社維持に重荷を感じ、昭和四十四年九月白滝神社に合併となった。

高台神社

別名天狗平神社とも呼ばれる高

台神社は大正七年、時の氏子総代菊地三蔵、松田与蔵、横田金吉、古関六兵衛、佐藤子之助、斎藤善作らが発起人となり寄付を集め建立したもので、同地に開拓者として入地していた上村字久太は昭和十八年室蘭市輪西の稲荷神社に転出するまで開拓のかたわら神官として高台はもちろん、奥白滝、上支湧別方面の祭司を勤めていた。大正九年二月上村の手によつてはじめて次の五社が合祀された。すなわち天照皇大神、豊受稻荷大神、日本武尊、大国主命、少名彦名命の各神で、その後入植者の手によつて御魂を合祀するものあいづき、今では山の神をはじめ八幡大明神、春



高台神社



下白滝神社

日大明神、天之葉電之神、木花咲耶比女命の五社を加え計十社が合祀されている。例祭日は当初春秋二回であったが、最近に至り人口減を理由に八月十六日の年一回とした。

天狗嶽神社

昭和八年四月十五日天狗岳山頂国有林地内に建立したもので、皇太子殿下の無事ご誕生とすこやかなご成長を祈念し、及川新太郎神官の発願により、四尺×五尺の社が氏子の力添えによって出来上った。祭神は天照皇大神、月読大神、大山祇神、水波の女神、猿田彦神の五社である。

下白滝水神社

村名発祥の滝付近にまつられた水神社は古来木材流送における最大の難所でもあった。造材業清水喜太郎の手によって流送の安泰をこめ水難の守り神を祭ったものである。大正二年春のことである。その

後下白滝にも入植者増加にともない部落の守護神とした。大正十一年八月の水害によって右でつくられていた水神流失し、時の氏子総代新保国平、菊地作右衛門らが中心となって小さな木製の神殿を再建した。これまで川向いにあったものを川の手前に移したが、昭和四年の鉄道敷設工事によって再度移転、現在地（河川堤防敷地内）になった。祭神は御井神、水速女命、天之忍雲根神で、例祭日は九月五日である。

旧白滝神社

大正二年七月旧白滝十六線白滝原野一千八十六番地に明治天皇と書いた神籬を建てたのが初めてである。しかし国有地内であったため移転が急がれ、旧白滝教授場が出来るに及んで大正四年教授場付近に移転、安産の神、木花咲耶比女命も部落の守護神とした。ついで昭和十二年四月予算五十円にて

丹羽実市らが中心となり部落の寄付を仰ぎ神殿を建立、昭和十五年紀元二千六百年記念に昭憲皇太后をも祀り三神合祀し、例祭日も九月一日と定めていた。昭和三十五年北見パーライト工場建設による用地買収によって隣接地に神社移転となった。

支湧別神社

井村謙二が郷里奈良県博西神社の分霊を持参、支湧別五線百九十六番地に藁祠を建て祭祀したのが初めて大正五年三月のことである。翌六年の大火後部落の守護神とすべく現在地に移転、昭和十五年には部落民の寄付によって拝殿も完成、例祭日は六月十五日としている。

昭栄神社

支湧別五線沢通称昭栄部落に建てられた昭栄神社の発端は、昭和十三年五月十五日天狗平方面の開墾火と五線沢の開墾火とが合流、昭栄部落の開拓合宿所など四戸が焼失、このことにより部落内に山の神を祀ることに部落総会で決定、同年味戸兼一部落会長が世話人となって神社を建立した。祭神は天照皇大神、豊受大神、大山祇神で、祭日は毎年五月十五日と決めた。

北支湧別神社

大正五年三月神籬を建て、大地御祖神を祭祀し地神とした。昭和二十九年およそ九坪の部落会館兼用の拝殿を建立、今日に至っている。

御嶽教豊受教会

昭和十一年九月二十六日の創立にして、御嶽大神を祭神とし原田天象の開基である。

石北トンネル山の神

石北トンネル遠軽口本工事着工の昭和四年七月、工事の安全を願って坑口の上に山の



支湧別神社



本 宗 寺

神を祀り工事の再着工日を記念して毎月二十四日を例祭日としていたが、昭和七年石北線開通後まもなく高台神社に合祀してしまった。

真宗大谷派本宗寺

大正三年宗降最澄開教の目的をもって二股市街（東区）に内地、小さな説教場を創設したが大正六年の白滝大山火によって焼失、同年支拂別一線に移転、堂宇を再建し布教伝導に従事、公認説教場たるの出願をなしたが認可を見ずして昭和二年一身上の都合により転出した。同年六月加藤随真入寺したが同年東旭川村にて開教のため辞任、同年六年藤井宗一に権利譲渡した。この時無資格僧として同居していた藤原千代吉と藤井との間で後継住職にまつわるトラブルが起り、ひとり住職のみならず檀信徒これに加わり結局二派に分

裂、藤原は市街地に一寺を建立、藤井がそのままおさまった。その後藤井は檀信徒総代の前田勘治、本田農、小山田清吉ほか有志と諮り、同十六年六月白滝原野一千三百十二番地の三十八、つまり市街地南區に堂宇の移転を行ない、同十八年一月二十九日真宗大谷派白滝教会として公認された。翌十九年六月藤井の応召入営によって牧野好潤住職代務者として着任、同二十七年三月田中霞住職として入寺した。同年六月十七日檀中の好意もあって本宗寺として寺号公称が行なわれ今日に至っている。守り本尊は阿弥陀如来で、本堂坪数三十三坪、庫裡三十一坪を有し、西尾博文が責任役員となっている。檀信徒数およそ五十戸余り。

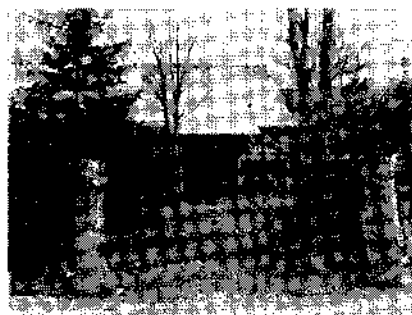
真宗本願寺派本願寺

開基住職杉谷義憲はさきに奥白滝に入植していた好井清哲より要請を受け布教伝導のため東旭川村より奥白滝（白滝原野二百七十

八番地に入地、説教所を開設した。大正六年七月のことである。同年十一月本堂を建立、昭和二十三年十月三十日寺号公称の認可をうけて本照寺と号した。しかし地理的に白滝市街地より遠隔のため伝導思うにまかせず、さらに寺門の興隆を願って檀信徒の協力を得て昭和三十二年五月白滝市街西区に移転、二十八・五坪の庫裡併用の本堂が再建された。昭和三十七年八月杉谷義憲老衰のため死去、佐呂間町西光寺内藤学印が代務住職としておよそ二十余戸の檀徒を代務していたが昭和四十五年秋ついに廃寺とした。

真宗出雲路派法海寺 昭和十年十月本

宗寺よりタモトを分った藤原千代吉（最念と号した）は、新寺建立の意欲にもえて市街地南区の現在地に平家三十五坪の教会所を建て檀信徒・丸となつて伝導に力を入れ、その後およそ五十五坪の増築を加え昭和十四年十二月には説教所としての正式認可も受け、二代住職清念になり昭和二十四年二月十一日真宗出雲路派法海寺として寺号の公称が行なわれた。阿弥陀仏を本尊となし、役員の構成は責任役員井内忠男、総代中山安徳、村井喜兵衛、渡瀬正司、今野勇太郎、中沢政春となっており、檀信徒数五十余戸と称している。



法海寺



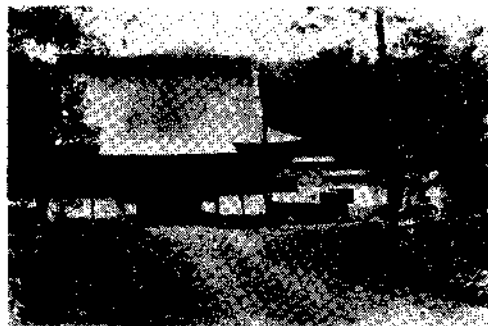
本照寺

曹洞宗白滝山祥巖寺

大正二年三月十佐林貞賢は秋田団体の一員となつて支湧別六線に入地、開拓のかたわら開教の志を立て自宅の一部を改造して假本堂となし、曹洞宗白滝説教所として布教伝導に従事した。これ非公認ながら白滝最初の寺といえよう。

大正六年五月白滝一門を襲った大山火により説教所も烏有に帰したが同年再建、大正末期に至り白滝市街地に移転の話が具体化した。昭和二年二月四日布教伝導中、雪道にたおれ他界した。貞賢の四十九日、信州人殿村梅溪が着任、翌三年白滝市街東区二千六十番地に解体移転したが翌四年七月殿村は十勝方面に転住となり、同年九月根室より小出月江就任す。同七年五月時の總代布田富藏、太田喜代美、阿曾寅次郎ほか有志の計らいにより檀家の浄財によつて五十坪余の本堂を建立、昭和十七年五月九日宗教法人白滝山祥巖寺の寺号公称が認可さる。小出住職は昭和二十二年推されて村長となり、村の理事者として、はたまた一山の住職として精力的に活動を続けたが昭和三十三年三月村長を辞任、翌年七月一身上の都合で住職の座も離れた。同七月十四日権利を譲り受けた中村友禰は旭川より着任し後任住職として今日に至っている。釈迦牟尼仏を本尊と仰ぎ三千三体の觀世音菩薩像が安置されている。檀家總代は野沢正市、布田勇、中安文治郎、出口俊平、山本善七、太田清、菊地作右衛門、斎藤喜代太郎であり、檀信徒数百八十余戸である。

昭和四十四年の總代・世話人会において老朽化した庫裡再建の議が決定、庫裡建設委員会を結成、ただちに寄



祥 巖 寺

付勧募が行なわれ、昭和四十五年七月六十八坪余の庫裡が竣工した。

高野山大師教会白滝支部

古義真言宗高野山大師教会白滝支部は本村中央区にあり、弘法大師、不動明王を守り本尊として昭和十二年五月十八日創立のものである。主管者は川口法尊で信徒数五十戸を数えているが、近年新布教の場を求めて北見市に定住、法務あるごとに出張してきている。

天理教白滝分教会

大正六年三栖クラが支湧別九線に布教のため入地、同九年実母の三栖イト入地しバトンがタッチされて本格的な布教がはじまった。今日見るところの分教会の礎ここにはじまったといえよう。同十五年信者の漸増にともない白滝西区一千六十四番地に居を移し天理教白滝集談所を設置、昭和五年十月十八坪の



新築前の白滝分教会

神殿を新築、翌年天理教白滝宣教所に昇格、たゆまぬ布教が実り昭和十一年三月二十七日宗教法人天理教白滝分教会として公認された。その後帯広在住の信者三栖久子、斎藤義明より白滝市街南区に八百五十坪余の土地寄進があり、同地所に一般信者の寄付によって昭和四十三年十一月六十六坪の神殿および住宅が新築された。祭神は天理王尊、教祖、御霊の三神で分教会長三栖政雄、責任役員には松井清兵衛、太田伝次郎がなり信者はおよそ三十余戸で、例祭日は毎月十六日である。

創価学会遠軽支部白滝地区

静岡県下大石寺を総本山とする日蓮正宗創価学会は折伏を旨としてしだいに信者を集め、本村内においても昭和四十二年五月創価学会遠軽支部白滝地区を結成、現在六十世帯に及ぶ会員に拡大されている。地区部長は浦川清司、文化部総括責任者渡辺俊勝である。

馬頭観世音碑

開拓初期における労働力としての馬は開拓者の経済上容易に飼育することはできなかったが、馬の存在価値は農家の経済を左右するほど貴重な財産でもあった。開拓が進むにつれて人力によるところの開墾のますます非能率的なるを知るや、年とともに馬の飼育がさかんになった。夏期は農耕に、冬は造材出稼ぎ馬として、あるいは馬をもつて本業とする馬搬業など、その貢献度はきわめて高かった。こうしたことから馬の無事息災を願うものはひとり飼育家のみに限らなかつた。落命した愛馬の供養と安泰をこいねがう馬頭尊碑が当然のごとく各部落に建立されたのである。今日なお年に一度、主として孟蘭盆の日を例祭日と定めそれぞれ供養が続けられている。村内に建立されている馬頭尊碑は次のとおりである。

所在地	建立年月日	例祭日	建立者
市街地東区	大正三	八月一五日	市街地愛馬組員
田白	不明	八月一五日	下白滝、田白滝愛馬組員
上白	昭和一〇・一〇・一五	八月一五日	上白滝愛馬組員
奥白	昭和二七・八・七	九月一〇日	奥白滝愛馬組員
天狗	昭和二三・八・七		天狗平、東白滝愛馬組員
支湧別	大正一三・九・一七	八月一六日	支湧別愛馬組員
上支湧別	大正一四・八・一七	八月一七日	上支湧別愛馬組員

遠軽キリスト教会

遠軽学田に創設された北海道同志教育会はその指導者のほとんどがキリスト教崇拝者であつたことから開拓の進展とともにキリスト教が栄え、本道においては遠軽と浦臼町（樺戸郡）のみが教会と村が一緒に発展した特異なケースとして意義深い。明治三十八年七月十日キリスト教遠軽教会が設立、翌年伊達村

より山下善之が牧師として招聘され、明治四十五年教会信者の慈善によって教会堂が建設されたのであるが、創立当時伝導教会であったものが信者の増加にともない大正十一年四月独立、自給教会として大きく飛躍していた。

遠軽キリスト教会による本村への直接的な宣教活動はあまりみられなかったようであるが、大正五年上支湧別に創設された家庭学校白滝第二農場において農場生徒ならびに付近住民青少年を対象としてキリスト教によるところの日曜学校を開き、青少年の情操教育に地道な伝導がなされていた。

救世軍遠軽小隊教会と白滝日曜学校 明治二十八年九月英国人によってわが国にはじめて救世軍がもたらされて以来、各地を宣教し開戦式（教会設立）をあげた。大正二年十一月、遠軽在住の篤信家大江弥八の懇請によって救世軍遠軽小隊が開戦式をあげ各地を巡り歩き、機関紙「ときのこと」『平和の福音』を手に伝導にはげんだ。毎年十二月に行なわれる救世軍の『社会鍋』活動は全国的に展開されるもので、今となってはなじみの深い行事の一つでもある。

青少年の情操教育を目的とした伝導活動も活発に行なわれ、昭和二十九年から三十四年に至る間毎月一回日曜を利用して本村西区川上正志宅において日曜学校が開かれ、三十名から多い時で七十名近い子供たちが参集、遠軽小隊長西村俊治中尉による伝導がなされていた。また救世軍本営の後



救世軍の冷害農家慰問（白滝役場前にて）

援をうけて隨時網走支庁管内の冷害農家、開拓農家を対象に慰問も行なわれており、本村においてもこれまで幾度となく慰問を受けているが、近年においては昭和三十九、四十、四十二年にそれぞれたくさんの衣料品が冷害被災農家に届けられ、暖かい手を差しのべられた農家の感謝をうけた。

墓地 本村に所在する墓地は白滝墓地、旧白滝墓地、上白滝墓地、北支湧別墓地、上支湧別墓地の五カ所で、このうち最も古いものは旧白滝墓地で明治三十七年二月殖民地として解放された折、墓地用地として区画割りされ、以来付近住民が使用している共同墓地である。他の四墓地は明治四十四年の殖民地増画の際それぞれ設定せられたものである。

白滝墓地・白滝茶毘場

三号線南端国有林界寄りに位置していたが、戦後開墾増反地として周囲開拓せられるに及んで墓地移転の議持ち上り、昭和二十九年一月の村議会において墓地（総面積一町六反五畝二十二歩）廃止を可決、新墓地として旧墓地のおよそ二〇〇畝北寄り、白滝原野一千六百六十六番地内（面積一町二反五畝）と定め、墓所の移動や改葬作業等が行なわれた。

これよりさき、これまで死者を露天において火葬に付していたものを、時代の要求に従って火葬場の設置



白滝茶毘場



上支湧別火葬場

はむしろ遅きに失した感なきにしもあらず、昭和二十八年八月の村議会においてこれが可決され、同年十一月白滝茶屋場として寝座棺兼用の火葬炉一基を備えつけ、休息所を含めた十二坪五合の火葬場が新設された。

上支湧別火葬場 白滝火葬場が完成されてより村内においては比較的人口の多い上支湧別にも火葬場設置の要望意見が出され、昭和三十三年上支湧別墓地一角に十二坪の火葬場が設置された。

墓 地

名 称	所 在 地	地 積	主たる使用範囲
白滝墓所	白滝東区一白滝原野一六六番地内	三、七五〇坪	白滝市街
旧白滝墓地	旧白滝 白滝原野三三五番地	一、五〇〇坪	旧白滝、下白滝
上白滝墓地	上白滝 白滝原野三六三番地 七六四番地内	三、四五二坪	上白滝、奥白滝、東白滝、天狗平
支湧別墓地	支湧別九線 白滝原野三四〇番地 三三九番地	三、四七二坪	支湧別、上支湧別
北支湧別墓地	北支湧別 (未公認墓地)		北支湧別

火葬場

各 称	所 在 地	面 積	建設年度	備 考
白滝茶屋場	白滝原野一六六番地内	二二・五坪	昭和二八	塩原式寝座棺兼用運台中付火葬炉
支湧別火葬場	白滝原野三三九番地内	一一・〇坪	昭和三三	

葬祭壇

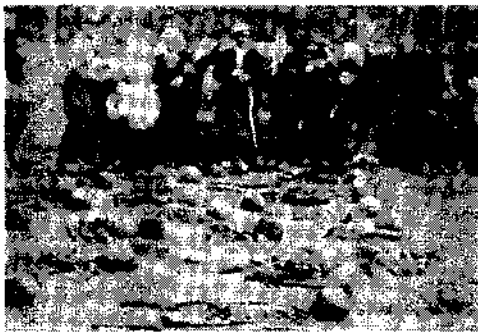
戦後あらゆる物資が豊富に出回るようになり、経済成長とあいまって、葬儀における祭壇もこれまで近隣の手伝衆によってととのえられた簡易な祭壇から、葬儀社を通じて祭壇を使用する傾向がみえはじめた。死者をとむらう家族の気持として最後の葬儀においてせめてものつぐなひにと祭壇に託すわけであるが、年とともに豪華となり、ともするとこれが高い祭壇料の捻出に頭をかかえる喪家もあり、本村においては昭和四十四年七月葬祭社である遠軽自動車株式会社（社長・高橋製袋松）との間に葬祭車および祭壇使用料金について普通額の一・五割ないし三割引きの料金によって使用できる協定書を交わした。

瀬戸瀬囚人墓

別名「囚人道路」とまでいわれた中央道路は、

囚人の血と汗と涙の結晶によって開削されたものであり、本道の開拓史上忘れることのできない日陰の先駆者であろう。

網走・北見峠開削工事中、最も惨をきわめた野上・北見峠間の開削作業は、わずかに四七〇余の区間において病に冒された者、延べ九百余名、死者百八十余名にのぼるまことに生き地獄の様相を呈した苛酷な工事であったと想像される。古い記録によると「連日連夜過度の労働に酷使され、疾病に倒れそのため逃走せんとすれば斬殺され、死体は山野に投げ捨てられ、風雨にさらされた」とあるが、こうした事実を考えるとときまことに哀れを覚え、これら二重刑をうけた囚徒の辛酸に対し頭を下げなければならないと思う。

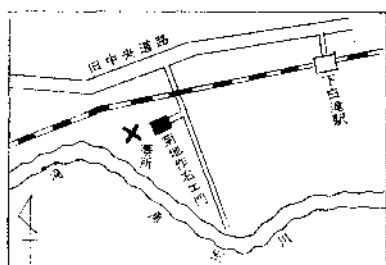


昭和33年、囚人墓地発掘のさい、46柱の遺骨が確認された。（昭和43年2月18日付『北海道タイムス』より転写）

工事の速成を期し便宜上定められた各區間に囚人の休泊所（仮泊所）が設置されたが、この休泊所の近くには大小さまざまな囚人埋葬の地所（囚人墓地のこと）があったであろうことが察知できる。

昭和三十三年瀬戸瀬青年団が中心となって瀬戸瀬市街の東端に位する囚人墓地を発掘、四十六体の遺骨が確認され、瀬戸瀬墓地に改葬された。ここには病囚のための診療所が設置されていたとのことである。

下白滝囚人墓地 下白滝菊地作右衛門所有畑地内に囚人墓地があったのを昭和三十三年春、村役場職員立会のうえ発掘、六体を収容、白滝墓地に改葬した。弟子屈の跡佐登備黄山外役所の墓地から発掘された死亡囚のなかには手錠をかけられたままの無残な姿がいくつかあったと伝えられているが、下白滝より発掘された死体には手錠、足枷あしかぎはついていなかった。大正二年下白滝に入植した菊地作右衛門は「中央道路工事の看守をしていた人



下白滝囚人墓地見取図（昭和32年白滝墓地に改葬済み）

から聞いた話では、下白滝は、しも手は馬止め、かみ手は崖のため囚人逃亡の心配がなかったので鎖をはずして働かせていたと言っていた。菊地の入植した当時、囚人墓地に残っていた幾木かの卒塔婆のそばに、その囚人がつながれていたであろう朽ちた足枷が一つ二つあったのを記憶している」と語ってくれた。

白滝囚人墓地

白滝市街東区川向い石井政雄地所内に囚人墓地があり、遺体数については四十体とも五十体ともいう人があるが確認がない。これまで現場には人の往来もなく雑草地となっている関係で人の記憶から忘れ去られている形になっているが、昭和十七年後藤貞治、太田清らによって墓地の中心と



国道創設殉難慰霊の碑（『網走新聞』より）

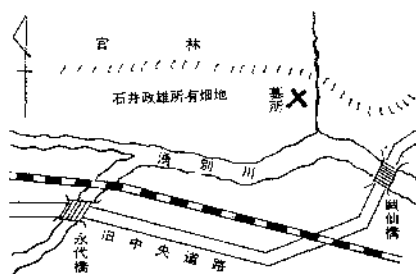
ぼしきところに全霊を代表して一本の卒塔婆を建て替えた。近年同墓地から塔婆が見つかつたとさわぎたてられたのはくだんの塔婆であり、決して新発見ではない。同墓地には直径五〇センチ前後の凹みが十数カ所、一応整然とした間隔で認められるが、諸般の事情で発掘には至っていない。昭和四十年八月役場職員太田実、祥巖寺住職中村友蔭の厚意によつて囚人墳墓の土一片を白滝村墓地に移し「国道殉難の墓」としてささやかながら供養がつづけられている。

その他の囚人墓地 その他下白滝馬止め付近、旧白滝十五号川向い付近、白滝幽仙橋付近、奥白滝三十七号道路筋にそれぞれ少人数の囚人埋葬がなされている

との話もあるが全く確証はない。

殉難慰霊の碑 かくのごとき囚

人墓地が網走・北見峠間中央道路沿線には無数にあり、機至つて発掘、改葬されたるもの、いまだ機至らずして未発掘のもの、さらに埋葬箇所不明のままいまでもなお荒涼とした原野にうずもれているものなど、さまざまな形態であるが、こうした国道建設の人柱となつた犠牲者を水く回向しようと、開道百年を記念してこれら国道創設殉難者の慰霊碑建立の期成会が発足、昭和四十三年十一月網走二見方岡に高さ二・五尺、横二・一尺の殉難慰霊碑が建設され追悼除幕



白滝囚人墓地見取図

式が行なわれた。現在慰霊碑は網走刑務所が管理している。

第九章 生活文化

北海道家庭学校支湧別分校

上支湧別の開拓は本州各県よりの団体移住によることもさることながら、家庭学校の分校を支湧別に設置されたことによって急速に進展したといえよう。

支湧別分校を綴るまえに家庭学校の沿革について略記してみるに、

北海道家庭学校は遠軽町社名測に位置し、大正三年八月二十四日の設立で創始者は留岡幸助であるが、明治三十二年十一月東京巢鴨（現在の豊島区西巢鴨町）に創設した私立感化院家庭学校にその端を発している。この学校は、あやまって悪の道に足を踏み入れた不幸な少年たち、または不良行為をなすおそれのある少年たちを收容し、少年救護法に準拠して、①基礎学力の習得、②農業を主とする労働、③保健体育、④宗教による霊性教育の四つを骨組みにした感化教育で、当時としては閑散であった西巢鴨を選んで自然のなかで真剣につづけられていた。家庭学校創立について留岡幸助が昭和四年九月「家庭学校創設に至るまで」という一文の中で次のように述べている。

「私は明治二十四年より満三千年間空知集治監で教誨師を勤め、在勤中約三百名程の囚人につきて取調べた。それによって犯罪の動機、犯罪の方法及び原因等あらゆる囚人の身分を調査して次の結論に達したのである。それは犯罪人は大体十四、五歳頃で不良少年であった、即ち百人中七、八十人は不良少年であったことを知った。……然しその適当なる処分法がなかった為に、かかる場所にくるやうになり、果ては重罪人となったのである。……斯やうに悪くなつたものを改良するのは骨が折れて経

費がより多くかかる、丁度石田に耕すといふ言葉がある如く極めて難事である。

如何に悪いといつても色々な関係で不良少年となり、不良がかうじて大罪人となつたのであるから、本を塞がずして末ばかり治めては駄目と考へ、之を教育機関である学校を造つて教育したならばと考へ、本を治むるように進むに至つたのである。……当時の刑法の立て方は犯罪の根本原則が間違つてゐたのである。固より当時監獄には教諭師もゐたが、司法官監獄官の頭が懲罰主義であつたので、罰すれば罰する程悪くなると云ふことを知らなかつたのである。将来犯罪の卵である不良少年を学校組織にして教育せば必ずや成功するといふことを知らなかつたのだ。

そこで米岡は発明の多い国だから此の方面にも何かよい発明があるであらうと考へ、渡米すべく決心した……。然し、行くとしても巨額の金が必要、私が貧乏生活をしているから、全財産を売却しても渡航費すらも出来ないやうな有様であるから、幸知集治監の同僚が銭別として八十円余り集めてくれ尚、札幌在住組合派の宣教師カーチスと云ふ方が邦貨二百円ばかりを餞別されたので、やつとのことでボストンまで行く事が出来た、……かやうにしてやつとのことで行くだけの金は出来たので、明治二十七年五月英國船エンプレス・オブ・インディア号の四等船客の人となつた。この船客の中には数多くの支那人苦力もまじつてゐた。渡米してから主としてコンコルドにゐた。コンコルドの郊外、コンコルド・ジャクソンにマサチュセツト州立壮年刑務所があり、十六歳から二十五歳以下の初犯者を収容して感化するのである。

私はここで研究するの便宜を与へられたが、学費がないので囚人と一緒にやつて椅子工場に働きラテン・チェアの工作を練習することにしてもらつた。いかに米岡でも、外国人が監獄に入つて、監獄内で住居して自由に見学するのは未だ曾てないところであつたさうだ。

しかし辛い旅費が出来るやうになつたので、米岡各地を巡つて目的的研究と視察を終つて、明治二十九年夏の頃無事帰朝したのであつた。

かくして東京郊外の一角に創設した家庭学校を、もっと広大な自然環境のなかで本格的に教育の理想を實現してみたいと考えた留岡幸助は大正二年の秋、いっさいの公職を去り、家庭学校分校の用地を求めて北海道に渡り遠軽村社名測を選定し、翌三年八月この地に移住、未開地七百十六町歩の払い下げを受け感化農場を創設したの

である。

留岡は社名測入地の状況を昭和四年刊『留岡幸助古稀記念集』には次のように書いている。

「さて愈々私は大正三年七月下旬に数人の同志をひきゐて社名測へと移住した。……略……社名測に着いてみると十坪ばかりの板屋が田中理事の尽力で建築され、一ヵ月斗り前に鈴木良吉君が三人の生徒を連れて共同生活をしてゐる、その小屋みたいな板屋に私達も転げ込んだ。十坪の小屋はどう云ふ風に使用されてゐるかと云ふに、内部の半分は米麦の俵や、味噌醬油のタルでふさがれ云はば物置である。その半分が職員、生徒の住家である。雨が降ると雨戸が出来てゐないから雨ちれの滴が枕元に飛沫るので有合せの風呂敷を隠すくて訪いだのである。」

かような風で創業の際であるから、土地は千町歩もあるが一步も原始林の内部へ這入ることが出来ぬ。家庭学校所屬地には大きな溪谷が九つある。その三番目を「恵の谷」と名づけ、その谷の入口に前中す板材で小屋を建てた、が道路がないから一步も内部に入ることが出来ぬ、その故に先づ道路の開削に取りかかるからねばならぬ、所が私達が移住した大正三年の前半は北海道一体に凶作で稗種すら収穫なかったのですその評判が内地へ伝って大正三年には一人の移住者もなかった、其処へ私等は乗出したのである。……略……私が私下げを受けた社名測第一農場地域内には九つの大きな溪谷がある。長きは三六町乃至三〇町と云ったやうなものもある。故に社名測部落の人口より順次に名付けたのが次に記す谷々である。

第一、誠の谷 第二、感謝の谷 第三、恵の谷 第四、生命の谷 第五、平和の谷 第六、望の谷 第七、喜の谷 第八、働の谷 第九、未来の谷
……中略……この特殊な学校の経営の方針は、

第一は 悪い少年はおおむね適當の教育を受けないから収容者に小学校程度の教育を授けること。

第二は 労作は如何にして生活すべきかを教へるものであるから、農業をもって自然に親しめる労作を主とすること。

第三は 健全な身体に健全な思想が宿るものであるから、この少年にも保健体育が必要であること。

第四は 霊性の教養を怠つてはならない、感化事業の成功を期するには宗教による霊性教育が必要であるから、キリスト教による精神の支柱を得させること。

これら四つの基本がたてられ、また教育の内容と仕組みには勤労、飲食、睡眠の三能主義なるものを唱え、感化教育に没頭したのである。

大正三年事務所兼家族舎の建造以来、理想的な配置計画に従って各種諸施設が逐次建設完備されていった。大正十二年三月北海道代用感化院に許可され、さらに昭和九年十月少年救護院に認可、昭和二十七年北海道家庭学校と改称された。学校の定員は八十五名とされ、対象年齢は小学校一年生より満十八歳までの非行少年で、その範圍は全道より集まっている。

支湧別農場の創設

大正三年遠軽社名湧に第一農場を創設した家庭学校校祖留岡幸助は白滝原野支湧別の広々とした地味豊かな土地に目を向け、大正五年春上支湧別の国有林地二百五町歩の払い下げを受けこの地を第二農場とした。正式名称は「家庭学校北海道分校白滝第二農場」である。この年十一月農場事務所を支湧別九線に建立（のち改築して農民道場済美館と名づける）、支湧別農場主任として高野一司が着任、農場の基礎づくりがはじまった。

支湧別農場創設の目的は社名湧農場における青少年の感化教育とは異なり、農場を
館 開拓し将来家庭学校の生徒を入地させて理想の村づくりをなし、併せて家庭学校の財
美 源として役立てる計画であった。

済 支湧別農場の入場資格は十八歳以上の青年と定め、事務所内に収容して農業技術の
指導教化にあたった。生徒は当初四、五人であったが、多い時には十人ほどもいて農
業に従事していた。



大正十年三月アメリカ留学を終えて帰国した鈴木良吉が高野に代って主任として着任、大正十二年に至り農家経営の安定をはかるため支湧別一帯の農家を対象とした「支湧別信用販売購買利用組合」を組織、鈴木良吉自ら組合長となり岸野喜三郎（農場職員）を専務理事として運営に当った。これが今日の白滝農業協同組合の前身といえよう。

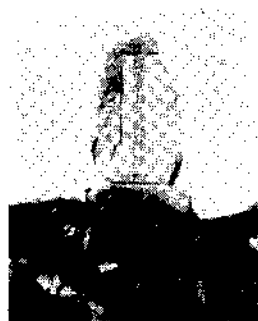
昭和四年遠軽・白滝間鉄道開通によって交通の便良好となり、これがため白滝駅前高橋旅館内に「家庭学校白滝出張所」を設け、支湧別分校に係る事務等の代弁を行なった。

社名測と白滝農場を開拓するために家庭学校では小作制度を設け、支湧別農場三百五町歩の土地に小作人を順次入れていった。小作というのは地主の土地を年貢を納めて耕作することであるが、校祖留岡は世間でみられる地主と小作人の関係ということはお互い平等な人間の気持に反することから、特に社名測および支湧別の小作者を家庭学校の「分家」と呼び、お互いに協力し合って理想郷を築こうとして、小作者には自分の兄弟のような気持であらゆる便宜をはかった。

小作者の数も『家庭学校社名測分校二十五年度史』によると、大正五年支湧別農場を設けたころのものとして「白滝上支湧別第二農場約十五町歩を拓き、戸数十戸（二十五人）」とあるから、農場は急速に開発されていたものと思われる。

昭和十一年社名測第一農場の一部の自作農創設について昭和十八年支湧別第二農場にも自作農を創設し、土地全部を無償にて開放し、小作から自作農へとかえたのである。

昭和十八年解放時の家庭学校支湧別第二農場「分家」の人々は次のとおりである。



頭 德 碑

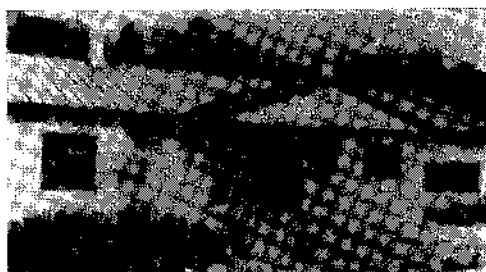
昭和十九年中山徳蔵、菊地善吉、遠藤栄次郎らが中心となり分家の人々と相語り、自作農創定を記念し、さらに留岡幸助（昭和九年歿）の遺徳をたたえ報恩のため「留岡幸助先生頌徳碑」を家庭学校支湧別分校前に建立することを決め、この年四月二十日盛大な除幕式が行なわれた。以来毎年四月二十日を頌徳祭と定め留岡校祖の遺徳を偲び、地域の発展に尽力している。

支湧別第二農場は現在済美館とわずかの敷地を残し全部解放されてしまっているが、済美館は一時白滝技芸学校支湧別分校あるいは支湧別僻地保育所

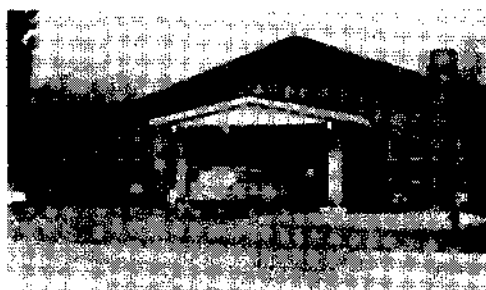
大地年度	氏名
大正五年	稲垣仙次郎、佐藤北岡、島海貞治
六年	菊地善吉、小倉清、福田正三、遠藤栄治郎、奥原三郎、出立寅吉、原野利一、佐藤友一
七年	中山徳蔵、岩船猛、菊地富雄
八年	山下正夫、原幸雄、吉田一夫
昭和二年	沢向岩松
四年	中川広、小玉又作
八年	菊地長吉、橋本実
〇年	見上熊吉、玉手藤吉
四年	鴻王徳太
一五年	青野寅一、久保田弥左エ門
一七年	遠藤長五郎、安西外

として借用したこともあったが、技芸学校が閉鎖となり保育所も旧支湧別中学校を使用するに及んで済美館を返上、今は無人化となり支湧別開拓文化の名をとどむるのみとなっている。

母と子の家 家庭児童の健全な育成の指導、乳幼児の保育、保育技術の相談、あるいは各種の母と子の福祉増進をはかる場として昭和四十年十月三十日役場庁舎裏手に木造モルタル仕上げの平家建およそ二六〇平方分の「母と子の家」が新築された。この施設は前述の目的のほか、お母さん方の研修の場としても大いに活用されることであつたが、通年制の保育所と児童遊園地が併設されるに及んで保育所専用として使用に供している。



母と子の家



白滝青年研修所

白滝青年研修所 農村青年婦人の知識向上と

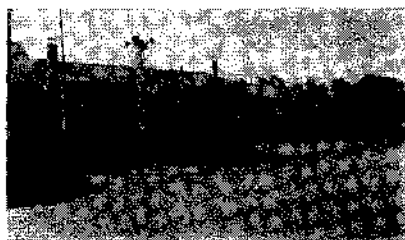
自立体制の強化用途に、早くから青年研修所の建設が望まれていたが、ついに昭和三十六年度の新農村建設総合対策特別助成事業として建築が決定、木造モルタル仕上げ平家建九十九坪（総工費四百三万円）の研修所がこの年七月一日遠軽町箱崎組によって着工、突貫作業によって八月二十五日落成をみた。間取りは大研修室三十五坪のほか、家事研修室十五・二五坪、図書室、調理実習室各八・七五坪、展示室五坪となっている。九月には落成式が挙行され、農村青年婦人および文化団

体の各種研修の場として、あるいは結婚祝賀会場として、そのほか各方面に及ぶ広範囲な利用がなされ大いに活用されている。

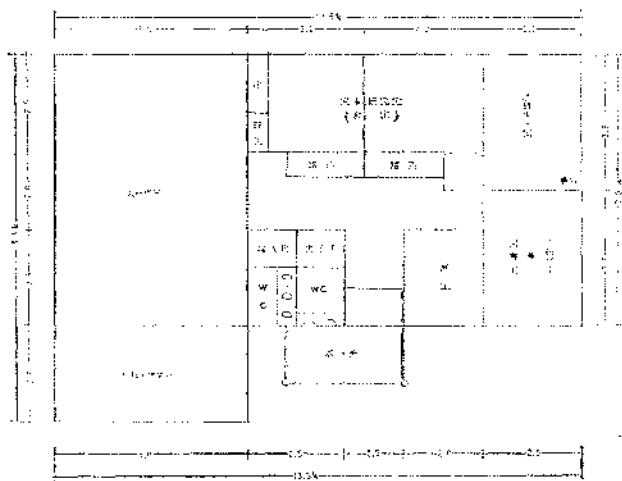
こうした施設はほかになく、ことに結婚祝賀会場としては最適所であったが、大研修室の収容能力および暖房設備等に若干ながら乏しいところがあつて増築改修の声しだいにたかまり、これがため昭和四十二年七月大研修室十二・五坪の増築を行ない、あわせて暖房をも完備した。

上支湧別青年研修所 白滝青年

年研修所について昭和三十七年度の新農村建設総合対策特別助成事業として農林省の枠づけがあり、この年六月十五日より本村芦野組の請負により支湧別九線に上支湧別青年研修所の建築がはじまり、同年九月十日平家建五十九坪、総



上支湧別青年研修所



白滝青年研修所平面図

工費二百五十万円の研修所が完成した。間取りは大研修室のほか展示室、家事研修室、調理研修室に区分され、研修の大殿堂としてあらゆる分野にわたって大いに利用されている。

旧白滝生活センター

旧白滝小学校の廃校によって校舎の活用が部落民より望まれていたが、昭和四十一年十二月工費百十万円（一部、部落住民の寄付あり）をかけて全面的模様替え工事を完了、旧白滝生活センターとして広く住民の集会、研修の場として大いに活用されることとなった。生活センターは大研修室、小研修室、調理実習室の各室に分れている。

開拓地婦人ホーム

天狗平の開拓地には集会場がなく、地域住民の間から会館建設の要望が早くから出されていたが、昭和三十八年十月部落民待望の開拓地婦人ホームが建設され、農事相談の場として、あるいは開拓農村婦人等の研修の場として大いに活用できるようになった。婦人ホームの建設敷地、反歩は安在仁八郎の寄付によった。

上白滝会館

多年の懸案であった会館新築は、地域住民の労力奉仕と篤志によるほか一部村費助成によって昭和四十年六月完成した。この会館は白滝消防団第二分団消防機械置場が併設され、部落のセンターとして利用度が高い。

その他の会館

村内には部落会館の設置が比較的多く、東区に東望会館、北支湧別に部落公会堂があり、その他近年村費補助金をおおぎ新築されたものとして、西区会館、奥白滝会館、東白滝会館、支湧別会館等であるが、そのいずれも地域住民に益するところ大である。



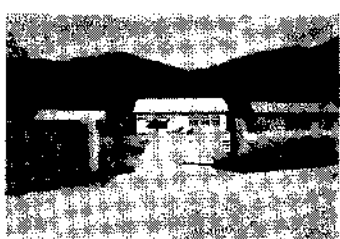
(天狗平婦人ホーム)



(西 区 会 館)



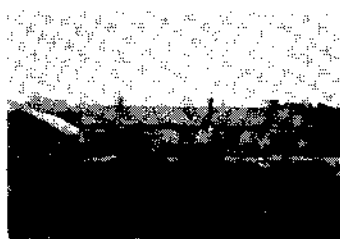
(東 白 滝 会 館)



(旧白滝生活センター)



(北支湧別公会堂)



(上 白 滝 会 館)



(支湧別5線会館)



(奥 白 滝 会 館)

有線放送 昭和二十七年村内全戸に点燈されてより、文化、教養、娯楽の泉といわれていたラジオがしだいに普及しはじめたが不幸にして難聴地帯であるがためラジオの共同聴取が望まれ、昭和三十年四月市街地全域にわたって共同聴取の施設工事が完成、文化の恩恵に浴した。しかし、さらに部落住民の声をも反映し、広報に代る村の連絡機関としての有線放送も併せ行なうべく昭和三十一年九月村内全戸にこれが共同聴取施設工事を完了、同月左のごとき有線放送条例を制定、翌十月より業務を開始した。

白滝村有線放送条例

(目 的) 第一条 本村は住民生活の向上と行政の滲透をはかる目的をもって有線放送業務を行うものとする。

(業 務) 第二条 有線放送は前条の目的を遂行するため、おおむね次に掲げる業務を行う。

- 1 日本放送協会が行う放送の中継
- 2 村行財政に関する村内報道
- 3 国、都、道府県及び市町村の機関の連絡放送
- 4 農業協同組合等の業務に関する連絡放送
- 5 学校教育及び社会教育団体又はその他公共の福祉及び文化に寄与する団体の連絡放送
- 6 商業又はこれらに類するものの依頼による広告及び宣伝放送
- 7 個人の依頼による連絡放送

(放送手数料) 第三条 前条第5号の団体の放送であつて、収益の伴うもの又は、前条6号及び第7号の放送については次に掲げる放送手数料を徴収する

- | | | |
|------------|-----------|----------|
| ① 前条第5号の放送 | 一日につき一〇〇円 | 一回につき五〇円 |
| ② 前条第6号の放送 | 一日につき二〇〇円 | |
| ③ 前条第7号の放送 | 一回につき五〇円 | |

二 前項第2号の放送については一カ月間の特別契約をすることができるものとし、この場合において前項の規定にかかわらず月額放送手数料を一、〇〇〇円とする。

三 放送手数料はこれを前納するものとし、納入金は還付しない、但し施設の故障その他の事由により放送しないときはこの限りでない。

(諮問機関)

第四条

村長は有線放送業務の運営について必要があるときは諮問機関を設けることができる。

(規則への委任) 第五条

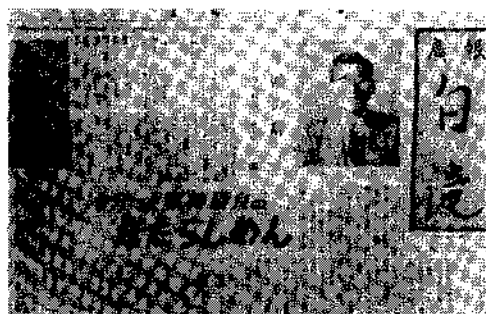
この条例に定めるものの外、必要な事項は別に村長が定める。

附 則 この条例は公布の日から施行する

有益に運用され住民に利便を与えていた有線放送も、村営発電所配電施設を北電に譲渡したため電線の共架ができなくなり、これが有線放送の配線を分離することは莫大な費用が要することとなり財政上非常な重荷となるため、住民の了解を求めて昭和三十四年九月有線放送を廃止するに至った。これがため従来の有線放送に代る広報機関として広報紙の発行によって補われることとなった。

広報しらたき

有線放送業務の中止によってこれに代る広報機関として広報紙の発行が企画されていたが、昭和三十五年一月十日『広報白滝』としてその第一号が発行された。広報紙は毎月一回発行しただちに各戸に配布され、昭和四十六年一月、号数も百三十五号と成長し、さらに未来に向けて号数を伸ばしてゆくことであろう。



広報白滝 第1号

題字は時の村長の揮毫によるもので、当初『広報白流』としたものが昭和二十六年四月号より『広報しらたき』と題字を変え、昭和四十一年二月号より再び『広報白流』と漢字体にもどった。

ラジオ わが国最初のラジオ放送は大正十四年三月一日東京放送局からJ O A Kで放送を行なったのはじまるが、レシーバーを耳にあてるか、大きなラッパのようなスピーカーをつうじて聞くものであった。道内における放送開始は昭和三年六月五日札幌中央放送局が最初で、網走管内北見放送局は昭和二十一年八月（臨時中継放送は昭和十七年一月一日）の開局となっている。

本村に初めてラジオが入ってきたのは、娯楽に供するということとは別に、時事関係に、政局の動きにあるいは社会の流れ等、ラジオを通して深い知識を得、青年団活動をより豊かにする願いをこめて、上支湧別青年団が

白流におけるラジオの普及状況

年 度 (昭和)	契約件数 (台)	備 考
20 年 以 前	?	北見放送局開局 前のため不明
21	68	
22	106	
23	142	
24	175	
25	192	
26	215	
27	241	
28	405	
29	662	
30	653	
31	651	
32	673	
33	673	
34	676	
35	692	
36	631	
37	429	
38	314	
39	262	
40	211	
41	147	
42	48	
43	—	ラジオの受信契 約が廃止された

(北見放送局調)

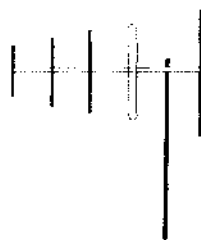
購入資金の寄付を部落内に求め、当時としては大金の三百六十円を出し乾電池式ラジオを丸瀬布より購入、上支湧別青年会館に備えつけた。昭和四年十一月のことである。つづいて布田富蔵が自家発電を電源として電気式のラジオを、井村謙二が乾電池式ラジオを購入、その後逐次増加していったが、いずれも難聴であった。北見放送局開局以来の本村におけるラジオの普及は別表のとおり。

テレビ 国内の情勢、世界の動きを茶の間にいながらにしてブラウン管を通して見聞することはその昔にあった。空想科学にひとしかったが、文明科学の高度な開発研究により実現化され、昭和二十八年二月一日ついにNHK東京放送局より正式にテレビジョンの放送がなされた。それから三年目の昭和三十一年十二月二十二日に至り札幌放送局もテレビ放送を開始、本道においてもテレビ文化の恩恵に浴することができたが、管内においては確実な受像はできなかった。昭和三十二年四月より放送開始されたHBC（北海道放送）テレビは遠距離用アンテナ使用によって比較的広域にわたって受像ができ、管内各所においてもようやく受像に成功する者が現われた。

本村においては昭和三十二年HBC放送がはじまって間もなく遠藤幸治、広田寛治等の電器商や山本善七がテレビを取付け一〇附近くもある支柱に一〇素子のアンテナを屋上に立てて受像の先端をきった。映像はまことに不鮮明であったが、それでも映像を一目見ようと朝な夕な見物客でにぎわった。その後旭川、北見等にもNHKおよびHBCやSTVの各放送局が開局され、本村におけるテレビの取付けもしたいに増加していったが、四方が高い山に囲まれている本村は極度の難聴視地帯であり、いずれも満足できるものではなかった。こうしたことから共同聴視施設の声がちあがり昭和三十七年四月一日白滝村テレビ共同聴視施設組合が有志の手によって設立さ



NHK白滝テレビ局



受信アンテナ
(垂直偏波図)

ってNHKの映像をおおむね鮮明に受像することができ、地域住民の文化向上に資したのである。時代の進展にともない民間テレビの放送局も道内各地において開局され本村においてもこれがギャッチに適地を求め、結局有線共聴施設の親アンテナを通称「不動の山」に移設、NHK、同教育、STV、HBCの四局の受像に成功、昭和四十二年十二月より複数局の運用開始となった。共聴組合加入者とは別にこの組合に加入できない地域の住民にとってはテレビ難聴視のなやみはつづいていたが、NHKテレビ局の好意により、白滝村域内固有林百六林班内に中継の白滝テレビ局が昭和四十二年九月二十五日開局、垂直偏波による電波にのって村内くまなく鮮明な受像が可能となった。

村内受像のチャンネルは

NHKテレビ

2 チャンネル

NHK教育テレビ

10 チャンネル

STVテレビ

6 チャンネル

れ、百八十三戸がこの組合に加入、組合長に村長が推され同年五月上旬工事着工、市街中央支湧別川向いの野沢公園地内に共同アンテナを取りつけ、有線によって各組合員宅に引込み、七月下旬工事完了、電波監理局の承認を得、八月一日より運用開始となり、第九チャンネルによ

HBCテレビ

4 チャンネル

なお、本村におけるテレビの普及経過を示すと次のとおりである。

項目	年度							
契約件数	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年
	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年	昭和三十一年

注 昭和三十五年以前については雄勝視地帯のため受信契約がなされず、件数の確認も不可能である。したがって三十二年の三件についても受信未契約であった。

白黒テレビがすでに茶の間には不可欠的存在となった昨今、さらに居ながらにして天然色による映像を求めるのは当然な要求であろう。NHKにおいてはこうした要求にこたえ昭和三十五年九月カラー放送をはじめ、昭和四十一年三月には全国のカラー回線網を完成させ、国内至るところでカラーテレビが見られるようになった。

本村におけるカラー契約は昭和四十五年四月現在四十六台となっている。

新聞 国内の動き社会の話題を一日も早くしかも正確に民衆に知らしめるために新聞が発行されたわけであるが、ラジオ、テレビのなかった時代においては報道機関の花形でもあったわけである。本道における新聞の歴史はかなり古く、明治十一年に「函館新聞」が創刊されている。その後時代を経て各種新聞がそれぞれ地方色豊かにして発刊されたが、太平洋戦争がはじまって以来内外諸情勢の緊迫にともない、言論報道の統制と国家目的の名のもとに一県一紙の統制が強行され、本道においてもこれまで十一紙にあまる新聞社が統合、その名も「北海道新聞」として昭和十七年十一月一日創刊号が発行されたのである。終戦をむかえた昭和二十年の九月、マツ

カーサの指令によって一県一紙の統制が解かれ、道内においても新興新聞が陸続として誕生したのである。

本村における各種新聞の購読部数は下記のとおりであるが、近年購読料の値上りとテレビの普及によって部数の伸びなやみが目立っている。

このほか「網走新聞」、「北見新聞」、「北見毎日」、「北東民報」、「日刊拓北」、「林業」、「聖教新聞」等各種の新聞が入っている

が、これらはいずれも新聞社より購読者宛の直送となっているためその確数はつかめない。

本村内の取次販売店は次のとおり。

名 称	住 所	取 扱 新 聞
丹 治 新 聞 店	白滝市街中央区	北海道新聞、朝日、毎日、読売、日本経済の各新聞ほか
渡 瀬 新 聞 店	白滝市街南区	北海タイムス

娯 楽

そもそも北海道への移住に当って娯楽を求めて渡ってきた人のあろうはずがなく、ひたすら開拓の鉾を振いつづけた。今日見られる悠長な「魚つり」も、開拓当時してみれば副食物に供する欠くべからざる仕事の一部でもあった。時代の流れとともに上地の生活にもいくらか馴れてくると、味気ない生活の中に娯楽を求めるのはひとり開拓者ばかりであるまい。たまたま目を追うて増加する馬を寄せ集め「草競馬」や「挽馬」競走に興じ憩いの場を求めた。そればかりか、巡査の見えない陰では血まなこになってこもごも少額の賭け勝負が行な

購読部数内訳（新聞取次
販売店取扱分のみ）

新 聞 名	部 数
北海道新聞	282
北海タイムス	205
朝日新聞	22
毎日新聞	8
読売新聞	14
日本経済新聞	4
スポーツ新聞	8
その他の	4
計	547

（昭和44年6月1日現在）

われていたという。秋の収穫が終り、およそ半年を雪の中で送らなければならない北国の生活において、娯樂として親しまれたものに「カルタ遊び」や「花札遊び」等が流行しはじめた。戦時中こうした娯樂は一時白濁されたものの、戦後再び多種多様な娯樂が日常生活の中に入ってきた。

カルタ……北海道のカルタ遊び（百人一首）は本州方面のとは違って、取り札が木札で下の句のみ記入した変体がなまじりの筆書きの独特のもので、しかも下の句を読んで取るという遊び方で、正月には欠かすことのできない遊びの一つであった。戦後マージャンが非常な勢いで流行し来たり、カルタ読みの人の流暢な声が戸毎から消えていったが、最近カルタ愛好者の手によって復活し、本村においても昭和四十五年一月第一回村内カルタ大会が開催された。

パチンコ……子供のおもちゃからヒントを得たといわれるパチンコは昭和二十二年道内主要都市で娯樂がはじめられ、以来日の出の勢いで流行し「玉を弾じかぬ者は現代人でない」とまでいわれるほどであった。

本村においても佐々木富雄、越智忠利が昭和二十五年パチンコ遊技業の許可をとって娯樂、つづいて出口俊平、佐藤由、南政雄らが娯樂をはじめ、一時は数軒のパチンコ屋が娯樂していたことがあった。

パチンコは当初メダル式であったものがまもなく単発式になり、さらに連チャン式へと変って客の射倖心をさそい、娯樂というよりも投機的に交換物資を獲得することが目的となり、ついにはその品物を安く取引することを職業とするものがあらわれはじめた。こうしたことから北海道では昭和三十二年十月連チャン式パチンコを禁止し単発式のみとなった。

文化サークル団体・囲碁愛好会

囲碁は元来紳士的な室内娯樂として普及し、その派手さはないが将棋とと

もに根強い支持者によって受け継がれている。村内においても古くから愛好者らによって仕事の余暇に碁盤を囲んで旧交を暖めていた。昭和三十三年第二代渡辺村長の代になるや、自ら有段者であることもあってにわかに関碁熱が盛んになり、村長、中田伝之助、井村謙二、渡辺誠らによって囲碁愛好会を結成、毎月一回の例会は今日もなお続いている。現会長には渡辺誠四段が当り、有段者十五名を含む会員五十名を擁する会に成長している。

書道クラブ 近年小学校高学年において正科として採り入れるようにまですなつた書道は、父兄間において静かなブームをまきおこし、書道熱はますますさかんになってきた。こうしたことから愛書家たちの提唱によって昭和四十年六月白滝書道クラブを組織、会長に芦野朝吉が選ばれ、書を通して人づくりに一役かっている。会員も百二十名を超える大世帯となり、例年十一月三日の文化の日には有段者による展示が行なわれている。

詩吟同好会 精神修養を主とし、高尚なる趣味の涵養と健康増進を目的として昭和四十二年六月国風会遠軽支部所屬白滝吟詠会が華々して誕生したが、会員の流動によって、昭和四十五年四月、これまでの吟詠会を発展的に解散して白滝詩吟同好会（会長・鈴木猛夫、会員九名）を新発足した。

その他、文化サークル団体には、写真クラブ、ダンス愛好会、美術協会、銘石愛好会等があり、いずれす少数グループながら親睦をはかりつつ趣味三昧にひたっている。

体育協会 村内体育団体の育成強化と村民の体位向上をはかるため、昭和四十一年六月白滝村体育協会が設立、剣道、野球、スキー、弓道、卓球、バスケットの六団体がこの協会に加入している。協会の事業は加入各団体の行事推進のほか、十月十日の体育の日には教育委員会と同調し全村民を対象に「一歩け歩け運動」を実施している。現協会長は松浦健蔵である。

白滝村剣道協会

大東流合気柔術中興の祖といわれた武田惣角が大正五年弟子の求めに応じて湧別より白滝に入り、合気柔術指南のかたわら剣道を志す者の指導にも当った。従来剣道は小学校高学年ならびに青年学校の必須教科としてそれぞれ専任教官を配置して今次大戦終結まで大いに奨励されたもので、敗戦によって一時禁止されていたが、昭和二十六年講和条約の締結によって禁止令が解かれた。

本村においても昭和三十一年十一月、小川正春、渡辺清、谷昭吾らによって剣道の普及がはかられ剣道協会を設立、青少年の育成に大いに貢献した。設立当初二十名に満たない会員が今日大人、小中学生合せて七十五名の大世帯となり、小川六段練士を最高に二十三名の有段者が会に籍をおいている。また現会長には松浦健蔵が推され、毎週金曜日には村内柔剣道場において熱心な稽古がつづけられている。

白滝村軟式野球連盟

戦後あらゆるスポーツの中で最も早くそしてめざましい復興ぶりをしめたものは野球であろう。

本村においても戦前から草野球に興ずる若人の姿がしばしば見られたが、戦時中一時影をひそめていたが戦後再び復活し、各職場団体において球団の編成もなされたため、昭和三十七年六月白滝軟式野球連盟を結成、加盟六球団によるリーグ戦、村長杯争奪戦などシーズン中は白球を追って熱戦が展開されている。現在連盟会長は藤本輝彦である。

白滝スキー連盟

冬の代表的なスポーツであるスキーの愛好家たちによって昭和三十八年二月白滝スキー連盟が発足、おもな事業として、① 村民スキー大会、② 講習会、記録会の実施、③ スキー登山（セトセ山、チトカニウシ山、天狗岳）、④ 各種競技大会（天狗岳）等を年中行事として行ない、広く村民の体位向上を目的



天狗岳スキー場

としている。会員数は四十名で現会長は大庭裕二である。

国設天狗岳スキー場……スキーヤーの恰好の場、天狗岳スキー場開設は久しく望まれていたが、国設スキー場としての設備を昭和三十九年夏より営林局で行ない、さらに自衛隊の協力をも得て完全整備を施し、伐根、枝葉除去等の全作業を終了して完成、同十二月九日付をもって国設天狗岳スキー場として承認され、道内随一のスケールをもつ国設スキー場として開設した。天狗岳スキーコースは小天狗頂上まで五・七キロ、天狗岳頂上まで九・五キロであり、この間奥白滝駅から二キロは林道を通り、一キロ地点から小天狗頂上までの全長三・八キロの閉、幅六〇センチの一〇〇センチが国設スキー場となっており、二キロ地点の国設スキー場入口に一大狗荘、四・五キロ付近に小天狗一の簡易宿泊所がある。コースは変化にとみ、ゲレンデ、大回転、長距離滑降が初心者、専門家の別なく楽しめ、傾斜も最急勾配三十五度、平均勾配十六度となっている。国設スキー場開設以来毎年四月中旬には、道北地区大回転競技大会が行なわれている。

白滝弓道場 雑念を捨て心を落着け、的に面して弓を引く醍醐味は、矢を射るもののみが知る楽しみで、愛好者の間では早くから弓道場の施設が叫ばれていたが、たまたま昭和三十四年八月柔道・剣道・弓道の併用館としての三道館が出来るに及んで大いに活用された。

昭和三十八年九月白滝弓道会を結成、後藤貞治会長のもと会員十五名がそれぞれ心身の鍛錬に励んでいる。
白滝卓球クラブ 柔剣道場の建設以来にわかに卓球熱が盛んとなり、愛好家二十名によって昭和四十四年六

月白滝卓球クラブを組織、後藤義春が会長をつとめている。

白滝バスケットクラブ バスケットクラブは昭和四十二年九月に結成、会長谷藤古雄以下十五名のクラブ員が熱心な練習に励んでいる。

体育指導員 昭和三十六年「スポーツ振興法」が公布され、村教育委員会では昭和三十八年六月白滝村体育指導員に関する規則を制定、左の三名を体育指導員に任命した。

スキー・陸上・バスケット・バレー部門	大沢 崇 憲
剣道部門	小川 正 春
野球部門	古関 修

委員はスポーツ振興のため住民に対しスポーツ実技の指導、その他スポーツに関するあらゆる指導、助言を行なうこととしている。当初三人で出発した指導委員も、各スポーツ団体のめざましい活動によって逐次委員の定員を増し、現在七人の指導委員が部門別に担当、スポーツ振興につとめている。

剣道部門	見玉 富 雄	弓道部門	古関 辰 雄
野球部門	井上 公	バレー部門	塚本 清
スキー部門	前田 和 友	バスケット部門	高橋 正 一
卓球部門	加賀田 昭 一		

白滝総合グラウンド 戦後の世情もようやく安定した昭和二十七年、村民の体位向上と青少年の健全な精神を養うにはスポーツを通じて行なうべきであるとの機運たかまり、公設グラウンドを建設するべく藤本輝彦を委員長として建設委員会を結成、白滝中学校前グラウンドの完成をみたが、時代の進展にともないさらに広範囲な

施設と併せて馬産振興の上からこれが競技場の設置を望む声起り、再び総合的なグラウンド建設の議が決し、昭和三十三年十月一日総合グラウンド建設委員会を結成、村長を会長に藤本輝彦を委員長として各役員の構成をもって総合グラウンド建設工事に着手、村費の助成金、村民の寄付、そして労力奉仕等によって翌三十四年七月三十一日諸施設もあわせて完成したのである。

工事内容は次のとおり。

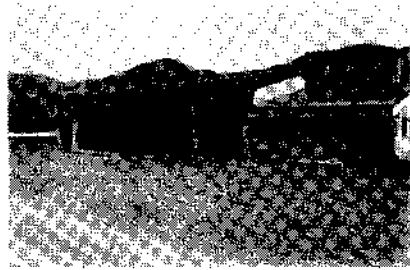
1号道場（二四坪）、2ゾール（二〇畝×二五畝）、3神社拝殿（二五坪）、4会館移転、5あすまや（六坪）、6土俵、7忠魂碑移転、8相馬神社移転、9及川神社移転、10スケートリンク、11挽馬競技場、12つじ移植（旭台）、13記念碑、14グラウンド、旭台の整地、15馬繋場

住民の汗の結晶によって出来たこれら諸施設のうち、ゾール、スケートリンク、馬繋場、挽馬競技場は国営直轄明渠の施工によって一部用地内にかかるため昭和四十四年とりこわしとなった。また旭台の各種神社は火災にあい、弓道場に隣接して白滝神社の建立をみたことは別項で記述のとおりである。

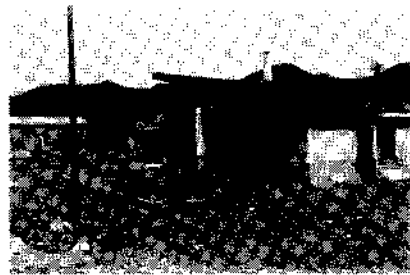
柔剣道場 村民の心身の健全なる発達と体育の普及振興をはかるため、昭和四十四年十月母と子の家に隣接して近代的な柔剣道場が完成した。KK渡辺組の請負による同道場は延面積五二・三二六平方畝（約百五十九坪）、工費一千五百二十万円を要し、スポーツの殿堂として一般に開放され村民の利用度が高まっている。

柔剣道場のスムーズな運営を行なうため諮問機関として柔剣道場運営委員会が設置され、現在の委員は高嶋温厚、橋本芳榮、賀真田昭一、浦川敏司、井上公、前田和友、松浦健蔵である。

道場でできるスポーツはバレー、バドミントンのほか卓球、バスケット、体操、剣道の各種で、開館時間は次



柔 剣 道 場



郷 土 館

のとおり定められている。

平日 午後三時から午後九時まで

土曜日 午後一時から午後一〇時まで

日曜日および国民の祝日 午前九時から午後九時まで

休館日 毎週火曜日と年末年始

郷土館 昭和四十五年十一月十日村民の教育、

学術文化の発展と郷土愛の啓発をはかることを目的として郷土館が建設され、村内から収集した開拓当時使用された物、歴史的にめずらしい物、白滝の旧石器時代の遺物など多数を展示し、同年十二月一日

より開館した。規模はブロック造り一九三・五三平方呎、総工六百三十万円を要し、建物の中は展示室、資料室、研修室等がある。

また、郷土館運営委員会には、高嶋温厚、橋本芳栄、前田秀之、鈴木猛夫、田中金蔵、中村友禎が委嘱をうけている。

村営プール 白滝中学校に隣接して施設されていたプールが直轄明渠工事によって除去されることになり、これに代る村営プールの施設がまたれていたが、昭和四十五年七月柔剣道場横に、縦二五呎、横一〇呎、深さ一呎のビニール造り簡易村営プールが三百四十七万四千円にて完成した。

このほか村内には支湧別小学校簡易プール（昭和四十四年七月完成、ビニール造り、十七万八千円）と三和小学校簡易プール（昭和四十五年七月完成、ビニール造り、四十万円）があり、水泳による体位向上に役かっている。

公認白滝クレイ射撃協会 昭和四十三年五月、公認白滝スキー射撃場が開設されたのを記念し、クレイ射撃協会が発足、会員五十名で佐藤甫が会長に選ばれた。

獵友会 北海道獵友会遠軽支部がつくられてまもなく、昭和十三年会員五名の小世帯による白滝分会が結成され、初代分会長に高橋喜久雄となり、昭和二十八年より佐藤甫が二代分会長として会員ともども、時として身の危険をおかしつつも有害鳥獣の駆除にあたっている。最近のガンブームを反映してか会員も五十名を擁する世帯となった。

また会員多年の念願であったスキー射撃場も昭和四十三年五月公安委員会の正式認可もあり、東白滝伊藤政夫所有牧場展望用地内に公認白滝スキー射撃場を開設、同年八月二十七日村内外より来賓を招き、多数の参加者を得て開場式ならびに射撃会が盛大に挙行された。

大東流合気武道 大東流合気柔術は、清和天皇（八五八―八七六）の末孫である新羅三郎源義光を始祖として大東の館で修練されたことにちなんで大東流と称され、代々甲斐源氏武田家に伝承されたものである。明治維新後



公認白滝スキー射撃場



武田惣角

大東流合気柔術の中興の祖といわれた武田惣角は、天正元年四月甲斐国司武田信玄の死後、天正二年三月会津に転出した甲斐武田家の一族で会津国司片名修理太夫盛氏の地頭職武田土佐国次の末孫、会津藩上武田惣吉の次男として、幼少より武芸に励み、やがて家伝の大東流合気柔術を学び全国各地を武者修業の旅に出た。明治三十一年、福島県霊山神社宮司で元会津藩家老であった保科近應より合気柔術の秘奥を授けられ、爾

またま甥別駒通に投宿中、同駒通取扱人堀川泰宗に哀願され、札幌より居を移して護身武芸の教授に専念した。大正四年二月紀州団体長植芝盛平所用にて遠軽に出張中、久田旅館にて武田と初見、夜を徹して語りあううち武道の真髓に触れ、求められて合気柔術の教授を約し、門人として指導に当たった。武田惣角所蔵の英名録（門入帳）には、大正五年春における白滝の門人を次のように記してある。

門人佐藤庄蔵、同佐藤勇次郎、同三宅貞一郎、同下村正一郎、同市原由蔵、同十河忠衛、同植芝盛平

武田惣角は大正八年五月、家族ともども白滝に転居、以来この地を本居として道内はもとより本州各県に指導普及につとめていたが、昭和一八年四月、旅行中病にたおれ不帰の客となった。歿後、惣角の嫡子武田時宗が大東流合気武道宗家として継承し、現在網走市において斯道の指導に努めている。

舞踊

石井漢門下の越智慶子が本村の越智舞踊研究所を開き、地元をはじめ遠く遠軽、旭川に弟子をもって

出張教授を行っていたが、昭和三十七年旭川にバレー研究所を移し転出してしまった。

劇場 遠軽・白滝間鉄道開通により、石北全線開通間近しとみた渡瀬鉄男は、鉄道の開通は人口の増加につながるものとの観点から、劇場の設立を思い立ち、昭和四年秋白滝駅にほど近い所（現棚橋モールド工場付近）に劇場を建設したが、翌五年九月同劇場のボヤによって観客の一人が圧死したことにより以来客足が減り、昭和九年この劇場は丸瀬布に移転してしまった。劇場経営者にとっては採算のあわないものであったが、青年たちにしてみれば不入り劇場といながらも地元になくなくってみると憩いの場を失うこととなり物淋しさを感じるようになった。こうした空気をいち早く察知した市街地の若手実力者、吉田美代治、中山親孝、瀬川幸造らが中心となり『更生会』を結成、従来の馴れ合い主義を打破し白滝の更生発展を推し進めようとした。

この更生会の事業計画の一つとして寄付金を募り昭和十一年市街地に中央青年会館を建設、青年の救済鍛練の場として各種催しの場として、戦時下青年をして有効に使用せしめた。戦後各青年団活動が分裂し、中央青年会館を他の娯楽施設に転用しようとの声もあり、結局遠軽町遠聞興業に身売りすることとなり、昭和二十二年白滝劇場として衣替えされたのである。

ストーブ 大正初期における開拓農家の暖房はほとんどがたき火であった。屋根の一部を切り開き、火防と煙出しを兼ねており、けむいながらも冬など火が一番のご馳走でもあったわけである。たき火の家は特にスグがたまりやすく、食事時など湯気によってスグが湿り、茶碗の中などに落ちることは珍しいことではなかったようだ。

薪が豊富であった本村とはいえ、薪ストーブと付属品である煙筒の購入に経費がかさみ、大正六年の大火以前

には薪ストーブの姿は見られなかった。その後しだいに薪ストーブを取付ける家庭がふえ、昭和に入り鉄道が開通してからはフクロ式とかカマダ式と呼ばれる貯炭式ストーブが焚かれはじめたが、良質の石炭に限られたこれらストーブは太平洋戦争とともに一時姿を消し、これに代って何でも焚けるとされていたルンペンストーブが登場した。またこのころ燃料の節約からこれまで捨てられていた鋸屑が特殊なストーブによって焚かれはじめ、戦後最盛時には全村六割をこえる家庭が鋸屑ストーブを使用した。近時とみに森林資源が枯渇し木工場の統合によって鋸屑の産出量も激減、加えて耐寒構造による家屋の新改築とあいまって鋸屑ストーブは漸次減少しはじめ代って再び石炭ストーブが、そして石油ストーブが普及しはじめている。

でんぶん靴 本村開拓初期における開拓者の履物は主としてワラジに頼っており、地下足袋などは容易に使用できない高価品であった。冬はもっぱら白木綿をさしたボツコ靴か藁で造ったツマゴを履き、深雪時などはこれに「カンジキ」をはいて歩行した。昭和初期になって本村にも生ゴム製のゴム靴が入ってきたが、当時革靴よりも高価とあって庶民には縁遠いものの一つであった。この生ゴム靴に代って出現したのが俗にいう「でんぶん靴」である。靴全体に白い粉が吹き出しており、しかも粗悪品で破れが早いところからでんぶんを混入して製造したものであろうと思われる、でんぶん靴と呼称されたのである。しかしこの靴が安価であったため著しい普及を示した。戦時中全く品不足となったゴム靴も戦後消費者増から一時この種のでんぶん靴が出回ったが、平和産業の発達によってしだいに影をひそめ、今日においては全く見られない品となった。

上支湧別電気利用組合 日華事変が長期化し世界大戦の様相を呈しはじめた昭和十六年、家庭ランプ用石油の配給もしだいに減量し、この上ない不自由な生活をいられていた。こうしたなかであって上支湧別にも電気

を起し明るい文化生活をと、菊地善吉、本田最が發起人となり上支別別電気利用組合を結成、二十六戸の賛同者を得て北海道庁に出願、同年九月直ちに工事着手となった。いよいよ着工という段になって経費負担の不安と家庭電気に対する認識の不足から加入者のうち四戸が脱落、二十二戸の組合員をもって発足した。発電施設は支別十線二百十一番地と定め支別別川を利用、三キロワット発電機を据えつけ総工事費六千八百円にて加入組合員全戸に配線、同十六年十一月点検となった。翌十七年五キロワット発電機に替えたが、このころより新規加入者が増加し総数三十八戸にまで伸びた。これがため容量に不足を来たし、昭和十九年発電施設を支別別七線に移し三三キロワット（二〇〇〇ワット）の発電機を備え昭和二十七年全村電化となりその施設に包括されるまでつづけられた。

これよりさき、昭和二十年地理的關係で組合が分裂、第二電気利用組合が誕生、施設を支別別十線の古い施設を改修して送電、第一電気利用組合員は二十五戸、第二電気利用組合は十九戸に分れてしまった。

旧白滝、上白滝、奥白滝方面の農村電化 昭和二十年二月白滝発電所の設置によって市街地住民は明るい生活が営むことができたが、昭和二十一年六月には上白滝、奥白滝、そして下白滝の各駅にも送電工事を終え配電点燈されたところ、たまたま白滝と下白滝の中間に位する旧白滝部落が無電なため部落民一九となって北電に対し配電請願運動を起した。

旧白滝部落配電請願書

「当部落は石北線下白滝駅より白滝駅附近に至る約二里の間に散在する約三〇戸の純農村部落で地味肥沃、耕地面積約二百町歩、年々馬鈴薯、麦類、澱粉、雑穀等の農産物を多量に産出したしております。国家状況の変転に伴い食糧の飛躍的増産は焦眉の急を告げ、農村の電化事業も近時漸く社会の重視するところとなり各地においてはすでに電化施設の実現を見たるも部落は未だ之が機会に恵まれず、御承知の如く殊に終戦後は燈火用及び生産用必需物資の入手は愈々困難となり、且又、配電施

設なきため生産に及ばず影響は甚大なるものあり、依而すでに二、三年以前より各自これが資材の入手難得等をなし、部落電化の一日も早く実現せんことを冀つてゐた次第でありました。

偶々本年六月当部落と白滝駅において配電点燈の運びに至り、その幹線は当部落を通ずる鉄道線路に沿ひ敷設され、これが共同許可の御高配をいただけますならば部落電化の絶好の機会にて如何なる隘路障礙も必ず克服いたし之が実現を期すべく部落全員一丸となり電化速進請願運動を展開いたすことに相成つた次第でございます。

何卒部落民の衷情御賢察の上特段の御高配相仰度ここに部落民連署、左記参考事項を具し此段懇願申し上げる次第であります。

記

- 一、白滝発電所より下白滝駅までの幹線が当部落を通じ部落全戸は全部この幹線に沿ひ散在せり
- 二、資材（線、変圧器、碍子等）は大半部落民において入手保有す
- 三、電柱は各自所有地に相当数量あり、尚不足分の官林私下現物は近距離にして造材搬出し条件最適なり
- 四、敷設工事に要する労役は一切部落民において担当し且つ物質的精神的の奉仕援助をします

昭和二年八月一二日

旧白滝部落請願者一同（氏名……略）

部落民の熱意が北電に通じ、ついに昭和二十二年二月旧白滝部落は電化されたのである。

これと同じような経過が上白滝部落にもみられ、旧白滝の電化によって上白滝部落も請願に立ちあがり、昭和二十三年三月上白滝部落の電化が実現したのである。

また奥白滝部落は、昭和十年白滝市街に布田木工場からの電気供給をうけて点燈された経過に刺激されて、奥白滝の岸利七も自家水力発電を計画、昭和十一年夏水力タービンによる発電をおこし、この電力を奥白滝駅および奥白滝市街およそ三十戸に配電を行なった。

村営白滝発電所

昭和七年石北線が全通し市街地の形態も一応ととのつたものの、いかんせんランプ生活は心晴れやかならず、一部自家発電をなして点燈している以外は夕方薄暗くなると電燈の明りが恋しくなるのを覚えた。布田富蔵経営の木工場が自家水力発電によって操業していたが、その余剰電力を市街地の一部に送電してもらおうべく市街住民の歎願と北電の仲介とによって昭和十年八月白滝駅を含め市街地に電力供給開始された。もとより北電（当時の名称は大日本電力株式会社）に対する発電所設置の請願は根強く続けられていたが、一方札幌通信局に対しても左のごとき歎願書を部落民連署をもって提出、哀願にこれつとめた。

歎 願 書

昭和四年石北線鉄道開通ニ依リ当白滝ハ戸数七百数十戸ヲ有シ、火防ソノ他市街ノ繁栄上燈電ノ必要ニ依リ当時北海電燈会社ニ占據方ヲ数度歎願交渉仕リ候所、戸数点燈数ノ關係上採算ニ滿タザル為メトノ理由ニ依リ自然配電区ノ權利放棄ノ状態ニテ今尚燈電ノ域ニ達セザル次第ニテ候、今回当地布田富蔵氏ニ於テ自家用電燈ノ承認相成点燈仕リ候為メ此レ方是非共市街ニ配電方ヲ交渉仕リ候所、御所ノ許可無之タメ配給出来ザル旨申候間、御承知ノ如ク当地モ数回ニ及ビシ火災有之、火防上当地市街繁栄上電燈ハ急務ヲ要スル次第ニツキ布田氏又ハ大日本電力向者何レニテモヨロシク候間、一日モ早ク燈電相成様御配電下サレ度此ノ段部落民連署ヲ以ツテ歎願仕リ候也（注・連署名……略）

昭和一〇年九月六日

札幌通信局長殿

また、大日本電力株式会社に対して行なった波狀的請願に、次のごとき書簡を白滝に寄せてきた。

……書簡……

垣内白滝駅長殿

鈴木白滝区長殿

拝啓 時下寒冷ノ候愈々御多祥之段奉賀候

陳者兼テヨリ御尽力賜ヘリ候白滝市街地電燈供給ノ件ハ布田氏及三方ノ互譲ニヨリ両者間ニ下交渉成立希望実現ノ緒ニ付キ

中候コトハ御同慶至極ノコトト存候

弊社ハ一日モ早ク計画ヲ実現点燈致シ度ト存シ候モ何分通信当局ニ認可申請認可相受ケタル上ナラデハ工事実施致シ兼ねル次

第ニ候間実施迄ニハ尚ホ相当日数ヲ要シ年内点燈ノ見込ハ全然無之カト存候

右事情御了察ノ上部落並ニ駅関係各位ニ可然御伝言被下度願上候

昭和一〇年二月二日

草々

昭和二十年、戦争の熾烈化によつて各木工場は軍需材の生産に昼夜兼行の増産が強いられたが、これがため布田木工場の電力に余剰が生じなくなり一般家庭への送電が困難になった。このことが起因して北電においては送電系統の原規にのっとり郵便局裏手湧別川ほとりに適地を求め、最大出力五二キロワットの発電所を建設、昭和二十年三月より市街地区家庭に電気の供給を行なつたが、年とともに需要家庭もふえ、さらに動力使用の各種工場も出来るに至つて日に増し電力の不足が生じ発電所施設の増設も思うにまかせず、しかも市街周辺に限られた点燈のためこれが対策として村営発電所建設の議が村議会においても真剣に討議され、電気事業委員会を設け全村電化の線に沿つて昭和二十六年十月十八日白滝村東区ホロカ沢入口にほど近い湧別川沿いに発電所諸施設工事着工、同時に配電線工事も進め、財源難にあえぐあらゆる悪条件を克服して総額四千七百有余万元にのぼる工事を投入し、昭和二十七年九月二十八日諸工事竣工と同時に一斉送電を開始し傘下需要家庭全村五百七戸に点燈された。

発電所工事費 二千八百九十万円

配電線工事費 一千百十万円

雑工事費

二百九十万円

工事雑費

四百四十万円

計

四千七百三十万円

出力 最大

二七〇キワ

常時 二二〇キワ

こうして北電白滝発電所ならびに村立白滝発電所より供給された電力は全村八百三十四戸、開拓地の最奥に至るまで完全に点燈されたわけである。しかも余剰電力は林産加工にまたは農産加工に電力の供給をなし本村発展のため大いに益したのである。

第十章 村章の制定

白滝村として独立以来月に月に躍進をつづけていたが、いかんせん村の象徴たる紋章が決っておらず、一抹の哀愁を感じずにはおられなかった。そこで分村第三周年を迎えるにあたって村章の制定をなすべく、昭和二十三年七月広く村民より左記のごとき要旨で村章の募集を行なった。

村章募集について

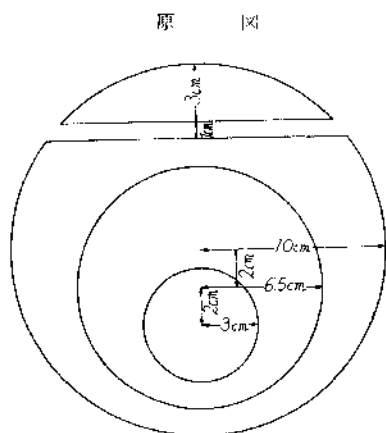
来る八月一日の分村第三周年を迎えるにあたって、今般元記要領によって村章を広く村民の皆さんから募集致します。愛村の念に燃ゆる皆さんの熱意を一編の村章に託して多数の応募を期待します。奮って応募下さい。

記

趣旨と目的

新生白滝村の発足を永久に記念し、併せて村民の誰からも親しみ深く愛せられ、白滝村の限りない発展を象徴するもの。

白 滝 村 紋 章



二 応募 先

白滝村役場

三 応募要領

図案化したものをハガキ大の用紙に明瞭に記載し、住所、氏名、年齢を裏面に記載すること。尚、参考として図案の説明を附けてもよい。

四 応募資格者

白滝村民

五 応募の締切

昭和二十三年七月二〇日

六 発 表

昭和二十三年八月一日

七 入 賞

一等 一点、二等 二点、三等 三点

八 その他

応募は、人何編でもよい。原稿は一切返却しない。審査は村長の定めた委員に委嘱し決定する。

村章に対する村民の関心意外に高く、期日までに四十五点の作品が応募された。いすれ劣らぬ優秀な各作品に、これが決定に慎重を期するため専門家に審査をゆだねることとし、東京美術学校図案部教室に勤務せる図案家高田正二郎教授に依頼、ここに入賞者が決定した。すなわち

一 等 青 山 喜 直 (上支湧別)

二 等 鈴 木 広 (上支湧別)

三等 三木克己(白 滝)

四等 布田 勇(白 滝)

かくして、専門家による審査依頼のため当初計画の発表より遅延したが、昭和二十四年七月の村議会議員協議会において、入選第一席の作品を、村の紋章として採用することを決定、昭和二十四年八月一日白滝村告示第十九号をもって村章を制定したのである。

別掲の村章は、白滝の「白」を波紋に模し、無限の発展を表わしたものである。

八 交 通 ・ 通 信

第一章 道路交通の今昔

蝦夷時代の北海道に道路があるはずがなく、北海道の開拓が主として海岸線から拓けたことからでも知れるように、往来はほとんど舟による海上交通が主であったようだ。しかしてひとたび陸地に上ると樹木熊笹雜草等繁茂し、往来には笹草を踏み分けて、ついにはその足跡によって自然に一本道が出来ていった。また山嶺を越える時は川を通り溪谷伝いに登り、溪谷に沿って降り、また時としては熊鹿の歩いた道を通行したものである。これらが本道における道のはじめといえよう。

享和年間（一八〇一—一八〇四）より万延年間（一八六〇—一八六二）にかけて函館より海岸線に沿って室蘭、広尾、釧路を経由し根室に至る間の險難箇所を修築をはじめ、道内各所において部分的に道路の開発が行なわれていたが、もちろん労働力の乏しい当時のことゆえ、道路とは名ばかりで径路といった方が適當であったろう。

札幌の開拓使庁が設置されて以来、本道の開発はまず道路網の整備拡充であることの方針をかため、明治五年二月札幌・函館間の道路開設を手始めとし、海岸沿いに全道を一周する道路の改良に着手し、年を経て岩村通俊が明治十九年一月北海道初代長官に就任するや、拓殖政策の第一義としていよいよ道路の完成に意欲を燃や

し、内陸の交通をさらに充実せんものとの綿密な計画を樹て、内陸の中央を横断する幹線道路とこれに合流する各支線道路の開削に着手することとし、まず札幌・市来知（いまの三等市）間道路が明治二十年に完成、つづいて市来知・忠別太（いまの旭川）間、上川道路という、月形・増毛間、釧路・網走間、標茶・厚岸間などの道路開削、有珠・室蘭間の道路改修など次々と着工された。

明治二十二年上川道路の延長として旭川・網走間の道路開削がはじめられた。上川道路と対比して「北見道路または北見新道」と呼んでいた。世にいう「中央道路」とは、正しくは札幌・網走間をいうのである。

中央道路（旭川・網走間）

中央道路（旭川・網走間）は、網走に起り端野、留辺蘂、佐呂間、野上を経て白滝に入り、さらに北見峠を越え上川、愛別を通り旭川に至る全長五十七里十四町十一間（二二五・四〇二里）の仮定県道、いわゆる殖民道路である。

拓殖と北辺の防衛上きわめて重要視されていた中央道路（旭川・網走間）が起工されるまでの経過を『湧別兵村誌』には次のように記してある。

明治二十一年、時の北海道長官永山武四郎は部下に対して「今や中央政府財政多端ニシテ歳出入償ハズ、本部殖民事業ニ於テ緊急必要ナル事業ト雖モ国库ニ仰ガントスルハ望ムベカラザルコトトス、本年度ニ於テ上川郡忠別太（旭川）ヨリ北見国網走ニ至ル新道ヲ開削シ以テ南北交通ノ連絡ヲ図ラントス、要スルニ兵備上殖民上最緊急ノ事業ナリ、シカレドモ土木費用不足ニシテ工費ノ出途ナシ、ヨロシク細費ヲ節約シ、ソノ残余金ヲ以テ土木費ニ充用シ、忠別太、網走間ノ工費ヲ補填スベシ」と訓示しているが、このことによつていかに旭川・網走間

の中央道路が必要欠くべからざるものであったかをうかがい知ることができる。

かくして明治二十二年六月空知集治監の囚徒三十七名を役使し旭川・網走間の仮道路（道幅のせまい通路）を開削し、同年十月旭川側より本格的な道路工事着工したがまもなく降雪期に入りいったん工事を休止、翌二十三年四月工事再開し、エーカウス（伊香牛）までの約二三（五里余）を空知集治監囚徒の労役により同年十月完工、引きつづき囚徒をして上川方面に向って開削を行なわせる予定であったが、役使に供する囚徒が不足であったため、工事の遅延を考慮し一部を民間に請負わすことに決め、伊香牛・石狩ルベシベ（いまの中越）間約四〇（十里）を札幌の佐藤倉吉が請負って明治二十三年五月着工、同年十一月完成した。

この年八月網走の原鉄次郎を案内役とし、十一日間を要して網走・旭川間人跡未踏の山野を踏査し、囚人収容の宿泊所建設地の選定をし、翌二十四年四月さきに開設された仮道路に沿って道庁技師佐藤勇主任ら一行が路線の実測を行ない、網走側よりただちに囚人の手により工事がはじめられることとなった。

さて、本州府県より囚徒の北海道への島送り、あるいは函館戦争の残党など、これら囚人をして北海道の開拓に従事せしめていたが、明治十四年樺戸集治監の創設とともに全国の実刑犯を収監し、主として開墾農耕、道路開削、採炭、建築架橋に使役した。

かくて翌十五年には空知分監が、同十八年釧路分監、同二十四年網走分監、同二十八年十勝分監がそれぞれ設置されたのである。

中央道路（旭川・網走間）も一部をのぞき大半がこうした囚人を使役して突貫作業が進められた。次にのべる工事概況は網走分監の担当であった網走・北見峠間におけるもので、『網走刑務所沿革史』よりひろってみると、

時の北海道庁長官永山武四郎が網走・北見峠間道路開削の訓令を発して以来、活発に準備が進められ、明治二十三年中に網走郡能取村字最寄に囚人宿泊所（仮分監）および仮事務所を建て釧路集治監より囚徒八百名（のち千百名余となる）を移し、敷地の整備、溝渠の築造、官舎等の建築に使役した。翌二十四年四月融雪をまっぴいよいよ道路の開削に着手したのである。使役方法は同沿革史には、「終点まで（網走・北見峠間のこと）十三区域に分け、一区域に看守長一名、監督補助二名（看守部長）、看守十二名を配置、囚人二百名をもって一組とし、一区域は二里乃至三里となし仮泊所を設け、分担区域は双方から着手必ずその中間に於て成功を期することとし、竣工すると直に前進し次の区に移り、国境まで達するようにした」とある。

こうした作業方法が互いに競争意識をたかめ、ついには不眠不休の作業となり、一区域間わずか、カ月余にして竣工した個所も少なくなかったとの記録もあるが、今にして想えば驚異的作業能力といえよう。今一度『網走監獄沿革史』を引用すると、「過度ノ労働ハ健康ヲ害シ、不検束ト役事ノ困苦ハ多数ノ逃走者ヲ出サセシモ、更ニ他顧スルトコロナク一意専心、唯ダ工事ノ速成ヲ期セントセシモノノ如クナリシ。特ニ粗雑ノ休泊所ニ多数ヲ雜居セシメタルガタメ弊害百端、余弊今日ニ及ベルモノニシテ少シト為サズ。又、当時最も困難ヲ感シタルハ医事衛生ニ関スル事項トス、一時的ノ仮泊所固ヨリ飲料給水ノ方法アリ得ベクノ理ナク、加フルニ霖雨連日ニ涉リ一種ノ水腫病ヲ発シ、日々数名ノ新患者ヲ出シタルモ荆棘無人ノ間、道路相隔リ、日々休泊所ヲ巡診センコト一医員ノ到底能クスベキトコロニアザルヲ以テ療養看護自ラ違算ナキ能ハズ、夏期数カ月ノ間、死者百以上ヲ算スルニ至ル」。かくのごとく想像を絶する酷使につぐ酷使によってきわめて多くの犠牲者を出し、ついに工事着手以来わずか七カ月余り、すなわち明治二十四年十一月末、網走・北見峠間三十九里余（約一五六キロ）の完成を

み、ここに旭川・網走間は全通したのである。この間の道路幅はおおむね三間（五・四畧）で、地勢上やむをえぬところは二間（三・六畧）とし、総工費八万四千四百五十円を要したといわれている。また、囚人の酷使によって網走・北見峠間の工事中百八十六名の多きのぼるいたましい死亡者『丸瀬布郷土史』によると二百三十八名としているが）が出ているが、このことによってもこの工事がいかに惨憺をきわめたものであったかをうかがい知ることができる。旭川・網走間中央道路の大半がこうした囚人によって開削されたため、別名を囚人道路と呼ばれたゆえんもここに起因するであろう。

北海道開拓に策もなく酷使された囚徒は、その作業内容、労働条件から考えても明らかに二重刑に値するもので人権じゅうりんも甚だしいというべきであろう。中央道路の過激な酷使が契機となってしだいに使役囚に対する同情的世論がたかまり、ついに明治二十七年徒刑囚人の重勞工は取りやめとなった。

なおさきに開通した旭川・網走間中央道路は一部補修の必要が生じたため入念な改良工事が明治二十五年に行なわれ、道央との連絡上必要な幹線道路となったのである。

明治三十一年札幌・旭川間鉄道の全通にともない中央道路が郵便通送路線となり大いに利用された。その後、紋別・名寄間の道路が開通、さらに旭川・名寄間鉄道の開通によって、明治三十七年十月通送路線は名寄經由に変更され中央道路の通送路線は廃止となったがその後も引きつづき鉄道による輸送が行なわれるまで郵便通送はつづけられた。

駅 遞

道路が開削されず、交通機関も発達せず、通信業務も備わっていない本道開拓初期における旅人の苦勞は想像

以上のものがあつた。幕府時代に道内各場所の会所、運上屋、大番屋、通行屋と称せられたものは本務のほか、これら旅人の飲食、宿泊にも供されていた。明治二年開拓使設置当時、道内の会所および運上屋は百二十六カ所を数えていたが、これらすべて本陣と改称、明治五年一月本陣の名称を旅籠屋はなごやと改め、同年四月旅籠屋と改め通信人や旅人の宿泊を許し、そのうえ希望によつて遊女を置くことをも許されたのである（この娼妓の廃止については確とした資料に乏しいが、明治十一年十一月開拓使南館支庁布達の宿泊営業規則第十条に「売淫ニ類スル娼妓ノ所業ヲナス可ラズ若シ違犯ノ者アラバ九年八月第八十五号布達売淫罰則ニ照シ処分スベシ」とあるところから、明治九年頃より駅通に娼妓を置くことが禁止されたものと思われる）。翌五月には駅通所と改称し取扱人においてその業務を担当させた。しかし辺地においては旅人の宿泊も少なく駅通維持も容易でなかつたので、その多くは漁場持に委託し駅通存続に努めた。明治九年九月漁場持の廃止によつて駅通の運営方法も変り、駅通取扱役を置きこれに年額八十圓の補助金を支給し官馬の貸与あるいは廉価にて払い下げるなどの措置をとり、駅通を独立経営の姿とした。このころ網走地方には斜里・網走・紋別の各駅通があつたが、根室県下の各駅通ともども駅通間の距離が遠く取扱人にとつて苦勞の種であり、また旅人あるいは移住民より苦情がでていた。こうした世論によつて根室県では県下の駅通増設をきめ、このなかに湧別村も入つたのである。この決定のあつた翌明治十七年湧別派に湧別駅通が設けられ和田隣吉が取扱人に任命され、旅人の宿泊、人馬の継立輸送を行なつた。

明治二十一年人馬継立営業規則が定められて人馬継立所と名称が變つたが、明治三十三年再び官設駅通所となつた。

この時定められた駅通所規程は次のようなものである。

北海道庁訓令第四十二号

支 庁
警 察 署
同 分 署
戸 長 役 場

駅通所規程左ノ通定ム

但明治二十八年五月北海道庁訓令第二十三号及其他本規程ニ抵触ノ規定ハ之ヲ廃止ス

明治三十三年六月八日

北海道庁長官 男爵 岡田 安 賢

駅通所規程

・駅通所設置廢止

第一条 駅通所ハ人馬車繼立所又ハ宿屋ノ必要アル所ニシテ、其營業者ナキトキ若ハ其營業者アルモ公益上必要アリト認ムルトキハ之ヲ設置スルモノトス

第二条 駅通所ノ土地建物馬匹ハ其必要ニ依リ之ヲ官設スルモノトス

前項ノ土地建物馬匹ノ官設ヘ左ノ制限ニ依ル

一 土地ハ牧場地畑地建物敷地ノ用ニ限り設備シ其面積ハ必要ニ応ジ之ヲ定ム

二 建物ハ第一号書（様式略）ノ標準ニ依ル、但シ土地ノ状況ニ依リ其設計ヲ伸縮スルコトヲ得

三 馬匹ハ十頭以内トス、但シ必要ニ依リ特ニ其數ヲ増スコトアルベシ

第三条 駅通所ニ駅通取扱人ヲ置ク

駅通取扱人ニハ月領金十円以内ノ手当金ヲ支給スルコトヲ得、但シ必要ニ依リ特ニ其金額ヲ増スコトアルベシ

第四条 駅通所ニ充ツル建物ヲ官設セザルトキハ其取扱人居所ヲ以テ駅通所トス、但シ特ニ之ヲ指定スルコトアルベシ

第五条 第八条ニ依リ人馬車繼立取扱人ヲ以テ駅通取扱人トナストキハ官設ノ牧場地畑地ハ人馬車繼立營業組合營業者營業馬

匹ノ共用ニ供フ、但シ此規定ニ依リ難キ事情アルモノハ此限リニアラズ

第六条 支庁長ハ駅通所及土地建物馬匹手当金ノ施設増減ヲ必要ト認ムルトキハ左ノ事項ヲ調査シ毎年十一月限り取纏メ北海道庁長官ニ進達スベシ

一 駅通所位置及隣村隣駅ノ里程ヲ記シタル図面

二 土地建物ノ位置構造坪数及経費予算金額ノ調査並図面

三 馬匹購入費及手当金額

四 駅通所及土地建物馬匹手当金ノ施設増減ヲ要スル理由

・取扱人任免及物件設備

第七条 駅通取扱人ハ左ノ各号ニ該当スル者ニ限ル

一 二十年以上ノ男子ニシテ土地又ハ家屋ヲ有シ及業務上必要ノ設備ヲナスノ實力ヲ有スル者

二 人馬車竊立營業者宿屋營業者ノ資格ヲ有スル者

故意ヲ以テ郵便電信ニ関スル罪ヲ犯シ其刑ニ処セラレタル者又ハ禁錮以上ノ刑ニ処セラレタル者若ハ家賃分散ノ宣告ヲ受ケ債務ノ弁償ヲ終ヘザル者ハ駅通取扱人タルコトヲ得ス

駅通取扱人ハ其地方在住者ニシテ駅通取扱人タル資格ヲ有スル保証人ヲ立ツルヲ要ス

第八条 人馬車竊立營業組合設置ノ箇所ニ於テ駅通取扱人ヲ置クトキハ人馬車竊立取扱人ヲ以テ之ニ充ツ、但シ此規定ニ依リ

難キ事情アルモノハ此限ニ非ス

第九条 支庁長ハ駅通取扱人ヲ任免ス

支庁長ハ駅通取扱人ヲ命ズルトキハ第二号書（様式略）ノ命令書及官設物件ヲ交付シ保証人連署ノ受書ヲ徴スベシ

第十条 建物附属物ハ官印ヲ押捺スルニアラザレバ取扱人ニ交付スルヲ得ズ馬匹ニハ第二号書ノ烙印（官 字ノ縦三寸二分、字ノ幅二寸六分・印ノ深サル一寸、字線ノ幅一分）ヲ左腎ニ押捺スルヲ要ス、但シ満二歳以下ノ仔馬ハ此限リニアラズ

第十一条 支庁長ハ官馬ヲ不必要ト認メ売却サントスルトキハ北海道庁長官ノ認可ヲ受クベシ

・取扱人服務

第十二条 駅通取扱人ハ駅近所ニ居住シ命令ニ於テ示定スル所ノ營業ニ従事スベシ

第十三条 駅通取扱人ハ官設物件ニ対シ本規程及命令ノ定ムル所ニ依リ私費ヲ以テ保管ノ責ニ任ズ

駅通取扱人ハ私費ヲ以テ建物及其附属物修繕ノ義務ヲ負フ、若其修繕ノ義務ヲ怠リタルトキハ官ニ於テ之ヲ修繕シ其費用ヲ駅通取扱人ニ支辨セシムルコトアルベシ

第十四条 官設物件ノ外營業上設備ヲ要スルモノハ駅通取扱人ノ私費ヲ以テ支辨スベシ、但シ支庁長ハ特ニ其設備ノ種類員數及其増補ヲ命ズルコトアルベシ

第十五条 牧場地ニハ馬匹ノ逃逸ヲ防グ為メ駅通取扱人ハ私費ヲ以テ、第五条ノ人馬車懸立營業組合營業者共用ノ場合ハ組合費ヲ以テ適當ナル柵垣ヲ設クベシ、但柵垣ノ必要ナキモノニシテ特ニ支庁長ノ認可ヲ得タルモノハ此限ニ非ズ

第十六条 駅通取扱人ハ官設馬匹ノ外庁支長ノ命ズル所ニ依リ馬匹ヲ設備シ欠乏アルトキハ遲滞ナク之ヲ補充スベシ

官設馬匹ニ欠乏ヲ生ジタルトキハ取扱人ハ遲滞ナク其欠數ヲ私馬ニ於テ増備スルヲ要ス

第十七条 駅通取扱人ニ於テ私費ヲ以テ官設ノ土地建物ニ工事ヲ加ヘントスルトキハ仕様方法書及圖面ヲ添ヘ支庁長ニ願出許可ヲ受クベシ

駅通取扱人罷免若ハ死亡シタルトキ又ハ官設ヲ廢止シタル場合ニ於テハ支庁長ハ期限ヲ指定シ取扱人又ハ其相続人ノ私費ヲ以テ原形ニ修復セシムベシ、此場合ニ於テ取扱人又ハ其相続人ノ修復セザルトキハ官ニ於テ修復シ其費用ヲ支弁セシメ又ハ無償ニテ官ノ所有ニ移スコトアルベシ

第十八条 馬匹ハ常ニ注意保護シ苟モ苛酷ノ取扱ヲナスベカラズ

第十九条 官設ノ牝馬ハ適當ノ期節ニ交尾ヲナサシメ努メテ蕃殖ヲ図ルベシ

官設牝馬ノ産シタル仔馬ハ滿三歳ニ至ルマデ取扱人ニ於テ私費ヲ以テ保管ノ義務ヲ負フモノトス

前項ノ仔馬滿三歳ニ至リタルトキハ支庁長ハ適當ノ処置ヲ為スベシ、其仔馬ノ見積価格二百円未満ノモノハ隨意契約ヲ以テ駅通取扱人ニ特売スルコトヲ得

第二十条 官馬ノ牛産死亡逃亡シタルトキ又ハ盜難ニ罹リタルトキハ駅通取扱人ハ事實ヲ記シ遲滞ナク支庁ニ届出ベシ、但死亡ノトキハ獸医所在地ニ於テハ獸医ノ鑑定書ヲ添フベシ、逃亡又ハ盜難ニ罹リタルトキハ前項届出ト同時ニ警察官署ニ届出

ベシ

前二項届出ノ逃亡及盜難馬匹ノ所在発見シタルトキハ支庁及警察官署ニ届出ベシ

第二十一条 官設ノ物件ハ目的以外ニ使用シ若ハ之ヲ担保ニ供スルコトヲ得ズ

第二十二条 駅通取扱人ハ継立資金及宿泊料収入額ヲ各毎月ニ区分シ半年分ヲ取マトメ七月及一月ノ兩回ニ支庁ニ届出ベシ

第二十三条 駅通取扱人罷免セラレタルトキ若ハ死亡シタルトキハ駅通取扱人又ハ其相続人ハ三十日以内ニ保管ノ物件ヲ返納スベシ、但支庁長ハ特ニ其返納期日ヲ指定スルコトヲ得

第二十四条 駅通取扱人又ハ其相続人ノ故意怠慢ニ因リ官設ノ物件ヲ毀損、失シタルトキハ相當代価ヲ弁償セシムベシ

第二十五条 駅通取扱人本規程又ハ命令ニ違背シタルトキ若ハ人馬車繼立營業取締規則宿屋取締規則ニ違背シタルトキ又ハ支庁長ニ於テ公益上必要アリト認めタルトキハ支庁長ハ其情狀ニ依リ取扱人ヲ罷免シ又ハ二カ月以内ノ手当金ヲ支給セザルコトアルベシ

第二十六条 駅通取扱人罷免セラレタルトキ又ハ官設物件及手当金ヲ増減廃止セラレタルトキハ何等ノ損失アルモ其賠償ヲ請求スルコトヲ得ズ

第二十七条 駅通取扱人ノ手当金ハ其月末日之ヲ支給ス、新ニ駅通取扱人ヲ命ジタルトキ又ハ解免死亡ノトキ若ハ手当金ヲ増減シタルトキハ其月手当金ハ日割ヲ以テ支給ス

・台帳及監督

第二十八条 支庁長ハ第四号書(様式略)ニ依リ駅通台帳ヲ製スベシ

第二十九条 支庁長ハ駅通取扱人ヲ任免シ又ハ土地建物馬匹手当金ヲ廢設変更シタルトキハ北海道庁長官ニ報告シ及警察官署

ニ通知スベシ

前項ノ通知ヲ受ケタル警察官署ハ其通知ノ事項ヲ人馬車繼立營業台帳及宿屋營業台帳ニ記入スベシ

一 官馬ノ状況

二 官馬以外ノ雜立用馬匹數

三 土地建物並ニ附属物件ノ状況

四 營業用品設備ノ状況

五 人馬車繼立資金及宿泊料收入簿ノ整齊及收支損益ノ状況

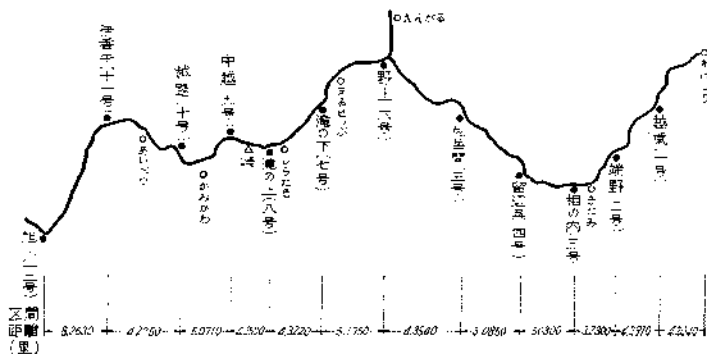
六 現在設備ニ対スル需要供給ノ状況

警察官署ニ於テ駅逓取扱人タル人馬車繼立營業者又ハ宿屋營業者ヲ検査スルトキハ前項ノ各号ヲ視察シ異状ヲ認メタルトキハ所轄支庁長ニ報告スベシ
支庁長及警察官署ニ於テ種馬ヲ借用セル駅逓取扱人ニ人馬車繼立營業取締規則宿屋取締規則及駅逓所設置規程違背ノ行為アルヲ認メタルトキハ事実ヲ具シ北海道庁長官ニ報告スベシ

第三十一条 (略)

この駅逓所規程は昭和二十二年三月駅逓の全廃となるまで幾度となく内容の変更があつた。

明治二十五年旭川・網走間中央道路が開削され石狩国と北見国との交通路が開かれ、かつこの道路沿いに駅逓所が設置されるに及んで、郵便の通送に、人馬の繼立に、旅人の通行にますます活用されたのである。すなわち、越嶺(現・網走市郊外)、端野、相の内、留辺蘂、佐呂間、野上(現・遠軽町域内)、滝の下(現・丸瀬布町域内)、滝の上(現・白滝町域内)、中越、越路(現・上川町域内)、伊香牛、上川(現・旭川市)の十二カ所でおのおの三里(一二キロメートル)ないし五里(二〇キロメートル)の間隔

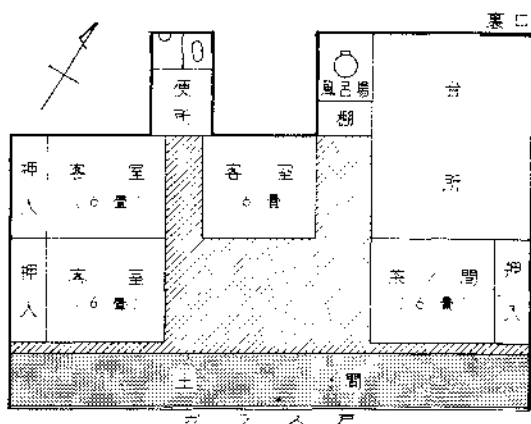


中央道路駅逓区間見取図

があり、その地名をもって駅名としたが、のち網走越歳駅通所より起算した番号をもってその名称にかえ、何号駅通といわれた。

滝の上駅通（八号駅通）

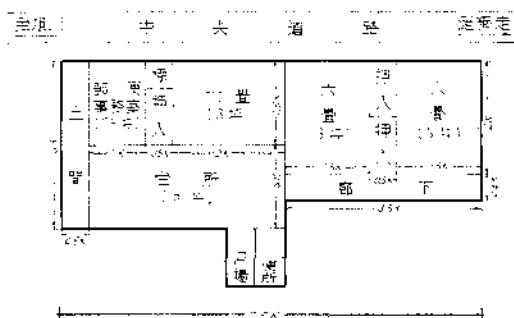
上白滝に設置された「滝の上駅通」は、既述のごとく網走越歳より算えて八番目に当るので、八号駅通とも呼ばれていた。



滝の上（8号）駅通平面略図（昭和初年のもの）

（中沢正春所蔵の図より）

滝の上駅通は明治二十六年六月三十日の官報に、滝の下（七号）駅通と同時に設置が告示され、札幌月寒に居住していた長野県人中沢兼三郎が駅通取扱人として任命され、駅馬十頭の賃付けを受けて同二十六年開駅したが、養子の中沢沢治が代って着任し兼務を行っていた。駅通の位置は今の上白滝から一・七キロほど奥白滝寄りにある滝の上橋を渡りきった北側（右手）にあったが、明治四十五年三月風呂場からの失火により駅舎を全焼した。同年五月駅舎位置変更認可とともに、現在地よりおよそ、二・一キロ奥白滝寄りの地に再建された。この時貸与された土地は『上湧別村誌』によると「駅舎敷地九百九十余坪、畑地五町二反四畝十一歩、牧場三十七町三反七畝十二歩で旅客年平均一日一人」と記されている。



北見峠駅通平面略図（中沢正春所蔵の図より）

これよりさき明治四十二年三月、沢治の死去により三男の中沢三平が跡をつぎ同年五月八日駅通取扱人となった。大正十三年三月に行なわれた全道駅通所取扱人会議、およびその後に行なわれている取扱人等の会議には滝の上駅通の名がなく、白滝駅通所となっているところから、古い資料が皆無で年代的確証はないが、あるいは大正八年以上湧別村より遠軽が分村し二級町村制を実施した折に、滝の上駅通を白滝駅通と名称変更したものと思われる。かくてこの駅通もわずかな利用者ながら旅行者にとっては適当な憩いの場であったが、昭和七年十月石北線的全通によって駅通所は廃止となった。

北見峠駅通

北見峠駅通の設置前後の詳細については資料が乏しく克明に記しがたいが、大正十二年発行の『愛別村郷土資料』には峠駅通のことについて次のごとく記されている。

「峠駅通は明治三十一年頃中沢某なるものの私設経営にて郵便取次をなしたりしが、郵便伝送廃止の後官設駅通に改め相当補助ありしも中途にして同人死去し、明治四十三年小林九平管理人となり同四十四年現高橋仙太郎更代して旅舎を改築し、馬匹を備へ北見国白滝に於て牧場地六万坪付属し、稍々面目を改めしも物資の供給に容易ならざる困難あり」

とあるが、右文中、郵便伝送廃止は明治三十七年で、峠駅通が官設になったのは明治三十五年で年代的誤差があるゆえ、この資料は信じ難いといわねばなるまい。

明治三十五年六月野上駅通取扱人となった角谷政衛の嗣子栄政の語るところおよび丸瀬布郷餅の資料から総合するに、峠駅通について網走支庁の要請を受けた角谷政衛は、当時政衛のもとで働いていた石上藤蔵を峠駅通の取扱人として差向けることに決め、支庁においてはただちに官費をもって駅通所に代る休泊所を北見峠よりやや北見寄りの適地に建設、石上を休泊所の取扱人として採用し業務に従事させた。時に明治三十三年とのことである。しかし峠休泊所は収入も少なく将来性に乏しい所なるを覺つて、在勤二年足らずして石上は旧白滝に入地したのである。無人化した峠休泊所はその後石狩寄りの地に移し、明治三十五年三月官設北見峠駅通所として開業、取扱人には八号滝の上駅通と同じく中沢兼三郎が任命された。当時の命令書（中沢正春所蔵）には次のとおり記してある。

上川支庁命令第六号

命令書

石狩国札幌郡白石町番外地

中沢兼三郎

石狩国上川郡愛別村北見峠駅通取扱人ヲ命シタルニ付、左ノ条項ヲ遵守スヘシ

明治三十五年三月十八日

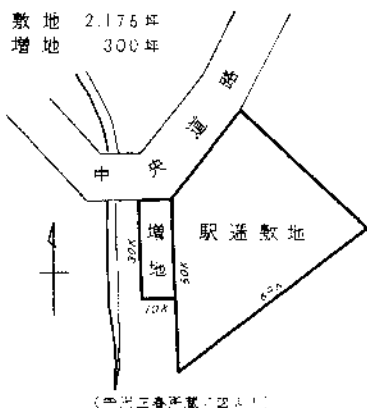
上川支庁長 加藤寛六郎 副

一 明治三十五年三月二十五日ヨリ上川郡愛別村北見峠ニ於テ駅通及宿屋営業ニ従事スヘシ

二 営業用トシテ左ノ雇人並ニ物件ヲ設備スヘシ

(イ) 雇人 相当数

(ロ) 駄馬 四頭



北見峠駅通敷地見取図

(石狩国上川郡愛別村字チカルベツ)

上農第二三四号

駅通所敷地ニ関スル件

石狩国上川郡愛別村字チカルベツ官有地第三種官林貳千百七拾五坪別紙図面(注・上図)之通駅通敷地トシテ官有地第二種ニ編入セラレ候条此段及通知候也

明治三十五年三月二十七日

第三課 國

北見峠駅通取扱人

中沢 兼三郎 殿

上農第八五二号

駅通所付属敷地ノ件

- (三) 夜具 相当敷
- (四) 馬具 四頭分
- (五) 食器 相当敷
- (六) 厩舎
- (七) 右ノ外營業ヲナスニ必要ナル物件

三 明治三十三年北海道庁令第四十七号人馬議立營業取締規則ヲ遵守スヘシ

四 家屋ハ明治三十五年二月十八日付ヲ以テ提出シタル副題ニ依リ、明治三十五年五月十五日迄ニ竣工スヘシ、但竣工ノ上ハ速ニ届出スヘシ

五 前項家屋ノ出来ル迄ハ、且下建設シアル家屋ヲ修理シ營業所ニ宛ツヘシ

なお、峠駅通所敷地および付属敷地に関する当時の公文書によると

北見峠字チカルベツニ於テ官有地第三種原野參百坪ヲ駅通所増地トシテ自今官有地第二種北海道庁用地に編入相成候ニ付別紙図面（注・前圖）相添此段及通牒候也

明治三十五年十二月十二日

上田支庁第二課 圖

愛別村字チカルベツ

北見峠駅通取扱人 中沢 兼三郎 殿

明治三十八年六月帝國陸地測量部（現・建設省国土地理院）が行なったチトカニウシ山における三角點選点、

縦三尺
(7.6m)

厚一寸
(2.5cm)

官 設
何々 駅 通 所

取扱人 氏 名

札 標 合 駅

標石埋定作業復命報告書の中に、測量技師および作業員が「チカルベツ駅通に投宿す」と記されているが、このように峠駅通は近くを流れるチカルベツ川があった関係でこの付近をチカルベツと呼び、峠駅通も自然チカルベツ駅通と呼称

されていたようである。

明治四十二年三月通駅取扱人中沢沢治の死亡によってその後小林九平が同所の管理人となり、明治四十四年一月に至り岡通駅取扱人の命令を受け、翌四十五年一月高橋仙太郎に代り、その後年代的記録に乏しいが高橋について九号中越通駅取扱人滝田熊太郎が一時峠通駅の管理人を兼務しそ



北見峠駅通所（古野七藏取扱人時代）

の代務者として青野七蔵が勤めていたが、大正の中期ごろ正式取扱人となり、石北線全通の翌昭和八年、幾多の人跡を残した峠通駅も鉄道の開通によって全く利用度がうすれ廃止となったのである。

主要道道遠軽・上川線道路

明治中期に開削された旭川・網走間中央道路はその後旭川・根室線と名称が変わり、さらに一級国道三十九号となり、文字どおり道北と道東を結ぶ主要幹線道路として戦後の道東開発に貢献したが、石北国境北見峠の難所が年々急増する車輛交通上の妨となり、加えて産業、観光開発に一躍脚光を浴びた上川―層雲峡―温根湯―留辺蘂間道路の完全舗装化によって昭和三十五年六月一日国道に昇格、一級国道三十九号線は上川から層雲峡を經由して留辺蘂に出る路線と変更され、世にこの間を大雪国道と呼称している。これがため上川・遠軽間は同年七月二十一日付をもって『主要道道遠軽・上川線』と名称が変わったが従来どおり開発局所管となっている。これまで幾多の歴史を秘めた旧国道も時代の推移によって国道の座を明け渡したが、大雪国道災害不通時の迂回道路として、はたまた遠軽、紋別に通ずる近道路として、夏期、秋期の該道路は重要な産業道路として不可欠のものである。近時北見峠冬季除雪を可能ならしめ通年交通路として季節道路の汚名を返上しようと、網走開発建設部の手によって北見峠切換道路工事が昭和四十二年六月よりはじまった。この新設改良工事は奥白滝から上川町界までの約一〇キロを全く新しいルートによってカーブと傾斜を大幅に修正、幅員も広げて冬期間の交通を確保しようというもので、昭和四十七年度までに完成される。

本村域内における主要道道の状況は次のとおりである。

主要道路の状況

(昭和四五年四月一日現在)

路線整理番号	路線名	総延長 m	白滝村域内の状況			認定年月日	備考
			延長m	幅員m	永久橋数 延長m		
	主要道路遠軽上川線	5,000	1,700	7.5	1	昭和三年七月三日	未供用区間を除く

主要道路遠軽上川線白滝村域内架設橋梁調査

(昭和四五年四月一日現在)

整理番号	橋梁名	個	所	架設河川名	橋長m	幅員m	橋面積㎡	橋種形式	架設年月	耐荷t 荷重	竣工金額 (千円)	現況
三〇	熊の沢橋	字下白滝	湧別川支流	六	四	三	昭和四年七月	木造土橋	五〇	〇	八三三	制限〇t
二九	雄飛橋	字旧白滝	〃	九	四	三	元五	〃	元五	〇	八三三	制限〇t
二八	幌加湧別橋	字旧白滝	〃	九	四	三	元五	RCT桁	元五	〇	八三三	制限〇t
二七	仙橋	字白滝	湧別川	五	四	三	元五	RCT桁	元五	〇	八三三	制限〇t
二六	永代橋	字白滝市街	〃	五	四	三	元五	鋼版桁	元五	〇	八三三	〃
二五	白滝橋	字白滝	〃	五	四	三	元五	〃	元五	〇	八三三	〃
二四	観泉橋	字白滝	上勝石川	五	四	三	元五	RSC桁	元五	〇	八三三	〃
二三	滝ノ上橋	字上白滝	湧別川	五	四	三	元五	RCT桁	元五	〇	八三三	〃
二二	雪見橋	字奥白滝	湧別川支流	五	四	三	元五	RCT桁	元五	〇	八三三	〃
二一	園見橋	字奥白滝	〃	五	四	三	元五	〃	元五	〇	八三三	〃
二〇	雲別橋	字奥白滝	ウンベツ川	五	四	三	元五	鋼版桁	元五	〇	八三三	〃
一九	栄橋	字奥白滝	湧別川支流	五	四	三	元五	木造土橋	元五	〇	八三三	制限〇t

(網走開発建設部遠軽出張所調べ)



刈分け道路（現在の支湧別道路）

白滝原野刈分け道路Ⅱ 道道白滝原野停車場線道路（支湧別道路）

大正二、三年にかけて支湧別あるいは上支湧別に陸統として団体移住があり、そのいずれもが支湧別川近くのわずかな足跡をたどり道なき道を踏み分けての入地であった。割当てられた自分の土地に原始林のわずかな空間を利用して着手小屋が建てられ雨露をしのぎ、いち早く開墾の楫がおろされたが、米、味噌等の買い出し、急患者発生の時、収穫作物の搬出時にはことのほか踏み分け道に不便を感じ、その苦労たるや言語に絶するものがあった。

旧白滝方面、白滝、上白滝方面を走っている旧中央道路に比べ、支湧別方面へ道もなく入植させた関係官庁の無策行政にはただ深い憤りを感じずにはいられなかった。こうした不自由な生活がつづいたなかにも自然に入植者がふえますます道路の必要性がたかまり、支湧別五線に入地していた井村謙二、佐々木三之助の二人が中心となり、支湧別入植者たちの賛意を得て白滝までの刈分け道路を造ることとし、大正四年春前記二人が手製の測量機を使って（目測に等しかった）五線から白滝に向って測量を始めた。僻倉と生い茂る樹木のため見通しもきかず、四、五畝余の間を十、二十畝も費やす苦心の測量であった。

測量が終るや部落民の総力を結集し笹刈り、木を倒し、根木を取り寄せ、幅二畝ほどの刈分けに半月以上もかかった。

同じころ上支湧別においても刈分け道開削の声がもちあがり、九線の三石音次郎、遠藤矢五郎、七線の佐藤平一郎らが中心となり九線から五

線までの測量を行ない、部落民の奉仕作業によって刈分け道を開き、ここに九線から白滝までの刈分け道路が不完全ながらも開けたのである。

白滝原野道路（支湧別道路）の開削

支湧別の人々の非常な苦勞で出来上った刈分け道路も、開拓が進むにつれて木材等の搬出が盛んになり、これまでの刈分け道では思うように馬車が通れないという不便さから十分なものではなくなり、道路の全面改良の切なる願いが部落民の声でもあった。この人々の哀願が上湧別村役場の憂慮するところとなり、網走支庁に支湧別道路開削について請願された結果認められ、大正五年五月支湧別道路改修工事が着手された。総工事費五千円で森田組に落札、白滝二股（現・市街東区公営住宅付近）から上支湧別九線（現・九線神社付近）まで九丁に及び、工事におよそ半歳近くを費やし同五年十一月三十日待望の道路が完成したのである。この道路は以前に出来た刈分け道路と多少のちがいはあったもののほぼ同じような位置を通ったといわれている。全面改修道路の開通式は市街地永代橋のそばで関係者多数参列し餅まきなどを行ない盛大に挙行された。

営林署併用林道

白滝原野道路はその後支湧別九線を起点とする支湧別川沿い道路甲線と合せて全長一萬五九〇丁が昭和二十七年一月三十一日営林署の併用林道として認可がおり、道路の補修改修は主として営林署の事業として行なわれるようになった。

道道白滝原野白滝停車場線

本村において最も古い歴史をもつ白滝原野道路も、その奥に高山植物密生する景勝比麻良山の登山道路とし

道道の状況

(昭和45年4月1日現在)

路線整理番号	5 5 8	
路線名	白滝原野白滝停車場線	
起点	字白滝原野	
終点	白滝停車場	
総延長	10,590.13 m	
幅員	0 m～ 2,444.80 m	10.90 m
	～ 2,869.40	7.27
	～10,568.90	10.90
	～10,590.13	15.54
橋梁	なし	
認定年月日	昭和41年3月31日	
備考	主要道道遠軽・上川線重用区間 119.22 m	

(網走土木現業所遠軽出張所調)

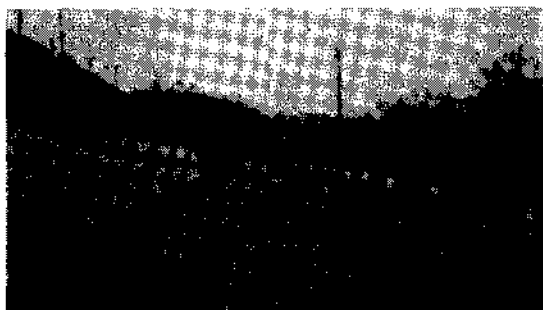
て、また産業道路として年とともに交通量もふえ道道昇格の気運がたかまり、多年にわたる請願ついに実り昭和四十一年三月三十一日道道昇格の認定をうけ、従来の営林署併用林道が「白滝原野白滝停車場線」と名称が変り、網走土木現業所の所管となった。

村道

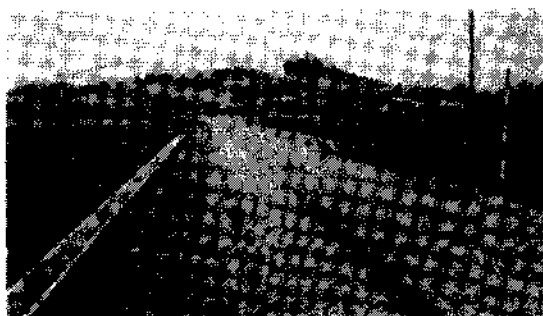
明治四十五年白滝および上白滝一帯に入植した紀州団体を先駆として、大正二年以降支那別方面に、はたまた奥白滝方面に陸続として入植したが、道路の全くない天狗沢の地に団体、個人を問わず入植する者が意外に多かった。

入植者のはほとんどは該地に入地するや着手小屋の建造と隣家との連絡道の開削を先決とし、開拓のかたわら年々こうした道路の整備拡張を行ない続けた。時の遠軽村議会においても入植者の労苦が取りあげられ、大正十一年二月の臨時村議会において天狗沢より中央道路（現・主要道道遠軽上川線道路）に抜ける幹線道路延長四、六八〇畝余の村道認定が

可決、天狗沢道路（その後天狗沢道路中線と改称す）と名付けて遠軽村所管のものとなった。これ本村における最初の村道であった。遠軽村時代における村道として認定されていた路線のうち本村域内は六路線であったが、昭和二十一年白滝村として分村以来年とともに認定路線をふやし、昭和四十五年三月現在別表のごとく実に七十六路線、実延長九万五、五〇〇竪に及ぶ村道を管理するに至った。



村道・白滝原野中央道路入口付近



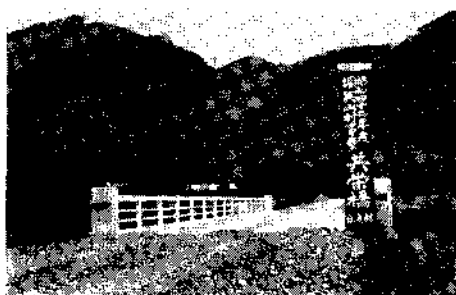
村道・白滝原野中央道路北支湧別付近

村道架設橋梁調

(昭和四五年四月一日現在)

橋名	路線名	個所	架設水系	橋長	幅員	橋面積	架設年次	橋種	型式	耐重荷	現況
つつじ橋	下白滝 道路甲線	字下白滝	湧別川	117.00m	11.00m	1287.00m ²	昭和四二年	永久橋	單純活荷重	20t	安全
平和橋	旧白滝 道路武線	字旧白滝	湧別川	112.00	11.00	1240.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
二〇分橋	湧別川 沿線	字白滝	湧別川	118.00	11.00	1300.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
湧別橋	二九号 道路	字白滝	湧別川	124.00	11.00	1364.00	昭和三年	木橋	單純活荷重	20	〃
共栄橋	天狗沢 道路乙線	字上白滝	湧別川	113.10	11.00	1244.10	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
天仁橋	白滝原 野路	字東白滝	天狗沢川	110.10	11.00	1211.10	昭和三年	永久橋	P・S・C	20	〃
天狗橋	奥白滝 原野路	字東白滝	天狗沢川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
第三新生橋	上白滝 三号道路	字東白滝	天狗沢川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	永久橋	P・S・C	20	〃
湯の沢橋	二八号 道路	字北支湧別	支湧別川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
新生橋	東支湧 別路	字支湧別	支湧別川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	木橋	單純活荷重	20	〃
七線橋	七線道 路	字支湧別	支湧別川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	木橋	單純活荷重	20	〃
上支湧別橋	上支湧 別九線	字上支湧別	支湧別川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
パンケ橋	東支湧 別路	字上支湧別	パンケッ ン川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃
奥湧別橋	奥湧別 路	字上支湧別	パンケッ ン川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	木橋	單純活荷重	20	〃
史生橋	支湧別 川沿線	字上支湧別	支湧別川	110.00	11.00	1210.00	昭和三年	永久橋	單純活荷重	20	〃

なお、村道内に架設されている橋梁は当然道路管理者の管理によるもので、本村における橋梁はおおむね右のごとき現況である。



共 栄 橋 (昭和42年11月竣工)



20 号 橋 (昭和42年11月竣工)



平 和 橋 (昭和45年10月竣工)

弘法橋	新滝橋	泉橋	岩見橋	盤之沢橋	和原橋
白滝市西道路	白滝市西道路	白滝市西道路	白滝市西道路	白滝市西道路	白滝市西道路
宇白滝	宇白滝	宇白滝	宇白滝	宇白滝	宇白滝
湧別川	湧別川	湧別川	湧別川	湧別川	湧別川
1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
昭和元年	昭和元年	昭和元年	昭和元年	昭和元年	昭和元年
永久橋	永久橋	永久橋	永久橋	永久橋	永久橋
合純成	合純成	合純成	合純成	合純成	合純成
西	西	西	西	西	西
安全	安全	安全	安全	安全	安全

(昭和四十五年四月一日現在)

[illegible]

遠軽白滝間道路改良期成会

鉄道の敷設されていない大正期の道は、支線道路はもちろんのこと、中央道路（現在主要道遠軽上川線道路）といえども全く改良の手が加えられず、遠軽までの四〇き余の徒歩あるいは馬車による往復は筆舌し難い悪路の連続で、ことに農作物の搬出、食糧等の搬入にはことのほか難渋を来たし、このため遠軽方面より購入の品物は運賃が高くつき高価となり、逆に農作物等は運賃がかかって安値となるおよそ不合理にして痛々しい生活が続けられていた。大正七年十月十五日付の『北見新聞』に「白滝部落民の痛切なる叫び」と題して次のとき一節が出ている。

「白滝部落は大正元年紀州団体の移住するありて、開発その緒につき爾來年とともに移住者キビスを接し遂に今日の如き発達を来せり、然るに物資の供給はこぞって遠軽に求めざる可からず、その間道程約十里天下恐らく斯くの如き悪路あらんや、泥濘將に脚を没し通行の困難実に名状すべからざるものあり、殊に連搬馬車転覆すること数回、遂に交通杜絶する状態にあり、しばしば米糧の欠乏を来すのみならず斯くの如く悪路なるが故に運搬賃高きこと実に想像以上なり、即ち白滝部落民は高価なる物資の供給を受け而して生産品は安価売却し二重の損害に苦しみつゝあり、白滝部落民も等しく陛下の赤子なり、官にあるものは宜しく公平なる調査によりて応急の修理みられんことを切望して止まざる次第なり、一例をあげるに白滝幽仙橋以南わずかに数丁（注・五〇〇〜六〇〇丁くらい）の間に馬車十余回転覆せる事実あり、斯くの如く苦痛を感じつゝあるが故に部落民申し合せ毎戸一人宛出張し、馬車持は馬車を出役しからうじて幽仙橋以南の仮修繕を了せり、殊に時局に際し郵便物の遅着の如きは最も痛切に感ずる処なり」。

こうした白滝住氏の悲痛な訴えが遠軽村理事者の心をゆさぶり、石北線鉄道の敷設も容易に進行せざるにおいて、ただ一本の該道路を徹底的に改善する計画のもと大正十二年「遠軽白滝間道路改良期成会」を結成、村長を会長に遠軽、丸瀬布、白滝より二十九名の実行委員を挙げ、白滝までを自動車道とすべく目標を定めた。白滝より選ばれた実行委員は井村謙二、大庭重次、福田彦蔵、岸利七、新保国平、佐藤平一郎、倉橋伝三郎らであつて、年次計画によつて遠軽側より改良工事が進められたが、財政的な理由もあつて遅々として進行せず、その後石北線鉄道の起工が決定するに至つてこの期成会はやがて有名無実の様相を呈していった。

道路愛護共励会

日常何気なく通行使用している整備された道路も、ひとたび悪路となると憤懣やるかたない気持で通行するのが世の常であるが、年とともに道路網が拡張されていくに従い道路の補・改修は容易ならざる事業となつた。こうした道路の保護心、愛護心を養うを目的として遠軽村においては「道路愛護日」を定めることを決め、毎年一回九月二十三日の秋季皇霊祭（今の秋分の日）を「道路愛護デー」として昭和六年その第一回が施行された。このことが素因となつて愛護組合結成の機熟し、昭和十年一月「遠軽町道路保護組合」が組織され、左のごとき規約も設定した。

遠軽町道路保護組合規約

第一条 本組合ハ遠軽町道路保護組合ト称ス

第二条 本組合ハ遠軽町内ニ居住シ、一戸ヲ構ヘタル世帯主ヲ以テ組織ス

第三条 本組合ノ区域ハ遠軽町一円トス

第四条 本組合ハ遠軽町内ニ於ケル地方費道、準地方費道、町村道ニ対シ左ノ維持及び改良修繕ヲナスヲ目的トス

- 一 路面、橋面ノ掃除及ビ修繕、除草、除雪、側溝ノ浚深
 - 二 路面ノ整理（路面ノ不陸均及ビ穴埋等ヲ含ム）
 - 三 橋梁ノ障害トナルベキ流水塵埃及ビ流水除却
 - 四 橋梁ノ簡易ナル応急手当
 - 五 道路並木ノ保護及ビ障害木ノ伐採
 - 六 砂利敷其ノ他必要ナル改良工事
 - 七 橋梁水抜、暗渠下水等改良及ビ修繕
 - 八 非常災害ノ場合ニ於ケル道路及ビ附屬物被害防禦其ノ他ノ応急施設
 - 九 渡船場ノ設備經營ニ関シ取扱人ヨリ要求アリタルトキハ此少ナキ勞力、材料ノ提供
- 第五条 本組合ノ事務所ハ遠輕町役場ニ設ク
- 第六条 本組合区域内ニ左ノ支部ヲ設ク
- 奥社名瀬支部、上社名瀬支部、南社名瀬支部、中社名瀬支部、下社名瀬支部、宇田支部、遠輕市街地北区支部、遠輕市街地中区支部、遠輕市街地東区支部、遠輕市街地西区支部、向遠輕支部、上遠輕支部、向野上支部、野上支部、瀬戸瀬支部、上瀬戸瀬支部、丸瀬布支部、武利支部、上武利支部、上丸瀬布支部、南丸瀬布支部、旧白滝支部、白滝支部、上白滝支部、奥白滝支部、支湧別支部、上支湧別支部
- 第七条 本組合ノ事業ハ各支部ニ於テ分担シ毎年春秋二期ニ之ヲ施行ス、但シ必要ト認メタル場合ハ隨時之ヲ行ヒ又ハ組合ニ於テ施行スルコトアルベシ
- 第八条 以下第十三条まで略
- 第十四条 春秋二回ノ定期工事ハ各支部毎ニ組合全員出勤シ、支部長ノ指揮ヲ受クルモノトス
- 第十五条 前条ノ場合ニ於テ事故アリテ出勤ナス能ハザル者ハ其ノ旨支部長ニ申シ出、代人若シクハ人夫賃相当ノ金額ヲ組合ニ納入スベシ
- 以下第二十条まで略

と、厳格綿密な規約にもとづいて道路保護事業がなされていた。しかしこうした事業も太平洋戦争激化につれて人手不足と各種軍需物資の生産に拍中がかけられ、いつとはなしに立消えとなった。戦後経済の高度成長にともない道路網の整備拡充が再び認識が深められ戦前の道路保護組合に代る『道路愛護共励会』が管内的に発足をみ、本村においても昭和三十三年度より発足することを決し、同年四月左のごとき要綱が出来た。

白滝村道路愛護共励会要綱

一 目的

道路の効力を増進し愛護思想の普及徹底を図り以って道路事業の振興促進を図ることを目的とする

二 事業主体及び出品道路

(一) 愛護共励事業主体は区とする

(二) 出品道路は国道、村道、農道その他の道路たるを問わず出品できるものとする

三 共励会

(一) 共励事業は概ね次のとおりとし一種又は数種の事業を行うものとする

不陸均、穴埋、砂利敷込、崩落土及び泥土の除去、法面の張芝、筋芝、土留工、側溝の補修及び浚渫、道路の草刈、雑木の伐採等

(二) (略)

(三) 共励事業は毎年十月三十一日までに終了し、終了届を別記様式(様式略)により区長が届出するものとする

四 審査（略）

五 表彰（略）

六 その他

出品道路の中、一点を北海道主催道路愛護共励会に推せんする

かくしてこの共励会が発足した昭和三十三年度中にその目的に沿って六つの区において単位道路愛護共励会が誕生、それぞれ共励事業を行ない翌三十四年四月第一回道路愛護共励会の表彰式が左の成績によつて行なわれた。

以来単位道路愛護共励会も年々増加し、近年に至つては大方の区において道路の整備に熱意をもやし、出品道路もほとんど全村に及ぶほどの普及を示している。

またこうした道路愛護思想が村内小中学校児童生徒間にも大いに浸透し、それぞれ自主的に道路の美化に努めるようになった。なかでも白滝中学校は毎年生徒会が主体となつて一僕らの道路は僕らの手で」と自主的に道路愛護美化運動に協力、日曜日に市街地区ごとに道路清掃を続けてきたが、その功が報いられ昭和四十一年五月北海道知事表

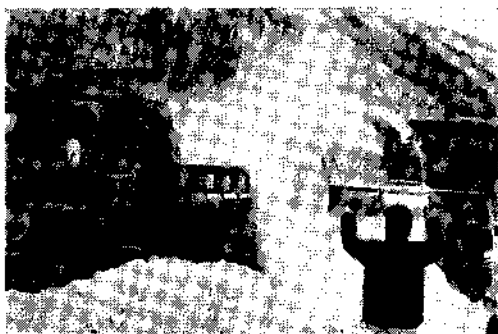
彰をうけ、さらに同年九月建設大臣表彰を受ける榮譽にかがやいた。

網走開発建設部遠軽出張所白滝道路工手詰所

網走土木事務所遠軽道路保護区員駐在所が大正十五年遠軽に設置され、本村域内の国道もその管理下におかれ

たが、遠距離のため時折巡回する程度で完全なものとはいえなかった。分村独立後道路管理面においてもこれが管理者の設置が必要となり詰所設置の運びとなったが、これよりさき所轄官庁の名称変えが行なわれ、昭和二十二年七月一日網走土木現業所遠軽派出所白滝工区詰所として芦野文作が本村に常駐となった。

昭和二十六年七月北海道開発局設置とともに網走開発建設部が新設され、国道ならびに開発道路の管理を担当、これにともなうて従来の詰所も網走開発建設部遠軽出張所白滝道路工区詰所とその名称も変り、現在芦野明文の駐在となっている。



開発局のロータリー車による排雪作業

本村域内にはこのほか下白滝道路工区詰所（駐在員畑中儀美）が昭和三十六年十月に、また奥白滝道路工区詰所（駐在員欠員中）が昭和三十七年十月に設置され、行き届いた道路の整備がなされている。

白滝除雪センター

年々増大する交通量に対処し冬期間の国道除雪はもはや一般の常識とさえなっているが、開発局の冬季各国道路線の除雪計画にもとづき本村にも網走開発局建設部除雪センターが昭和四十一年十二月建設され、除雪車の常駐によって奥白滝までの道道は完全除雪が行なわれている。

舗装道路・主要道道遠軽上川線道路内

村民久しく待ちわびていた主要

道道遠軽上川線道路内白滝市街地道路の舗装工事が網走開発建設部の手によって昭和三十七年十月完成をみた。この工事は東区市街はずれから東区三叉



市街地道路の舗装工事

路に至る延長一、〇〇〇呎、幅員九呎で総工事費三千六百五十万円を要し、滝川市中山組の請負で施行された。これ本村域内最初の舗装道路である。

道道白滝原野白滝停車場線道路

白滝市街地の舗装により、当時村道

であつた農協前より南区営林署貯木場前に至る間の舗装が住民より切望せられるところとなり、昭和三十八年十一月、全長二二〇呎の舗装工事を行なつた。

昭和四十一年待望の道道昇格によつてさらに舗装道路の延長工事を道に請願した結果、昭和四十三、四十四年の二カ年にわたり貯木場前より白滝中学校入口に至る延長四二八呎が、こえて昭和四十五年には待つこと久しかった上支湧別市街全長四八〇呎が舗装され、住民の喜びひとしおなものがあつた。道道内舗装の状況は左表のとおり。

施工年度	地	域	延長 (呎)	幅員 (呎)	工事費(円)	施工業者	備考
昭和三七	白滝駅前		三八	一〇	六〇〇、〇〇〇	大林組	施工当時村道
三八	白滝農協前より営林署貯木場前まで		二二〇	八	一、八二六、〇〇〇	大林組	施工当時村道
四三	営林署貯木場前より西区川上宅前まで		一四〇	六	一、三〇〇、〇〇〇	日本道路KK	
四四	西区川上宅前より白滝中学校入口前まで		二八八	六	二、六三〇、〇〇〇	日本道路KK	
四五	上支湧別市街		四八〇	六・五	五、七〇〇、〇〇〇	日本道路KK	

渡 船

橋梁の流失、未架設橋の河川には渡船が重要な交通機関で、ことに橋梁架設技術の乏しい明治中期以前においては、河幅の広い河川はその大半が渡船に依存しなければならなかった。渡船の運営は官設、民営等さまざまであったが、明治七年道内の渡船場は官設に改められ取扱人を置くこととなった。この官設渡船制度は全道くまなく実施されたわけではなく、小河川については主として船については官設し、あるいは助成金を交付して備えつけしめ、経営については無人渡船または民営に依存した箇所も少なかった。

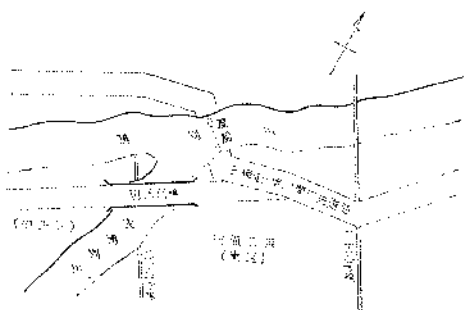


図 取 見 船 場 渡

本村における渡船は確とした資料がなく断定しがたいが、本村を縦断せる旧網走・旭川間中央道路は白滝市街二十四号線より東北東寄り二〇〇呎の地点（今の東区）にて湧別川を横断した。もとより該道路開通当時は木橋が架けられたものと判断するが、明治三十一年九月全道を襲った豪雨によって湧別川も氾濫し遠軽においては甚大な被害を被ったと記録されており、おそらくこの水害によって前記の木橋も流失したものと思う。明治四十三年三月発行の『白滝殖民地増画図』によると、該所に橋の架設されていないことがわかる。

かかる観点に立って古老の言を総合すると、明治三十五年北見峠駅通より旧白滝に入地した石上藤蔵は、その後同四十二、三年にわたって旧白滝地方に個人入植あいっだころより旧白滝より前記白滝二股の渡船場に時折通い

「渡し守」をした。その後同四十五年になって小笠原伊勢松、さらに矢崎次郎吉、前田権三郎と代りはしたが、いずれも半年くらいで交替し、明治四十五年の紀州団体に引きつづき大正二年支湧別、奥白滝方面に団体移住あいついだころより渡船による交通に不便を感じ、たまたま二股付附にて湧別川と支湧別川と合流する支湧別川上に風倒木による懸橋を利用して現在の市街を通行、二十六号線上を横切る湧別川に同じような懸橋（現新滝橋）を利して交通路とした。

一時的に運行されていた通称「二股渡船」は張鉄索をした引き綱式渡船で、船に引き綱を取りつけ、利用者が自由に操作でき得るようになっていた。

第二章 鐵道交通の今昔

いつの世でも開拓の基礎、産業發達の基礎となるものは交通機關であらう。

北海道における鐵道の歴史はまことに古い。すなわち蝦夷地開拓に意を注いでいた幕府では、文久元年（一八六一）米國地質鉦山學士ブレイキ、バンベリーの二人を聘して蝦夷地の地質を調査依頼し、その折、彼らは後志の古宇郡泊村茅沼に足を入れ炭鉦の開發を推奨、これがため幕府は翌文久二年茅沼炭鉦の開坑に着手、さらに慶応三年（一八六七）英人鉦山師E・H・M・カールを茅沼鉦に聘し、二ヶ余（およそ三・二ギ）の軌道を敷設し英國より蒸氣機關車を輸入、石炭搬出に使用した。これこそ本道鐵道敷設の初めであつたのであるが、はたして順調な運轉がなされたか否かは資料が乏しいのでわからない。

北海道における鉄道のはじめ

明治元年（一八六八）幌内山の沢にて一造材夫の手によって発見された光沢のある石状のものが明治五年（一八七二）に至って、これが世に脚光をあびる優秀な石炭であることが専門家によって証明され、これが開発にあたり問題になったのが石炭の輸送にともなう鉄道の敷設であった。日本第三番目の鉄道が人口二十万をこえたばかりの開拓途上の北海道に敷設されたそもその因は、埋蔵量の豊富な石炭の発見がなければ実現しなかったであろう。鉄道敷設箇所について種々論議が交わされたが、北海道の将来を勘案し、結局幌内から江別、札幌を経て小樽手宮間の九〇^〇に決定、明治十二年（一八七九）十月より幌内炭山の坑道開削着手、鉄道用地の買収、さらに機関車、車両、レール等の発注が行なわれ、翌十三年一月より鉄道敷設工事に着手し、新技術の導入によって、この年十一月二十八日札幌・手宮間の開通を見、幌内鉄道と命名、着手から成定までわずかに十一カ月という突貫工事であった。第一号機関車は世に有名な「義経号」と「弁慶号」で、義経号は大阪の国鉄鷹取工場に、また弁慶号は東京鉄道博物館にいまなお静かにその身を横たえているという。こうして幌内鉄道は明治十五年十一月に全通、石炭輸送のため時として無蓋貨車による旅客輸送も兼ね大いに貢献したのである。ちなみに手宮・札幌間の開通当時の旅客運賃を尋ねるに上等（今のグリーン車に相当す）一円、米価から換算するとおよそ港千五百円見当で、現在の札幌・小樽間鉄道運賃の十倍強となり、一般庶民にとっては高嶺の花であったらしい。

明治二十九年五月に公布された北海道鉄道敷設法によって道庁に臨時北海道鉄道敷設部が設けられ、拓殖と国防の上から積極的に鉄道建設工事計画が樹立された。

鉄道の国有

鉄道国有の建議は明治二十四年井上鉄道庁長官の手によって立案、第十二回帝國議會に提出さ

れたが成案とならずこれが鉄道敷設法と改称されて発布された。このことにより鉄道の国有化についての世論がたかまり、以後帝國議會の開かれるたびに審議され、國家隆昌の氣運も昂揚し産業の發展にともなう時代の要求度も募り、明治三十九年三月初旬西園寺内閣の提出に係る鉄道国有法案は一部修正はあったが貴・衆兩院を通過、ついにこの日すなわち明治三十九年三月三十一日法律第十七号をもって発布、ここに鉄道の国有化が決定されたのである。

石北線敷設の請願

北海道鉄道敷設法が制定されてより鉄道の敷設についての計画がたてられ、こうして敷設が地方開發の飛躍台となったが、ことに鉄道の国有化によって敷設事業もいちじるしく進展の度を加えた。北見管内においても北見・留邊蘆間が大正元年に開通、留邊蘆・安國間が大正三年に、安國・遠輕・開盛間が大正四年に、開盛・湧別間大正五年にそれぞれ開通されたが、遠輕より白滝、上川を通過して旭川に至る中央道路ぞいの中央幹線ともなるべき、鉄道敷設の議が遅々として進まず、白滝の住民は遠輕までの十里余（四〇^キ）の道を公用、私用、農産物の搬出等すべて徒歩で往復しなければならず、沿線住民ともども鉄道の早期敷設を日夜哀願しつつづけていた。當時の新聞も白滝の切実な願いをとりあげ、さらに喚起をうながす記事をのせている。大正七年六月十五日の『北見時報』に「旭遠鉄道と白滝」と題して次のことがかかっている。すなわち、

「旭遠鉄道と白滝―我が白滝原野は湧別線遠輕駅を西に距る十里乃至十六里なり、此の間中央道路のありて僅かに其の間の用を弁じつつありと雖も如何に之を以て其の完を期し得んや。近く其の一例を見んか、米一俵の運賃遠輕より約一円を要し又、白滝より出づる雜穀一俵に対しても同一なるものあらん、其の合計二円なり、年産額雜穀五十俵を搬出するところの人は五十円の運賃を要し又、一ヶ年の必要品たる米味噌醬油石油及び雜穀等約五

十個を購入するところのものは又五十門の運賃を払はざるべからず、合計金百円の大金なり、是を白滝部落宅千戸と仮定せば実に十万円という莫大なるものあり、之は單に農産品や一家の日用品を見たるに過ぎぬのであつて更に、鉱山木材旅客等の上に於て及ばず範圍の大なるはけだし想像に余りあることである。ひるがへつて之を石狩、北見の横断鉄道としての価値に於て其の利益の莫大なるものあるは何人も驚くの外ないことであらう。我が白滝将米の大運命は一にかかつて此の旭遠線鉄道の設、不設にあるといつてよろしい。——中略——吾人は不斷の努力を以て本鉄道の急務かつ最有利なるを天下に訴へて識者の判断に待つてその働きを奏せんと欲するものなり」と。

石北線の敷設請願運動は明治四十三年、時の上川郡愛別村長太田竜太郎の手によって進められ、旧友であつた鉄道院總裁後藤新平をうごかし翌四十四年には石北線の实地踏査が行なわれることになった。このことは『北海道線路調査報告秘要（明治四十四年度）』^{（一）}に旭川・遠軽間旅客貨物交通の概況と題して、次のことが書かれていたことから、石北線敷設の計画があつたことがうかがい知ることができる。すなわち「本線路は石狩国上川郡旭川町地内既成旭川停車場に起り、同郡東旭川、永山、当麻、愛別の各村を経て北見国紋別郡上湧別村に入り遠軽停車場予定地に接続するものにして此の延長は百二十五^キ二十八^ヤなり、而して別に之が比較線として、石狩国上川郡比布村地内既成比布停車場に起り、愛別村、下愛別村に至り本線路に連絡し遠軽停車場予定地に至る線路あり、此の延長は比布起点より百七^キ二十^ヤなり」。

大正二年十一月滝川・富良野間の開通によって、それまで富良野線を利用していた札幌方面よりの帯広、釧路行の旅客は旭川を通過せず目的の地まで行かれるようになった。こうしたことから旭川においても石北線の敷設



鐵道建設測量隊
(大正11年6月ポソルベシベ)



鐵道建設測量隊
(大正10年10月下白滝付近)

題は進展しなかった。
大正十二年遠軽村市原多賀吉が中心となつて政府に提出されたれ十三名連署の請願書は次のようなものであった。

旭川、遠軽間鐵道速成請願書

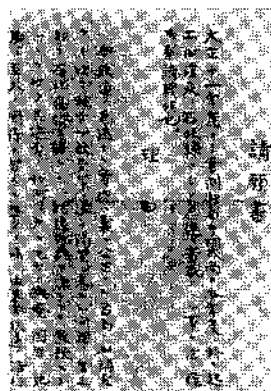
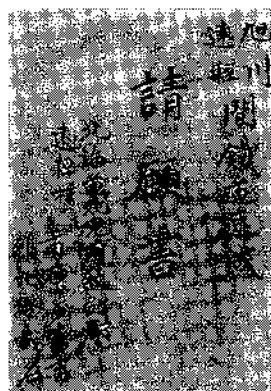
大正十一年度ヨリ実測御着手相成尚ホ本年度ニ於テ起工御確定ノ石北線ヲシテ急速ニ実現アラン事ヲユコニ謹ンデ奉請願候也

理 由

本鐵道ノ急速ナル実現ハ、コニ公正ナル当

可否が市況発展のため重要な問題となった。そこで石北線敷設を主眼とした旭川開港期成同盟を組織し活発な請願運動を展開、一方遠軽においても旭遠鐵道速成地方大会を開き大正八年三沢恒助が代表として上京、翌九年三沢、市原多賀吉らが再度上京、国会や鐵道院に対し村民の意を訴え、請願書を提出、強力な陳情を行なった。こうした請願が見事に成功して大正九年臨時第四十三帝國議會の協賛を経て石北線上川・遠軽間鐵道の起工が確定し、大正十一年五月鐵道省告示第四十五号をもって鐵道省北海道建設事務所の所管に入り同年五月実測に着手した。ところがそこに思いがけない大障礙がはいった。すなわち遠軽と下生田原の分岐駅爭奪が露骨に表面化したのである。両者は互いに同じ村でありながら仇敵となつてゆずらず、生田原、遠軽の代表者はおのおの私財をも

投じ激烈な爭奪運動が続いた。そのため政府は測量の一時中止指令を出し、踏査隊の派遣もなされたが一向に問



恐惶 再拜

大正十二年

貴族院議長 公爵 徳川家達閣下

局ノ御稽查アリ次デ地方一般多年ニ涉リ渴望シ来レル問題ニ有之、即チ右北聯絡ヲ線トシ拓殖振興ヲ経トシテ敷設セラルヲ以テ其速否ノ如何ハ大ニ地方ノ興廢、国力ノ弛張ニ至大ノ關係ヲ有スル次第ニ候、由來本鉄道ノ沿線地帯タルヤ臨ンデ樹木ノ繁茂セザルノ地無ク耕シテ肥沃ナラザルノ箇所モナキガ故ニ、抑モ明治三十五年前後ニ於テ開荒ノ緒ニ就キタル次第ニ候、然リト雖モ從來交通運輸ノ便至ツテ困難ナル為メ折角芳取ノ不費モ其都度地方ノ標準価格ヲ失シ亦需給ハ凡テ市價ヲ壓スルヨリ内外ノ収支相伴ハズ、之レガタメニ人地者モ漸次他転又ハ帰同スルノ現状ニ陥リ幾千方資ニ値スルノ農林財産等ノ大富源ヲ包蔵スルノ地モ只徒ラニ熊熊ノ跋扈ニ任セ其産額ニ歳々減退スルガ如キ傾キアリテ時代錯誤ノ嘆ヲ深クスル次第ニ御座候、左ンバ是レガ救済ノ方法、改善ノ策案トシテハ唯本鉄道ノ一日モ速急ナル施設ニ俟チテ市メテ解決セラル可キモノト確信仕候、殊ニ本鉄道ハ前年度ニ於テ法律ヲ以テ既に締定セラレ毫モ動カスベカラザル次第ニ候モ、万ニ些々タル支障ノタメニ遅延セラルルガ如キ事アラバ是レ災ニ二十有余年間刻苦ヲ積ミ其恩恵ヲ期望セル沿線住民ノ安定ヲ欠ク義ニツキ杞憂ヲ措ク次第ニ候、希クハ前陳ノ事實ヲ宜シク御諒察被下成本鉄道ノ急設セラレ以テ地方多年ノ宿案ヲ解キ次デ右北聯絡ノ捷徑ヲ画シテ交通運輸ノ利便ヲ輔ケ、延イテ同益ノ増進ヲ計リ且時代主潮ナル農村救済ノ実績ヲ挙ゲランシ事ヲ只管望願候也、

北海道北見国紋別郡遠輕村

市原多賀吉 外九十二名（氏名略）

しかしいつしか四カ年の歳月が流れてしまった。この間第一次欧州大戦後の極度の不況に加えて、大正十二年の関東大震災による復旧などが重なり、大正十三年加藤高明内閣による財源緊急政策にあり、石北線鉄道敷設工事は無期延期の宣告を受けたのであった。沿線住民の落胆は悲痛なものであった。この時において関係住民が決然として起ち上り、一丸となって急設の請願運動がくりひろげられ、大挙して上京したので世にいう南瓜団体となったのである。

南瓜団体

大正十三年九月のある日、遠軽、瀬戸瀬、丸瀬布、白滝の有志相寄り鉄道敷設の遅延にたまりかね、一日も早く石北線の開通をねがって、上京のうえ直接関係大臣に請願しようと衆議一決、沿線各地より有志を募り総勢五十三名の代表者にて請願団を組織、市原多賀吉を団長に、村瀬千代治を会計とし、団員自作の南瓜などを多量に携行、南瓜を主食としながら請願達成を期すとの堅い信念をもって、小樽のちらく大正十三年十一月十日遠軽駅を出発したのである。この請願団に対し丸瀬布にて農場を経営、そして東洋のパン王といわれていた大阪の水谷政次郎が運動資金にとすんで私財一万円という大金を寄付し声援を惜しまなかった。

上京請願団員のうち白滝より選ばれた代表者は次の十九名である。

(白 滝) 真鍋慶一郎、佐藤小三郎、渡瀬正一、大森

(旧 白 滝) 新保国平、伊藤俊太郎

(上 白 滝) 金森熊太郎、岡本辰八、近藤吉男、桑名惣七

(奥 白 滝) 大庭重次、鈴木富次、齋藤善作

(支湧別)

佐藤平一郎、小山田清吉

(上支湧別)

鈴木良吉、氷谷庄次郎、渡瀬長之熊、福田彦藏

十一月十日に出発した一行は十三日上野着、ただちに請願達成祈願をこめて明治神宮参拝、翌十四日より「石北線鉄道速成請願団」と書いたのぼりを立てて鉄道省、大蔵省、内務省、政友会本部、民政党本部等精力的に陳情を重ね、二十二日東京解散となった。

さて、東京についた一行は宿舍を新宿の東京ホテルとし、持参の南瓜、馬鈴薯、ニンジン、ゴボウ、キャベツ等を糧食として市原団長指揮のもと秩序正しく行動をとり、連日連夜不休の請願活動がつづいたのである。當時のようを市原団長は次のように語ってくれた。



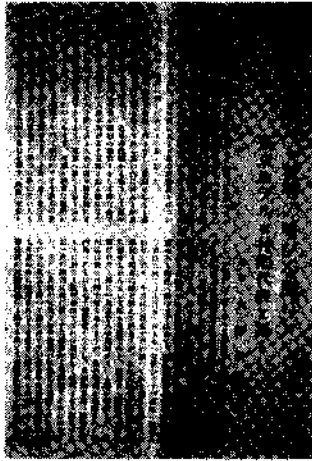
いわゆる南瓜団体一行

「東京についたわれわれ一行は『石北線鉄道速成請願団』の旗を持ってゾロゾロと市内を歩いていった。ところが各所で警察に呼び止められ、旗を立てて歩いてはいけない、と注意されたが、北海道の田舎から初めて上京してきた者たちばかりで、一人でもこの団体からはぐれたりすると田舎に帰ることもできなくなる、つまりこの旗はわれわれの唯一のメジルンとして持っているものであると力説、納得してもらって歩いたものです。旅館につくと旅館の台所を借り持参したところの南瓜を煮て翌日の弁当をこしらえたものだ。陳情に行った先々で昼になると大臣はじめ各新聞記者その他の人々に食べてもらい、鉄道がつかないと連賃の加算された高い米はなかなか食べられない、毎日カボチャ、イモなど主食として食べ

ているのであると涙ながらに訴えたものであった。

国会内の控室などで南瓜の弁当をひろげて食べている五十余人もの百姓風の異様なありさまは東京の新聞にも「南瓜団体の陳情」として幾度も報道されるところとなり多くの人々より同情がよせられ、ついには全国的に有名になった。当時の『東京朝日新聞』には「手作りの南瓜やお手を抱へて——同死ぬ覚悟で」と題して、「北見遠軽村の各部落代表五十三名は石北線速成運動のためキビや馬鈴薯、南瓜などの食糧品を携帯、決死の覚悟で上京——中略——一行は遠軽村の各部落の代表移民で日にやけた筋張った大きな手を無骨に膝において悲痛な北海道移民の現状をわれ勝ちに語ろうとする顔は涙ぐましい程の真剣さを思はせる、遠軽村は旭川と遠軽を連絡する石北線の沿線であつてこの地方の移民は一日も早く鉄道の開通を待ち望んでいる、それはこの地方の針葉樹の大密林などは、一年に一二万石の用材を切り出しても三百八十年間は十分継続する事が出来る、農産物も無限に豊富だが肝腎の鉄道がないため天産に恵まれていながら移民は次第に衰微してゐる、げんに大正五年頃には八百五十余戸であつた同村の白滝部落などは今日では三百戸たらずに減少している有様だといふ、この石北線は大正十三年から十七年にかけて工事を完成する予定なのが、例の改主建従方針から再び十九年度に延期された、一同は只おとろへゆくのを待つばかり、そこで彼等は若干の旅費を工面し手作りの食糧を携へて陳情に來たものである——中略——仙石鉄相はこれをどうさばるか」。

また『交通と運輸』という当時の月刊雑誌にも「何うして石北



雑誌『交通と運輸』より



石北線起工を祝う新聞

線鉄道の繰延をするのか」悲痛なる彼等の叫びを聞け一などに見出しをつけて南瓜団体への同情あふれる記事が紙面をにぎわしている。

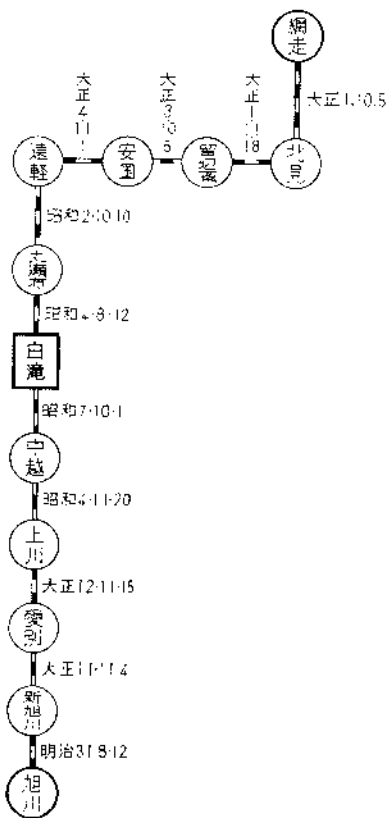
南瓜団体のこうした血涙の陳情が関係大臣の心を動かし、ついに大正十四年九月三十日遠軽・九瀬布間の線路選定認可となり、同年十一月十六日石北線最初の路盤工事は遠軽から始められたのである。この区間を東第一工区と称した。また大正十五年十一月五日九瀬布・白滝間の線路選定も認可となり昭和二年一月十六日九瀬布・下白滝間の工事に着手、これを東第二工区とし、同年八月一日東第三工区と称する下白滝・白滝間工事着手し、昭和二年十月十日遠軽・九瀬布間、昭和四年八月十二日九瀬布・白滝間がそれぞれ開通し部分開業をなした。

一方大正十三年四月二十二日線路選定認可のあった上川・中越間はこれを西第一工区として昭和四年十一月二十日開業、昭和三年二月二十日線路選定をはじめた中越・白滝間のうち中越・上越間の西第二工区、上越・奥白滝間の西第三、第四の二工区、奥白滝・白滝間の西第五工区と工区別に着手、昭和七年十月一日中越・白滝間が開通、測量に着手して以来実に十一年の星霜と建設費総額七百二十一万六千六百六十五円余、一きり約九万五千五百円の巨費を投じて、七十五・五四〇里八九七の十川・遠軽の全区間がここに開通をみたのである。かくしてこれまで遠軽地方より旭川に到るに名寄線を利用していたものが、石北線の全通によって距離にして約三分の一、運転時間にして約三時間に短縮され、運輸上はたまた殖産上きわめて便利かつ利用価値の大きい、北海道における最も重要な幹線の一つになったのである。

石北線の概要をあげれば次のとおりである。

(鉄道省昭和七年刊『石北線建設概費』参照す)

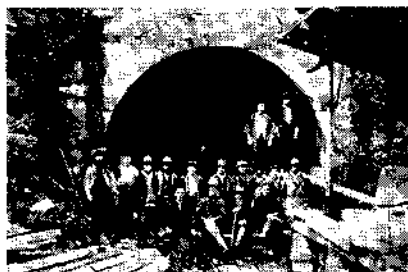
区間	停車場名	区別	距離	工事着手年月日	竣工年月日	請負者名	線路選定認可年月日	開業年月日
上川・中越間	中越・越前	西第一工区	三・五・三	昭和六・三・一	昭和四・八・一〇	合資会社 旭内組	大正三・四・三	昭和四・二・三
中越・白滝間	上奥上 白滝・越前	西第二工区	五・八・二・四	同 六・五・二	同 七・六・九	右 同	昭和六・三・三〇	昭和六・三・一
		西第三工区		同 六・三・六	同 六・二・六	右 同		
		西第四工区		同 六・三・六	同 六・六・五	株式會社 飛鳥組		
		西第五工区		同 六・四・六	同 六・五・五	右 同		
白滝・丸瀬布間	下白 白滝・滝	東第三工区	二・六・二・〇	同 六・八・一	同 七・一・三〇	右 同	大正五・二・五	昭和四・八・三
		東第二工区		同 六・一・三	同 七・一・〇・三	株式會社 合資会社		
		東第一工区		大正二・四・二・六	大正五・二・三	株式會社 合資会社	大正四・九・三	昭和三・三・三
丸瀬布・遠軽間	丸瀬布・瀬戸		三・三・五			株式會社 合資会社		



石北線鉄道開業年月日調べ

石北トンネル

上越駅を距ることわずか三八〇呎に、石北線敷設工事中最大の難関、全長四、三二九呎一四呎に及ぶ、当時としては本道最長の石北トンネルがある。石狩国と北見国をさえぎる北見峠の山腹を貫き、本道の中央部を東西に横貫する石北トンネルの工事は峻嶲な地勢で言語に絶する難工事で、石北線の完成は一にかかってこのトンネル工事の遅速によってきまり、世の注目をあびながら昭和四年五月十二日上川口（西口）より堀内組の請負で、ややおくれて同四年六月九日遠軽口（東口）より飛島組請負で工事が開始された。トンネルの堀削にさきだちこれが貫通に失敗のなきよう掘進の正確を期するため、上川口の方から約一一四呎、遠軽口の方から約一〇〇呎の測量導坑を掘っていくことにしたが、上川口約四九呎、遠軽口約三三呎掘削したとき、これまでの予定を短縮して本



石川トンネル工事現場（白滝側）



石北トンネル（昭和4年5月12

日着工，昭和6年11月9日竣工）

ワイヤを使用、覆工材料線とし礮出能率を倍加した。ちなみに石北トンネル付近の気候を見るに、温度は十月下旬より翌四月までは摂氏零度より零下三十五・六度の間を上下し氷点上に昇ることは稀少にしかつ積雪多量十月下旬より五月下旬に及び、真夏の候といえども単衣を用ゆる陽気に至らず、加えて山間僻地にしてトンネル工事従業員の労苦は想像を絶するものがあつた。こうした悪条件下で昼夜兼行の突貫作業は必然的に数多くの犠牲者も出たわけである。

『支湧別郷土誌』に石北トンネル工事のようすを次のようにのせている。――「前略――何といつても北海道一のトンネルのこと、途中でいろいろの困難にあい一年二年と数百人の土工夫たちが怪我をしたり、ハツパの事故で死んだりして、文字通り血と汗にまみれて掘り進められた。工事中の坑口に米て見ると坑道の奥深くにカンテラ

坑の掘削に着手したのである。また工事中の換気と将来列車運転上の安全をはかつて上川口は坑口から八七五呎の個所に高さ地表まで九五呎一〇呎、遠軽口には坑口から一、四二二呎二呎の個所に高さ地表まで九七呎九〇呎の各直径三呎五呎の換気用堅坑（礮出し）を設けたが、これは本道最初の試みであつた。そのほかトンネルの覆工完成部に吊棧橋を設け坑内を上下に分ち下線は電気機関車により礮出線とし上部棧橋線はエンドレス

の灯がゆれ動き坑内にはいろいろの物音がこだまし、水は上から滴り落ち、出て来る土工夫の顔は幾十日も陽に当たらないため青ざめ泥にまみれて汚れ果てて見るからにこの工事の難かしいことを思わせていた。毎日岩盤を打ちくたくハッパのひびきが昼尚暗くあたりの山々にこだましてゆくという風に工事の責任者や土工夫たちの死の苦しみが幾年間か続き―後略―。

かくてトンネル穴の大きさ縦三層五彦、横三層九六彦の石北トンネルも上川口の測量導坑掘削を開始して以来三十カ月にかたる長時日と、トンネルの総工事費約二百三十一万九千円（雲別トンネルも含めて）の巨費を投じて昭和六年十一月九日、さしもの難工事もここに完成をみたのである。

石北トンネル概況表

(鉄道省昭和七年刊「石北線建設概要」より)

名 称	位 置		延 長 材	質 地	質 料	工 費	一キリ の工費
	始点 新旭川 が起点	終点 新旭川 が起点					
石北トンネル	六、二四・八四層	六、九七・七〇層	四、三九・四層	コンクリート	頁岩及び粘板岩	一、二六、二六六円	五、六六六円
雲別トンネル	三、一五・三層	三、四七・三層	三、三二層	コンクリート	粘 板 岩	二、五八六八円	五、五八六円

石北トンネル内上川口換氣竪坑概況表

(鉄道省昭和七年刊「石北線建設概要」より)

種 別	名 称	間	実働日数	直 径	作 業 能 率			出 来 高
					累 計	最 大	最 小	
掘 上	至 昭和五年 六月二六日	至 昭和五年 八月二五日	五三	三・〇五	六五・五〇	三・〇五	〇・六一	六一・八
掘 下	至 昭和五年 七月二四日	至 昭和五年 八月二四日	四二	三・〇五	二三・五〇	〇・九一	〇・二〇	二四・〇

石北線上川・遠軽までの敷設工事中、最後に着手した工区は白滝・奥白滝間であつたがこれも昭和七年七月十五日竣工して、いずれも予定より早く完工し、ここに石北線は昭和七年十月一日全線全く開通營業、十月一日旭川で、翌二日は遠軽でそれぞれきわめて盛大な開通祝賀會が行なわれ、完成長かつた陳情と工事の歴史はここに終りをつげたのである。開拓農民の血の出る叫びがかくあらしめたのであろう。

石北線全通の様子を当時の『東京日日新聞』にみると「『前略』十月二日午前八時四十分旭川発の臨時列車——遠軽町での祝賀會に参列の米實數百名をのせた二等車十二両連結の列車——が白滝駅にすべり込んだ際の異様な感激の爆発は花火に小学生の万歳に見られた。そしてそこには初めて汽車を見る子供達の群があつた。汽車とはどんなものだと思つてゐた？——この間に答へて小さい口がいくつも開かれた。その「長いものだと思つてゐた」

その二「煙を吐く箱だ」その三「早いやつこだね」等々純真な子供の眼前には今や長蛇のやうな汽車が横たはつてゐる、この子供達が生れない前から陳情に運動に寢食を忘れた先駆者達の中にはその汽車のもたらす文明開化の音を地下で聞いてゐるものも少なくない——中略——臨時列車が白滝駅に長時間にわたつて停車した際、質朴な村民の手から車内に持ち運ばれたものが、実は南瓜の煮たものだった、おお南瓜線の開通にまたなつかしい歓迎の意志表示だったらう、栄光よ南瓜線の全通の上にあれ」。

鐵道省刊行の『石北線建設概要』により概要を示すと、
起工の確定
大正九年臨時第四十三議會



実測着手

大正十一年五月鐵道省告示第四十五による

線路選定の初め

大正十四年四月二十二日（上川・中越間）

工事着手の初め

大正十四年十一月十六日（達輕・丸瀬布間）

鐵道建設の總額

七百二十一萬六千六百六十五圓八十八錢

主たる建設費

土工費

一百四十七萬四千六百三十五圓五十三錢九厘

橋梁費

五十三萬九千四百八十二圓八十二錢四厘

隧道費

二百三十一萬九千八百五十五錢九厘

軌道費

一百十四萬三千五百八十九圓八十二錢一厘

停車場費

三十七萬四千七百一圓十七錢八厘

諸建物費

五十萬四千五百九十四圓三十七錢八厘

電線費

十六萬二千二百三十七圓五十八錢三厘

運送費

二十九萬六千二百十七圓七十七錢

一き当りの費用

九萬五千三百三十四圓

全延長

七五五・五四八・八九・九・九（上川・達輕間）

最急勾配

千分の二十五

最急曲線

三〇一・八七五・五・九

橋梁

四十一カ所（總延長一、三八一・八三三・三・九）

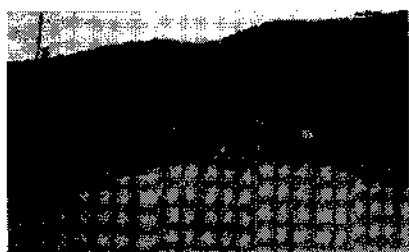
全線開業

昭和七年十月一日

白滝駅

白滝駅は新旭川を起点として八五〇五五四の地点に位置し、開駅は昭和四年八月十二日で、遠軽・白滝間の開通によって営業が開始され同日付で高野千代吉が初代白滝駅長として赴任、助役は小門武大が着任した。

白滝駅の開業によってこれまで人馬にたよっていた交通が解決され、白滝住民の喜びひとしおなるものがあつた。と同時に農林産物の出荷は容易になった。駅の設置によって駅前付近はたちまち新市街を形成したことは想像にかたくない。

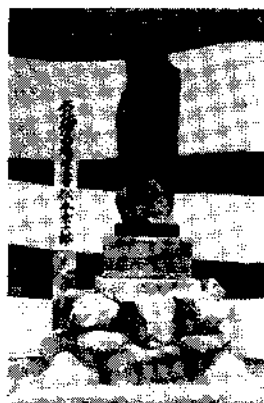


歴代駅長

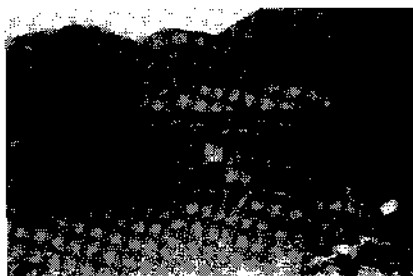
歴代氏名	就任年月日	歴代氏名	就任年月日
初代 高野千代吉 昭和四・八・一二		八代 中田伝之助 昭和三二・二・二三	
二代 垣内 勝治 七・三・一四		九代 船越 剛 三五・二・一六	
三代 小野寺恒治 一四・九・一四		一〇代 大谷内正夫 三七・二・一〇	
四代 安藤 武夫 一八・七・二七		一代 岡本 保俊 三九・二・三	
五代 中村 僧雄 二〇・六・一		二代 中尾 行雄 四二・二・一	
六代 由利寅之助 二四・七・六		三代 中川与三吉 四四・二・一	
七代 西万 憲誠 二六・九・二六		四代 大塩 博 四四・七・一〇	

石北線開通記念碑の建立

石北線の開通は白滝住民にとっても多年の宿願であり、その喜びもまた格別で、全通を前にひかえこうした感激を後世に伝えるため、松本幸次郎が発起人となり地元民の協賛をえて昭和七年十月、白滝駅前に開通記念碑を建立したのである。題字は金清助医師によるものである。



開通記念除幕式



上白滝駅



奥白滝駅

またこれよりさき古閑勘六は、昭和四年秋丸瀬布・白滝間の部分開業を記念して白滝駅前、下白滝駅前にそれぞれ四本のシダレヤナギを植樹した。これは郷里の駅前にもヤナギ並木があったことから、第二のふるさと白滝にそうした夢を託して植えたものであるが、機関市の吐き出す煤煙によって成長を阻害され、四十年後の今日、白滝駅前にのみ二本のヤナギを残すだけとなった。

上白滝・奥白滝駅

白滝より約三^ギ二七〇^ギ上川寄りに位するところに上白滝駅が、さらに同駅より五^ギ四〇^ギ上れば奥白滝駅がある。いずれも石北線全線の昭和七年十月一日の営業開始である。

奥白滝歴代駅長

歴代	氏名	就任年月日
初代	荒木秀丸	昭和七・一〇・一
二代	岡本晃	一一・三・二四
三代	山田義雄	一四・一一・一
四代	宮口清太郎	一六・一二・二
五代	王藤亮三	一九・八・二一
六代	鎌田末治	二〇・六・三
七代	山口権右衛門	二四・七・一
八代	松井勝一	二九・五・二
九代	箕輪隆名	三四・二・二一
一〇代	久保田篤憲	三六・二・二三
十一代	太橋務	三八・二・一
十二代	根本光雄	四〇・二・一
十三代	福島森夫	四二・二・一
十四代	矢野猛夫	四五・二・一〇

上白滝歴代駅長

歴代	氏名	就任年月日
初代	伊藤慶太郎	昭和七・一〇・一
二代	鈴木平義	一〇・三・一五
三代	高橋好美	一六・三・一一
四代	堀口三夫	一九・八・一七
五代	桑村徳四郎	二五・三・三一
六代	小川徳保	三三・二・二五
七代	為広頼男	三六・二・一三
八代	福島武	三八・二・一
九代	加藤金兵衛	四〇・二・一一
一〇代	播磨清	四二・二・一一
十一代	中橋正敏	四六・二・一〇

下白滝駅

白滝駅より約一〇キ四九〇肩の地点、丸瀬布駅とのほぼ中間に下白滝駅がある。白滝駅と同じく昭和四年八月十二日の開業、荻州峯一が初代の駅長として赴任した。その後白滝駅長が兼務した時代もあったが、まもなく単独に駅長を置くことになった。



下白滝歴代駅長

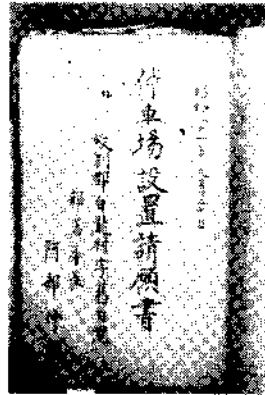
歴代氏名	就任年月日	歴代氏名	就任年月日
初代 荻州 峯一	昭和四・八・一二	八代 長竹 作藏	昭和二六・四・一二
二代 高野千代吉	五・三・三 (白滝駅兼務)	九代 小浜 義隆	三二・二・二七
三代 佐藤 登	不明	一〇代 上田 久太	三四・二・二五
四代 益村 茂	昭和一〇・七・八	十一代 石田 輝男	三七・二・一四
五代 福島孝太郎	一三・三・	十二代 相馬 胖	三九・二・八
六代 沢野 政市	不明	十三代 金野 當夫	三九・二・二一
七代 池田 武助	昭和二〇・一一・三	十四代 小松 正一	四三・二・一

旧白滝臨時乗降場

白滝駅をへだつこと五、九九〇^キ下ったところに旧白滝臨時乗降場がある。石北線全通時には未設置であったが当該部落の発展につれて痛切に不便を感じ部落民一九となって乗降場設置の請願運動が展開された。旧白滝部落会長阿部仲藏、地元出身の村会議員丹羽実市が代表となり部落全員の連署をもって昭和二十一年八月二十日札幌鉄道局長を尋ね次のような請願書を提出した。

『下白滝駅白滝駅間臨時乗降場設置請願書』

昭和四年現在の石北線が敷設されるや、当時丸瀬布・白滝間の中間駅予定地は産業、交通、文化等あらゆる点から当然、部落中央附近が選定されるものと関係部落住民一同信じておりましたところ如何なる事情でありましたか、その中間駅は現下白滝駅と決定設置され今日に至りました。当該部落は広い而も肥沃豊穡な耕地と附近に広大な山林を有する将来有望な農村部落であります、住民の大半は最寄り駅から一里以上の距離にあります関係上大変不便で今日まで直接間接に交通生産文化等に及ぼ



す影響まことに多く、近く大規模な帰農者の入地、乳牛の飼育等の予定計画も最寄り駅よりの距離の關係でその進捗をはばまれているような状態であります。生産物、農機具の出荷搬入、配給物資の受入等の不便物は勿論、ことに現在下白滝駅及び附近住民の児童は夏期は熊害、冬期は積雪のため当部落旧白滝校に通学出来ず通学区域外の白滝校に通学を余儀なくされているような状態であります。

貨客の乗降輸送等一駅の設置をねがうことは四開の状況や諸種の關係で到底全種のことと存じますがせめて乗降客の取扱所のみにも当部落中央附近に設置ねがうことは我々多年の企願でありました。近時各地に於て之が設置方要望すでにその実現を見たところもあり、当部落にても是非万難を排し臨時乗降場を設置いたしたく請願することに相成った次第でございます。

何卒関係住民の衷情御察察の上特段の御高配相仰ぎたく参考事項を具し関係者連署、御願する次第でございます。

昭和二十一年八月二十日

紋別郡白滝村字白滝

代表者 部落会長 阿部 仲藏

村会議員 丹羽 実市

札幌鉄道局長殿

諸願運動が見事に功を奏し、この年十一月正式認可が札幌鉄道局よりおりた。以後部落民の協力によりホームおよび待合所が完成、翌二十二年二月十一日より旧白滝臨時乗降場として使用しはじめた。その後停車場に昇格するべく諸願を重ねたがついにその夢は果せず今日に至っている。

駅勢事情

村内各駅はおける利用状況をみると次のとおりである。

駅 勢 状 況 (その一・乗降客)

(各駅駅勢報告原簿より)

年次 昭七 三月より翌三月まで	種別	白 滝 駅		下 白 滝 駅		上 白 滝 駅		奥 白 滝 駅	
		乗車(人)	降車(人)	乗車(人)	降車(人)	乗車(人)	降車(人)	乗車(人)	降車(人)
昭七	一					五、八三四	六、三二五	二、三四〇	二、六八六
昭八	八					六、七九六	七、四八一	四、〇七二	四、三三八
昭九	九					六、六八七	七、五〇一	六、八二二	六、八一六
昭一〇	一〇					七、五〇六	八、六八六	六、九六七	六、五九三
昭一五	一五					一、八三三	二、一六三	九、五一四	〇、八四四
昭二〇	二〇					二五、一六一	二五、〇四二		
昭二五	二五	九二、九五九	八七、二八七			(昭二三) 四四、二一五	四二、三九四	一九、七三四	一九、〇三七
昭三〇	三〇	一〇一、四二一	九六、一〇四			三七、二六六	三六、五九九	二五、八七八	二六、二七九
昭三五	三五	一、三、九五〇	一一〇、二二三	一六、一七七	一五、八〇三	三六、一三六	三五、九六三	(昭三六) 七、六八八	一八、〇五三
昭四〇	四〇	一、五、九七八		九、七八一		三六、二三五		一八、一六一	
昭四一	四一	一一、九七四		一〇、七二四		三三、三二二		一八、八四一	
昭四二	四二	一〇五、九四五		六、五九五		二八、二八六		一四、〇七八	
昭四三	四三	一〇九、一五三		五、八二五		二四、八四四		一、〇二二	
昭四四	四四	九八、一〇六		四、五三四		二一、六九三		八、九三一	

2011

白滝村地域内鉄道用地面積調べ (単位 平方メートル)

区 間	線路用地	駅区用地	鉄道林用地	計
石北トンネル～奥白滝	103,547.3		363,337.4	466,884.7
奥 白 滝		22,736.9	9,084.6	31,821.5
奥白滝～上白滝	71,950.1		488,247.3	560,197.4
上 白 滝		17,782.7		17,782.7
上白滝～白滝	37,079.0			37,079.0
白 滝		37,234.0		37,234.0
白滝～下白滝	151,917.3			151,917.3
下 白 滝		21,052.5		21,052.5
下白滝～馬生メ	19,105.1			19,105.1
計	383,598.8	98,806.1	860,669.3	1,343,074.2

また、本村地域内における駅区用地、保線用地等の面積は上のとおりとなっている。

保 線

白滝村は北見国と石狩国との境に位する関係で保線は中湧別・上川南保線区の担当区域にまたがり、業務境界は白滝駅より約一キロ二〇〇对上白滝寄り、つまり新旭川を起点として八一キロの地点で、それ以东が中湧別保線区、以西が上川保線区の担当区域となっている。

中湧別保線区白滝線路分区

中湧別保線区の開業は湧別線開通の翌日すなわち大正五年十一月二十二日で、白滝線路分区は昭和四年八月十二日の業務開始であるが、近年国鉄の合理化にともない保線業務の機構改革も行なわれ、昭和四十二年十一月より新機構に切り替えられた。これによると中湧別保線区の下に中湧別保線支区と遠軽保線支区の二支区が出来、白滝は遠軽保線支区に吸収され白滝検査員詰所となり二名の検査員が常駐するのみとなった。業務内容は当初、鉄道用地の管理、建造物、線路、橋梁、踏切その他線路上に設備しているものの管理補修であ

ったが、機構の改革によって昭和四十年十二月一日保線区よりはなれて新たに建築区、営林区が発足、駅舎をはじめ宿舎、付属建造物、その他全建造物の管理補修を建築区が担当、鉄道用地の保守管理、工事監督、伐採計画などは営林区の担当となり、白滝は旭川建築区中湧別支区、旭川営林区中湧別支区の管轄下におかれている。

上川保線区奥白滝線路分区

奥白滝線路分区は昭和七年十月一日の業務開始で上川保線区の管轄内におかれ規定業務の遂行に当たっていたが、昭和四十三年十一月機構改革によって旭川保線区上川保線支区奥白滝検査員詰所となり、業務内容も分割された。この担当区域には特に道内有数の石北トンネルを有し、これが管理には人知れぬ苦労が続いているのである。

石北トンネルのレール交換状況

列車の安全運転をはかるためには枕木およびレールの交換がきわめて重要かつ敏速さが要求されるが、石北トンネル内のこうしたレール交換は旭川保線区上川保線支区員らの手で夜間不眠不休で行なわれる。

昭和七年全通当時のトンネル内レールは一桁当たりの重量三七キログラムで、一本の長さ一〇呎レールを使用、片側に実に四百三十三本のレールが敷かれていたが、昭和二十四年同重量で二五呎レールに交換、この交換作業におよそ二カ年を費やした。その後トンネル内の安全管理、作業能率等を考えあわせ、昭和三十三年十月一日一桁当り五〇キログラムで一本の長さ二〇〇呎の超ロングレールを片側に十九本、計三十八本敷設したのである。このロングレールの交換は八年周期で行なわれることとなっており、昭和四十一年すでに第一回目の交換が行なわれている。この交換作業は主として夜間に行なわれ貨物列車の間引運転を行ない、最新鋭機トロリフト十四台を導入

しておよそ一カ月間を要する。

遠軽機関区の白滝機関車駐泊所

昭和四年八月十二日丸瀬布・白滝間の鉄道開通と同時に白滝機関車給炭水所が設けられ、給炭及び給水の作業が行なわれたが、昭和七年十月一日石北線の全通とともに遠軽機関庫白滝分庫と昇格をなし、初代白滝支区長に堀口四郎次が就任、補機用機関車二輛を常駐させ白滝・中越間の補機仕業に当り運転系統の維持に欠かせぬ存在であった。昭和三十九年八月一日鉄道合理化によって遠軽機関区に合併され名称も遠軽機関区白滝機関車駐泊所と変わり、一時は三十四名を擁した職員も現在は四名に縮小されている。

昭和七年白滝分庫設置以来昭和三十九年遠軽に合併までの歴代支区長は、初代の堀口について、二代林清次郎、三代及川浩、四代山崎重吉、五代森谷新太郎、六代田中武夫、七代玉川真一、八代平沢幸之助である。

給 水

給水は機関区業務の中に包括されているもので、したがって給水の主たる業務も補機作業にかかわる給水、石炭の積込作業であるが、近時気動車の普及によってこれら給水作業量も減少してきた。

ダルマストーブ

複線、電化と日進月歩の国鉄の近代化とうらはらに、道北の幹線「石北本線」では冬期間相変らずダルマストーブを取りつけた混合列車がガタゴトと走っている。一見のどかであるが、ひとたびトンネルに入るともうもうたる煤煙が車内に逆流、楽しい旅行を憂鬱にさせる。しかしなじみ深いこのダルマストーブもやがて全く姿を消す日もそう遠くはないであろう。



ダルマストープ

ダルマストープの歴史は意外に古く、鉄道研究家小熊米雄の説によると、明治十三年「開拓便号」という客車に使用したのが初めてとされているが、これはアメリカ製であったという。明治二十五年小樽手宮工場で国産ズンドウ型ストープを造り一等客車にのみ使用、これが明治三十年代になって今みられるダルマストープに切り替えられたといわれている。

鉄道の災害（貨物列車暴走事件）

昭和二十二年八月十二日午後十一時、十九輛編成の下り貨物列車が下白滝駅に到着した。この時機関車からの飛火によって貨物車輛上のミブヨモギに着火延焼、ようやく消火作業が終ったころ、機関車をはじめ全貨車のブレーキエヤーが何かのはずみで突然抜けて全車輛が動き出した。大久保機関士が急遽貨物に飛び乗ったが下り勾配のため処置の方法なく暴走、丸

瀬布駅を通過、瀬戸瀬駅より約二ギ手前丸瀬布寄りのカーブで後部十輛が脱線または脱線転覆して停車した。時に午後十一時二十分であった。この事故で人命の損傷はなかったが本線は一時不通となり、復旧作業の結果翌日夕刻には開通となった。

（機関車転覆事件）

石北線開通以来初の道床決壊による事故が昭和二十四年五月十



即死2車両1名

上白滝・奥白滝間
列車転覆事故現場

（『北海道新聞』より）

日午後十一時三十六分網走発小樽行上り旅客五〇二列車が奥白滝・上白滝間の奥白滝駅寄り一き五畝の地点を進行中に発生した。現場は粘土混りの砂地に雪融け水が地下深く浸透、線路下の築堤が約二〇畝にわたって決壊、鐵路が吊橋状になっていたところへ暗やみのため発見できず突然機関車、炭水車が脱線転覆、ついで手荷物車が脱線、乗客三百余名には負傷者はなかったが、不幸にして機関助士林弘、機関士見習齋藤哲也の二人は即死、機関士は重傷を負う惨事となった。復旧工事は夜を徹して行なわれ五月十二日平常運転となった。

第三章 その他の交通運輸

自動車

日本に初めて自動車が入されたのは明治三十年で、横浜の外人エベリー・ハイムがオリエント号と呼ぶ蒸気自動車を入れたのが最初とされている。

日本国内において初めて製造された自動車は、明治四十三年砲兵工廠において試作されたといわれている。

本村に自動車が始めて姿をあらわしたのは昭和四年夏、石北線奥白滝・土越間石北トンネルの掘削工事がはじまるや、遠軽方面からトンネル掘削工事に必要な各種資材を貨物列車にて白滝駅まで輸送、このうち主としてセメントを白滝からトンネル工事現場まで、遠軽の大江弥太郎がフォード貨物自動車を使って運送したのが最初とされている。

また白滝市街山内商店の副店主大沢金作が昭和五年春、小型三輪車を使ってトンネル工事現場まで鮮魚・雜貨

白滝村内自動車台数調

種別	項目	課税車	非課税車	計
乗用車		125	3	128
小型トラック		132	1	133
大型トラック		32	6	38
マイクロバス		1	1	2
バス		1	4	5
3輪車		1	1	2
ジープ			1	1
大型特殊用途	ショベル ブルドーザー トラクター 消防車		7 1 1 6	7 1 1 6
小型特殊用途	トラクター 被牽引車 リフト車		36 2 1	36 2 1
合 計		292	69	361

(注 自動2輪、軽4輪などは別表)

昭和四十五年四月一日現在における村内自動車台数を遠軽町税務出張所よりの調査資料によると、



村内所有第1号車

類を運搬したのが村内所有第一号である。以来商用としての自動車はわずかながら所持するものもあったが、自家用乗用車に至っては高嶺の花であった。戦後経済界の復興とともに国民所得も上昇し、商工業者の消費者に対するサービス上、さらに近時ますます盛んになってきたレジャー用として自家用乗用車、トラックなどの普及めざましく、わが国経済の高度成長の一端はこうした山あいの僻村においてもうかがい知ることができる。

上表のほか別項に記してある軽四輪、バイクなど合計すると、実に村内各戸平均一輛強のいずれかの車輛を保有していることとなり、驚くべき普及ぶりである。

乗合自動車(バス)・その一 中越・白滝間バス運行

遠軽・白滝間の鉄道は昭和四年八月に開通し、また旭川方面から中越駅までのびたのは同年十一月で、中越・白滝間は石北トンネル

中越・白滝間時刻表

時間 発着駅	1 便	2 便	3 便
中越発	9.00	1.00	4.00
奥白滝発	10.00	2.00	5.00
白滝着	10.20	2.20	5.20
白滝発	8.00	12.00	3.00
奥白滝発	8.20	12.20	3.20
中越着	9.20	1.20	4.20

料金表

中越	奥白滝	白滝
1円35銭	45銭	
1円80銭		

工事のため開通に手間どり、旅行者はいたく不便を感じバス運行を願う声なき声が高まった。悪路に加えて僻地間の運行は誰がみても赤字路線であったが、義侠心に富んだ札幌自動車合資会社の木上龜藏、加藤幸吉の両代表がバスの運行をはかり、中越駅前から白滝駅前に至るおよそ二五キロを一日三往復にて行なうことに営業の認可をとり、昭和五年春より運行を開始したのである。別記のごときダイヤによって運行したものの、道路整備も進んでいないことゆえ、車輪が没する悪路に運行もままならず、加えて高料金にて乗客もなく旬日を経ずして運休となった。

その二 北見バス

北見バス株式会社は昭和三十五年六月二十日から新設路線として遠軽・白滝間（丸瀬布線と呼称）の白滝直通便午前一回、午後二回の三往復と、白滝駅前・白滝温泉間（白滝温泉線）三往復、さらに白滝駅前・上支湧別間（上支湧別線）五往復を運行した。これによって白滝・丸瀬布間の往來の不便も解消され、住民の喜び大なるものがあつた。当初かなりの利用客もあつたが、昭和三十七年会社の方針により早くも白滝温泉線の運行を停止した。

近年自家用車の異常な普及と農家戸数の減少によってバス利用客も減り、ことに興繁期になると空車同様の状態で運行することもしばしばであつた。北見バス会社側はこうした赤字路線の運休の方針を打ち出したが、たま

北見バス白滝時刻表 昭和35年6月20日

白滝駅前——白滝温泉

便	白滝駅前発	温泉発
1	9.00	9.15
2	13.35	14.10
3	17.45	18.10

白滝——上支湧別

便	白滝発	上支湧別発
1	7.55	7.30
2	9.40	10.20
3	14.20	13.20
4	15.55	16.20
5	18.25	17.20

白 滝 遠 軽

便	白滝発	丸瀬布着 丸瀬布発	遠軽着
1	10.45	11.30	12.10
2	13.45	14.30	15.10
3	16.45	17.30	18.10

便	遠軽発	丸瀬布着 丸瀬布発	白滝着
1	7.30	8.10	8.55
2	12.00	12.40	13.25
3	14.30	15.10	15.55

たま上支湧別中学校が白滝中学校に統合され、これによる通学生の足および地域住民の利便を併せ考え、昭和四十三年四月より年間二百六十万円の村費をもって北見バス株式会社に助成をし、朝夕一回ずつの運行となり、始発駅も丸瀬布と変更された。

その後会社側と白滝村との間に継続運行について話し合いがなされ、昭和四十五年四月より北見バス会社よりバス一台譲り受け、スクールバスとして面目を一新したのである。

新規運行以来わずか十カ年にして、この間幾度か運営内容に変更があったものの、またしても白滝・丸瀬布間バス交通は途絶えてしまった。

株式会社遠軽ハイヤー白滝営業所

昭和三十五年八月二十五日遠軽ハイヤー（社長・小山宗

二）白滝営業所が時代的要求にこたえて白滝駅前に開業し住民の利便をはかっている。開業当初より比較の利用者も多く、近年になって営業成績も向上、住民より増車の希望がたかまり昭和四十三年四月二台に増車したのである。

ハイヤーの利用者数をみると開業当時一年間の乗客数一万四百七十七人で、昭和四十三年の一年間にはおよそ当

初の二・五倍にあたる二万五千八百五十五人が利用している。

軽四輪・バイク

戦後機械文明の発達によってあらゆる分野にわたってオートメ化され、スピードと文化生活を好む日本人にとって恰好の乗りものが出現しはじめた。自転車にかわって出たのが原動機付自転車すなわちバイクである。自転車の一部に小型モーターを取りつけて「パンパンパン」と異様な音を出して走る姿は当時における陸上交通の花形でもあった。近時逐次機体に改良が加えられ今日見られる勇壮な型となっている。

昭和三十三年白滝においてもこれら軽自動車に対する税金が初めて課せられたが、その登録台数と昭和四十四年度における台数から躍進ぶりを眺めてみると、

軽自動車登録台数調

機 種	昭和三十三年	昭和四十五年四月一日現在		
		課税車	非課税車	小 計
一 種 バ イ ク	五〇cc以下	一八九台	八台	一九七台
二 種 バ イ ク	五〇cc以上九〇ccまで	一一四台	一九台	一三三台
二 種 甲 バ イ ク	九〇cc以上一二五ccまで	六九台	一七台	八六台
自 動 二 輪 車	一二六cc以上	一八台	二二台	四〇台
軽 四 輪 車		五六台	四台	六〇台
計		六〇台	五一六台	

自転車

自転車が日本に初めて輸入されたのは明治八年ごろで、娯楽用三輪自転車で、日本最初の自転車製造は明治二十三年ごろ横浜市において、安全車と称するものを製造して時の通信省に納入したものであるといわれている。自動車の普及していない往時にとって自転車は、あなどり難い役割を演じていた。

本村における自転車利用の初めは判然としないが、大正七年中山徳蔵が湧別より支湧別九線に入地したさい一台の自転車を持ってきた時はすでに占田末古も所持していた。しかし言語に絶する悪路のため常用することはできなかった。その後時代の進歩と人口の増加するに従い逐次利用者も増し、銀輪にまたがった颯爽たる姿は衆人の憧れの的でもあった。

昭和三十二年自転車税が廃止されたが、その時点における本村の自転車登録台数は四百二十六台、およそ二軒に一台の割合で所持されていたことになる。その後未登録のため推移のほどは判然としないが、昭和二十六、七年に至り自転車にかわるバイク等の異常な普及によって、スピード感に乏しい自転車がにわかに減少していった。ところが最近、レジャー用にあるいは児童の娯楽用に高級化した自転車が再び静かなブームをよんでいる。

客馬車

大正六年十二月白滝郵便局設置と同時に通送手が配置され、白滝・丸瀬布間郵便通送と兼ねた役得としての客馬車は行なわれていたが、大正十五年児玉作治が白滝・丸瀬布間の客馬車営業を正式に警察署の認可をとってはじめてのが最初である。夏は馬車、冬期は馬橇を仕立て定員六名をもって一日一往復、大人一里（四きり）三十銭、丸瀬布まで一円五十銭の営業であった。児玉につづいて松本幸八も営業したが、昭和四年八月丸瀬布・白滝

間鉄道開通によってその姿は消えてしまった。

運送店

遠軽・白滝間の鉄道開通まもなく白滝駅前に誘別の㊦西出運送店が瀬川孝造に委託して創業したのが昭和四年九月であった。

また石北線全通の翌昭和八年高橋喜久雄が同じく白滝駅前で㊧白滝運送店を開業、さらに下白滝駅前に㊨下白滝運送店（新保国平）、奥白滝駅前に㊩奥白滝運送店（大庭千代吉）、上白滝駅前に㊪上白滝運送店（前田勘治）がそれぞれ創業をはじめた。

昭和十二年小運送業法の制定によって全国一駅一店の制度になったがため、白滝の西出運送店、白滝運送店、下白滝運送店は統合のかたちとなり、しかも遠軽地方一町の小運送業者が合同して創立された遠軽通運株式会社（傘下になり、遠軽通運株式会社白滝営業所（所長・瀬川孝造）および下白滝営業所と改称され、上白滝運送店と奥白滝運送店は鉄道管理部管轄の關係で旭川通運株式会社の傘下となって、いずれも営業を続行、本格的な会社経営となったのである。今日全国的営業網をもつ日本通運株式会社が日通として大きく組織されたのもこのころである。

太平洋戦争もしいにその激しさが増してきた昭和十九年、国内すべて戦時体制下におかれ軍需物資の輸送量が増大するに従い、その輸送に秘密の保持と円滑にして敏捷さが要求され、これがため全国各運送会社はすべて日本通運株式会社に吸収させられ、日本通運株式会社遠軽支店白滝営業所、同下白滝営業所、日本通運株式会社旭川支店奥白滝営業所、同上白滝営業所と、それぞれ名称が変わった。

昭和三十年白滝営業所をのぞく下白滝、上白滝、奥白滝の各営業所は取扱業務成績の低下によりすべて日本通運の請負制度と改革された。

昭和四十四年四月日本通運の機構改革によって白滝営業所は丸瀬布営業所の配下となり、営業所長に代って主任制となった。

日通白滝営業所となってより歴代の所長は、中城満藏（初代）、小島一郎（二代）、池田定一（三代）、大滝（四代）、嶋中敏夫（五代）、竹中正三（初代主任）である。

トラック営業

昭和三十六年十一月貨物輸送の需要増に対処するため、市街地南区に石北貨物株式会社を設立、社長に大庭裕二が就任、六台のトラックを保有し主として素材の運送等を行っていたが、昭和四十四年五月企業形態を改変し、白滝運輸株式会社と名称も変えて再発足したのである。現社長は山下泉で、トラックの保有は同じく六台である。

第四章 通信

郵便のはじめ

そもそも郵便のおこりは「人間の意志、思想を相手方に伝えるのに当人が出向く代りに書状を送り届けることによって目的が達せられる」ことより始められたもので、天皇の意思を地方に伝えた御用状、いわゆる官用通信

が最初の通信と考えられるものであろう。いまなお人のよく知るところの豊臣時代の駅伝朱印、徳川時代の継飛脚および各藩の大名飛脚も実は官用通信であった。もちろんこれらは為政者のためのものであり、私人の通信の用に供せられることは全くなかったが、民間における通信需要がしだいに高まるにつれて自然発生的に飛脚が生れた。これを町飛脚と呼称した。しかしながら町飛脚への書状の差出しおよびその配達は当時きわめて幼稚なもので、戸外に箆をしいてその上に書状などならべて通行人に見せ、もし自己の名前をみつけたならば、ただちに飛脚屋に申し出てこれを受取ることになっていた。がこの制度は江戸時代における私信送達の唯一の機関でもあった。こうした不満足な制度に対し深く心を痛めていた前島密は駅通權正に就任するや、政府の手によって全国的な郵便制度を創設すべく全力を傾注した。その結果明治四年一月二十四日太政官布告をもって「郵便規則」を制定、三月一日より東京・大阪間にこの新方式を採用したのである。明治六年四月一日、これまで距離によって郵便料金の異なっていたものを、全国均一制とするに至ってわが国の郵便制度は名実ともに新式郵便になり、今日の基盤がこの時に確定したといえよう。

北海道最初の郵便機関は函館郵便役所で明治五年七月の開設、その年すぐ郵便路線は北に向つてのび、室蘭、千歳を経て札幌、小樽まで開通、道東地方においては明治九年一月天塩国苫前から宗谷、枝幸を経て海岸線を通り、斜里より根室に至る郵便路線が開通、同時に斜里、網走、紋別の三カ所に郵便取扱所が開設された。

湧別地方における郵便局設置の初めは明治二十五年十一月湧別浜市街地に出来、最初は単に郵便だけの業務であった。明治三十一年に至り網走・旭川間中央道路が郵便路線として指定されたが、旭川・名寄間の鉄道が全通するに及んで明治三十七年十月から郵便路線は名寄・湧別線に変更された。

郵便事業の沿革を略記すると

明治四年 郵便規則の制定、郵便切手発行

明治五年 書留郵便の取扱開始

明治六年 郵便はがき発行

明治七年 郵便切手の消印に日付印使用

明治八年 郵便役所を郵便局と改称す

明治十八年 逓信省創設、往復はがき発行

明治二十年 ㄏ字形を逓信省全般の徽章として制定

明治二十五年 小包郵便制度開始

明治二十九年 年賀郵便物の特別取扱い開始

明治三十四年 円形赤色の鉄製郵便箱設置

明治三十九年 振替貯金制度の開始

明治四十年 普通小包郵便制度実施

明治四十四年 速達郵便制度実施

大正八年 航空郵便制度始まる

昭和九年 逓信記念日制定（毎年四月二十日）

昭和二十四年 郵政省誕生、お年玉つき年賀はがき発行

昭和二十五年 毎年四月二十日を郵便記念日とす

昭和三十一年 速達郵便物専用の青ポスト誕生

昭和四十一年 郵便料金の全面的改定および郵便物の種類・体系等の大改正

白滝郵便局

郵便取扱人に郵便取扱役を命じて郵便運送の継立をなしたが、既述のとおり明治三十七年郵便路線の変更によって本村内の滝の上八号郵便はもちろん郵便運送の業務は廃止された。これがため村内に居住するものへの郵便物は郵便局の出来るまで遠く遠軽より配達され、便宜上集配所と定めた旧白滝石上藤造宅（のち集配所は旧白滝小学校に変わる）、白滝二股市街の伊藤商店宅にそれぞれ郵便物がおろされたが各戸配達は行なわれず、住民各人が機を見てそこまで出向き、自己あての郵便物を受取り



旧 庁 舎



新 庁 舎

あるいは投函を依頼するというものであった。大正初期にいたり団体移住者があいつぎ、開拓者の大きな楽しみの一つでもあった故郷「内地」からのたよりも当初一週間に一回が、このころに至り三日に一回程度の割合で運送されていたが、冬期など吹雪が続くと十日も半月も遠軽から郵便物の来ないこともあった。こうしたことから住民ひとしく地元で郵便局の設置を望んでいた矢先、大正六年五月の大火によって極度に生活は苦しくなった

が、罹災者の友人知己よりの救援物資が激増、さらに御下賜金の預金、あるいは貯金の払戻等の業務が急増したので、隣町丸瀬布よりさがけて、大正六年十二月一日白滝市街大通り十二番地に局舎を設け、三等郵便局として発足、郵便集配、為替、貯金、保険事務を開始、堀銃太郎が初代局長として就任した。翌七年十月二十六日局長の交替があり鈴木峰次が二代局長として上湧別より就任した。鈴木峰次の日誌によると「大正八年七月六日、日曜日より白滝局住宅に起居す」とあるから、それまでの間は上湧別より通って勤務していたものと思う。遠軽・白滝間の鉄道開通により駅舎が市街中央に新設されたので局舎の移転問題がもちあがり、昭和七年十月九日白滝原野千三百六十三の四六番地に新築移転、歳月経て昭和四十二年十二月十日老朽局舎に代って近代的な新局舎が旧局舎の隣接地白滝原野千三百六十三の四三番地に落成をみた。

白滝郵便局歴代局長

初代	堀 銃太郎	大正六年二月一日就任
二代	鈴木峰次	大正七年十月二十六日就任
局長心得	和田 稔	昭和五年九月八日就任
三代	鈴木長作	昭和五年十二月十二日就任・現在に至る
歴代局長代理		

初代代理	吉田 適資	大正六年十二月一日就任
二代代理	鈴木 嘉市	大正十年三月三十一日就任
三代代理	鈴木 長作	昭和四年六月二十日就任
四代代理	鈴木 光江	昭和五年十二月十就任
五代代理	賀真田 昭一	昭和四十年六月、日就任・現在に至る

局勢事情

大正六年十二月一日

白滝郵便局開局（三等郵便局）

昭和七年十月九日

現中央区に局舎移転新築

昭和十二年九月二十三日

電信、電話の取扱開始

昭和十六年二月

特定郵便局と改称

昭和二十年二月八日

電話交換事務開始

昭和四十二年十二月十日

現在位置に近代局舎落成

白滝郵便局における郵便・小包業務の実績状況

分類	年 度		大 正 七 年		大 正 一 五 年		昭 和 一 〇 年		昭 和 二 五 年		昭 和 四 一 年		昭 和 四 四 年	
	年間総数	平均日	年間総数	平均日	年間総数	平均日	年間総数	平均日	年間総数	平均日	年間総数	平均日	年間総数	平均日
郵便（通）	五、三六六	一五	五、三六六	一五	二、四三三	三三	三、五九九	五五	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ
郵便（通）	五、三六六	一五	五、三六六	一五	二、四三三	三三	三、五九九	五五	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ	集計ナシ
小包（個）	八、二二二	二四	一、〇八八	一四	一、〇八八	一四	六、二二二	二四	六、二二二	二四	六、二二二	二四	六、二二二	二四
小包（個）	八、二二二	二四	一、〇八八	一四	一、〇八八	一四	六、二二二	二四	六、二二二	二四	六、二二二	二四	六、二二二	二四
小配達（個）	八、二二二	二四	一、〇八八	一四	一、〇八八	一四	六、二二二	二四	六、二二二	二四	六、二二二	二四	六、二二二	二四

上支漢別簡易郵便局

上支漢別部落は、一時戸数百五十戸余を数えて（九線市街の連帯戸数五十戸余）小学校、中学校を擁し（注・昭和四十三年中学校は廃校となる）、白滝市街より八キロ離れたところで、地域住民ひとしく簡易郵便局の設置を望んでいたところ、ついに昭和三十四年十月一日上支漢別簡易郵便局として開局した。取扱業務は主として郵便、

売捌切手、為替、貯金等で、事務取扱責任者は中山義徳である。

通 送

大正六年十二月白滝郵便局が設置されるや、当然のことながら各戸配達とあわせて通送業務をも行なうこととなったが、通送は一日一回馬搬によって丸瀬布市街の中継所まで行き、郵便物の受け渡しを行ない、その郵便物は翌日配達となっていたのを、大正十一年二月より丸瀬布中継所までの往復も昼・夜の一日二回とし、これにもなって通送手も二人となり、丸瀬布にて中継された郵便物はその日のうちに配達されることとなった。

こうした通送も昭和四年八月丸瀬布・白滝間の鉄道開通によって廃止されたのである。

はじめて夜行の通送にたずさわった石井国丸は当時のもようを次のように語ってくれた。

一夏は駄鞍、たまには馬車、冬は馬ソリで、夜九時ごろ白滝局から郵便物を積んで出発し、丸瀬布にて遠軽から来る通送馬を待って、そこで郵便物の受け渡しを行ない、翌朝六時までに帰ってくるようになっていた。昼の通送は午前八時出発の午後四時白滝帰着となっていたが、夜行便は帰途朝露にうたれながらの運行は目に見えて体力が消耗する過激な仕事であったし、冬季極寒の時、あるいは吹雪の時など言語に絶するものがあつた。

歴代通送手

通送手名

就 職 期 間

佐々木 金次郎 大正六年十二月一日～大正七年一月十一日

青山 東 大正七年二月十二日～大正七年二月二十八日

清水 長吉 大正七年三月一日～大正七年八月三十日

渡辺 谷蔵 大正七年九月一日～大正九年十月三十一日

中野 武夫	大正九年十一月一日〜大正十一年一月二十日
石井 國九	大正十一年二月一日〜大正十三年十一月二十日
鈴木 龜吉	大正十一年二月一日〜大正十三年十月三十一日
寺端 喜平	大正十三年十一月一日〜昭和四年八月十二日
水戸 滝之助	大正十三年十一月二十日〜大正十四年五月三十一日
菊地 寅藏	大正十四年六月一日〜昭和四年八月十二日

郵便貯金

日本の郵便貯金制度はイギリスの同制度を参考にして明治七年八月貯金預規則を制定、東京、横浜に貯金預所を設置して翌八年五月から預金事務を始めたのが最初とされている。その後名称を逓遞局貯金と改めたこともあったが、明治二十年に現在いわれている郵便貯金と改称したのである。初めて預金制度ができた明治八年末の貯金利用者数はわずかに二千人、貯金残高一万五千円にすぎなかったということである。

白滝郵便局の取扱いによる貯金成績は次のとおり。

項目	年度	金		貯	
		入 口 数	預 金 額	戻 口 数	払 金 額
大正七年度		四〇八 ^件	一八、〇四六 ^円 四九〇 ^銭	四〇四 ^件	一四、五九〇 ^円 、九一六 ^円
昭和五年度		二、三七八 ^件	四九、二三八 ^円	一、一三三 ^件	三八、九九九 ^円
昭和十五年度		三、五五二 ^件	二二〇、〇三二 ^円 四 ^銭	一、九三六 ^件	一七〇、三七九 ^円
昭和三十年度		八、五八五 ^件	四、六七五、一三三 ^円 四 ^銭	二、二八七 ^件	一四、四七三、五七〇 ^円
昭和四十四年度		一一、五八六 ^件	一〇九、九四九、三四一 ^円	三、二二六 ^件	七六、四二六、〇〇四 ^円

簡易保険

簡易保険の発端は、前島密が明治の初期、英国の例にならって生命保険および養老年金の事業を駅通局（現・郵便局）で取扱うものとし草案を作成したことに始まる。しかしこの制度はその後いろいろな角度から検討が加えられていたが、時期尚早の理由で延期されていた。こうしたなかにあつて明治生命保険会社は明治十四年に創始され、以来他の保険会社も順次誕生したが、そのいずれも保険金額が比較的高額であつたため、中流階級以下の庶民は容易に加入することができなかった。明治末期に至り社会経済の急変にともないその影響を受けて各保険会社は経営上の理由から年々保険金額を引上げていく傾向にあつた。このため一般庶民にとっては、ますます生命保険への加入が困難となつてきた。このような事情と社会政策的見地から官営による簡易保険の実施が強く要望され、ついに大正五年十月一日から簡易生命保険制度が実施されたのである。爾来今日まで、保険金額が比較的少額であり、しかも無診査であることが国民大衆に親しまれ普及しているゆえんであらう。

現在取扱われている簡易生命保険の種類は大別して、終身保険・養老保険・家族保険・特別養老保険の四種となつている。

白滝郵便局による簡易保険業務は、大正六年十二月開局と同時に行なわれたわけで、当時の記録がなく判然としないが何がしかの保険契約があつたであらうことは想像に難くない。白滝郵便局に保存されている最も古い記

白滝郵便局取扱分		大正		昭和		伸び率
保険加入口数	保険払い高	一	二年	四	四年	
		九七件		一一、四三二件		およそ一七倍
		一、二六一円		三〇九、三七七、三四五円		
						およそ一八、〇〇〇倍強

録と今日のそれとを比較対照すると、前表に見られるごとく驚くべき伸び率を示している。

子供郵便局

子供の成長とともに、親が毎月与えるいわゆる「おこづかい」も「必要の時に買い与える」ことから「定額こづかい」にと形が変り、子供自身も計画を立てて与えられた「おこづかい」を消費するが、むだづかいを避けきするため、また、貯蓄思想を植えつけるため全国各小中学校において、子供銀行あるいは子供郵便局が自主的に設置されているところが多く、本村においても左記の二校が子供郵便局を設けて非常な効果を収めている。

(昭和四十五年五月現在)

学校名	項目	設置年月日	利用者数	預金額
三和小中学校子供郵便局		昭和三十一年一月二十日	九七人	六九五、七六二円
白滝小学校子供郵便局		昭和三十三年七月十五日	二五〇人	一、六九九、四〇一円

電 報

道道上川・遠軽線の道路沿いに架設されている電信電話線は、明治三十年に札幌から旭川、永山、上川を経て網走までの内陸縦貫道路に沿って架設され、同年四月には網走・釧路線に接続して、札幌・釧路間長距離電信電話線として架設されたものである。

今日のように通信網の発達していない時代においては、電報は安全確実敏速な連絡機関であり、急を要する公用、商用にきわめて重宝がられた。しかし一般家庭においては危篤、死亡の知らせ以外はあまり利用がなく縁遠

いものの一つとされていた。白滝市街地に局が出来てもなお電報は取扱っていなかったもので、大正時代の電報は通送手が遠軽より丸瀬布中継によって受取り、郵便物と一緒に電報の配達も行なわれたのであるが、別紙付電報は通送手が請負って速配した。石井国丸元通送手は当時のもようを「私が通送をしていた大正十一年ごろは毎日のように別紙付電報がきたもので、これらはその日のうちに配達したが、面白いことに、当時は配達した家から『別紙付配達料』をもらったものである」と語ってくれた。

白滝郵便局の電信電話の取扱いは昭和十二年九月二十三日で、電報取扱いは、昭和十三年度における発信数は千七百十一通、著信二千八百十八通であった。近時電話の普及された今日、電話託送による電報利用が急増し、ためにこれら託送分の集計記録がないため取扱ひ数の把握はできないが、おそらく開始当時の数倍にのぼるものと推測される。

電 話

わが国電話使用の初めは、明治十年一月アメリカより輸入した電話機を東京・横浜間に試用したのにはじまり、こえて同二十二年国営事業によって施設をなし東京・静岡間に通話を開始され、年を追うて通話網が拡大されていったのである。電話事業を政府の手によって行ない、一般に普及しようとしたところ「針金を伝わって手紙が行くなどは、全く魔術であり、わが神国には入れるべきものでない」と堂々国会で論じた者もあったということである。

本道における電話は明治三十三年五月十六日札幌・小樽間に開通したのが初めて、以来順調に普及されているが、本村においては、昭和十二年九月白滝郵便局が電話業務取扱の認可を受けたものの、局に公衆電話一台ある

のみで村内において電話施設をなす家庭もなく、昭和二十年に至つてようやく市街に三基が施設され同年二月八日電話交換事務が開始された。すなわち

通話開始年月		電話番号	氏名
第一次	昭和二〇年二月八日	一 番 二 番 三 番	丸瀬布営林署白滝野木場 遠軽町役場白滝出張所 遠軽町農業会白滝支所
第二次	昭和二二年二月	四 番 五 番	(希望者なく欠番) 日本通運白滝営業所
第三次	昭和二三年九月	六 番 七 番	西尾 博文 布田木工場
第四次	昭和二五年三月	八 番 九 番 一〇 番 一一 番	野沢孫木工場 白滝巡査駐在所 中山蹄鉄所 藤本木工場

以下順次増加し、今日左のごとき利用状況となっている。(昭和四十五年四月現在調)

単独加入 一〇一台

二共同加入 一四台

三以上共同加入 六台

局公衆 二台

公衆 農村公衆 五台

委託公衆 四台

合 計 一三二台

郵便ポストと切手類売捌所

街が栄え、部落が拓けてゆくと当然のように郵便ポストが設置されるわけであるが、上白滝に入地した紀州団体員の倉橋伝三郎は、本村に郵便局の出来る以前に、部落民の利便を考え、遠軽郵便局を通して大正三年春、切手類売捌の認可を受け、店先の片隅に置いた蓋のない木箱をポスト代りに使用した。

現在郵便ポストの設置箇所は、白滝郵便局前、白滝駅前、西区植村直治宅前、下白滝新保国英宅前、上白滝前田忠治宅前、奥白滝大庭千代吉宅前、支湧別佐久間幸雄宅前、上支湧別簡易郵便局前の八カ所であるが、速達便専用の青ポストは本村には設置されていない。

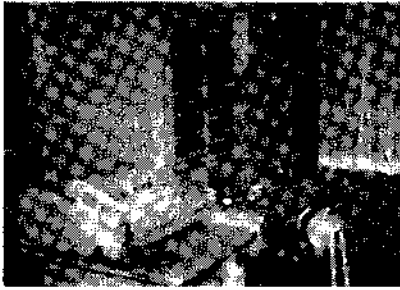
次に切手類売捌所の経過は左のとおりであるが、取扱業務はいずれも郵便はがき、切手、収入印紙の三種である。

地区別	項目	取扱責任者	認可年月日	名義変更並に 廃止年月日	備考
白滝市街売捌所	井村謙二 植村直治	昭和十二年八月十八日 三十四年五月十六日		現在に至る	

下白滝光棚所	新保 新保 保 保 国 国 英 平	昭和五年二月六日 〃 十九年二月一日	名義変更	現在に至る
上白滝光棚所	倉橋 佐野 夏野 前田 伝三郎 賢一 喜作 忠治	大正三年春 〃 七年十月二十日 〃 十年十月二十日 昭和十九年二月一日 〃 二十六年九月一日	名義変更 右 同 右 同 右 同	現在に至る
奥白滝光棚所	岸 岸 大庭 利七 浦吉 千代吉	大正八年三月二十五日 昭和十七年六月十六日 〃 二十八年九月一日	名義変更 右 同	現在に至る
支湧別光棚所	井村 南村 伊藤 植村 謙二 政雄 権三郎 博司 佐久間 幸雄	大正七年一月二十日 昭和十二年十二月六日 〃 二十四年五月一日 〃 三十五年四月一日 〃 四十一年十月一日	名義変更 右 同 右 同 右 同 右 同	現在に至る
上支湧別光棚所	片山 福田 福田 中山 柚吉 彦藏 徳藏 上支湧別簡易郵便局	大正九年二月十八日 〃 十三年二月十六日 昭和三年十月六日 〃 三十四年十月一日	名義変更 右 同 右 同	現在に至る
旧白滝光棚所	児玉 作平	大正七年一月九日	昭和八年三月二十五日	廃止

農事放送電話

昭和四十一年十二月山村振興法にもとづく振興山村の指定を受け、振興計画によっておのこの事業が始められることになったが、この事業計画の中でも特に大きくとりあげていたのが振興山村特別開発事業（特開事業という）であり、この特開事業として村内全農・林家を対象とする農事放送施設事業を策定し、白滝村農業協同組合が事業主体となって、総工事費三千九百七千円にて日本電設工業KKが請負い、昭和四十三年五月十二日着工、業務区域を白滝村全域とし、三百二十五戸の関係者に自動方式六〇〇型の電話が架設され、同年十一月六日竣工、北海道電波監理局等より有線放送電話業務の認可もとり、同月十五日より運用開始となり、同二十七日市街青年研修所において竣工祝賀会が盛大に挙行された。放送交換所は農協裏に隣接して建設された。自動電話機六〇〇



電話交換所



型とは近代的にして高性能なもので、放送は電話の通話と切替えを行なうことができ、なお必要の場合は同時一斉放送および地区別放送が可能で、しかも秘話個別共電方式とちがい時間帯に関係なく随時使用が可能である。現在昼および午後七時半の二回、農協ならびに村役場よりの連絡事項の同時一斉放送を行っている。

一般受益者にしてみれば、毎月五百円の電話基本料金を重荷としながらも、諸事連絡がスビ

ード化され、喜びのうちに大いに利用されている。

有線放送電話施設運営委員会

有線放送電話施設の円滑な管理運営をはかるを目的として、昭和四十三年十月設立されたもので、委員長古閑一男のほか委員の構成メンバーは村関係、教育関係、学識経験者、農業指導者、農協青年部代表、農協婦人部代表より各一名、林業関係より二名、地区別代表として四名の計十三名によって組織されている。

一斉放送は原則として午前、正午、午後の一日三回定時とし、緊急の場合は臨時放送も可とし、電々公社の接統通話は五月、六月は七時より二十一時まで、その他の月は七時より二十時までとしている。

また放送内容も左のごとく規定している。

- 一 農事一般ならびに教育情報に関する放送
- 二 公共機関の公示事項および組合の業務伝達事項の放送ならびに連絡
- 三 非常災害に関する放送
- 四 国内ラジオ放送の再放送
- 五 加入者相互の通話の交換
- 六 その他必要と認められる放送連絡

第五章 歓喜となやみ

近時交通の発達はめざましいものがあり、これら交通の発達経過については前各章にわたって述べたとおりであるが、明治四十五年紀州団体が大学して本村未開の原野に移住してから、昭和四年遠軽・白滝間鉄道開通までのおよそ十七年間というものは、もちろん汽車もなければバスもなく自家用車のあろうはずもなく、大正の初期においては自転車すらきわめて高価で手にすることのできない時代であった。明治二十五年開通した網走・旭川間中央道路は竣工当時においてはまことに画期的な大事業であり、旅行者にとつては「なんとありがたい道路」であつたろうことは想像に難くないが、しかしこの中央道路とて旭川および網走よりはば中間点に位する本村ならびに丸瀬布地方は道路の補修・改良には手が届かず、洪水によつて流失した橋も放置されることが多く、道路両側の笹草は数年足らずして道を覆うほど繁茂し、粘土質の所に至つては尺余もぬかる悪路が続き言語に絶するものであつたという。大正八年遠軽分村となるまでは、出生、死亡届をはじめとしてその他いっさいの提出書類は上湧別村におもむかなければならず、白滝より五〇ギ余の悪路を徒歩にて行かなければならなかつた。遠軽分村後はこれまでより一〇ギ余近くなつたとはいえ、今にして思えば氣の遠くなる感じがする。開拓の苦労とともにこうした交通の未開発、道路網の不整備は開拓者をして二重の苦しみにあえがせ、いずれの未開地方の開拓者もそうであつたろうが、おそらくは白い歯を出して心底から笑いをみせるような楽しみなどなかつたであらう。こうした苦しみに堪えかね、さらに生活苦が重なつて、主として東白滝、天狗平に人地した者の中から、よりよ

き安住の地をとの観点から樺太移住がはじまったのが大正八年ころであつた。

農作物の出荷、林産物の搬出に思いもよらぬ輸送費がかさみ、身の毛のよだつような悪路を眺めては道庁の間

拓行政をうらみつつ、齒をくいしばって歎を

振つていた開拓者たちは、昭和七年の石北線

全通は永い間の念願ここに実を結びわが身を

忘れて飲み、かつ喜び合つたのである。一方

道路の整備もしだいに入念の度加わり、本

村発展の布石が着々として築きあげられてい

つた。

日華事案につづく太平洋戦争によって、勤

儉節約、滅私奉公の精神をしいられ、世界の

大国を向うに回しての戦争はあまりにも悲惨

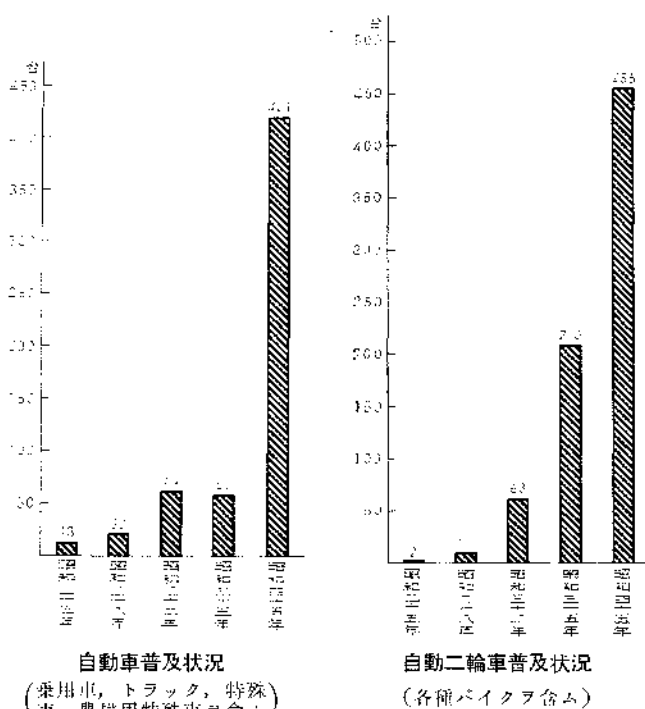
な結果をもたらし、一時は国民総窮乏のどん

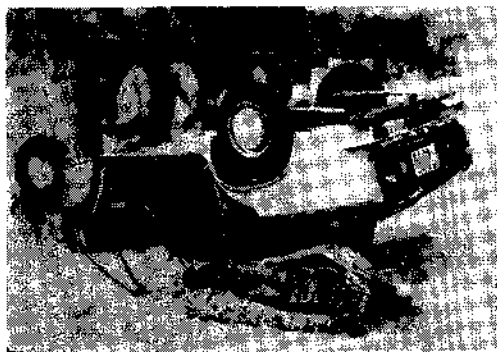
底にたたきめされたものであるが、幸いに

して敗戦後の復興まことにめざましく、国民

経済の成長日に月に伸び、その顕著な一例と

して自動車産業の驚くべき躍進ぶりがある。





車は川を走るものでない一橋から転落死亡事故

(交通安全広報『黄旗』より)

れよう。大正初期ごろにおいては自動車はおろか、自転車さえも一般庶民にとっては高嶺の花として容易に手中にすることができなかったものが、以来わずか半世紀を経ずして家用自動車が増え世相と相なった。しかも公用、商用としての所有のみならず、レジャー用としての家用自動車の普及は経済の高度成長を物語るものであろう。本村内においても昭和二十五年乗用車は一台もみられなかったが、昭和二十八年に至り普通乗用車二台、小型乗用車二台の計四台(貨物車、三輪車、消防車含まず)とわずかに所有され、これが昭和四十五年には普通乗用車百二十八台、小型乗用車六十台、計百八十八台と昭和二十八年当時の実に四十七倍に達する驚くべき増加となっている。

全国的にいちじるしい普及をみせた各種自動車の増加は反面、交通事故の発生源ともなり、交通戦争ともうたわれるほど、日々尊い生命が奪われている。本道においても交通事故発生数が全国一の汚名をうけ、昭和四十六年一月ついに非常事態の知事談話を発表、交通事故撲滅に道民一丸となって無事故運動を展開するに至ったのである。

国道の大半が舗装され、その他道道および市町村道に至るまで年々改良整備の手が入念に加えられ、鉄道の発達、自動車の普及はスピード化を求める者にとって最高の条件が備わったといえるものの、無謀運転が起因してあたら尊い命を奪い去り、あるいは自ら命を落とすなど、楽しいはずの旅が一瞬にして悲劇を生むこととなるのである。

道路が整備され、交通の使いかによくなろうとも「走る凶器」とまでいわれている車の交通事故の絶無となるまで、これからますます事故に対する恐怖と悩みはつくことであろう。

九 育ちゆく郷土

第一章 白滝の素顔

第一節 景勝比麻良山

比麻良山（通称ひら山）は、支湧別川の源、白滝市街より南西およそ二〇き所の地点に位置し、上川町との境にある海拔一、七九六呎を中心とした山塊である。

白滝市街より車で三十分、徒歩で二時間、登山路を開削してあるので婦女子でも容易に頂上に達することができる。一面平坦な高原には百種をこえる高山植物が密生し、また雄大な雪渓があり、例年七月一日の山開きには車を連ねて登山者が訪れる。

ひら山の植物の垂直分布状況は、下から針広混交林、針葉樹林帯、ダケカンバ林帯、ハイマツ帯に分れ、日光、気温、土質、水量、風雪など環境の相違により生育する植物の種類にも差異があり、その景観の変化と美しさは登山する人の心をうつ。

登山口付近はトドマツ、エゾマツ、アカエゾマツの原始林、その樹下、樹陰の道端には紫色で吊鐘の形をした

ミヤマハンシヨウヅル、鶴の舞を思わせるマイヅルソウ、大きな羽根を広げたようなクサソテツなどのシダ類、ズタヤクシユ、サンカヨウ、ノウゴウイチゴ、ゴゼンタチバナ、オオレイジンソウ、フッキソウなど数多く目につく。

雪溪より流れる溪間の水辺にはオオバミゾホオズキ、ミヤマアカバナ、エゾリュウキンカなどがみられ、特に七月の山開きにはあざやかな黄色でフレッシュな感じのエゾリュウキンカの花が満開になる。

海拔一、二〇〇呎付近からダケカンバの太木が見られるが、登るにつれて横にうねりくねりし、地を這うような形になり、高山の自然のきびしさに気づく。この近くから道端にいわゆる高山植物が目立ちはじめ、ウコンウツギ、ハクセンナズナ、チシマザクラ、コバノイチヤクソウ、エゾミソガワソウ、さらに湿った岩地にミヤマダイモンジソウなどが見られる。

一、五〇〇呎付近の雪溪のあたりから高山帯に入りハイマツが現われる。このあたりの樹木限界付近のハイマツは二層内外の高さにあるが、ハイマツの性質を失わず幹は直立せず枝先が斜めに立っている。ここから頂上までダケカンバなどさらに地を這い短くなる。

頂上に近づくにつれ高山植物の種類も多くなり、ウラジロナナカマド、タカネナナカマド、ミネヤナギなど地面にしがみつき、ハイマツの間には小さく可憐な高山植物の花が咲き乱れ、いわゆる「お花畑」が現出する。高山植物の女王といわれるコマクサをはじめツガザクラ、コケモモ、イワヒゲなどツツジの仲間、イワウメ、チングルマ、エゾコザクラ、ミヤマリンドウ、タロマイソウ、エゾオヤマノエンドウ、ミヤマキンバイ、ジンヨウキスミレなど、下界に見られない美しさに驚かぬものはない。

北海道の高山植物は約四百五十種といわれているが、ひら山では昭和三十三年七月より九月にかけて北海道大学館脇操教授等の調査により、四十二科百二十七種が確認されている。その結果ひら山は高山植物の種類、量とも道内有数の豊富地でありさらに学術上貴重なものが多いといわれている。

なお、館脇教授の調査から、ひら山に生ずる高山植物を分類すると、

ヒカゲノカズラ科

タカネスギカズラ、ミヤマヒカゲノカズラ

マツ科

ハイマツ

ヤナギ科

ミホヤナギ、エゾノタカネヤナギ

ハンノキ科

ミヤマハンノキ、タケカンバ

クデ科

ムカゴトラノオ、マルバギンギン、タカネスイバ

シデシコ科

オオタカネツメクサ

キンボウゲ科

エゾノハクサンイチゲ、ミヤマオダマキ、ミツバオウレン、ツクモグサ、ミヤマキンボウゲ、モミジカラマツ、エゾキン

バイソウ

ケシ科

コマクサ

アブラナ科

ミヤマハタザオ、ヤマガラシ、ソウウンナズナ、ハクセンナズナ

ペンケイソウ科

アオノイワベンケイ、イリベンケイ

ユキノシタ科

アラシグサ、ウメバチソウ、ヒメクモマダサ、ミヤマダイモンジソウ、ヒメヤマハナソウ、チシマクモマダサ

シモツケ科

マルバシモツケ、エゾマルバシモツケ、テシオシモツケ

ナシ科

タカネナナカマド、ウラジロナナカマド

バラ科

チュウノスケソウ、ミヤマダイコンソウ、ミヤマキンバイ、メアカンキンバイ、オオタカネイバラ、コガネイチゴ、タカ

ネトウチソウ、チングルマ

サクラ科

チシマザクラ

マメ科

チシマゲンゲ、エゾオヤマノエンドウ

フウロウ科

チシマフウロウ

ガンコウラン科

ガンコウラン

オトギリソウ科

イワオトギリ

スミレ科

ジンヨウキスミレ、キバナノコマノツメ、タカネスミレ

アカバナ科

ミヤマアカバナ

セリ科

レブンサイユ、ハタサンボウフウ、チシマニンジン

イワウメ科

イワウメ

イチヤクソウ科

コバノイチヤクソウ、ベニバナイチヤクソウ

ツツジ科

コメバツガザクラ、ウラシマツツジ、チシマツガザクラ、イワヒゲ、ジムカデ、ホンバイソツツジ、エゾイソツツジ、ミ
ネズオウ、アオノツガザクラ、エゾノツガザクラ、キバナシヤクナゲ、エゾツツジ、ミヤマホツツジ、クロウスゴ、クロ

マメノキ、コケモモ

サクラソウ科

エゾコザクラ、シマトリソウ

リンドウ科

ミヤマリンドウ

ムラサキ科

エゾムラサキ

九 育ちゆく郷土

シソ科

エゾミソガワソウ、イブキジャコウソウ

ゴマノハダサ科

ヨツバシオガマ、シオガマギク、タロマイソウ、エゾヒメタワガタ

ハマウツボ科

オニフ

タヌキモ科

ムシトリスミレ

スイカズラ科

リンネソウ、チシマヒヨウタンボク、ウコンウツギ

オミナエシ科

タカネオミナエシ

キキコウ科

チシマギキョウ

キク科

エゾウサギギク、サマニヨモギ、シロサマニヨモギ、ミヤマアズマギク、ミヤマサワアザミ、カンチコウゾリナ、ナガバ

キタアザミ、ウスユキトウヒレン、コガネギク

タケ科

チシマザサ

イネ科

ミヤマノガリヤス、ミヤマウシノケグサ、ミヤマコウボウ、ミヤマドジョウツナギ、ナンブソモソモ、リシリカニツリ

スゲ科



流紋岩球顆

本村通称八号沢の奥に存する大形の流紋岩球顆は、昭和三十七年松平元法政大学講師によって貴重な文化財であることが発見されたことによりにわかに脚光を浴び、北海道天然記念物として指定方申請していたところ、昭和三十九年十月三日北海道天然記念物として指定を受けた。位置は国有林内（白滝事業区八十林班は小班）で、その規模はおよそ三畝にわたって密集している。

流紋岩球顆はその名のごとく球顆の大形のものが数多く集合して厚い岩層を形成しており、球顆を構成する鉱物は従来は繊維状の長石と石英その他の

タイセツイソスゲ、タカネショウジョウソゲ、ミヤマタクロスゲ、キンチャクスゲ、オノエスゲ
イダサ科

ミヤマイ、タカネスズメノヒエ、クモマスズメノヒエ

ユリ科

シロウジヨウバカマ、エゾカンゾウ、チシマアマナ、タケシマラン、チシマゼキショウ、ヒメイワシヨウブ、ミヤマバイ
ケイソウ

ラン科

タカネトンボウ

第二節 北海道指定天然記念物「白滝の流紋岩球顆」

珪酸塩鉱物などであったが本村の球類は曹長石を主としている。

第二章 炉辺談話

合気会 合気会の創始者植芝盛平は、本村最初の団体移住である紀州団体五十四戸の団体長として明治四十五年五月入地し、団員ともども苦勞を重ねて開拓の艱をふるい、かたわら団体の良き相談役として公私の別なく愛の手を差しのべた。大正二年二月白滝原野（上湧別村第十七部）に行政の部制がしかれた折、第十七部部長に推された。



植 芝 盛 平

大正四年二月たまたま所用にて出張、遠軽久田旅館に投宿中、大東流合気柔術宗家武田惣角と初見し、感ずるところあつて武田の弟子となり修業に励んだ。

その後武田を白滝の自宅に招聘したりして師事し武道の練磨に努めた。大正七年六月上湧別村議會議員に当選、白滝最初の村議會議員となった。

大正八年春、植芝のもとへ「チキトクスグカエレ」の電報が舞い込み、かねてより離村を思考中であつた植芝は、財産のほとんどを師匠武田に寄託し、とるものもとらずあえず家族ともども白滝の地を離れたのである。北海道をあとにした植芝は以来信仰を深めつつ武道修業に専心、紆余曲折もあつて苦難の道を行んだが、植芝多年の念願が結実、ついに昭和初期東京新宿に道場を設立、合気会の創

始者として志を同じうするものの指導普及に励んだ。

昭和四十四年四月二十六日肝臓ガンにて死去、嫡子植芝吉祥丸が合気会を継承し斯道の指導普及に努めている。

客車トイレ第一号

日本における鉄道技術は、イギリスやアメリカからの導入によってはじめられたもので

あるが、その後の発達は目を見張るものがあり、次から次と発明工夫がなされ先進国をしのぐ勢いである。客車トイレの取付けも実は日本が最初とされている。しかもこのきっかけがまことに意外で明治二十二年といえ北海道線が開通した年であるが、この年の四月、時の御料局長官肥田浜五郎という人が東海道線に乗車中、用便急をつげたが車内にトイレの設備がなく、停車駅のホームにて用便をすませ発車寸前飛び乗ったところ足を踏みはずし、レール上に転落あえない最期をとげた。このことがきっかけとなり、この年より客車トイレの実現と相なった由である。

熊と狼

蝦夷地における開拓者の深刻な悩みの一つはクマとオオカミに対する恐怖であった。犬に似て瘦せ

て大きく、口も大きく耳は小さく、全身茶褐色系で夜光る三角型の目はみるからに兇猛で、熊とともに人畜に害を加える猛獣である。熊狼の被害続出に手をやいた開拓使は、明治十年熊狼捕獲奨励金制度を決め、熊狼一頭につき二円の奨励金を出して捕獲に乗り出した。この年あまり成果があららず、翌十一年熊一頭につき五円、狼一頭につき七円に値上げしたがため捕獲成果が大いにあがったが、この高い奨励金に悪知恵を働かせる者もあったという。それは捕獲の証拠として熊狼の足首から先を切り落して持参することになっていたが、捕獲もせずアイヌ部落から狼によく似たアイヌ犬を安値で買い求めて、その足を切り落して持参し、高い奨励金を手に入れるふとどき者もあったそうである。いずれにしてもその後奨励金の額には変動があったが、こうした制度がやがて功を

奏し、明治二十二年頃に至り狼への恐怖は全くなかったといわれている。しかし今日に至るもなお熊獣による農作物の被害あるいは時として発生する人畜に及ぼす被害は減少しているとはいえ完全に無くなったわけではなく、本村においてもほとんど毎年農作物の被害があり、昭和三十五年十月には村内天狗平の開墾地において内野力三郎は子息と秋耕作業中巨熊が出現、猟銃を乱射したが逆襲に遭いついに尊い一命を奪われ、子息も頭部に全治一カ月の傷を負う事故も発生している。こうした事件が発生して以来本村においても積極的な熊獣駆除対策にのり出し、熊獣駆除報償金制度を設け被害の絶滅に当たっている。現在の報償金は親熊一頭につき一万円、子熊一頭につき五千円とし猟友会に駆除方依存している。さりながら熊獣駆除は全道的にそれぞれの市町村の施策に応じて対策が講ぜられているようであるが、これから先何十年となく熊獣による被害はつくことであろう。

お産と迷信

近時経済の復興にともない生活様式も高度化してきているが、終戦後国土の縮小と食糧事情悪化の窮余の策としてとられた産児制限はしだいに徹底、今日なお根強く浸透し、子供の少ないのはむしろあたりまえとなり、四人以上の子供を育てている家庭は多産の部に属するほどわれわれのイメージも変ってきている。戦時中「生めよふやせよ」と多産なることを奨励し、妊娠中絶などご法度の世の中、十二名以上の子宝家庭には道庁または国からの推薦によって新聞社あるいは有名出版社などよりの表彰もあったほどである。本村西区に在住していた川上タリは実に十七人の子宝に恵まれ、かつ立派に育てあげ、陸軍省後援による「主婦の友社」より昭和十七年十一月、本道では唯一人「軍国母の母」の称号を与えられ、輝く表彰を受けたことも今となっては語り草である。多産といえば古い記録によると「大永五年（一五二五）八月葛姫十六歳で徳山城主武田季広に嫁し、男女二十八人を生み慶長六年（一六〇一）十一月九十二歳の高齢で世を終った」（『北方文明史話』より）という

がこれは本道における多産の記録とされている。

お産といえ、非科学的現象を真向から否定する現代の文明社会においていまだに迷信を信ずる事柄が数多くあるが、お産に関する迷信もまた例外なく存在しているようで、一例をあげてみると、

- 一 妊娠中火事を見ればその子に赤い母産が出る
- 一 戌の日に腹帯すれば安産する
- 一 妊娠中、芥子、胡椒、唐辛子等を多く食すれば腹の悪い子が産れる
- 一 妊娠中縄をまたげば胎衣が胎児の首に巻かざる
- 一 妊娠中、柿を食べると難産する

等々多種多様あるが、いずれにしてもその場に直面してみると一笑に付しがたいものであろう。

北海道方言　　せまい日本の国においてその地方地方によって言葉の訛があり、方言も種々雑多であるが、本州より遅れて開拓された北海道は移住者の全部が本州各府県より入地したもので、明治・大正初期におけるところの言葉はそれぞれ出身地の使いなれた訛のある言葉で会話がなされており、同県同士の会話はよいとして他県出身の者との会話になると一向に理解し難い言葉もあり日常生活においても不自由を來たすこともあった。また二世、三世が成長するにつれて言語の多様化に苦慮しはじめたが、教育の普及につれてしだいに標準語に近い言語が用いられるようになった。しかし、こうした各様の方言の混合語もいくつか生れ、北海道特有の言語となつてしまったものもある。近時北海道人が上京しても、本州他府県人に比して概して訛もなく、ほぼ標準語に近い言語になって言葉上では都会人との区別がつかぬくらいになってはいるが、長老衆の中には今もって故郷の言葉に愛着を感じ使用しているものもある。

北海道独特ともいふべき言葉のいくつかを次に記してみるが、時代の進展とともに北海道方言の中にも完全に日常語として根をおろしている言葉と、現代っ子の間では、あまり使われなくなり、やがてはわれわれのまわりから耳にしなくなるであろう衰弱してきている言葉とがあり、言語の面からも時代の流れの一端がのぞかれる。

1 いまなおさかんに使われている北海道言葉

あっぱくさい (至極かんたんである)	おっかない (おそろしいこと)
しょっぱい (塩からいこと)	くべる (燃やすこと)
ちっちゃい (小さいこと)	めんこい (かわいこと)
ふくれる (怒った面相のこと)	なまするい (故意にごまかすこと)
みったくない (形がよくないこと)	しばれる (気温がさがって寒いこと)
さびい (寒いこと)	はんかくさい (人をみくびること)
ばくる (交換すること)	

2 しだいに消えてゆく感じの北海道言葉

うそこく (うそをいうこと)	びり (物の終り)
でっかい (大きいこと)	たまげる (びっくりすること)
よばれる (御馳走になること)	ゆんべ (昨晚のこと)
ゆるくない (らくではないこと)	ばかたれ (馬鹿野郎のこと)
ばいき (陰へさがること↓主として牛馬への命令形として用いた)	

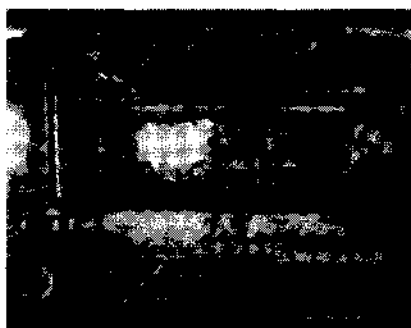
明治初期における犯罪の傾向と刑罰内容

近時犯罪の傾向は年とともに兇悪化し、人命尊重論は宙に浮いている感なきにしもあらずで、まことに憂慮す

べき事であるが、他の犯罪についても犯罪の構成が複雑高度化し、いわゆる三億円盗難事件など目下のところ典型的な完全犯罪ということができよう。しかし、こうした犯罪に対する刑罰内容も、死刑廃止論も甚に飛び出すなど、一般的に見て刑罰そのものが概して軽くなってきたような気がしてならない。次に挙げる刑罰の様子は明治初期（明治二年頃から七年ごろのもの）のものであるが、現行の刑罰と判断比較してみると、いかにも重刑であつたように思われる。すなわち、

鉄瓶、酒、味噌等日用品の「盗み」でも徒刑（重刑の一つで、男は島地に送られ定役に服し、女は内地にて定役に服する。無期徒刑と有期徒刑とに分けられていた）となり、資錢泥の未遂や、いわゆるコン泥未遂でも「鞭四十打」、女性の刑は男子のそれと比較して若干ながら軽かつたようだが、それでも、万引き未遂を二度三度と重ねると懲役十年となつていた。にせ札を使用したものの罪は重く、遊女屋で使つた男は「一日晒し置く」ことになつており、にせ札を安くたくさん買い集めた者は「終身懲役」、また、夫が養女と密通しその間に妻は間男と密通したがため夫と妻は三年の刑を言い渡されたとある。近ごろ売春防止法が施行されて特にきびしい取締りが行なわれているが、明治初期ごろは無届売春でも親の命令でしたものについては「構わない」とされていたのは面白いといつたら語弊があろうが笑えぬ社会情勢であつたのであろう。

タコ部屋残酷物語　その昔、道路開削、鉄道敷設、トンネル工事、ダム工事など、工事量の大きい割合に工期の比較的短い難工事には「タコ」と呼ばれる土工夫が使われ、想像を絶する酷使がなされたのである。昭和四年五月から六月にかけて着工された石北トンネル工事にも数多くのタコが使われ、酷使に堪えかねある者は逃亡し、ある者は取り押えられ拷責され死亡、またある者は疲労が重なり医療することなく病死するなど、現今の勞



土工部屋の内部



土工部屋の内部



土工部屋の所在風景

働条件とは似ても似つかぬ世界であった。
次に掲げる一節は『タコ部屋残酷物語』より抜萃したもので、タコ部屋の実情が克明に書かれており、もの
あわれを痛感せずにはおられない。

「私がそもそもタコに落ちたのは、二十歳のとき、不景気な時代で何をしても思わしく仕事がない、そういう時に、落ちこん
だのが、とあるタコ部屋である。それはひどいもので、御氣病なんかになると、水を飲ましたら駄目だと一般に云われていた
ものだから絶対に水はのませない、本人は飲みたがる、ドロ水でも見たら飲もうとする、それを飲ませまいと、打ったり、た
いたたりする、そのうち足が丸太の如くはれてくる。そんなとき小豆をドロドロに煮つけてその汁を飲まして、療法のひとつと
した。馬の如くに使われて、病気になるれば病名も分らないままに死んでしまう。死ねばセメント樽につめられ埋められてしま

ったり、ひどいものであった。

警察の日も光っていたが、このタコの世界でも肩で風切るのは本ダコと云われる者であった。転々とタコ部屋を渡り歩いて、今で云うボスのようなもの、とに角本ダコになれば大したもの、それに比べて小ダコはあわれなもので、最高の動きをしたときで晩酌二合が当る。これがタコにとって何よりの楽しみであった。しかし住みついてみればまたこの世界も、はなれがたくなるのか、すっかりタコづれしてしまふ者もあり、夜毎に聞くバクチ場にうつづをぬかし、一生タコで暮す連中もいた。

勿論脱走する者もいて、毎夜人が寝静まると、床下を掘って脱け道を造る者もあり、逃げてもらいたい汽車に乗るところで、つかまるのが多かった。つかまるが最後、ひどい目にあわされて、借金は増える一方であった。

夜はほとんど裸で寝かされ、長い棒を枕にして一列になり、まるで日刺しのようにして寝かされた。起床の時には、その棒の端をガンとたたくと皆頭に痛くひびき、飛び起きるという仕掛けになっていた。

まあ、いまから考えてみると、まるでウソのような話であるが実際に言われていた実話である。

右はあるタコ経験者のしみじみとした述懐であるが、開拓期においてはこうした激労風景は到るところで展開されたもので、開拓の尊い礎として末長く語り草としたものである。

囚人労働 本道の開発と囚人労働は切りはなして考えることはできない。つまり原始林を倒し、道をつけ、橋をかける等、囚人を酷使して開拓の基盤を築いた例はあまたであらう。

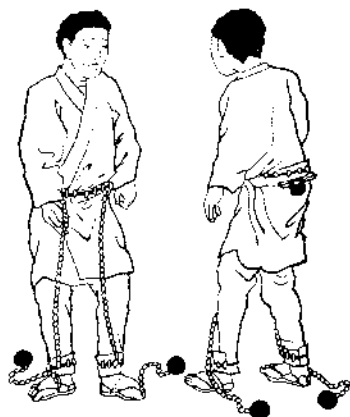
岩村通俊初代北海道長官は本道開拓のスピード化を第一義として要求され、その労働力調達に対する苦肉の策として囚人の使役が考え出されたのである。卑近な例が、網走・旭川間中央道路の開削に旭川からは空知集治監在監の囚人たちが明治二十二年に着工、網走からは釧路集治監網走分監在監の囚人たちが明治二十四年に着工、厳重な見張りのもと、しかも囚人の逃亡を防ぐため二人一組ずつ、鉄の玉のついた「懲鎖」という鉄のクサリが足にかけられた姿で就労させられた。かくて今日みられる機械力の全くない、すべてが人力のみによる作業がき

わめて短い年月で完成されたわけであるが、こうして開削されたいわゆる囚人道路は、囚人のうめきと血に染められた死の開拓道路といふことができる。

囚人の使役は八きないし一二きごとに比較的逃亡条件の悪いような所を選んで、休泊所という監獄部屋が建てられた。中央道路の沿線に今日囚人墓地の跡が幾方所となく発見されているが、この囚人墓地の近在には決って監獄部屋が建設されていたことが想像される。木村域内においてもこれまで下白滝、東区川向いおよび奥白滝等に囚人墓地の個所が確認されているが、そのおのおのの近くに規模の大小の差こそあれ監獄部屋があったと思われる。荒削りの丸太材を使った、がんじょうな監獄部屋の建物、背もとどかない高いところに小さな窓が一つ、その日の過酷な労働を終えて部屋に入ると、外から大きな錠をかけられ、飲み水も食糧も不足がちに与えつづけ、もしも逃亡をくだてるものなら斬殺せられ、容赦なく死へと追い込んだということである。

開基先駆者座談会 昭和三十七年八月木村開基滿五十周年記念式典が挙行されたが、これよりさきこの記念行事の一つとして開拓先駆者の懐古座談会が初のこころみとして開催され、開拓当時のなまなましい様子が手にとるように浮きぼりにされており、貴重な記録として残されている。

以下は回顧談の全容である。



当時の無期徒刑囚（『北海道百年より』）

出席者

井村謙二 (大正二年入地・ 奈良団体長)	岩城近蔵 (大正三年单独入地)	古閑六 (大正三年入地・ 福島団体員)	原田安五郎 (大正二年单独入地)	武田由松 (明治四十五年入 地・紀州団体員)	司会・渡辺要村長
----------------------------	--------------------	---------------------------	---------------------	------------------------------	----------

村長 本日はお忙しいところ大変ご苦勞さまでした。

ちようど今年は明治四十五年に和歌山県人植芝盛平を団長とする団体が入植してから満五十周年にあたります。

村ではこの開拓の歩みを記念して八月一日に開基満五十周年記念式典を挙行することになりましたが、つきましては記念行事の一つとして、今日皆さんにおあつまりいただきまして開拓当時のいろいろな想い出話をおきかせねがい、本村発行の広報紙に掲載し村民の皆さんとながく記念になるようわかちあいたいとおもいます。

司会 入植者の動機と経過について

原田 明治三十年、当時の野付牛町北光舎の屯田兵をたよって来道し、その後明治四十一年に現地を視察して本州に帰郷、家族滞同のうえ大正二年に入植した。

野付牛に在任中は三町歩の農耕地を借り家内にやらせながら五ヶ峠を越えて白滝まで通って開墾にあたった。あのよい土地から今のところを選んだのは、本州で水害やなんかで農耕地や家など流されるのを見て、将来の安住の地として北海道の高い土地を希望していたものである。そのため現地視察した折に今の高い処を選んだもので、当時あのようない土地を希望するものがなく非常によろこばれ二戸分(十町歩)で二十円でもらった。

武田 私たちの団体は農家や漁師の寄り合い世帯で、私は和歌山県白浜にいてマヅロ釣りに従事していたが、植芝に北海道に入地しないとさそれ三月二十九日現地を出発した。和歌山から汽車で旭川を通り比布まで来て、

紀州からきていた愛別の岩井農場の主人に迎えをうけ、愛別駅通、九号駅通などの世話になって五月二十日ごろ現地に入地した。この間峠を越えるのに非常に困難し、はじめ峠にきたとき電柱が針金だけしか見えないので北海道の電柱はこんな低いのかと思った。それだけ雪が多く道をつけてもすぐ吹雪でうずまりいつ着くかわからない状態であった。そのため雪をろり土方に作ってもらい荷物を運んだり、また背負ったりして頂上につき朝方に堅雪を利用して頂上から荷物をころがして、人は杖をついて降りてきたものだ。女の人は二人で棒で味噌や醬油をかつぎ、ころがるなど死にものぐるいであった。そして着いたのは五月二十日ごろであるから峠で約一ヵ月余も過ごしたことになる。この年は作物も馬鈴薯以外は何もとれなかった。

井村 あまり健康でなかった私は、家で商売の事務手伝いをしていたが将来の自活の道を考えていたちょうどそんなとき、岡豊蔵が北海道でハッカを造るとあまり労力がかからないで手先だけで収入が得られるから行ってみないかと相談をうけた。また気象環境がかわることによって身体も健康になるといわれ、兄と相談の結果、渡道することに決心がついた。一回目は団体結成までになかなかたがその後なんとか団体を結成し渡道、北見から留辺蘂を経て七号駅通まで来て一泊、翌日、紐割りをしていた高橋三太郎を道先案内として現地に入り、漫然と三十九号線、今の白滝小学校から上手十戸分余を見て帰ったが結果的にはとりやめとなった。二回目に渚滑の滝上四十三線砂金沢に十四戸分もらったが、現地調査の結果これもとりやめ、最終的に支湧別五線に秋田団体の処分予定地に入地していいところがあったのでそこに入地することに決った。

古関 福島県人十五戸を団体として大正三年三月天狗平の官林近くに入地した。当時は天狗平の奥地しか未墾地がなかった。北海道の土地ははじめてであり、自分の指令の土地を見て本当によろこびあったものである。入地

と同時に小屋がけをはじめたが、家を建てる材料があっても屋根をふくものがなく笹をもってやっとしのぎ小屋をつくったものである。その翌春には奥地と寒さにおどろき五、六戸を残して他の人は帰ってしまった。私たちは北海道がはじめてで、よいも悪いもわからず、ここがよいものとして農夫で身を立てることに決心を固め、艱辛苦に堪え開拓にあたった。一年目の作物は鼠、烏、兎などの餌になり収穫が皆無であった。

岩城 私は大正三年に愛別から単独で入地したもので、ちょうど私が兵隊に行っている間に兄が愛別の土地を整理してすでに白滝に入地していたものである。その後愛別からは丹羽実市、中山親孝、吉田美代治ら多くの人が入地している。

司会 天狗平に一時は五、六十戸入地したと聞いているが、東白滝地区も入地していたか。

古関 私たちが来てから天狗平東白滝全地域に続々と入地者がふえ、神社も一番立派で、青年活動がはげしかったものだ、あの当時が一番全盛なときであった。

司会 入地当時で一番こまったことは。

古関 郵便物を一週間に一度、今の助役宅前にあった郵便函にとりに行ったことである。内地からくる手紙をたのしみに八木の悪路をでてきて手紙の来ていないときは、がっかりして帰ったものである。

井村 渡道した移住者が払い下げ地にほとんど入地していないのは食糧問題が解決されていなかったためである。たいてい上川方面で一作とったり、他に奉公したりして一年たってから入地したものである。酒も当時はあったが、お金のもちあわせがなくて飲むことができなかった。特に一年目は季節物として春野菜しかなく、魚を食べるときは下白滝まで買いに行ったものだ。あの当時はマスやヤマベが大量にとれたもので、ヤマベを一日釣

つたら二カ月ぐらい食べられたものだ。とにかく一年目の苦労は偉大なものであった。

武田 マスを買いに中愛別から馬で来た者もある。あの当時は塩があまりなかったので、焼き干しにして納屋一杯に積まれていたものだ。マスの値段もアイヌから買うと一匹一錢五厘（石の矢でとるからきずがついていた）、網でとったのが二錢であった。

司会 紀州団体が上白滝に五十戸入地したと聞いているが。

武田 上白滝の滝上橋から幌加湧別の間に入地したものである。

岩城 団長の植芝は私の三男が分家（市街東区）したところに入っていた。

司会 大正二年から六年にかけて急激に人口がふえたようだが、そのきざしは木材が中心であったのか。

井村 木材の流送時代で飲食店も六、七軒あり、六百世帯くらいあったと思う。とにかくその当時が一番全盛時代であった。その後天狗平方面に入地した人たちが樺太に団体で渡航したために急激にがたついてしまった。

原田 鉄道敷設工事があったこともあげられる。

武田 料理店の女はマサカリでも土地でもあるものをとりあげて飲ましたものだ。ある人は二日で土地二戸分を飲みつくしたなどという評判で大繁昌ぶりであった。

井村 市街が形成されていたのは今の東区旧市街二股と九線市街であった。当時一番さきに官林を払い下げたのが私で、次が北見工場、古田末吉の順になっている。

司会 木材界の草分けか。

井村 そういうことになる。それから奥原金作が中村弥太郎をつれて曲輪をしたり、桜井曲輪工場や下生田原の

井上が来て経木工場がはじめられた。当時荷物を運ぶにも道路がなく私費で支那別から国道まで道路をつけた。冬のある時、米と味噌をきらし遠軽に仕入れに行ったところ七尺有余の大雪にあつて、六号駅通にとまったことがある。そのため家に居るものが食糧に困り、若い者が博多帯をもつていつて島利右衛門から米三升を借り、それでおかゆをつくり一週間しのいだことがある。そのように雪の量が多かつたし、交通の便が悪かつた。

司会 その当時も雜穀屋などあつたか。

井村 私も雜穀屋をした。天狗平の奥地から旧白滝方面まで全部歩いた。

司会 ハッカなどもあつたと思うが相場や反収などは。

井村 ハッカも相当作付けされたが成金には至らなかつた。入地後五、六年は無肥料でよく出来た。馬鈴薯などは出来すぎて三年目ごろちようどよく出来たものだ。とにかく周囲が山にかこまれ落葉が集積されたものだから、大火事があると芋が焼けて食べられたものだ。

武田 小手亡一本にさやが百八十ぐらいついたもので、俵十円であつた。馬鈴薯二株で普通バケツに一杯になったものだ。ハッカは大正二年に七円、翌年は三円にさがつた。普通の馬で一頭の値段が十五円、七地一反歩開墾するのが一円五十銭、一戸分の立木が二十円で売買され、一尺以上の柳ははね村、ブラオ一台七円、ハロー一台五円であつた。

岩城 大正二年は大凶作で永山方面はわら餅をたべたものだ。

井村 ある年は笹餅を食べたといわれている。笹の実がなるときは凶作だといわれているが、得てしてそのようになるものだ。また当時は餅などは食べられず芋餅をつくつて食べたものだ。

司会 大正六年の大火には大変苦労したとおもわれるが。

岩城 はじめ白滝市街に火の手があがり消火につとめたが消火しきれず、折柄の強風にあおられて一面が火の海と化し、逃げ場を失い惨憺たる光景であった。その時市街に残ったのは川向いにあった小さな神社だけであった。

武田 消火につとめても土地が燃えているので方法がなく、逃げ場を失って川に飛び込む者、川に首までつこむ者、家財道具を馬車に乗せて逃げる途中に火は馬車の荷物に降りかかり命からがら荷物をすてて逃げる者、さらに溺死者や燃死者を出すなど悲惨なもので、全く言葉で表現しようがない。

司会 この大火が動機で消防組が出来たものか。

岩城 これを契機として消防組が編成され、初代組頭は下村であった。私は初めから入団し三代目に組頭になったが、遠軽や丸瀬布よりずいぶん早く編成されたもので、手押しポンプは大火の際に頂いた陛下の見舞金で買ったものである。

井村 当時は消防組をつくったり病院を建てたりするにも全部寄付でまかない、上湧別村から村費支出はうけなかった。

司会 気候はどうであったか。

井村 寒さがきびしく立木などはすごい立ち割れがしたものだ。雪も非常に多く交通には苦労したものだ。また夜など布団のえりが凍ってこちこちであった。

古関 私たちのところは天狗岳の吹き下しをまともにうけ吹雪の連続であった。あそこに十五年間辛抱したが、寒さと吹雪にかかって閉口し、さらに子供の教育などを考え、今のところに移転したのだ。

司会 家庭学校が出来た当時の生徒は農場で開墾に従事していたのか。

井村 この家庭学校の生徒は一人歩きができるような人が来ていた。また上流家庭の人で将来は有能な地位につく人ばかりで特に名を秘していたが、みんな開墾に従事していた。ここで牛を飼うにいたったのは小林直次郎が雄、雌各一頭を寄付したのがきっかけで、だんだんふえたものである。これが契機に牛や豚が飼われるようになった。

司会 いろいろお話を伺っていると、よくその当時の苦勞がわかります。大変ありがとうございました。

アイヌの伝説(一)

蝦夷地北海道とアイヌ民族とは切り離すことのできないものであるが、また、アイヌにまつわる伝説も多く、白滝地方に関係のある伝説の一、二をあげてみると。

約一千年も昔のこと、北海道の各地方に住んでいたアイヌは、それぞれの勢力をもっていた。この話は北見地方に住む「北見アイヌ」と上川地方に住む「上川アイヌ」の争いによつてはじまる。

そのころ北見アイヌと上川アイヌは、けわしいチトカニウシの峯を境として、北見アイヌは湧別川の上流、白滝、奥白滝、上白滝、支湧別の高台地に集つて生活をしていた。このあたりはけわしい山に囲まれた川もあり黒曜石もとれ生活するにも敵に備えるにも格好の場所であつた。

永い間の平和は上川アイヌとの領区の争いによつて破られた。それは上川アイヌがたまたま峯を越えて北見の場所の獲物を無断で取ることがあり、また北見アイヌも上川アイヌの領区域に知らず知らず行ってしまうこともあつた。ある日偶然獲物を探しに行つた両方のアイヌが争つてから騒ぎはだんだんと大きくなり、ついに上川アイヌと北見アイヌ双方の総力を結集しての戦いにと發展してしまつたのである。

東と西のアイヌの激しい戦いは石北の国境をはさんで長いことつづいたが、ついに西の上川アイヌの猛進にあい北見アイヌはしだいに追いつめられて支湧別川をだんだん奥地に逃げ、ビュウブ岳から武利岳の下を通って武利に逃げのびた。けれども強くて狂暴な上川アイヌにここでも敗れ、奥セトセのセタニウシ山にたてこもり逆襲を企て上川アイヌを迎えて幾日となく悪戦苦闘をつづけたが、ここでも防ぎきれず、ついに北見アイヌは山をすててインガルシ(臘望岳)の城塞を最後として決戦することになり、湧別川を中にはさんで両軍はいつ果てるともしらない長期戦がつづいていた。勢いにのった上川アイヌは一挙に北見アイヌを全滅せんものと、ある夏の夜、暴風雨をついて全軍が湧別川を渡りインガルシを攻めようとしたところ、夜半にわかに大洪水が起り湧別川は氾濫し、湧別原野がほとんど水中に没するさまとなり、これがため上川アイヌのほとんどは濁流に吞まれ溺れて死に、ついに全滅してしまい、さしもの長い戦いもようやく終りをつけ北見アイヌの勝利となった。しかし北見アイヌもまた生き残ったものはわずかであったという。

アイヌの伝説(二) 山の高さ争い―チトカニウシ 石狩と北見の国境、石北線近くにそびえている一、四〇〇層のチトカニウシは、昔人間の登れない山とされていた。この山は付近を通っただけでも雨が降るといわれ、もし登る人があると、あらしになると伝えられた。

昔神代の時代に多くの神さまたちが集って、この国でどの山が一番高いかということ議論になる。ある神さまは夕張の奥にあるカムイシリだといひ、いやスタツタカムシユベ(大雪山)だといひ、またチトカニウシだと言ひ張る。それでは試してみようということになり、神さまたちが、カムイシリの上に集って大雪山とチトカニウシとを目がけて弓を射ることにする。神さまの射た矢はまっすぐに大空を横切って大雪山の肩をかすめ、チトカ

ニウシの胸のあたりに当ったので、この山が一番高いことになったという（『北海道伝説集』より）。

しかし実際には大雪連峰の方がはるかに高いのであるが、このチトカニウシ山があまりにも急峻で登頂には高度な技術を要する山形ゆえ、アイヌ人にとってはきわめて神秘的な山と思っていたのであろう。

上支湧別・十勝上士幌間踏破

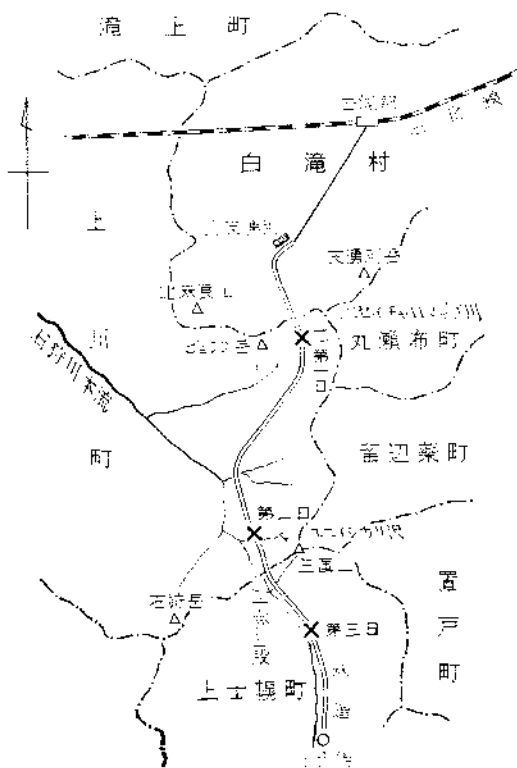
石北線全通に気をよくした遠軽町民は勢いをもって、白滝―上支湧別―十勝

三股―上士幌―帯広を結ぶ、仮称「白広線」鉄道建設に意欲をもやし、遠軽町会においてもいわゆる十勝踏破の話がもち上り、実地踏査した上で関係方面に積極的働きかけを行なう方針を打ち出していたが、この時すでに隣接の上川町においては上川―層雲峡―十勝三股線鉄道敷設の運動をおこし、踏査も実測も終了していた。こうしたことから町会議員の中には「すでに幾年も前から実測をも完了している上川町を向うにまわして全く未知数な仮称「白広線」敷設運動は慎重を要する。戦時体制下の現在、食糧増産が先決であろう」との慎重派が出て十勝踏破の実行がなかなか具体化しなかった。支湧別選出の遠軽町会議員中山徳蔵が議会のこうした空気に業を煮やし、中山が発起人となって、白滝地区内より十勝踏破の同志を募り十勝踏破隊を結成、中山を隊長に、道先案内人として地理に詳しい阿部卯右衛門に懇請し、隊員に山崎政治、原田原五郎、菊地寅蔵、佐藤平一郎、小山田清吉、岸野喜三郎、本田弥三郎、宮下周吉、奥田庄之助、前田権三郎、伊藤芳夫、佐藤友一、牛丸勝次、桑某ら一行十六名をもって昭和八年六月十七日早朝上支湧別を出発した。経路は上支湧別より小滝ノ沢を入り上川町境を過ぎニセイチャロマツプ川の川辺にて第一日の露営を行ない、そこより南西に向きをかえ右狩川本流に至ったところで南東に向きをかえてユニイシカリ沢を目ざし、十勝国境を目前に第二日の露営を行ない、翌日一氣に国境を越えて十勝三股に入り、音更川沿いを通る林内歩道に出てそのまま下り、糠平温泉入口付近の川辺で第三日の

露營、翌朝午前十時ごろ目的地上
上幌に全員無事到着した。一行は
上士幌村役場にて踏査報告を終
え、列車にて帯広を経由し旭川に
至り、旭川鉄道建設事務所に立寄
り十勝踏査の実情を訴え、白滝・
上士幌間鉄道敷設の請願を行ない
帰白したのである。しかし日華事
変は長期戦となり大東亜戦争も勃
発するに及んで、この計画は全く
立消えとなった。

「過ぎたるは及ばざるがごとし」
の譬えではないが、仮にこの踏査
経路に従って十勝へ抜ける鉄道が

開通していたならば、鉄道に沿って道路も出来たであろうし、産業に観光に必須の要路として脚光を浴びますま
すおらが村も飛躍し、今日見られる過疎対策もおよそ縁のないものとなっていたであろう。年とともに目に余る
過疎現象を呈している今日、こうした過去の夢を追いたくなるのもひとり筆者のみでなかうと思う。



十勝踏破隊踏破略見取図 (昭和8年6月17日出発)

白滝村史年表

西 暦	年 号	で き こ と
一一八九	文 治 五	藤原泰衡が源頼朝に滅ぼされその残黨の渡来をもって和人移住のはじめとされている。
一四五六	康 正 二	蝦夷の乱(コンヤマインの乱)発生の時に函館など、二カ所に館ができる。
一五九九	慶 長 四	松前氏の蝦夷島における領主権が認められた。
一七九九	寛 政 一	幕府松前藩による蝦夷地統治を取り上げ東蝦夷地を直轄す。
一八〇七	文 化 四	幕府西蝦夷地を直轄統治す。
八二一	文 政 四	幕府松前藩に対し松前、蝦夷地全島を返還す。
八五五	安 政 二	幕府松前藩に対し松前地方の一部を松前氏の所領としその他全島を再直轄す。
八六七	慶 応 三	大政奉還により蝦夷地も明治新政府に帰属となる。
八六八	明 治 二	九月八日この日より明治と年号を改む。
八六九	明 治 二	七月八日開拓使庁設置。八月一五日蝦夷地を北海道と改め一一国八六部とし紋別郡は北見 國に属した。
一八七一	〃 〃 五	五月開拓使庁函館から札幌にうつす。
一八七二	〃 〃 五	三月紋別郡管内の村名を改め四月戸長をおく。五月旅籠屋を郵便所と改称し取扱人をお く。九月開拓使札幌本庁と改称す。根室に開拓支庁がおかれ紋別郡はその管轄となる。
一八七三	〃 〃 六	四月一日郵便料金を逓均一制となる。七月網走に根室支庁出張所、紋別に分局がおかれる。
一八七四	〃 〃 七	一〇月屯田兵制度発足。
一八七五	〃 〃 八	屯田兵初めて琴似村におく。五月紋別郡の各村名が漢字に改められる。七月網走出張所を 廃し根室支庁民事課派出所をおく。一二月網走分署に改める。
一八七六	〃 〃 九	九月北海道に大小区制を採用、全道を三〇の大区、一六六の小区に分け、紋別郡は二七大 区第四小区とした。
一八七八	〃 〃 一	七月郡区町村編成法公布さる。
一八七九	〃 〃 二	七月大小区制を廃止し郡区制による郡役所が置かれる。紋別郡は網走郡役所の管轄区域に 入る。
一八八〇	〃 〃 三	七月網走郡役所開庁、紋別戸長役場開庁。一月二八日本道初の鉄道(札幌・手宮間)開 通。

一八八二	明治	一五	二月開拓使を廃止し県制をしき函館、札幌、根室の三県をおく、紋別外九カ村は根室県の管轄下となる。
一八八三	〃	一六	二月根室警察署網走分署設置され紋別に巡査派出所設置さる。
一八八六	〃	一九	一月二六日三県制を廃し札幌に北海道庁設置さる。五月小学校課程及び学科が定められ尋常科高等科の修業年限四年間とし尋常科を義務教育とす。
一八八七	〃	二〇	網走警察署紋別分署設置。
一八八八	〃	二一	四月市町村制公布さる。
一八八九	〃	二二	湧別原野殖民地に選定さる。二月一日大日本帝國憲法發布。四月市町村制施行さる。六月網走・旭川間中央道路の仮道路開削、一〇月旭川側より道路工事着工。
一八九〇	〃	二三	一〇月三〇日教育に関する勅諭發布。
一八九一	〃	二四	湧別原野殖民地区画設定。四月中央道路（網走・北見峠間）開削に着手、一月完成、ここに網走・旭川間は全通した、この間網走分監の囚人水腫症にかかり多数の死亡者出ず。
一八九二	〃	二五	紋別警察分署湧別巡査駐在所設置さる。九月中央道路の改良工事を施工す。
一八九三	〃	二六	三月小包郵便開始さる。四月八号郵便設置され中沢沢治取扱人として着任す、中沢沢治駅通敷地内に野菜を栽培す、これ白滝における農耕の初めなり。一月湧別原野殖民地の貸付告示さる。
一八九六	〃	二九	三月三一日鉄道の国有化決定。五月第七師団創設され一二月屯田兵司令部七師団に吸収さる。
一八九七	〃	三〇	五月北海道区制、北海道一、二級町村制公布さる。湧別屯田兵二百戸移住す。六月湧別村戸長役場を湧別浜に設け白滝も管轄下となる。一〇月郡役所を廃して十八の支庁おかれる。
一八九八	〃	三一	一月本道全域に徴兵令施行さる。七月札幌・旭川間鉄道全通によって中央道路郵便通送路線となる。九月湧別屯田第二師一一一九戸移住す。
一九〇〇	〃	三三	五月一六日札幌・小樽間に本道初の電話開通す。一〇月札幌、小樽、函館に区制が布かれる。石北峠派出所設置され石上藤蔵取扱人となる。
一九〇一	〃	三四	八月網走警察署湧別分署として昇格さる。八月一〇日第一回北海道議会議員選挙執行さる。
一九〇二	〃	三五	三月官設北見峠駅延所開設、取扱人中沢兼三郎、春、旧白滝一七号に石上藤蔵特願入植、開拓農家の第一号なり。

西 暦	年 号	で き る こ と
一九〇三	明治 三六	石上藤蔵本村最初のハッカ耕作をなせり。白滝原野殖民地区内測設行なわる。四月屯田兵制度廃止となる。
一九〇四	三七	二月旧白滝、下白滝一帯の白滝原野解放さる。一〇月旭川・名寄間鉄道開通によって通送路線は名寄線由に変更され中央道路の通送路線は廃止となる。
一九〇六	三九	四月一日戸長制度廃止となる。二級町村制施行によって湧別村も二級町村として表がえする。
一九〇七	四〇	小学校令の改正によって尋常科を六ヶ年の義務教育とし高等科は二年ないし三年とす。六月中央道路仮定県道となる。九月一六日紋別警察署湧別分署速懸巡査駐在所設置。
一九〇九	四二	旧白滝に山本治作入植す開拓農家の第二号なり、石上藤蔵二股渡船（東区）の渡し守りをする。
一九一〇	四三	宮城県人太田昭吉、菊地長治、青山右近、吾妻祝吉、内田三蔵、岩手県人小笠原伊勢松ら旧白滝に入植す。四月一日湧別原野基線六号線以南を上湧別村とし母村を下湧別村とす、白滝は上湧別村下に入る。五月五日上湧別村を一四部に分ち各部に部長がおかれた、白滝は第一二部に入る。
一九一二	四五	三月紀州団体五四戸白滝、上白滝に入植（総代人植芝盛平）のち白滝における開基とされる。七月三〇日明治天皇崩御。
一九一三	四六	二月白滝部落独立、部長植芝盛平となる。三月秋田館合団体（総代人佐々木三之助）一四戸支湧別へ入地。四月秋田稲庭団体（総代人佐藤平一郎）二、戸支湧別へ入地。四月石上、太田、菊地ら旧白滝住民の総力で私立旧白滝教授場を開設す。五月宮城団体（総代人菅原久蔵）一〇戸奥白滝へ入地。福島団体（総代人入庭重次）一八戸奥白滝へ入地。六月一九日白滝二股に白滝教授場開所。一〇月奈良団体（総代人井村謙二）一戸支湧別へ入地。
一九一四	四七	秋、上湧別村衛生組合白滝衛生組誕生。全道大凶作に見舞わる。二股市街に白滝初の開業医（赤坂医院）開設さる。二月山形団体（総代人五十嵐長五郎）一五戸奥白滝へ入地。三月福島団体（総代人吉岡六兵衛）一五戸奥白滝へ入地。長野団体（総代人辻喜一郎）一〇戸上支湧別へ入地。七月一七日旧白滝私立教授場公立として認可

一九二五	大正	四
一九二六	〃	五
一九二七	〃	六
一九二八	〃	七
一九二九	〃	八
一九三〇	〃	九
一九三二	〃	一一
一九三三	〃	一二

さる。春、上白滝倉橋伝三郎切手売捌所をはじめる。

一月一日奥白滝に滝ノ上教授場開所。三月白滝原野三部落に分れ二股東海林孝太郎、支湧別三石音次郎、上白滝倉橋伝三郎各部長となる。四月一日網走警察署湧別分署白滝巡查駐在所設置。夏、白滝原野刈分け道路（支湧別道路）完成。七月一九日上支湧別教授場開所。二月二四日道庁指令第八五六二号をもって「滝ノ上」を「上白滝」と改正さる。沼田外次郎上支湧別で水桶を試作す。四月、日白滝に網走營林署白滝保護区員駐在所設置。奥白滝部落独立、部長岸利七。五月井村謙二らの尽力で支湧別五線に私立支湧別教授場開設す。一〇月滝ノ上教授場を上白滝教授場と改称す。一二月支湧別に家庭学校分校建設され少年矯護の任に当たった。一月三〇日白滝原野道路（支湧別道路）開削さる。菊地善吾除虫菊を試作す。三月上支湧別部落独立、部長三石音次郎となる。五月、二日白滝大山火発生、焼失戸数二五〇余戸、焼死者三名、重軽傷者二五名、損害額三〇万円になんなんとす。二月一日白滝郵便局設置さる。

二股市街に白滝最初の獣医（菊地清治）開業す。佐藤平一郎、金枝兵重リンゴ栽培をなす。二月旧白滝部落独立、部長新保国平となる。五月上湧別村白滝公立消防組を二股市街に設置、消防後援会設立。六月上湧別第五回村議会選挙に榎芝盛平当選、白滝選出初の議員となる。六月一二日小島寛一郎奥白滝に硫黄鉱泉の免許をとる。六月二〇日上白滝教授場と奥白滝尋常小学校に昇格。七月一日支湧別教授場小学校に昇格す。八月二八日白滝教授場尋常小学校に昇格、旧白滝特別教授場は白滝尋常小学校の所属となる。九月岡本平八、岡崎儀藏、宮本辰八、山本善七ら共同経営の澱粉工場操業、白滝最初の澱粉生産なり。一〇月一日東白滝教授場開所。

四月一日上湧別村から遠軽村分村、白滝は遠軽村の行政下となる。五月一日第一回遠軽村議会議員選挙執行、白滝より佐藤勇次郎、岸利七当選。六月在郷軍人会遠軽村白滝分会結成す。

六月一〇日を時の記念日と定む。一〇月一日第一回國勢調査行なわれる。

二月大狗沢より中央道路（現主要道道道遠軽上川線）に抜ける幹線道路（延四、六八〇畧）が白滝初の村道（遠軽所管当時）と認定さる。五月上川遠軽間鉄道の実測着手。支湧別信用販売購買利用組合設立。遠軽白滝道路改良期成会結成さる。

西曆	年号	事
一九二四	大正一三	四月白滝尋常小学校に高等科併置さる。一月一日市原多賀吉を校長とする五三名の石北線速成請願所(南瓜岡休)七京出發(二三日東京で解散)
一九二五	一四	一月一日遠軽村より生田原分村す。九月三〇日遠軽・丸瀬布間鉄道線路選定認可なる(一月一六日遠軽から路費工事はじまる)。
一九二六	一五	五月二四日糸屋銀行金融恐慌による閉鎖(遠軽出張所また同じ)。六月遠軽巡査部長派出所が警察署に昇格しその配下となる。七月一日白滝尋常小学校に青年訓練所併置す。一月五日丸瀬布・白滝間鉄道選定認可さる(昭和二年一月一六日丸瀬布下白滝間工事着工)。
一九二七	昭和二	一月二二日大正天皇崩御。
一九二九	四	白滝火災予防組合誕生。一〇月一〇日遠軽・丸瀬布間鉄道開通。
一九三〇	六	白滝信用販賣購買利用組合組織さる。八月一二日丸瀬布・白滝間鉄道開通、山籠駅、下白滝駅開駅、白滝線路分區業務開始、白滝機關車給炭水所業務開始。九月〇日西出運送店開業す。十一月上支湧別青年同乾電池式ラジオ購入、白滝最初のラジオなり。
一九三二	七	九月道路愛護デーを決める(遠軽村)。九月二三日北海道農産物検査所白滝派出所設置さる。
一九三三	八	一月上海事変勃発。一〇月一日石北線全線開通、上白滝、奥白滝駅開駅、奥白滝線路分區業務開始。
一九三四	九	⑤白滝運送店開業す。八月一二日白滝中心街一〇棟一戸を焼失。
一九三五	一〇	三月支湧別川向い開拓移住民二四戸入る。四月一日遠軽町制施行。丸瀬布白滝一丸とした分村問題が出たが自然消滅となる。四月白滝産業組合設立。六月三〇日第一回遠軽町議選執行、白滝より中山徳藏、鈴木富治、井村謙二が選す。七月二五日白滝部落規約を議定す。
一九三六	一一	秋、奥白滝高台水路施設完成。
		一月遠軽町道路愛護組合を組織す。四月一日白滝林産物検査員駐在所設置(昭和四年三月閉鎖となる)。八月一日青年訓練所を白滝青年学校と改称す。旧白滝ホロカニ・ベツ川上流に埋藏する硫酸白七採掘始まる。
		三月六日移住民三三戸入る。四月二二日旧白滝特別教授場は尋常小学校として独立す。

一九三七	昭和	二二	五月二〇日東白滝教授場が尋常小学校に昇格。夏、奥白滝農村電化施設さる。
一九三八	〃	二三	三月支湧別五嶺沢開拓移住民二〇戸入植す。四月一日支湧別尋常小学校を尋常高等小学校と改称す。七月奥白滝森林保護区員駐在所設置さる。九月二二日白滝郵便局電信電話事務開始。一〇月遠軽町銚後平公会結成さる。秋、東白滝雜用水路施設完成。
一九三九	〃	二四	北海道親友会遠軽支部白滝分会結成さる。四月農地調整法によって農地委員会制度でさる（太平洋戦争によって空転す）。
一九四〇	〃	二五	一月白滝に国民貯蓄組合結成さる。丸瀬布住民分村問題を議したが白滝住民反対す。一月二四日警防団令の公布により消防組と防護団が合体し警防団となる。
一九四一	〃	二六	一月支湧別青年学校設置。
一九四二	〃	二七	小学校を国民学校と改称す。四月遠軽産業組合白滝事務所と改称さる。戦時生活必需物資統制令によりあらゆる物資の切符制・通帳制が実施さる。六月一日白滝官行所伐事業所白滝市街に設置。九月丸瀬布、白滝を一つにした分村問題再燃するも役場庁舎設置について意見が合わず合決す。一月上支湧別電気利用組合の力により上支湧別点灯さる。一二月八日太平洋戦争勃発す。
一九四三	〃	二八	一月一〇日遠軽町役場白滝出張所設置さる。初代出張所長小沢喜誠。五月一日支湧別青年学校を白滝青年学校に吸収統合す。春、家庭学校支湧別第二農場自作農創設す。
一九四四	〃	二九	遠軽町農業会白滝支所と衣替えさる。従来各運送店は日本通運株式会社遠軽支店および旭川支店の傘下に入る。
一九四五	〃	三〇	二月八日本村初の電話交換事務開始さる（電話施設家庭三戸）。三月白滝発電所設置され市街地区に電気の供給始める。六月日本義勇隊遠軽大隊白滝中隊編成さる。八月一日日本無条件降伏す。一〇月丸瀬布、白滝を二分割した分村問題起さる。一二月三〇日丸瀬布、白滝両地区代表網走支庁に分村を陳情する。一二月選挙法の改正によって婦人の参政権認めらる。
一九四六	〃	三一	教育に関する勅語が廃止される。一月三日白滝地区住民大会を開き分村の議決をなす。二月金融緊急措置によって新円に切替えらる。二月二六日遠軽町議会において丸瀬布、白滝分村の件可決す。四月二六日住民代表北海道庁に対し分村の陳情をなす。七月二六日道庁告示第五二三号で丸瀬布、白滝の分村告示さる。八月一日白滝村設置。一〇月一日白滝

西 曆	年 号	で き と
一九四七	昭和 二二	<p>村民生委員協議会を設置す。十一月三日新憲法発布。</p> <p>二月旧白滝農村電化さる。二月一日旧白滝臨時乗降場使用開始さる。三月駅通所規程全廃す。日本赤十字社白滝分区分区設置。教育基本法公布され国民学校は小学校となり、三年制新制中学が施行され義務教育とす。青年学校廃止さる。四月白滝村選挙管理委員会設置す。消防法の制定により全同一斉に消防団と改称さる。火災予防組合を廃し火防衛生組合充足。森林愛護組合充足。四月一日白滝国民学校を村立白滝小学校と、支湧別国民学校を村立支湧別小学校と、旧白滝国民学校を村立旧白滝小学校と、東白滝国民学校を村立東白滝小学校と、奥白滝国民学校を村立奥白滝小学校と改称す。四月五日初代村長選挙執行小出月江無投票当選。四月三日第一回村議会議員選挙執行。五月一日白滝中学校および支湧別分校設置。五月二〇日第一回村議会開催市田富蔵議長となる。助役三木克己、収入役石渡寛蔵。八月一二日一九輛編成貨物列車下白滝駅にて炎上暴走、瀬戸瀬付近にて脱線転覆す。九月一日支湧別中学校が白滝中学校よりはなれ支湧別小学校併置中学となる。九月白滝村食糧調整委員選任さる。一〇月二二日白滝村森林組合設立。</p> <p>二月一日村立農業畜産試験場開設。三月上白滝農村電化さる。四月二、四日白滝農業協同組合、農業共済組合設立す。七月一日村立文化女塾設置さる。同時に羊毛加工研究所開設さる（昭和二六年三月閉鎖す）。七月一日教育委員会法制定さる。七月市街地に木柱の街路灯建設され自警組合を結成す（昭和二六年自警組合解散）。八月白滝警防団を白滝消防団と改称し本部を白滝に、第一分団白滝、第二分団支湧別、第三分団奥白滝におく。白滝村農業改良委員選任さる。九月白滝村国民健康保険事業運用開始（昭和二六年三月一時休止す）。一〇月一日白滝村共同募金委員会設置。一一月一日白滝村開拓農業協同組合設立認可さる。十一月白滝町農業調整委員選任さる。</p> <p>四月三〇日村議会議員補欠（三名）選挙執行。五月一日日網走免小機行上り旅客列車奥白滝で脱線転覆、即死二名重傷一名を出す。八月一日白滝村告示第一九号をもって村章を制定す。一〇月一三日白滝青年馬蹄法公布施行（昭和四四年四月一日廃止す）。白滝酪農組合設立。四月一日道立白滝診療所設置さる。村立伝染病隔離病舎新設さる。八</p>
一九四八	二二	
一九四九	二四	
一九五〇	二五	

一九五一	昭和	二六	月警察予備隊発足す。一〇月三〇日学校統合のため奥白滝小学校、東白滝小学校とともに閉校す。十一月一日三和小学校設置。
一九五二	〃	二七	四月農業委員会義務設置となる。四月一日支湧別中学校独立す。三和中学校設置。四月二三日第二回村長選挙執行小出月江町選さる。第二回村議会議員選挙執行。五月白滝村社会教育委員制度発足。八月支湧別川向い高台地区簡易水道布設す。九月白滝村社会福祉協議会を結成す。
一九五三	〃	二八	一月三十一日白滝原野道路(支湧別道路)と支湧別川沿道路中線と合わせて営林署併用林道となる。一月支湧別中学校独立校舎落成式挙行。四月白滝村山火予防対策協議会発足。
一九五四	〃	二九	五月一日村立文化女塾は村立白滝文化女塾各種学校として正式認可さる。八月警察予備隊を保安隊と改称。九月遠軽信用金庫白滝出張所設置(昭和三年五月白滝支店に昇格)。
一九五五	〃	三〇	九月二八日村営発電所完成し全村くまなく電化となる。十一月一日白滝村教育委員会発足。三月村立上白滝集乳所設置(昭和四〇年廃止す)。一月一日文化女塾各種学校は村立白滝技芸専門学校と改称す。一月白滝茶毘場設置。
一九五六	〃	三一	一月一八日中山徳蔵第二代議長となる。五月二五日第五回臨時村議会において丸瀬布、白滝の合併問題出るも否決さる。七月一日白滝巡查駐在所が巡査部長派出所に昇格さる。七月五日白滝営林署設置さる。七月保安隊が自衛隊と改称。九月一五号台風により国有林およそ五万九千石の風倒木を出す(白滝営林署事業区内)。
一九五七	〃	三二	日通白滝営業所を除く下白滝、上白滝、奥白滝の各営業所は請負制度となる。四月四日白滝市街中心商店街七棟を焼失。四月三〇日第三回村長選挙、小出月江無投票当選(二選)、第三回村議会議員選挙執行。五月一八日丹羽実市第三代議長となる。六月村有林野経営審議委員会設置。八月石器時代の白滝遺跡が上白滝河岸段丘の一部で初めて発掘された。一月白滝技芸専門学校上支湧別分校設置。
	〃	三三	一月二〇日三和小学校子供郵便局発足す。九月全村にラジオ共同聴取施設工事を完了(昭和三四年九月廃止)。一〇月白滝初の公営住宅十戸西区に建設さる。日下忠貞珠岩試験許可をとり企業的第一步を踏み出す。遠藤幸治、広田寛治、山本善七白滝最初のテレビ取付けける。二月一日村営発電所の送電施設北電に移譲。二月二〇日白滝温泉ホテル村営によって開業。

西 暦	年 号	記 事
一九五八	昭和 三三	天狗平・東白滝地区簡易水道となる。三月白滝温泉民営に移す。四月白滝村道路愛護共励会発足。四月二〇日渡辺要第一二代村長となる（無投票）。七月一五日白滝小学校子供郵便局発足す。九月一日白滝季節保育所開所。秋、七支湧別火葬場設置。
一九五九	三 四	四月三〇日第四回村議会議員選挙執行。六月一五日株式会社林産組合設立す。七月三十一日白滝総合グラウンド完成。一〇月一日上支湧別簡易郵便局開局す。
一九六〇	三 五	一月一〇日広報白滝第一号発行さる。四月一日斎藤秀信助役となる。国民健康保険事業再開さる。六月温泉ホテルを村営とする。六月二〇日遠軽・白滝間北見バスの運行始まる。七月二二日国道三九号線は一部変更あり遠軽・上川間は主要道道遠軽上川線となる。八月二五日遠軽ハイヤー白滝営業所開設さる。一〇月一日国民年金受け開始す。十一月白滝枝芸専門学校廃校。
一九六一	三 六	六月遠軽地区防犯協会白滝支部設立。市街地全域を特別清掃地域として道の指定をうく。八月七日山内晴雄助役となる。八月二五日白滝青年研修所落成。九月九日開村満十五周年記念式典白滝中学校体育館において挙行。
一九六二	三 七	二月三〇日白滝村商工会設立さる。四月一日白滝テレビ共同視聴施設組合設立さる。四月二二日第五回村長選挙執行、渡辺要再選さる。四月表彰審査委員会設置す。五月青少年問題協議会結成。七月二二日村議会議員補欠（三名）選挙執行。八月一日開基満五十周年記念式典、白滝小学校創立五〇周年、石北線全通三〇周年記念式典白滝小学校体育館において挙行。八月台風九号による水害で被害総額およそ四千万円に達す。九月一〇日上支湧別青年研修所落成。一〇月白滝初の道路補装、市街地一、〇〇〇メートル施行。十一月市街地に防犯水銀灯設置。
一九六三	三 八	四月三〇日第五回村議会議員選挙執行。九月白滝老人クラブ結成さる。一〇月天狗平開拓地婦人ホーム落成。十一月白滝市街簡易水道工事完成。
一九六四	三 九	一月一日白滝市街簡易水道通水。四月一日旧白滝小学校廃校となり白滝小学校に統合す。七月村内十八ヵ所に防犯連絡所設置。一〇月三日白滝の流紋岩球顆北海道天記念物として指定。一〇月白滝季節保育所より東岡赤痢発生、直性疑似合せて一五名に達す。東白滝

一九六五	昭和	四〇	地区村宮牧野造成さる。
一九六六	〃	四一	五月支湧別地区季節保育所開所。六月白滝村自衛隊協力会発足。九月二十日交通安全宣言の村と号す。一〇月遠軽信用金庫より消防ポンプ自動車一輛寄贈さる。一〇月道庁はひらやま地域を鳥獣保護区と指定す。一〇月二十四日第三代村長国松一敏無投票当選。村議会議員補欠（一名）選挙執行。一〇月三〇日母と子の家建設さる。
一九六七	〃	四二	三月三十一日宮林署併用林道（支湧別道路）が道道白滝原野白滝停車場線となる。四月母と子の家を白滝へき地保育所とする。火防衛生組合から衛生組合独立す。六月白滝村体育協会設立さる。七月白滝村青少年生活信条制定。八月一日開基五五周年・開村二〇周年・白滝中学校創立二〇周年記念式典挙行。九月白滝温泉ホテル札幌月寒学院に譲渡す。永久選挙人名簿制度採用さる。一二月旧白滝生活センター開設。網走開建白滝除雪センター設置。一二月二四日山村振興法指定町村の指定をうける。
一九六八	〃	四三	四月遠軽地区七カ町村し尿処理組合が設立され白滝も加盟す。四月二八日第六回村議会議員選挙執行。五月環境衛生指導員制度を設く。六月北見峠切替道路工事始まる（昭和四七年完成予定）。九月無料母子相談所開設さる（毎月第二水曜日）。九月二五日NHK中継の白滝テレビ局開局。一二月市街地区を四〇「スピード」制限区域に指定（道公安委員会より）。
一九六九	〃	四四	一月一三日白滝村乳牛経済検定組合設立さる。三月三十一日中学校統合のため支湧別中学校廃校す。四月白滝村緑化推進委員会発足。白滝巡査部長派出所が警察官駐在所となる。五月公認白滝タレー射撃場開設さる。東支湧別地区村宮牧場開場さる。一二月六日農事放送電話業務運用開始。一月網走市二見カ岡に国道創設殉難慰霊碑建設さる。
一九七〇	〃	四五	一月一日網走支庁管内交通災害共済組合発足す。一月てん菜増産推進協議会誕生。三月定例村議会において議会議員の定数を一二名に減少することを可決す（次期選挙より運用）。四月七日村内全校に学校給食開始。七月一日交通安全指導員発令。一〇月柔剣道場建設さる。一〇月一九日第七回村長選挙執行、国松一敏無投票再選。村議会議員補欠（一名）選挙執行。一月白滝村母子会結成さる。

四月一日遠軽町ほか三カ町村伝染病隔離病舎組合に加入、これがため三月三十一日をもって村立伝染病隔離病舎廃止となる。北見バス運休により北見バス運行委託のスタイルバスと

西 曆	年 号	事 件
一九七二	昭 和 四 六	<p>して衣替えし村内を運行す。四月白滝村農業振興基金運用委員会発足。七月簡易村営プール竣工。十一月一〇日郷土館建設さる。</p> <p>四月一日第四代助役として谷藤吉雄就任す。白滝中学校に三和中学校が統合された。四月二五日第七回村議会議員選挙執行（公同より定員二名）。五月一一日古閑初夫第四代議長となる。</p>

編さん後記

昭和四十一年三月山内助役（現・小清水町助役）に村史の編さんを懇願され一兩日の思考期間をいただいた後、お引き受けいたすこととした。今にして思えばこの大事業を完遂させるには余りにも軽率な応諾であったようだ。史実に忠実な把握とその年代的公信性を要求される町村史の編さんは、とても私ごとき浅学非才かつ未経験者の手出しすべきものでなかったことを。四月一日付で嘱託の辞令をうけその第一歩が踏み出されたわけであるが、仕事をはじめて半年位経ったところで余りに、その奥の深さに驚き「しまった」と思った。何故こうした難事業を引き受けてしまったかと。

同月ただちに村史編さん委員会を設置し、五名の編さん委員に委嘱発令がなされ、翌五月十二日第一回編さん委員会を開催、執筆者の立案による仮定方針を説明、委員各位には自発的かつ積極的な資料の収集方を依頼したのである。かくして完結に向って遠大な事業の第一歩がはじまった。

分村以来日の浅い本村のこととて、これまで村史のようなものが編さんされたこともなく僅かに支湧別小学校編（昭和三十一年刊）「郷土の生いたち」があるのみで全く初めての事業であったが、本村の母村であった上湧別、遠軽の両町史が既刊されていたことは資料不足の中にあつてまことに貴重な参考資料となった。

こうして手元にある各市町村史の乱読、図書館の歴訪、村内外に居住する古老を尋ねての聴取作業等は長期間続けられた。わけても今は他界されたが、和歌山県団結移住殖産盛平総代人を茨城県岩間町に尋ね激務のなか特に長時間に渉る拝聴は特筆すべきものの一つで

あろう。嘱託としての筆者は僧職の身である関係上、朝からの勤務は不可能に近い、午前中早いところ寺役をすませほとんが午後からの出勤執務となったが、これが所謂「二足ワラジをはく」というものであろう。

精魂を傾注しての資料の収集および執筆作業も全く近々として進まないまま、いたずらに暦年は進行した。原稿執筆のむずかしさは筆舌しがたいものがあつた。たどたどしい足どりながら一人で続けた編さんもいつしか当初計画の四カ年の歳月が流れ去り、未定のまま延長戦へともつれこみ、その責任を痛烈に感じつつ完結へ人知れぬ苦悩と闘い、遂に原稿の運びとなるに至つた。そして去る五月二十四日の第六回編さん委員会において、村史日次の決定と総合監修を受け若手の補足修正が加えられ、ここに五カ年の時日を費やし完結となつたのである。

思えば長い道中であつたが、周囲のあたたかい理解と激励によつて質朴ながらも本書をまとめることができたがまこと汗顔の至りであります。これが内容に事実の脱漏や確証のつかめ得なかつた事項については止むを得ず一部略述にとどめたところもあつたが、何分資料の収集不足に起因するものにしてこの点深く陳謝申し上げ、識者のご叱正とご批判を素直にお受けいたす所存であります。

思うに分村以来満二十五周年を迎えた今日、日に月に進む過疎化現象は憂郷者の心胆を寒からしめてはいるものの、喜びも悲しみもすべて開拓の汗と共に流し去り、豊かな郷土づくりに一生を捧げた先人の尊い心血は脈々として今なおこの地にみなぎっていることであらう。そして自然の脅威を克服しつつ未来に向つてつきることなく歩み一歩一歩確かな足どりで前進しつづける本村にとって、この本書がいくばくなりとも心の糧となり得ればこれに過ぎる幸せはありません。

編さん委員と委員会開催の経過をたどつてみると、

山内晴雄	自昭和四一・四・一一	至昭和四二・一〇・二	(委員長)
村上庄七	自昭和四一・四・一一	至昭和四三・三・三一	
古関初夫	自昭和四一・四・一一	至現	在
鈴木猛夫	自昭和四一・四・一一	至現	在
井田光一	自昭和四一・四・一一	至昭和四三・九・三〇	(委員長)
石崎英一	自昭和四三・四・一一	至昭和四六・三・三一	
小川正春	自昭和四三・四・一一	至現	在
太田実	自昭和四四・三・二〇	至現	在
高島温厚	自昭和四六・四・一一	至現	在
第一回	村史編さん委員会	昭和四一年五月一二日開催	
第二回	〃	〃 四二年三月二三日	
第三回	〃	〃 四三年四月一五日	
第四回	〃	〃 四四年三月二六日	
第五回	〃	〃 四六年五月一九日	
第六回	〃	〃 四六年五月二四日	

本書のうち第一篇「白流の古代」については、この分野において極めて知識豊かな谷藤吉雄助役に、第九篇「育ちゆく郷土」の比麻良山の景観については白滝小学校海津良知教諭に激務のなか特に執筆をお願い出来たことを深謝申し上げます。また、私の力量の至らぬことに起因して脱稿が非常に遅延いたし多くの方々に陰に陽にご心痛を煩わせましたることを深く頭を垂れ、お詫び申し上げます。

最後に、拝聴したることにより貴重な資料として素人筆者の大きな手助けとなった懐古談をいずれも快くお聞かせ下さった数多くの方々の中には、このつたなき村史を見ずして

黄泉の路に旅立たれた方も少なくなく、この頁をかりて謹んで感謝の意を表しつつご冥福を祈る次第であります。

また、ここに至るまでの長い間、理事者のあたたくそして深いご理解は申すに及ばず、山内前助役並びに谷藤助役にはことのほか熱心にご教導をたまわり、さらには村役場職員各位および今日までの間、写真、古文書、その他の貴重な資料を快くご提供下さった多くの方々に對しまして深甚なる謝意を表します。

むすびに、これが記念すべき発刊にあたって乱雑な原稿による校正など繁雜な仕事を倍熱をもって引き受けて下さった興國印刷株式会社に對し心からお礼申し上げます。

昭和四十六年六月十五日



編集者 中 村 友 晴

白 滝 村 史

(非売品)

昭和四十六年七月二十日印刷
昭和四十六年八月一日 発行

発行所 白 滝 村 役 場

北海道紋別郡白滝村

発行 者 白 滝 村 長 国 松 一 敏

編 さん 者 白 滝 村 史 編 さん 委 員 会

印刷所 興 国 印 刷 株 式 会 社

北海道札幌市手稲東三南一丁目

印刷 者 三 田 徳 光

